

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(34)

一般国道220号線鹿屋バイパス  
建設に伴う発掘調査報告書(1)

# 王子遺跡

(付)西祓川遺跡・薬師堂遺跡

1985年

鹿児島県教育委員会



王子遺跡全景

## 序 文

この報告書は、一般国道220号線鹿屋バイパスの建設に先だって、県教育委員会が実施した王子遺跡の発掘調査の記録です。

王子遺跡は、大島半島中央部、鹿屋市郊外のシラス台地上にある弥生時代の遺跡で、棟持柱付掘立柱建物跡など多数の遺構のほか、鉄製のヤリガンナや鉄滓、樹皮布叩石、瀬戸内海地方にみられる矢羽根透しの文様のある土器など、数々の重要な資料が発見され、県内のみでなく広く全国的な関心を呼び、その保存策についてもいろいろと論議されたところです。

県教育委員会では、王子遺跡の重要性にかんがみて、遺構の移設、型取り、土層の転写などを含む、可能な限りの遺構、遺物保存の方策を講じ、あわせて詳細、精密な発掘調査記録の作成に努めました。

本書は、昭和56年度からの4年間に及ぶ、県教育委員会のこうした努力の結晶であります。

本書が、鹿児島県における埋蔵文化財保護行政の一つの記念碑として、今後の文化財保護のために活用されることを願ってやみません。

終わりに、この発掘調査に終始御協力をいただいた建設省九州地方建設局大隅工事事務所並びに鹿屋市及び地元の皆さんに心から感謝いたします。

昭和60年3月

鹿児島県教育委員会  
教育長 山田 克穂

## 例 言

1. この報告書は、一般国道220号線鹿屋バイパス建設によって消滅する遺跡について行なった事前調査のうち、昭和56年度～昭和59年度に発掘調査した王子遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、建設省九州地方建設局大隅工事事務所からの受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、昭和55年度に確認調査、昭和56年度に全面発掘調査と市道小原線以東の確認調査、昭和57年度に全面発掘調査、昭和58年度に全面発掘調査及び下層の確認調査、遺構の転写・型取り及び移設作業を実施した。
4. 発掘調査について、鹿屋市教育委員会や大隅工事事務所の協力・援助を得た。
5. 発掘調査の指導については、文化庁主任文化財調査官河原純之、同文化財調査官岡本東三、同文化財調査官黒崎直、同文化財調査官西弘海、同文化財調査官桑原滋郎、国立奈良文化財研究所遺構調査室長宮本長二郎、同遺物処理研究室長沢田正昭、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳（考古学）、梅光女学院大学教授国分直一（民俗・考古学）、九州産業大学教授森貞次郎（考古学）、九州大学教授横山浩一（考古学）、北九州市立博物館館長小田富士雄（考古学）、九州芸術工科大学教授沢村仁（建築史）、鹿児島大学教授大庭昇（地質学）、宮崎大学助教藤原宏志（花粉分析）、京教産業大学助教山田治（放射性炭素年代測定）、新日鉄八幡中央研究所研究員大澤正己（鉄製品分析・同定）。発掘調査報告書については、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳、九州大学教授横山浩一、北九州市立博物館館長小田富士雄の諸先生方に御指導をお願いし、有益な教示と助言を受けた。また、大澤正己、宮本長二郎、藤原宏志、山田治の諸先生方より玉稿をいただいた。
6. 遺物の整理は、1～12号住居跡内出土遺物の実測は立神次郎と山口俊博（現、鹿屋市教育委員会）、13号～27号住居跡内出土遺物の実測は峯崎幸清（現、国分市教育委員会）、その他の遺物は立神と山口が実測した。トレース・写真撮影編集については、立神が中心になり峯崎と行い、遺物の整理・復元作業等は収蔵庫の整理事業員が行なった。
7. この報告書の作成は、上記の方々の助言と協力を得て鹿児島県教育委員会が実施し、執筆は文化課職員立神が担当した。
8. 出土品は、一部鹿屋市王子遺跡資料館に展示し、大半は文化課収蔵庫に保管している。また、移設した遺構は王子遺跡資料館に、転写・型取りした遺構は鹿屋市教育委員会に一部、大半は収蔵庫に保管している。
9. 航空写真は鹿児島県教育委員会のものを使用し、本書で用いた挿図中の遺物番号は、図版中の番号と一致する。また、本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
10. 胎土中の鉱物については、石英：Q、長石：P<sub>L</sub>、金雲母：M、角閃石：Hを使用した。
11. 末尾には、西祓川・薬師堂両遺跡の概要を収載し、西祓川遺跡の一次は長野、二次は立神が担当し、西祓川遺跡の第4図は長野が作成した。薬師堂遺跡は立神が担当した。

# 目 次

序 文

例 言

第1章 序 説	9
第1節 調査に至るまでの経過	9
第2節 確認調査の経過	9
第3節 調査の組織	9
第4節 日誌抄	10
第2章 発掘調査の経過	12
第1節 発掘調査に至るまでの経過	12
第2節 調査の組織	12
第3節 調査の経過・日誌抄	13
第3章 遺跡の位置及び環境	24
第4章 調査の概要	28
第1節 層 序	29
第5章 弥生時代の遺構	34
第1節 竪穴式住居跡	34
第2節 住居跡内の出土土器について	166
第3節 掘立柱建物跡	172
第4節 土 壇	192
第5節 溝状遺構	202
第6章 弥生時代の遺物	204
第1節 土 器	204
第2節 遺物出土状況及び出土遺物について	252
第3節 石 器	257
第4節 土製品	262
第5節 鉄製品及び鍛冶滓	264
第7章 その他の遺構・遺物	265
第1節 縄文時代の遺構・遺物	265
第8章 まとめ	266
第9章 王子遺跡の遺構保存事業	277
付 篇 王子遺跡出土弥生中期後半の鉄滓と鉈の調査	319
九州地方の弥生時代住居	335
王子遺跡の液体シンチレーション <sup>14</sup> C年代測定	351
王子遺跡および西祓川遺跡におけるプラントオパール分析	355
西祓川遺跡の調査概要	358
薬師堂遺跡の調査概要	362

## 挿 図 目 次

<p>Fig. 1 王子遺跡と位置及び周辺遺跡……………25</p> <p>Fig. 2 王子遺跡地形図……………27</p> <p>Fig. 3 王子遺跡グリッド図……………28</p> <p>Fig. 4 王子遺跡標準土層柱状図……………30</p> <p>Fig. 5 王子遺跡土層図……………32</p> <p>Fig. 6 王子遺跡遺構配置図……………33</p> <p>Fig. 7 1号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態……………34</p> <p>Fig. 8 2号住居跡実測図……………35</p> <p>Fig. 9 3号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態……………36</p> <p>Fig. 10 3号住居跡内遺物出土状態……………37</p> <p>Fig. 11 第1・2・3号住居跡内出土遺物 実測図(1)……………38</p> <p>Fig. 12 3号住居跡内出土遺物実測図(2)……………39</p> <p>Fig. 13 4号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態……………41</p> <p>Fig. 14 4号住居跡内遺物出土状態……………42</p> <p>Fig. 15 4号住居跡内出土遺物実測図……………43</p> <p>Fig. 16 5号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態……………46</p> <p>Fig. 17 6号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態……………47</p> <p>Fig. 18 7号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態……………48</p> <p>Fig. 19 5・6・7号住居跡内出土遺物 平面・垂直分布状態……………49</p> <p>Fig. 20 5号住居跡内出土石器実測図……………53</p> <p>Fig. 21 8号住居跡実測図……………54</p> <p>Fig. 22 8号住居跡出土遺物平面・垂直 分布状態……………55</p> <p>Fig. 23 8号住居跡内出土遺物実測図……………56</p> <p>Fig. 24 8号住居跡内出土石器実測図(1)……………58</p> <p>Fig. 25 8号住居跡内出土石器実測図(2)……………59</p>	<p>Fig. 26 9号住居跡実測図……………60</p> <p>Fig. 27 9号住居跡内出土遺物平面・ 垂直分布状態……………61</p> <p>Fig. 28 9号住居跡内出土土器実測図……………62</p> <p>Fig. 29 9号住居跡内出土石器実測図(1)……………66</p> <p>Fig. 30 9号住居跡内出土石器実測図(2)……………67</p> <p>Fig. 31 10号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態……………69</p> <p>Fig. 32 10号住居跡内出土土器実測図……………70</p> <p>Fig. 33 10号住居跡内出土鉄器実測図……………74</p> <p>Fig. 34 11号住居跡実測図……………75</p> <p>Fig. 35 11号住居跡内出土遺物平面・ 垂直分布状態……………76</p> <p>Fig. 36 11号住居跡内出土土器実測図……………77</p> <p>Fig. 37 11号住居跡内出土石器実測図……………80</p> <p>Fig. 38 11号住居跡内出土軽石製品実測図……………80</p> <p>Fig. 39 12号住居跡実測図……………81</p> <p>Fig. 40 12号住居跡内出土遺物平面・ 垂直分布状態……………82</p> <p>Fig. 41 12号住居跡内出土土器実測図……………83</p> <p>Fig. 42 12号住居跡内出土石器実測図……………85</p> <p>Fig. 43 13号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態……………86</p> <p>Fig. 44 13号住居跡内出土土器実測図……………87</p> <p>Fig. 45 13号住居跡内出土石器実測図……………89</p> <p>Fig. 46 14号住居跡実測図……………90</p> <p>Fig. 47 14号住居跡内出土遺物平面・ 垂直分布状態……………91</p> <p>Fig. 48 14号住居跡内遺物出土状態 (壺形土器)……………92</p> <p>Fig. 49 14号住居跡内土器実測図(1)……………93</p> <p>Fig. 50 14号住居跡内出土土器実測図(2)……………94</p> <p>Fig. 51 14号住居跡内出土土器実測図(3)……………95</p> <p>Fig. 52 14号住居跡内出土石器実測図……………99</p>
---	--

Fig. 53	15号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態……………	101	Fig. 80	22号住居跡内出土土器実測図……………	141
Fig. 54	15号住居跡内出土土器実測図(1)……	102	Fig. 81	22号住居跡内出土土器実測図……………	143
Fig. 55	15号住居跡内出土土器実測図(2)……	103	Fig. 82	23号住居跡実測図……………	144
Fig. 56	15号住居跡内出土土器実測図……………	106	Fig. 83	23号住居跡内出土土器実測図……………	144
Fig. 57	16号住居跡実測図……………	108	Fig. 84	24号住居跡実測図……………	146
Fig. 58	16号住居跡内出土遺物平面・ 垂直分布状態……………	109	Fig. 85	24号住居跡内出土土器実測図……………	147
Fig. 59	16号住居跡内出土土器実測図……………	110	Fig. 86	25号住居跡実測図……………	149
Fig. 60	16号住居跡内出土土器実測図……………	114	Fig. 87	25号住居跡内出土土器実測図……………	149
Fig. 61	17号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態……………	116	Fig. 88	25号住居跡内出土土器実測図……………	151
Fig. 62	17号住居跡内出土土器実測図……………	117	Fig. 89	26号住居跡実測図……………	152
Fig. 63	18号住居跡実測図……………	119	Fig. 90	26号住居跡内出土遺物平面・ 垂直分布状態……………	153
Fig. 64	18号住居跡内出土遺物平面・ 垂直分布状態……………	120	Fig. 91	26号住居跡内遺物出土状態……………	154
Fig. 65	18号住居跡内出土土器実測図……………	121	Fig. 92	26号住居跡内出土土器実測図(1)……	155
Fig. 66	18号住居跡内出土土器実測図……………	124	Fig. 93	26号住居跡内出土土器実測図……………	156
Fig. 67	19号住居跡実測図……………	125	Fig. 94	26号住居跡内出土土器実測図(1)……	158
Fig. 68	19号住居跡内出土遺物平面・ 垂直分布状態……………	126	Fig. 95	26号住居跡内出土土器実測図(2)……	159
Fig. 69	19号住居跡内出土土器実測図……………	127	Fig. 96	27号住居跡実測図……………	160
Fig. 70	19号住居跡内出土土器実測図(1)……	128	Fig. 97	27号住居跡内出土遺物平面・ 垂直分布状態……………	161
Fig. 71	19号住居跡内出土土器実測図(2)……	129	Fig. 98	27号住居跡内出土土器実測図……………	162
Fig. 72	20号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態……………	131	Fig. 99	27号住居跡内出土土器実測図(1)……	165
Fig. 73	20号住居跡内出土土器実測図……………	132	Fig. 100	27号住居跡内出土土器実測図(2)……	166
Fig. 74	20号住居跡内出土土器実測図……………	134	Fig. 101	1号掘立柱建物跡(棟持柱付)実測図…	172
Fig. 75	21号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態……………	136	Fig. 102	2号掘立柱建物跡(棟持柱付)実測図…	174
Fig. 76	21号住居跡内出土土器実測図……………	137	Fig. 103	3号掘立柱建物跡(棟持柱付)実測図…	175
Fig. 77	21号住居跡内出土土器実測図(1)……	139	Fig. 104	4号掘立柱建物跡(棟持柱付)実測図…	176
Fig. 78	21号住居跡内出土土器実測図(2)……	139	Fig. 105	5号掘立柱建物跡(棟持柱付)実測図…	177
Fig. 79	22号住居跡実測図及び出土遺物 平面・垂直分布状態……………	140	Fig. 106	6号掘立柱建物跡(棟持柱付)実測図…	179
			Fig. 107	7号掘立柱建物跡実測図……………	180
			Fig. 108	8号掘立柱建物跡実測図……………	181
			Fig. 109	9号掘立柱建物跡実測図……………	182
			Fig. 110	10号掘立柱建物跡実測図……………	183
			Fig. 111	11号掘立柱建物跡実測図……………	184
			Fig. 112	12号掘立柱建物跡実測図……………	185

Fig.113	13号掘立柱建物跡実測図……………	187	Fig.144	王子遺跡出土土器実測図(17)……………	230
Fig.114	14号掘立柱建物跡実測図……………	189	Fig.145	王子遺跡出土土器実測図(18)……………	233
Fig.115	14号掘立柱建物跡(土坑内)出土 土器実測図……………	190	Fig.146	王子遺跡出土土器実測図(19)……………	235
Fig.116	14号掘立柱建物跡(土坑内)遺物 出土状態……………	191	Fig.147	王子遺跡出土土器実測図(20)……………	236
Fig.117	14号掘立柱建物跡(土坑内)出土 石器実測図……………	191	Fig.148	王子遺跡出土土器実測図(21)……………	238
Fig.118	1号土坑実測図……………	192	Fig.149	王子遺跡出土土器実測図(22)……………	240
Fig.119	2号土坑内出土土器実測図……………	192	Fig.150	王子遺跡出土土器実測図(23)……………	242
Fig.120	1・2号土坑内石器実測図……………	194	Fig.151	王子遺跡出土土器実測図(24)……………	245
Fig.121	2号土坑実測図及び土坑内遺物 出土状態……………	195	Fig.152	王子遺跡出土土器実測図(25)……………	246
Fig.122	2号土坑内出土土器実測図(1)……………	196	Fig.153	王子遺跡出土土器実測図(26)……………	247
Fig.123	2号土坑内出土土器実測図(2)……………	197	Fig.154	王子遺跡出土土器実測図(27)……………	248
Fig.124	3号土坑実測図……………	198	Fig.155	王子遺跡出土土器実測図(28)……………	250
Fig.125	3号土坑内出土土器実測図……………	198	Fig.156	王子遺跡遺物出土状態(1)……………	254
Fig.126	4号土坑実測図……………	201	Fig.157	王子遺跡出土状態(2)……………	255
Fig.127	中央区及び西区溝状遺構実測図……………	203	Fig.158	王子遺跡出土状態(3)……………	256
Fig.128	王子遺跡出土土器実測図(1)……………	205	Fig.159	王子遺跡出土石器実測図(1)……………	258
Fig.129	王子遺跡出土土器実測図(2)……………	206	Fig.160	王子遺跡出土石器実測図(2)……………	259
Fig.130	王子遺跡出土土器実測図(3)……………	207	Fig.161	王子遺跡出土石器実測図(3)……………	260
Fig.131	王子遺跡出土土器実測図(4)……………	208	Fig.162	王子遺跡出土土製品実測図……………	263
Fig.132	王子遺跡出土土器実測図(5)……………	210	Fig.163	王子遺跡出土鉄器及び鉄滓実測図……………	264
Fig.133	王子遺跡出土土器実測図(6)……………	212	Fig.164	王子遺跡集石遺構(縄文時代) 及び出土土器実測図……………	265
Fig.134	王子遺跡出土土器実測図(7)……………	214	<b>表 目 次</b>		
Fig.135	王子遺跡出土土器実測図(8)……………	215	Tab. 1	王子遺跡周辺遺跡一覧表……………	26
Fig.136	王子遺跡出土土器実測図(9)……………	216	Tab. 2	1・2・3号住居跡内出土土器 一覧表……………	37
Fig.137	王子遺跡出土土器実測図(10)……………	219	Tab. 3	4号住居跡内出土土器一覧表……………	44
Fig.138	王子遺跡出土土器実測図(11)……………	221	Tab. 4	5・6・7号住居跡内出土土器 一覧表……………	50
Fig.139	王子遺跡出土土器実測図(12)……………	222	Tab. 5	8号住居跡内出土土器一覧表……………	55
Fig.140	王子遺跡出土土器実測図(13)……………	223	Tab. 6	9号住居跡内出土土器一覧表……………	59
Fig.141	王子遺跡出土土器実測図(14)……………	225	Tab. 7	9号住居跡内石鏃一覧表……………	67
Fig.142	王子遺跡出土土器実測図(15)……………	227	Tab. 8	10号住居跡内出土土器一覧表……………	68
Fig.143	王子遺跡出土土器実測図(16)……………	229	Tab. 9	11号住居跡内出土土器一覧表……………	78
			Tab.10	12号住居跡内出土土器一覧表……………	83



Tab.11	13号住居跡内出土土器一覧表	87	Tab.45	大型甕形土器実測図一覧表	220
Tab.12	14号住居跡内出土土器一覧表	95	Tab.46	壺形土器実測図一覧表	224
Tab.13	15号住居跡内出土土器一覧表	100	Tab.47	鉢形土器実測図一覧表	232
Tab.14	16号住居跡内出土土器一覧表	107	Tab.48	甕形土器(底部)一覧表	237
Tab.15	17号住居跡内出土土器一覧表	115	Tab.49	鉢形土器(底部)一覧表	243
Tab.16	18号住居跡内出土土器一覧表	118	Tab.50	大型甕形土器(底部)一覧表	243
Tab.17	19号住居跡内出土土器一覧表	126	Tab.51	壺形土器(底部)一覧表	244
Tab.18	20号住居跡内出土土器一覧表	130	Tab.52	蓋形土器及びその他の土器一覧表	249
Tab.19	21号住居跡内出土土器一覧表	135	Tab.53	移入土器一覧表	249
Tab.20	22号住居跡内出土土器一覧表	141	Tab.54	王子遺跡出土石器一覧表	261
Tab.21	23号住居跡内出土土器一覧表	145	Tab.55	土製品(土製勾玉)一覧表	264
Tab.22	24号住居跡内出土土器一覧表	147	Tab.56	住居跡一覧表	267
Tab.23	25号住居跡内出土土器一覧表	150	Tab.57	掘立柱建物跡一覧表	271
Tab.24	26号住居跡内出土土器一覧表	151			
Tab.25	27号住居跡内出土土器一覧表	161			
Tab.26	1号掘立柱建物跡の一覧表	173			
Tab.27	2号掘立柱建物跡の一覧表	173			
Tab.28	3号掘立柱建物跡の一覧表	175			
Tab.29	4号掘立柱建物跡の一覧表	176			
Tab.30	5号掘立柱建物跡の一覧表	178			
Tab.31	6号掘立柱建物跡の一覧表	178			
Tab.32	7号掘立柱建物跡の一覧表	180			
Tab.33	8号掘立柱建物跡の一覧表	182			
Tab.34	9号掘立柱建物跡の一覧表	183			
Tab.35	10号掘立柱建物跡の一覧表	184			
Tab.36	11号掘立柱建物跡の一覧表	186			
Tab.37	12号掘立柱建物跡の一覧表	186			
Tab.38	13号掘立柱建物跡の一覧表	188			
Tab.39	14号掘立柱建物跡の一覧表	188			
Tab.40	14号掘立柱建物跡(土壇内)出土土器 一覧表	189			
Tab.41	1号土壇内出土土器一覧表	193			
Tab.42	2号土壇内出土遺物一覧表	194			
Tab.43	3号土壇内出土遺物一覧表	199			
Tab.44	甕形土器実測図一覧表	204			

## 図 版 目 次

P L . 1	王子遺跡発掘調査(1)……………	281	P L . 34	住居跡内出土土器 ( 6 ) 及び包含層出土土器……………	314
P L . 2	王子遺跡発掘調査(2)……………	282	P L . 35	王子遺跡内出土土器 ( 7 ) 及び住居跡内出土と包含層出 土の石器 ( 1 ) ……………	315
P L . 3	王子遺跡土層断面図……………	283	P L . 36	住居跡内出土と包含層出 土の石器 ( 2 ) ……………	316
P L . 4	王子遺跡遺物出土状況……………	284	P L . 37	石器及び土製品出土状況 と土製勾玉, 鉈, 刀子, 鉄滓, 集石遺構検出状況……………	317
P L . 5	3号住居跡検出状況……………	285			
P L . 6	4号・5号住居跡検出状況……………	286			
P L . 7	7号住居跡柱穴及び土壇検出状況……………	287			
P L . 8	6号・8号住居跡検出状況……………	288			
P L . 9	8号・9号住居跡検出状況……………	289			
P L . 10	9号・10号住居跡検出状況……………	290			
P L . 11	11号住居跡検出状況……………	291			
P L . 12	13号住居跡検出状況……………	292			
P L . 13	12号・14号住居跡検出状況……………	293			
P L . 14	15号住居跡検出状況……………	294			
P L . 15	16・17号住居跡検出状況……………	295			
P L . 16	18号・19号住居跡検出状況……………	296			
P L . 17	20号・22号住居跡検出状況……………	297			
P L . 18	23号・24号住居跡検出状況……………	298			
P L . 19	25号住居跡検出状況……………	299			
P L . 20	26号住居跡検出状況……………	300			
P L . 21	27号住居跡検出状況……………	301			
P L . 22	掘立柱建物跡(棟持柱付)検出状況(1)……………	302			
P L . 23	掘立柱建物跡(棟持柱付)検出状況(2)……………	303			
P L . 24	掘立柱建物跡(棟持柱付)検出状況(3)……………	304			
P L . 25	掘立柱建物跡(棟持柱付)検出状況(4)……………	305			
P L . 26	掘立柱建物跡(棟持柱付)検出状況(5)……………	306			
P L . 27	掘立柱建物跡(6)及び土壇検出状況……………	307			
P L . 28	溝状遺構検出状況……………	308			
P L . 29	住居跡内出土土器 ( 1 ) ……………	309			
P L . 30	住居跡内出土土器 ( 2 ) ……………	310			
P L . 31	住居跡内出土土器 ( 3 ) ……………	311			
P L . 32	住居跡内出土土器 ( 4 ) ……………	312			
P L . 33	住居跡内出土土器 ( 5 ) ……………	313			

# 第1章 序 説

## 第1節 調査に至るまでの経過

国道220号線鹿屋バイパスは、建設省が地域の要望によって、将来の鹿屋市街地の交通渋滞緩和を図る目的で、高山町富山笠野原（国道220号線接続）から鹿屋市郷之原町（鹿屋環状線）に至る延長約8.7kmについて建設を計画した。鹿屋バイパスは、昭和44年から47年にかけて鹿屋市から再三にわたり建設省へバイパス建設の陳情がなされ、昭和48・49年度に鹿屋バイパス計画線、昭和50・51年度に実測線の調査を実施、昭和52年3月17日には建設省よりルート承認がなされている。その後、昭和53年4月26日鹿屋市都市計画地方審議会、6月9日県都市計画地方審議会が答申し、6月27日には都市計画の許可が建設大臣よりなされ、7月25日都市計画の決定が鹿児島県知事からなされた。これらの諸手続を経て昭和54年度から用地買収が実施され、昭和55年から工事が建設省の直轄の事業で着手された。

王子遺跡は、昭和54年11月6日鹿児島県教育委員会文化課による大隅地区埋蔵文化財分布調査により発見された弥生時代の遺跡である。本遺跡は国道220号線鹿屋バイパス路線が決定し、事業着手後に発見された。

その後、鹿児島県教育委員会は、建設省九州地方建設局大隅工事事務所と遺跡の処置について協議した結果、国道220号線鹿屋バイパス建設事業の推進と文化財保護のために、とりあえず確認調査を実施する運びとなった。

## 第2節 確認調査の経過

分布調査の結果、王子遺跡については確認調査が必要となり、鹿児島県教育委員会文化課と大隅工事事務所との間で話し合いが続けられた結果、大隅工事事務所長と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれた。この契約にもとづいて、昭和56年1月19日から確認調査が開始され、竪穴式住居跡・溝状遺構など弥生時代を中心とする遺構の検出が予想されるのみでなく、遺物包含層がほぼ全域にわたることが判明し、南九州の弥生時代を知る上で貴重な手がかりを与える遺跡として注目された。さらに市道小原線以東バイパス路線内への拡がりも予想され、その確認調査が必要とされるとの結果が出され、調査は2月28日で終了した。以下確認調査の経過は、日誌抄をもって第4節に記述する。

## 第3節 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教 育 長	井之口恒雄
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課 長	山下 典夫
〃	〃	課 長 補 佐	新 時弘
調査企画者	〃	専 門 員	本蔵 久三
調査担当者	〃	主 事	立神 次郎

調査担当者	鹿児島県教育庁文化課	主	事	中村 耕治
事務担当者	〃	管	理	係 長 川畑 栄造
〃	〃	主	査	安藤 幸次
〃	〃	主	事	天辰 京子

尚、発掘中、河口貞徳氏（県文化財保護審議会委員）の御指導・御教示を得た事を記し、感謝の意を表したい。

#### 第4節 日誌抄

発掘調査は、昭和56年1月19日から昭和56年2月28日まで実施した。その間の調査経過は発掘調査日誌を整理して週ごとに記載する。

調 査 の 経 過	
昭 56 1 ・ 19 日 (月) ┆ 23 日 (金)	<p>19日、確認調査開始。作業員に対して調査の主旨と作業上留意すべき事について注意と説明。発掘用具搬入。調査区域内の雑草木の伐切作業。10m×10mのグリッド設定作業。プレハブ設置。調査は原則として20m間隔に2m幅のトレンチ調査で実施する。C-9～14区、B-12区、B・C-8～10区トレンチの表土層及びⅡ層の掘り下げ作業。Ⅱ層より弥生式土器破片の土器が出土する。C-12区Ⅱ層より溝状遺構検出。C-9区竪穴式住居跡検出。</p> <p>19日、肝属教育事務所・鹿屋市教育委員会へあいさつ。20日、本蔵専門員指導のため来訪。</p>
26 日 (月) ┆ 30 日 (金)	<p>C-3～8区、B・C-4区、B・C・D・E-2区、D・E-4・6・8～10区、E-11～14区、C-14・15区トレンチの表土層及びⅡ層の掘り下げ作業。C-7・8区二か所に竪穴式住居跡らしい遺構の検出。C-4区大型甕形土器破片が集中して出土。B・C区-2区、C-3区養鶏場跡地を含め遺物包含層が攪乱及び耕作土化し、大半が消失している。耕作土及び攪乱層より土器破片を検出した。D・E-2区溝状遺構をE区側に検出した。E-9・10区竪穴式住居跡を検出した。C-14・15区土器破片が多く出土。遺構検出がないためⅢ層上面まで掘り下げ実施。D・E-6区土器破片を多く検出した。</p>
2 ・ 2 日 (月) ┆ 6 日 (金)	<p>B～E-2区、C-3～21区、B-9・10・13・14区、C-15～18区、D-9～14区、B・C-16区、B・C-18・20区トレンチ表土層及びⅡ層の掘り下げ作業。D-12区溝状遺構検出。C-17・18区竪穴式住居跡が二か所に検出さる。土器破片を多く検出した。B・C-20区Ⅱ層最下面付近より大型甕形土器及び棒状炭化物を多く検出した。遺構の可能性が強い。</p> <p>B・C・D-18区土器破片の出土が多い。D-18区においては、C-18区住居跡の延長を確認し、掘り下げ作業。土器破片を埋土中より多く検出した。B-13区溝状遺構検出。B-14区土製勾玉及び打製石器が出土した。今まで調査区各トレンチ遺物取り上げ作業。</p>

調 査 の 経 過	
9日(月)	<p>C・D-17・18区, C-18区竪穴式住居跡。性格をつかむため、一部周辺を拡張して掘り下げ作業を実施した。床面を検出した。地表面から約2m程度の深さで、床面は赤ホヤ層まで達し、床面は黒色土、軽石及び茶褐色の混合土を認めるが、軽石は少量であった。甕形土器の破片や磨製石鏃などの出土がみられた。さらに拡張して掘り下げた結果、当時の生活面堆定地付近で住居跡の上面プランを確認した。C-17区竪穴式住居跡を拡張し掘り下げ作業。土器破片及び土製勾玉の出土がみられ、埋土掘り下げ作業により大型甕形土器及び壺形土器口縁部、炭化物が多く認められた。D-12区溝状遺構検出作業。溝は幅広く浅く底面は非常に硬く締っている。D・E-11区, D-12区, B-1区, C-1~3区, C・E-10・11区, C-10・11区, E-12・13区のトレンチについて縄文時代及び旧石器時代の確認調査実施。遺構・遺物ともに検出されない。</p> <p>9日, 文化課長, 向山主任研究員, 鹿屋市教育委員会, 鹿屋高等学校郷土史研究会員来訪。</p>
12日(金)	
16日(月)	<p>C-17区竪穴式住居埋土掘り下げ作業。ともに土器小破片の出土が多い。床面の一部が検出され、床面に近づくにつれ炭化物を多く認めた。遺物包含層と埋土とが同質のため住居跡中央部付近より壁側への掘方を進め、壁の検出を実施した。C・D-18区竪穴式住居跡よりテラス(のちベッド状遺構)や突出状の施設(障壁)の検出や磨製石鏃・土器破片及び炭化物を認めた。また複合が考えられるが、今回はそれ以上の追求は本調査にゆだねた。C-5~8区, B-16区, E-5~8区のトレンチⅡ層掘り下げ作業。C・D・E-12区溝状遺構の延長を確認するためにトレンチ調査による検出に努めた。C-7区, D-8区, E-9・10区竪穴式住居跡上面プラン平板実測作業。C-17~20区, B-18区, D・E-17区北壁及び西壁土層実測。C-10・11区, E-15・16区, E-11・12・14区, C-11・12区, E-5~8区縄文時代及び旧石器時代の文化層の確認調査実施。遺構・遺物とも検出されなかった。</p>
21日(土)	
23日(月)	<p>B・C-16区Ⅱ層掘り下げ作業。C-17区住居跡埋土掘り下げが進むにつれ、土器破片特に大型甕形土器破片が多く認められ、甕形土器及び壺形土器破片をみた。また、最下部には棒状炭化物が検出された。形状は方形プランを基調とするが、北側にわずかな張り出しを作っている。C・D-18区住居跡埋土掘り下げ作業。本遺構は周辺部へさらに広がるものと想定されるため、今後の調査にゆだねることとした。平面及び平板実測作業。E-3~8区, D・E-2区, C-D-16区, B・C-16区, E-3・4区のトレンチについて縄文時代及び旧石器時代文化層の確認作業。各トレンチの土層未実測部分について実測実施。遺構検出したトレンチについて埋めもどし作業。遺跡管理作業。器材搬出作業。本日で確認調査の日程を全て終了。</p> <p>24・25日, 河口貞徳県文化財保護審議会委員現地指導。本蔵専門員来訪。</p>
28日(土)	

## 第2章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査に至るまでの経過

確認調査の結果、鹿児島県教育委員会は、昭和56年4月7日建設省大隅工事事務所に対し、遺跡の事前調査について文化課と協議されたい旨の発掘調査事業報告書を提出した。その後、大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会文化課との間で王子遺跡の取扱いについて協議が続けられた。

一方、鹿児島県教育委員会は、県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会で示された委員の学術的見地から、本遺跡が南九州の弥生時代を知る上で貴重であると判断し、発掘調査に慎重を期すため県文化財保護審議会埋蔵文化財部会等の指導を受けた。

主な経過は、次のとおりである。昭和56年5月20日県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会において「保存するよう所見を付しておいたので、先手で行ってほしい」旨の指導がなされ、6月3日県文化財保護審議会では「王子遺跡の取扱いについて」の要望が行なわれた。7月27日及び7月31日には県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会委員による現地調査が実施され、9月3日には県文化財保護審議会会長・同副会長の現地視察が行なわれた。9月9日に県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会が開催され、王子遺跡について大隅工事事務所との協議の経過の説明及び現地調査の報告があり、その結果、「発掘調査を実施し、その結果により遺跡の取扱いを検討する」との指導を受ける。尚、発掘調査に至るまでに建設省大隅工事事務所と協議を重ねたことを付記する。

### 第2節 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	井之口恒雄（S56～58年度）
〃	〃	〃	山田 克穂（S59年度）
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課長	猿渡 侯昭（S56～58年度）
〃	〃	〃	桑原 一廣（S59年度）
〃	〃	補佐	新 時弘（S56年度）
〃	〃	〃	本田 武郎（S57・58年度）
〃	〃	〃	坂口 肇（S59年度）
〃	〃	主幹	吉井 浩一（S56・57年度）
〃	〃	〃	中村 文夫（S58・59年度）
調査企画者	〃	主任文化財研究員	諏訪昭千代（S56～59・9月）
〃	〃	〃	向山 勝貞（S59・9月～）
調査担当者	〃	文化財研究員	出口 浩（S56年度）
〃	〃	主事	立神 次郎（S56～59年度）
〃	〃	文化財調査員	峯崎 幸清（S57・58年度）

調査担当者	鹿児島県教育庁文化課	文化財調査員	山口 俊博 (S58年4～9月)
〃	〃	〃	日高 孝治 (S56年度)
事務担当者	〃	主幹兼管理係長	川畑 栄造 (S56・57年度)
〃	〃	管理係長	寺園 晃 (S58・59年度)
〃	〃	主査	浜松 巖 (S59・9月～)
〃	〃	主事	畑 征治 (S59・4～59・8・13)
〃	〃	〃	山下 玲子 (S56～58年度)
〃	〃	〃	田中 孝子 (S59年度)

尚、発掘調査の指導については、文化庁主任文化財調査官河原純之氏、同文化財調査官岡本東三氏、同文化財調査官黒崎直氏、同文化財調査官西弘海氏、同文化財調査官桑原滋郎氏、国立奈良文化財研究所遺構調査室長宮本長二郎氏、同遺物処理研究室長沢田正昭氏、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏(考古学)、梅光女子学院大学教授国分直一氏(民俗・考古学)、九州産業大学教授森貞次郎氏(考古学)、九州大学教授横山浩一氏(考古学)、北九州市立博物館主幹小田富士雄氏(考古学)、九州芸術工科大学教授沢村仁氏(建築史)、鹿児島大学教授大庭昇氏(地質学)、宮崎大学助教授藤原宏志氏(花粉分析)、京教産業大学助教授山田治氏(放射性炭素年代測定)、新日鉄八幡中央研究所研究員大澤正己氏(鉄製品分析・同定)に御指導・御教示を得た事を記し、感謝の意を表したい。他に文化課主任文化財研究員諏訪昭千代、文化財研究員繁昌正幸、主事青崎和憲、主事弥栄久志、主事長野真一の発掘調査の応援をうけた。

※氏名は順不同にさせていただきました。

### 第3節 調査の経過・日誌抄

確認調査の結果、本遺跡は全面調査を実施することになり、調査は、昭和56年10月12日付けで、建設省九州地方建設局大隅工事事務所と鹿児島知事との間で委託契約が締結され、10月12日より現地調査が始まった。

当初、発掘調査は道路建設予定地の台地縁辺部から東側(市道小原線より以西)の全面発掘調査と市道小原線以東の確認調査を予定し、排土処理等を考慮して西側台地縁辺部(崖端部)寄りから東側へ、順次弥生時代文化層の遺構の検出に努め、さらに小原線以西の発掘調査と並行して以東の確認調査を実施した。この結果、調査範囲は西側崖端部から約290m東方へ入り込んだ部分までと、道路建設予定地幅約35m～55mの面積約11,000㎡となった。調査の進展につれ、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡(棟持柱付)等、土壇、溝状遺構などの遺構が総計47検出された。遺物も破片が多く、甕形土器、壺形土器、鉢形土器を主体に、石器、鉄器などが多く出土した。中でも、ベッド状張り出し遺構をもつ竪穴式住居跡、掘立柱建物跡(棟持柱付)などの遺構や瀬戸内系の凹線文をもつ壺形土器や矢羽根透しをもつ高坏形土器、樹皮布叩石、鉈や鍛冶滓などの遺物を見る。このように、大規模な遺跡で学術的見地から古代南九州を知る上で貴重な遺跡であり、その取扱いが県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会などで協議が重

ねられた。以下、その概要を記す。

本遺跡の調査は、県文化財保護審議会史跡埋蔵文化財部会（以下、史跡・埋文部会とする。）の指導により慎重に進めて来た。昭和56年7月27日に史跡・埋文部会の現地調査。現地調査に基づき、7月31日に史跡・埋文部会が開催され、王子遺跡の取扱いが協議された。その結果、9月3日に県文化財保護審議会会長・副会長による現地視察。9月9日の史跡・埋文部会で、王子遺跡について大隅工事事務所との協議の経過説明を行ない、王子遺跡の取り扱いについて協議された結果、「発掘調査を実施し、その結果により検討する」との指導を受けた。一方、大隅工事事務所とは4～9月まで精力的に協議を重ねた。昭和58年2月2日に史跡・埋文部会を現地で開催。その後、2月28～3月11日の間、史跡・埋文部会委員の現地視察が行なわれ、3月31日までに管理作業を実施し、昭和57年度の調査を終了した。昭和58年4月18日より整理作業を文化課重富収蔵庫で開始した。同日に史跡・埋文部会が開催され、王子遺跡について審議がなされ、(1) 文化課がすでに指導助言を受けている方の指導内容を提示すること、さらに、(2) 県外から考古学の専門家を招き指導を受けることを検討することなどの結論が出た。その結論に基づき、4月24・25日に県内外から専門家の森貞次郎（考古学）、河口貞徳（考古学）、国分直一（考古・民俗学）、沢村仁（建築史）各氏の現地指導があり、5月23日に史跡・埋文部会で王子遺跡の取扱いについて審議された。同日に鹿児島県考古学会長河口貞徳から「王子遺跡の全面保存を求める要望書」署名簿第一次分（20,282名分）が提出された。6月7日に県文化財保護審議会が開催され「王子遺跡保存について」審議され、意見集約がなされた。具申意見——「王子遺跡は、学術上極めて重要な遺跡であり、現状保存が望ましいことはいうまでもない。しかし、今回の場合、諸般の問題を考慮すると現実的には現状保存することは、極めて困難であると考えられる。従って、その場合には、施行部分をできる限り縮少し、検出遺構などの精密な記録はもとより、周辺地域の調査の実施などの保存活用策を講ずるよう要望する。なお、トンネル又は橋梁方式による全面保存策は可能であり、遺跡を全面保存することが望ましいとの少数意見もあった。」6月17日に鹿屋市議会から教育委員長あて「国道220号線バイパスの早期完成に関する決議書」の提出、7月4日に文化財保存連絡協議会代表者甘粕健から知事あて「鹿児島県王子遺跡の保存に関する要望書」の提出、7月11日に鹿児島県考古学会長河口貞徳から「王子遺跡の全面保存を求める要望書」署名簿第二次分（10,796名分）の提出、8月8日に県議会文教衛生委員会委員の現地調査。8月11日の日本考古学協会委員長江上波夫から県知事あて「鹿屋市王子遺跡の保存について」の要望書の提出が相次いでなされた。その後、王子遺跡の取扱いについて、大隅工事事務所と路線開削工法の変更や未発掘調査部分（市道部分及び現検出遺構下部分）の発掘調査実施について協議した。また、検出遺構などの記録保存活用策については、大隅工事事務所及び鹿屋市と協議し、周辺地域の確認調査については鹿屋市及び文化庁と協議した。その結果、文化財保護審議会の答申を受けた県教育委員会文化課は、10月4日から検出された遺構などの精密な記録として、① 代表的な遺構の移設、② その他の遺構の型取または転写、③ 遺構全体の模型及び映像記録、④ 遺構の整備及び遺構詳細実



測、⑤ 未調査部分の調査として、市道敷部分及び現検出遺構の下層部分の掘り下げ作業の実施。一部遺構について遺構切り作業を行い、断面の観察及び記録などの事業を実施した。現検出遺構の下層部分の掘り下げ作業において、縄文時代早期相当の土器小破片及び集石遺構を検出した。なお、周辺地域の遺跡確認調査については、現在協議が継続中である。以下、発掘調査の経過については、月毎に略述し日誌抄とした。発掘期間中、一部整理作業を実施した期間及び調査終了後の整理作業をも含めた。

調査期間は、昭和56年12月12日より、昭和59年3月31日までの長期間の調査となった。

日誌抄

〈昭和56年度〉

調 査 の 経 過	
昭 56 ・ 10 月	<p>12日、王子遺跡発掘調査開始。発掘用具運搬。調査対象を市道小原線以西とする。雑草、雑木、竹材の伐採及び焼却。10×10mのグリッド設定。西側崖端部側から掘り下げ開始。試掘調査の結果、遺物包含層が把握されているため、その面までの排出に努める。F-3・4区、C-2区付近には、養鶏場跡地等の影響を受け、生活面想定部位の消滅や攪乱を受ける。</p> <p>15日、文化課長来訪。</p>
11 月	<p>B・C-7～12区Ⅱ層に土器破片の出土が検出さる。C-12区黒色火山灰土層中にやや茶褐色系の土が略円形状に検出され、この面での最初の遺構（12号住居跡）検出の可能性がある。B～F-1～4区にかけては、遺物包含層の削平や攪乱を受けている。遺構はE・F-3・4区に溝状遺構を検出する。排土用仮設道の設定（道路建設予定地北側）をし、排土作業を実施する。</p> <p>20日、小林建設排土作業開始。</p>
12 月	<p>B・C-5～7区Ⅱ層剥ぎを行い遺構検出を図る。C-7区に方形及び略円形上の遺構（13号掘立柱建物跡及び1号住居跡）の検出がⅢ層上面でなされる。C-17区・D-18区の住居跡（15号及び16号住居跡）の再発掘する（確認調査時発掘後埋めもどす）。D-11区遺構（10号住居跡）の検出に努める。市道小原線以東に幅2mのトレンチを設定し確認調査を実施する。29区までの遺物包含中より土器出土を認め遺跡の範囲とする。西側崖端部より約290mに及ぶ。C-24区大型甕形土器、F-28区に甕形土器の一括出土を認める。縄文時代の文化層の確認作業も並行して実施する。</p> <p>9日、大隅工事事務所副所長、柳田専門職、諏訪主任文化財研究員打ち合せ。</p>
昭 57 ・ 1 月	<p>C-6区土器出土に集中を認める。D・E-5・6区Ⅲ層面まで調査終了。遺構の検出は認められず。C-8区13号掘立柱建物跡の土坑掘り下げ、D-8区への拡がりを見る。C-12区12号住居跡（円形プラン）・D-11区10号住居跡（方形プラン）の検出作業。いずれも張り出し部を有する。市道小原線以東の縄文時代の文化層の確認調査実施。遺物・遺構とも認められない。</p> <p>14日、成尾英仁氏（指宿高校）土層の指導。</p>

調 査 の 経 過	
2月	<p>B・C-1～8区, D・E-2～6区, F-3～6区Ⅲ層上面まで調査終了。C-8・9区5号住居跡検出作業。E・F-2～5区溝状遺構検出作業。Ⅲ層上面で検出され, V層アカホヤ層まで掘り込まれている。埋土中には小破片を少量認める。断面V字状を呈し, 北側路線外へのびる。C-5区土壇(4号土壇)の痕跡を認める。Ⅱ層下部で検出し, 埋土中に軽石の集石を認める。B・C-11～20区土器の散布が全面に認める。甕形土器の口縁部・胴部・底部などの小破片が多い。C-12区12号住居跡埋土断面実測後除去作業。埋土下部にはアカホヤのブロックが多い。E-12区からB-13区にかけての溝状遺構は浅くて幅広い形状で; 底面は非常に硬い面を検出した。</p> <p>8日, 鹿屋市長外議員一行30名視察。10日, 県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会一行現地指導。諏訪・向山両主任文化財研究員来訪。鹿屋市社会教育課長・補佐来訪。12日, 新東晃一氏(明治百年記念館調査室)来訪。17日, 河原文化庁主任調査官現地指導。</p>
3月	<p>西側調査区遺物出土状況平板実測及び畦除去作業。B-10区大型の土製勾玉の出土。D・E-7・8区土器集中出土状況平面実測(1/10)。C・D-8・9区5号住居跡床面を検出し, 貼り付け調整を認める。畑灌パイプ埋設により北壁大半は影響を受け, さらに新しい溝を認めるが床面まで達せず。F-7区3号住居跡・E-13区13号住居跡検出作業後掘り下げ実施。3号住居跡の埋土中に大型甕形土器を確認する。B・C-11・12区12号住居跡柱穴検出。磨製石鏃出土。C-20区14号掘立柱建物跡検出。B-15区土器集中出土状況平板実測。E-15・16区方形に並ぶ柱穴群(2号掘立柱建物跡)検出。Ⅲ層上面での検出で, 梁間にそれぞれ棟持柱をもつ。本年度調査終了のため管理作業実施。</p> <p>16日, 新東晃一氏(明治百年記念館調査室)写真撮影のため来訪。23日, 河口貞徳氏現地指導。29日, 横山浩一氏(九州大学)現地指導。文化庁西技官現地指導。</p>

〈昭和57年度〉

調 査 の 経 過	
4月	<p>12日, 本年度発掘調査開始。D・E-8区以前と同様土器集中出土を認める。A-7区土器集中出土を認めるが, その大半は南側路線外へのびる。C・D-7区土壇検出(1.6×1.2m)。B-6・7区柱穴群検出(1号掘立柱建物跡)。3.0×3.3mで, 梁間側にそれぞれ棟持柱をもつ。柱穴より土器小破片の出土。E-8区4号住居跡検出。一部壁を検出し, 張り出しベッド状遺構をもつ住居跡である。市道小原線以東各トレンチの遺物取り上げ作業後埋めもどし作業。</p> <p>15日, 諏訪主任文化財研究員来訪。23日, 上村俊雄氏(鹿児島大学)来訪。26日, 河口貞徳氏, 立園文化財研究員, 池畑主事来訪。</p>
5月	<p>西側調査区の溝状遺構実測作業。E-7区3号住居跡埋土断面実測。床面に窪みを認める。D-7区4号住居跡掘り下げ作業。方形を基調に三か所に張り出しベッド遺構をもつ。E-</p>

調 査 の 経 過	
5 月	<p>10・11区2基の住居跡（8号住居跡及び9号住居跡）。9号住居跡は約7.0×7.4mを計測し、円形プランを呈す。特に、磨製石鏃（完形7，未完4）出土。E-13区13号住居跡埋土断面実測後除去する。移入土器と思われる長径壺の破片出土。ベッド状遺構及び障壁をもつ。東側調査区排土用道路づくり。</p> <p>1日，九州地方建設局道路部長，工事事務所副所長，文化課長，鹿屋都市計画課長来訪。 18日，河口貞徳氏，上村俊雄氏来訪。</p>
6 月	<p>E・F-9・10区7号住居跡，D-8区6号住居跡掘り下げ作業。ともに方形プランで柱穴2及び南側壁中央付近に不定形の土壇をもつ。E-7区3号住居跡，D・E-7・8区4号住居跡柱穴及び土壇掘り下げ作業。3号住居跡は柱穴2で土壇は検出されず，住居跡中央部の床面に掘込を認める。4号住居跡は柱穴2で心心距離約230cmで南側壁中央付近に不定形の土壇をもつ。土壇内埋土上面には炭化物を多く認める。床面は部分的に貼り付け調整を認める。E-11・12区9号住居跡残存部掘り下げ作業。C・D-18・19区16号住居跡残存部は，当時の生活面が想定され，上面プランの輪郭は明瞭で，障壁をもつベッド状遺構を認める。E-19区23号住居跡検出作業をしたがその痕跡は現段階では不鮮明である。B・C-19・20区17号住居跡掘り下げ作業。14号掘立柱建物で土壇をもつ。大きい掘込で深い。土壇内には大型甕形土器及び棒状炭化物を検出した。埋土は包含層と同質で識別は困難である。B-15区20号住居跡Ⅱ層最下面で検出。E-13区13号住居跡柱穴検出作業及び実測。柱穴2，ベッド状遺構と壁間に壁帯溝を廻らす。障壁付近には不定形で小さくて浅い土壇をもつ。B・C-21区18号住居跡生活面と想定される面で検出。新しい溝の影響があり，大半は南側路線外へのびる。B-14区21号住居跡検出。大半が路線外へのび，溝状遺構と近隣する。</p> <p>9日，県教育庁総務課林主幹，文化課川畑主幹来訪。10日，河口貞徳氏来訪。28日，渡辺正気氏（元九州歴史資料館学芸課長）来訪。30日，大崎町文化財審議会委員研修のため来訪。</p>
7 月	<p>C-21・22区13号掘立柱建物跡柱穴掘り下げ作業及び断面実測。E・F-9・10区7号住居跡床面及び柱穴検出作業。床面は部分的に貼り付け調整がなされ，柱穴は柱痕跡を認める。E-13区13号住居跡平面及び断面実測。B-15区20号住居跡掘り下げ作業。土器及び棒状炭化物出土。F-14・15区14号住居跡平面及び断面実測。4か所に障壁を検出し障壁間はベッド状遺構となる。柱穴大小6，中央部に土壇を検出。約半分北側路線外へのびる。床面着の土器破片も多い。D-18・19区16号住居跡埋土残存部掘り下げ作業。埋土断面実測及び除去作業。B・C-19・20区17号住居跡掘り下げ作業。D-11区11号住居跡の上面プラン検出作業。B-13・14区22号住居跡掘り下げ作業。張り出しをもっと思われるが大半は路線外へのびる。E・F-11・12区9号住居跡残存部掘り下げ作業。豪雨のため各遺構の精査作業をくり返す。乾燥防止のため散水作業。</p> <p>7日，肝属教育事務所総務課長，早水社会教育主事来訪。15日，諏訪主任文化財研究員，</p>

調 査 の 経 過	
7 月	山西文化財研究員来訪。20日、吉井主幹、諏訪主任来訪。鹿児島テレビ「さつま八面鏡」取材のため河口貞徳氏、上条氏、東ディレクター取材。28日、上村俊雄・出口浩両氏来訪。29日、鹿屋市内校長会遺跡研修のため来訪。オレンジ学園松下氏来訪。
8 月	D・E-8区4号住居跡平面及び断面実測。壁帯溝を廻らす。土壇は110×110cmで不定形。C・D-7区13号掘立柱建物跡。柱穴は4本(平均60×60×110cm)で掘立柱建物の内に土壇(170×140cm)をもつ遺構である。平面及び断面実測。柱穴内より土器破片の出土を認めるが小破片である。C・D-8・9区5号住居跡平面及び断面実測。張り出しを西側にもつ住居跡で、柱穴5、土壇(185×130cm)をもつ。D-8・9区6号住居跡平面及び断面実測。土壇は南側壁中央付近にあり土壇を切る格好である。柱痕跡を検出する。方形プランを呈す。E・F-9・10区7号住居跡平面及び断面実測。柱穴2土壇をもつ隅丸方形プランで胴張りの住居跡である。柱穴は柱痕跡が検出される。東側調査区の調査。C-24区から大型甕形土器の出土を認める。乾燥化防止のため散水作業をくり返す。 4日、藤尾慎一郎氏(九州大学院生)来訪。7日、文化課長来訪。9日、小田富士雄氏(北九州市歴史資料館)現地指導。諏訪主任研究員来訪。11日、日高孝治氏(宮崎県文化課)来訪。18日、新東晃一氏(明治百年記念館調査室)来訪。19日、出口浩氏来訪。
9 月	D・E-8区4号住居跡埋土土器取り上げ作業。甕形土器中心で床面着の出土は少ない。断面実測。C・D-8・9区5号住居跡平面及び断面実測。床面に貼り付け調整を部分的に認める。E・F-11・12区9号住居跡平面及び断面実測。柱穴6、中央部に土壇をもつ。住居跡周縁部にはベッド遺構が廻り、貼り付け調整である。D-11区10号住居跡平面及び断面実測。張り出しベッド遺構をもつ住居跡。C-12区12号住居跡平面及び断面実測。C-20区14号掘立柱建物跡の土壇掘り下げ作業。土壇の輪郭が判明する。大型甕形土器、多量の炭化物、石鏃、壺形土器の破片を検出する。東側調査区散布程度の土器出土で、植樹のため攪乱が多い。C-24区大型甕形土器口縁部破片を多く認める。F-23区2号土壇の検出作業。土壇の埋土掘り下げ作業。土器破片を多量に検出する。 7日、肝属教育事務所総務課長、早水社会教育主事来訪。21日、県人事課職員、文化課川畑主幹来訪。
10 月	市道扱い農道敷の調査。砂利及び表土除去。II層剥ぎ作業。畑灌用のパイプ及び水道埋設のため攪乱を認める。E-10・11区8号住居跡を検出する。埋土掘り下げ作業。方形プランを呈し、深さ60cmで床面及び土壇を検出する。C・D-11区11号住居跡埋土掘り下げ作業。一部畑灌パイプ埋設により西側壁面は消滅し、約40～50cmで床面を検出する。ベッド状遺構をもつ。E・F-10～19区排土用道路除去作業。F-12区溝状遺構の延長を検出する。E・F-13区3号・4号掘立柱建物跡を検出する。E-13区土製勾玉(丁字頭をもつ)の出土。C-12区12号住居跡土壇残存部掘り下げ及び断面実測作業。C-17区15号住居跡平面実測。棒状炭化物を多く認める。D-18・19区16号住居跡大型の住居跡で、張り出しベッド状遺構、

調 査 の 経 過	
10 月	<p>障壁をもつ。</p> <p>1日、本田道輝助手外鹿児島大学考古学研究会員来訪。18日、三島格氏（熊本県考古学会長）、西谷正氏（九州大学）、上村俊雄氏（鹿児島大学）来訪。</p>
11 月	<p>西側調査区溝状遺構検出のため、西側崖断面部の雑木・竹・茅などの伐採。F-11区2号住居跡検出作業。大半は路線外へのびる。F-12区溝状遺構の延長を検出する。F-12・13区3号及び4号掘立柱建物跡の柱穴群を検出し、大半は路線外へのびる。梁間2間、桁行4間で、西側梁間に棟持柱と思われる柱穴を検出する。一部重複し、梁間1間、桁行2間の柱穴を検出する。E・F-14・15区14号住居跡を検出し、一部路線外へのびる。E・F-18区19号住居跡の検出作業、方形プランを想定する。E-18・19区23号住居跡の検出作業。E・F-19区11号掘立柱建物跡の検出。梁間・桁行とも1間の建物を想定する。B・C-21区24号住居跡の検出作業、方形プランを想定する。上面プランは新しい溝により影響を受ける。B-20区で検出済の18号住居跡がB-21区で、その延長を検出する。D-20・21区27号住居跡を検出し、隅丸方形プランを想定する。東側調査区D-25・26区瀬戸内系の土器破片が出土。F-24区25号住居跡を検出したが、大半は北側路線外へのびる。</p> <p>10日、鹿屋中学校PTA遺跡研修のため来訪。18日、野田千尋氏（鹿屋市教育委員）、小迫教育長、久保教育次長、山之口社会教育課補佐来訪。22日、藤原宏志氏（宮崎大学農学部）プラントオパール同定のため、サンプル採集及び現地指導。25日、黒崎調査官（文化庁）、宮本長二郎氏（奈良文化財研究所）現地指導。29日、各市町文化協会及び文化財担当者（教育事務所早水指導主事）遺跡研修のため来訪。</p>
12 月	<p>西側調査区雑木・竹・茅等採伐後、Ⅱ層掘り下げ、包含層が地表面化している。E-10・11区8号住居跡、3.0×3.0mの方形プランを呈し、土壇内に甕形土器を検出。C・D-10・11区11号住居跡、障壁及び張り出しベッド状遺構をもつ。床面は貼り付け調整を認め、土器数片は床着状態での出土。E・F-14・15区14号住居跡、円形プランを呈し、約半分は路線外へのびる。障壁が4ヶ所を確認する。B・C-20・21区18号住居跡、その大半は南側路線外へのびるが、円形プランを呈するものと思われる。E・F-18区19号住居跡、方形を基調とし、ベッド状遺構をもつ。E-18・19区23号住居跡、その形状は不定形で掘方は浅く、床面に土器破片を認める。B・C-20・21区24号住居跡、張り出しベッド状遺構をもつ。E・F-20区26号住居跡、南側及び東側の壁面は方形で、西側壁面は円形、北側壁面には張り出しをもち、低いベッド状遺構をもつ。土器・石器が多く出土。瀬戸内系の櫛描による鋸歯文を施す土器を認める。D-21区27号住居跡、張り出しベッド状遺構をもつ。わりと低いベッド状遺構である。土器破片及び磨製石鏃。D-16・17区10号、E・F-19区11号掘立柱建物跡、10号1間×1間、6号現存で3間×3間を検出し、北側及び市道側へのびる。</p> <p>1日、横山浩一氏（九州大学）現地指導。16日、河口貞徳氏、小田富士雄氏現地指導。石野氏（檀原考古学研究所）外、萩原氏来訪。20日、沢田正昭氏（奈良文化財研究所）現地指</p>

調 査 の 経 過	
	<p>導。24日、河野治雄氏（元文化課職員）来訪。</p>
昭 58 ・ 1 月	<p>5日、発掘調査開始。今までの各遺構の平板実測作業実施。C・D-10・11区11号住居跡、柱穴3、主柱穴心距離180cm、土壇120×100cmの規模、壁滞溝をもつ。実測作業。F-14・15区14号住居跡、柱穴4、外に2～3ヶ所に柱穴らしい痕跡を認める。土壇周辺には床着の土器破片及び炭化物を多く認める。B・C-20・21区18号住居跡、柱穴6、土壇は中央に検出され南側路線外へのびる。棒状炭化物の検出。E・F-18区19号住居跡、柱穴2で心距離180cm、土壇100×90cmで浅く炭化物が多い。B-15区20号住居跡、柱穴4、土壇は小規模で浅い。棒状炭化物の検出。B-13・14区21号住居跡、北側に張り出しをもつベッド状遺構を認める。大半は南側路線外へのびる。F-11区2号住居跡、小規模のため張り出し部が想定され、北側路線外へのびる。E-18・19区23号住居跡、円形状の掘方を床面に認める。B-21・22区24号住居跡、柱穴2、ベッド状遺構をもつが、一部新しい溝の影響を受ける。土壇は認めず、棒状炭化物を床面に認める。E・F-20・21区26号住居跡、柱穴には柱痕跡を検出する。土壇は南側壁付近に認める。D・E-21区27号住居跡、柱穴2、土壇掘り下げ作業。床面に磨石及び棒状炭化物検出。東側調査区縄文時代文化層の確認調査、遺構、遺物とも認めない。</p> <p>17日、林敬二郎志布志実業高校校長来訪。20日、文化庁河原主任文化財調査官来訪。25日、河口貞徳氏来訪。28日、県教育長、肝属教育事務所所長、総務課長、文化課長、諏訪主任研究員外来訪。鹿屋バイパス建設推進委員一行来訪。</p>
2 月	<p>C・D-10・11区11号住居跡、土壇内に2つの柱穴状の掘込を認める。D-18・19区16号住居跡、柱穴状の掘込検出。F-11区2号住居跡、B-13・14区22号住居跡、E-18・19区23号住居跡、B-15区20号住居跡、E-18・19区23号住居跡、E・F-20区26号住居跡、断面及び平面実測。一部実測準備作業。遺方による実測実施。D-19区1号土壇、甕形土器、壺形土器、樹皮布叩石等が出土。溝状遺構残掘り下げ及び平面・断面実測。東側調査区縄文時代文化層確認調査を精力的に実施する。遺構、遺物とも確認されず。航空写真撮影及び各社テレビ局の取材のため、トップシート及び竹材の骨組、土のう路線外へ移動し精査作業実施（遺跡内全面）。</p> <p>3日、NHK「話題の窓」のため河口貞徳氏、NHK取材陣11名来訪。4日、河口貞徳氏南日本放送取材のため来訪。17日、吉井主幹、諏訪主任研究員来訪。12日、大庭昇氏（鹿児島大学）土層指導や土層サンプル採集のため来訪。21日、県教育次長、鹿屋高教諭来訪。24日、中村明蔵氏（ラサール高校）外2名来訪。25日、佐多町文化財審議委員来訪。</p>
3 月	<p>B・C-20・21区17号住居跡、B・C-20・21区18号住居跡、F-24区25号住居跡、E・F-20・21区26号住居跡、D・E-21区27号住居跡について遺方設定後、平面及び断面実測作業。東側調査区縄文時代文化層確認作業実施。遺物、遺構ともに確認せず、各掘立柱建物</p>

調 査 の 経 過	
3 月	<p>跡未実測遺構について平面及び断面実測。遺構内の管理作業実施。竹材の骨組補強作業。杭打ち作業後有刺鉄線設定作業。土のう作り後トップシート覆い作業。各遺構への管理作業後出土遺物梱包作業。発掘器材荷作り作業。発掘器材及び器具、出土遺物搬出作業。30日、本日をもって発掘調査終了。関係各機関へ挨拶。</p> <p>1日、鹿屋市視聴覚センター中級録画メンバー録画実習のため来訪。4日、県文化財保護審議会委員3名現地視察のため来訪。5日、国分直一先生（梅北女学院大学）、河口貞徳氏現地指導。11日、県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会（三木委員）現地視察。諏訪主任研究員来訪。18日、鹿屋市文化財審議会委員及び社会教育課長補佐山之口充氏来訪。小林孝子氏（鹿児島大学）来訪。19日、文化課長ほか埋蔵文化財担当者現地検討会。</p>

〈昭和58年度整理作業〉

調 査 の 経 過	
昭 58 ・ 4 月 昭 59 ・ 3 月	<p>18日、王子遺跡整理作業開始。遺物搬入作業（プレハブ収蔵室より）。図面整理作業。写真整理作業。遺物梱包分荷ほどこき作業。遺物残部水洗作業。遺物水洗作業分注記作業。遺物復元作業（接着及び石膏復元）。各住居跡内遺物実測作業。掘立柱建物跡遺物実測作業。各住居跡の平面図、断面図整理作業及びトレース作業。各掘立柱建物跡及び他遺構トレース作業。各住居跡内遺物出土状況平面及び垂直分布状況図作成、さらにトレース図作成。各遺構内及び一般遺物について出土状況ドットに落す作業（平面分布）。遺跡地形図トレース、各住居跡内出土遺物実測図トレース作業。遺物拓本作業。遺物分類作業。住居跡内及び一般遺物トレース作業、レイアウト作業。石器実測作業及びその他遺物実測作業。石器及びその他の遺物トレース作業、レイアウト作業。遺物、遺構について専門家の指導。遺物写真撮影。執筆作業。</p> <p>6月1日、本田道輝氏（鹿児島大学）来訪。6月20日、秀白圭氏（韓国金北大学）来訪。8月6日、河口貞徳氏、松下兼知氏来訪。</p>

〈昭和58年度〉

調 査 の 経 過	
昭 58 ・ 10 月	<p>4月、発掘調査開始。本年の3月より遺跡調査は中断した状況のため草竹が繁茂しており草取り作業を含めた遺跡精査作業。各遺構のトップシート除去及び精査作業。グリッド杭打ち直し。B・C-20・21区18号住居跡の発掘調査（埋めもどしたため）。E・F-20区26号</p>

調 査 の 経 過	
10 月	<p>住居跡，D-21区27号住居跡，C-21・22区24号住居跡，D-19区22号住居跡，E-18・19区23号住居跡，D-18・19区16号住居跡，遺方設定作業後実測作業。縮尺1/10による実測。10cm間隔の横，縦断面作成（遺構詳細実測）。縄文時代及び旧石器時代文化層（下層確認調査）。</p> <p>4日，文化課長記者会見。南日本放送，NHK，鹿児島テレビ，南日本新聞社，鹿児島新報社，読売新聞社，毎日新聞社の取材。諏訪主任研究員来訪。11日，県議会議員約20名視察。</p>
11 月	<p>E・F-18区19号住居跡，D-19区23号住居跡，D-18・19区16号住居跡，D-21区27号住居跡，C-17区15号住居跡，E-13区13号住居跡，E-10・11区8号住居跡，C・D-10・11区11号住居跡，E・F-9・10区7号住居跡，D-8・9区6号住居跡，E-7区3号住居跡，C・D-8・9区5号住居跡，E-11・12区9号住居跡，D-11区10号住居跡，遺方設定作業後実測作業。縮尺1/10による実測。10cm間隔の横，縦断面作成（遺構詳細実測）。</p> <p>市道小原線内の道路予定地内の調査。道路建設のため遺物包含層まで影響を受けている。映像記録のための諸準備作業。縄文時代及び旧石器時代文化層（下層確認調査）。</p> <p>1日，県議会土木委員，議会事務局，鹿屋土木事務所長，本課部課長視察。10日，鹿屋市教育委員会山口氏来訪。25日，原口鹿大助教授来訪。</p>
12 月	<p>市道敷の調査。映像記録のための諸作業。E・F-21区6号掘立柱建物跡，残部柱穴検出作業。混合擁壁工法により現地保存する遺構について埋めもどし作業（10遺構）及び盛土実施作業。記録保存する遺構について截切り作業。遺構移設，遺構型取り，遺構及び土層剥き取り作業実施。縄文時代及び旧石器時代文化層（下層確認調査）。年末のため遺跡の管理作業。</p> <p>2日，映像記録のため安藤氏，永峯氏来訪。3日，出口，下水流両氏（鹿児島市教育委員会）来訪。12日，近畿ウレタン工事林氏外2名来訪。16日，三木学長（鹿児島短大）外6名来訪。</p>
昭 59 ・ 1 月	<p>5日，発掘調査開始。縄文時代及び旧石器時代文化層（下層の確認調査）。C・D-19区，C-20区，C・D区の調査。C-20区黒褐色粘質土層中より縄文時代早期の土器小破片の出土。D・E-20区，黒褐色粘質より縄文時代早期の集石遺構を検出する。実測及び保存移設準備作業。竪穴式住居跡，掘立柱建物跡（棟持柱付）について移設のための諸作業実施。遺構型取り諸作業。遺構及び土層剥き取り諸作業。4号住居跡及び1号掘立柱建物跡（棟持柱付）の遺構をそれぞれ2分割して移設運搬作業。</p> <p>5日，国際航空写真株式会社九州支社下宇宿氏，本社模型室大道寺氏現地視察。9日，遺構移設について打ち合せ。11日，文化課職員現地研修（中村主幹，吉永研究員，池畑・宮田主事）。12日，文化課職員現地研修（繁昌研究員，長野・牛ノ浜主事）。13日，肝属教育事務所職員来訪。14日，文化課職員現地研修（青崎・弥栄主事）。20日より沢田正昭氏移設及び型取り，剥き取りについての現地指導。21日，鹿屋市建設部長，建設課金田氏，都市計画課郷原氏来訪。23日，鹿屋市建設部長外6名来訪。26日，小迫鹿屋市教育長，牧社会教育課長，山之内補佐来訪。30日，秋山氏（奈良文化財研究所）来訪。</p>



調 査 の 経 過	
2月	<p>縄文時代及び旧石器時代文化層（下層確認調査）。現地保存される部分について盛土作業。型取りした遺構のウレタン樹脂型発送準備。遺構内整理作業（清掃作業）。グリッド控え杭設定作業。発掘器材，器具，遺物搬出作業。各関係機関へ終了の挨拶。3日，発掘現地調査本日をもって全て終了。</p> <p>2日，諏訪主任研究員来訪。</p> <p>4日，王子遺跡整理作業立神・峯崎加わる。遺物注記作業。ウレタン樹脂による型取り遺構プレハブ内への収納。写真ネガ整理作業。トレース作業。レイアウト作業。執筆作業。</p> <p>8日，桑原調査官（文化庁）現地指導。20日，小田富士雄氏（北九州市歴史資料館）遺物・遺構について指導。22日，国分直一氏，小田富士雄氏遺物・遺構指導。</p>
3月	<p>遺物実測，トレース，拓本，レイアウト整理作業。図版及び執筆作業。</p> <p>15日，河口貞徳氏遺物指導。22日，横山浩一氏（九州大学）遺物・遺構。26日，沢田正昭氏（奈良文化財研究所）鹿屋市王子遺跡資料館後処理指導。</p>

### 第3章 遺跡の位置及び環境

王子遺跡が所在する鹿屋市王子町王子及び下祓川町小原は、鹿屋市街地の北東約2kmの北東に広がる標高約72mの笠野原台地北西縁辺部に所在する。

遺跡の位置する鹿屋市は、鹿児島県本土のほぼ中央部にある鹿児島湾を挟んで、東部に南へのびている大隅半島のほぼ中央部に位置している。地形は市街地の北部に高隈山地がそびえ大籠柄岳（1237m）を主峰に横岳・御岳など1000m級の丘陵が連なり、地質は四万十層群と、それを貫く高隈花崗岩から成る急峻で深い森林に覆われ、東部から北部にかけては、鹿児島湾奥に形成された始良カルデラより約22,000年前に噴出といわれる入戸火砕流堆積物（シラス）によって台地が形成されている。この笠野原台地は、肝属川と串良川に囲まれるほぼ二等辺三角形の地形を呈し、東西幅約8km、南北の長さ約13km、面積約75km<sup>2</sup>に及ぶ広大な火砕流台地で、南に向って傾斜するが平均傾斜角は1度未満できわめて平坦であるといえよう。これらの台地は軟弱な非容結の火砕流堆積物のため下刻作用を受けやすく地形も急崖となっている。台地の西側は高隈山地の東斜面を水源とする肝属川や小河川が山地と笠野原台地の間を南流し、鹿屋市街地付近で直角に左流し肝属平野へと達する。これらの河川の浸食作用により河川流域には谷底平野が形成され、ここに水田が営まれ、また鹿屋の市街地が立地している。谷底平野の西側は、鹿屋原台地と呼ばれ、肝属川、大始良川、高須川に囲まれた台地で、その台地中央部には海上自衛隊航空基地がある。この台地の基盤は笠野原台地と同様入戸火砕流堆積物で形成され、その層幅は3～15mと言われ、平均傾斜角は笠野原台地と同様の1度に達しないきわめて平坦な台地面を作り出している。

遺跡の立地している笠野原台地<sup>注1</sup>は、火砕流堆積物が厚く堆積し、さらにローム層、新期火山灰層などが覆いシラス台地と呼ばれ、宝永元年（1704）をはじめ天明4年（1784）には本格的な開発がなされ、花岡堀、鎌田堀、土持堀、伊集院堀、天柄堀などの多くの堀が作られ、これらの台地は地下水の水脈が深く水を得るため深井戸が堀られ、牛馬を使って飲料水を汲みあげていた。これらの深井戸は地表面下約82mまで掘り下げられており、最も低い寿明院（現寿地区）でも30mあったと言われている。近代的な開発は昭和期に入り、笠野原水道<sup>注2</sup>の敷設、笠野原耕地整備事業、高隈ダムの完成とともに笠野原畑地灌漑事業が行なわれて、現在台地は近代化され豊かな農地と変っている。このように水の乏しい台地のため遺跡は湧水に近い末端に営まれたものと推定される。

遺跡は笠野原北西縁辺部に位置している。西側は肝属川による浸食がすすみ約40m以上の懸崖となっている。また低地は高隈山地に源を発する肝属川の浸食によって形成された谷底平野となり、ここに水田が営まれ、近年は土地開発による宅地化が進んでいる。北側には市道小原旭原線が、南側には市道王子火葬場線がほぼ東西にそれぞれ走っている。さらに遺跡地内をほぼ南北に王子原小原線が走り小原旭原線や王子火葬場線とが交差している。

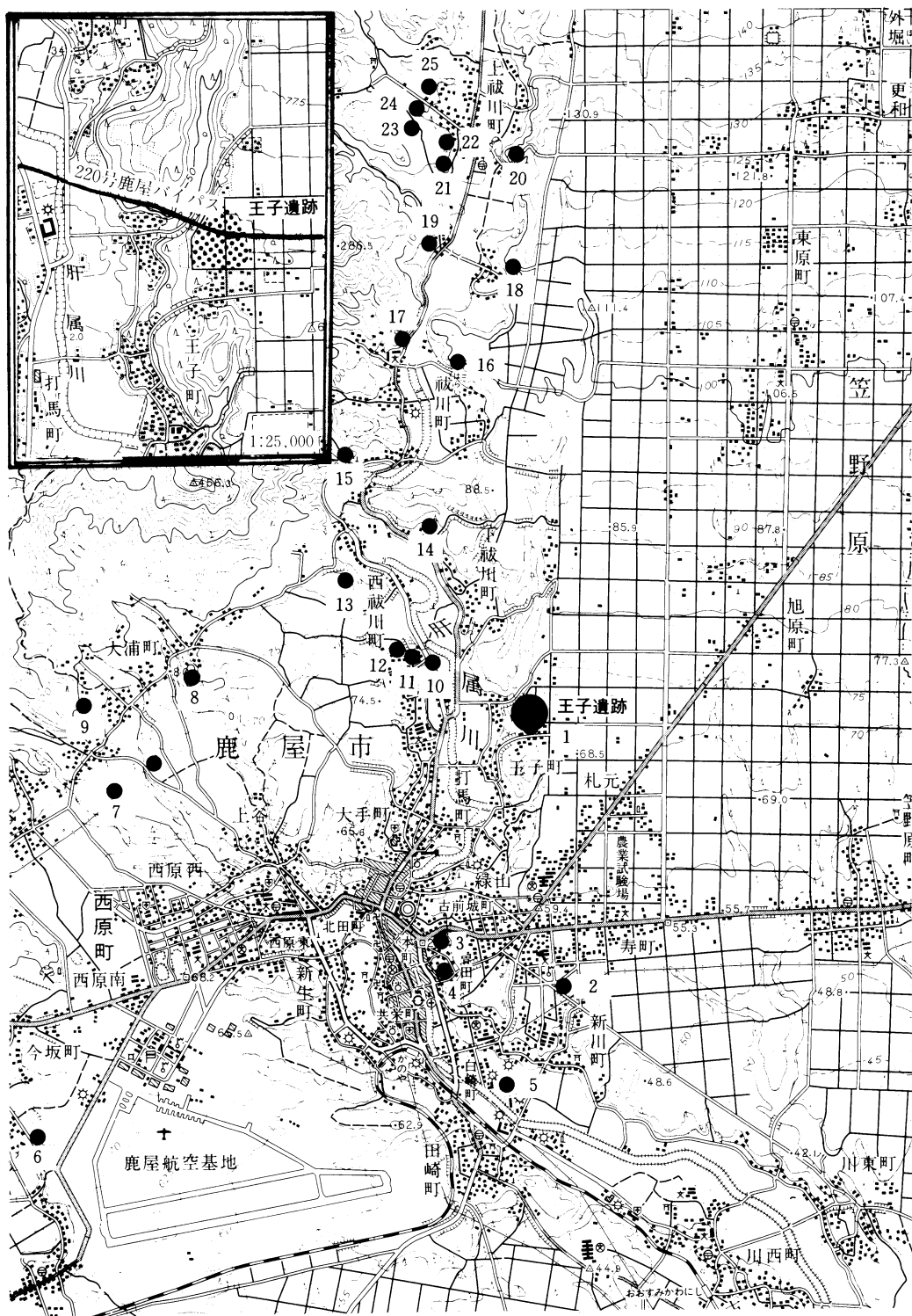


Fig. 1 王子遺跡と位置および周辺遺跡

1:50,000

Tab. 1 王子遺跡周辺遺跡一覧表

注3～7

No	遺跡名	所在地	地形	遺構・遺物	備考
1	王子	鹿屋市王子町王子	台地(畑)	住居跡・掘立柱建物跡(棟持柱付)・土壇・溝状遺構・弥生	本文に記録
2	寿六丁目	〃 寿六丁目	台地	古墳時代の土器片	
3	寿三丁目	〃 寿三丁目	〃	〃	
4	曾田	〃 曾田町曾田	〃	〃	
5	高付	〃 白崎町高付	水田	弥生式土器・成川式土器	
6	野里小西	〃 平野町野里小西	台地(宅地)	縄文式土器(早期)	
7	川の上	〃大浦町松橋川の上	山麓・畑地	古墳時代の遺物	
8	大浦	〃 〃 大浦	丘陵	縄文式土器(早期)・地下水横穴	
9	郷之原	〃 郷之原町郷之原	山麓・畑地	縄文式土器・古墳時代の遺物	
10	西祓川	〃 西祓川町西祓川	水田・微高地	縄文式土器(前期)・集石遺構・弥生式土器・土師器	本文に記録
11	西祓川地下式土壇	〃 〃 〃	微高地	地下式土壇・鉄製短甲・胃出土	出土品のみ県指定
12	薬師堂	〃 〃 薬師堂	台地(縁辺部)	円墳状のマウンド3基・成川式土器	本文に記録
13	神野牧	〃 〃 神野牧	台地(畑地)	縄文式土器(後期・晩期)	
14	右仏頭	〃 下祓川町下祓川	台地(縁辺部)	古墳時代の土器片	
15	中野	〃 祓川町中野	微高地	弥生式土器(中期)	
16	堀之内遺跡群	〃 中祓川町堀之内	台地(縁辺部)	弥生式土器(中期)	
17	山外森	〃 上祓川町山外森	台地	歴史時代の遺物	
18	大窪	〃 〃 大窪	丘陵	縄文式土器(後期)	
19	芝原	〃 祓川町芝原	台地	古墳時代の遺物	
20	上楠原C	〃 上祓川町上楠原	台地(畑)	〃	56年発見
21	上楠原A	〃 〃	〃	集石遺構・方形住居跡・溝状遺構・縄文式土器(早・後期)	1984年調査
22	上楠原B	〃 〃	〃	縄文式土器(早期)	〃
23	丸岡	〃 〃	〃	縄文式土器(晩期)・成川式土器・住居跡溝状遺構	〃
24	水ノ谷	〃 〃	〃	縄文式土器(晩期)・弥生式土器・集落遺構(前期・中期)	〃
25	上祓川	〃 〃 上祓川	〃	縄文式土器(後期)	56年発見

## 〈参考文献〉

1. 鹿児島県土地分類基本調査「鹿屋・志布志」国土調査 1971
2. 鹿児島県書店組合 鹿児島県風土記「風土と文化」3. 1982
3. 文化庁『全国遺跡地図・鹿児島県』1975
4. 鹿児島県教育委員会「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(23) 1982
5. 鹿児島県教育委員会「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県埋蔵文化財調査報告(25) 1983
6. 鹿屋市教育委員会「上祓川遺跡群」鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 1984
7. 鹿屋市郷土誌 1967



Fig. 2 王子遺跡地形図

## 第4章 調査の概要

本遺跡は、当初、伐採作業や杭打ち作業から実施した。その後、排土処理等を考慮し、西側台地縁辺部の表土層の除去から弥生時代中期相当の遺物包含層の調査を実施し、中央区へと移行した。また、併せて東区の確認調査を実施した。その結果、西区台地縁部付近は、養鶏所や土地造成のため、すでに遺物包含層の削平及び攪乱がみられたが、C-3区、B~E-5区、F-7区から以東29区にかけて遺物の包含をみた。ただし、西区北西側路線幅際にはⅢ層上面で溝状遺構を検出した。これらの調査区内には、笠野原畑地灌漑用のパイプ埋設、花木植栽、道路敷、保存用のイモ穴、基盤整備事業の影響を大なり小なり受けている所がみられた。遺物は（Ⅲ層上面から約30~40cm上位）の一面に土器小破片が散布したような状態で出土し、集中した所も認められた。発掘調査の進展につれ、本遺跡の遺構は、西区崖端部から約60mのB~F-6区からC~F-25区の東西幅180mにかけて、竪穴住居跡（以下、住居跡とする。）27基、掘立柱建物跡14棟（棟持柱付のもの6棟、掘立柱に土壇をもつ遺構2棟を含む）、土壇4基、溝状遺構2条などの総計47の遺構を検出した。これらの遺構の中にはⅢ層上面での検出も多い。遺構のうち住居跡は、ベッド状張り出し遺構をもつもの、障壁をもつものなどがある。掘立柱建物には、棟持柱をもつもの、土壇をもつものを検出した。遺物のうち土器は、甕形土器（煤の付着を認める破片が多い。）大型甕形土器、壺形土器、鉢形土器が主体で、他に蓋形土器、手捏ね土器、石器には磨製石鏃、砥石を主体に樹皮布叩石、叩石、凹石、研磨のみられる礫、石斧、石錐、打製石鏃、鉄製品には鈍、刀子、土製品には勾玉、その他に鍛冶滓、自然遺物には炭化物（棒状を含む）など多量の遺物が出土した。特記する遺物には、在地の山ノ口

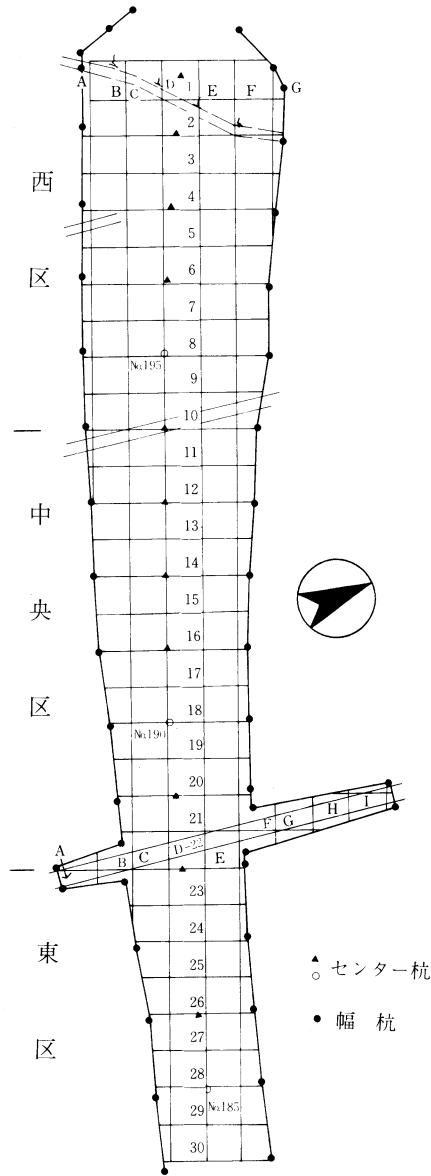


Fig. 3 王子遺跡グリッド図

式土器を中心に、北九州系の影響を受けたものや凹線文をもつ壺形土器、矢羽根透しをもつ高坏など瀬戸内系の土器が供伴した。また、樹皮布叩石、鈍、鍛冶滓などの資料を得た。

本遺跡は、大規模で学術的見地から貴重な資料を提供した。このため遺跡の全面的保存に伴う路線変更が提起された。王子遺跡の保存について、県文化財保護審議会は会合を重ねるとともに意見集約を行った。その結果、保存科学処理、映像記録、市道及び現検出遺構の下層部分の確認作業、遺構の一部の現地保存管理作業、一部遺構について移設などの事業を実施した。特に、現検出遺構の下層の調査で、今まで弥生時代の単純遺跡とされていたが、縄文時代早期相当の遺物包含層の残存部を確認し、調査を実施した。

発掘調査は、昭和56年10月12日から昭和59年2月4日までの3年余の長期間を費して終了した。

## 第1節 層序

王子遺跡における地表面は、ほぼ平坦面で、笠野原台地北西縁辺部に位置し、西側は約40m以上の懸崖となり、東部は平坦面が続く地形である。

地層は、表層から基盤層の入戸火砕流（I T O）までX層の堆積を確認した。標準的層序は遺跡の中央付近でみられ、西区縁辺部や東区の一部は、土地基盤整備事業などの土地造成、建造物、畑地灌漑パイプ埋設、花木の植栽などの影響を受けII層遺物包含層までの保存状況は良好でなく、特に、東区は植栽のためIII層上位付近まで達している所が多い。畑地灌漑用のパイプ埋設による掘込は、VI層下部まで達している。発掘調査では、III層以下の土層の保存状況は良好である。遺物包含層はII層であり、II<sub>c</sub>層は遺物の出土を認めない。II<sub>c</sub>層上面が当地の生活面と思われる、検出遺構は黒土層から掘り下げ、下位の池田降下軽石を貫いて、アカホヤ層に達する。黒土層での遺構の検出は土層の精密な観察で、黒色土中で遺構の検出ができた。弥生時代遺構検出後の下層の確認調査では、VI<sub>b</sub>層上位より縄文時代早期相当の文化層を検出した。ここで、遺跡全体の基本的層序を説明し、こまかな差異については、各層などの条件により確実に分層するものは、a、b、cに区分し、その他の不明ものは独立して扱った。

また、当遺跡では、調査班の肉眼観察による土層区分だけでなく、II層、III層について分析もあわせて行ったが、記述は発掘調査班による土層区分を中心に行うことにする。

I層 表土層であり、現在の耕作土で、表面は含水率が低くなれば明褐色を呈する。本来の厚さは約30cm前後で、場所により層厚にひらきがある。土質は砂壤土で腐植を含み、苦土や石灰など欠乏する。

II層 本遺跡の弥生時代の遺物包含層である。本来は平均して40cm前後で、I層より若干多くの腐植土を含み、暗黒色火山灰土で光沢を呈する。本遺跡では約40～80cmを測り、地点により3分層される。上部のII<sub>a</sub>層は黒色で軟質気味、下部のII<sub>c</sub>層は暗黒色を呈し硬質である。II<sub>b</sub>層は、特に、C・D-23～25区付近で判明し、他地区でも小範囲に認め、黒色土に多くの茶褐色を含み砂壤状を呈する。これらの層に弥生時代中期相当の遺物を包含する。II<sub>c</sub>層は遺物を認めない。II<sub>a</sub>、II<sub>b</sub>、II<sub>c</sub>層についてみれば、「II<sub>a</sub>層

には黒雲母を認め、Ⅱ<sub>a</sub>層はⅡ<sub>b</sub>層に比べ、斜長石に乏しく、石英・クリストバル石に富む。Ⅱ<sub>c</sub>層がⅡ<sub>b</sub>層に比べ、石英・クリストバル石のピークが強く、斜長石のピークが弱い。反対に、Ⅱ<sub>b</sub>層がⅡ<sub>c</sub>層に比べ、斜長石のピーク強く、石英・クリストバル石のピークが弱いとのX線回析パターン<sup>注1</sup>の識別がなされる。また、開聞岳火山源と判断され、開聞岳降下火山灰と称することが妥当である。」との見解がなされている。また、このⅡ層について、「黒色土を水洗して、鉍物<sup>注2</sup>をみると、a、シソ輝石 b、カンラン岩、c、斜長石を含み、岩片がきわめて多いのが特徴」との分析がなされている。このⅡ層は、黒ニガとか黒ボクと呼ばれ、Ⅱ<sub>c</sub>層上面付近に当時の生活面が想定され、本遺跡の遺構

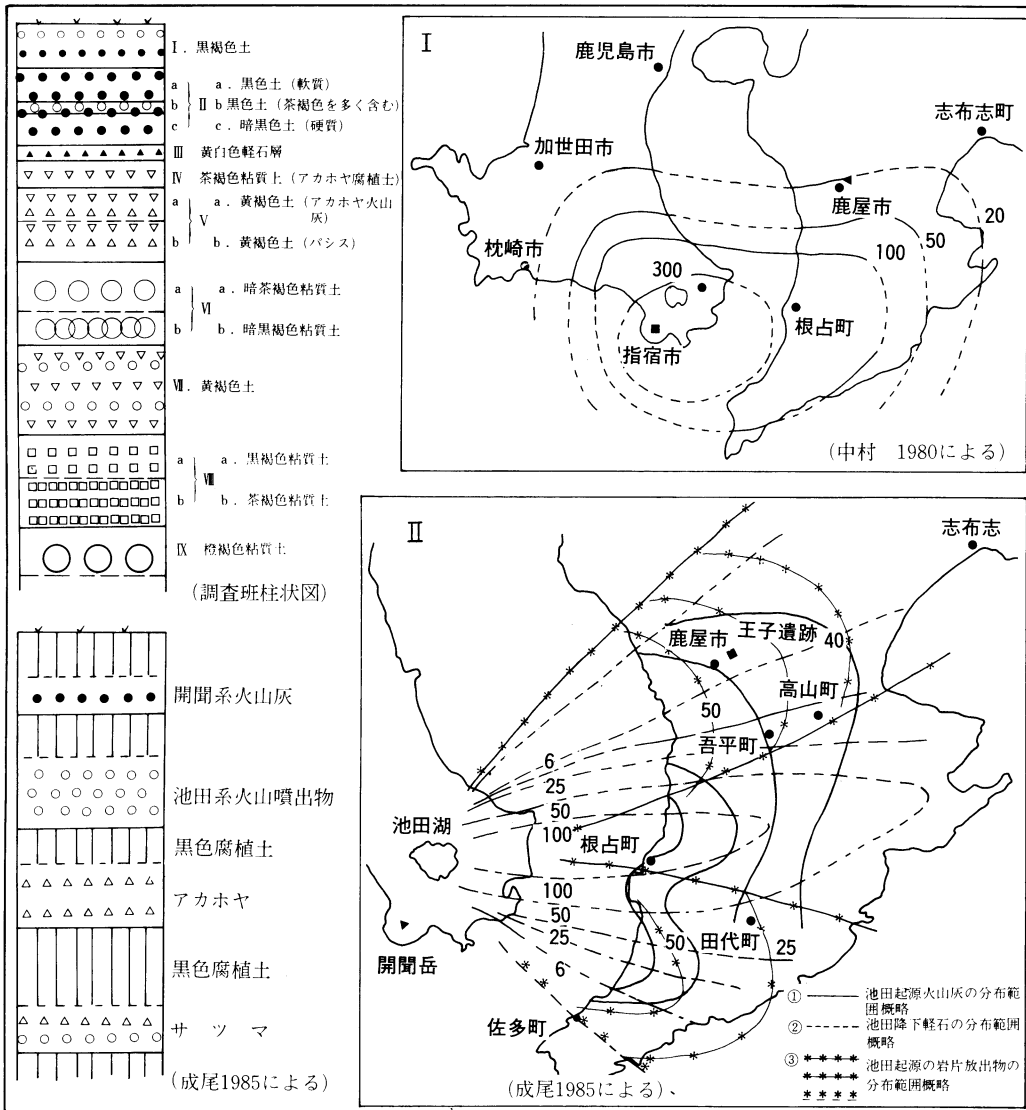


Fig. 4 王子遺跡土層柱状模式図及び火山噴出物範囲概略



の掘方を見る。調査区の西側台地縁辺部付近や東区は、Ⅱ<sub>c</sub>層の大半まで攪乱や削平を受けている。

Ⅲ層 黄白色軽石層で、ほぼ一直線状に台地を覆っている。層幅は薄く明確でないが軽石と角張った礫（径2～3cm）があり、軽石は池田降下軽石で、岩片は別の池田湖起原の岩片放出物で、Fig.4、Ⅱ-(3)は最初期のもので、大隅半島の二方向に降下し、また、岩片の種類も尾下スユリアのものとは異なる<sup>注2</sup>との見解である。池田降下軽石は、今から約4,500年前ごろのものである。黄白色軽石の軽石は、「普通角閃石を含む普通角閃石石英安山岩質で、池田カルデラ源池田降下軽石または池田軽石流、池田火砕流中の軽石と完全に一致し、明らかに池田カルデラ源のものであると断定し、池田降下軽石または池田軽石流と称することが妥当である。」<sup>注1</sup>との見解がなされている。

Ⅳ層 茶褐色粘質土でアカホヤの腐植土である。本来ならばⅣ層とⅤ<sub>a</sub>、Ⅴ<sub>b</sub>層を同一層として扱い、a、b、c層に分層するべきであったが、当時の調査班の肉眼観察層序で報告する。

Ⅴ層 橙色および黄褐色を呈する火山灰で、当地方ではアカボッコとかアカボンゴと呼ばれ、約30～40cmの厚さで堆積している。このアカホヤは、「降下軽石、火砕流、火山灰の三層から形成され、火砕流は薄く（5～10cm）、この王子付近が火砕流の致達限界付近に相当し、アカホヤの二次堆積がみられないのは、上部に池田起源のものが厚く堆積した。」<sup>注2</sup>との意見もある。この層は二分層され、Ⅴ<sub>a</sub>層が火山灰（Ah）で、Ⅴ<sub>b</sub>層が降下軽石層であり無遺物層である。このアカホヤ層は鬼界カルデラを給源とする火山灰層に想定され、絶対年代はB.D 6050～6400年に堆定されている。

Ⅵ層 二分層され、Ⅵ<sub>a</sub>層は暗茶褐色粘質土、Ⅵ<sub>b</sub>層は暗黒褐色粘質土である。本来ならば、Ⅴ層とⅥ層に不詳の火山灰で茶褐色粘質土を認めるが、調査班ではⅥ層に含め、Fig.5では破線で分離したことを付記する。この層は縄文時代早・前期の遺物包含層である。D・E-19・20区のⅥ<sub>b</sub>層上部付近に、早期相当の土器破片と集石遺構を検出した。

Ⅶ層 黄褐色で、約18～26cm前後の厚さで全面に認め、桜島降下軽石、火山灰は「サツマ」と呼ばれているもので、下部は降下軽石、上部は火山灰である。年代は約11,000年前のものである。

Ⅷ層 二分層され、Ⅷ<sub>a</sub>層は黒色粘質土、Ⅷ<sub>b</sub>層は茶褐色粘質土である。細石器文化層相当。

Ⅸ層 橙褐色粘質土で遺物層である。以下、シラス（始良 Tn 火山灰）へと続く。

注1.大庭昇，富田克利，山本温彦 池田湊宏，猪目哲也 「鹿屋市王子遺跡発掘現場の“暗黒色腐食土”Ⅱ<sub>c</sub>、Ⅱ<sub>b</sub>およびⅡ<sub>a</sub>の物質構成・噴出源・識別および軽石層（Ⅲ）の噴出源・火山層序対比」1983・5。

注2.徳之島高校成尾英仁氏の御指導による。

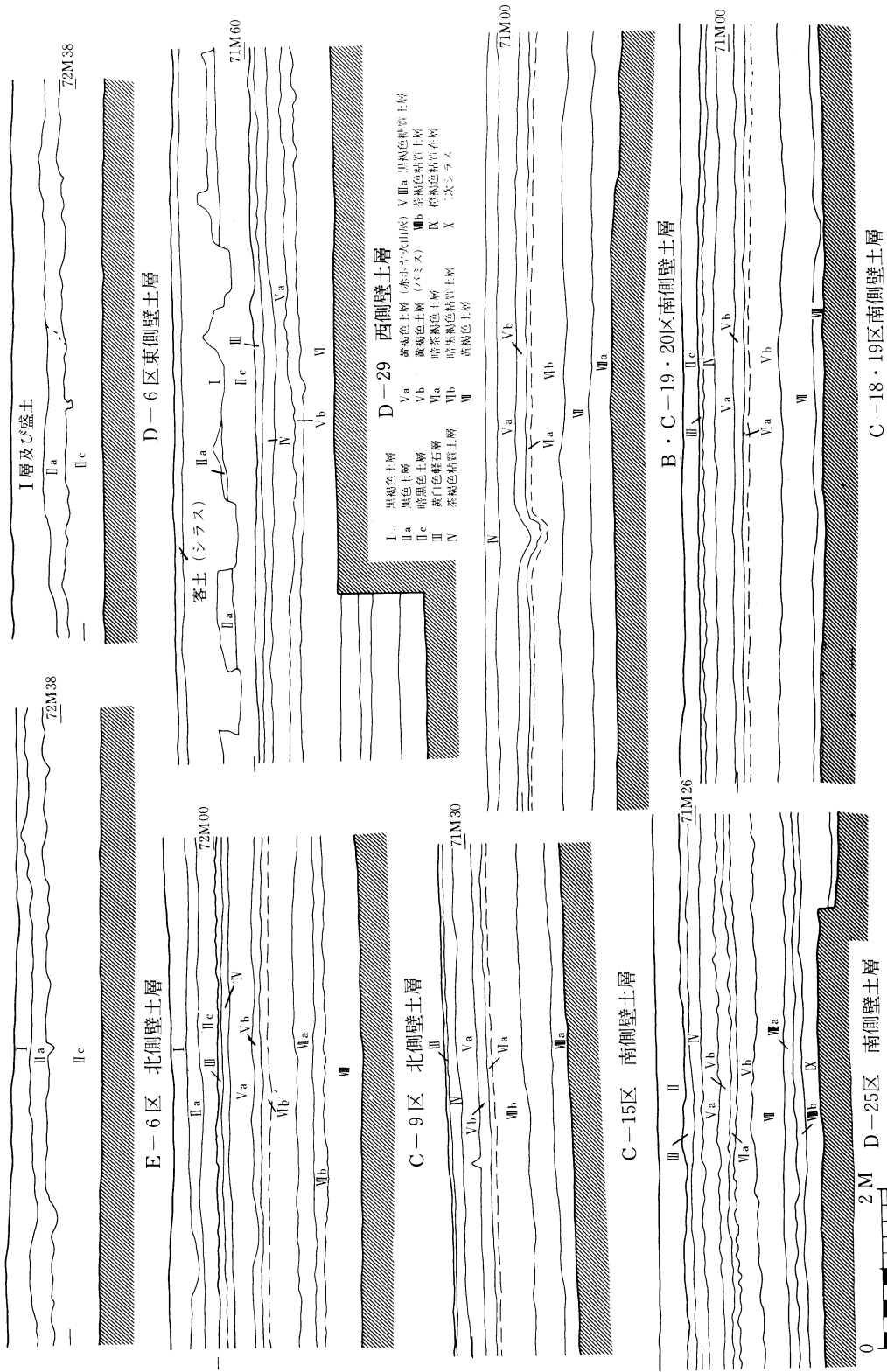
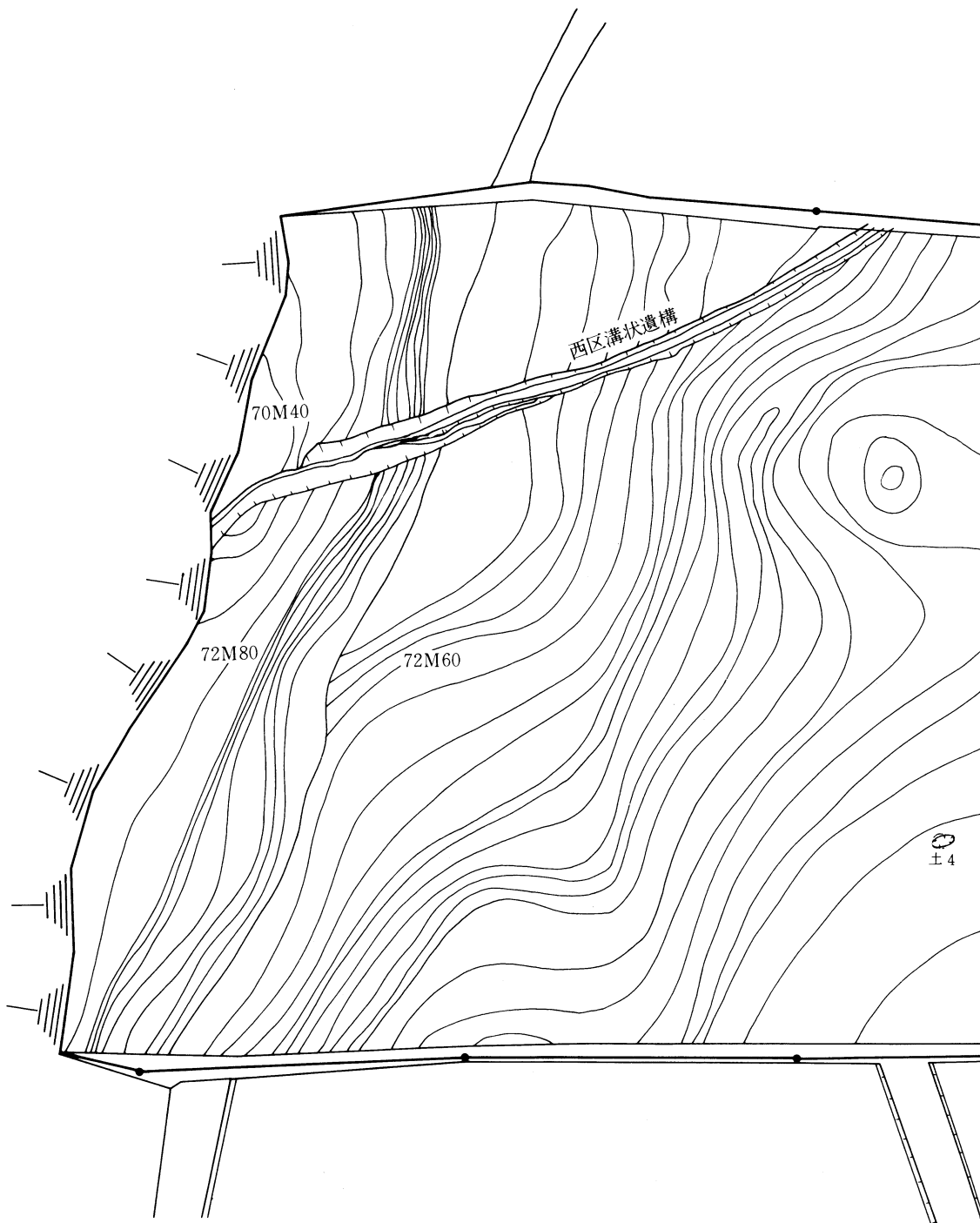
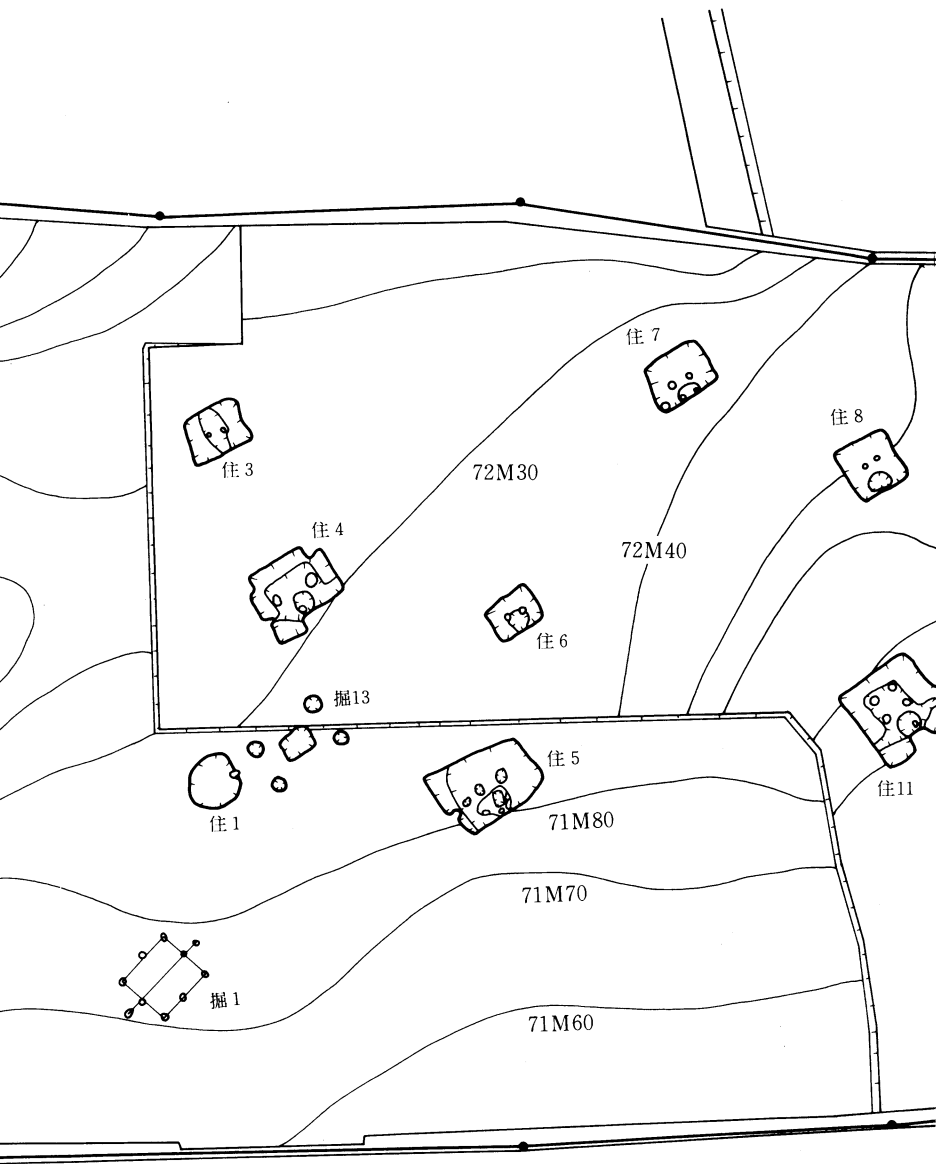


Fig. 5 王子遺跡土層図





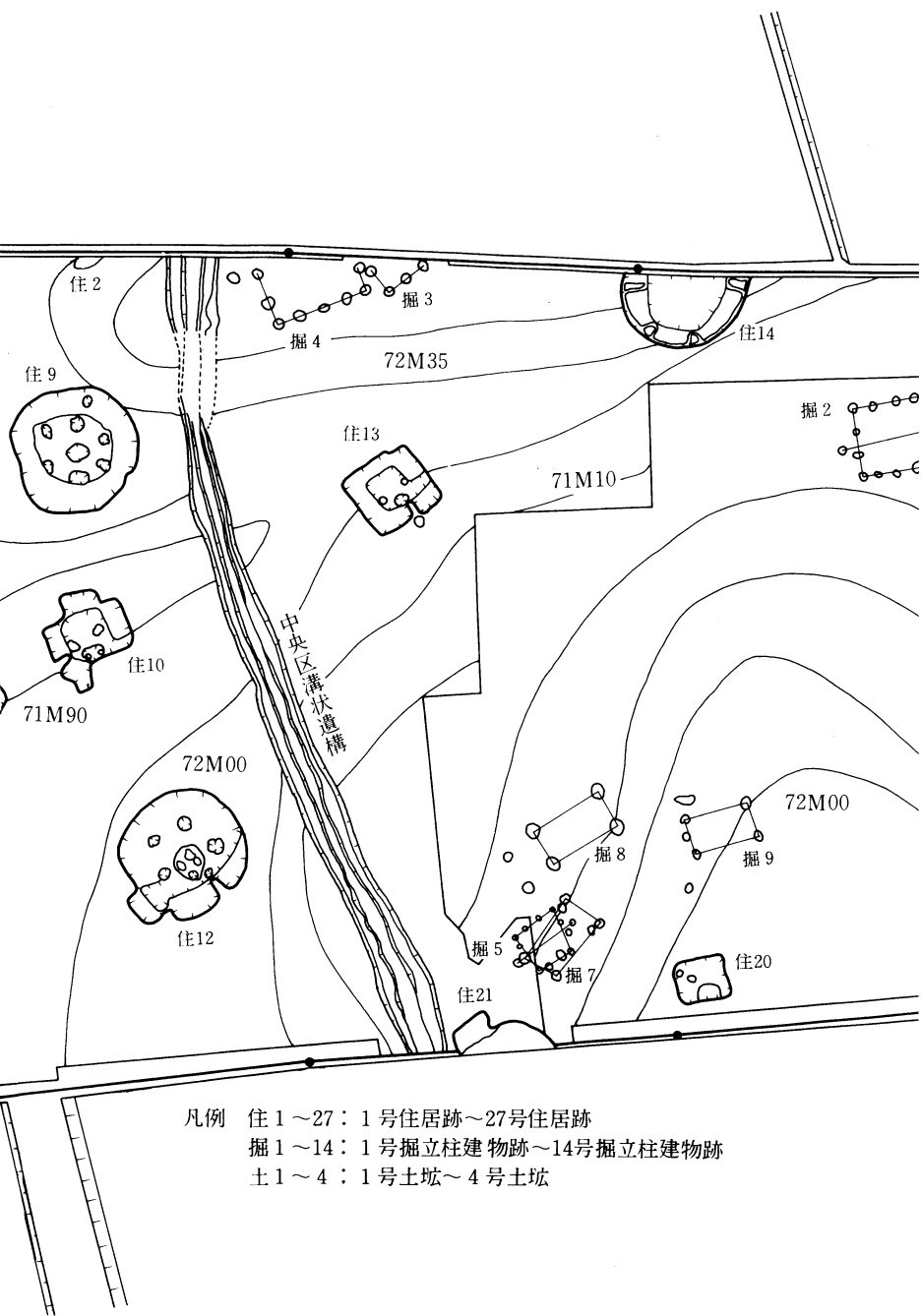
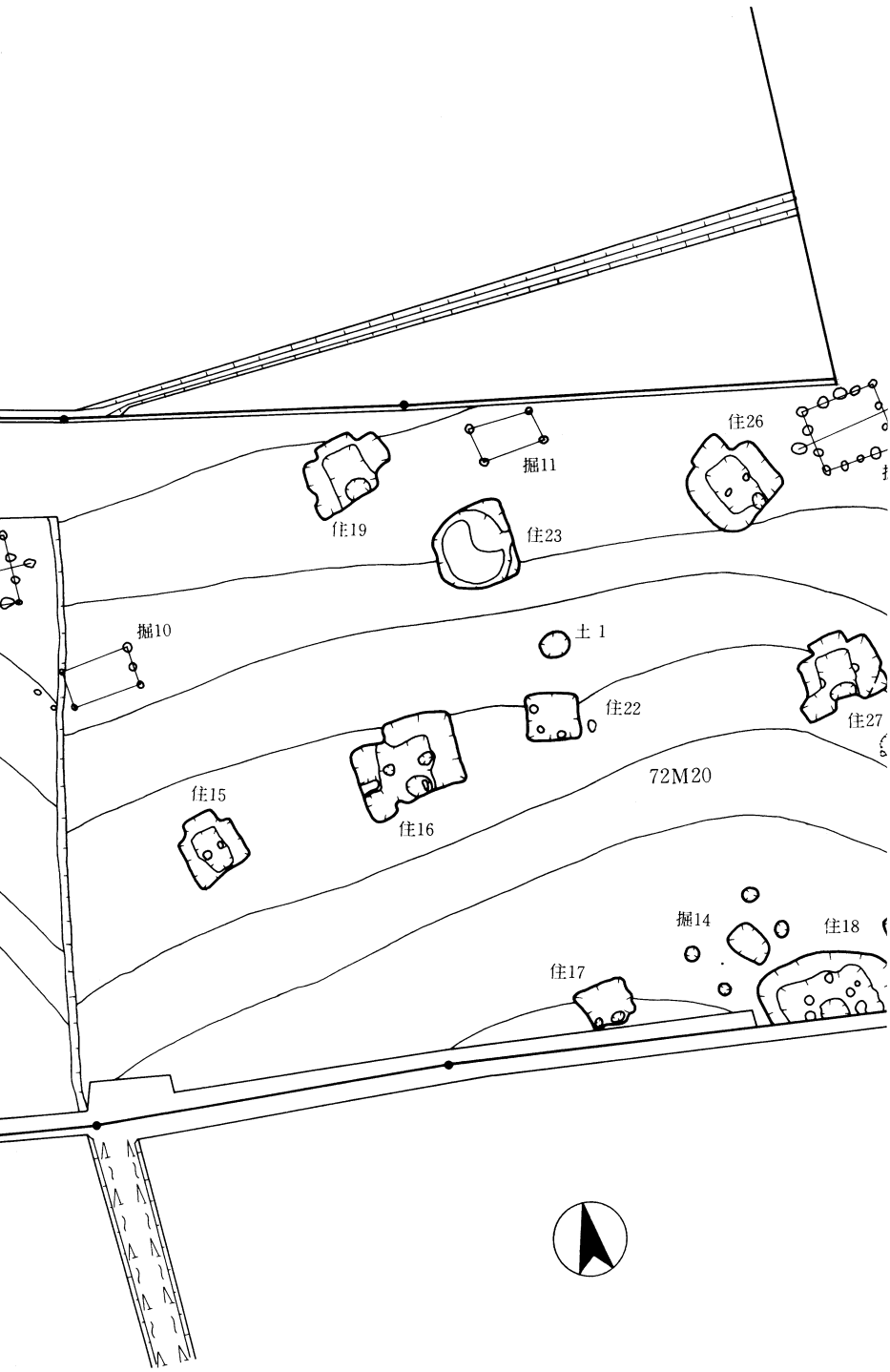
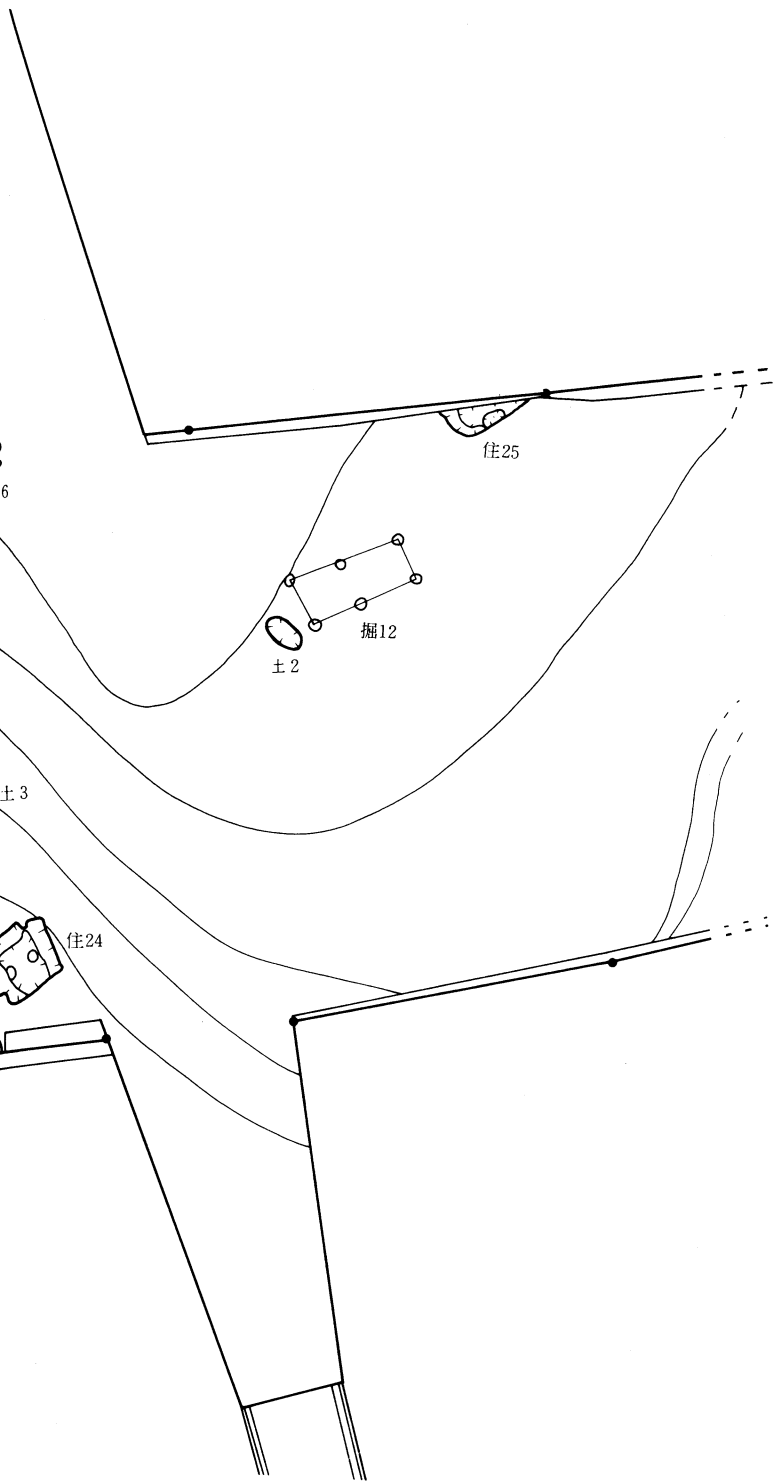


Fig. 6 王子遺跡遺構配置図





## 第5章 弥生時代の遺跡

王子遺跡で検出された弥生時代の遺構は、竪穴式住居跡27基、掘立柱建物跡14棟〔掘立柱建物跡(棟持住付6棟)、掘立柱建物跡6棟、掘立柱建物に土壇を伴うもの2棟〕、土壇4基、溝状遺構2条などを検出した。さらに鹿屋バイパス建設予定地外に遺構の拡がりと考えられる。

### 第1節 竪穴式住居跡 (Fig. 7~100, P.L. 4~21)

住居跡は、調査区西側7区から東側24区までの約180mの範囲に27基を検出した。うち5基については鹿屋バイパス建設予定地の路線外へのびている。さらに住居跡群は拡がるものと類推される。

王子遺跡の住居跡は、その形状から方形と円形とがある。方形の住居跡は上屋を支えるための2本の掘立柱と中央南側壁際に設けられた土壇からなる。方形及び四隅のコーナーを円く潰した隅丸方形住居跡、外側に張り出し、中央の床面から一段高く作られたベッド状張り出しのある住居跡を検出した。円形の住居跡は、支柱穴が現存で5~7本の掘立柱と中央に設けられた土壇からなる住居跡が判明している。

#### ① 1号住居跡 (Fig. 7, 11)

発掘調査の最西部より以東約60mに位置する。4号住居跡との最短距離は北東約6.8mで、13号掘立柱建物跡まで約1.6m、C-7区のⅢ層上面で検出された。

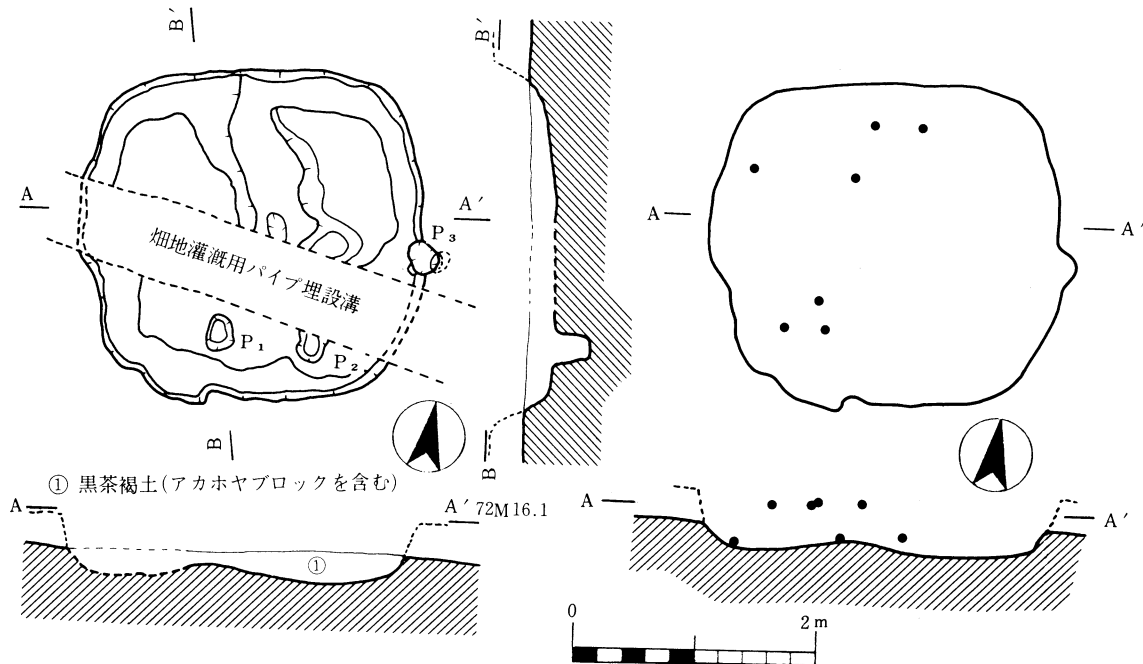


Fig. 7 1号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態



長軸300cm，短軸275mの略円形を呈し，遺構の検出面からの深さは約25cmである。畑地灌漑用パイプ埋設時に削平を受け，床面はⅣ層で，部分的に貼り付け調整を認める。柱穴は新しい溝により一部削平を認めるが，現存で3本検出し， $P_1$ ：径29～32cm，深さ31cm， $P_2$ ：径22～25cm（現存），深さ26.8cm， $P_3$ ：径28～30cm，深さ58cmで斜めの掘込である。

なお，本住居跡の床面からの出土遺物は，数片の土器破片と炭化物の微片で，埋土中からの出土も数点で，他の小破片は図化できなかつた。

### ② 2号住居跡 (Fig. 8)

9号住居跡との最短距離は北側約4.0mで，中央部の溝状遺構まで約6.3m，F-11区Ⅱ層で検出された。

本住居跡は，その大半が予定地外へのびるため不詳である。現存の遺構での状況は，長軸205cm，短軸111cm，遺構の検出面からの深さは62cmを測り，小規模で略方形形状を呈するため，13・14号掘立柱建物跡と同様の遺構を想定し，柱穴の検出に努めたが，検出出来なかつた。本遺構は南側及び南西部に張り出しをもつ住居跡の可能性が考えられる。床面はⅣ層の上位付近で，切り出しによる調整を認めた。なお，住居跡内埋土より土器小破片を出土したが，図化出来るものは少ない。

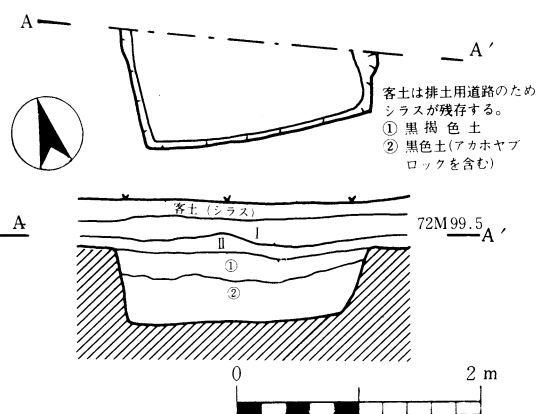


Fig. 8 2号住居跡実測図

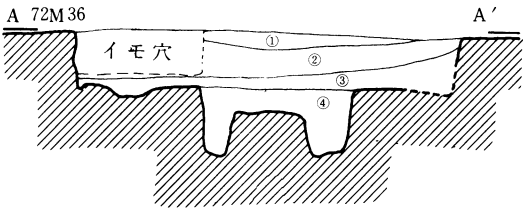
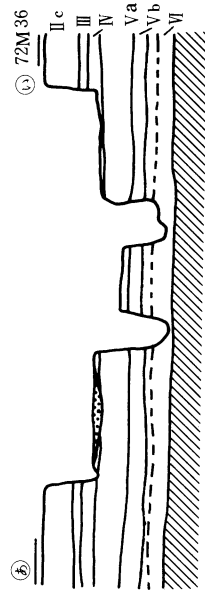
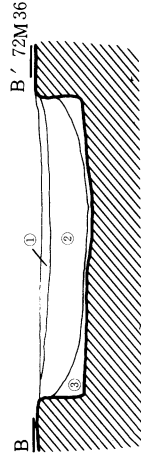
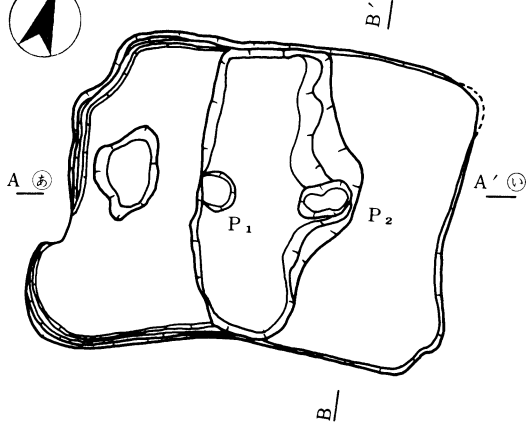
### ③ 3号住居跡 (Fig. 9～11, PL. 5)

発掘調査の最西部より以東約60mで，本遺跡の住居跡群最北西端部に位置する。4号住居跡との最短距離は南側約5.7mで，E-7区Ⅱ層中で検出された。

長軸350cm，短軸258mで，遺構検出面からの深さは46.0cmを測る。主軸の方位はN-83.5°-Eをとる。本住居跡の平面プランは略方形形状を呈し，南西隅と南東隅は丸味をもち，西側辺の中央部より北側付近は丸味を帯びながら若干突き出し，南側辺と東側辺は若干内側へはいり込むような形状を呈する。

主柱穴は2本で，西側：径29～32cm，深さ57cm，東側：径27～45cm，深さ55cm，心心距離は90cmである。床面は一部に貼り付け調整を認めた。主柱穴を取り囲むように北壁中央部から南壁中央付近にかけて略長方形の掘込を認め，床面との北高差は約20cm前後を測る。西側床面の北壁側の一部から西壁側のほぼ中央部にかけて幅6～7cm，深さ5～6cmの壁帯溝を検出した。

なお，本住居跡の出土遺物には，大型甕形土器・甕形土器・壺形土器・鉢形土器などがあり，大型甕形土器は二か所に分散し，埋土中にみられ底部を欠く。



- ① 黒褐色土で粒子が荒く含水率が低い
- ② 黒色土で軽石を含み含水率が高い
- ③ 黒色土で含水率が高く、アカホヤのブロックやパシスを含む
- ④ ③と同じで、アカホヤのブロックが多い

貼り付け調整

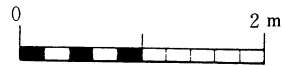
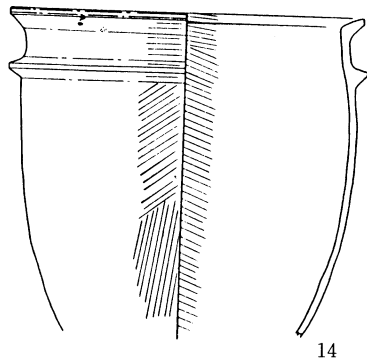
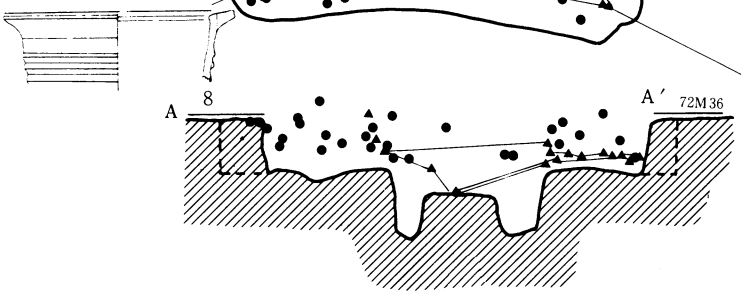
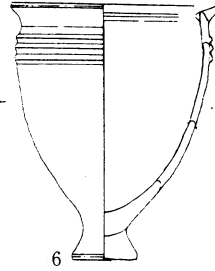
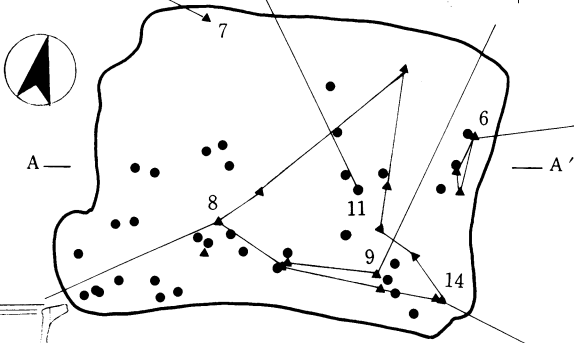
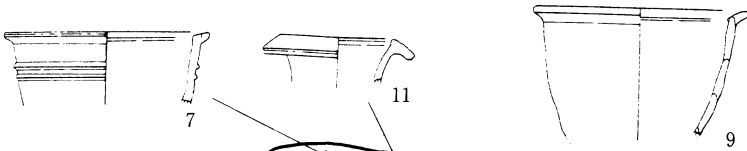


Fig. 9 3号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

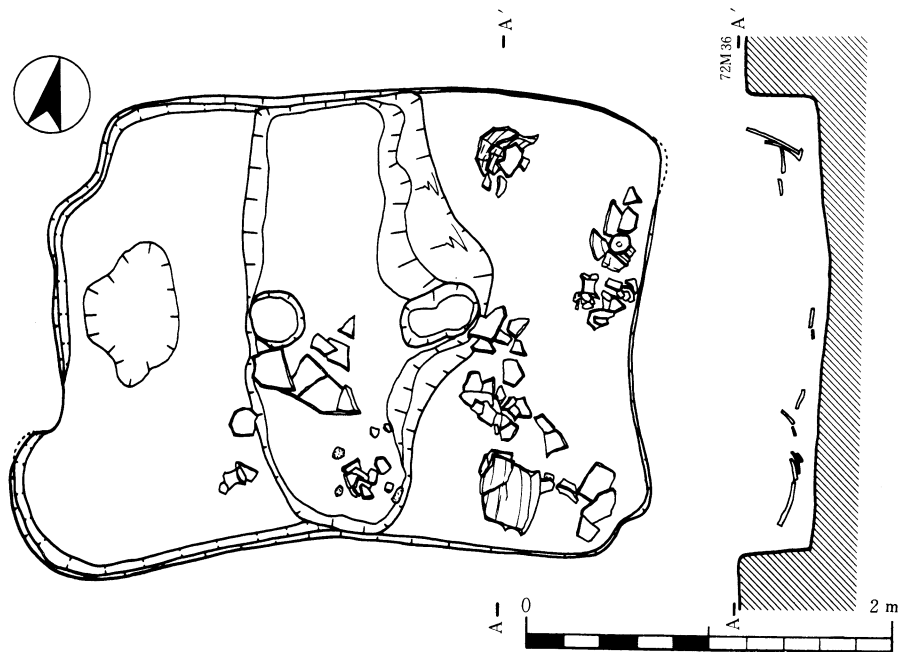


Fig. 10 3号住居跡内遺物出土状態

Tab. 2 1・2・3号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
1	PL. 29	壺 口縁部	①(722)	茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は平坦面を作る	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
2	〃	甕 胴部		茶褐色	Q P L	現存で三条の断面三角形貼付突起を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位の刷毛などで調整で、内面は指頭圧調整後の横位の刷毛などで調整である。
3	〃	甕 底部		褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は短かく、あまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	縦位及び横位の刷毛などで調整である。
4	〃	甕 口縁部		暗褐色	Q P L M	逆L状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹み、口縁部内側には張り出しを作る。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
5	〃	甕 口縁部		暗褐色	Q P L	口縁部端面は凹む。小破片のため形状は不明で、貼付け部より剥離している。煤の付着を認める。	横位の刷毛などで調整である。

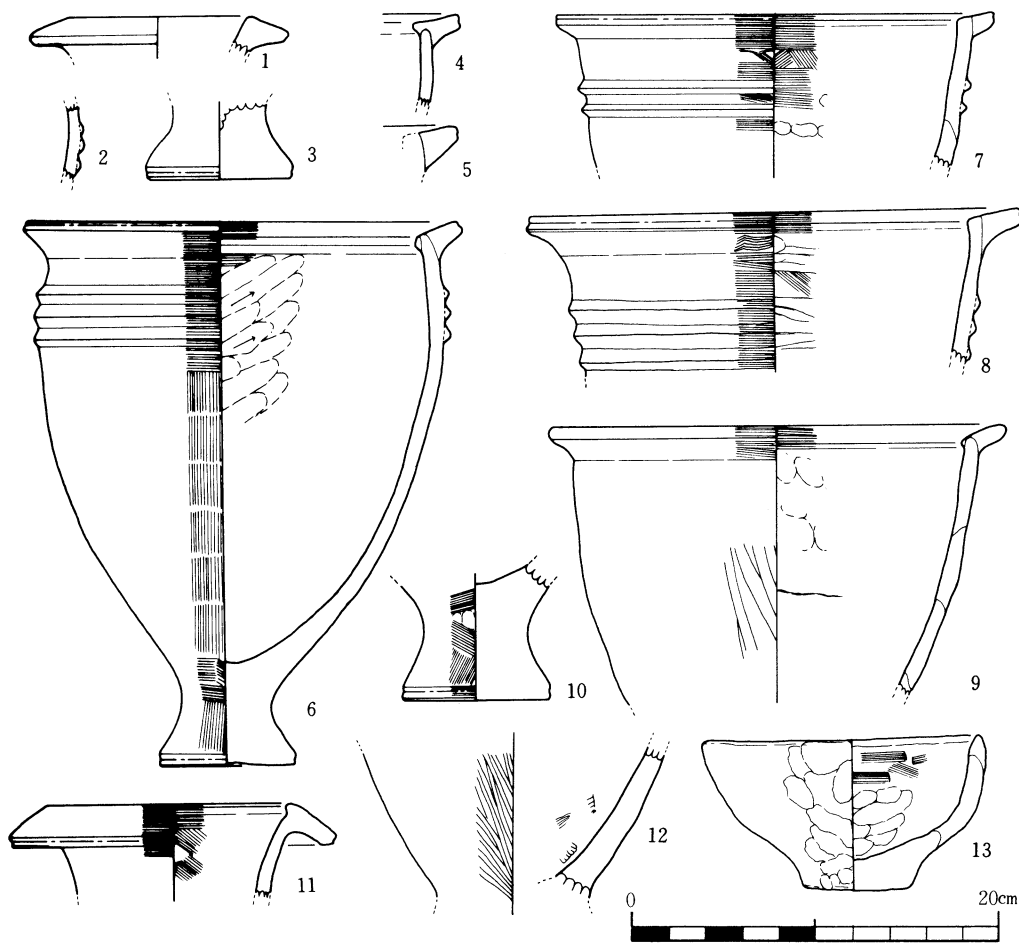


Fig. 11 1・2・3号住居跡内出土遺物実測図(1)

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
6	PL 29	甕 完形品	①23.8 ②29.8 ③22.6 ④7.4	暗褐色	Q P L	充実した脚台付の甕形土器で、逆さの釣鐘型で、口縁部は内湾し、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は三角突帯付近まで横位、突帯より下位は縦位、底部付近は横位、斜位及び縦位の刷毛などで調整で、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
7	ク	甕 口縁部 胴部	①23.9 ③21.4	暗褐色	Q P L	胴部よりやや外方気味に直線的に立ち上がりながら口縁部を作り、逆し字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作る。二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後、横位及び斜位の刷毛などで調整を認める。
8	ク	甕 口縁部 胴部	①(26.8) ③(22.4)	褐色	Q P L	胴部よりやや外方気味で直線的に立ち上がりながらわずかに内湾する口縁部で、逆し字状に外反する。口縁部端面は凹み、口縁部内側にわずかな張り出しを作る。現存で三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整を認める。

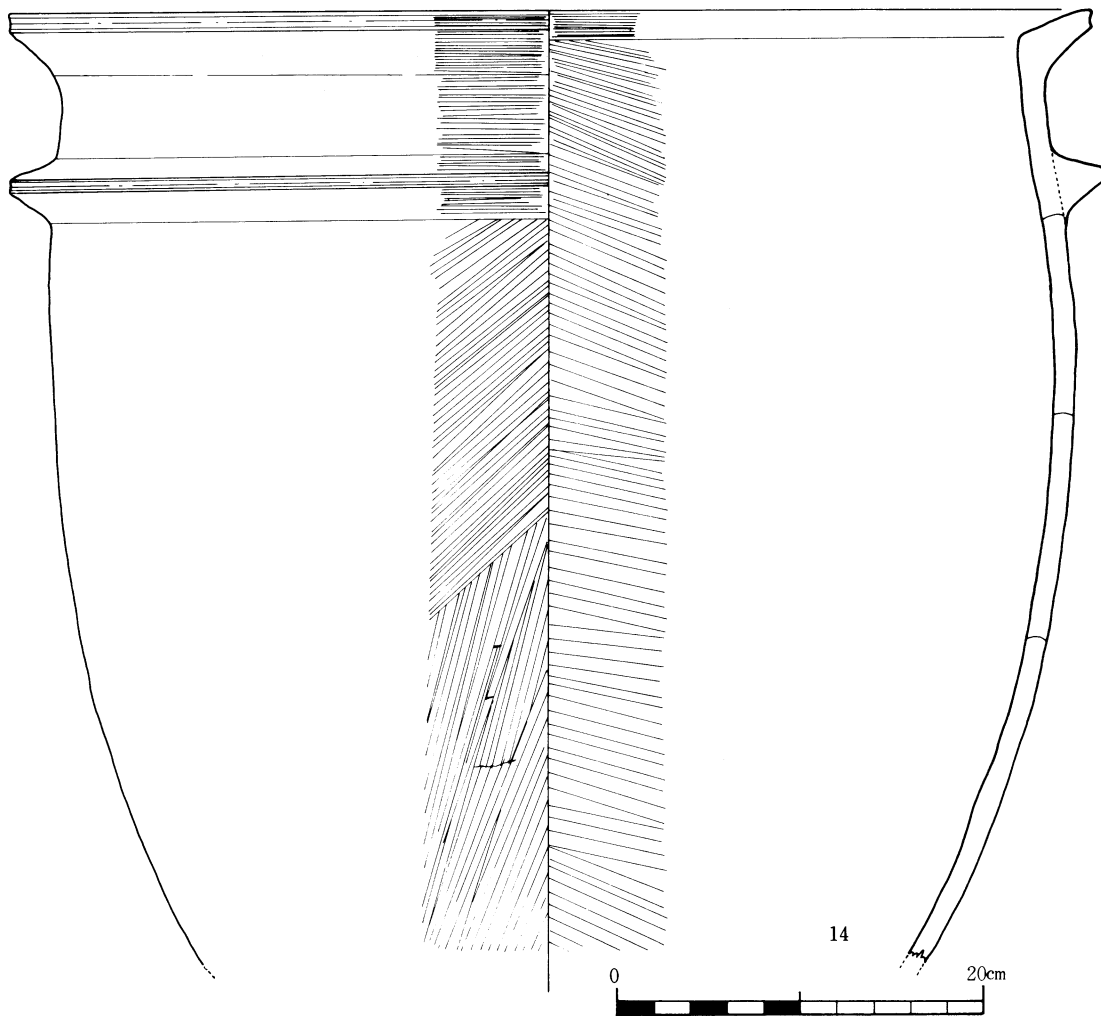


Fig. 12 3号住居跡内出土遺物実測図(2)

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
9	PL. 29	甕 口縁部 胴部	①24.8 ③21.0	暗褐色	Q P L	胴部よりやや外方気味で直線的に立ち上がりながら口縁部をつくり、くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は丸味を帯びる。口縁部内側にはわずかな張り出しを作る。突帯はもたない。煤の付着を認める。	外面は横位の刷毛などで調整が見られるが、胴部より下位は篋磨きで、内面は横位などで及び指頭圧調整である。
10	〃	甕 底部	④ 8.0	褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は長くあまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈す。	指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。
11	〃	壺 口縁部	①(17.8)	暗茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む、口縁部内側には張り出しを作る。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
12	PL. 29	甕 底部付近		褐色	Q P L M	充実した脚台のつく底部付近と思われる。煤の付着が認められる。	外面は磨きが認められ、内面は磨減しているが、部分的に斜位の刷毛などで調整を認める。
13	ク	鉢 完形品	① 6.8 ② 8.2 ④ 3.0	灰褐色	Q P L H	底部は平底で外方へ大きく開きながら直線的に立ち上がり口縁部を作る。口唇部は丸味を帯びる。	内・外面ともに指頭圧調整痕を残す。内面には斜位及び横位の刷毛などで調整を認める。
14		大型 甕 口縁部 胴部 下位	①59.0 ③55.8	赤茶褐色	Q P L M	胴部はわずかに脹らみ、わずかに内傾する口縁部である。口縁部はくの字状に外反し、口縁部端面は凹む。口縁部外側直下には台形状貼付突帯を廻らし、突帯端面は凹む。	外面は口縁部から突帯まで薄い横位、胴部まで斜位で節目状で痕跡がうすく胴部下位は縦位の刷毛目状で比較的あらい。内面はあらい刷毛目状であるが、わずかに斜位から横位方向にその痕跡が残る。

#### ④ 4号住居跡 (Fig. 13~15, PL. 6)

発掘調査の最西部より以東約65mで、住居跡群の西端部付近に位置する。3号住居跡との最短距離は約5.7mで、6号住居跡まで7.8m、13号住居跡まで7.8cm、13号掘立柱建物跡まで3.1mを測り、D・E-8・9区のⅡ層中で検出された。

長軸475cm、短軸463cm (ともにベッド状張り出し部を含む) を測り、主軸の方位はN-80°-Eをとる。主柱穴は2本で、西側：径40~55cm、深さ36cm、東側：51~60cm、深さ49cmで、中心距離は228cmを測る。遺構検出面からの深さは73cmで、ベッド状遺構まで45cmである。

本住居跡の平面の形状は、基本的には長方形を呈し、北壁、西壁及び南西隅にはベッド状張り出しを認める。ベッド状張り出し部は、北壁：347×95~110cm、西側：90×190cm、南西側：173×107cmを測る。東壁際には90~100×100cmのベッド状遺構を検出する。ベッド状遺構の床面はⅣ層上部やⅤ層中に造られ、北側に1か所、南西側の壁際に3か所の浅い掘込を認め、西側及び北側ベッド遺構は連続する。床面との比高差は約20cmで、南西隅側は約16cmを測る。北側、西側及び東側ベッド状遺構や床面は貼り付け調整され、床面はⅤ層下位である。各ベッド状遺構と南東隅から東側中央付近にかけての壁際には、幅約5~10cm、深さ約4~7cmの壁帯溝を検出した。住居跡南側中央壁際には、115×110cm、深さ31cmの略円形の土壇を認め、土壇内には柱穴状の掘込を検出した。主柱穴及び土壇内の柱穴状の掘込はⅣ層中位から下部付近まで達し、比較的硬質な層まで掘込み、北側、西側及び東側ベッド状遺構はⅤ層上位、床面はⅤ層下位付近で、比較的軟質なために貼り付け調整を認める。

なお、本住居跡の出土遺物は床面からの出土はあまりみられず、埋土中より大型甕形土器・甕形土器・壺形土器などの破片が出土した。甕形土器は床面より約15cm上位の埋土より出土し、器面には煤の付着を顕著に認める。

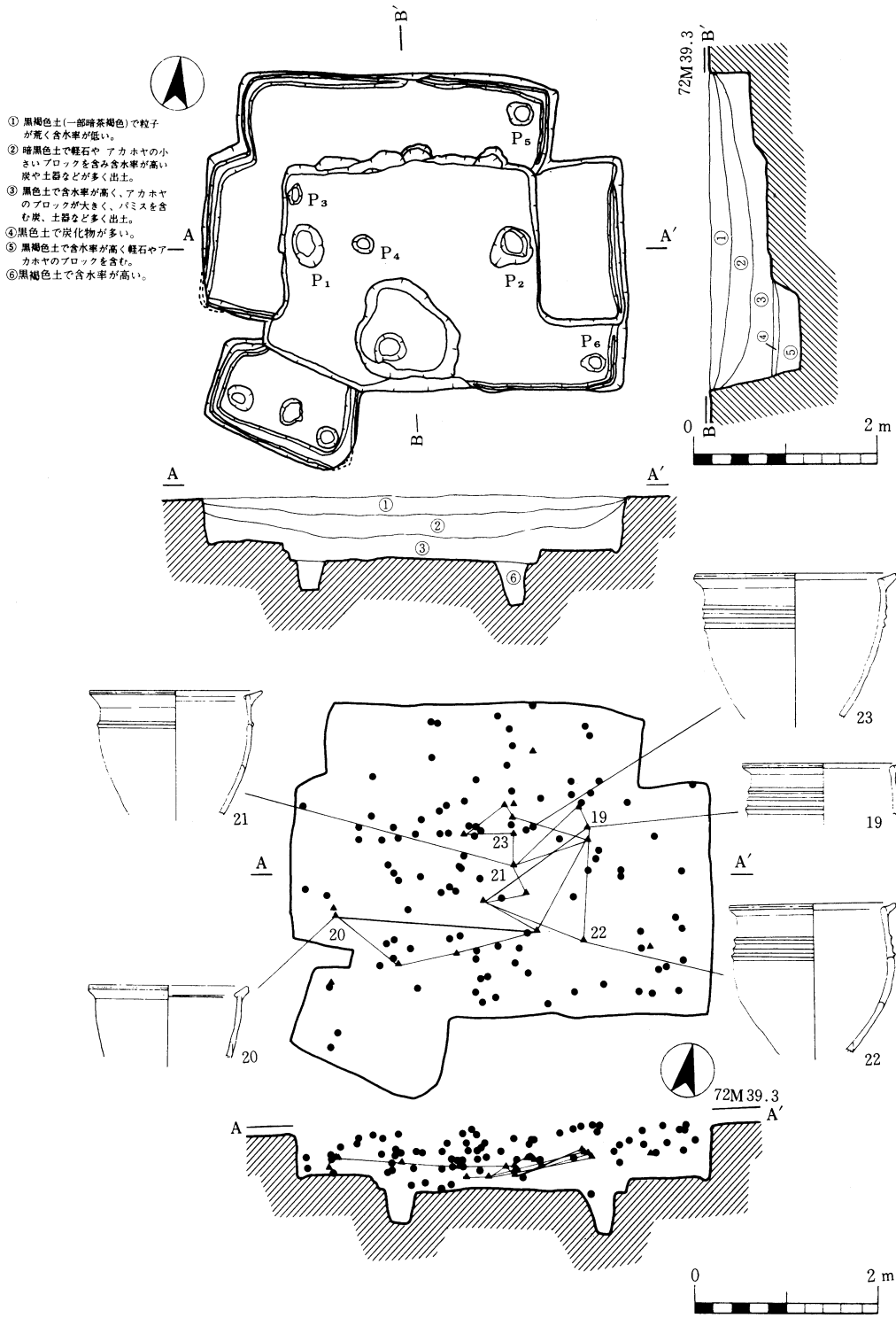


Fig. 13 4号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

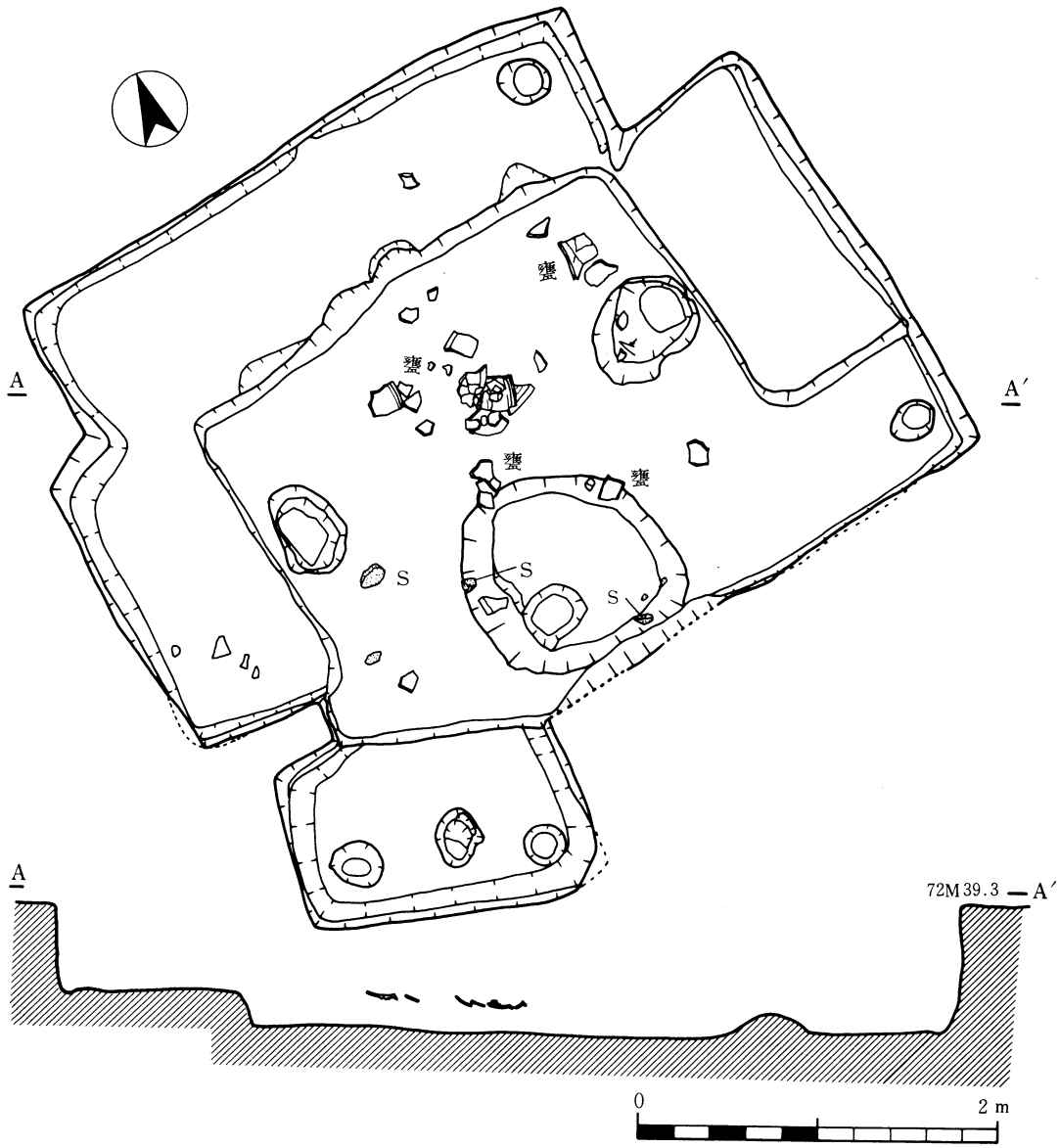


Fig. 14 4号住居跡内遺物出土状態



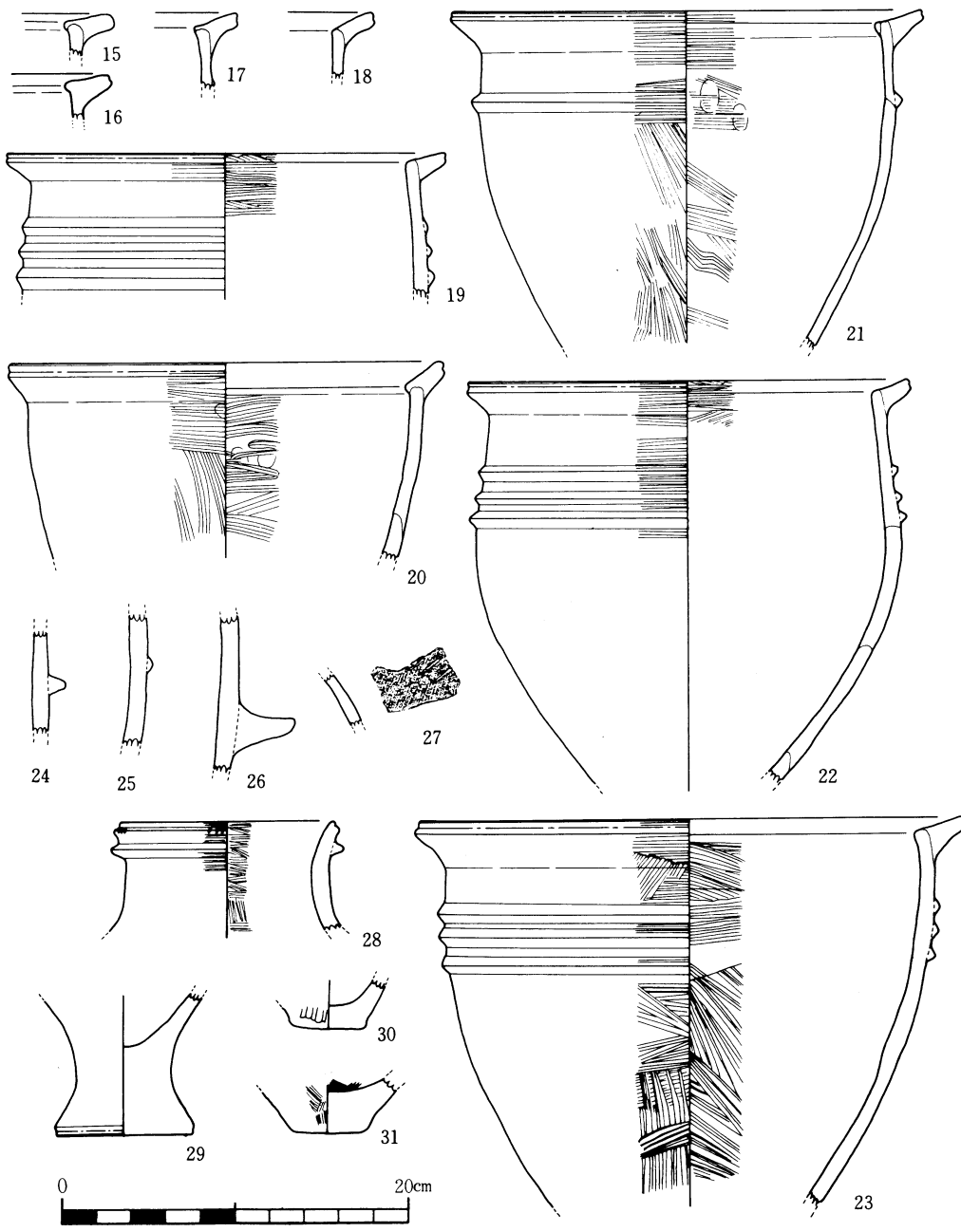


Fig. 15 4号住居跡内出土遺物実測図

Tab. 3 4号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	図版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
15	PL. 29	甕 口縁部		暗茶褐色	Q P L M	逆L字に近く外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作る。煤の付着を認める。	内・外面とも横位のなで調整を認める。
16	〃	〃		暗茶褐色	Q P L M	逆L字状に近く外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作る。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛なで調整を認め、指紋の付着を認める。
17	〃	〃		黒褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。現存で一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位の刷毛なで調整、内面は指頭圧調整後横位の刷毛なで調整を認める。
18		〃		灰褐色	Q P L H M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。	内・外面ともに磨減を認めるが、わずかに横位の刷毛なで調整の痕跡をみる。
19	PL. 29	甕 口縁部 胴部	①(25.2) ③(24.2)	黒褐色	Q P L	わずかに内傾する口縁部で、逆L字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作る。現存で三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛なで調整を認める。
20	〃	〃	①(25.2) ③(22.2)	淡褐色	Q P L	外方へ直線的に立ち上がる口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。突帯はない。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位及び斜位の刷毛なで調整で、指頭圧調整痕や輪積みの手法が残る。
21		〃	①(27.2) ③(24.0)	灰褐色	Q P L	外方へひらきながら直線的に立ち上がる口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面ともに横位・斜位及び縦位の刷毛なで調整を認めるが、内面には指頭圧調整痕も残る。
22	PL. 29	〃	①(25.4) ③(24.4)	黒褐色	Q P L M	胴が少々服らみ内傾する口縁部で、口縁部内側に稜を作る。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。輪積みの手法を残す。煤の付着を認める。	内・外面ともに剥落を認めるが、外面は横位及び斜位、内面は横位及び斜位の刷毛なで調整がみられ、下位は剥落して不明である。
23	〃	〃	①(31.2) ③(27.2)	黒褐色	Q P L H	外方へひらきながら立ち上がり胴は張らず、わずかに内湾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側に稜を作る。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、縦位及び斜位、内面は横位及び斜位の刷毛なで調整を認める。
24	〃	大型 甕 胴部上位		明茶褐色	Q P L	おそらく口縁部外側の部位に想定される突帯で、一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面とも横位の刷毛なで調整を認める。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
25	PL. 29	甕 胴部		明灰色	Q P L	胴部付近の突帯で、一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面とも横位の刷毛などで調整である。
26	ク	大型甕 胴部上位		茶褐色	Q P L M	口縁部外側の部位付近で、細長い略断面台形状の突帯である。	剥落しているが横位にうすくクシメ状の痕跡を認める。
27	ク	壺 肩部		茶褐色	Q P L H	薄手の器形で、瀬戸内系の壺の肩部付近と思われ、小破片のためはっきりしないが、篋状工具による一列の列点文をみる。他区出土の遺物は二列の列点文を確認する。	縦位の刷毛目状の痕跡が明瞭に認め、内側は剥落しているため不明である。
28	ク	壺 口縁部		暗茶褐色	Q P L M	口縁部は外反し、口唇部端面は凹み、凹みの下位は篋状内工具による刻みを一部に認める。口唇部外側直下に断面三角形貼付突帯を廻らし、口縁部が二又状を早する。	外面は横位、内面は横位、斜位及び縦位の刷毛などで調整で、外面の一部は磨きを認める。
29	ク	甕 底部	④8.0	明茶褐色	Q P L M	充実した脚合である。裾は長く、あまり広がりがなく、裾の端面は凹んで凹線状を早する。	剥落しているため調整痕は不明である。
30	ク	壺 底部	④4.4	明茶褐色	Q P L H	外方へ開きながら立ち上がりと思われる器形で、わりと薄手の平底の底部である。	ほとんど剥落しているが、一部に斜位の刷毛などで調整である。
31	ク	壺 底部	④4.3	明褐色	Q P L H	外方へ大きく開きながら立ち上がりと思われる器形で、お厚い平底の底部である。	内・外面ともに斜位の刷毛などで調整である。

#### ⑤ 5号住居跡 (Fig. 16, 17, PL. 6)

6号住居跡との最短距離は4.0mで、13号掘立柱建物跡まで6.6mを測り、C・D-8・9区のⅡ層中の検出で、一部は確認調査時に確認された。

長軸555cm (ベッド状張り出しを含む)、短軸430cm、支柱穴は2本で、西側：径45～46cm、深さ78cm、東側：径50～68cm、深さ66cm、心心距離134cmを測る。主軸の方位はN-84.5°-Eをとる。遺構検出面からの深さは48cmで、ベッド状遺構までは25cmを測る。

住居跡の平面の形状は、西壁及び東壁の一部は新しい溝(畑地の区割)で、北壁の大半は畑地灌漑用パイプ埋設時に削平を受けているが、基本的には隅丸の略長方形を呈する。西側2か所には削り出しによるベッド状張り出しを検出した。床面との比高差は約23cmを測る。床面の北西側ベッド状遺構際には幅10～12cm、深さ5～6cmの壁帯溝の一部を検出する。床面はV層中位付近で部分的に貼り付け調整され、新しい溝は床面まで達していない。住居跡の南側中央壁際には185×133cmの略円形状の土壇が検出され、土壇内には5か所の柱穴状の掘込を認めた。

なお、本住居跡の出土遺物は、埋土中より甕形土器・壺形土器などの破片や磨製石鏃2が出土し、甕形土器は口縁部破片や底部、壺形土器は口縁部を多くみた。

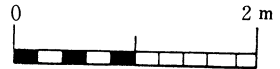
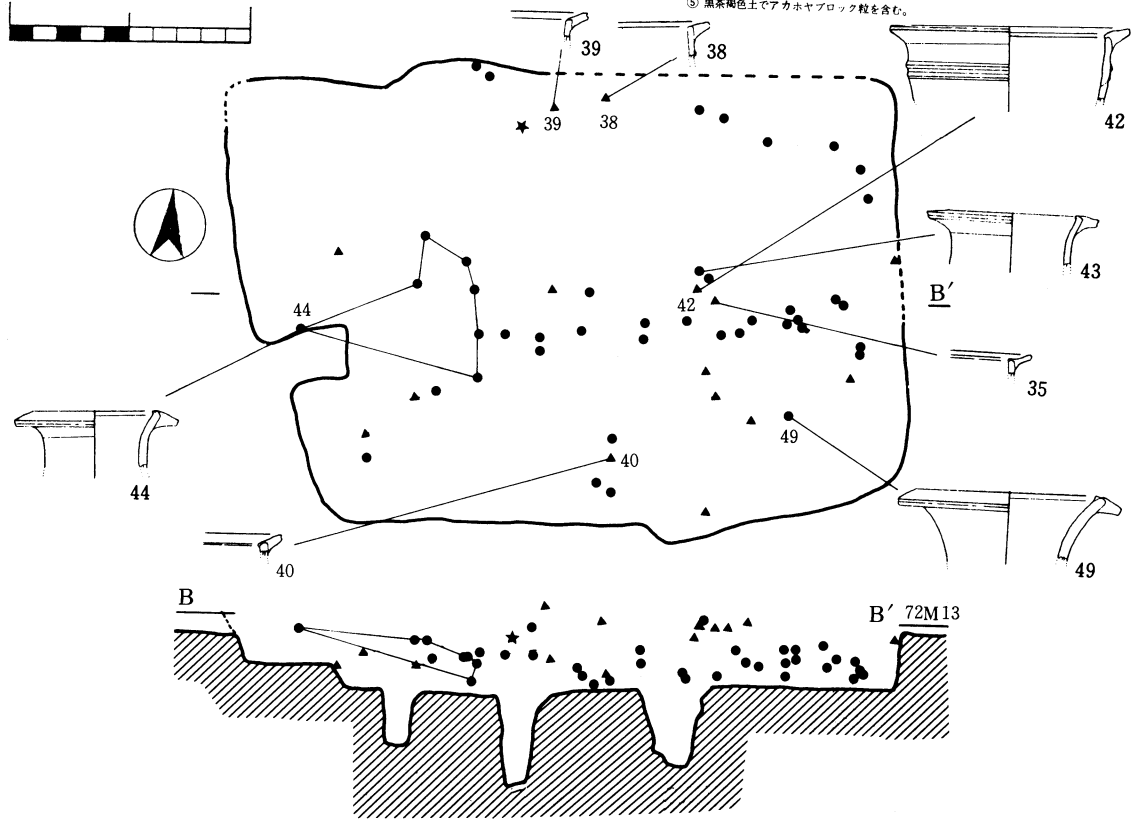
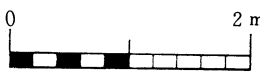
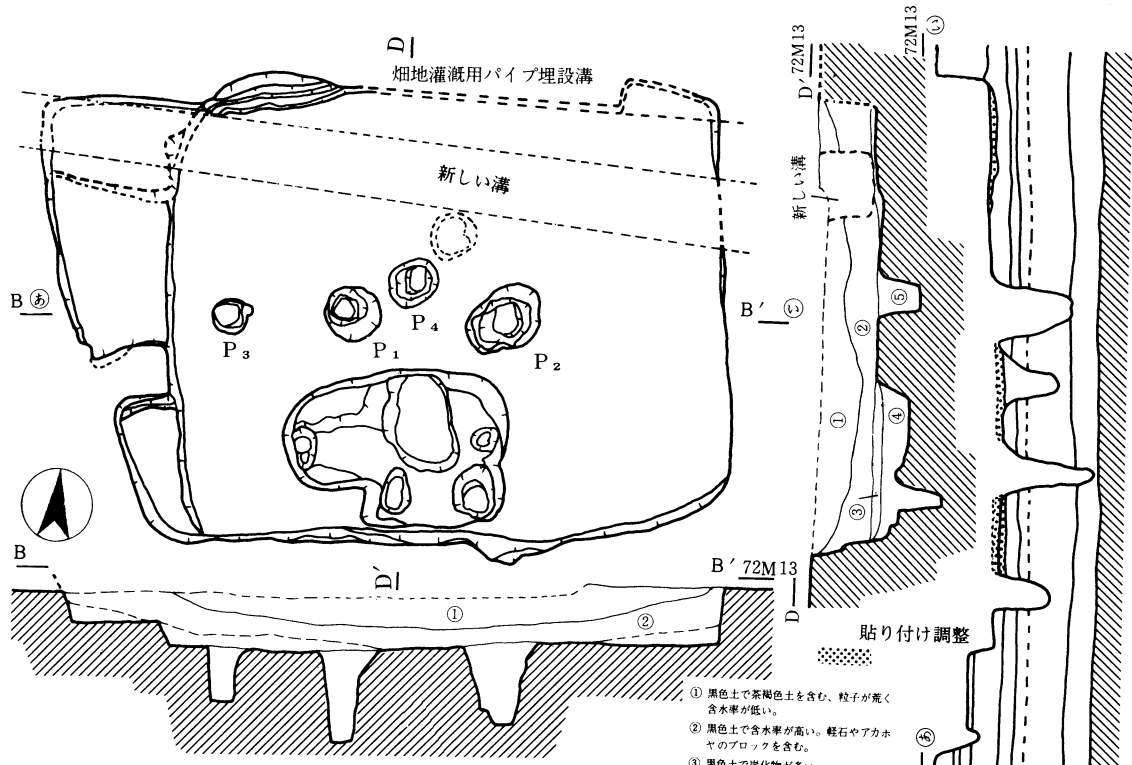


Fig. 16 5号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

⑥ 6号住居跡 (Fig. 17, PL. 8)

5号住居跡との最短距離は4.0mで、4号住居跡まで7.8mを測り、D-8・9区Ⅱ層中の検出で、一部は確認距離調査時にⅢ層上面で検出された。

長軸290cm、短軸228cmで、柱痕跡を認める。主柱穴は2本で、西側：径23~38cm、柱痕跡は径14~15cm、東側：径30~33cm、深さ30cm、柱痕跡径17~18.5cmを測る。主軸の方位はN-79°-Eをとる。心心距離は86cmである。

住居跡の平面の形状は、隅丸長方形を呈し、西壁、南壁及び北壁の一部は確認調査時にⅢ層上面での検出のため削平を受ける。遺構検出面からの深さは35cmで、南側中央壁際には9×84cm、深さ13cmの土壇を認めた。柱穴には柱痕跡を認め、土壇を造ったあと柱穴の掘込が認められる。

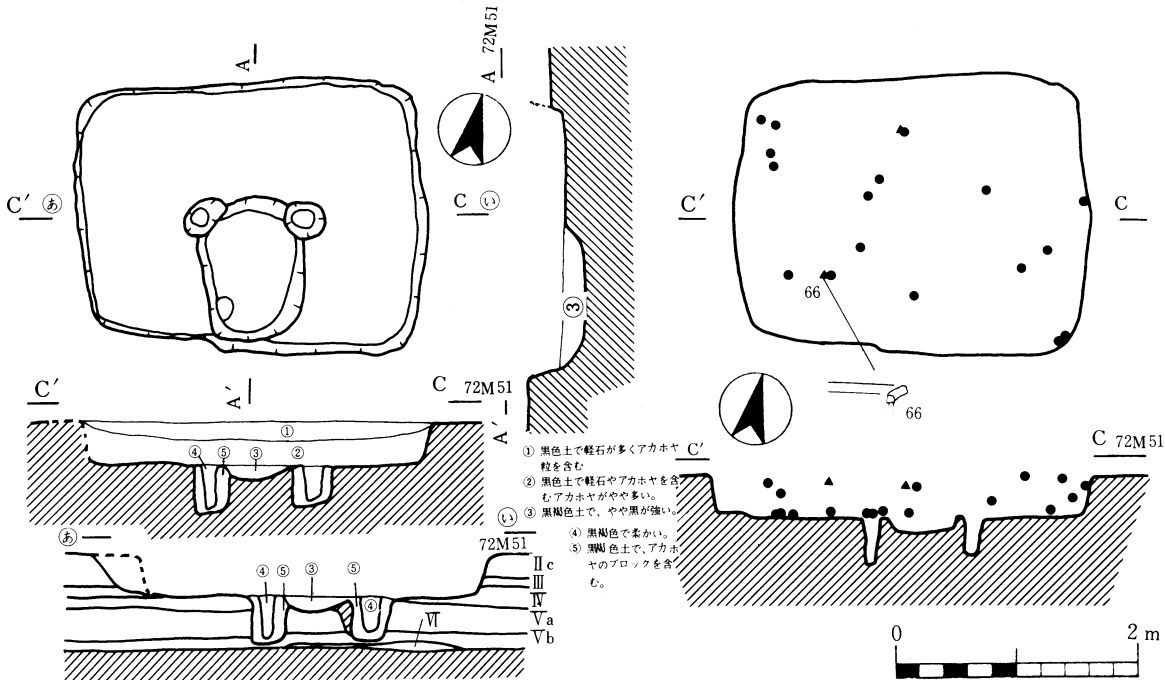


Fig.17 6号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

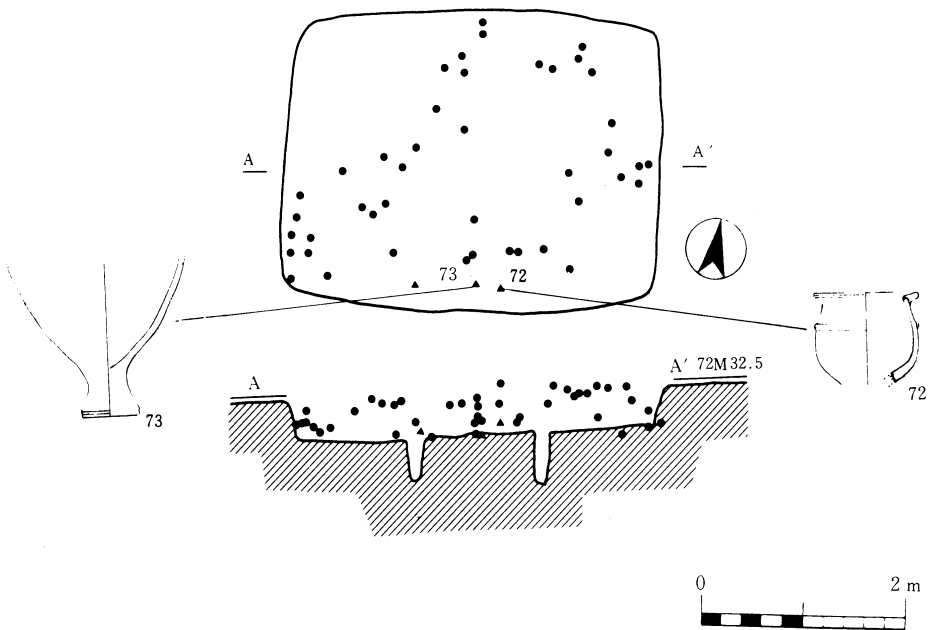
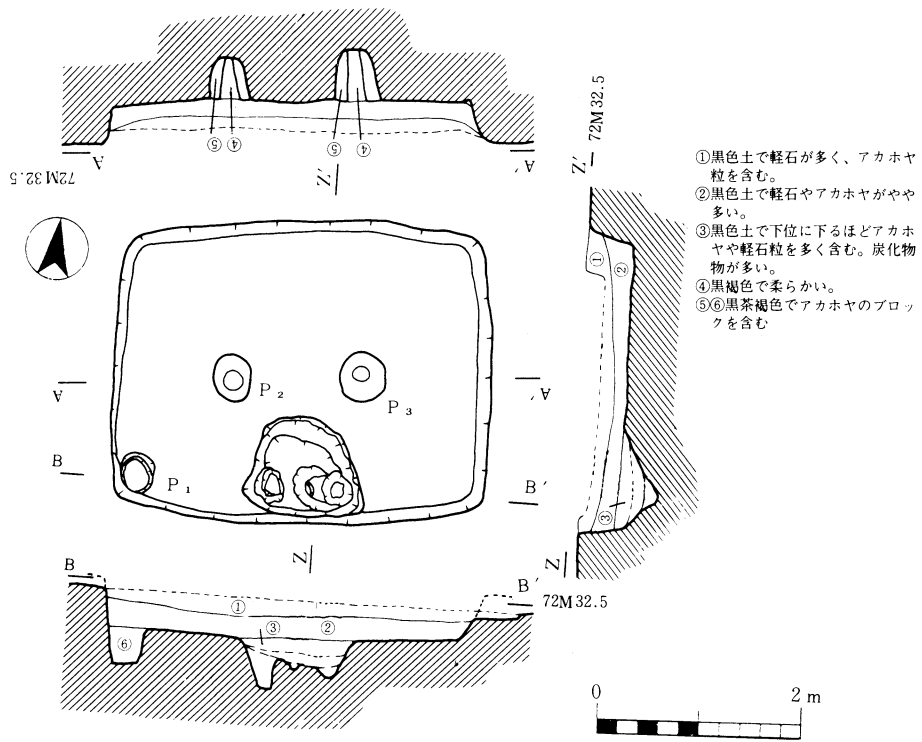


Fig. 18 7号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

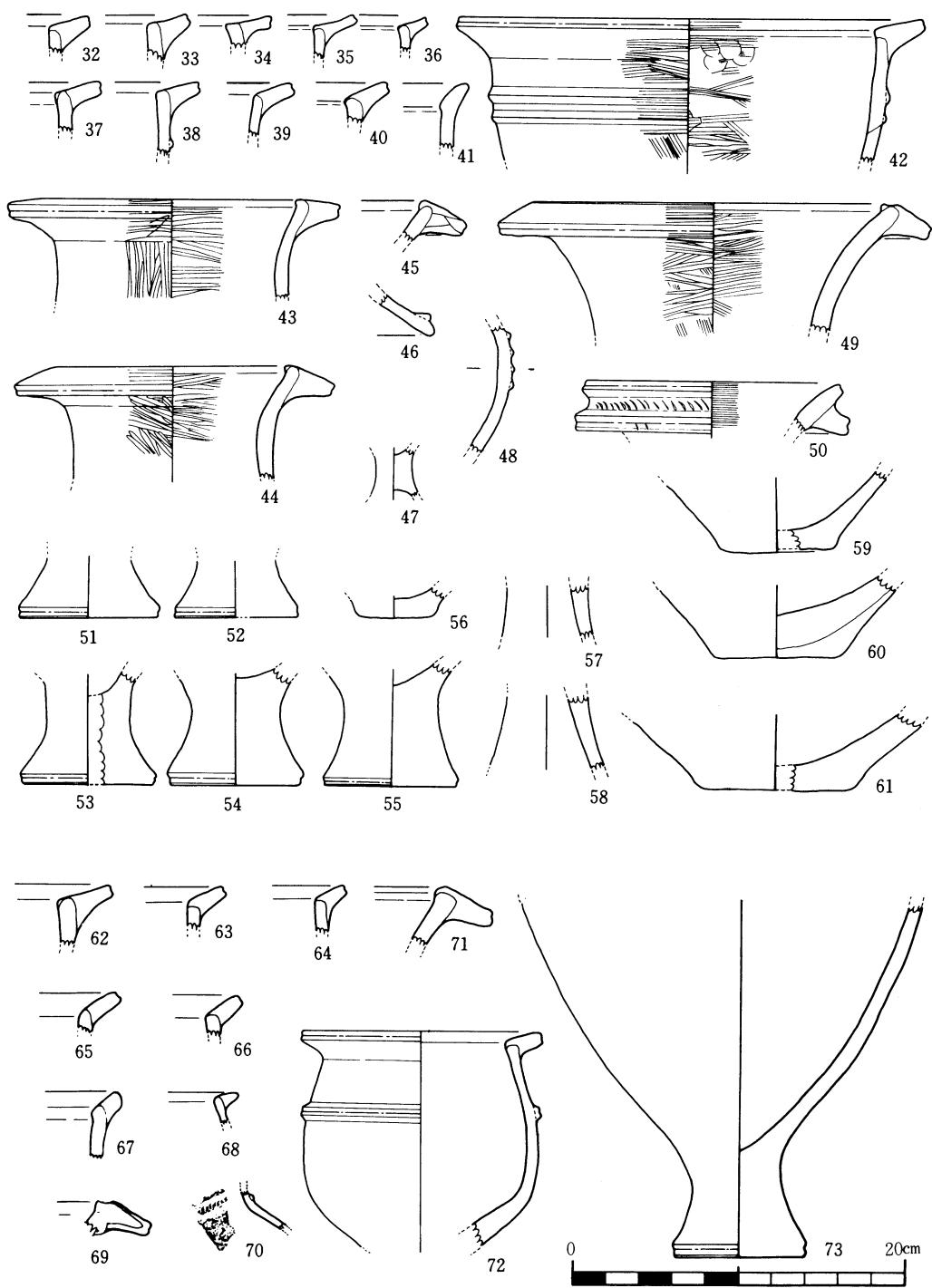


Fig. 19 5·6·7号住居跡内出土遺物実測図

⑦7号住居跡 (Fig. 19~20, PL. 8)

8号住居跡との最短距離は7.6mで、6号住居跡まで12mを測り、E・F-9・10区のⅡ層中の検出で、一部は確認調査時にⅢ層上面で確認された。

長軸379cm, 短軸297cm, 主柱穴は2本で、西側:36~48cm, 深さ42cm, 柱痕跡19~21cm, 東側:径46~50cm, 深さ53cm, 柱痕跡16~17cmを測る。主軸の方位はN-84°-Eをとる。心心距離は124cmである。遺構検出面からの深さは45cmを測る。

住居跡の平面の形状は隅丸長方形でやや胴張りを呈し、西東南北の壁の一部は確認調査の時に確認された。南側西隅には、径32~41cm, 深さ53cmの柱穴を検出した。南側中央壁際には、124×95cmの略円形状の土壇を検出し、土壇内には二か所に柱穴状の掘込を認める。床面は部分的に貼り付けによる調整を認める。柱穴は柱痕跡を検出した。

なお、本住居跡の出土遺物は床面からの出土はあまりなく、甕形土器・鉢型土器などの小破片が多い。73は土壇内埋土中より出土した。

土器 (Fig. 19, PL. )

Tab. 4 5・6・7号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
32	PL. 29	甕 口縁部		暗褐色	Q P L M H	逆L字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
33	〃	〃		明褐色	Q P L M	逆L字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。	外面は横位及び斜位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
34	〃	〃		紅褐色	Q P L H	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。口縁部上面はわずかに凹む。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。口縁部上面は磨きを認める。
35	〃	〃		淡赤褐色	Q P L H	逆L字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。口縁部上面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
36	〃	〃		暗灰色	Q P L	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内面にはわずかな張り出しを作る。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
37	〃	〃		暗褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。煤の付着を認める。	外面は横位に及ぶ斜位、内面は横位の刷毛などで調整である。
38	〃	〃		暗褐色	Q P L H	逆L字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には稜を作り出す。現存で、一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。



番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
39	PL. 29	甕 口縁部		暗褐色	Q P L M	く字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
40	〃	〃		暗茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
41	〃	〃		明褐色	Q P L H	屈折せずに大きく外反する口縁部で、口縁部内面は丸味を帯び、口縁部内側にはわずかな張り出しを作る。	内・外面ともに磨減が著しく調整痕は不明である。
42	〃	甕 口縁部 胴部	①(28.0) ③(23.6)	明茶褐色	Q P L	外方へ立ち上がりながらわずかに内湾する口縁部で、逆L字状に近く外反し、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位及び斜位、内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整で、輪積みの手法を残す。
43	〃	壺 口縁部	①(20.0)	暗茶褐色	Q P L H	肩部より立ち上がりながら外湾し、逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹むが、口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに甕磨きを認める。
44	〃	〃	①(19.2)	暗茶褐色	Q P L H	肩部より立ち上がりながら内湾する口縁部で、垂れ下り気味に外反し、口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。	内・外面ともに甕磨きを認める。
45	〃	〃		黒褐色	Q P L	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は横位の刷毛などで調整で、口縁部上面には甕磨きを認める。
46	〃	蓋 裾		明黄褐色	Q P L M H	裾部端面は丸味を帯び、外側端面上位には略三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	内・外面ともに刷毛などで調整である。
47	〃	手捏ね 土器 底部		明褐色	Q P L	手捏ね土器の底部付近と考える。	磨減しているため調整痕は不明である。
48	〃	壺 腹部		暗茶褐色	Q R M	壺の腹部付近で、現存で、四条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位の刷毛などで、甕磨きを認める。内面は斜位の刷毛などで調整を認める。
49	〃	壺 口縁部	①(26.2)	暗茶褐色	Q P L M	大きく外湾する口縁部で、垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には断面三角形の削り出し突帯を廻らす。	外面の口縁部付近は指頭圧調整後横位、それ以下は縦位の刷毛などで調整で、内面は横位の刷毛などで調整を認める。 内・外面とも刷毛などで調整後甕磨きを認める。
50	〃	〃	①(15.8)	赤茶褐色	Q P L M	大きく外湾する口縁部と思われる。口縁部の外側直下に突帯を廻らし、口縁部端面と突帯間には2～6mm程度の間隔に篋状の施文具により短い沈線が施されている。両端面ともに凹む。二又状を早する。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。

番号	図版 番号	器種・器部	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴 、 そ の 他	手 法 の 特 徴
51	PL. 29	甕 底部	④ 8.2	褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は鋭角的に広がり裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。
52	〃	〃		褐色	Q P L M H	充実した脚台である。裾はあまり広がりはなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈し、一部欠損する	薄い横位及び縦位の刷毛などで調整である。
53	〃	〃		明褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈しする。	斜位及び縦位の刷毛などで調整である。
54		〃	④ 7.8	褐色	Q P L M H	充実した脚台である。裾は長く、あまり広がりはなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	剝落しており調整痕は不明である。
55		〃	④ 8.0	褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は長く、あまり広がりはなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	薄い横位及び斜位の刷毛などで調整である。
56	PL. 29	壺 底部	④ (4.8)	淡褐色	Q P L	平底の底部で、外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる器形である。	指頭圧による調整を認める。
57 ・ 58	〃	高杯 脚部		57 暗茶褐色 58 黒褐色	Q P L M	高杯形土器の脚部付近と思われる器形である。	匏磨きによる調整を認める。
59	〃	壺 底部		明茶褐色	Q P L H M	平底の底部で、外方へ立ち上がりながら開くと思われる器形で、わりと薄手である。一部欠損する。	内・外面ともに磨滅や剝落を認め、調整痕は不明である。
60		〃	④ (7.2)	暗茶褐色	Q P L M	平底の底部で、外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる器形で、厚手である。	外面は縦位の匏削りで、内面刷毛などで調整を認める。
61		〃		明茶褐色	Q P L	平底の底部で、外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる器形である。	内・外面は大部分が磨滅し、匏磨きを認める。
62	PL. 29	甕 口縁部		褐色	Q P L M H	逆し字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内面には稜を作り出す。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
63	〃	〃		明褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部端面はわずかに凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
64	PL. 30	甕 口縁部		黒褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
65	〃	〃		灰褐色	Q P L M H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
66	PL. 30	〃		暗褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。煤の付着を認める。	磨減しているが内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
67	〃	〃		明褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は丸くなり、口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
68	〃	鉢 口縁部		明褐色	Q P L H	逆し字状に外反する口縁部で、口縁部端面は丸味を帯びる。	磨減している、外面はわずかに横位の刷毛などで調整である。
69	〃	壺 口縁部		黒褐色	Q P L H	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側に断面三角形の削り出し突帯を有する。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
70	〃	壺 頸部		褐色	Q P L M	壺の頸部付近で薄手の器形である。刻目突帯を廻らす。	外面は横位及び縦位のうすい刷毛などで調整で、内面は剥落して不明である。
71	〃	壺 口縁部		茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
72	〃	鉢 口縁部 胴部	①(14.4) ③(14.2)	褐色	Q P L H	底部より外方へ大きく開きながら立ち上がり内傾する口縁部で、口縁部は逆L字状に近く外反し、口縁部端面は凹む。胴部上位には断面台形状突帯を廻らし、端面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
73	〃	甕 底部	④ 8.0	暗褐色	Q P L M	充実した脚台付の甕で、胴部より上位は欠損する。底部の裾は短かく、あまり開かからず、裾の端面は凹み、凹線状を呈する。底部より外方へ開きながら立ち上がる器形である。	外面は斜位及び縦位のうすい刷毛などで調整で、内面は磨減しているため調整痕は不明である。

### 石器 (Fig. 20, PL. 35)

5号・7号住居跡からは出土はなく、74・75は、5号住居跡内の埋土中からの出土である。74は頁岩を石器の素材として用いた磨製石鏃で、扁平無茎であり先端部は欠損する。最大長2.7cm、最大幅1.6cm、最大幅0.15cm、重さ1.6gを測り、研磨痕を認める。75も74も同様の石材を用い、扁平無茎で先端及び基部両端を欠損する。最大長2.6cm、最大幅1.4cm、最大幅0.3cm、重さ1.6gを測り、一部に研磨痕を認める。

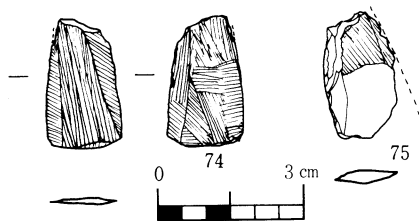


Fig. 20 5号住居跡内出土石器実測図

⑧8号住居跡 (Fig. 21, PL. 8, 9)

9号住居跡との最短距離は4.0mで、7号住居跡まで7.6mを測り、E-10・11区のII層中で検出された。

長軸313cm、短軸310cmを測り、主柱穴は2本で柱痕跡を認め、西側：径32~35cm、深さ47cm、柱痕跡径：19~19cm、東側：径42~46cm、深さ49cm、柱痕跡径：16~16cmを測る。主軸の方位はN-90°-Eをとる。心軸距離80cmである。遺構検出面からの深さは55cmを測る。

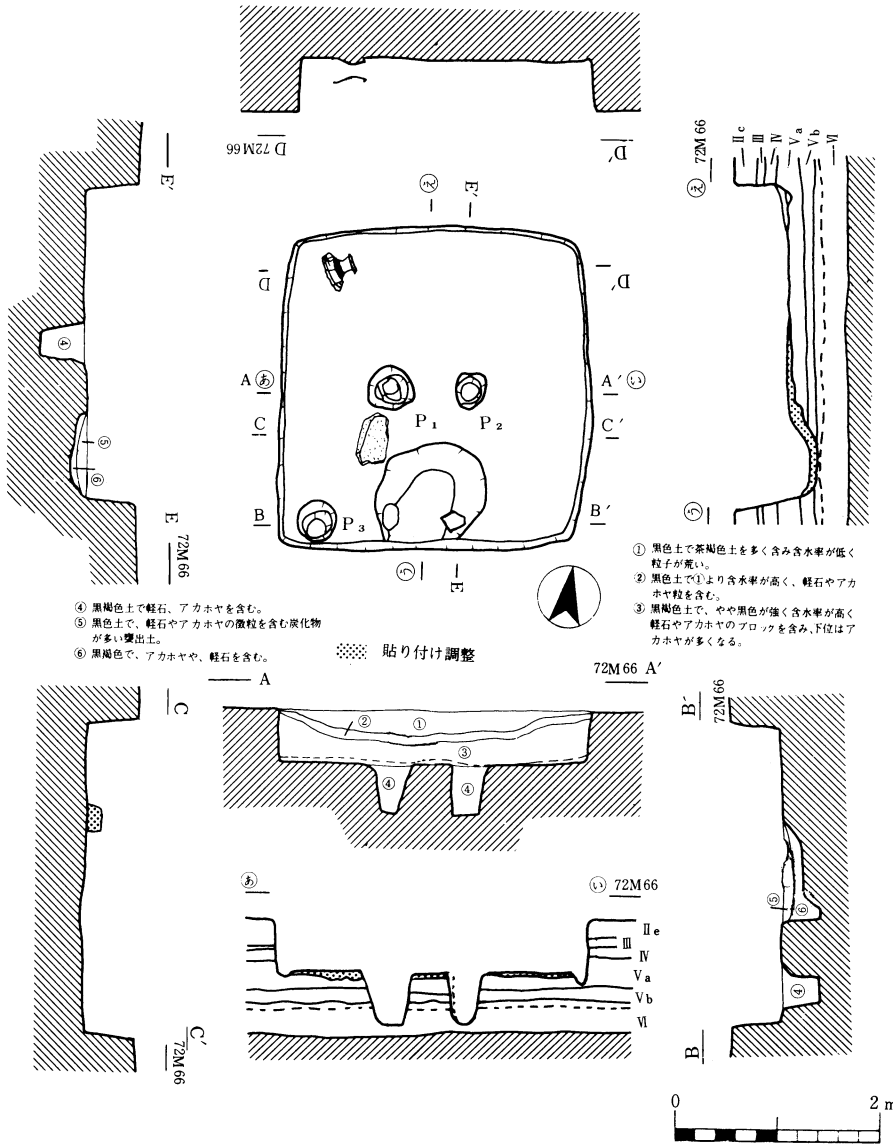


Fig. 21 8号住居跡実測図

住居跡の平面の形状は、隅丸方形で、東壁中央付近が若干突出している小型の住居跡である。南西隅には径38~39cm、深さ39cmの柱穴を認め、南側中央壁際には120×95cm、深さ20cmの略円形の土壇を検出した。土壇付近には51×32×13cm規模の石が床面で検出され、台石の可能性が考えられる。床面には貼り付けによる調整を認めた。

なお、本住居跡の出土遺物は、床面より胴部から口縁部にかけての壺形土器、土壇内の埋土上位より甕形土器で、煤の付着を顕著に認める破片が出土した。埋土中より甕形土器・壺形土器・鉢形土器・石器などが出土した。

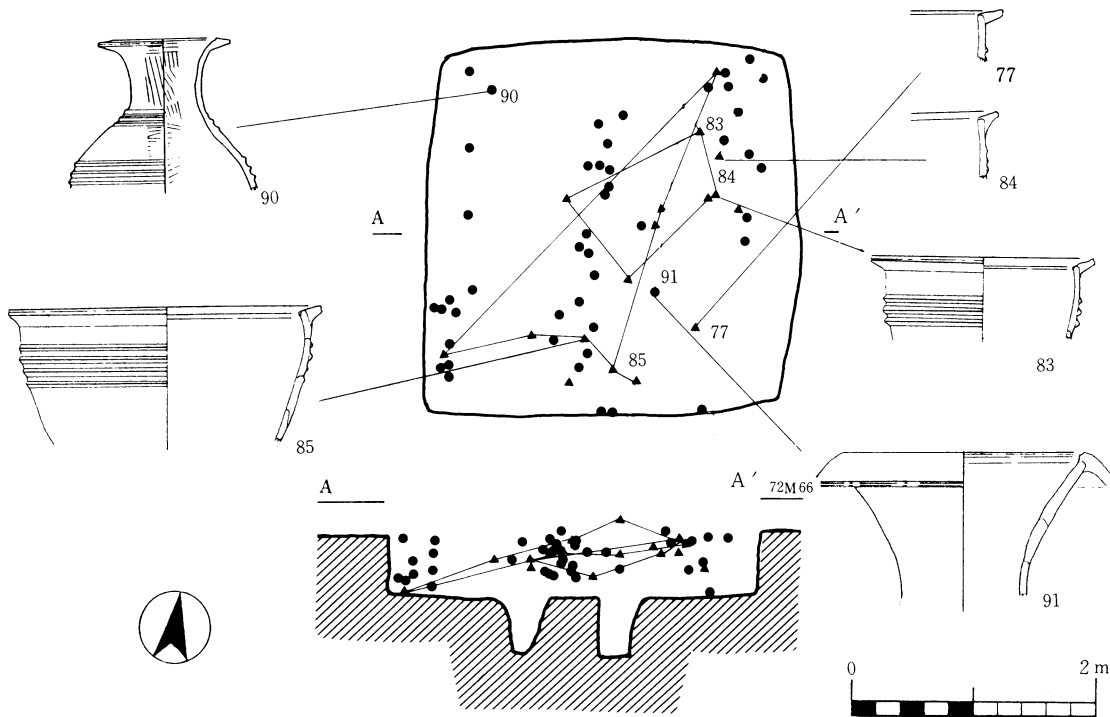


Fig. 22 8号住居跡出土遺物平面・垂直分布状態

土器 (Fig. 23~25, PL.30)

Tab. 5 8号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
76		甕 口縁部		赤褐色	Q P L	内湾気味の口縁部で、逆し字状に外反し、口縁端面わずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。現存で二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。

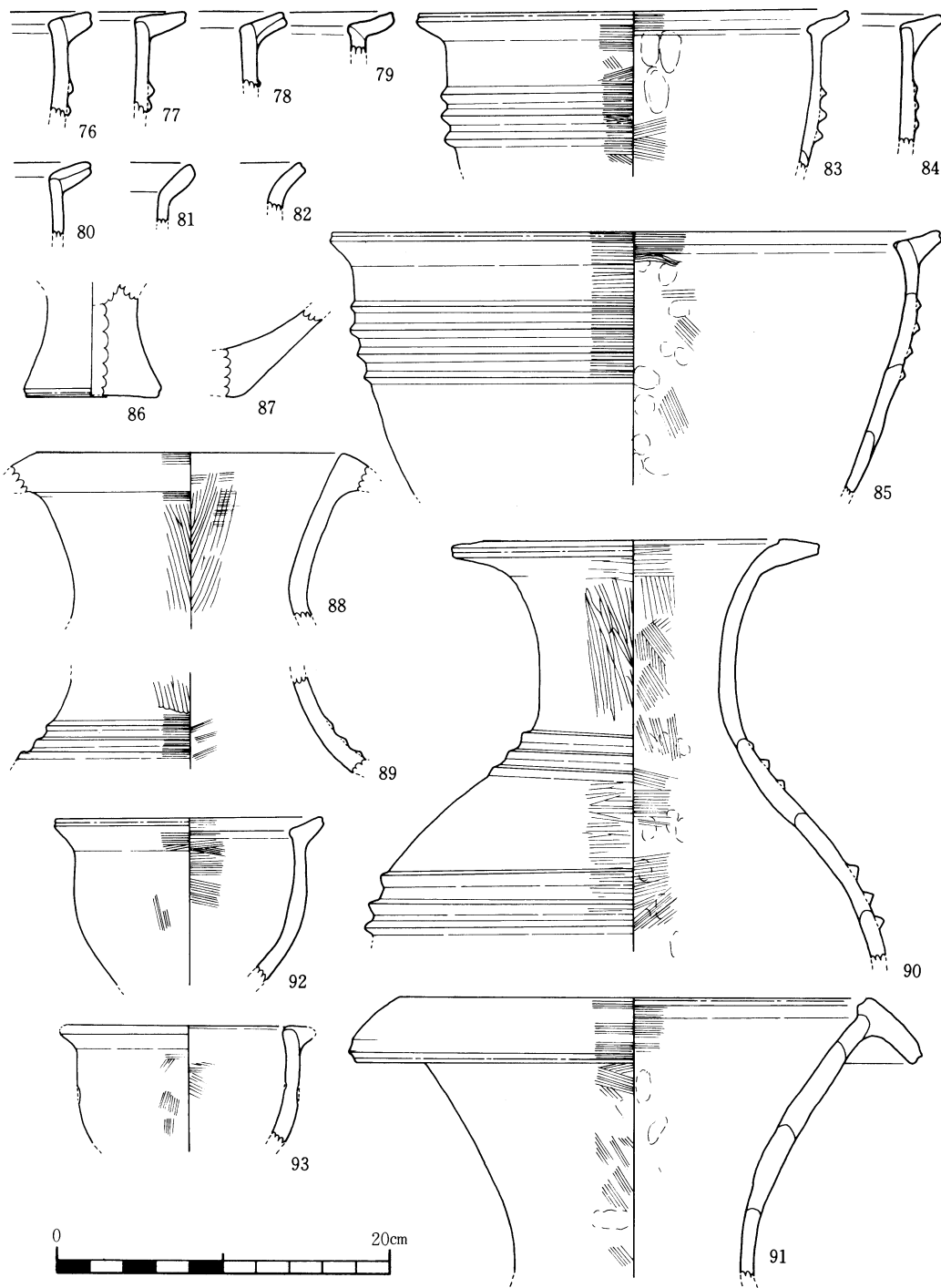


Fig. 23 8号住居跡内出土物実測図

図版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
77	PL. 30 甕 口縁部		明褐色	Q P L	直口気味の口縁部で、逆L字状に外反し、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には稜を作り出す。現存で、二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整を認める。
78	〃 〃		暗赤褐色	Q P L M	内傾気味の口縁部で、くの字状に外反し、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には稜を作り出す。現存で、一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面とも横位の刷毛などで調整で、鮮明である。
79	〃 〃		褐色	Q P L	逆く字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には稜を作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整を認める。
80	〃 〃		明褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。煤の付着を認める。	外面は横位の刷毛などで調整で、内面は剥落している。
81	PL. 30 〃		明赤褐色	Q P L H	くの字状に強く外反する口縁部で、口縁部端面は丸味を帯びる。	内・外面ともに剥落して不明である。
82	〃 〃		明灰褐色	Q P L H	屈折せず大きく外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
83	〃 甕 口縁部 胴部	①(25.5) ③(22.4)	明褐色	Q P L M	内湾気味の口縁部で、くの字状に外反し、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は斜位及び横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
84	〃 〃		暗茶褐色	Q P L M	直口気味の口縁部で、くの字状に外反し、口縁部端面は丸味を帯びる。口縁部内面には稜を作る。現存で、三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面とも磨減をうけているが、うすい横位の刷毛などで調整である。
85	〃 〃	①(36.2) (3)(32.8)	暗褐色	Q P L	外方へひらきながら立ち上がり口縁部は大きく内湾する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。四条の断面三角形貼付突帯を廻らす。器面には1～2mm前後の煤の付着を全体に認める。	外面はほとんど煤の付着のためはっきりしないが横位、内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整で輪積みの手法も残す。
86	PL. 30 甕 底部		褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的にひろがり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。一部欠損する。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。
87	〃 壺 底部		茶褐色	Q P L H	平底の底部で大きく開きながら立ち上がる器形と思われる、ぶ厚い底部で、大半が欠損する。	外面は匏などで、内面は横位の刷毛などで調整である。
88	〃 壺 口縁部		茶褐色	Q P L	大きく外反する口縁部で、口縁部端面は欠損するが垂れ下り気味に外反する。	内・外面ともに匏磨きを認める。
89	〃 壺 房部		暗茶褐色	Q P L H	肩部に現存で、三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は匏磨きを認め、突帯付近は横位の刷毛などで調整で、内面は大半が剥落し不明である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
90		壺 口縁部 腹部	①21.9 ③30.8	暗褐色	Q P L	腹部は球形を呈すると思われ、肩部より立ち上がりながら外方へ大きく外湾する口縁部で、若干垂れ下り気味に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。腹部及び肩部にはそれぞれ三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は口縁部付近から肩部までは縦位の篋磨きを認め、肩部以下は横位及び斜位に篋磨きで、内面は刷毛などで調整と篋磨きを認める。
91	PL 30	壺 口縁部	①(34.4)	褐色	Q P L M	肩部より大きく外方へ大きく外湾する口縁部で、口縁部は垂れ下り気味に外反し、口縁部端面は凹む。口縁部内側には断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位及び縦位の篋磨き、内面は刷毛などで後篋磨きを認める。
92	〃	鉢 口縁部 胴部	①(16.1) ③(14.0)	茶褐色	Q P L H	底部付近より外方へ立ち上がりながら内湾気味の口縁部である。口縁部はくの字状に外反する。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに剥落しているが、横位の刷毛などで調整で内面は指頭圧調整後のなで調整である。
93	〃	〃	③12.9	暗茶褐色	Q P L H	内湾する口縁部で、口縁部は逆L字状に外反し、口縁部端面は欠損する。口縁部内側にはわずかな張り出しを作る。	外面は横位及び斜位、内面は剥落を認めるが横位の刷毛などで調整である。

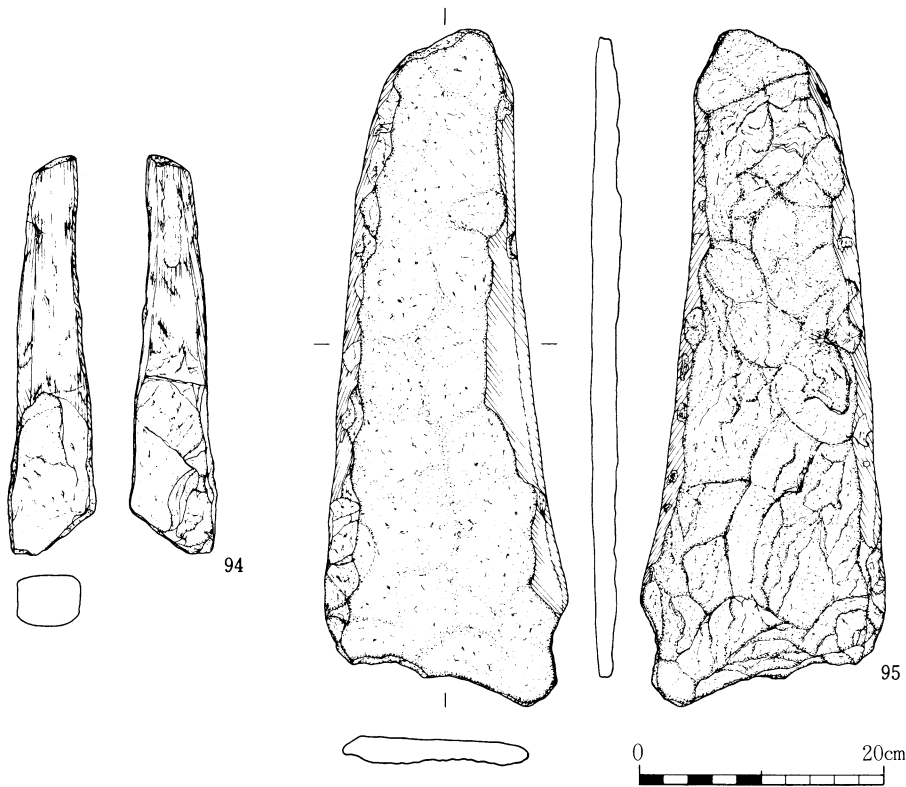


Fig. 24 8号住居跡内出土石器実測図(1)



石器 (Fig. 24, 25, PL. 35, 36)

本住居跡出土の石器は94と95が砂岩、96はフォンフェルスを石器の素材としている。94は棒状の叩石で、最大長16.2cm、最大幅3.6cm、最大厚2.1cm、重さ148gを測る。先端部は敲打によるためか剥離されているため不明である。基部付近は四面ともに研磨を認めるが、素材のためか研磨痕は不明である。95は土掘り具の用途が考えられる石器で、最大長27.6cm、最大幅10.0cm、最大厚1.1cm、重さ430gを測る。扁平な素材を用い両面ともに周縁部には研磨を認め、素材のためか研磨痕は不明である。両面ともに中央部に自然面及び一部剥離痕を残す。先端部は欠損し不明である。96は磨製石鏃で先端部及び片側辺の一部を欠き、扁平無茎の凹基式で二等辺三角形形状を呈する。両面ともに器面全体に研磨痕を観察し、製作時のものと思われる。両面ともに鏃がはっきりし先端部付近で両方にわかれて基部までつづく。

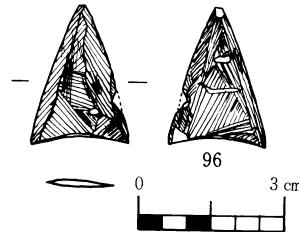


Fig.25 8号住居跡内出土石器実測図(2)

⑨9号住居跡 (Fig. 26~28, PL. 9, 10)

8号住居跡との最短距離は4.0mで、2号住居跡まで4.0m、10号住居跡まで6.8m、中央溝状遺構まで2.4mを測り、E・F-11区のⅡ層中で検出された。

長軸7.48m、短軸69.4mを測る。主柱穴は6本で、P<sub>1</sub>:径40~48cm、深さ36cm、P<sub>2</sub>:径58~75cm、深さ82cm、P<sub>3</sub>:径56~58cm、深さ86cm、P<sub>4</sub>:径44~46cm、深さ74cm、P<sub>5</sub>:径60~68cm、深さ78cm、P<sub>6</sub>:径47~100cm、深さ80cmを測り、P<sub>6</sub>は掘方を二か所に認め立替えの可能性が考えられる。それぞれの心心距離は、P<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>:198cm、P<sub>2</sub>~P<sub>3</sub>:193cm、P<sub>3</sub>~P<sub>4</sub>:162cm、P<sub>4</sub>~P<sub>5</sub>:130cm、P<sub>5</sub>~P<sub>6.1</sub>:140cm、P<sub>6.1</sub>~P<sub>6.2</sub>:46cm、P<sub>6.2</sub>~P<sub>1</sub>:166cmを測る。遺構検出面からの深さは73cmで、ベッド状遺構までは47cmである。

住居跡の平面の形状は、ほぼ円形状を呈し、住居周縁部には幅150~190cmのベッド状遺構が主柱穴をとり囲むように廻っていた。ベッド状遺構は貼り付けによる調整で、貼り付けの痕跡が東壁側の一部を除き認められ遺存状態は良好でない。住居跡のほぼ中央部には118×102cm、深さ25cmの土壇を認め、土壇内には深さ32cmと27cmの柱穴状の掘込を検出した。北側周縁寄り

のベッド状遺構上には42~55cm、深さ32cmの柱穴を検出した。

なお、本住居跡の出土遺物は、床面より大型甕形土器、甕形土器、壺形土器などの破片が出土し、埋土中より土器破片のほか磨製石鏃13(うち未製品4)などが出土した。

土器 (Fig. 28, PL. 30)

Tab. 6 9号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位1cm ①口径②器高③胴部最大径④底径( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
97		甕 口縁部		明茶褐色	Q P <sub>L</sub>	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む、口縁部内側には稜を作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整を認める。

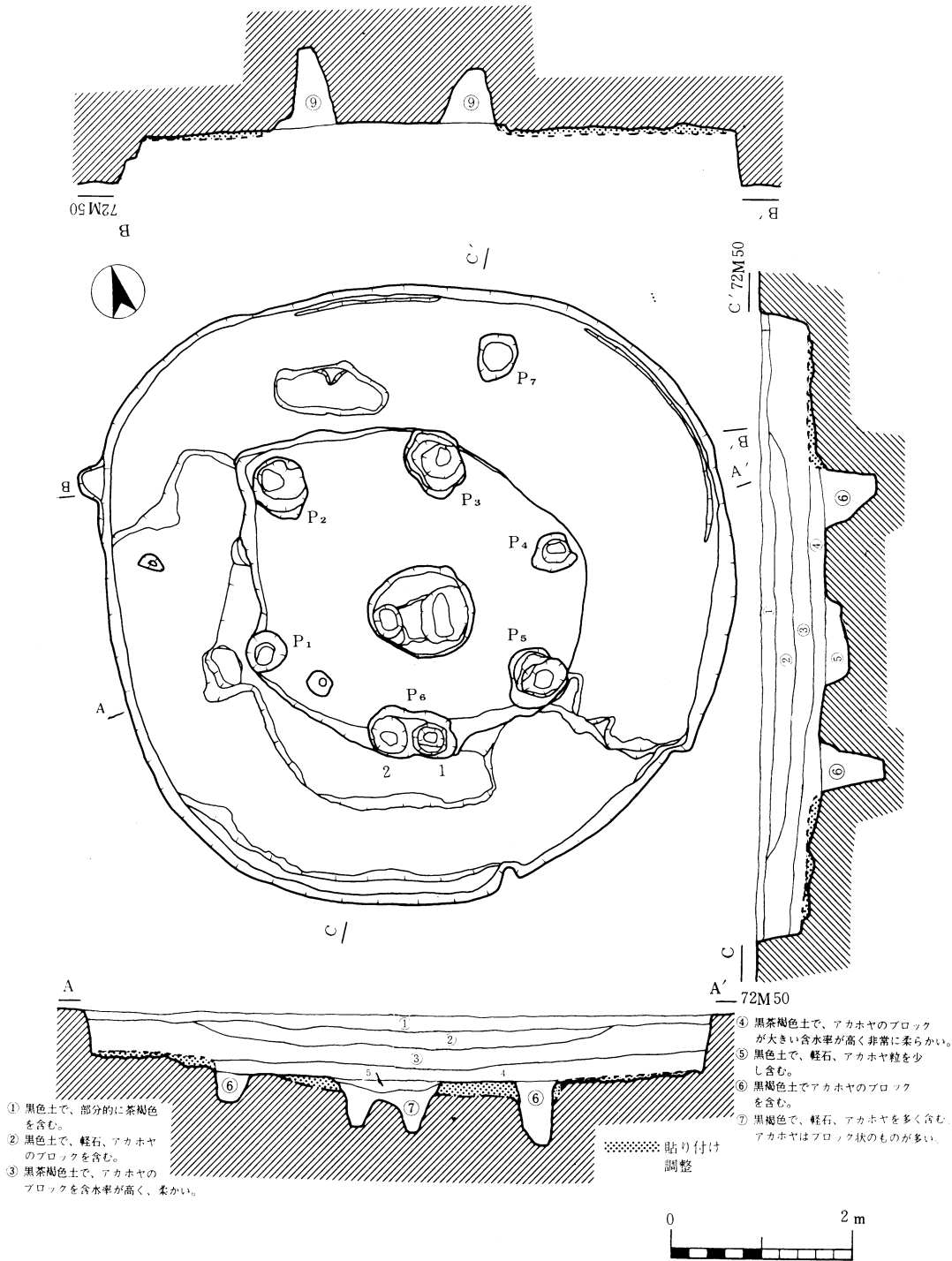


Fig.26 9号住居跡実測図

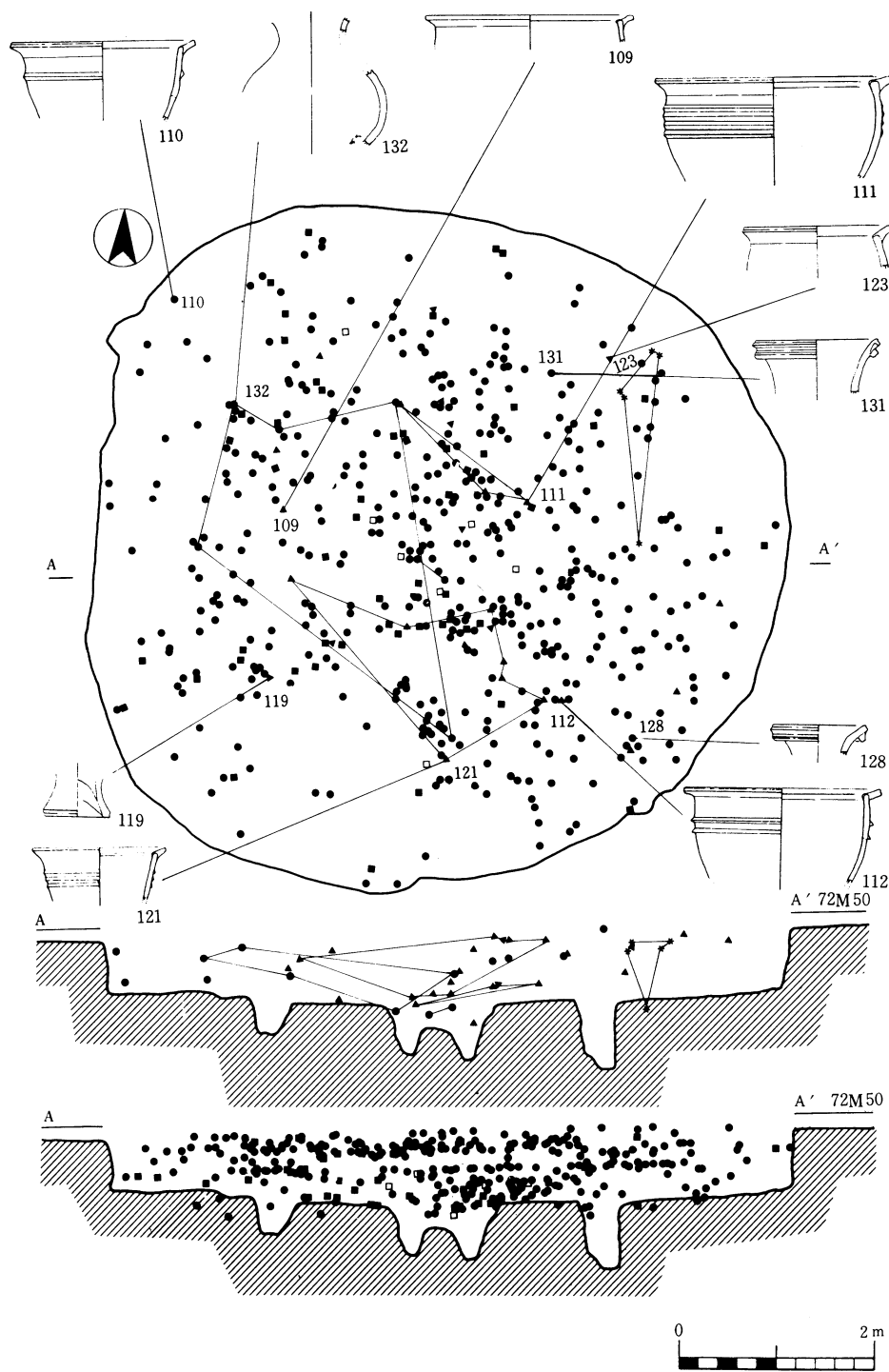


Fig. 27 9号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

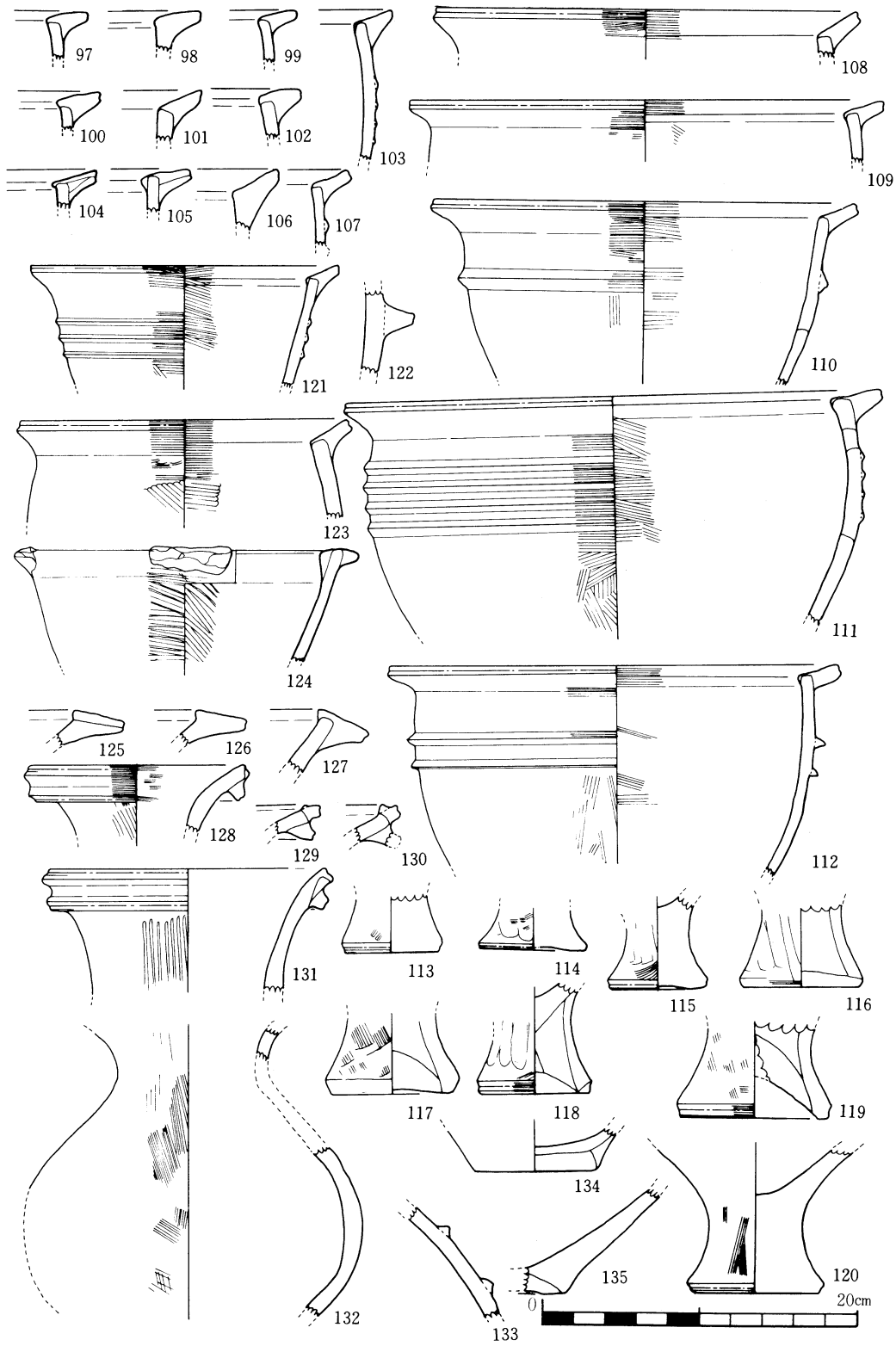


Fig. 28 9号住居跡内出土土器実測図

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
98		甕 口縁部		褐色	Q P L	逆し字状に外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には稜を作る。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
99		〃		明茶褐色	Q P L M	内湾気味の口縁部で、逆し字状に外反する。口縁部端面は丸味を帯びる。口縁部内側には稜を作り出す。	内・外ともに横位の刷毛などで調整である。
100		〃		明茶褐色	Q P L M	逆し字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
101		〃		黒褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
102		〃		茶褐色	Q P L M	逆し字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに薄い刷毛などで調整である。
103		甕 口縁部 胴部		赤褐色	Q P L M H	内湾する口縁部である。くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹み、口縁部内側には稜を作り出す。現存で四条の断面略三角形の貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、内面指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
104		甕 口縁部		暗褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
105		〃		明褐色	Q P L M	逆し字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛で調整である。
106		〃		暗褐色	Q P L M	大きくくの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
107		〃		明灰褐色	Q P L H	内湾する口縁部である。くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹み、口縁部上面も凹む。現存で二条の断面三角形貼付突帯を廻らす(実測図では一条)。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後、横位及び斜位の刷毛などで調整である。
108		〃	①(26.3)	暗褐色	Q P L M	くの字に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛で調整である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
109		甕 口縁部	①(30.0)	明褐色	Q P L M	内湾する口縁部でくの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜をつくる。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整を認める。
110	PL 30	甕 口縁部 胴部	①(26.5) ③22.4	暗褐色	Q P L M	外方へ直線的に立ち上がりながら外傾する口縁部で、逆し字状に近く外反する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。四条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位及び斜位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整を認める。
111		〃	①(34.2) ③(31.4)	明茶褐色	Q P L M H	外方へ開きながら立ち上がり、胴は張り内湾する口縁部で、くの字状に外反し口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。四条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、斜位及び縦位、内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整を認める。輪積みの痕跡を残す。
112	PL 30	〃	①(28.7) ③(25.4)	茶褐色	Q P L	外方へ開きながら立ち上がり内側気味の口縁部でくの字状に近く外反する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位及び縦位、内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整を部分的に認める。
113		甕 底部	④(6.4)	赤褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は短かく、あまり開かず、裾の端面は凹み、凹線状を呈し、一部欠損する。	斜位の刷毛などで調整を部分的に認める。
114		〃	④(7.0)	褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は短かく、鋭角的に広がり、裾の端面はわずかに凹み、凹線状をする。底面中央部はわずかに凹み、一部欠損する。	横位及び縦位の刷毛などで調整を認める。
115		〃	④(6.4)	褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。底面中央部は少々凹み、一部欠損する。	斜位の刷毛などで調整を認める。
116		〃	④(7.8)	褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は短かくあまり開かず、裾の端面は丸味を帯び、一部欠損する。	横位及び縦位の刷毛などで調整を認める。
117		〃	④(7.4)	明茶褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は短かく、あまり開かず、裾の端面は丸味を帯びる。底面中央部は少々凹む。一部欠損する。	斜位の刷毛などで調整を認める。
118		〃	④(8.6)	暗褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に近く広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈し、一部欠損する。	横位、斜位の刷毛などで調整を認める。
119		〃	④(9.8)	褐色	Q P L H	あげ底の脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈し、一部欠損する。	横位及び斜位の刷毛などで調整を認める。

番号	図版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
120		甕 底部	④8.6	暗褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	剝落しており不明である。
121		甕 口縁部 胴部	①(19.6) ③(15.9)	黒褐色	Q P L H	直線的に立ち上がりながら外傾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹み、口縁部内側には張り出しを作る。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、斜位及び縦位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
122		大甕		黒褐色	Q P L M	大型甕形土器の口縁部外側直下の略台形状の貼付突帯廻らす。	外面は横位の刷毛などで調整で、内面は不明である。
123		甕 口縁部	①(21.4)	暗茶褐色	Q P L M	大きく内湾する口縁部である。くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内面には稜を作り出す。	外面は横位の刷毛などで後匏磨きで、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで後、匏磨きを施した所もある。
124	PL 30	鉢	①(20.0) ③(18.0)	暗褐色	Q P L M	直線的に立ち上がり、若干内傾する口縁部で逆し字状に外反する。口唇部から口縁部外側にかけては二か所に耳状突起を貼り付ける。煤の付着を認める。	外面は斜位、内面は指頭圧調整後斜位の刷毛などで調整を認める。
125		壺 口縁部		暗茶褐色	Q P L	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は横位の刷毛などで後匏磨き、内面は横位の刷毛などで調整である。
126		〃		黒褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛で調整である。
127		〃		明褐色	Q P L H M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は横位の刷毛などで見られ、突帯より下位は匏磨きで、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
128		〃	①(14.3)	明茶褐色	Q P L M	大きく外方へ開く口縁部で、口縁部外面直下に突帯を廻らし、口縁部が二又状を呈する。口唇部端面及び突帯端面は凹んでいる。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
129		〃		茶褐色	Q P L M	口縁部外面直下に突帯を廻らし、口縁部が二又状を呈する。口縁部端面及び突帯端面は凹む。口縁部内側には断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
130		〃		黒褐色	Q P L M H	口縁部外面直下に突帯を廻らし、口縁部が二又状を呈する。口唇部端面は凹む。突帯端面は欠損する。口縁部内側には断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面ともに匏磨きを認める。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
131		壺 口縁部	①(18.6)	暗茶褐色	Q P L H	大きく外方へ開く口縁部で、口縁部外面直下に突帯を廻らし、口縁部が二又状を呈する。口縁部端面及び突帯端面は凹んでいる。	外面は口縁部付近は剥落して不明で、突帯より下位は縦位の磨きながされている。内面は剥落しているものの磨き痕跡が認められる。
132	PL. 30	壺 肩部 腹部		赤茶褐色	Q P L M	腹部が球形を呈し、頸部でしまる。腹部の最大径より少し上位に現存で二個の円形浮文が施されている。	外面は縦位及び斜位の刷毛などで調整後磨き認められ、内面は剥落して不明である。
133		壺 肩部		黒色	Q P L M	壺の肩部付近と思われ、二条の突帯を廻らしている。上位は断面三角形貼付突帯を下位は、断面台形状突帯を廻らし、端面は凹んでいる。	外面は横位の磨き、内面は横位の刷毛などで調整が認められる。
134		壺 底部	④8.0	明褐色	Q P L M	外方へ開きながら立ち上がると思われる器形で、若干厚めの平底の底部である。	内・外面ともに磨減が著しく調整痕は不明である。
135		〃		暗茶褐色	Q P L	外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる若干あげ底味の底部である。	外面は磨き認められ、内面は剥落しており不明である。

#### 石器 (Fig. 29, PL. 36)

本住居跡内出土の石器は、磨製石鏃(未製品を含む)等である。137・138は紫頁岩、139～142・144～148はフォンフェルス、143・149は頁岩、136は砂岩を素材に用いている。136は最大長11.0cm、最大幅4.4cm、最大厚3.1cm、重さ192gを測る。先端部及び基部は欠損のため不明であるが、棒状の敲打具が想定される石器である。137～145は磨製石鏃で、146～148は研磨が認められず製作途中のものと思われる。これらの磨製石鏃は扁平無茎で145を除いて基部にえぐりを認める。145は基部中央部が若干はらみを見る。138を除き二等辺三角形を呈し、鏃がはっきりし先端部付近で両方にわかれ基部までつづく。また使用により欠損していると思われる石鏃も認められる。137～145までの磨製石鏃は、両面ともに斜位、横位及び縦位に研磨痕を顕著に認める。

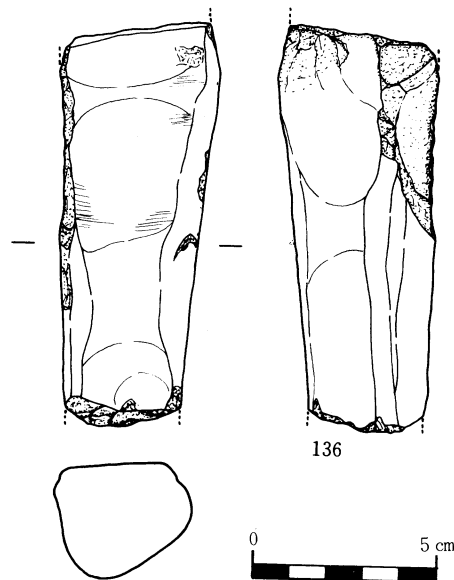


Fig. 29 9号住居跡内出土石器実測図(1)



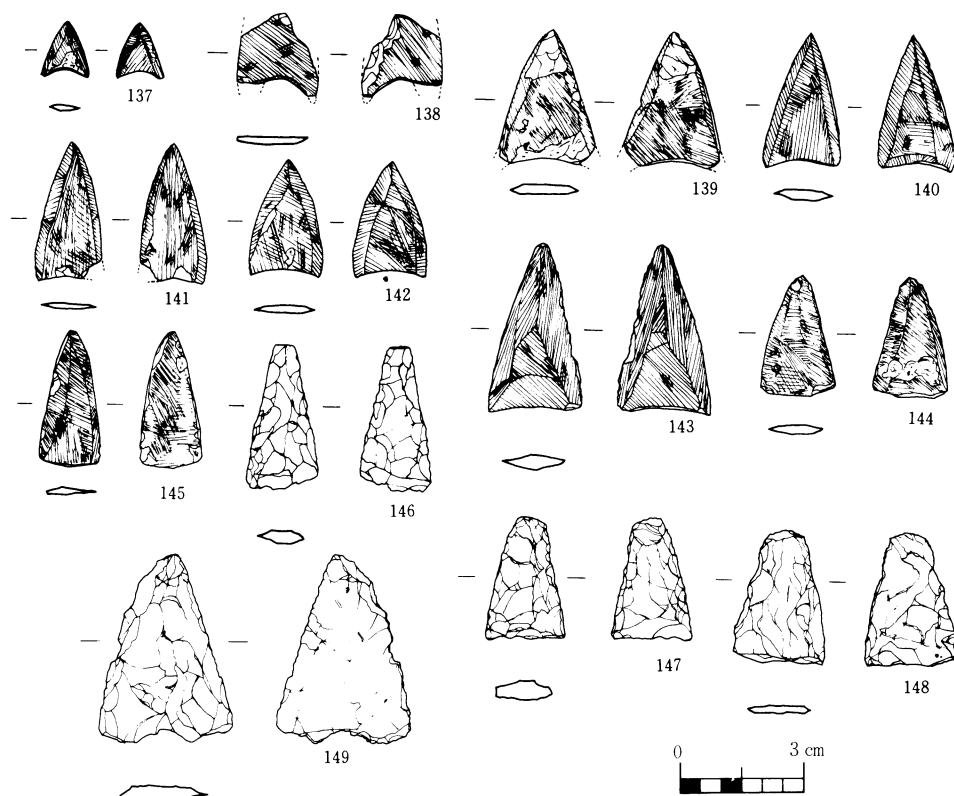


Fig. 30 第9号住居跡内出土器実測図(2)

Tab. 7 9号住居跡内出土石鏃一覧表

注) 法量の単位cm及びg

番号	現存最大長	現存最大幅	現存最大厚	現存重量	石材	完欠	備考
137	1.4	1.2	0.15	0.3	紫頁岩	○	磨製石鏃
138	(2.0)	(2.0)	(2.0)	1.0	紫頁岩	○	ク
139	3.2	(2.35)	0.25	2.2	フォルンフェルス	○	ク
140	3.3	1.9	0.25	1.7	ク	○	ク
141	3.2	(2.35)	0.25	2.2	ク	○	ク
142	2.8	1.9	0.2	1.2	ク	○	ク
143	4.1	(2.3)	0.35	3.1	頁岩	○	ク
144	(2.9)	1.8	0.25	1.9	フォルンフェルス	○	ク
145	(3.3)	1.55	0.20	1.5	ク	○	ク
146	3.5	1.8	0.35	3.0	ク	○	製作途中
147	3.0	2.0	0.5	3.0	ク	○	ク
148	3.25	2.2	0.25	2.8	ク	○	ク
149	4.55	3.3	0.35	6.1	頁岩	○	ク

⑩10号住居跡 (Fig. 31, 32, PL. 10)

11号住居跡との最短距離は3.3mで、8号住居跡まで9.1m、9号住居跡まで、4.3m、12号住居跡まで7.3m、中央区溝状遺構まで5.3mを測り、D-11・12区のⅡ層中で検出された。

長軸476cm、短軸529cm (ともにベッド状張り出し部を含む) を測る。主軸の方位はN-89°-Eをとる。支柱穴は2本で、西側：径44~64cm、深さ60cm、東側：径37~62cm、深さ51cm、心心距離は177cmを測る。遺構検出面からの深さは63cmで、ベッド状遺構までは約40である。

本住居跡の平面の形状は、基本的にはほぼ長方形を呈するが、北壁、西壁及び南西隅にはベッド状張り出しを検出し、北壁側は、206×116cm、西側は211×81cm、南西隅は180×155cmを測る。また、住居跡内の東壁寄りには、118×214cmのベッド状遺構を検出し、床面との比高差は約20を測る。西側及び南西隅のベッド状遺構には、柱穴状の掘込を検出した。西側及び東側のベッド状遺構は切り出し調整により、北側及び南西隅のベッド状遺構は貼り付けによる調整がなされている。北側及び東側ベッド状遺構及び住居跡内床面には、壁帯溝を検出した。北側ベッド状遺構の壁帯溝は、切り出しによりベッド状遺構が造られたあと、貼り付けにより調整され、その一部が辛じて遺存し、幅3~5cm、深さ約2~5cmを測る。東側ベッド状遺構の壁帯溝は北壁から東壁寄りにかけてみられ、幅8~18cm、深さ5~7cmを測る。また、住居跡の床面には、西側ベッド状遺構直下に幅8~11cm、深さ3~6cmを測る溝状遺構を認めた。住居跡の床面は貼り付けの調整を部分的に認め、南側中央壁際には、118×84cm、深さ36cmの略円形状の土壇を検出した。土壇の中には径27×35cm、深さ17cm、と径35~44cm、深さ18cmの柱穴状の掘込を検出し、その形状は略方形である。

なお、本住居跡の出土遺物は埋土中より甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器などの破片や鉄製の鉋が出土した。

土器 (Fig. 32, PL. 30)

Tab. 8 10号住居跡内出土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復元径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
150	PL. 30	甕 口縁部		赤茶褐色	Q P L M H	逆L字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
151	〃	〃		暗褐色	Q P L M	逆L字状に近く外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側はわずかな張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
152	〃	〃		暗褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には稜を作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。

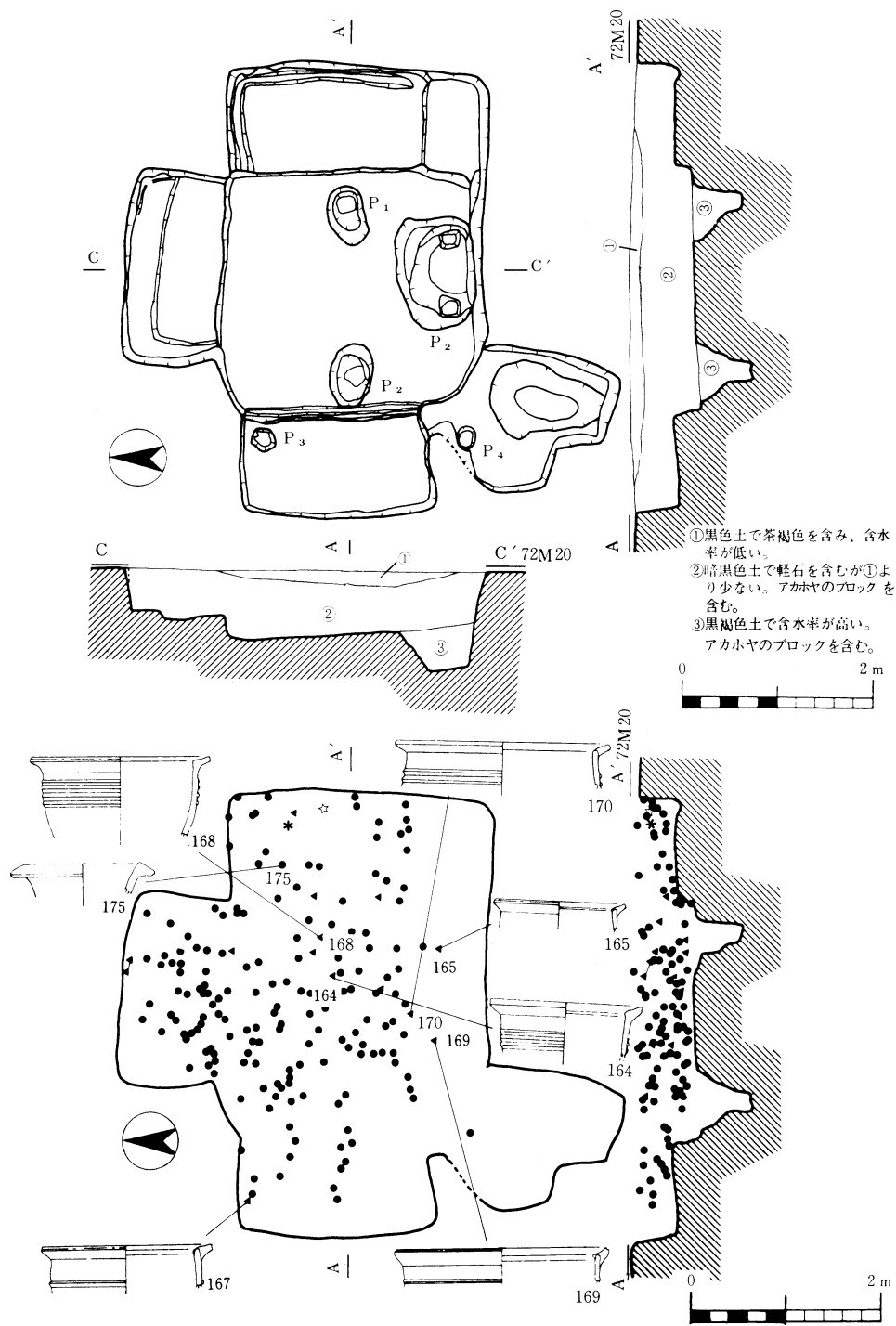


Fig.31 10号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

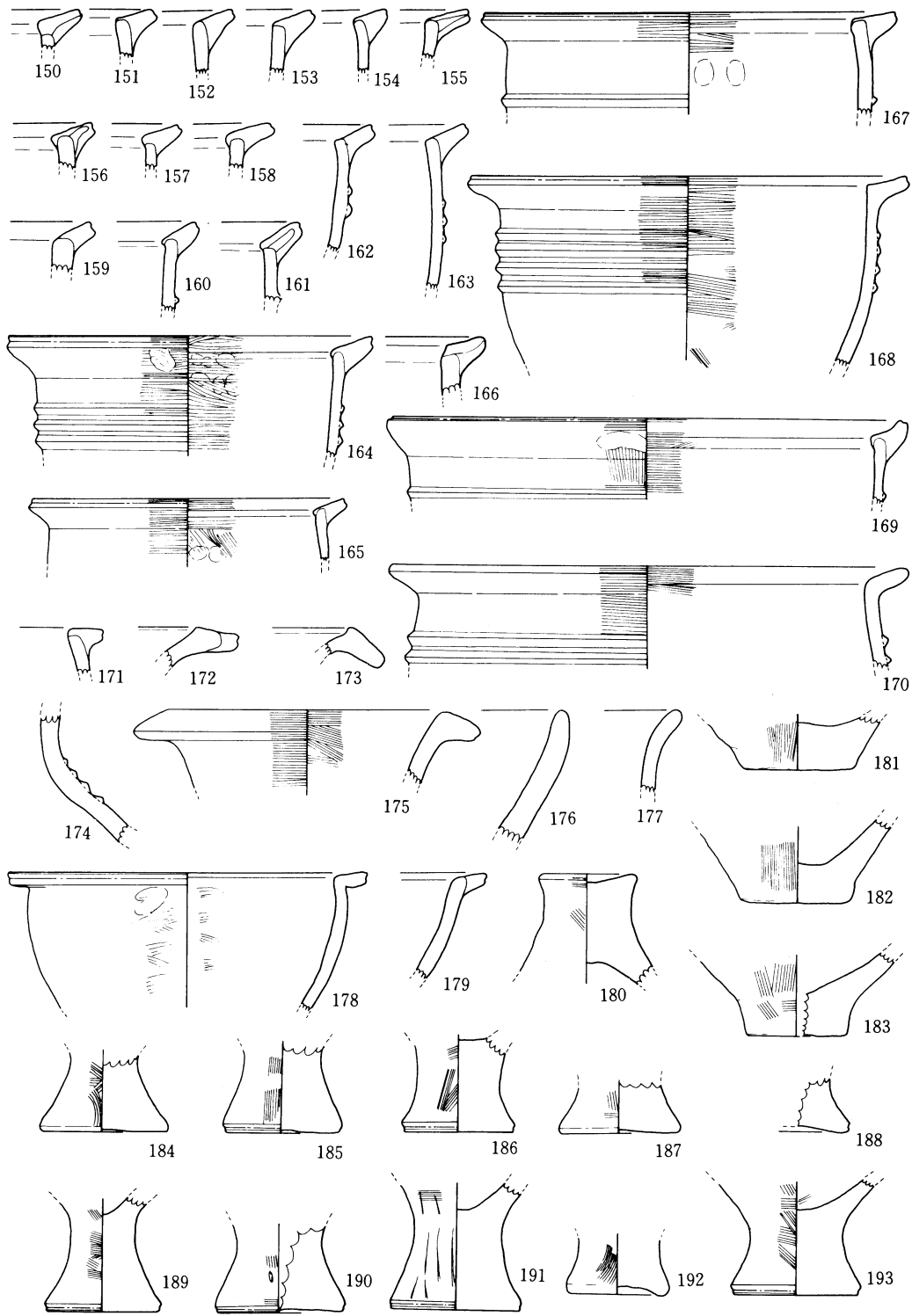


Fig.32 10号住居跡内出土土器実測図



番号	図版 番号	器種・器部	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴 、 そ の 他	手 法 の 特 徴
153	PL 30	甕 口縁部		暗褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。	外面は横位、内面は横位及 び斜位の刷毛などで調整であ る。
154	〃	〃		暗褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部で、口縁部上面 は短かく、口縁部端面はわずかに凹む。口縁 部内側には稜を作り出す。	外面は横位及び縦位、内面 は指頭圧調整後横位の刷毛な で調整である。
155	〃	〃		茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
156	〃	〃		暗茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 端面は凹む。口縁部内側には短かい。煤の付 着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
157	〃	〃		暗茶褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出 す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
158		〃		明褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 端面はわずかに凹む。縁部内側には張り出し を作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
159	PL 30	〃		暗茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 端面は凹む。煤の付着を認める。	外面は横位及び縦位、内面 は横位の刷毛などで調整であ る。
160	〃	〃		茶褐色	Q P L H	直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。 口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には 張り出しを作り出す。一条の断面三角形貼付 突帯を廻らす。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
161	〃	〃		明褐色	Q P L H	内湾気味の口縁部で、くの字状に外反する。 口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出し を作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻 らす。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧 調整後横位の刷毛などで調整で ある。
162	〃	甕 口縁部 胴部		暗褐色	Q P L	内湾する口縁部で、くの字状に外反する。 口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り 出す。二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。 煤の付着を認める。	外面は煤のため部分的であ るが横位、内面は指頭圧調整 後横位の刷毛などで調整であ る。
163	〃	〃		褐色	Q P L M	内湾する口縁部で、くの字状に外反する。 口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り 出す。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。 煤の付着を認める。	内・外面ともに薄い横位の 刷毛などで調整である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
164	PL 30	甕 口縁部	①(22.8) ③(18.9)	灰褐色	Q P L	わずかな外傾気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。現存で、三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整で、外面には指紋の付着を認める。
165	〃	〃	①(20.0)	暗茶褐色	Q P L	内傾気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側へ張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後、横位及び斜位の刷毛などで調整である。
166		〃		暗茶褐色	Q P L	口縁部は逆し字状に近く外反する。口縁部端面は丸味を帯びる。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
167		甕 口縁部 胴部	①(25.6)	黒褐色	Q P L M	内湾する口縁部で、逆し字状に近く外反する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。口縁部上面まで煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。
168		〃	①(27.4) ③(23.6)	明褐色	Q P L H	胴部は張らず、直口する口縁部で、逆し字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。四条の断面三角形貼付突帯を廻らす。口縁下面及び突帯下位には1~2mm程度の煤の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
169	PL 30	甕 口縁部	①(32.4)	褐色	Q P L M	直口気味の口縁部で、くの字状に外反し、口縁部端面は凹む。口縁部上面も大きく凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は指頭圧調整後縦位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
170	〃	〃	①(32.3)	暗茶褐色	Q P L M	内傾気味の口縁部で、逆し字状に近く外反する。口縁部端面は丸味を帯びる。二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
171	〃	鉢 口縁部		明茶褐色	Q P L	内傾する口縁部で、逆し字状に外反し口縁部上面は短かく、口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
172		壺 口縁部		暗茶褐色	Q P L H	大きく外反すると思われる口縁部である。口縁部は垂れ下り気味に外反し、口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
173	PL 30	〃		茶褐色	Q P L M	口縁部は垂れ下り気味に外反し、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外ともに横位の刷毛などで調整である。
174	〃	壺 肩部		暗茶褐色	Q P L M	肩部と思われるが、破片のため不詳である。四条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面突帯上位は縦位、突帯付近は横位、突帯より下位は縦位の刷毛などで調整で、内面指頭圧調整を認める。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
175	PL. 30	壺 口縁部	①(21.6)	茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部端面及び口縁部内側とも丸味を帯びる。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
176	〃	鉢 口縁部		暗茶褐色	Q P L H	底部付近より外方へ大きくひらきながら立ち上がり、口縁部付近は直口気味の口縁部で、口唇部端は丸味を帯びる。	内・外面ともに指頭圧調整後刷毛などで調整である。
177	〃	〃		黒褐色	Q P L M	屈折せず外反する口縁部である。口唇部は丸味を帯びる。	磨滅のため不明である。
178	〃	鉢 口縁部 胴部	①(22.4) ③(19.6)	明茶褐色	Q P L	底部付近より外方へ開きながら立ち上がる器形と思われ、口縁付近で内湾する口縁部で、逆L字状に外反する。口縁部端面は凹む。	外面は横位及び斜位、内面は指頭圧調整後横位及び縦位の刷毛などで調整である。
179	〃	〃		赤茶褐色	Q P L H	外方へ立ち上がりながら外傾気味の口縁部で、逆L字状に外反する。口縁部端面は凹んでいる。	内・外面ともに指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。
180		蓋		赤茶褐色	Q P L H	頂部のつまみ部は凹んでいる。甕形土器の蓋と思われる。	器面は全体的に刺落し、部分的に刷毛目を残す。
181		壺 底部	④6.8	暗茶褐色	Q P L M	平底の底部である。外方へ開きながら立ち上がると思われる器形でお厚い底部である。	縦位及び斜位の刷毛などで調整である。
182	〃	〃	④7.6	暗褐色	Q P L H	平底の底部である。外方へ開きながら立ち上がると思われる器形で、お厚い底部である。	縦位の刷毛などで調整である。
183	〃	〃		暗茶褐色	Q P L M	平底の底部である。外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる器形で、お厚い底部で一部欠損する。	縦位及び斜位の刷毛調整である。
184	PL. 30	甕 底部	④(8.0)	明褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は短かく、鋭角的に広がり、裾の端面は丸味を帯びる。底面中央部に若干の凹みを認め、一部欠損する。	斜位及び縦位の薄い刷毛などで調整である。
185	〃	〃	④(7.5)	赤茶褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は短かく、あまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。底面中央部に若干の凹みを認め、一部欠損する。	縦位の刷毛などで調整である。
186	〃	〃	④7.0	褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は短かく、あまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	斜位の刷毛などで調整である。
187	〃	〃	④7.6	褐色	Q P L	充実した脚台である。一部欠損しているため不明であるが、裾はあまり広がりがなくと思われ、裾の端面は丸味を帯びる。底面中央部は若干凹む。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
188		甕底部		褐色	Q P L	大半が欠損し、裾の端面は凹む。充実した脚台である。裾端面は若干凹むと思われる。	横位及び斜位の薄い刷毛などで調整である。
189	PL. 30	〃	④(7.2)	褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。
190		〃	④(8.2)	褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は短かく、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。底面は若干凹み、一部欠損する。	横位及び斜位の刷毛などで調整で部分的に認める。
191	PL. 30	〃	④8.2	褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は長く、あまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	指頭圧による調整であるが鮮明さに欠け、部に横位の刷毛などで調整を認める。
192		〃	④6.4	褐色	Q P L H	充実した脚台である。欠損しているが、裾は短かく、裾の端面は丸味を帯びる。底面中央部は若干凹む。	斜位の刷毛などで調整である。
193	PL. 30	〃	④8.0	暗褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は短かく、あまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。

### 鉄器 (Fig. 33, PL. 37)

194は鉄製の鉞で、住居跡内埋土の上部より出土した。現在最大全長108mm、最大幅20mm、最大厚2.5mm、重さ15.7gを測る。断面が三日月形を呈し、柄部に草紐巻を施した痕跡を認め、柄部末端部には刃部とは逆円反りを観察し、随所に銹塊を残す。吉ヶ浦長峰式に分類され、柄部末端の一部のサンプリングによる分析の結果、鍛造品である。

注1. 小田氏によると、鉞を吉ヶ浦型と立岩型に分類し、前者は幅1.2～2センチで長さ五センチ程度の短峰式と10センチを超える長峰式に分け、後者は幅1～1.2cmと吉ヶ浦型よりせまく、長さ15センチくらいの長峰式で先端部は凸面型の中央に鑄をつけて横断面がV字形をなし、先端にむかって次第に反り上がっていく側面型を呈するとされている。(橋口達也「ふたたび初期鉄製品をめぐる二、三の問題について」たたら研究会・1893による。)

注2. 大澤正己氏の分析による。

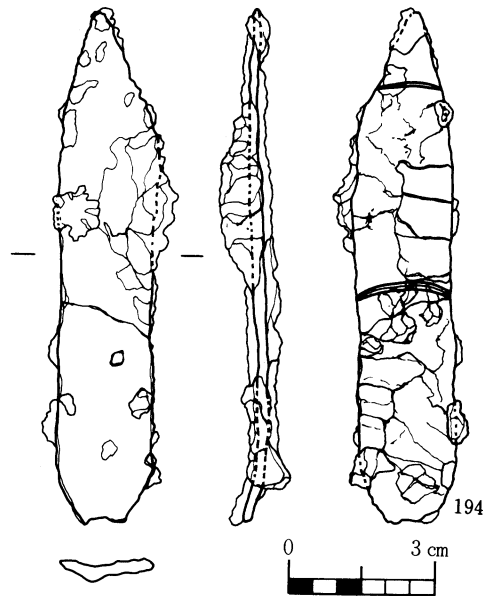


Fig.33 10号住居跡内出土鉄器実測図



⑪11号住居跡 (Fig. 34~36, PL. 11)

10号住居跡までの最短距離は、3.3mで、12号住居跡まで、9.7m、8号住居跡まで8.5m、5号住居跡まで、14.4mを測り、C・D-10・11区のⅡ層中で検出された。

長軸508cm、短軸497cmを測る。主軸の方位はN-73.5°-Eをとる。主柱穴は2本で、西側：径44~52cm、深さ48cm、東側：径45~54cm、深さ56cmで、心心距離は190cmを測る。遺構検出面からの深さは59cmで、ベッド状遺構上面までは22~34cmである。

本住居跡の平面の形状は、基本的にはほぼ隅丸方形を呈する。南西隅と南東隅寄りにはベッド状張り出しを認めた。西壁の一部から北壁の一部にかけては、約70cm幅において畑地灌漑パイプ埋設のため削平を受けている。西壁の一部から北壁の一部にかけて110~130cmの幅で、貼り付け調整によるベッド状遺構を検出した。南西隅には190×103~120cm、南東隅には115×148cm

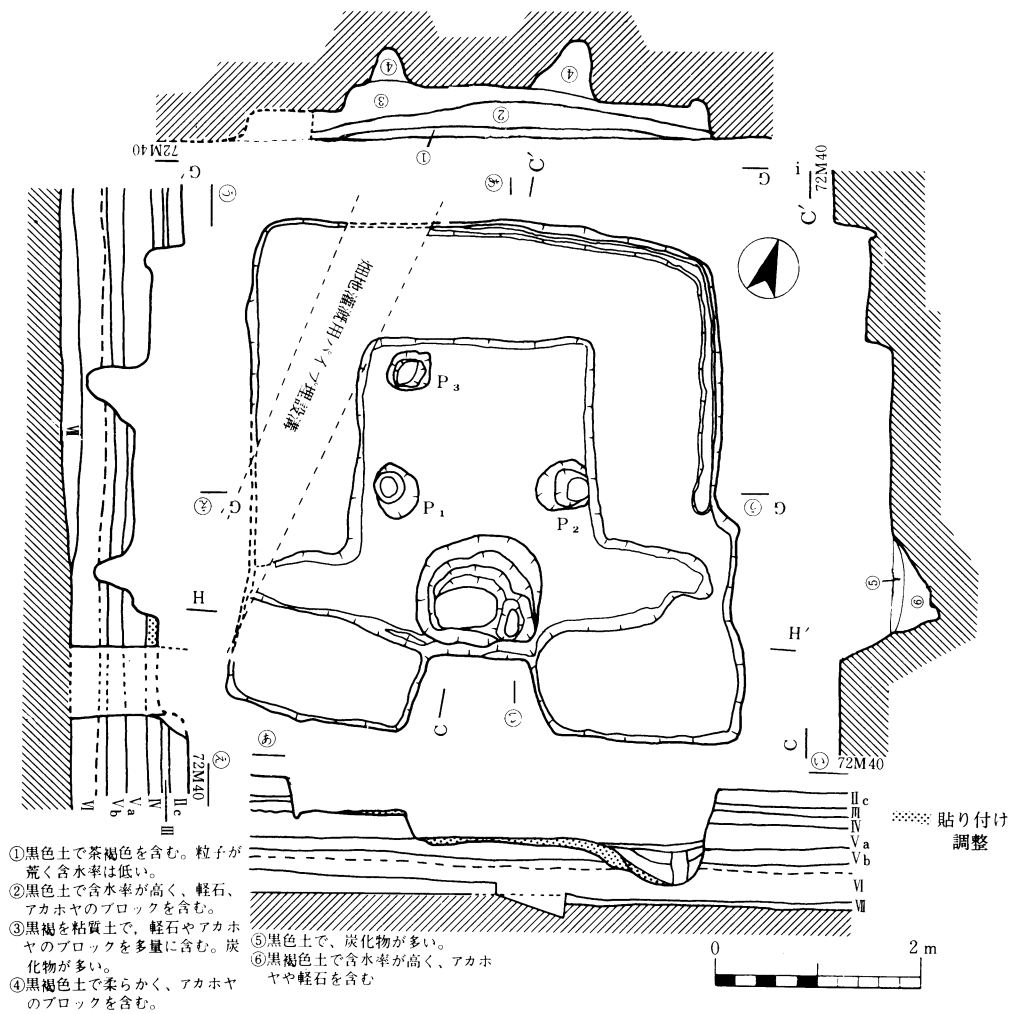


Fig. 34 11号住居跡実測図

の規模で、削り出しによるベッド状遺構を検出し、南壁中央部は、台形状の障壁を呈する格好となる。西側、北側及び東側壁寄りのベッド状遺構の北側壁際の一部から東側壁際中央付近にかけては、幅10～16cm、深さ6～8cmの壁帯溝を検出した。床面の中央付近は硬く踏み締められ、部分的に貼り付け調整を認めた。南側の台形状を呈する障壁際には、122×109cm、深さ41cmの略円形状の土坑を検出し、土坑中には径24～40cm、深さ10cmの柱穴状の掘込を認め、土坑内埋土との色調を異にする。

なお、住居跡内の出土遺物は、床面に壺形土器破片が見られ、埋土には甕形土器、壺形土器、鉢形土器、手捏ね土器などの破片や磨製石鏃、軽石製品が出土した。軽石製品は、磨る作用のためか凶化上は平坦面を呈しているが、よく観察すれば若干の凹みを認める。

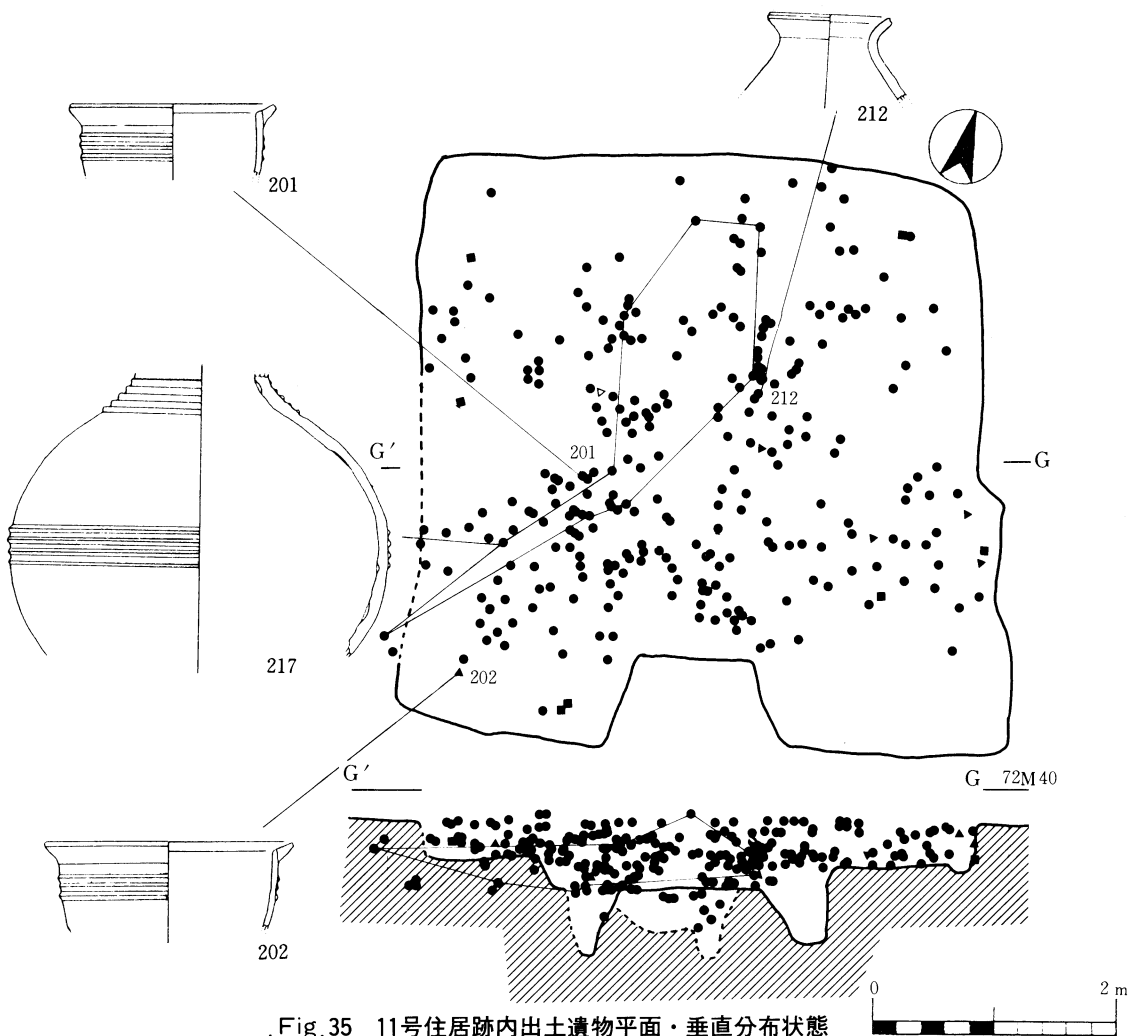


Fig. 35 11号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

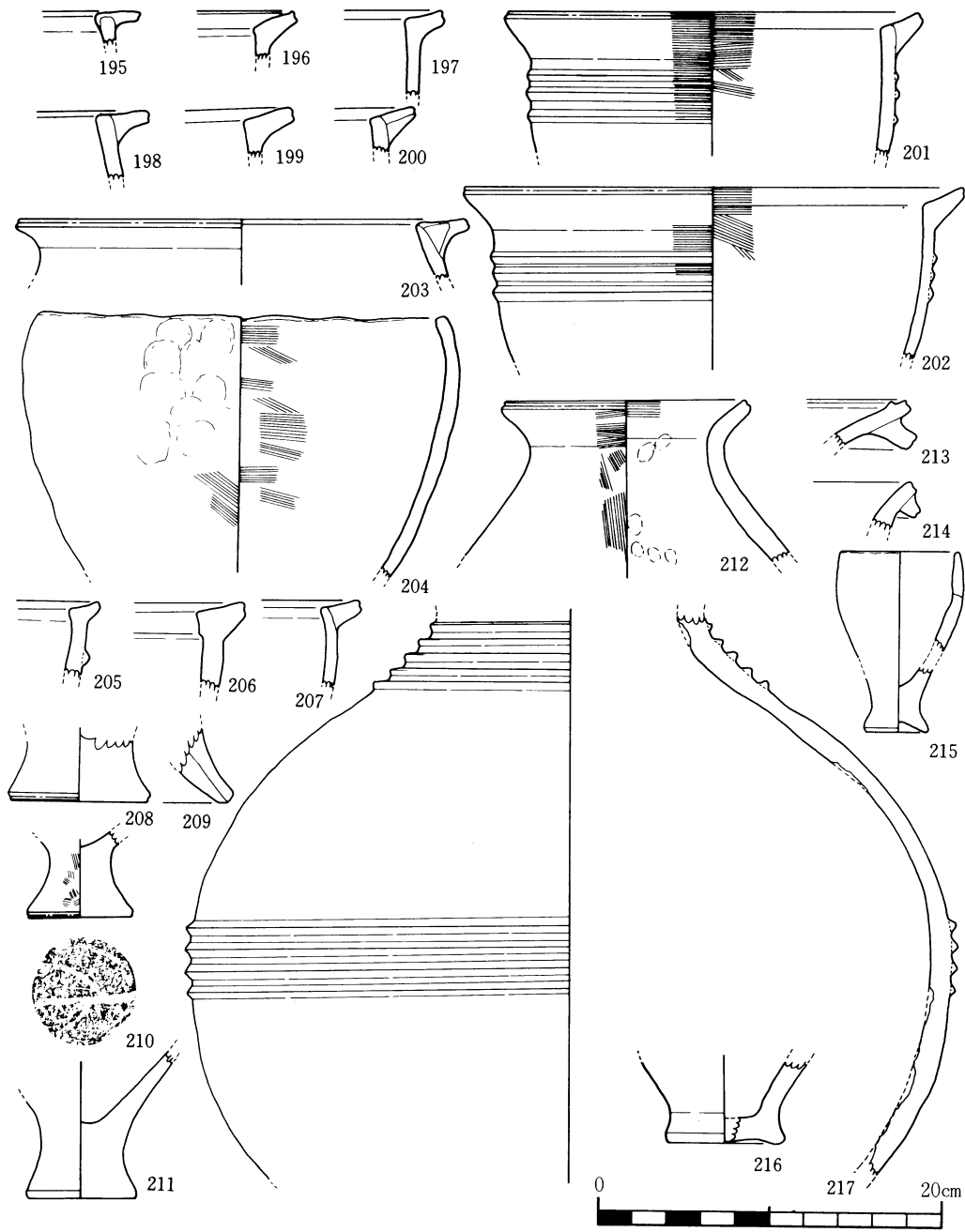


Fig. 36 11号住居跡内出土土器実測図

土器 (Fig. 36, PL. 31)

Tab. 9 11号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復元径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
195	PL. 31	壺 口縁部		褐色	Q P L M	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
196	〃	〃		褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
197	〃	〃		暗茶褐色	Q P L M	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
198	〃	〃		暗褐色	Q P L H	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。煤の付着を認める。	外面は指頭圧調整後横位、内面は横位の刷毛などで調整で、口縁部上面は鈍磨きを認める。
199	〃	〃		黒褐色	Q P L M	逆L字状に近く外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
200	〃	〃		暗茶褐色	Q P L M	逆L字状に近く外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には稜を作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
201	〃	甕 口縁部 胴部	①(24.4) ③(21.2)	暗褐色	Q P L M	直行気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側に稜を作り出す。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
202	〃	〃	①(29.2) ③(25.6)	暗茶褐色	Q P L M	外傾気味に立ち上がりながら直口する口縁部である。くの字状に外反する。口縁部端面はわずかに凹む。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
203	〃	甕 口縁部	①(26.8)	明褐色	Q P L H	大きく内側する口縁部と思われる器形で、口縁部は逆L字状に外反し、口縁部端面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整で、一部鈍磨きを認める。
204	〃	鉢 口縁部 胴部	①(23.4) ③(25.4)	暗茶褐色	Q P L M	底部付近より外方へひらきながら立ち上がり、内湾する口縁部である。口唇部は丸味を帯びる。煤の付着を顕著に認める。	外面は指頭圧調整痕が著しく認められ、煤の付着が著しいが、斜位の刷毛などで調整で、内面は指頭圧調整を認める。
205	PL. 31	鉢 口縁部		明茶褐色	Q P L	外傾気味の口縁部で、逆L字状に外反する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側は張り出しを作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は不明、内面は指頭圧調整後刷毛などで調整である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
206		甕 口縁部		暗茶褐色	Q P L	逆し字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内傾には幅の大きい稜を作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに指頭圧調整で、外面は横位の刷毛などで調整で、指紋の付着を見る。内面は鈍磨きを一部に認める。
207	PL 31	〃		暗茶褐色	Q P L	内湾する口縁部で、逆し字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
208		甕 底部	④(8.2)	褐色	Q P L	充実した脚台である。裾はあまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈し、一部欠損する。	薄い刷毛などで調整である。
209		〃		黒褐色	Q P L M	破片のため詳細は不明であるが、裾は大きく広がり、あげ底の脚台である。	鈍磨きを認める。
210		〃	④6.3	褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は短かく、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。底面に木の葉の圧痕を認める。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。
211		〃	④6.6	褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は短かく、あまり広がりがなく、裾の端面は丸味を帯びている。	外面は横位、斜位及び縦位、内面は口縁部付近は横位の刷毛などで調整で、内面は剥落が著しい。
212	PL 31	壺 口縁部 肩部付近	①(14.4)	明灰色	Q P L	肩部より内傾しながら立ち上がり、頭部でしまり、外方へ大きく外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
213		壺 口縁部		明茶褐色	Q P L M	大きく外方へひらく口縁部と思われる。口縁部の外側直下に突帯を廻らし、口縁部が二又状を呈する。口縁部端面及び突帯端面は凹む。口縁部内側に断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
214		〃		暗褐色	Q P L M	口縁部の外面直下に突帯を廻らし、口縁部が二又状を呈する。口縁部端面及び突帯端面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
215	PL 31	手捏ね土器	①(6.8) ②(10.6) ③(7.4) ④(3.8)	暗茶褐色	Q P L	若干あげ底の底部より外方へあまりひらかず立ち上がりながら直口気味の口縁部である。口唇部は丸味を帯びる。	内・外面とも指頭圧調整で、一部外面には鈍磨きを認める。輪積みの手法を残す。
216	〃	壺 底部		褐色	Q P L	若干あげ底で、外方へひらきながら立ち上がる底部で、一部欠損する。	縦位及び斜位の刷毛などで調整を認める。
217		壺 肩部 腹部	③(44.4)	茶褐色	Q P L H	胴の張った球形に近い器形で、肩部には五条、胴部には四条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位、斜位及び縦位のクシメ状の調整を認め、内面は剥落が磨滅のため不明である。

石器 (Fig. 37, PL. 35)

本住居跡内出土の石器は、磨製石鏃の3点である。218・219はフォルンフェルス、220は頁岩を素材に用いている。218は、最大長2.6cm、最大幅1.4cm、厚さ0.2cm、重さ1.5gを測り扁平無茎の凹基

式で、二等辺三角形を呈する。細身の鏃で、先端部は欠損し、両面には研磨痕

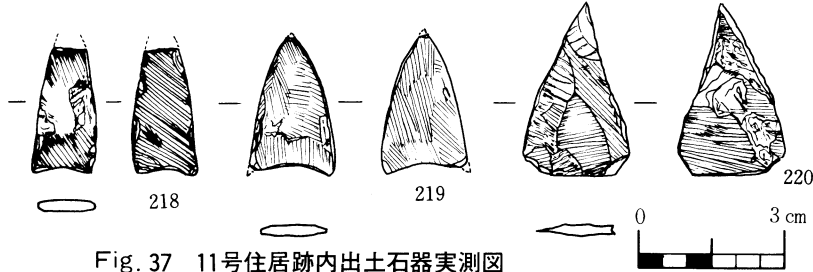


Fig. 37 11号住居跡内出土石器実測図

を残す。219は、最大長2.85cm、最大幅1.8cm、厚さ0.25cm、重さ2.2gを測り、扁平無茎の凹基式で、二等辺三角形を呈し、両側辺ともに若干丸味を帯びる。先端部及び基端部及び基部片側は一部欠損する。両面ともに研磨痕を認める。220は、最大長3.6cm、最大幅2.2cm、厚さ0.25cm、重さ2.2gを測り、扁平無茎で、両側辺や両基部端及び先端部の大半を欠損しているため詳細には不明である。研磨痕は一部に認める。

軽石製品 (Fig. 38)

221は軽石製品で、最大長11.4cm、最大幅7.1cm、最大厚2.3cmを測り、一部を欠損する。片面は自然面を残し、片面は平坦面を呈し、斜位に磨る作業のためか、その痕跡を観察できる。

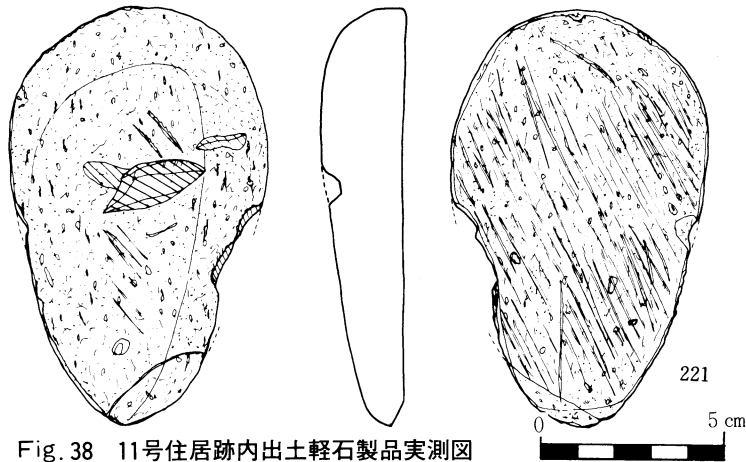


Fig. 38 11号住居跡内出土軽石製品実測図

⑫12号住居跡 (Fig. 39~42, PL. 13)

10号住居跡までの最短距離は7.3mで、11号住居跡まで9.7m、21号住居跡まで13.6m、中央区溝状遺構まで3.44mを測り、B・C-11・12区のⅡ層中で検出された。

長軸793cm (ベッド状張り出し部を含む)、短軸718cmを測る。主柱穴は5本で、P<sub>1</sub>:径54~66cm、深さ63cm、P<sub>2</sub>:径72~78cm、深さ68cm、P<sub>3</sub>:径56~100cm、深さ69cm、P<sub>4</sub>:径40~48cm、深さ78cm、P<sub>5</sub>:径50~80cm、深さ79cmを測る。それぞれの心心距離は、P<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>

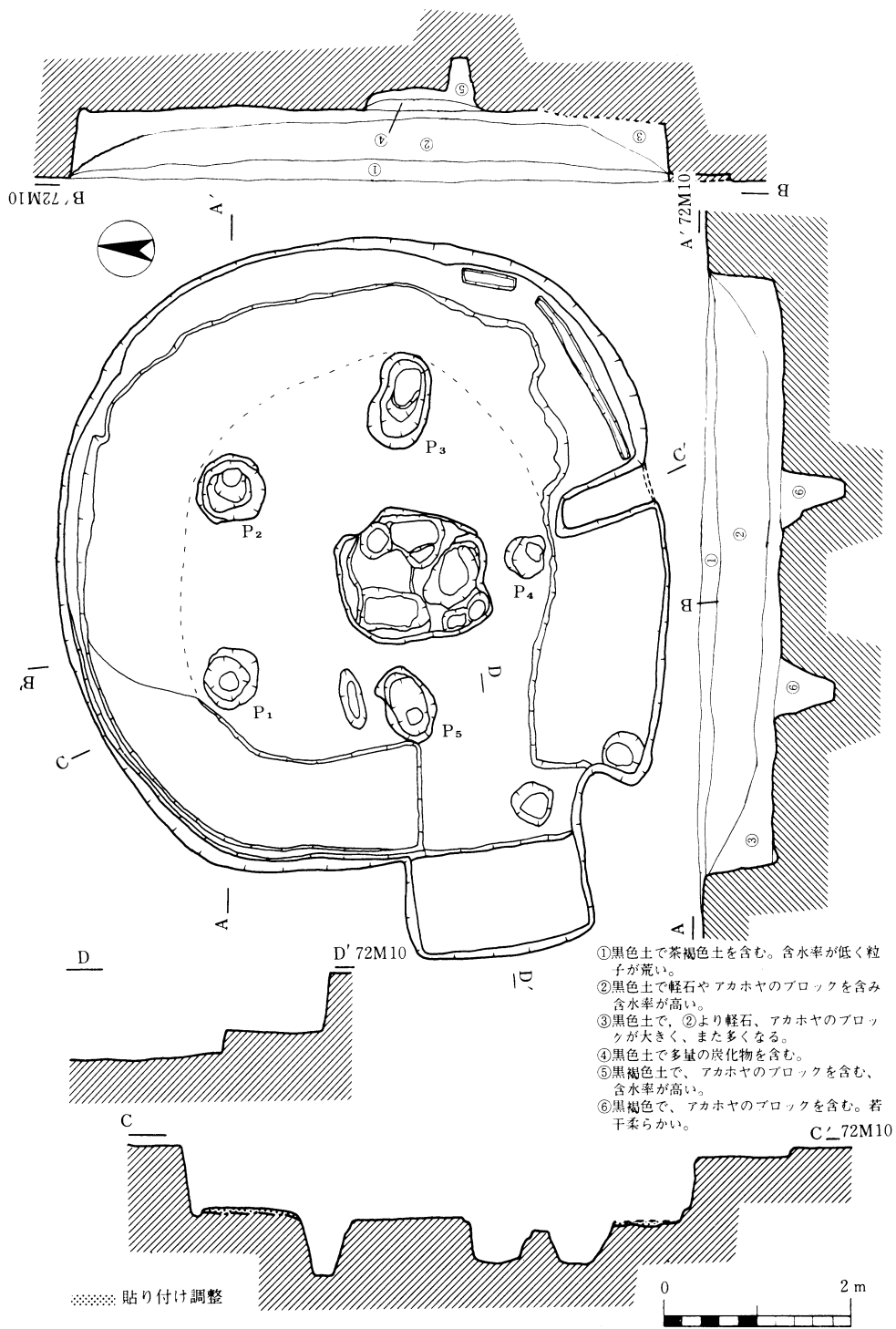


Fig. 39 12号住居跡実測図

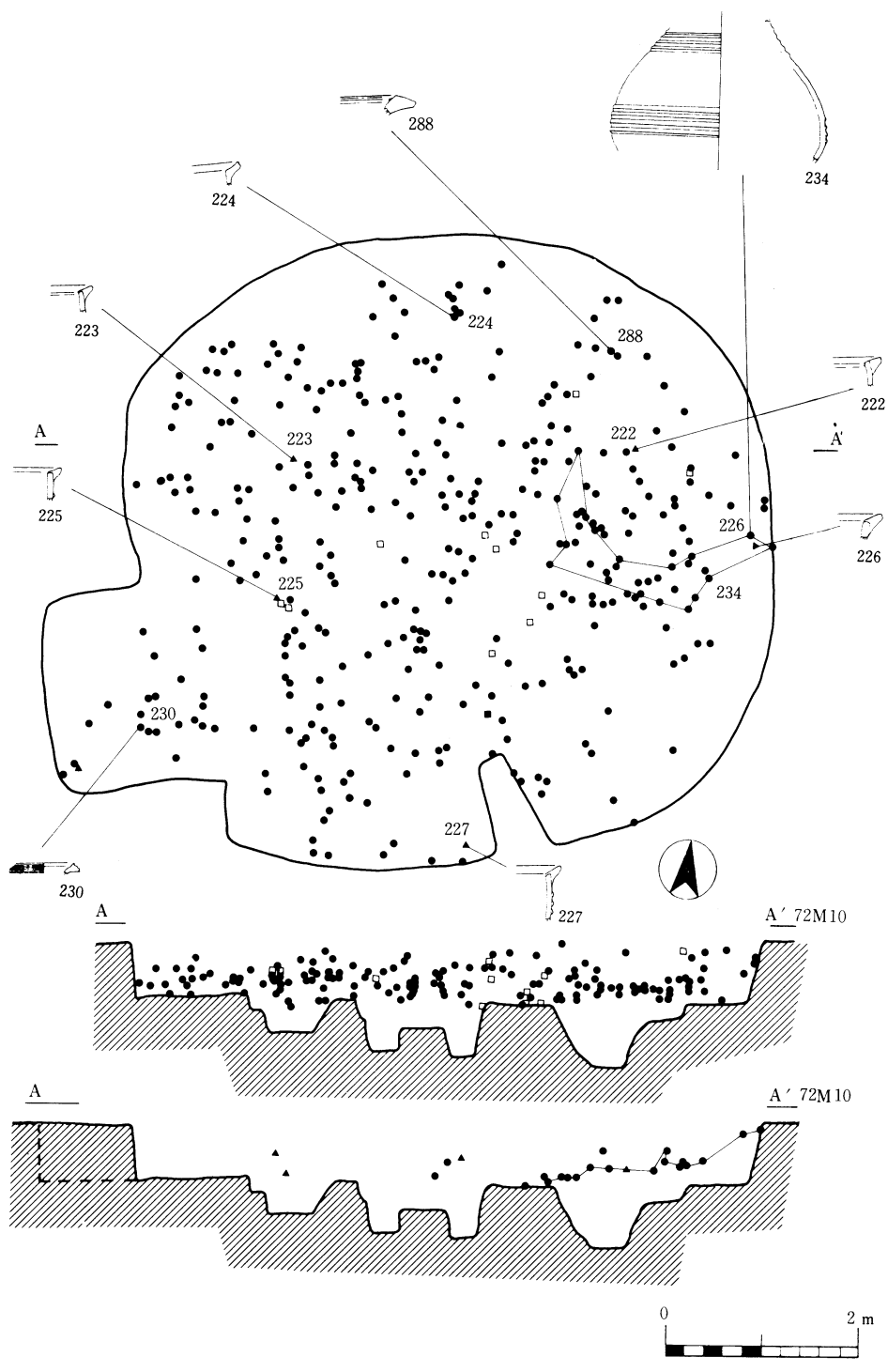


Fig. 40 12号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態



:212cm, P<sub>2</sub>~P<sub>3</sub>:218cm, P<sub>3</sub>~P<sub>4</sub>:221cm, P<sub>4</sub>~P<sub>5</sub>:216cm, P<sub>5</sub>~P<sub>1</sub>:217cmを測る。  
遺構検出面からの深さは85cmで、ベッド状遺構面まで約65cmである。

住居跡の平面の形状は、ほぼ円形状を呈する。南西側には200×120cmのベッド状張り出しを認める。南側壁より110×51cm、高さ70cmの障壁が北西方向に突出したような格好で検出された。床面においては、貼り付けにより調整され、西側壁際から柱穴P<sub>1</sub>付近までと南側壁際より障壁まではベッド状遺構を認め、北側周縁壁寄りから南側障壁にかけて周縁部の壁際に、わずかにその痕跡が残存し、遺存状態は良好でない。その現況から見れば支柱穴を取り囲むようなベッド状遺構が想定される。床面の西側壁際から北側壁際一部までと南東側壁際の一部には、幅8~15cm、深さ6cmの壁帯溝を認めた。床面のほぼ中央部には、163×141cm、深さ45cmの土拡が検出され、その土拡内には複雑な掘込がみられた。

なお、本住居跡内の出土遺物は、床面からの出土は認められるものの量は少なく、土拡内埋土中より棒状炭化物を含む多量の炭化物、甕形上器破片（煤の付着）や石片などが出土した。住居跡内の埋土中よりは、甕形上器破片、壺形土器の肩部から腹部にかけての破片、瀬戸内系の凹線文の壺形土器、磨製石鏃が出土した。

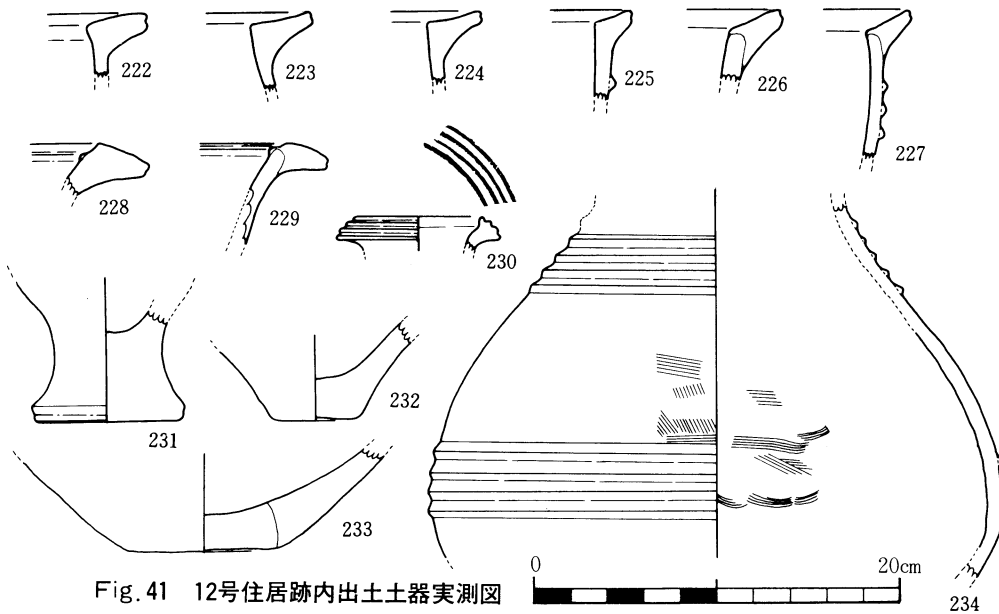


Fig. 41 12号住居跡内出土土器実測図

土器 (Fig. 39~42, PL. 31)

Tab. 10 12号住居跡内出土土器一覧表

法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復元径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
222		甕 口縁部		明茶褐色	Q P <sub>L</sub> H	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
23		甕 口縁部		暗褐色	Q P L M	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。口縁部上面は凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
224		〃		暗茶褐色	Q P L M	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。口縁部上面は凹む。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は斜位及び横位の刷毛などで調整である。
225		〃		暗茶褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
226		〃		暗褐色	Q P L M H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。	外面は横位、内面は縦位及び横位の刷毛などで調整である。
227		〃		黒褐色	Q P L M	内湾気味の口縁部で、くの字状に外反し、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には稜を作り出す。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。
228		壺 口縁部		暗茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には、一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
229		壺 口縁部		明茶褐色	Q P L M	大きく外方へひらきながら垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には、一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位、内面は剥落が著しいが横位の刷毛調整で、口唇部は鈍磨きを認める。
230	PL 31	〃		明茶褐色	Q P L M	短かい口縁部が大きく外反し、口縁部端面が肥厚拡張され、その拡張部に三条の凹線文を施している。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
231		甕 底部	④8.4	褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は短かく、あまり広がらず、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	指頭圧調整後刷毛などで調整を部分的に認める。
232		壺 底部	④4.6	黒褐色	Q P L M	平底の底部で、外方へひらきながら立ち上がると思われる器形で、ぶ厚い底部である。	鈍磨きを認める。
233		大甕 底部	④(8.0)	明茶褐色	Q P L M	平底の底部で、外方へ大きくひらきながら立ち上がると思われる器形で、厚い底部である。	剥落しているため調整は不明である。
234		壺 肩部 腹部	③31.2	黒茶褐色	Q P L M	腹部の張った扁球形に近い器形で、肩部に五条、胴部に四条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は鈍磨きで、内面は剥落し、調整は不明である。

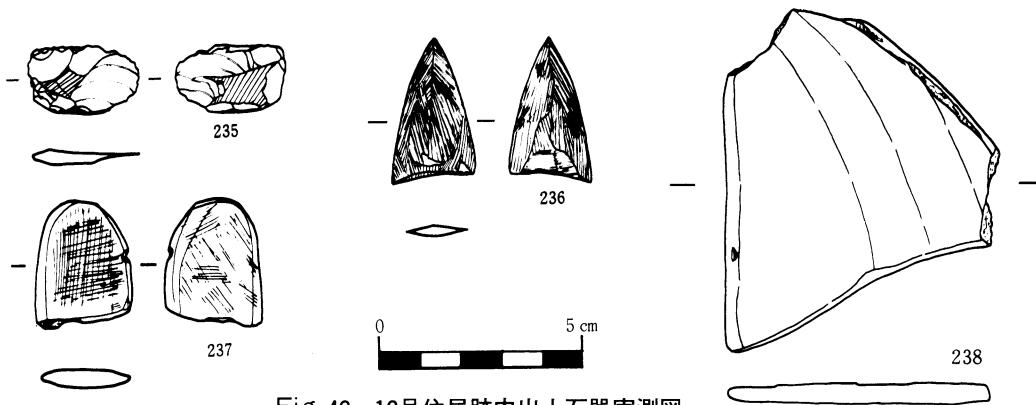


Fig. 42 12号住居跡内出土石器実測図

石器 (Fig. 42, PL. 35, 36)

本住居跡内出土の石器は、磨製石鏃、砥石などである。235は頁岩、236はフォンフェルス、237はフォンフェルス化した頁岩、238は細粒砂岩を素材に用いている。235は、磨製石鏃で、大半は欠損している。現存最大張1.6cm、最大張2.7cm、厚さ0.4cm、重さ3gを測り、内・外面ともに研磨痕を一部に残している。236は、扁平無茎の凹基式の磨製石鏃で、二等辺三角形状を呈し、最大長3.55cm、最大幅2.1cm、厚さ0.3cm、重さ1.7gを計る。鏃は先端部から基部につづき、内外面ともに器面全体に研磨痕を認める。237は、用途は不詳で、最大長3.1cm、最大幅2.4cm、厚さ0.45cm、重さ6gを測る。両器面とも研磨痕を認め、先端部及び基部ともに磨かれ、製作時のものと思われる。238は扁平な素材を用い、最大長8.3cm、最大幅6.75cm、厚さ0.5cm、重さ30gを測り、両面ともに研磨を認め、素材のためか研磨痕は不明で、砥石の用途が考えられる。

⑬13号住居跡 (Fig. 43~45, PL. 12)

3号・4号掘立柱建物跡までの最短距離は、8.3mで、9号住居跡まで、11.2m、10号住居跡まで、14m、14号住居跡まで、14m、中央区溝状遺構まで、6.3mを測り、C・D-13区のII層中で検出された。

長軸440cm、短軸420cmを測り、主軸の方位はN-65°-Eをとる。主柱穴は2本で、西側：径36~50cm、深さ54cm、東側：径40~43cm、深さ48cmを測り、心心距離は182cmである。東側柱穴には径20×20cmの柱痕跡を認めた。遺構検出面からの深さは66cmで、ベッド状遺構までは43~50cmを測る。

本住居跡の形状は、基本的に隅丸方形を呈する。南壁中央付近には102×50cm、高さ63cmの略長方形の障壁を認めた。南東隅には、112×90cm、高さ18cmの切り出しによるベッド状遺構や南側障壁際から西側及び北側の壁際にかけては、幅96~118cm、高さ15cmの貼り付け調整によるベッド状遺構が連続した状態で検出された。また北東隅際には、100~118×190cm、高さ21cmの切り出しによるベッド状遺構を認めた。北側ベッド状遺構の一部には、貼り付け調整の遺存が悪く認められない部分と東側壁寄りの一部を除き、全壁周際には、幅6~13cm深さ6

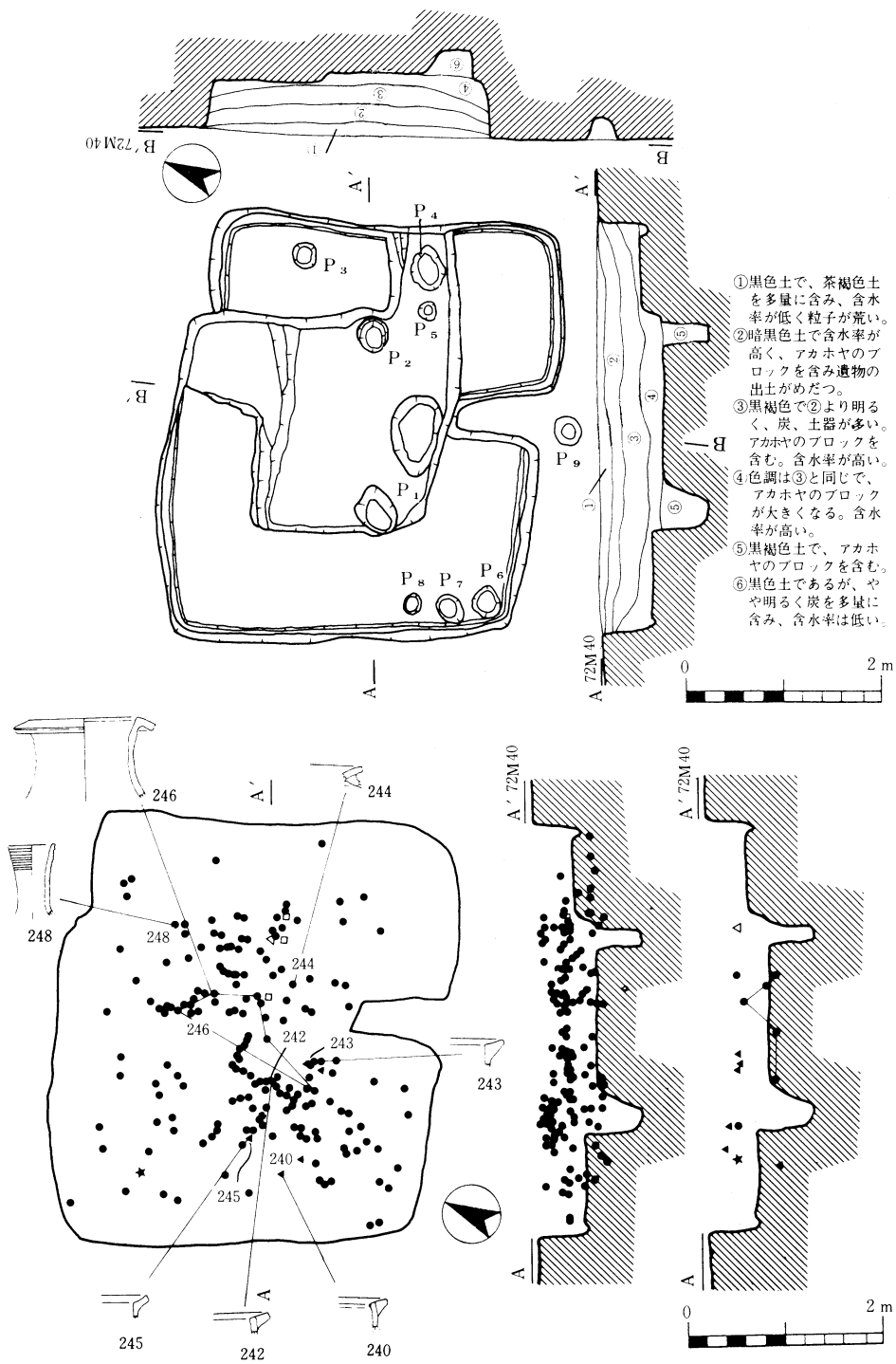


Fig. 43 13号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

～10cmの壁帯溝を検出した。ベッド状遺構の床面には、浅い柱穴状の掘込が、南西隅寄りに三か所、北東隅より約60cmの所に一か所検出した。床面は張り貼けにより調整され、障壁際には、81×51cm、深さ24cmの略円形状の土拵を検出した。ベッド遺構上には、大小の浅い柱穴状の掘込を認める。なお、住居跡外の障壁の基部寄りには、径28～29cm、深さ23cmの柱穴を検出した。

本住居跡の出土遺物は、床面よりの出土はあまり見られず、埋土中より甕形土器・壺形土器・鉢形土器などの破片や砥石が出土した。壺形土器の中には、移入土器と思われる口縁部から頸部にかけての破片で、口縁部内外に凹線文をもつものである。

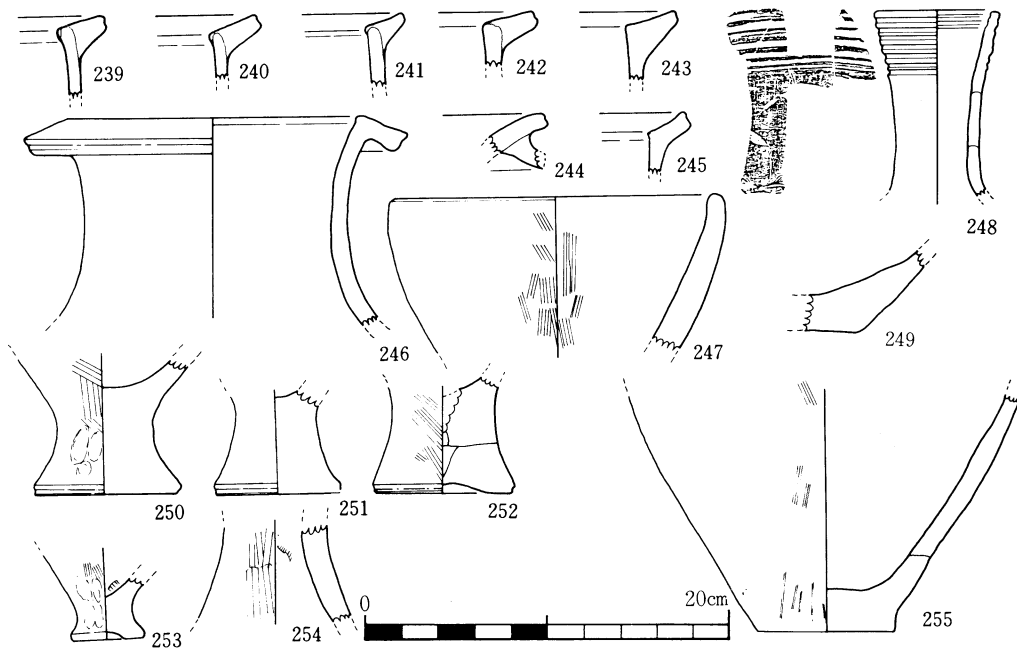


Fig. 44 13号住居跡内出土土器実測図

土器 (Fig. 44, PL. 31)

Tab. 11 13号住居内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
239	PL. 31	甕 口縁部		茶褐色	Q P <sub>L</sub>	内湾する口縁部で、逆し字状に近く外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛など調整である。
240	〃	〃		暗褐色	Q P <sub>L</sub>	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	外面は縦位及び横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
241	〃	〃		暗茶褐色	Q P <sub>L</sub>	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。

番号	図版 番号	器種・器部	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴、その 他	手 法 の 特 徴
242	PL. 31	甕 口縁部		黒褐色	Q P L M	逆L字状に近く外反する口縁部で、口縁部 端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。 煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧 調整後横位の刷毛などで調整で ある。
243	〃	〃		暗茶褐色	Q P L M	逆L字状に近く外反する口縁部で、口縁部 端面はわずかに凹む。口縁部内側には稜を作 り出す。煤の付着を認める。	外面は横位の刷毛などで調整 で、内面は不明である。
244	〃	〃		明茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面 は凹む。口縁部上面はわずかに凹む。口縁部 内面は張り出しを作り出す。煤の付着を認め る。	内・外面ともに横位の刷毛な で調整である。
245	〃	壺 口縁部		暗茶褐色	Q P L	口縁部外面の直下に突帯を廻らし、口縁部 が二又状を呈する。口縁部端面は凹む。突帯 端面を欠損する。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
246		〃	①(21.0)	茶褐色	Q P L	肩部より外方へ立ち上がりながら、垂れ下 り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹 む。口縁部内側には稜を作り出す。	外面は縦位の麿磨きで、内 面は指頭圧調整後斜位の麿磨 きを認める。
247	PL. 31	鉢 口縁部	①(18.0)	褐色	Q P L	底部付近より外方へひらきながら立ち上が ると思われる器形で、口縁部はわずかに立ち 上がり、口唇部は丸味を帯び、器壁は厚い。	内・外面ともに指頭圧調整 後斜位及び縦位の刷毛など調 整である。
248	〃	壺 口縁部 頸部	①(6.8)	暗茶褐色	Q P L M	頸部でしまりわずかに外反し、口縁部に至 り、口唇部はわずかな平坦面を作る。口縁部 から頸部にかけては七条、口縁部内面には二 条の凹線文を廻らす。	外面の凹線文付近は横位の 刷毛などで、下位は縦位の麿磨 きで、内面は横位の刷毛などで 調整を認める。
249	〃	壺 底部		茶褐色	Q P L	平底の底部で、外方へ大きく立ち上がると 思われる器形で、厚い底部であり、一部欠損 する。	外面は剥落のため不明で、 内面は指頭圧調整を認める。
250	〃	甕 底部	④8.0	褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は短かく、鋭角的 に広がり、裾の端面は凹んで凹線状を呈する。	指頭圧調整後斜位の刷毛な で調整である。
251	〃	〃	④7.0	赤茶褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は短かく、鋭角的 であるが広がりがなく、裾の端面は凹んで、 凹線状を呈する。	磨減しているため不明であ る。
252	〃	〃	④(7.8)	褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は短かく、あまり 広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を 呈し、床面中央部は若干凹む、一部欠損する。	指頭圧調整後横位、斜位及 び縦位の刷毛などで調整であ る。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
253	PL. 31	手捏ね器	④(4.2)	褐色	Q P <sub>L</sub> H	手捏ね土器の底部である。裾は短かく、鋭角的であるが広がりがなく、裾の端面は丸味を帯びる。外方へ立ち上がる器形と思われる底面中央部は指頭により凹む。	指頭圧調整後斜位及び縦位の刷毛などで調整を部分的に認める。
254	ク	高坏脚部		黒褐色	Q P <sub>L</sub> M	高坏形土器の脚部と思われる器部の一部である。	外面は縦位の刷毛などで調整で、内面は磨滅のため不明である。
255	ク	壺底部	④7.4	赤茶褐色	Q P <sub>L</sub> H	平底の底部である。お厚い底部より外方へ立ち上がる器形と思われる。	内・外面ともに剥落が著しく、外面は部分的に縦位及び斜位の刷毛などで調整である。

### 石器 (Fig. 45, PL. 36)

本住居跡内出土の石器は、砥石である。256は細粒細岩を素材にしている。現存最大長11.9cm, 最存最大幅6.2cm, 最存最大長13.5cm, 重量150gを測り、扁平な砥石で、両端部及び片面は欠損する。現存している片面及び片面ともに研磨痕を認めるものの随所に剥落が観察される。

### ⑭ 14号住居跡 (Fig. 46~52, PL. 13)

2号掘立柱建物跡までの最短距離は、7.9mで、3号・4号掘立柱建物跡まで、10.8m, 13号住居跡まで、14.1mを測り、E・F-14・15区のⅡ層中で検出された。

本住居跡は、バイパス建設予定地外へ遺構がのびるため、規模は不詳である。遺存している遺構の規模は、670×390cm (遺存径) を測る。遺構検出面からの深さは、90cmで、ベッド状遺構までは約70cmである。

住居跡の平面の形状は、円形状を呈するものと思われる。主柱穴は路線外へのびているために不明である。遺存する柱穴は7本で、P<sub>1</sub>:径43~44cm, 深さ20cm, P<sub>2</sub>:径54~54cm, 深さ72cm, P<sub>3</sub>:径36~37cm, 深さ16cm, P<sub>4</sub>:径51~52cm, 深さ76cm, P<sub>5</sub>:径26~32cm, 深さ50cm, P<sub>6</sub>:29~? (路線外) cm, 深さ50cmを測り、それぞれの心点距離は、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>:170cm, P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>:114cm, P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>:125cm, P<sub>2</sub>-P<sub>5</sub>:114cm, P<sub>5</sub>-P<sub>6</sub>:147cmである。

本住居跡には、検出面より約20~30cm下位に壁周縁より内側に突出するような状態で障壁を4か所認めた。各障壁間には、それぞれベッド状遺構を検出し、110~115cm×160~190cm, 84

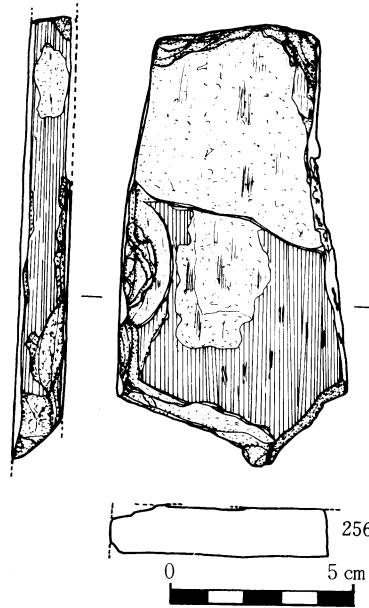


Fig. 45 13号住居跡内出土石器実測図

～98cm×160～190cm, 66～87cm×320～380cmを測り, 床面との比高差は15～20cmである。北西隅の障壁際には土壇状の掘込を認めるが, 大半は路線外へのびている。床面は貼り付けにより調整され, ほぼ中央部付近(北側壁寄り)には, 100×100(遺存径)cm, 深さ30～45cmの略円形状の土壇を検出した。土壇中には, 柱穴状の掘込を二か所検出し, 埋土上面及び周辺には炭化物や土器破片が多く出土した。

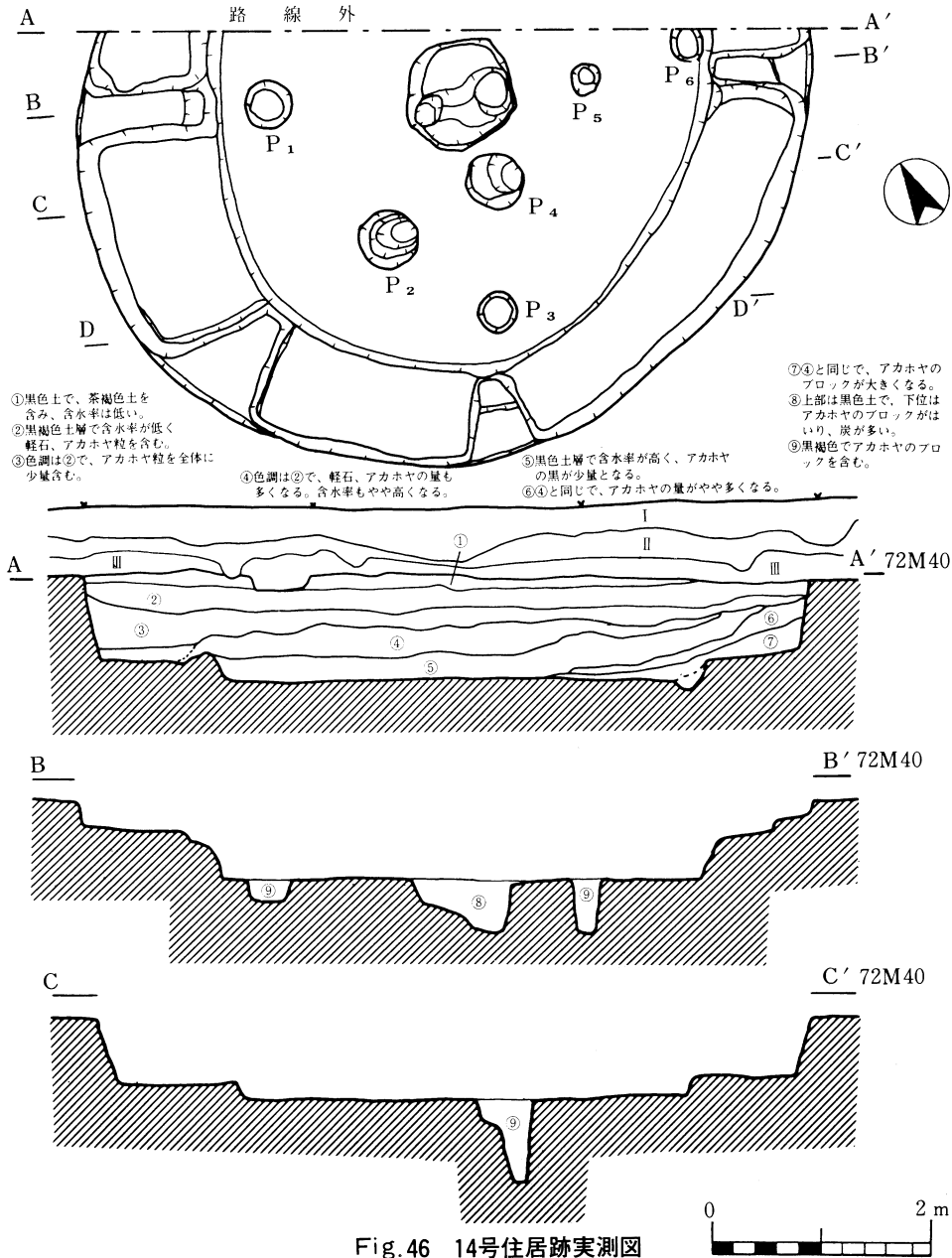


Fig. 46 14号住居跡実測図



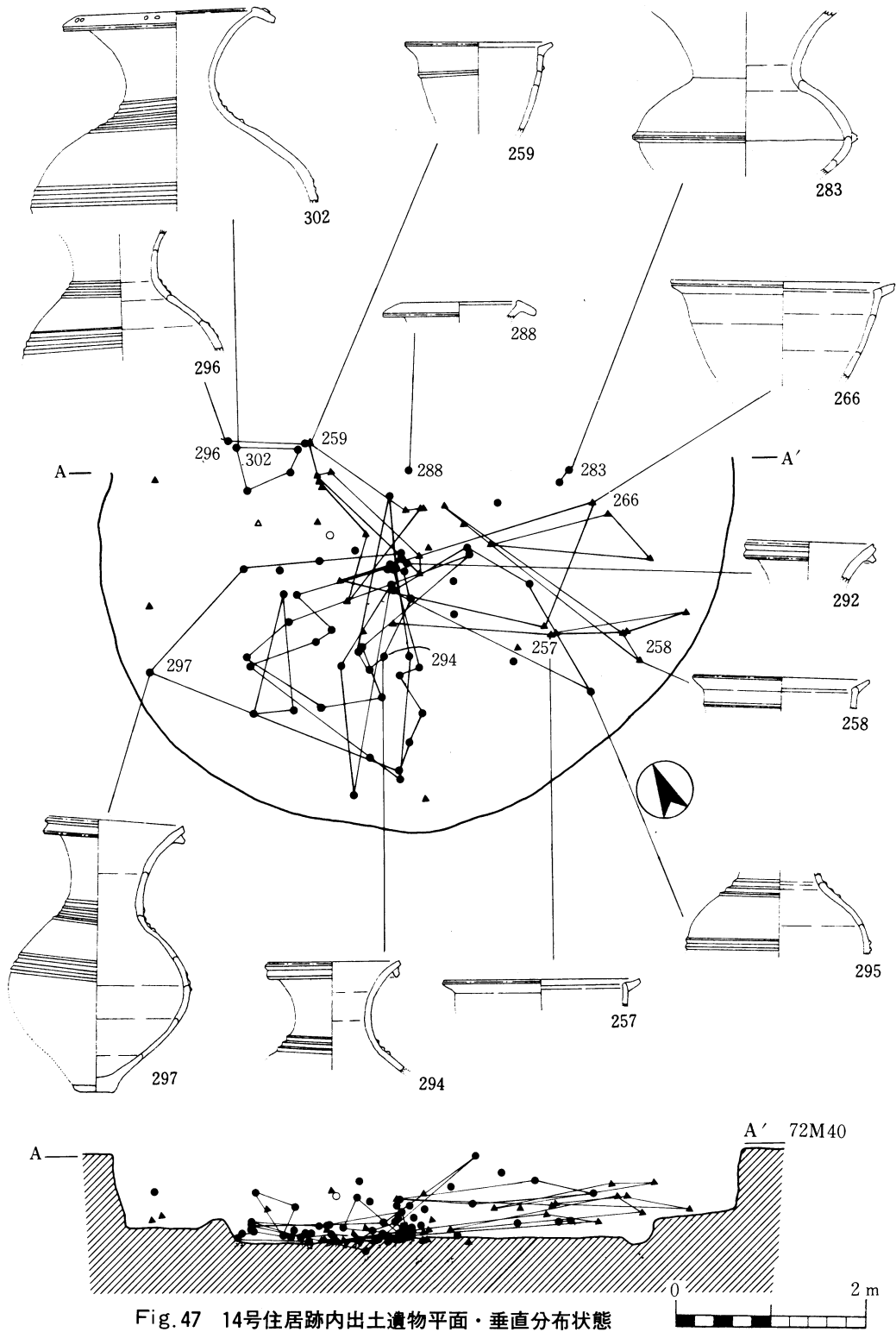


Fig. 47 14号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

なお、本住居跡内の床面には、二又状口縁をもつ壺形土器やくの字状に外反する口縁部の甕形土器、高杯形土器の脚部などの破片が出土した。埋土中には、上位から下位にかけて、土器大小破片を多く認め、床面近くの埋土中には壺形土器が口縁部を下位にした状態や壺形土器一括の破片が西側障壁際から床面の方へ流れ込んだような状態で出土した。

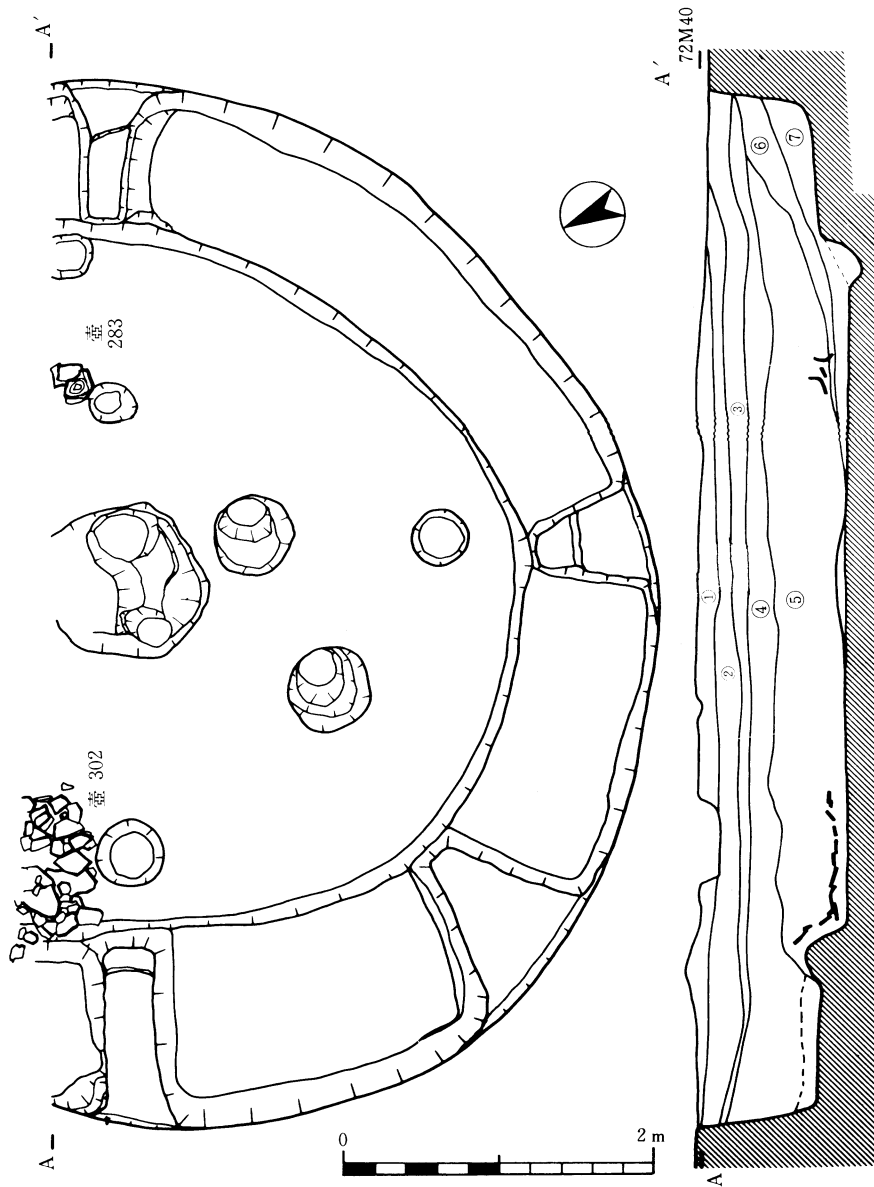


Fig. 48 14号住居跡内遺物出土状態（壺形土器）

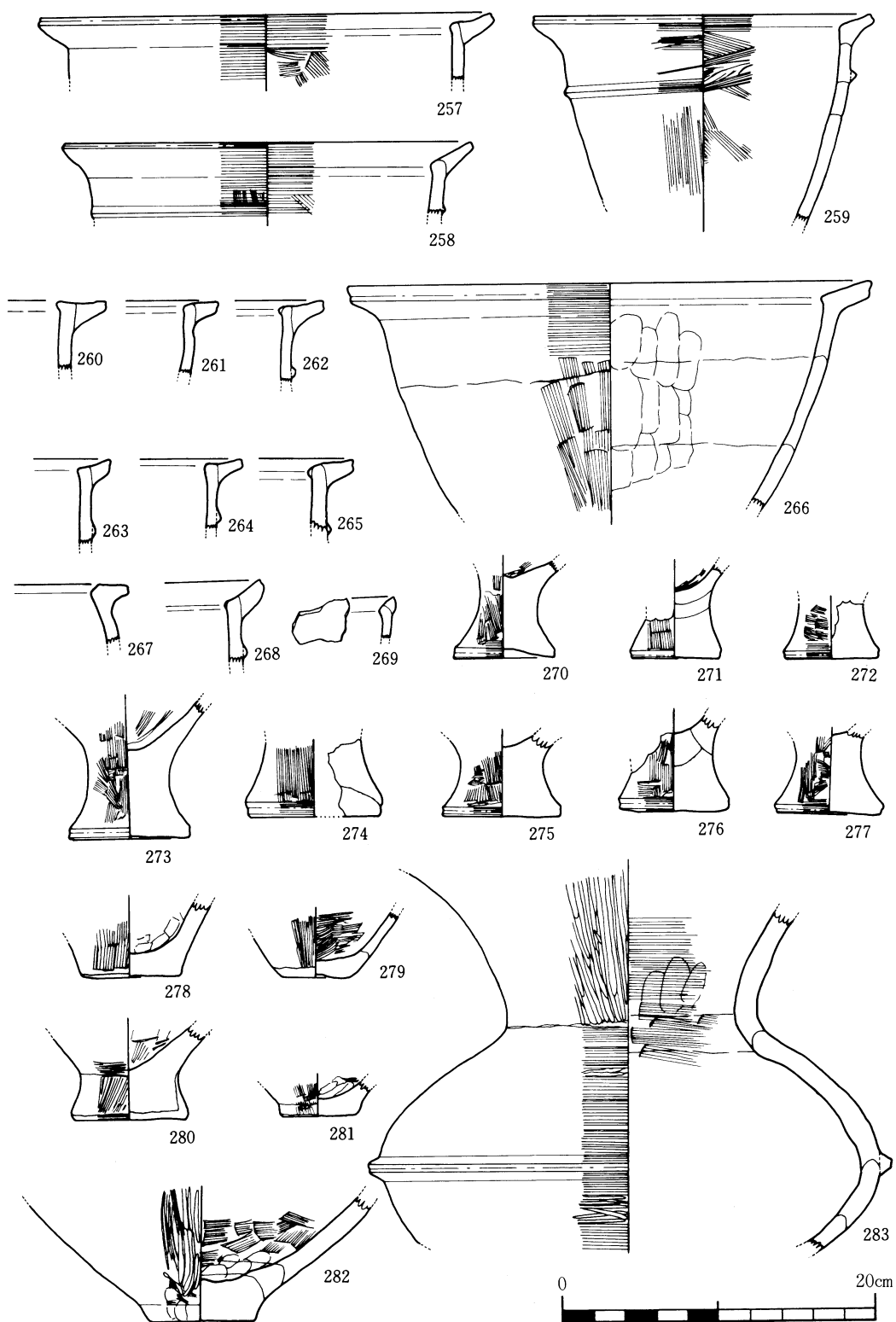


Fig. 49 14号住居跡内出土土器実測図(1)

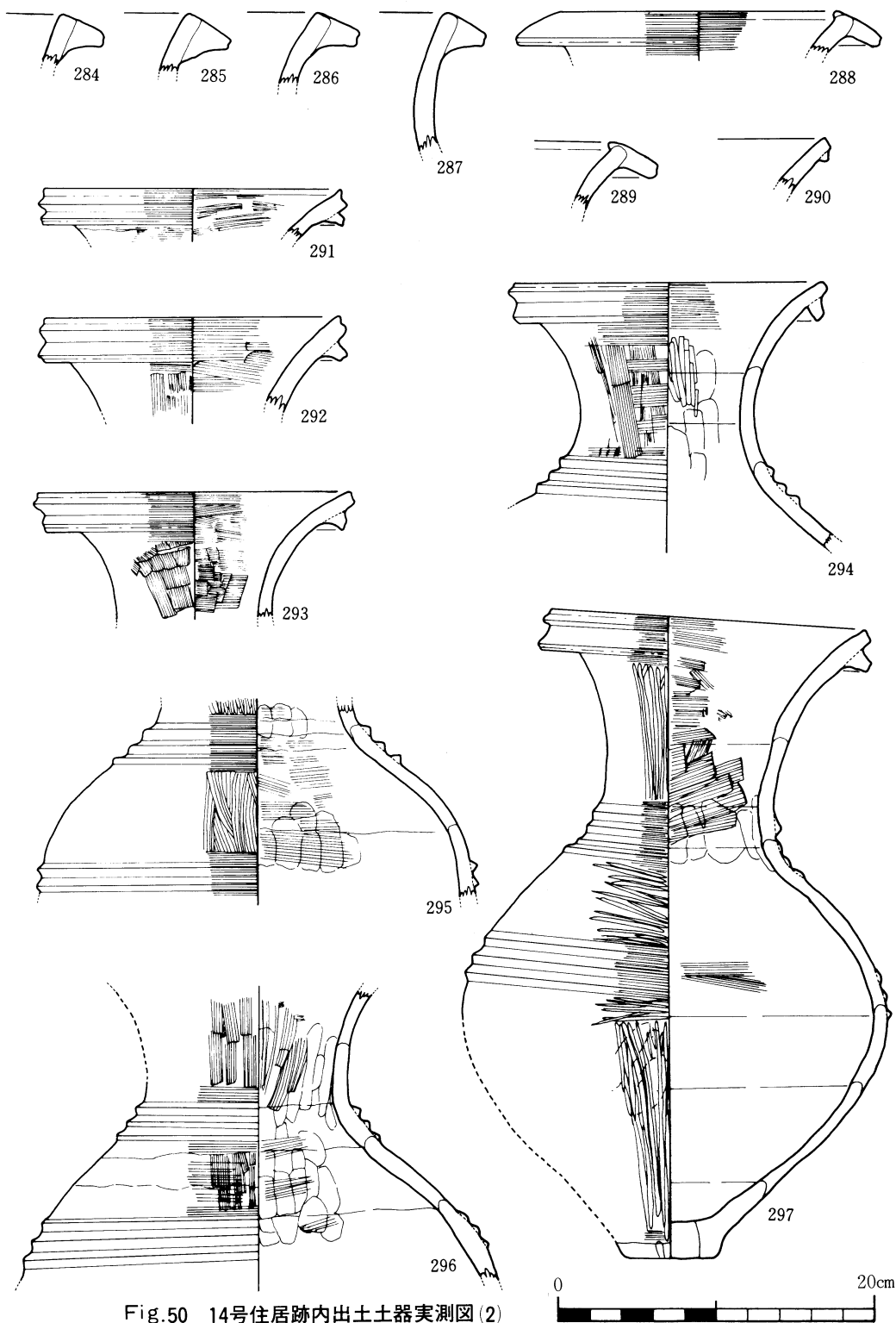


Fig. 50 14号住居跡内出土土器実測図(2)

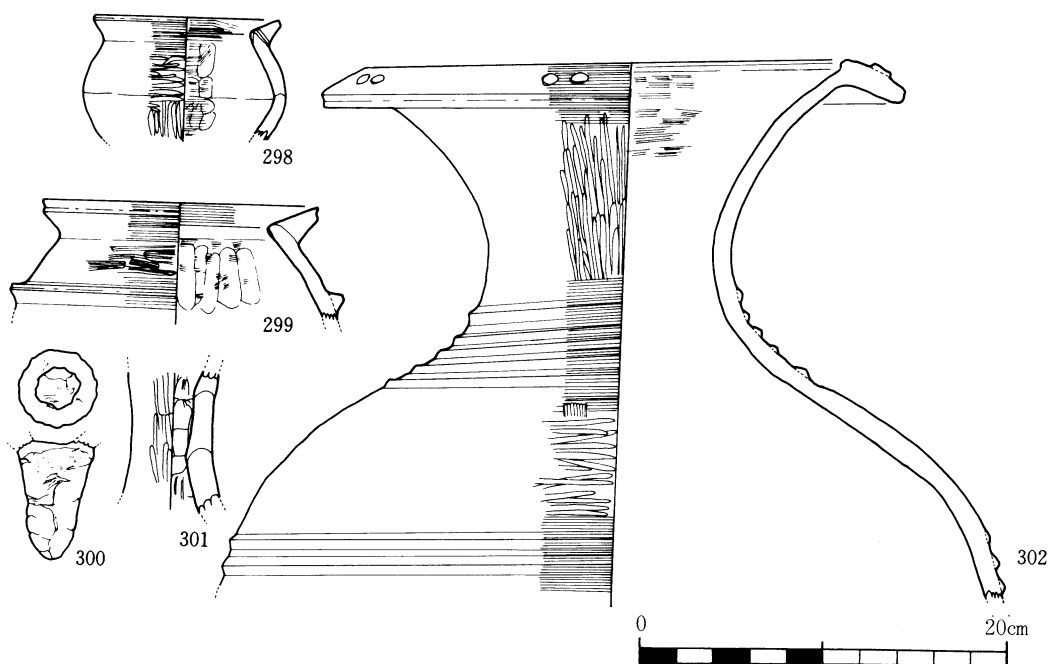


Fig. 51 14号住居跡内出土土器実測図(3)

土器 (Fig. 49~51, PL. 31)

Tab. 12 14号住居跡内出土土器一覧表

法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復元径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
257		甕 口縁部	①(29.2)	暗茶褐色	Q P L M	直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部上面及び断面は凹む、口縁部内面に張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
258	PL. 31	〃	①(26.4)	明茶褐色	Q P L H	外傾気味の口縁部で、大きくくの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内面には張り出しを作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位及び縦位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
259		甕 口縁部 胴部	①21.8 ③17.8	暗茶褐色	Q P L	外傾気味に立ち上がりながら直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内傾には稜を作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす煤の付着を認める。	外面は横位及び縦位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
260	PL. 31	甕 口縁部		明茶褐色	Q P L H	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む、口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
261		〃		明茶褐色	Q P L M	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む、口縁部外側直下は若干凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作る。	内外面とも剥落して不明である。内面に指頭庄調整痕が残る。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
262	PL 31	甕 口縁部		茶褐色	Q P L M	逆し字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位、内面は横位と斜位の刷毛などで調整である。
263	〃	〃		黒褐色	Q P L M H	逆し字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
264	〃	〃		茶褐色	Q P L M	逆し字状に外反する口縁部で、口縁部端面及び上面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位の刷毛などで、内面は指頭圧調整である。
265	〃	〃		黒茶褐色	Q P L H	逆し字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及び指頭圧調整である。
266		甕 口縁部 胴部	①(33.6) ③(27.0)	褐色	Q P L M	外方へ立ち上がる器形である。外傾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに剥落しているため不明で、輪積みの手法を残す。
267	PL 31	鉢 口縁部		褐色	Q P L H	内湾する口縁部で、逆し字状に外反する。口縁部端面はわずかに凹む。	外面は横位の刷毛などで調整で、内面は指頭圧調整である。
268	〃	甕 口縁部		暗褐色	Q P L M	直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整で、内面は指頭圧調整を認める。
269		鉢 口縁部		明茶褐色	Q P L	内湾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部は丸味を帯びる。口縁部上面は短かい。	磨減を認め調整痕不明である。
270		甕 底部	④6.5	明茶褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は短かく、鋭角的であるがあまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。底面はわずかに凹む。	横位及び斜位の刷毛などで、底面中央部は指頭圧調整のためか指紋の付着を認める。
271	〃	〃	④5.8	褐色	Q P L H M	充実した脚台である。裾は長く、あまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈し、一部欠損する。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。
272	〃	〃	④6.0	褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は短かく、あまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈し、一部欠損する。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
273		甕 底部	④7.8	褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。底面はわずかに凹む。	縦位及び斜位の刷毛などで調整である。
274		〃		暗褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は長いと思われ、あまり広がりが無い。裾の端面は凹んで、凹線状を呈し、一部欠損する。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。
275		〃		茶褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は短かく、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	横位、斜位及び縦位の刷毛などで調整である。
276		〃		褐召	Q P L M	充実した脚台である。裾は長く、あまり広がりが無い。裾の端面は凹んで、凹線状を呈して、一部欠損する。	横位、縦位及び斜位の刷毛などで調整である。
277		〃		褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は短かく、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	縦位、横位及び斜位の刷毛などで調整である。
278	PL.31	壺 底部		茶褐色	Q P L M	平底の底部である。わりと厚い底部で、外方へ聞きながら立ち上がると思われる器形である。	外面は縦位の刷毛などで、内面は指頭圧調整である。
279	〃	〃		暗褐色	Q P L	平底の底部で、中央部が若干凹む。薄手の底部で、外方へ大きくひらきながら立ち上がると思われる器形である。	外面は篋磨きで、内面は指頭圧調整後などで調整である。
280		鉢 底部		茶褐色	Q P L	平底の底部で、脚台を思わせる。外方へ大きくひらきながら立ち上がると思われる器形である。	外面は篋磨き、内面は磨減しているため不明である。
281	PL.31	壺 底部		黒褐色	Q P L M	平底の底部である。薄い底部で外方へ大きくひらきながら立ち上がると思われる器形である。	外面は斜位などで、内面は指頭圧調整を認める。
282	〃	〃		褐色	Q P L H	大型甕の可能性が強い底部である。平底で、厚い底部で、外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる器形である。	外面は指頭圧調整後篋磨き、内面は指頭圧調整後などで調整である。
283	〃	壺 頸部 胴部		黒茶褐色	Q P L M	広口の口縁部をもつものと思われ、胴部には一条の断面台形状突帯を廻らし、突帯端面は凹む。	外面は縦位及び横位の篋磨き、内面は指頭圧調整後横位及び斜位などで調整で、剥落して不明な部位も認める。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
284	PL.31	壺 口縁部		茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部 凹面はわずかに凹む。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
285	〃	〃		茶褐色	Q P L	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部 端面は凹む。	外面は横位、内面は横位及 び斜位の刷毛などで調整であ る。
286	〃	〃		茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部 端面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
287	〃	〃		茶褐色	Q P L M	わずかに外反する口縁部である。口縁部は 垂れ下り気味に外反し、口縁部端面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
288	〃	〃	①(22.8)	茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口 縁部端面は凹む、口縁部内側に張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
289	〃	〃		茶褐色	Q P L M	大きく外反する口縁部と思われる。口縁部 は垂れ下り気味に外反し、口縁部両端は凹む。 口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
290		〃		茶褐色	Q P L M	大きく外反する口縁部と思われる。口縁部 外面直下には断面三角形貼付突帯を廻らす。 口唇部は凹む。	磨滅しているため調整痕は 不明である。
291	PL.31	〃	①(19.4)	茶褐色	Q P L	大きく外反する口縁部である。口縁部外側 に突帯を廻らし、口唇部及び突帯端面は凹む。 二又状口縁を呈する。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
292	〃	〃	①(19.2)	暗茶褐色	Q P L M	わずかに外反する口縁部である。口縁部外 側に突帯を廻らし、口唇部及び突帯端面は凹 む。二又状口縁を呈する。	外面は横位及び縦位、内面 は横位及び斜位の刷毛などで調 整である。
293			①(20.2)	茶褐色	Q P L H M	大きく外反する口縁部である。口縁部外側 に突帯を廻らし、口唇部及び突帯端面は凹む。 二又状口縁を呈する。	外面は横位、斜位及び縦位、 内面は横位及び斜位の刷毛な で調整である。
294	PL.31			暗茶褐色	Q P L O b M	頸部でしまり、大きく外反する口縁部であ る。口縁部外側直下に突帯を廻らし、口唇部 及び突帯端面は凹む。二又状の口縁を呈する。 肩部上位には三条の断面三角形貼付突帯を廻 らす。	内・外面ともに磨磨きが認 められる。



番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
295		壺 肩部 腹部上位		暗褐色	Q P L M	肩部は若干張り、肩部には三条、胴部には二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面横位、縦位及び斜位の刷毛などで調整を認める。肩部突帯上位は鈍削りで、内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整を認める。輪積みの手法を残す。
296		壺 肩部 頸部		暗茶褐色	Q P L M	肩部は張らず頸部でしまり、外反して口縁部に至る器形と思われる。肩部及び胴部にはそれぞれ三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は鈍磨き、内面は指頭圧調整後鈍磨きを認める。
297	PL. 31	壺 完形	①(20.8) ②(40.6) ③(27.0) ④(5.8)	暗茶褐色	Q P L H	わりと厚い平底の底部で、外方へ立ち上がりながら胴部は若干張り、肩部は張らず、頸部でしまり外反する口縁部である。口縁部外側に突帯を認め、口唇部及び突帯端面は凹む。口縁部は二又状を呈する。肩部には四條、胴部に三条の断面三角形貼付突帯をそれぞれ廻らす。	外面は指頭圧調整後横位及び縦位の鈍磨きで、口縁部及び突帯付近は横位の刷毛などで調整、内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。
298		鉢	①(10.2) ②(11.0)	暗褐色	Q P L H M	胴部付近より大きく内傾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。	外面は鈍磨き、内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。
299		鉢	①(15.0) ②(17.6)	暗褐色	Q P L M	大きく内傾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作る。胴部には一条の断面台形状の貼付突帯を廻らし、突帯端面は凹む。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
300	PL. 31	高坏		褐色	Q P L M	高坏の脚部と坏部とのつなぎ部分と考えられる。手捏ねである。	指頭圧による調整である。
301	〃	高坏 脚部		暗茶褐色	Q P L M	高坏の脚部の一部と考えられる。	外面は鈍磨きで、内面は指頭圧調整痕が残る。
302	〃	壺 口縁部 胴部	①(31.7) ②(42.6)	暗茶褐色	Q P L M	肩部は張らず、頸部でしまり、外方へ大きく外反する口縁部で、垂れ下り気味に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁部上面には、二個の円形浮文を三か所に認める。肩部には五條、胴部に三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位及び縦位の鈍磨きで、内面は口縁部付近は鈍磨きであるが、ほとんどが剥落して不明である。

### 石器 (Fig. 52, PL. 36)

本住居跡内出土の石器は、用途不明の石器である。303は、砂岩を素材に用い現存最大長2.6cm、現存最大幅1.4cm、厚さ0.5cm、重さ0.4gを測る。基部及び先端面は欠損している小型のもので、両面の一部には、わずかな凹凸面を残し、両側面及

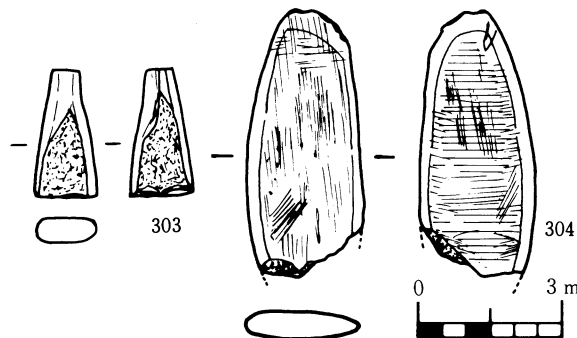


Fig. 52 14号住居跡内出土石器実測図

び基部面には研磨を認めるが、素材のためか研磨痕は観察されない。304は、破岩を素材に用い、現存最大長5.5cm、最大幅2.5cm、厚さ0.6cm、重さ12gを測る。先端面は欠損し、基部は一部を欠損する。器面全体は研磨され研磨痕を認める。

⑮ 15号住居跡 (Fig. 53~56, PL. 14)

16号住居跡との最短距離は、7.2mで、10号住居跡まで、8mを測り、C・D-17区のⅡ層中で検出された。

長軸380cm、短軸367cmである。主軸の方位はN-88°-Eをとる。主柱穴は2本で、東側：径42~54cm、深さ52cm、西側：径31~42cm、深さ48cm、心心距離は104cmを測る。遺構検出面からの深さは56cmである。

本住居跡の平面の形状は、基本的には隅丸長方形を呈しているが、204×95cmの張り出しを北側に造り出している。西側及び東側の床面は切り出しにより、北側の床面は貼り付けにより調整され、東側床面の北東隅寄りには、30×18×13cmの規模の石を検出し台石の可能性が考えられる。床面には主柱穴を取り囲むように、268×138~150cmの略長方形の掘込を検出し、床面との比高差25cmを測る。掘込の床面は貼り付け調整されている。この掘込の形状は、3号住居跡の掘込と類似している。

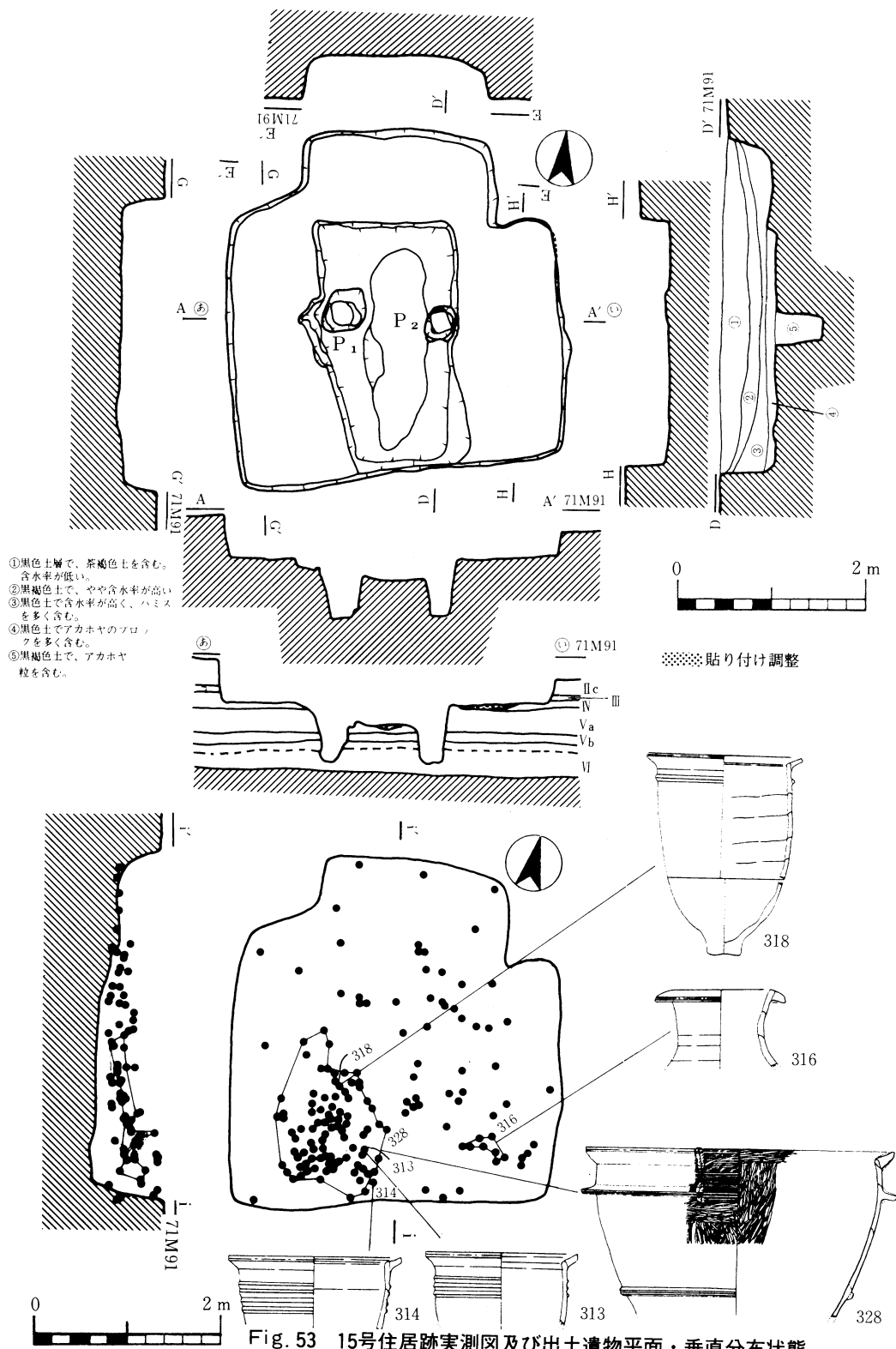
本遺跡の出土遺物には、埋土中よりくの字状に外反する甕形土器の口縁部の破片、大型甕形土器の復元完形品や甕形土器の底部で靱穀痕や木の葉の圧痕のあるもの、壺形土器などの破片や打製石器、砥石、磨石などである。また住居跡内の掘込の埋土中より多量の棒状の炭化物を検出した。

土器 (Fig. 54, 55, PL. 32)

Tab. 13 15号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復元径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
305		甕 口縁部		明茶褐色	Q P L	逆し字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
306		〃		褐色	Q P L	逆し字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。口縁部上面も凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
307		〃		褐色	Q P L M	逆し字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
308		〃		明褐色	Q P L	逆し字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。口縁部上面は凹む。	外面は横位の刷毛などで、内面は鈍磨きの痕跡が残る。



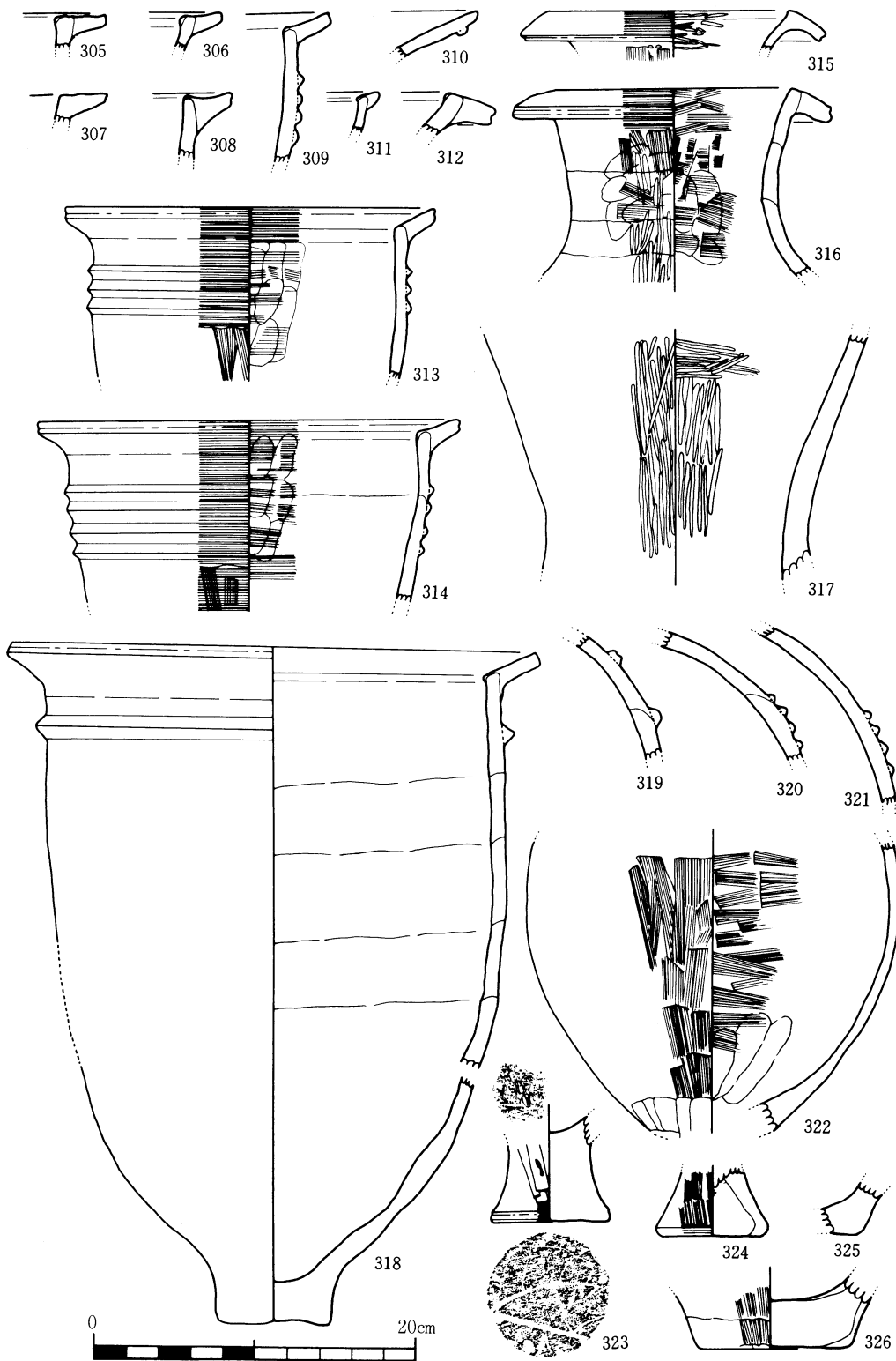


Fig. 54 15号住居跡内出土土器実測図(1)

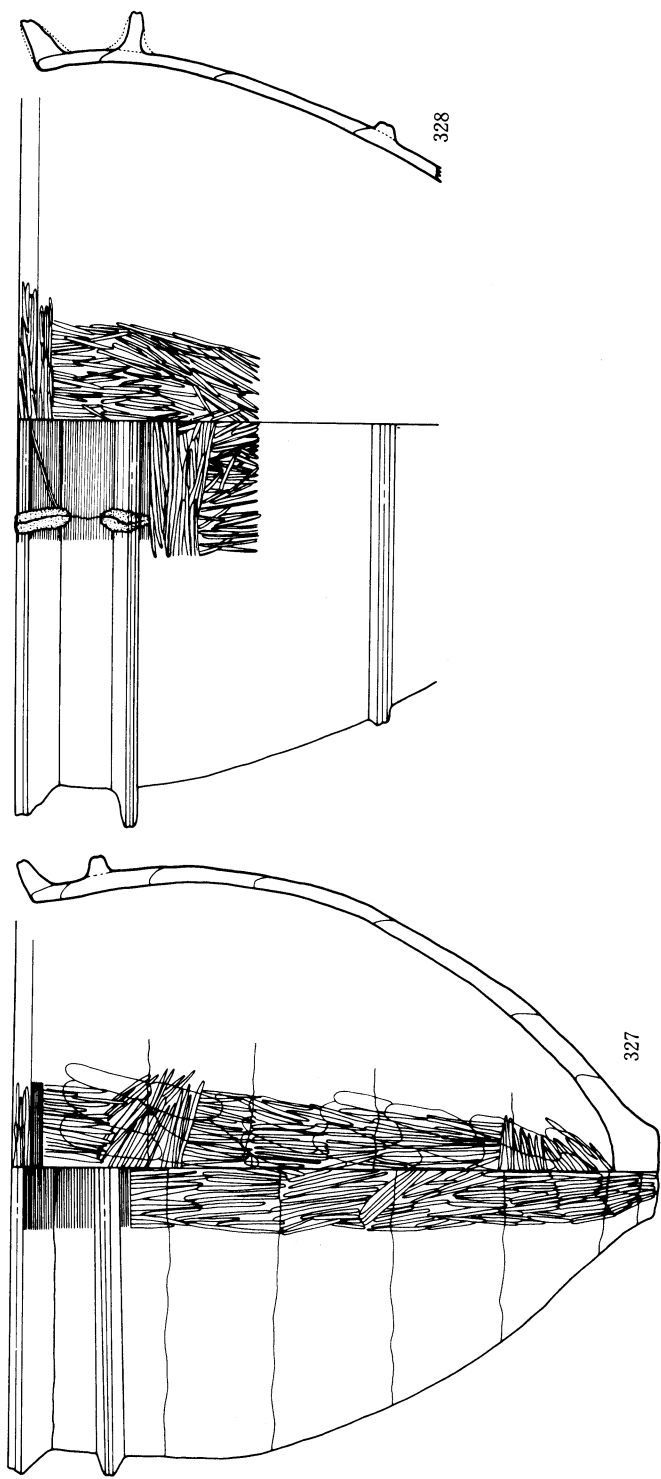


Fig. 55 15号住居跡内出土器実測図(2)

番号	図版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
309	PL. 32	甕 口縁部		茶褐色	Q P L M	若干内湾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。四条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位の刷毛などで調整で、内面は磨滅しているため不明である。
310		壺 口縁部		暗褐色	Q P L	大きく外反する口縁部で、口唇部は丸味を帯びる。口縁部外側直下に突帯を廻らす器形である。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
311		鉢 口縁部		明褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部で、口縁部上面は短かく、口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。	外面は剥落が著しく不明で、内面は指頭圧調整である。
312		壺 口縁部		黒褐色	Q P L	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は横位及び縦位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
313		甕 口縁部 胴部	①(23.0) ③(19.6)	褐色	Q P L M	直行気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位及び斜位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
314		〃	①(26.2) ③(21.8)	明茶褐色	Q P L H	外傾気味に立ち上がりながら若干内傾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。四条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位及び縦位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整で、輪積みの手法を残す。
315		壺 口縁部	①(19.0)	暗褐色	Q P L H	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹み、口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は横位及び縦位の刷毛などで、内面は磨きを認める。
316	PL. 32	壺 口縁部 頸部	①(19.8)	明茶褐色	Q P L H	肩部より立ち上がりながら頸部でしまり、外反する口縁部で、垂れ下り気味に外反する。口縁部端面は凹み、口縁部内側には稜を作り出す。	内・外面ともに指頭圧調整後、外面は横位、斜位及び縦位の刷毛などで、一部磨きを認め、内面は斜位の刷毛などで調整で、輪積みの手法を残す。
317	〃	壺 頸部		明褐色	Q P L M	頸部でしまり大きく外反する器形と思われる。大型の壺形土器の頸部である。	内・外面ともに磨きを認める。
318	〃	甕 完形	①(33.2) ②(41.8) ③(28.4) ④6.8	明茶褐色	Q P L H	小さい平底の底部より外方へ大きく開きながら立ち上がり、直口気味で、やや内傾する口縁部である。長胴化の器形で、口縁部はくの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。口縁部外側直下には一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は磨きで、内面は指頭圧調整後刷毛などで調整で、輪積みの方法を残す。
319		壺 肩部		茶褐色	Q P L M	壺の肩部付近と思われる、二条の断面台形状の貼付突帯を廻らす。突帯端面はそれぞれ凹む。	外面は横位の刷毛などで、内面は剥落し、不明である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
320		壺 胴部		黒褐色	Q P L M	四条の断面三角形貼付突帯を廻らす胴部である。	水面は鈍磨き、内面は剥落が著しいため不明である。
321		〃		明茶褐色	Q P L	四条の断面三角形貼付突帯を廻らす胴部である。	外面は鈍磨き、内側は剥落ため調整痕は消滅している。
322	PL. 32	壺 胴部 底部 上位	③(23.2)	暗褐色	Q P L M	底部より外方へ大きく開きながら立ち上がり、胴は張らず、肩部へのびると思われる器形である。	外面は斜位及び縦位、内面は指頭圧調整後斜位及び横位の刷毛などで調整である。
323	〃	甕 底部	④7.4	褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。裾の側面には粒粒、底面には木の葉の圧痕を認める。	外面は指頭圧調整及び横位の刷毛などで調整である。
324	〃	〃	④7.0	褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は短かく、鋭角的であるがあまり広がらがなく、裾の端面は丸味を帯びる。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。
325		壺 底部		褐色	Q P L H	平底の底部の破片である。外方へ大きく立ち上がると思われる器形である。	横位の刷毛などで調整である。
326	PL. 32	大甕 底部		茶褐色	Q P L H	平底の底部でぶ厚く、若干中央付近は凹む。	縦位の刷毛などで調整である。
327	〃	大甕 完形品	①50.2 ②53.4 ③48.2 ④7.2	茶褐色	Q P L M H	底部は平底で、外方へ大きく立ち上がりながら口縁部で内湾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部外側直下には断面台形状貼付突帯を廻らす。突帯端面は凹み、煤の付着を認める。	外面は口縁部から突帯まで横位の刷毛などで、突帯より底部までは鈍磨きで、内面は指頭圧調整後鈍磨きを認める。
328	〃	大甕 口縁部 胴部	①64.8 ③56.6	明灰褐色	Q P L H	外方へ大きく立ち上がりながら内湾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部外側直下には、略台形状の貼付突帯を廻らし、突帯端面は凹む。胴部より上位に一条の断面台形状の貼付突帯を廻らし、突帯端面は凹む。	内・外面ともに鈍磨きが認められる。

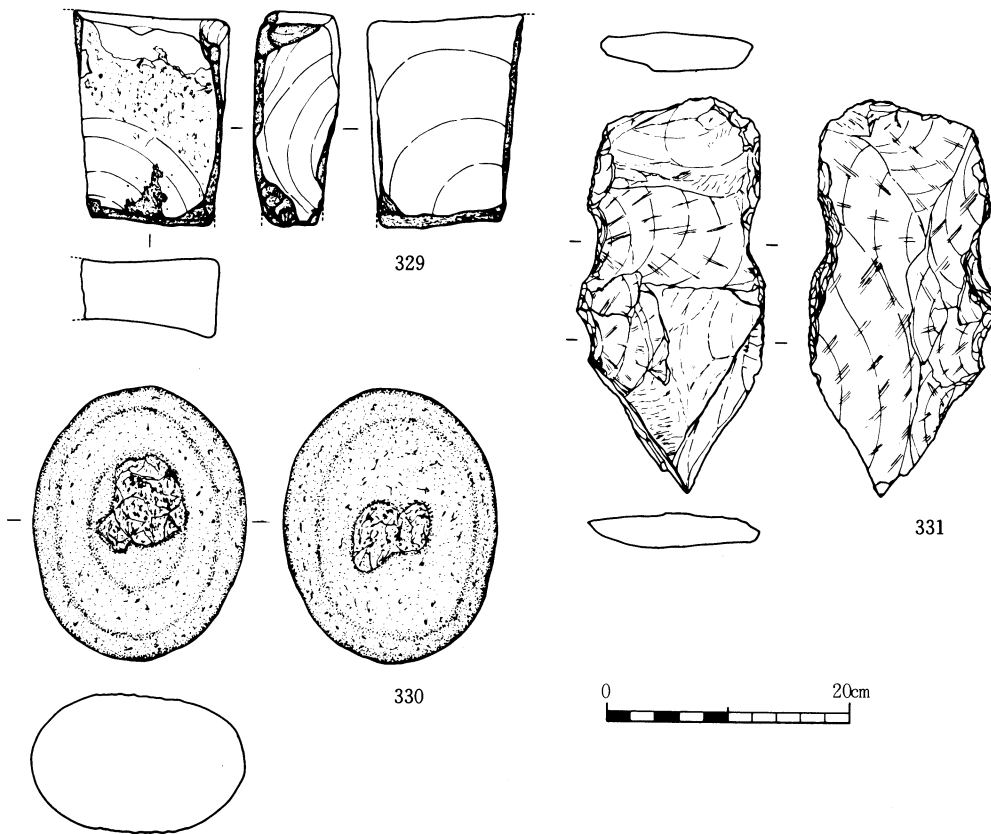


Fig. 56 15号住居跡内出土石器実測図

石器 (Fig. 56, PL. 36)

本住居跡内出土の石器は、砥石、打製石器、磨石である。329は、砂岩を石器の素材として用いた砥石で、一部を欠するが、最大長8.7cm、最大幅3.2cm、最大厚3.2cm、重さ262gを測る。磨面は三ヶ所に認め、研磨のため内・外面ともに窪み、素材のためか研磨痕は不明である。330は、砂岩を石器の素材として用いた磨石である。最大長11.2cm、最大幅8.8cm、最大厚5.7cm、重さ757gを測り、形状は楕円状を呈している。内・外面ともに敲打面を認め、周辺部は研磨面を観察する。素材のためか研磨痕は不明である。331は、頁岩を石器の素材として用いた有肩の打製石器である。横剥ぎの剥片を用い、最大長16.2cm、最大幅7.7cm、最大厚1.4cm、重さ200gを測る。刃部を欠損しているが扁平で、基部に両面剥離により抉りを作り出し、側縁部の調整痕等は認められない。用途としては、土掘り具が考えられる。



⑩ 16号住居跡 (Fig. 57~60, PL. 15)

22号住居跡との最短距離は、4.3mで、15号住居跡まで、7.2m、23号住居跡まで、6.8mを測り、C・D-18・19区のⅡ層中で検出された。

長軸597cm、短軸520(張り出しを含む)cmである。主柱穴は2本で、西側：径50~58cm、深さ69cm、東側：径70~79cm、深さ50cmを測り、心心距離は228cmである。主軸の方位はN-93°-Eをとる。遺構検出面からの深さは86cmで、ベッド状遺構まで、66~78cmである。

本住居跡の平面の形状は、基本的には隅丸長方形を呈し、北壁は373×82cm、南西隅際は175×65cmの張り出しを認めた。西壁側には45~60×120cm、高さ54~58cmの障壁が検出され、障壁と北西隅際にかけては、207×125cmの切り出しによるベッド状遺構を検出し、床面との比高差は約20cmである。北壁張り出しから東側及び南側の壁際にかけては、幅110~180cmの貼り付け調整によるベッド状遺構を連続した状態で検出し、床面との比高差は、約8~13cmを測る。床面はVb層で貼り付けによる調整である。南側壁寄りには、110×135cm、深さ約30cmの略円形状の土拵を検出し、土拵内には、深25cmと28cmの柱穴状の掘込を検出した。

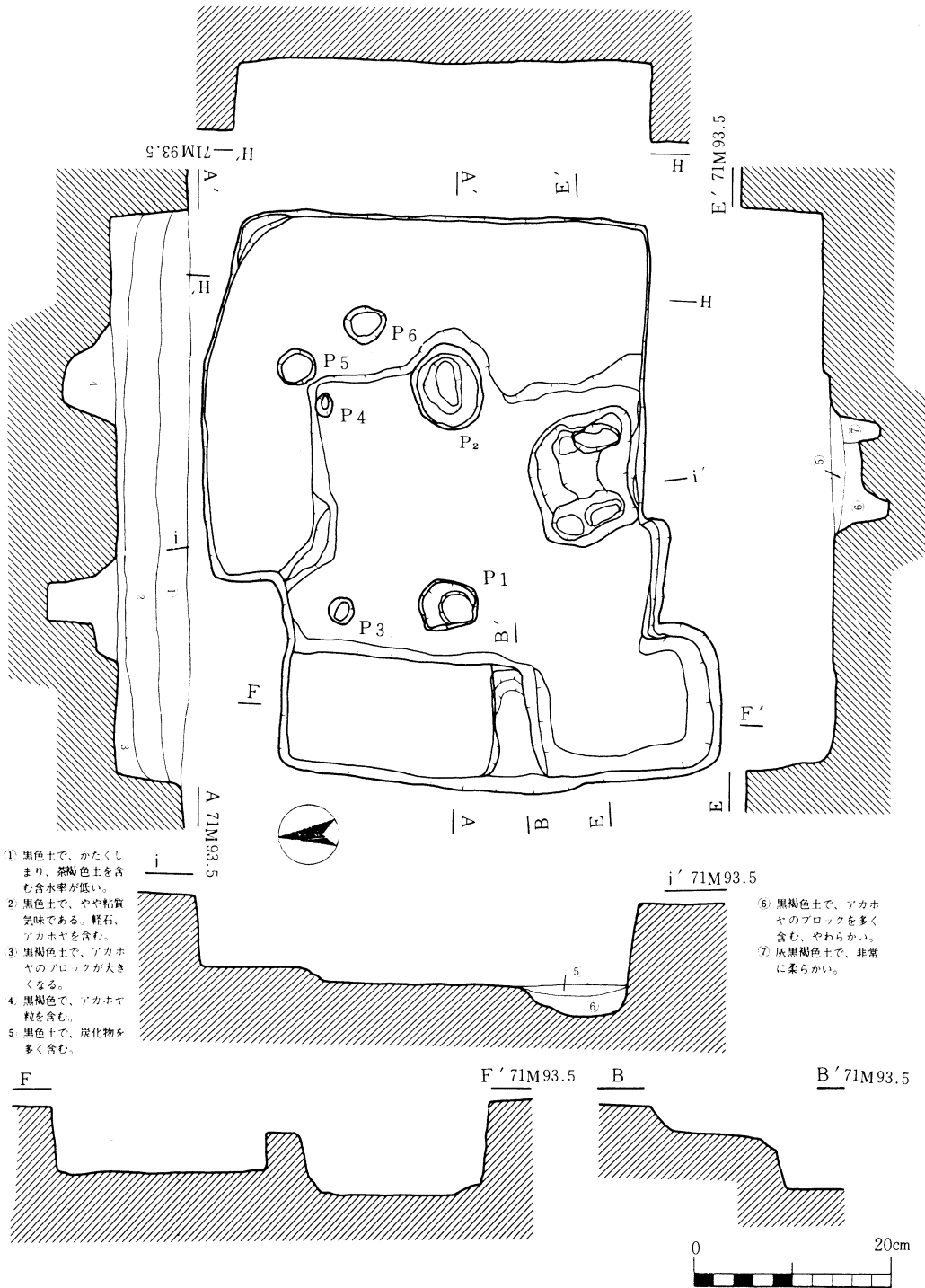
本住居跡内の出土遺物には、甕形土器のくの字状に外反する口縁部の破片や底部が多く、そのほか壺形土器の口縁部、肩部、底部などの破片、鉢形土器の完形品、磨製石鏃5点などが埋土中より出土した。床面からの出土は、小破片が多くまとまりはない。

土器 (Fig. 59, PL. 32)

Tab. 14 16号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
332	PL. 32	甕 口縁部		明茶褐色	Q P L M	直口気味の口縁部で、逆し字に外反し、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作る。口縁部上面も凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで、内面は指頭圧調整後の調整を認める。
333	〃	〃		暗褐色	Q P L	逆し字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。口縁部上面も凹む。	外面は篋磨き、内面は横位の刷毛などで調整である。
334	〃	〃		暗褐色	Q P L H M	逆し字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
335	PL. 32	〃		明茶褐色	Q P L	内湾気味の口縁部で、くの字状に外反し、口縁部端面は凹む。口縁部上面は凹む。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
336	〃	〃		黒褐色	Q P L H	逆し字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は斜位及び横位、内面は指頭調整後の刷毛などで調整である。



- ① 黒色土で、かたくし  
まり、茶褐色土を含  
む含水率が低い。
- ② 黒色土で、やや粘質  
気味である。軽石、  
アカホヤを含む。
- ③ 黒褐色土で、アカホ  
ヤのブロックが大き  
くなる。
- ④ 黒褐色で、アカホヤ  
粒を含む。
- ⑤ 黒色土で、炭化物を  
多く含む。

- ⑥ 黒褐色土で、アカホ  
ヤのブロックを多く  
含む、やわらかい。
- ⑦ 灰黒褐色土で、非常  
に柔らかい。

Fig. 57 16号住居跡実測図



Fig. 58 16号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
337	PL. 32	甕 口縁部		褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
338	〃	〃		暗茶褐色	Q P L H M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しをわずかに作り出す。口縁部上面は凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
339	〃	〃		暗茶口縁部	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しをわずかに作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。

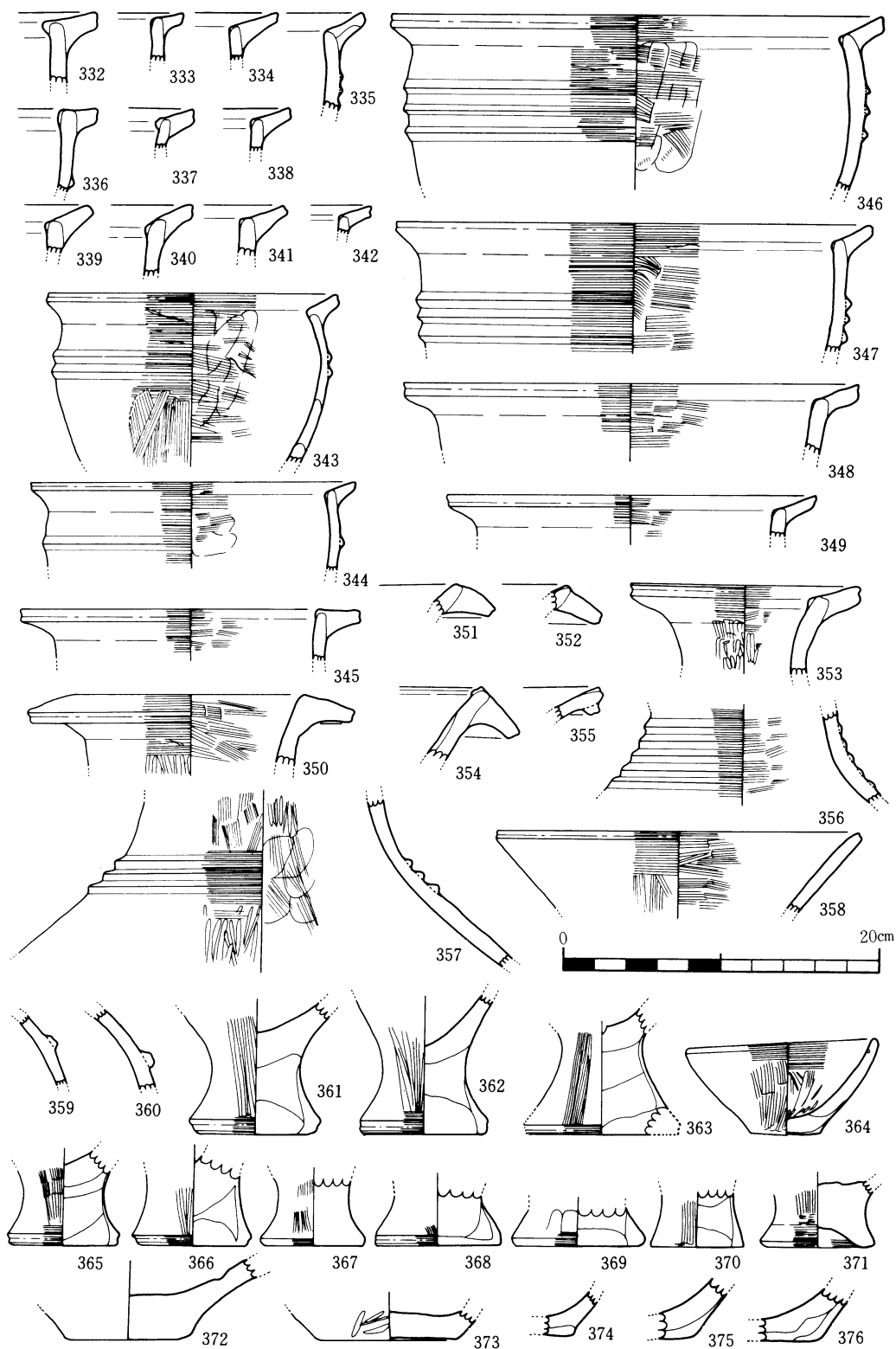


Fig. 59 16号住居跡内出土土器実測図

図版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
340	PL. 32 甕 口縁部		明褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 部面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出 しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
341	〃 〃		口縁部	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 部面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。 口縁部上面は凹む。	外面は横位の刷毛などで調整 で、内面は剥落が著しく調整 痕は不明である。
342	〃 〃		明茶褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 部面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出 しを作り出す。煤の付着を認める。	外面は横位の刷毛などで、内 面は指頭圧調整後横位の刷毛 などで調整である。
343	甕 口縁部 胴部	①(18.6) ③(17.4)	茶褐色	Q P L H	胴部は張り、内湾する口縁部である。くの 字状に外反し、口縁部部面はわずかに凹む。 二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付 着を認める。	外面は横位、斜位及び縦位、 内面は指頭圧調整後、横位及 び斜位の刷毛などで調整で、輪 積みの手法を残す。
344	PL. 32 〃	①(20.6) ③(18.6)	暗褐色	Q P L M	内湾気味の口縁部で、くの字状に外反する。 口縁部部面はわずかに凹む。口縁部内側には 稜を作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を 廻らす。	外面は横位、内面は指頭圧 調整後、横位及び斜位の刷毛 などで調整である。
345	甕 口縁部	①(21.6)	暗褐色	Q P L	逆し字状に外反する口縁部である。口縁部 部面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出 しを作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
346	PL. 32 甕 口縁部 胴部	①(31.2) ③(29.0)	暗褐色	Q P L H	内湾する口縁部で、くの字状に外反する。口 縁部部面は凹む。口縁部内側にはわずかに張 り出している。三条の断面三角形貼付突帯を 廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧 調整後、横位及び斜位の刷毛 などで調整である。
347	〃 〃	①(30.2) ③(27.0)	暗褐色	Q P L	内湾気味の口縁部で、くの字状に外反する。 口縁部部面はわずかに凹む。口縁部内側はわ ずかに張り出しを作る。三条の断面三角形貼 付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及 び斜位の刷毛などで調整であ る。
348	〃 甕 口縁部	①(28.8)	暗褐色	Q P L	くの字状に反する口縁部で、口縁部部面 は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。煤の 付着を認める。	外面は横位、内面は横位及 び斜位の刷毛などで調整であ る。
349	〃 〃	①(23.4)	明茶褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部で、口縁部部面 は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。口縁 部上面はわずかに凹む。煤の付着を認める。	内・外面は横位の刷毛などで 調整である。
350	〃 壺 口縁部	①(20.6)	褐色	Q P L M	わずかに外反する口縁部である。口縁部の 垂れ下り気味に外反し、口縁部部面は凹む。	外面は横位の刷毛などで調整 後鈍磨きで、内面は横位及び 斜位の刷毛などで調整である。

番号	図版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
351	PL. 32	壺 口縁部		暗茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部上面は張らむ。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
352		〃		黒褐色	Q P L	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
353		〃	①(14.6)	明褐色	Q P L M	立ち上がりながら外反する口縁部である。くの字状に近く外反し、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	面は横位の刷毛などで及び縦位の磨きで、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などである。一部に縦位の磨きを認める。
354		〃		茶褐色	Q P L M H	大きく外反する口縁部で、垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部内側には断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位の刷毛などで後磨き、内面は剥落し、部分的に横位の刷毛などで調整を認める。
355		〃		暗褐色	Q P L H	大きく外反する口縁部である。口唇部は凹む。口縁部外側直下には断面台形状貼付突帯を廻らす。突帯端面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
356	PL. 32	壺 肩部		黒褐色	Q P L M	肩部付近で、五条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
357		〃		暗茶褐色	Q P L H	肩は張らず立ち上がりと思われる器形で、肩部に三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は斜位及び横位の刷毛などで、突帯より下位磨きで、内面は指頭圧調整後斜位の刷毛などで調整で、一部磨きを認める。
358	PL. 32	鉢 口縁部		暗茶褐色	Q P L	大きく外傾する口縁部で、口唇部端面は凹む。煤の付着を認める。	外面は横位、斜位及び縦位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
359	〃	壺 胴部		黒褐色	Q P L M	肩部で、断面台形状貼付突帯を廻らし、突帯端面は凹む。	外面は磨きで、内面は指頭圧調整後斜位の刷毛などで調整である。
360	〃	〃		暗茶褐色	Q P L M	肩部で、断面台形状貼付突帯廻らし、突帯端面は凹む。	外面は磨きが見られ、内面は横位の刷毛などで調整である。
361		甕 底部	④(8.3)	褐色	Q P L M H	充実した脚脚台である。裾は長く、鋭角的には広がらず、裾の端面は凹んで、凹線状を呈し、煤の付着を認める。	縦位及び斜位の刷毛などで調整である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
362		甕 底部	④(8.1)	暗茶褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	甕削りで、裾端面付近は接位の刷毛などで調整である。
363		〃		褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈し、一部欠損する。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。
364		鉢 完形	①(12.2) ②(6.0) ③(10.2) ④(4.2)	暗褐色	Q P L H	底部は平底で、外方へ開きながら立ち上がり、口縁部をつくる。口唇部は丸味を帯び、口縁部内側には径2mmの円孔が穿かれ、途中までである。	内・外面ともに横位の刷毛などで及び縦位及び斜位の磨きを認める。
365		甕 底部	④(7.1)	褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は短かく、鋭角的であるが開きがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。
366		〃	④(7.4)	明茶褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は短かく、あまり開きがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	大部分が磨減しているが、わずかに横位、縦位の刷毛などで調整である。
367	PL 32	〃	④6.6	褐色	Q P L M	充実した脚台である。欠損しているためでないが、裾は鋭角的であり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。
368		〃	④(7.9)	褐色	Q P L H	充実した脚台である。欠損しているためでないが、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	横位及び斜位の刷毛などで調整で、大半は不明である。
369		〃	④(8.4)	茶褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾の端面は丸味を帯び、大半が欠損する。	横位の刷毛などで調整で、大部分は剥落しているため不明である。
370		〃	④(5.8)	赤茶褐色	Q P L	充実した脚台である。裾はほとんど開きは認められない。	縦位の磨きを認める。
371		〃	④(7.2)	褐色	Q P L	若干あげ底の底部である。裾は短かく、あまり開きがなく、裾の端面は丸味を帯びる。	横位の刷毛などで及び縦位の甕削りを認める。
372	PL 32	大甕 底部	④(8.0)	暗茶褐色	Q P L H M	平底の厚い底部である。大きく外方へ開きながら立ち上がると思われる器形である。	外面は磨きを認め、内面は剥落している。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
373	PL. 32	壺 底部	④8.6	暗褐色	Q P <sub>L</sub> H	平底の底部である。外方へ開きながら立ち上がると思われる器形である。	内・外面ともに艶磨きを認める。
374	〃	〃		灰褐色	Q P <sub>L</sub>	平底の底部と思われる。大半が欠損し、外方へ立ち上がりながら開く器形と思われる。	小破片で磨滅しているため不明である。
375	〃	〃		茶褐色	Q P <sub>L</sub> H	平底の底部と思われる。大半が欠損する。外方へ立ち上がりながら開く器形と思われる。	縦位の刷毛などで調整である。
376	〃	〃		暗茶褐色	Q P <sub>L</sub> H	平底の底部と思われる。大半が欠損する。外方へ開きながら立ち上がると思われる。	縦位及び斜位の刷毛などで調整である。

### 石器 (Fig. 60, PL. 35)

本住居跡内出土の石器は、磨製石鏃 5 点である。377・379・380は頁岩、378・381はフォルフェルス素材として用いている。

377は、扁平無茎で、基部はわずかに凹み、小形の石鏃である。最大長1.9cm、最大幅1.5cm、厚さ0.2cm、重さ0.6gを測り、二等辺三角形形状を呈し、両側面ともに直線的に研磨され、両面とも一部を欠損する。研磨を認め、研磨痕を観察する。378は、扁平無茎で、基部は平坦面を作り出す。最大長2.4cm最大幅1.6cm、最大厚0.25cm、重さ1.2gを測り、二等辺三角形形状を呈し、片側面と両側は研磨され、平坦面を作り出し、研磨痕を観察する。379は、基部を欠損するが扁平無茎で二等辺三角形形状を呈するものと思われる。現存で、最大長2.6cm、最大幅2.0cm、最大厚0.2cm、重さ1.2gを測る。鏃がはっきりし先端部から基部へつづくと思われる痕跡を認め、両面ともに研磨され、研磨痕を観察する。380は、扁平無茎で、基部は凹み、二等辺三角形形状を呈する石鏃である。最大長3.6cm、最大幅1.95cm、最大厚0.25cm、重さ2.6gを測り、先端部及び基部片面が欠損している。鏃がはっきりと先端部から基部へつづく。研磨を認め、研磨痕を観察する。381は先端部、片側辺及び基部を欠損するが、扁平無茎の二等辺三角形形状を呈するものと思われる。現存で、最大長3.2cm、最大幅2.3cm、最大厚0.3cm、重さ6.8cmを測り、その遺存状態からみれば大きい石鏃で、両面ともに研磨を認め、研磨痕を観察する。

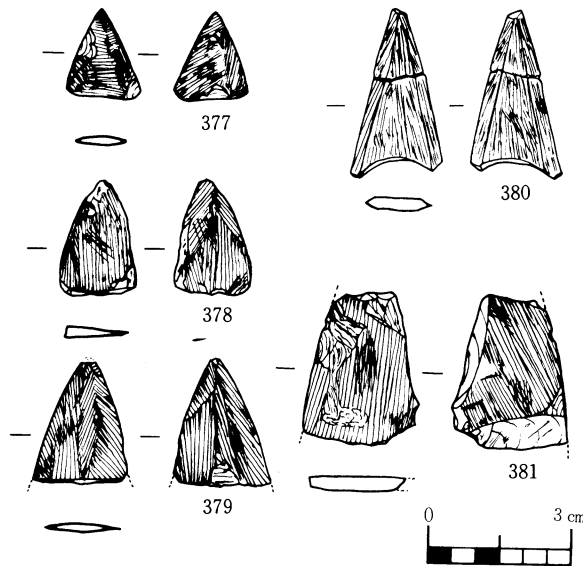


Fig. 60 16号住居跡内出土石器実測図

377は、扁平無茎で、基部はわずかに凹み、小形の石鏃である。最大長1.9cm、最大幅1.5cm、厚さ0.2cm、重さ0.6gを測り、二等辺三角形形状を呈し、両側面ともに直線的に研磨され、両面とも一部を欠損する。研磨を認め、研磨痕を観察する。378は、扁平無茎で、基部は平坦面を作り出す。最大長2.4cm最大幅1.6cm、最大厚0.25cm、重さ1.2gを測り、二等辺三角形形状を呈し、片側面と両側は研磨され、平坦面を作り出し、研磨痕を観察する。379は、基部を欠損するが扁平無茎で二等辺三角形形状を呈するものと思われる。現存で、最大長2.6cm、最大幅2.0cm、最大厚0.2cm、重さ1.2gを測る。鏃がはっきりし先端部から基部へつづくと思われる痕跡を認め、両面ともに研磨され、研磨痕を観察する。380は、扁平無茎で、基部は凹み、二等辺三角形形状を呈する石鏃である。最大長3.6cm、最大幅1.95cm、最大厚0.25cm、重さ2.6gを測り、先端部及び基部片面が欠損している。鏃がはっきりと先端部から基部へつづく。研磨を認め、研磨痕を観察する。381は先端部、片側辺及び基部を欠損するが、扁平無茎の二等辺三角形形状を呈するものと思われる。現存で、最大長3.2cm、最大幅2.3cm、最大厚0.3cm、重さ6.8cmを測り、その遺存状態からみれば大きい石鏃で、両面ともに研磨を認め、研磨痕を観察する。



⑰ 17号住居跡 (Fig. 61, 62, PL. 15)

14号掘立柱建物跡までの最短距離は、2.1mで、18号住居跡まで、7.2m、22号住居跡まで、13.3m、18号居跡まで、13.8mを測り、B・C・-19、20区のⅡ層中で検出された。

長軸310cm、短軸263cmを測る。床面には柱穴は検出されず、主軸（長軸）の方位はN-88°-Eをとる。遺構検出面からの深さは、約54cmを測る。

本住居跡の形状を呈する。新しい溝により影響を受けて、一部床面まで達する。側壁は比較的しっかりしたもので急傾斜で、新しい溝状の掘込の北側については立ち上がる。床面はⅣ層で、ほぼ中央部に34×38cmの赤茶褐色を呈する焼土と思われる痕跡を認めた。南側壁から東側壁際にかけて、幅8cm、深さ5cmの壁帯溝を検出した。床面は部分的に貼り付けによる調整を認める。南西隅には径：44~51cm、深さ30cmの柱穴を検出し、南側壁際には、73×46cm、深さ34cmの略円形状の土壇を検出した。

本柱居跡の出土遺物は、床面からほとんど出土せず、埋土中から甕形土器の口縁部の破片や壺形土器の肩部の破片や大型甕形土器破片が出土した。

土器 (Fig. 62, PL. 16)

Tab. 15 17号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
382	PL. 32	甕 口縁部		明茶色	Q P L M H	逆し字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。口縁部上面も凹む。	内・外面とも横位の刷毛などで調整である。
383	〃	〃		暗茶褐色	Q P L M	逆し字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
384	PL. 32	〃		暗褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。口縁部上面は凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
385	〃	〃		暗茶褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む口縁部内側にわずかに張り出しを作る。口縁上面は凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。

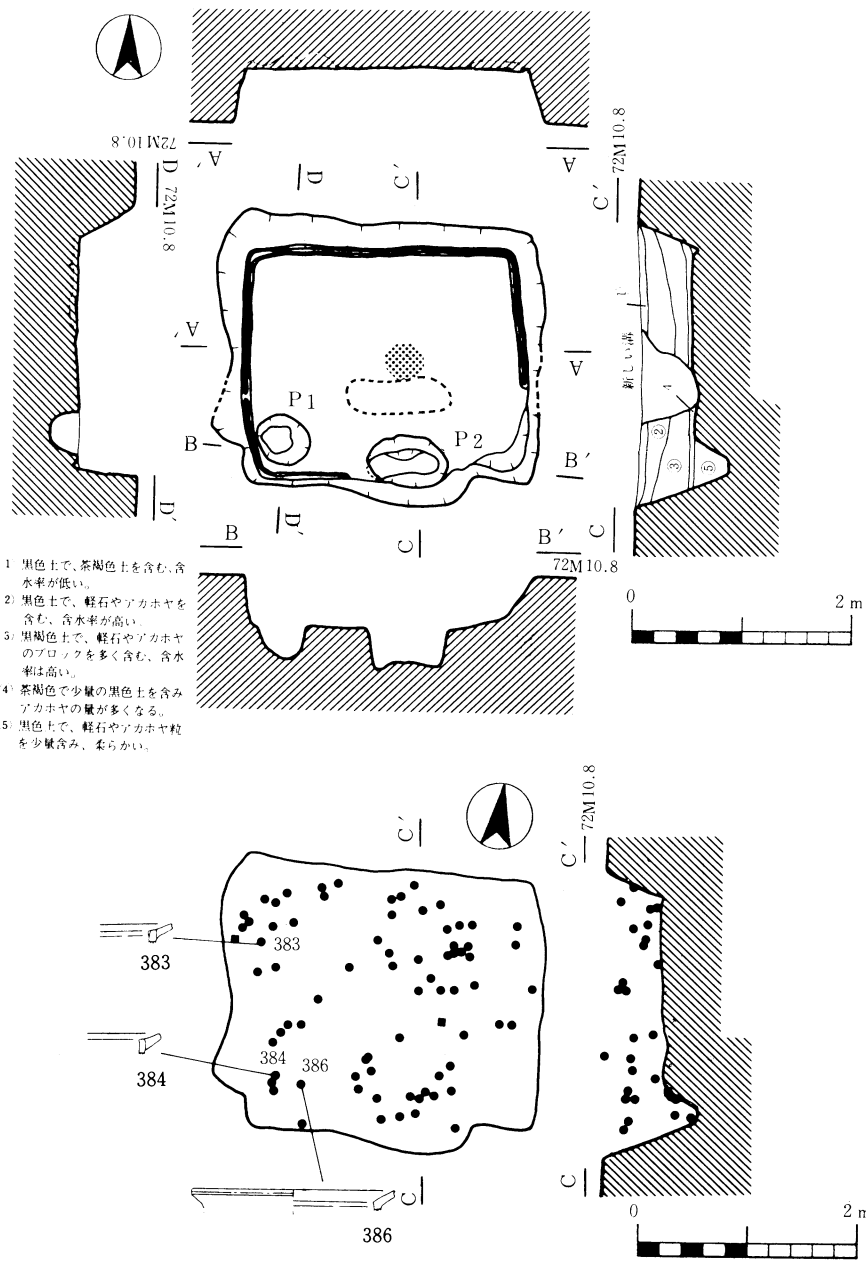


Fig. 61 17号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

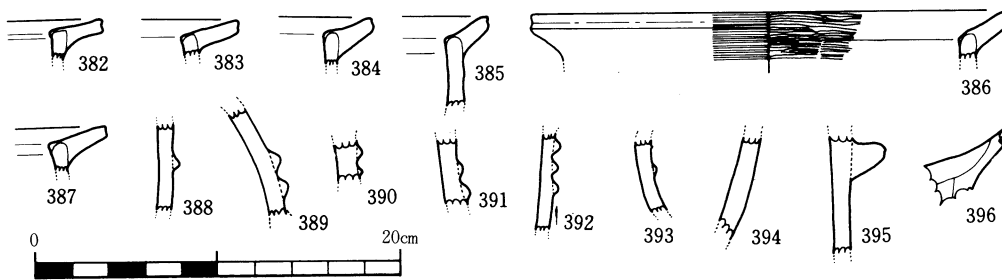


Fig. 62 17号住居跡内出土土器実測図

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
386		甕 口縁部	①(26.1)	暗茶褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
387		〃		茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
388	PL 32	甕 胴部		褐色	Q P L M	一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位、内面は斜位の刷毛などで調整である。
389	〃	壺 胴部		暗褐色	Q P L M	二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は磨きを認め、内面は磨減しているため不明である。
390	〃	〃		黒褐色	Q P L M	小破片のため詳細は不明であるが、二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は磨きを認め、内面は磨減しているため不明である。
391	〃	壺 肩部		暗茶褐色	Q P L M	二条の断面三角形突帯を廻らす肩部付近と思われる。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
392	〃	甕 胴部		暗褐色	Q P L H	三条の断面三角形貼付突帯を廻らす、煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
393	〃	壺 肩部		明褐色	Q P L M	一条の断面三角形貼付突帯を廻らす肩部付近と思われる	外面は縦位、横位、内面は横位の刷毛などで調整である。
394	〃	?		褐色	Q P L M	器種は不明であるが、いずれかの底部近くの破片と思われる。	外面は縦位及び斜位の刷毛などで調整で、内面は磨減のため不明である。
395	〃	大甕 口縁部 下位		褐色	Q P L M	大甕の口縁部の外側直下の突帯と考えられる。突帯端面は凹む。	外面は横位の刷毛などで調整で、内面は指頭圧調整後が残る。
396	〃	壺 底部		褐色	Q P L	欠損しているが底部と思われる。	外面は磨削りを認めるが、鮮明さに欠け、内面は不明である。

⑮ 18号住居跡 (Fig. 63~66, P L. 16)

14号掘立住建物跡との最短距離は、1.6mで、24号住居跡まで、1.9m、17号住居跡まで、7.2mを測り、B・C-20・21区のⅡ層中で検出された。

本住居跡は、バイパス建設予定地外へ遺構がのびるため、規模は不詳である。現存している遺構の規模は、676×295~550 (遺存径) cmを測る。遺構検出面からの深さは、約77cmである。

住居跡の平面の形状は、ほぼ円形状を呈するものと思われる。主柱穴は南側路線外へのびているため不明である。遺存する柱穴は6本で、P<sub>1</sub>:径52~42 (路線外) cm, P<sub>2</sub>:径52~60cm, 深さ58cm, P<sub>3</sub>:径42~50cm, 深さ160cm, P<sub>4</sub>:径44~60cm, 深さ42cm, P<sub>5</sub>:径56~80 (路線外) cm, 深さ64cm, P<sub>6</sub>:径31~38cm, 深さ60cmを測り、それぞれの心心距離は、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>:124cm, P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>:165cm, P<sub>3</sub>-P<sub>4</sub>:160cm, P<sub>4</sub>-P<sub>5</sub>:112cm, P<sub>5</sub>-P<sub>6</sub>:154cm, P<sub>6</sub>-P<sub>4</sub>:74cmである。北側壁周縁の一部は、17号住居跡よりのびる新しい溝により影響を受けている。

本住居跡の床面はⅣ層で、貼り付けによる調整を認めた。壁周縁寄りには、幅約95~130cmの貼り付けによるベッド状遺構を認め、柱穴を取り囲むような状態で、床面との比高差は約9~16cmを測る。住居跡のほぼ中央部は、路線外へのびるが、160×90 (遺存径) cm, 深さ45cmの土壇が検出され、三か所に柱穴状の掘込を認めた。その中には、深さ約50cmを測るものもある。

本住居跡の出土遺物は、床面からの出土はほとんどなく、埋土中より甕形土器は、くの字に外反する口縁部の土器破片や底部、壺形土器の破片、鉢形土器などや石器は棒状の叩石が出土した。土壇埋土上面より棒状のわりと大きい炭化物が認められた。

土器 (Fig. 65, PL. 32)

Tab. 16 18号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
397		甕 口縁部 胴部	①(32.6) ③(28.6)	褐色	Q P L M	直線的に立ち上がりながら内湾気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす、薄く煤の付着を認める。	内・外面とも指頭圧調整後、外面は横位び斜位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整がなされ、外面は一部鋭削りを認める。
398	PL. 32	〃	①(29.9)	茶褐色	Q P L M	内湾気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位、内側は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整を認める。
399		〃	①(31.2) ③(26.4)	茶褐色	Q P L M	外方気味に立ち上がり、胴部は張らず、内湾する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。四条の断面三角形貼付突帯を廻らす、煤の付着を認める。	内・外面ともに器面全体に磨滅が見られるが、外面は横位、内面は指頭圧調整後、横位及び斜位の刷毛などで認める。

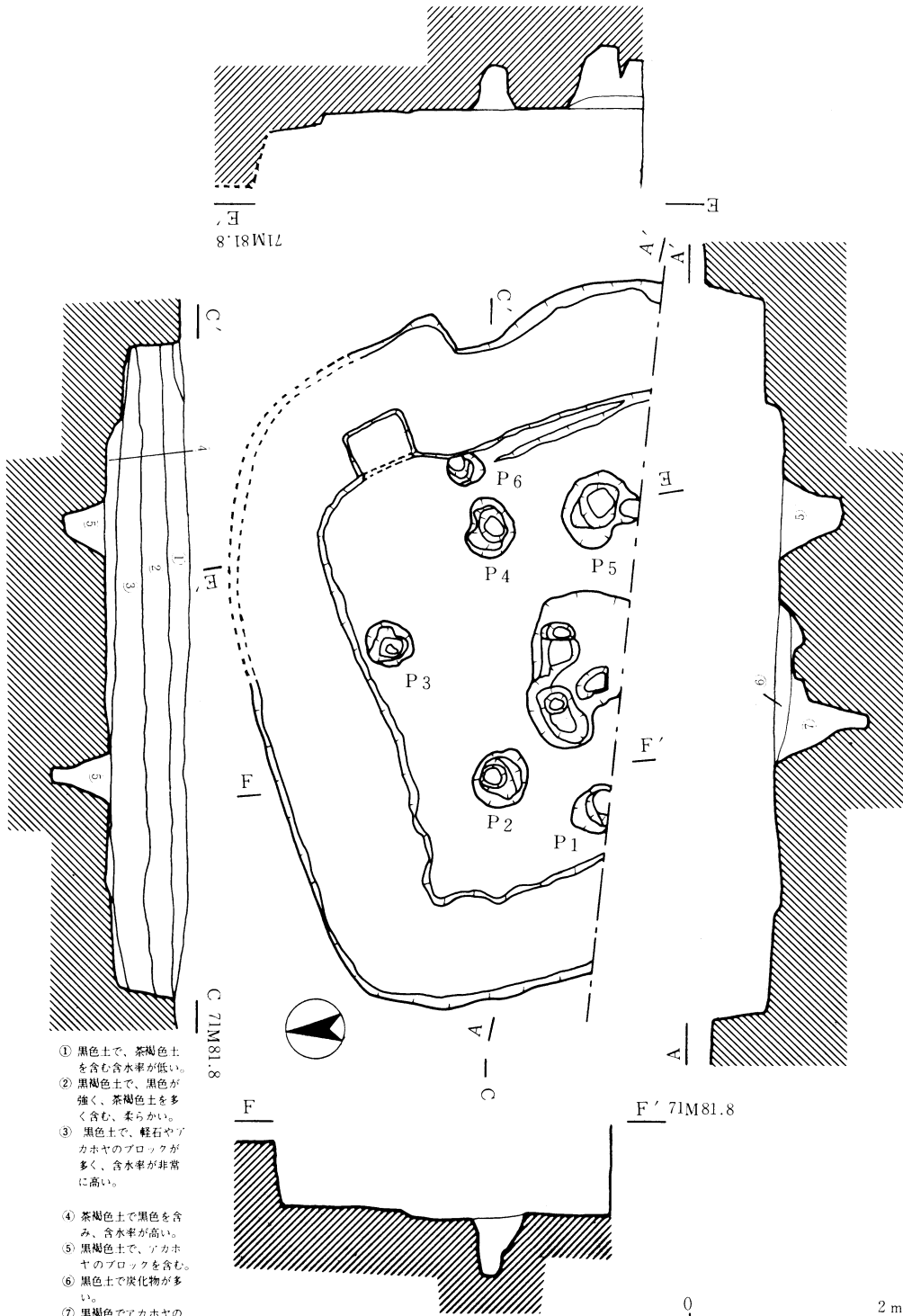


Fig.63 18号住居跡実測図

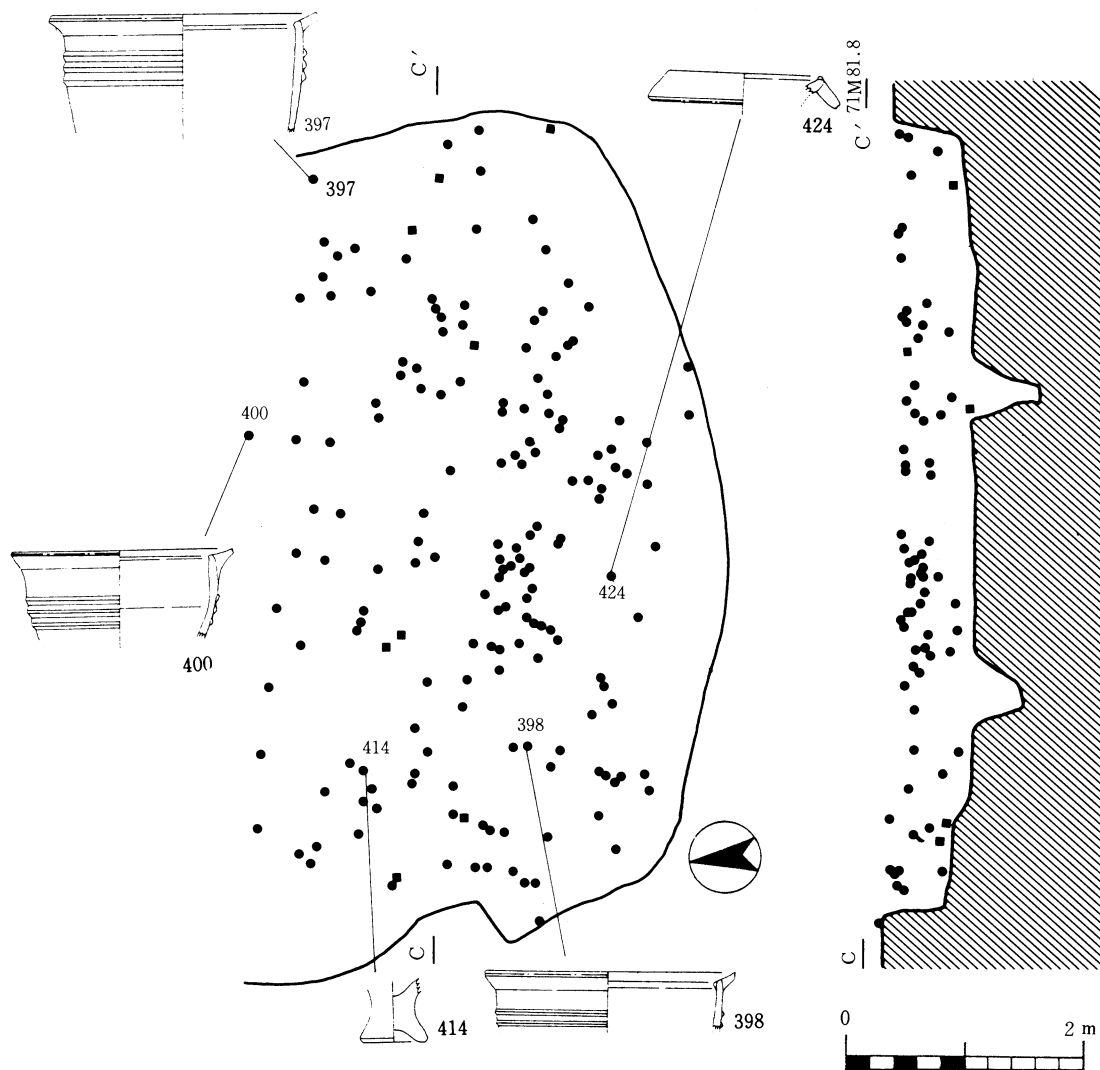


Fig. 64 18号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
400		甕 口縁部 胴部	①(26.8) ③(22.5)	暗茶褐色	Q P L M	胴部付近より直線的に立ちあがる口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は指頭圧調整後横位及び斜位、内面は横及び斜位の刷毛などで調整を認める。
401	PL 32	〃	①(21.6)	茶褐色	Q P L M	直口する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位及び部分的に斜位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整を認める。
402	〃	甕 口縁部		暗茶褐色	Q P L H	送り字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整を認める。

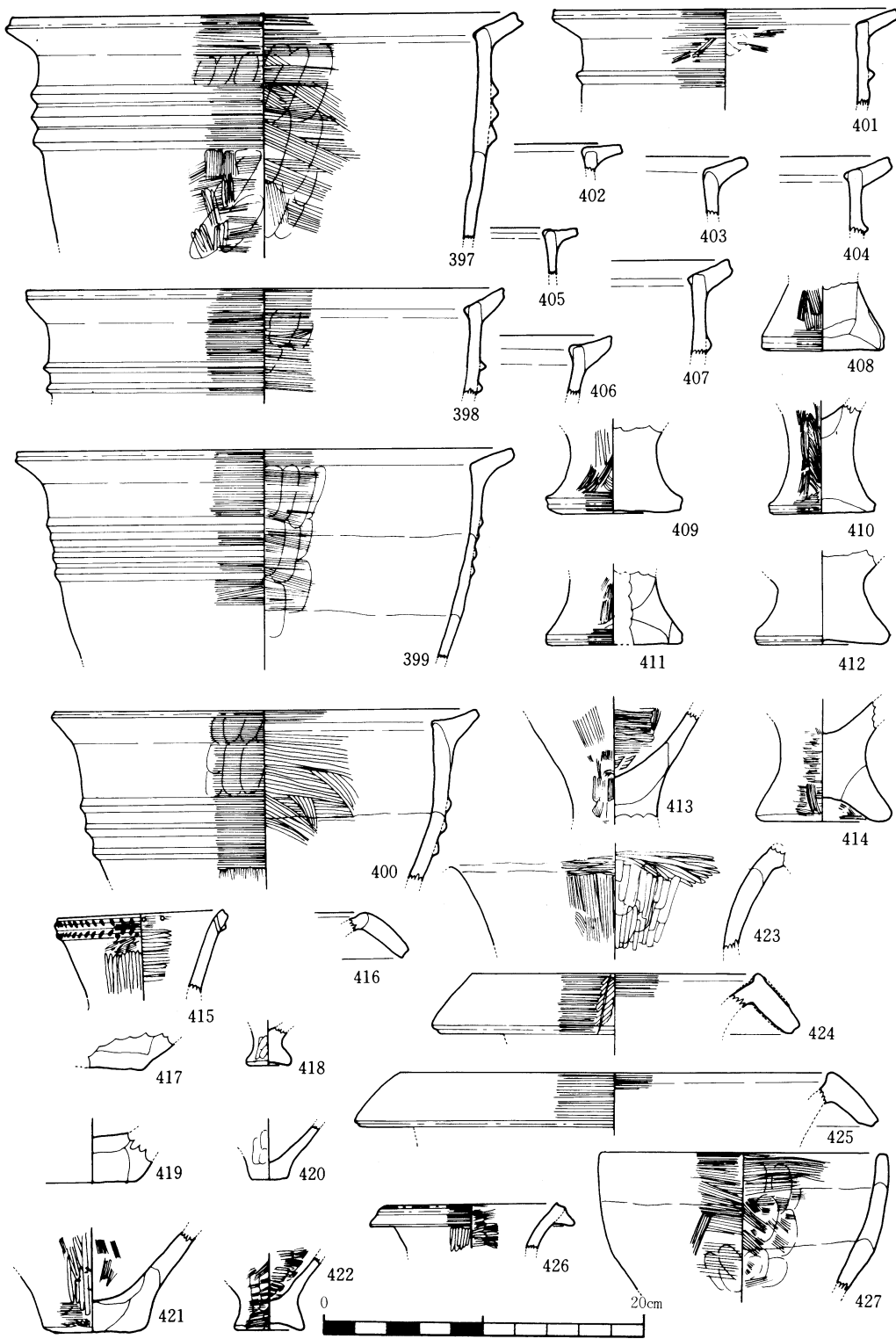


Fig. 65 18号住居跡内出土土器実測図

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
403	PL. 32	甕 口縁部		黒褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。口縁部上面は凹む。	外面は横位及び一部斜位、内面は横位の刷毛などで調整である。
404	〃	〃	黒褐色	Q	P L M	くの字に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁部上面もわずかに凹む。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
405	〃	〃		暗褐色	Q P L M	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。器壁は全体的に薄く、煤の付着を認める。	外面は指頭圧調整後横位、内面は横位の刷毛などで調整である。
406	〃	〃		暗茶褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む、煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
407		甕 口縁部		茶褐色	Q P L H M	直口する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面ともに指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
408	PL. 32	甕 底部	①(7.4)	灰褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は短かく、あまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	縦位及び横位の刷毛などで調整である。
409	〃	〃	④8.6	茶褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾が長く、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	横位、斜位及び縦位の刷毛などで調整である。
410	〃	〃	④(6.6)	茶褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は非常に長く、鋭角的であるが、あまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。
411		〃		茶褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。
412	PL. 32	〃	④8.4	茶褐色	Q P L M	充実した脚台である、裾は短かく、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。底面中央部付近は若干凹む。	器面全体に磨減や剥落を認め不明である。
413		〃		茶褐色	Q P L M	充実した脚台のつく底部付近と考えられる。内面に煤の付着を認める。	外面は剥落しているものの縦位及び斜位、内面は横位の刷毛などで調整である。



番号	図版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
414	PL 32	甕 底部		褐色	Q P L M	若干あげ底の底部である。裾は長く、鋭角的に広がり、裾の端面は丸味を帯びる。内面には煤の付着を認める。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。一部、底面にも刷毛などを認める。
415	々	壺 口縁部		暗茶褐色	Q P L	直線的に外反する口縁部で、口唇部は凹む、口縁部直下に断面三角形貼付突帯を廻らす。口唇部外側と突帯にそれぞれ斜行する刻みを認める。現在で2ヶ所に突帯直下からと口縁部内側より2×2mmの円孔を穿つ。外面の一部には丹を認める。	外面は、横位及び斜位のなどで縦位の篋削を認め、内面は横位の刷毛などで調整である。
416	々			茶褐色	Q P L M	大きく垂れ下がり外反する口縁部で、口縁部端面は凹む、口縁部内傾内傾には、わずかな張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
417		壺 底部		茶褐色	Q P L M H	小破片のための不詳であるが、平底の底部である。	小破片のため不明であるが、一部に刷毛などで調整を認める。
418		手捏ね土器		茶褐色	Q P L M	手捏ね土器の底部で、若干あげ底である。裾はごく短かく、鋭角的に広がり、裾の端面は丸くなる底部である。	指頭圧調整痕を一部に残す。
419		大甕 底部		茶褐色	Q P L	破片のため定でないが、平底の厚さから大型甕形土器のものと思われる。	調整痕は不明である。
420	PL 32	手捏ね土器 底部	④2.2	暗褐色	Q P L	平底の小さい底部で、底部より外方へ立ち上がりながらのびる器形と思われる。	指頭圧調整痕を残す。
421	々	壺 底部	④6.4	暗茶褐色	Q P L H	平底の底部で厚く、外方へ立ち上りながらのびる器形と思われる。	外面は横位の刷毛などで及び篋削りを認める。内面は刷毛などで調整を一部に認める。
422	々	手捏ね土器 底部	④2.8	灰褐色	Q P L	若干あげ底の小さい底部で、裾は短かくあまり広がりがなく、裾の端面は丸くなる。底部より外方へ立ち上がりながらのびる器形と思われる。	外面は指頭圧調整痕を残し、構位及び斜位のなどで、内面に横位の刷毛などで調整を認める。
423		壺 口縁部 頸部		茶褐色	Q P L M	外側へ大きく外反する器形と思われ、口縁部の一部を欠損する頸部である。	外面は、横位及び縦位の刷毛などで、内面には指頭圧調整痕を残し、篋削りを認める。
424		壺 口縁部		茶褐色	Q P L M	大きく垂れ下がり外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。内・外面ともに剥落を認める。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面とも横位の刷毛などで調整で、外面の一部に篋削りを認める。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
425		壺 口縁部	①(23.8)	茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には、張り出しを作り出す。口縁上面は幅広い。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
426	PL 32	〃	①(12.9)	暗茶褐色	Q P L M	口縁部は外反する。口唇部外側には断面三角貼付突帯を廻らし、口縁部を作り出す。口唇部端面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
427	〃	鉢 口縁部 胴部	①(18.0)	暗褐色	Q P L H	外方へ開きながら立ち上がり、外傾気味の口縁部である。口唇部端面は、丸味を帯びる。	外面は、横位及び斜位の刷毛などで、胴部より下位は指頭圧調整痕である。内面は、指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などである。輪積みの方法を残す。

### 石器 (Fig. 66, PL. 36)

本住居跡内出土の石器は、棒状の叩石がみられる。428は、安山岩を石器の素材に用いている。最大長12.8cm, 最大幅, 4.0cm, 最大幅3.5cm, 重さ252g, 器面全体を研磨を認め、部分的に研磨痕を観察する。上下端面には敲打によるためか剝離痕を認めることから叩石としての用途が考えられる。

#### ⑩ 19号住居跡 (Fig. 67~71, PL. 16)

22号住居跡との最短距離は、3.5mで、11号掘立柱建物跡まで、4.2mを測り、E・F-18区のⅡ層中で検出された。

長軸554cm, 短軸405cm (ともにベッド状張り出し部を含む) を測る。主軸の方位は、N-78°-Eをとる。主柱穴は2本で、西側：径44~46cm, 深さ56cm, 東側：径38~46cm, 深さ44cmを測り、心心距離は180cmである。遺構検出面からの深さは65cm, ベッド状遺構まで約50~58cmを測る。

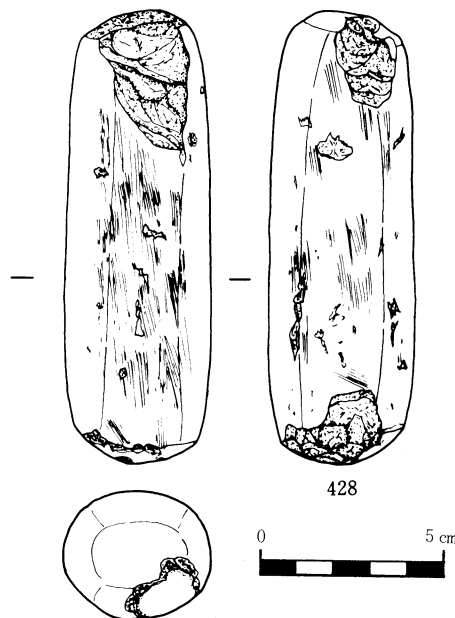


Fig. 66 18号住居跡内出土石器実測図

本住居跡の平面の形状は、基本的には隅丸方形状を呈し、南西隅際、北側及び東側には、ベッド状張り出しを認めた。南西隅には、100~110×65cm, 北側には、205~215×75~80cm, 東側には、215~222×75cmを測り、それぞれの壁際には、幅100~130cmの貼り付け調整によるベッド状遺構を検出し、床面との比高差は約7~15cmである。南西隅壁際のベッド状遺構床面には、幅10~16cm, 深さ約6cmの壁帯溝を検出した。床面はV a層で、貼り付け調整を認めた。南側壁際には、98×80cm, 深さ30cmを略円形状の土壇を検出した。床面及びベッド状遺構上面に台

石と思われる3個の平坦面をもつ柱状の石を認め、ベッド遺構上のは傾斜した状態で検出された。

本柱居跡内の出土遺物は、大型甕形土器、壺形土器の破片や磨製石鏃・砥石などである。甕形土器は、口縁部の形状がくの字状に外反する破片が主体で、逆し字状に外反する小破片も認められた。壺形土器は、口縁部の小破片や肩部の破片、大型甕形土器は、口縁部を欠くが、口縁部付近の破片である。住居跡の床面からの出土はあまりなく、土器小破片を含めて埋土中からの出土が多い。また土坑内埋土上位より炭化物を多く認めた。

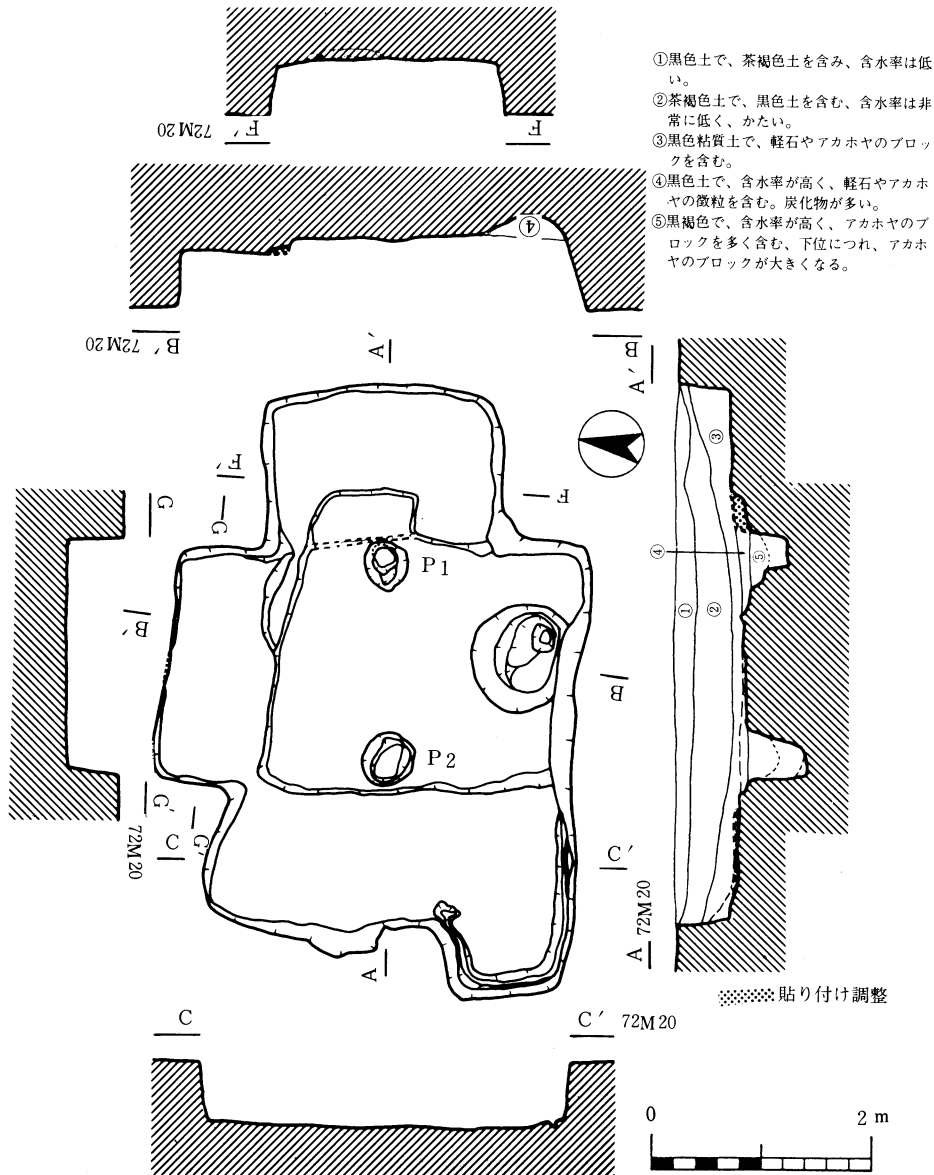


Fig. 67 19号住居跡実測図

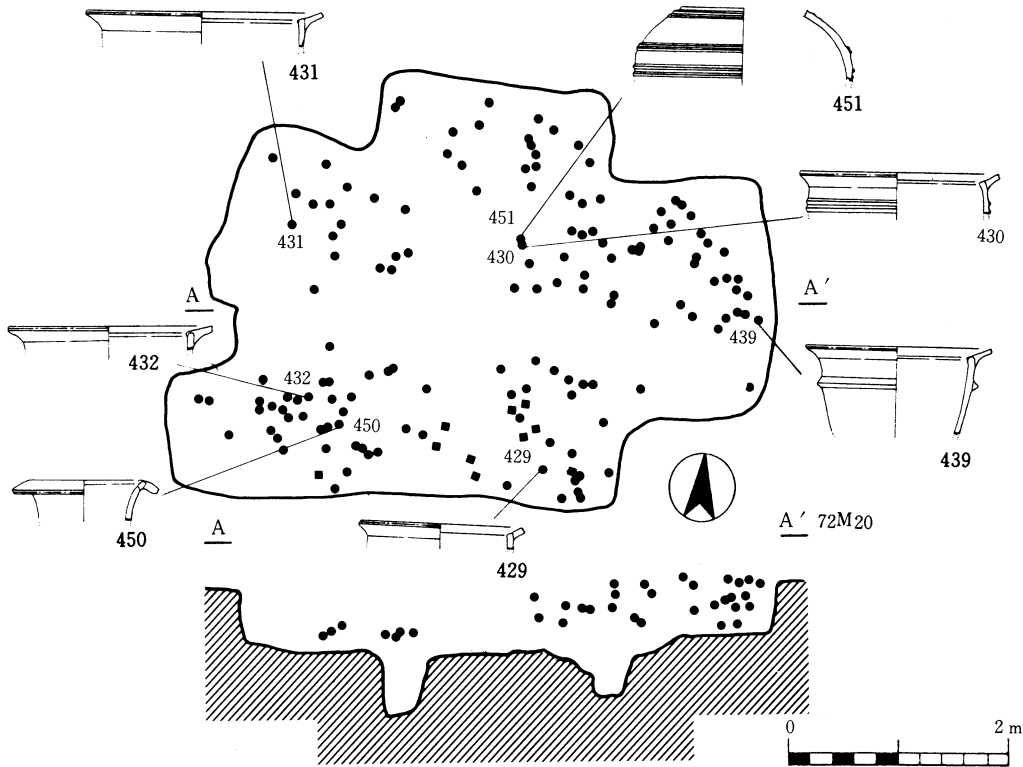


Fig. 68 19号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

土器 (Fig. 69, PL. 32)

Tab. 17. 19号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
429	PL. 32	甕 口縁部	①(21.2)	黒褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には、稜を作り出す。口縁部上面はわずかに凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
430	〃	〃	①(25.4)	暗茶褐色	Q P L M	内湾気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には稜を作り出す。口縁部上面は凹む。二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
431	〃	〃	①(30.5)	茶褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には、張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで、内面の一部に斜位などで調整を認める。
432	〃	〃	①(26.4)	暗褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には、張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。

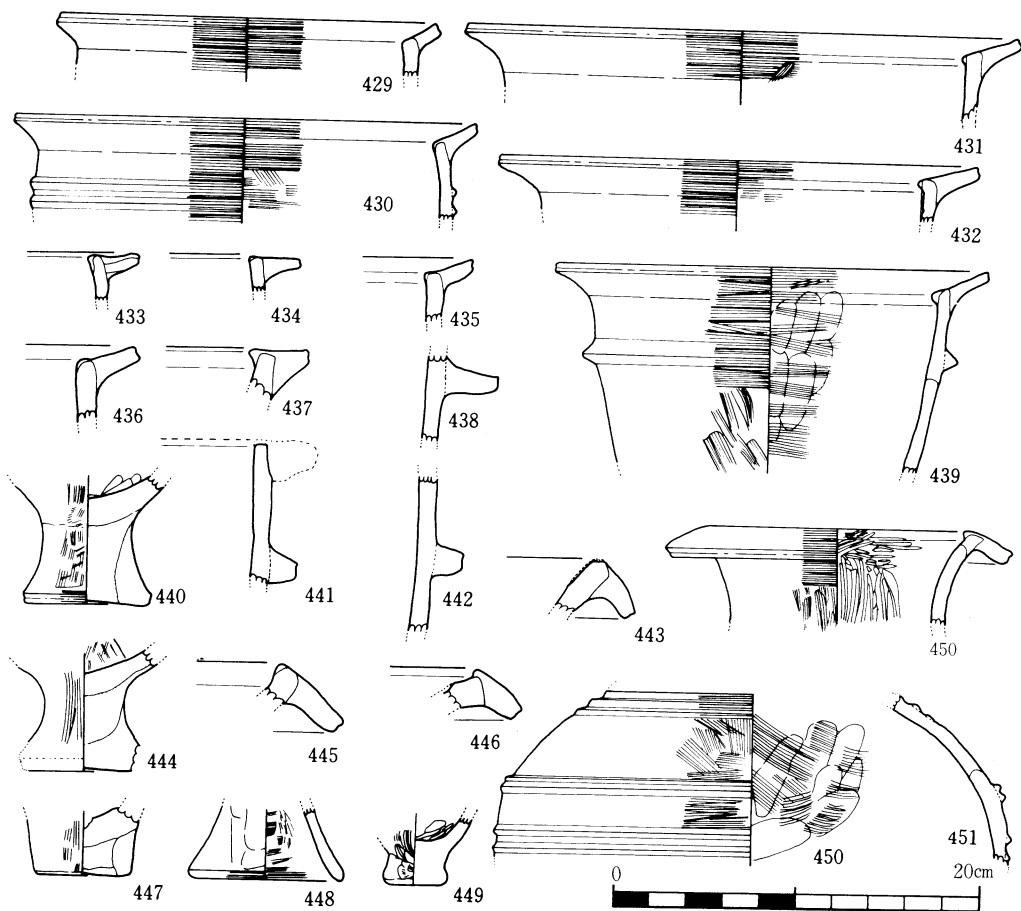


Fig. 69 19号住居跡内出土土器実測図

番号	図版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
433	PL. 32	甕 口縁部		暗褐色	Q P <sub>L</sub>	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には、わずかに張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。煤の付着を認める。	外面は横位の刷毛などで調整で、内面は篋削りを認める。
434	〃	〃		暗褐色	Q P <sub>L</sub>	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には稜を作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
435	〃	〃		暗褐色	Q P <sub>L</sub>	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には、わずかに張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
436	〃	〃		暗茶褐色	Q P <sub>L</sub> M H	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部上面は凹む。口縁部内側に稜を作り出す。	外面は横位の刷毛などで、一部は篋磨で、内面は磨滅しているため不明である。

番号	図版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
437		甕 口縁部		褐色	Q P L M	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
438	PL 32	大・甕 口縁部 下位		灰褐色	Q P L H	口縁部外側直下の突帯である。突帯端面は凹む。	外面は横位の刷毛などで、突帯下は横位の篋削り、内面は縦位及び斜位の篋削りを認める。
439	ク	甕 口縁部 胴部	①(23.7) ③(18.9)	茶褐色	Q P L	外側に直線的に立ち上がりながら外傾気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出してを作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。器壁は全体的き薄い。	外面は、横位及び斜位の刷毛などで、内面は指頭圧調整後斜位、横の刷毛などで調整である。
440	ク	甕 底部	④(17.0)	茶褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。底面中央部は若干凹む。	磨滅のためか薄い斜位及び縦位の刷毛などで調整を認める。
441	ク	大・甕 口縁部		黄茶褐色	Q P L	直口気味の口縁部である。口縁部は貼付部分より剝離している。口縁部外側直下には、下方気味に断面台形状貼付突帯を廻らし、突帯端面は凹む。突帯下面端に靱粒の圧痕を認める。	外面は横位の刷毛などで、内面は篋磨きを認める。
442	ク	大・甕 口縁部 下位		黄褐色	Q P L	若干内湾気味の口縁部を作り出すと思われる器形で、口縁部外側直下には断面台形状貼付突帯を廻らす。突帯端面は凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに篋磨きを認める。
443	ク	壺 口縁部		茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。	口縁部内側は、剝落が著しく、口縁部上面は、篋磨きを認め、口縁部下面は、横位の刷毛などで調整である。
444	ク	壺 底部		明茶褐色	Q P L H	充実する脚台である。裾は長く、鋭角的な広がりが考えられる。裾の端面は欠損しているため不明である。底面中央部が若干凹む。	外面は、縦位の刷毛などで、内面は、篋削りを認める。
445	ク	壺 口縁部		明茶褐色	Q P L M H	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部上面長く、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面とも横位の刷毛などで調整である。
446	ク	ク		明茶褐色	Q P L H	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は、一部に篋削り、内面は、横位の刷毛などで調整である。
447	ク	壺 底部	④(5.2)	暗茶褐色	Q P L	充実した底部である。小型の底部で、裾は短かく、広がりがなく、裾は丸味を帯びる。鉢形土器の脚台を思わせるような器形である。	縦位の刷毛などで調整である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
448		高杯 脚部	④ 8.6	黄茶褐色	Q P L H	高杯形土器の脚部の裾部付近と思われる。裾はあまり開かず、端面は丸味を帯びる。	外面は、指頭圧調整痕が残る。横位の刷毛などで、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
449	PL. 32	手捏ね 土器	④ 3.6	明褐色	Q P L H	平底の底部である。裾はほとんどなく、端面は丸味を帯びる。外方へ開きながら立ち上がると思われる器形である。	指頭圧調整後斜位の刷毛などで調整を認める。
450	PL. 33	壺 口縁部	① (19.0)	茶褐色	Q P L H	頸部より大きく外反し、口縁部は垂れ下り気味に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は、横位の刷毛などで及び縦位及び斜位の磨き、内面は、横位、斜位及び縦位の磨きを認める。
451	ク	壺 肩部 } 胴部	③ (28.0)	茶褐色	Q P L M	底部から胴部にかけての部位で、肩部には三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。胴部よりやや上位には、断面台形状貼付突帯を廻らし、胴部付近には二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は磨削り、内面は指頭圧調整後、斜位の刷毛などで調整を部分的に認め、剥落も著しい。

石器 (Fig. 70, 71, PL. )

本住居跡内の石器は、磨製石鏃2、磨製石器、砥石である。452・453は、扁平無茎の磨製石鏃で、先端部及び片側基部は欠損している。その残存の形状から基部は凹み、二等辺三角形を呈するものと思われる。鏃がはつきりし、両面ともに両側寄りに認め、基部まで続いている。452は頁岩を素材に用い、最大長21cm、最大幅2.0cm、最大厚0.3cm、重さ1.7gを測る。453は頁岩を素材に用い最大長1.7cm、最大

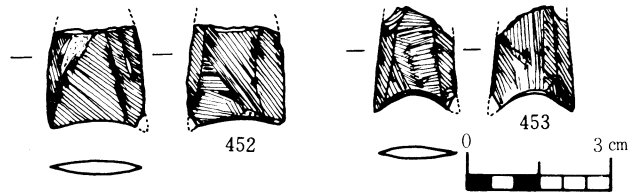


Fig. 70 19号住居跡内出土石器実測図 (1)

厚0.3cm、重さ1.7gを測る。453は頁岩を素材に用い最大長1.7cm、最大

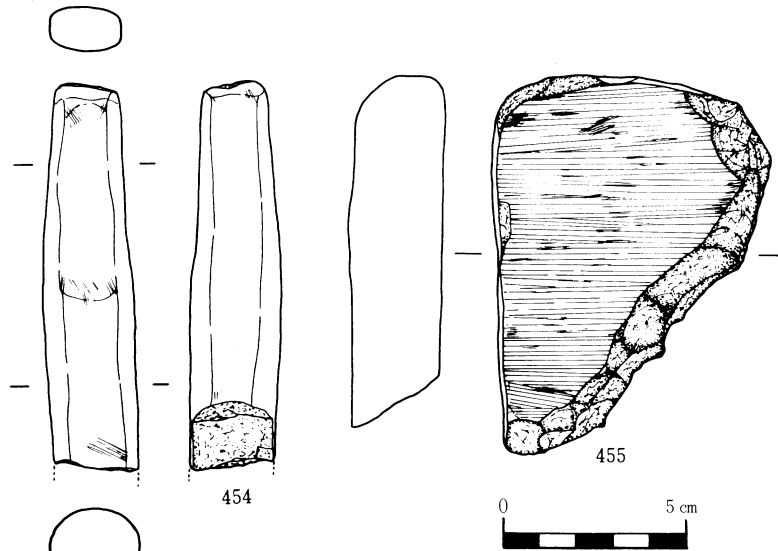


Fig. 71 19号住居跡内出土石器実測図 (2)

幅1.7cm, 最大厚0.3cm, 重さ0.7gを測る。454は, 細粒砂岩を石器の素材とした磨製の石器である。先端部が欠損し, 用途は不明である。最大長10.5cm, 最大幅2.5cm, 最大厚2.2cm, 重さ70gを測り, 器面全体に研磨を認め, 部分的に研磨痕を観察する。455は, 粗粒砂岩を石器の素材とした砥石で, 一部を欠損する。最大長7.6cm, 最大幅9.9cm, 最大厚2.7cm, 重さ310gを測り, 片面のみの研磨であり, 部分的に研磨痕を観察する。

## ㊦ 20号住居跡 (Fig. 72~74, PL. 17)

5号・6号掘立建物跡との最短距離は4.5mで, 9号掘立建物跡まで, 5m, 7号掘立建物跡まで, 7.7m, 21号住居跡まで, 8.1mを測り, B-15区のⅡ層中及びⅡ層最下面で検出された。

長軸306m, 短軸250mを測り, 主軸(長軸)の方位はN-107°-Eをとる。住居跡のほぼ中央部には, 主柱穴1が認められ, 径36~37cm, 深さ70cmである。柱穴内には, 径14~16cmの柱痕跡を検出した。遺構検出面からの深さは, 5~35cmを測る。

本住居跡の平面の形状は, 隅丸方形を呈し, 南側壁は若干外側へ張り丸味を帯びる。西壁及び北壁は, Ⅱ層中の生活面と想定される所で, 大半は, Ⅲ層最上面近くでの検出で, 小型の浅い住居跡である。床面はⅢ層及びⅣ層上面で, 主柱穴のほかに, 南西隅, 北西隅, 北東隅のそれぞれに柱穴を検出した。P<sub>1</sub>: 径20~23cm, 深さ8cm, P<sub>2</sub>: 径23~25cm, 深さ5cm, P<sub>3</sub>: 径23~37cm, 深さ26cmを測り, P<sub>3</sub>は斜めの掘込である。南側壁中央には74×52cm, 深さ11cmの略円形状の土壇を検出した。

なお, 本住居跡内の出土遺物は, 埋土中より甕形土器, 鉢形土器などの破片や磨製石鏃が出土した。甕形土器には, 口縁部がくの字状に外反するものが多く, 小破片のみである。壺形土器には, 口縁部が垂れ下り気味に外反するもので, 口縁部内側に断面三角形貼付突帯を廻らすものや二叉状口縁部をもつ破片で内側に断面三角形貼付突帯を廻らす。また, 床面には棒状の炭化物を認めた。

## 土器 (Fig. 73, PL. 33)

Tab. 18 20号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm①口径②器高③胴部最大径④底径( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
456	PL. 33	甕 口縁部	①(26.9)	暗茶褐色	Q P <sub>L</sub> 砂粒	くの字状に外反する口縁部で, 口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整を認める。
457		〃	①(26.3)	暗褐色	Q P <sub>L</sub> H	大きくくの字状に外反する口縁部で, 口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側に張り出しを作る。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整を認める。



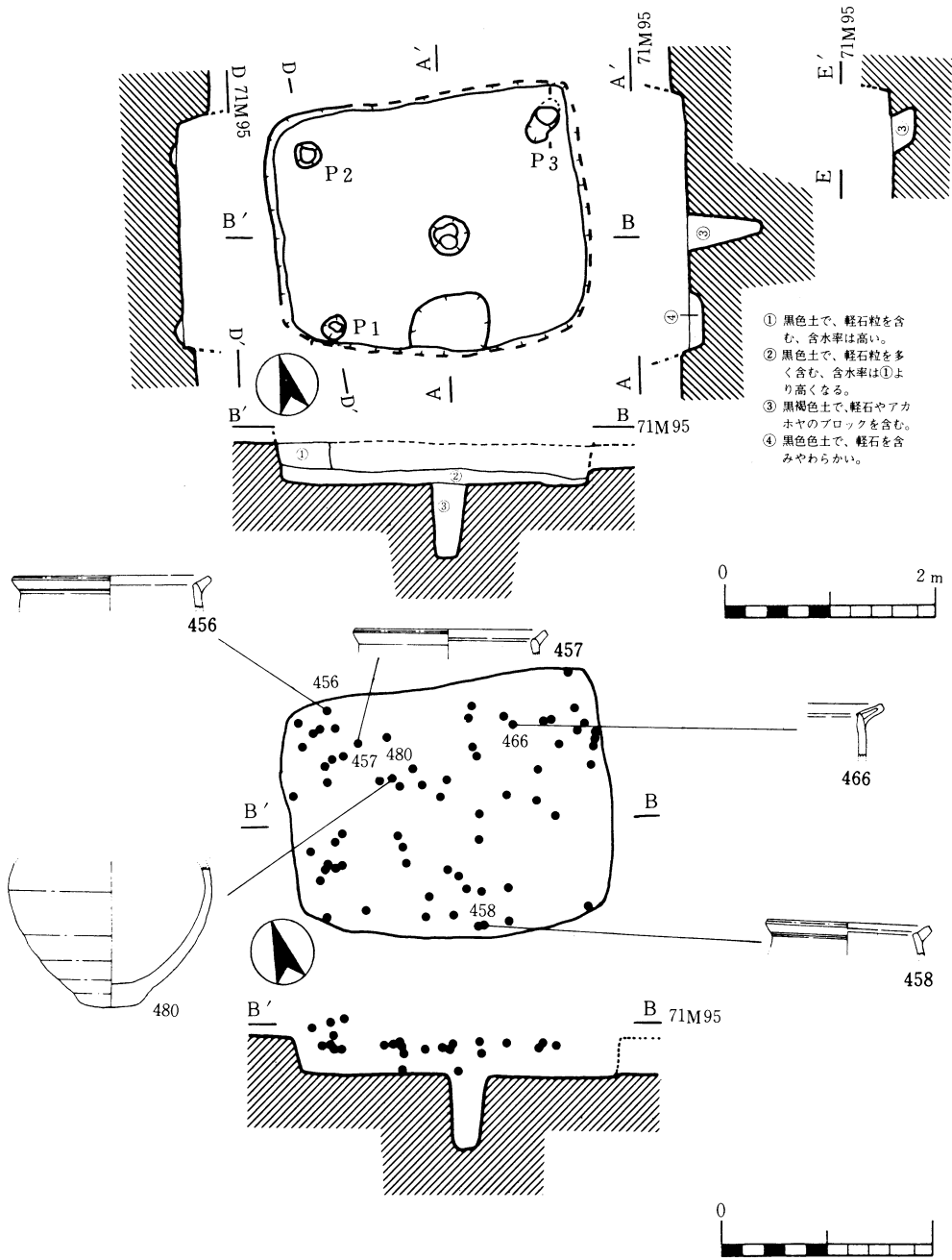


Fig. 72 20号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
458	PL. 33	甕 口縁部	①(22.2)	明茶褐色	Q P <sub>L</sub>	内湾気味の口縁で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。口縁部外側には二条の沈線を廻らす。	外面は磨減して不明で、内面は、横位の斜位の刷毛などで調整である。

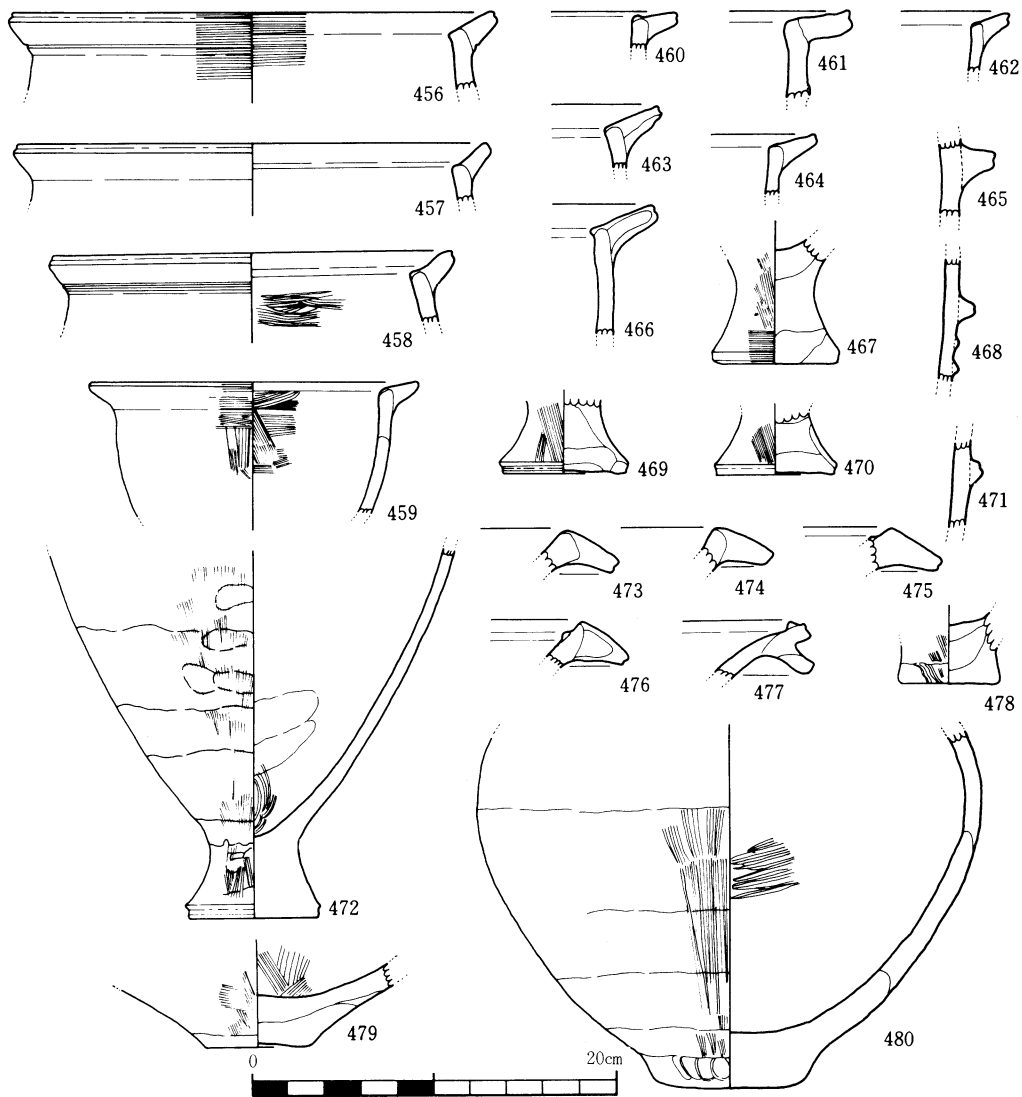


Fig. 73 20号住居跡内出土土器実測図

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
459	PL. 33	鉢 口縁部 胴部	①(18.2) ③(15.0)	暗褐色	Q P L	外方へ開きながら立ち上がり、直口気味の口縁部で、逆L字状に近く外反する。口縁部端面は丸くなる。煤の付着を認める。	外面は、横位、斜位及び縦位。内面は、横位及び斜位の刷毛などで調整である。
460	々	甕 口縁部		暗褐色	Q P L	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部上部はわずかに凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
461	PL. 33	大・甕 口縁部		茶褐色	Q P L H	逆L字状に外反する。口縁部内側に稜を作り出す。口縁部上面は長い器形である。	外面は指頭圧調整後横位、内面は横位の刷毛などで調整である。
462	〃	甕 口縁部		明茶褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後、横位の刷毛などで調整である。
463	〃			茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
464	PL. 33	〃		明茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
465		大甕 口縁部 下位		明茶褐色	Q P L H	口縁部外側直下につく断面台形状貼付突帯で、突帯端面は凹む。	外面は横位、内面は斜位の刷毛などで調整である。
466	PL. 33	大甕 口縁部		明茶褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。口縁部上面は、長い器形である。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
467		甕 底部	④ 7.0	褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的であるが広がらず、裾の端面はわずかに凹んで、浅い凹線状を呈する。	縦位及び横位の刷毛などで調整である。
468		甕 胴部		茶褐色	Q P L H M	胴部付近で、断面台形状貼付突帯を一条廻らし、突帯は凹む。突帯下位には二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
469		甕 底部	④ 7.1	褐色	Q P L H	充実した脚台で、一部欠損する。裾は短かく、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。底面は若干凹む。	斜位の刷毛などで調整である。
470	〃			褐色	Q P L M	充実した脚台で、一部欠損する。裾は短かく、鋭角的であるが、あまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。底面は若干凹む。	斜位の刷毛などで調整である。
471		甕 胴部		暗茶褐色	Q P L H M	甕形土器の胴部付近で、一条の断面三角形貼付突帯を廻らし、突帯端面は凹む。	内・外面ともに篋削りを認める。

番号	図版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
472	PL. 33	甕 底部	④ 7.3	暗褐色	Q P L H	充実した脚台で、裾は短かく、鋭角的で広がりがなく、裾の端面は凹み、凹線状を呈する。底部より外方へ直線的に立ち上がる器形である。	外面は指頭圧調整後斜位及び縦位、内面は磨減が著しいが、斜位の刷毛などで調整である。
473	〃	壺 口縁部		暗褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
474	〃	〃		暗茶褐色	Q P L H M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
475	〃	〃		暗茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には、一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
476	〃	〃		茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部端面は磨減を受けて、わずかに凹む。口縁部内側には、一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
477	〃	〃		褐色	Q P L M	大きく外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部外側直下には突帯を廻らし、突帯端面は凹む。口縁部は二又状を呈する。口縁部内側には一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
478		鉢 底部	④ 5.4	暗茶褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は短かく、ほとんど広がりがなく、裾の端面はわずかに丸味を帯びる。	指頭圧調整後斜位の刷毛などで調整である。
479		大・甕 底部	④ 5.8	暗茶褐色	Q P L H	平底の底部で、若干中央部が凹む。外方へ大きく開きながら立ち上がる器形と思われる。	外側の斜位の刷毛などで調整で、内面は篋削りを認める。
480		壺 胴部 底部	③(27.4) ④ 8.4	暗茶褐色	Q P L	底部は平底で、外方へ大きく開きながら立ち上がり、胴部が若干張る器形である。	内・外面ともに剝離や磨減を認め、外面は縦位の刷毛などで調整である。また、篋磨きを部分的に認める。内面も一部に斜位の刷毛などを認める。

### 石器 (Fig. 74, PL. 35)

本住居跡内出土の石器は、磨製石鏃である。481は紫頁岩を石器の素材とした扁平無茎で、基部は凹み、先端部及び片脚部は欠損するが、二等辺三角形形状を呈するものと思われる。鏃がはっきりし先端部より基部へつづく、研磨痕を認める。最大長2.4cm、最大幅2.4cm、最大厚の3cm、重さ2gを測る。

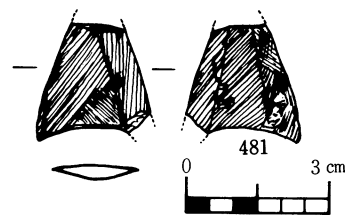


Fig. 74 20号住居跡内出土石器実測図

㊦ 21号住居跡 (Fig. 75~77, PL. 17)

5号・6号掘立柱建物跡との最短距離は、5.6mで、20号住居跡まで、8.1m、中央区溝状遺構まで、0.3mを測り、B-13・14区のⅡ層中で検出された。

住居跡の大半は、バイパス建設予定地外へ遺構がのびるため、その規模は不詳である。遺存する遺構の規模は、長軸500cm、短軸200mを測る。遺構検出面からの深さは、55cmで、ベッド状遺構まで39cmである。

本住居跡の平面の形状は、遺存する遺構では不明である。しかし、北側には232×140cmの略長方形の張り出しを認めた。張り出し部には、貼り付け調整によるベッド状遺構を検出し、床面との比高差は16cmである。床面はVa層で、貼り付け調整を認め若干軟質である。ベッド状遺構際には、径52×36cm、深さ86.6cmの柱穴を認めた。

本住居跡内出土の遺物は、床面からの出土はほとんどなく、埋土中より大型甕形土器、甕形土器（復原完形品を含む）、壺形土器などの破片が出土した。甕形土器の完形品は埋土中より一括して出土した。このほか、口縁部の形状が大きくくの字状に外反する土器破片が床面近くから出土した。壺形土器には、口縁部の形状が二叉状口縁を呈するものや胴部から肩部にかけての破片を多く認めた。

土器 (Fig. 76)

Tab. 19 21号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量単位cm ①口径②器高③復原口径④底部 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
482	PL. 33	甕 口縁部		茶褐色	Q P L M	内湾気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作る。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位、斜位の刷毛などで調整である。
483	〃	〃		暗茶褐色	Q P L M	内湾気味の口縁部と思われ、くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
484		〃		暗褐色	Q P L M H	逆し字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には張り出しを作る。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
485		〃		暗褐色	Q P L H	逆し字状に近く外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。

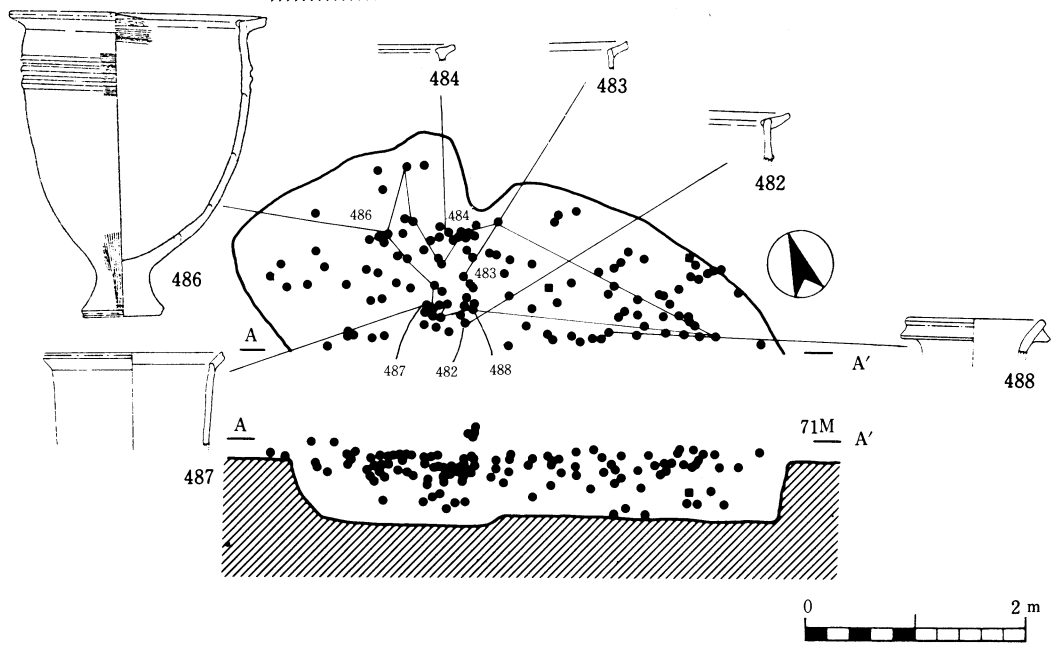
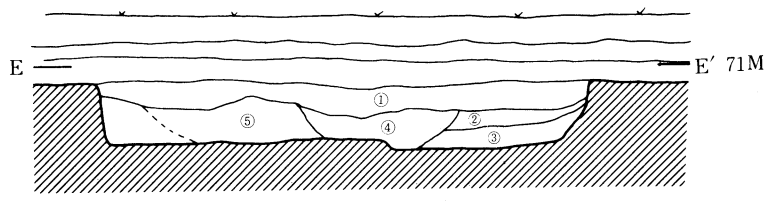
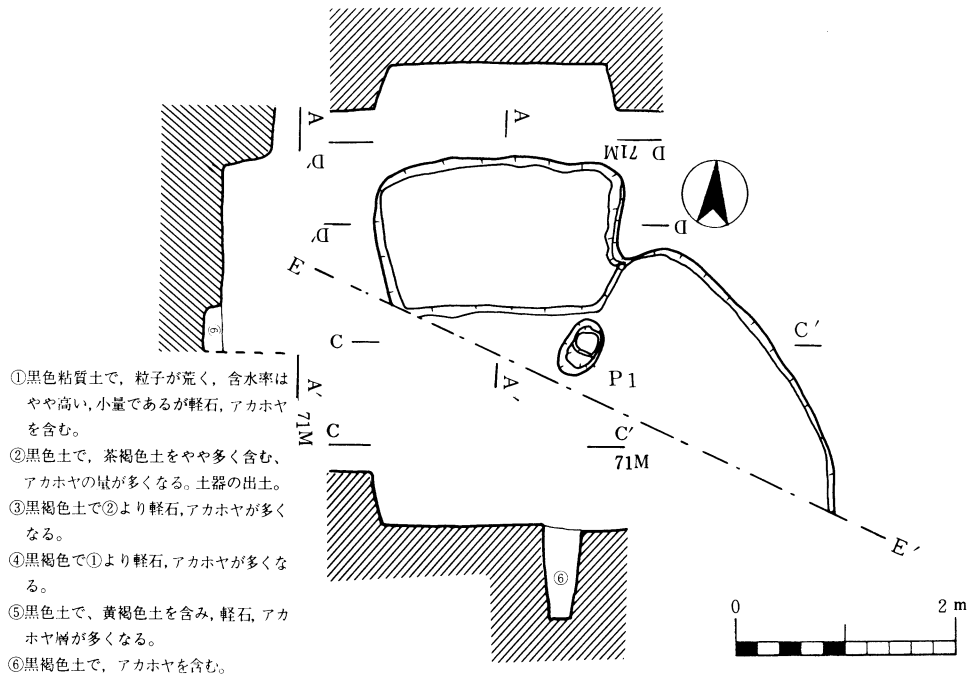


Fig. 75 21号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

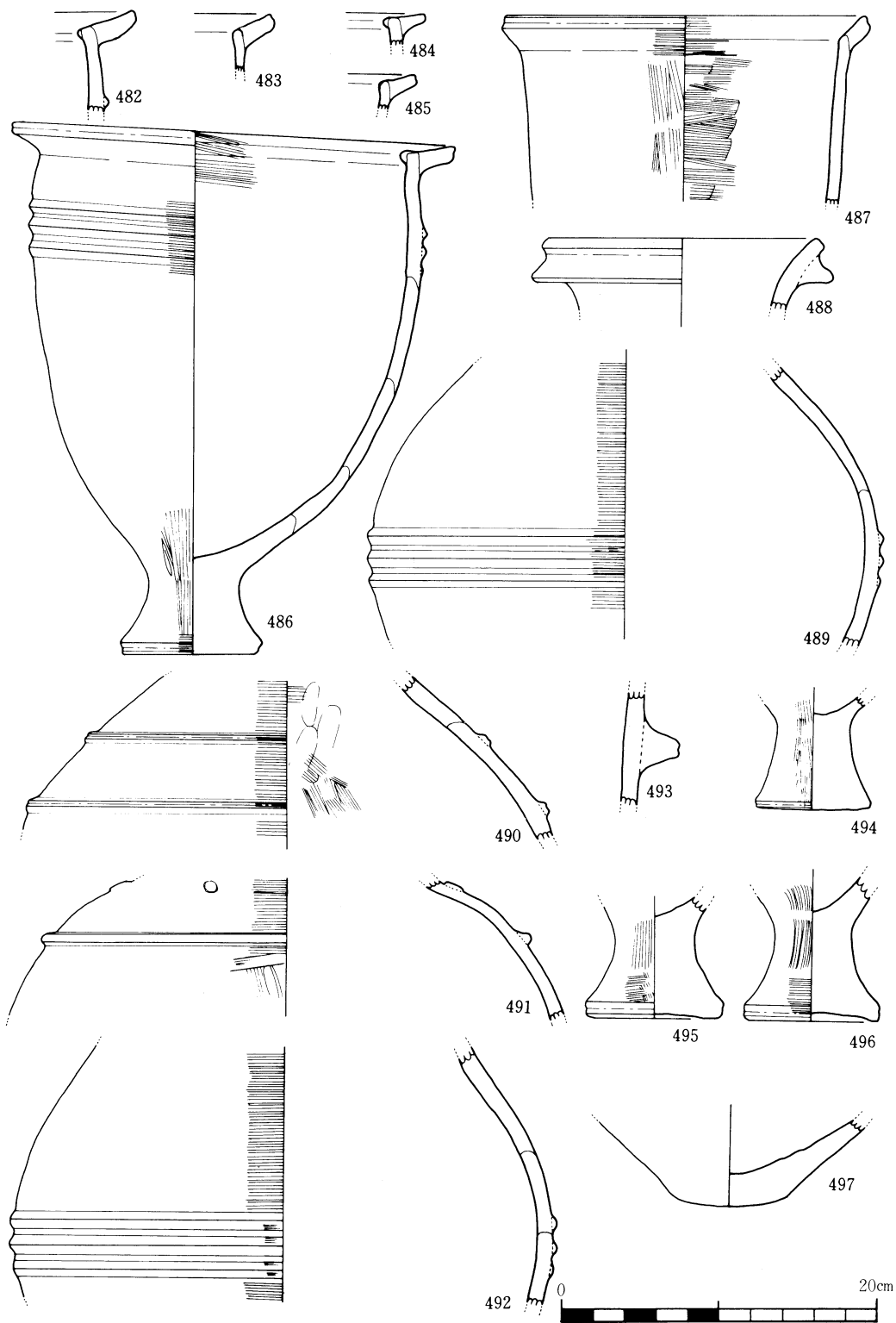


Fig. 76 21号住居跡内出土土器実測図

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
486	PL.33	甕 完形	①(28.3) ②33.2 ③(26.2) ④9.0	暗茶褐色	Q P L M	充実した脚台で、外方へ開きながら立ち上がり、やや長胴化した胴部を呈し、やや内傾する口縁部で、逆L字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	内・外面はほとんど磨滅を認めるが、外面は横位、縦位、内面は横位、斜位の刷毛などで調整である。
487	〃	甕 口縁部 胴部	①(23.3) ③(20.0)	暗茶褐色	Q P L M	直口気味に立ち上がる口縁部で、大きくくの字状に外反する。口縁部端面は凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに指頭圧調整後、外面は横位、斜位、内面は横位の刷毛などで調整である。
488	〃	壺 口縁部	①(17.8)	茶褐色	Q P L M	外反する口縁部で、口縁部外面直下に突帯を廻らし、突帯端面は丸味を帯びる。口縁部が二又状を呈する。	内・外面ともに磨滅が認められ、調整痕は不明である。
489	〃	壺 胴部	③(32.4)	茶褐色	Q P L M	球状に近い器形で、肩部はあまり張らず、三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は磨滅が著しいが、わずかに横位の刷毛などを認め、内面は剥落が著しく不明である。
490	〃	壺 肩部		茶褐色	Q P L M	肩部と胴部上位付近と思われる部位で、それぞれに一条の断面台形状貼付突帯を廻らす。突帯端面は凹む。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位、斜位の刷毛などを認める。
491	〃	〃		暗茶褐色	Q P L M	肩部付近と思われる。現存で1個の凹形浮文を認める。一条の断面台形状貼付突帯を廻らし、突帯端面は丸味を帯びる。	外面は磨滅が著しいが横位、斜位の刷毛などで調整で、内面は大部分が剥落している。
492	PL.33	壺 肩部 胴部		茶褐色	Q P L M	肩部は張らず、肩部から胴部にかけての部位で、胴部には三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は磨滅が著しいが薄い横位の刷毛などで調整で、内面は剥落が著しく不明である。
493	〃	大甕 口縁部 付近		赤茶褐色	Q P L M	口縁部外側直下の断面台形状貼付突帯で、突帯端面は凹む。	外面は横位、内面は横位などが主体で、一部縦位の刷毛などで調整である。
494	〃	甕 底部	④7.3	暗褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的であるが広がりはなく、裾の端面は凹んで、浅い凹線状を呈する。	縦位及び斜位の刷毛などで調整である。
495	〃	〃	④8.8	灰茶褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。底面は若干凹む。	縦位、斜位及び横位の刷毛などで調整である。
496	〃	〃	④8.6	明茶褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。若干底面は凹む。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。
497	〃	壺 底部	④7.0	茶褐色	Q P L M	平底の底部である。外方へ大きく開きながら立ち上がるとされる器形である。	内・外面ともに磨滅や剥落のため調整痕は不明である。



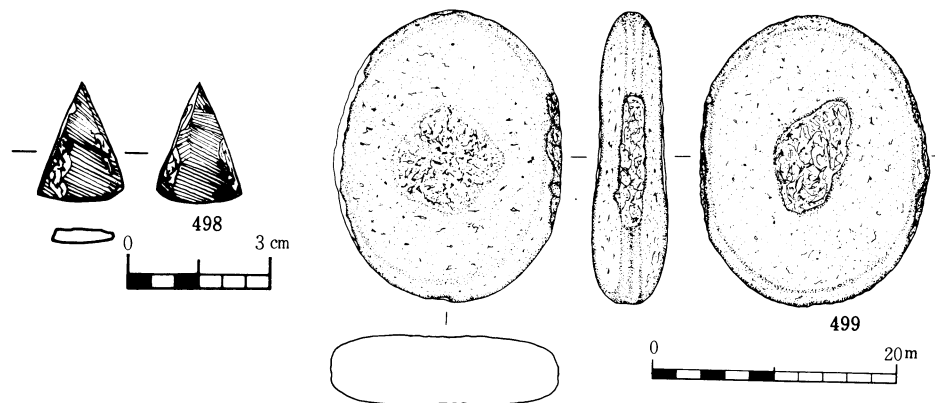


Fig.77 21号住居跡内出土石器実測図(1) Fig.78 21号住居跡内出土石器実測図(2)

石器 (Fig. 77, 78, PL. 53, 36)

本住居跡内出土の石器は、磨製石鏃と叩石である。498は、フォルンフェルス(燧石)を石器の素材として用い、扁平無茎で、最大長2.5cm、最大幅0.3cm、重さ厚0.3cm、重さ1.5gを測る。その形状は、二等辺三角状を呈し、両側縁は研磨を認め直線的となり、基部の外側は丸部を帯びる。内外面とも研磨を受け、研磨痕を認める。499は、安山岩を石器の素材として用いた叩石である。最大長11.8cm、最大幅9.4cm、最大厚2.9cm、重さ540gを測り、その形状は楕円形を呈する。両面中央部には凹部を作り出す。一部には研面を認め、磨る作業も同時に行ったものと思われる。

㊸ 22号住居跡 (Fig. 79~81, PL. 17)

16号住居跡との最短距離は、4.3mで、23号住居跡まで、6.4m、26号住居跡まで、11.7m、27号住居跡まで、13mを測り、D-19区のⅡ層中で検出された。

長軸308cm、短軸271mを測る。主軸(長軸)の方位は、N-110°-Eをとる。遺構検出面までの深さは34cmである。

本住居跡の平面の形状は、略方形を呈する。床面は、Ⅱ層最下部からⅢ層上面で、3本の柱穴が認められ、P<sub>1</sub>:径34~45cm、深さ26cm、P<sub>2</sub>:径34~44cm、深さ24cm、P<sub>3</sub>:径38~50cm、深さ54cmを測る。心心距離は、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>:112cm、P<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>:260cm、P<sub>2</sub>-P<sub>3</sub>:168cmである。他の小型住居跡に認める2本の主柱穴や土壇は検出できなかった。

本住居跡内の出土遺物は、床面からの出土はあまりなく、埋土中より大型甕形土器・甕形土器・壺形土器・蓋形土器の破片や製作途中と思われる石鏃が出土した。甕形土器には、口縁部の形状がくの字に外反する破片が多く、壺形土器は、肩は張らず口縁部付近でしまり、口縁部の形状が逆L字に外反するタイプもある。

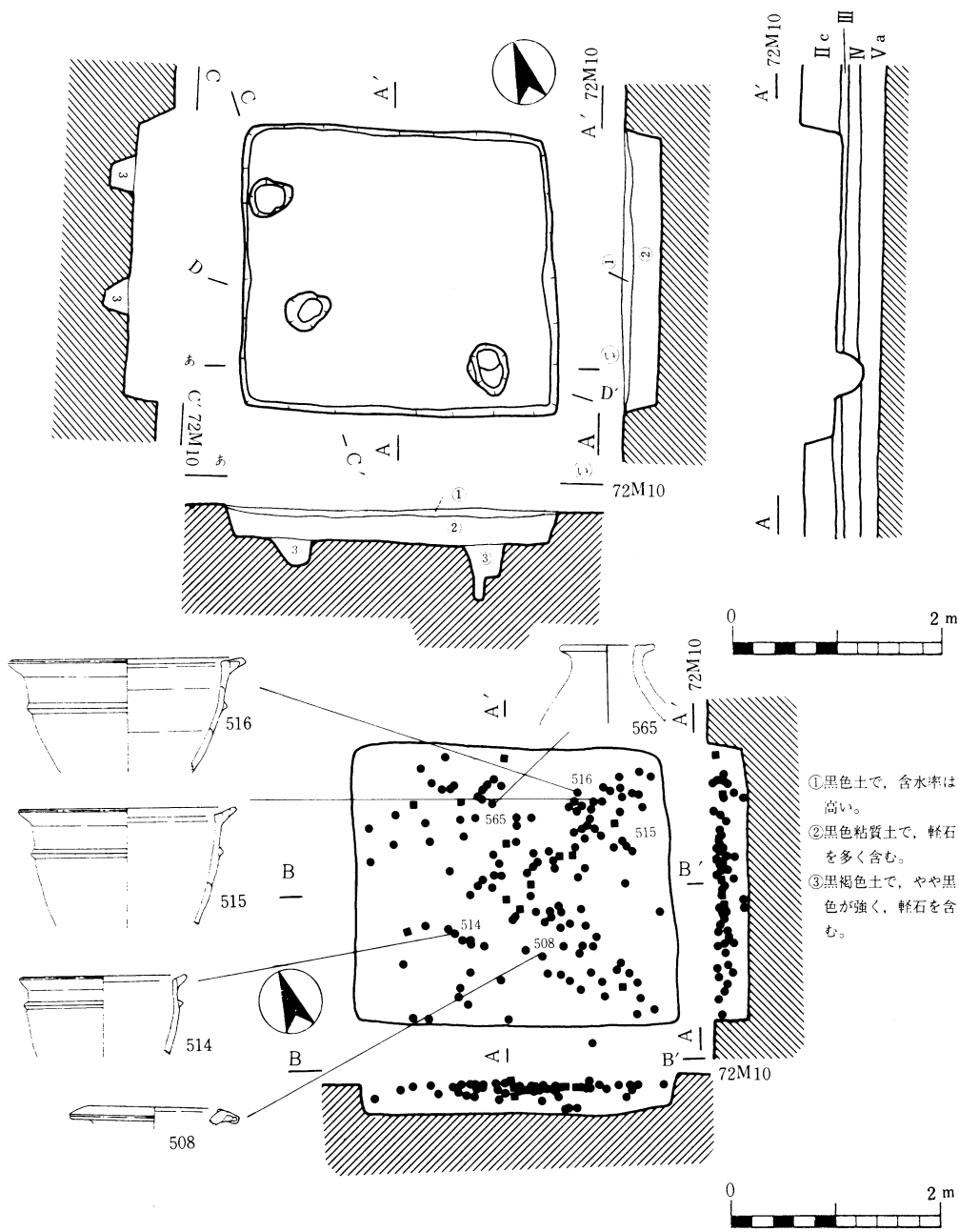


Fig. 79 22号住居跡実測図及び出土遺物平面・垂直分布状態

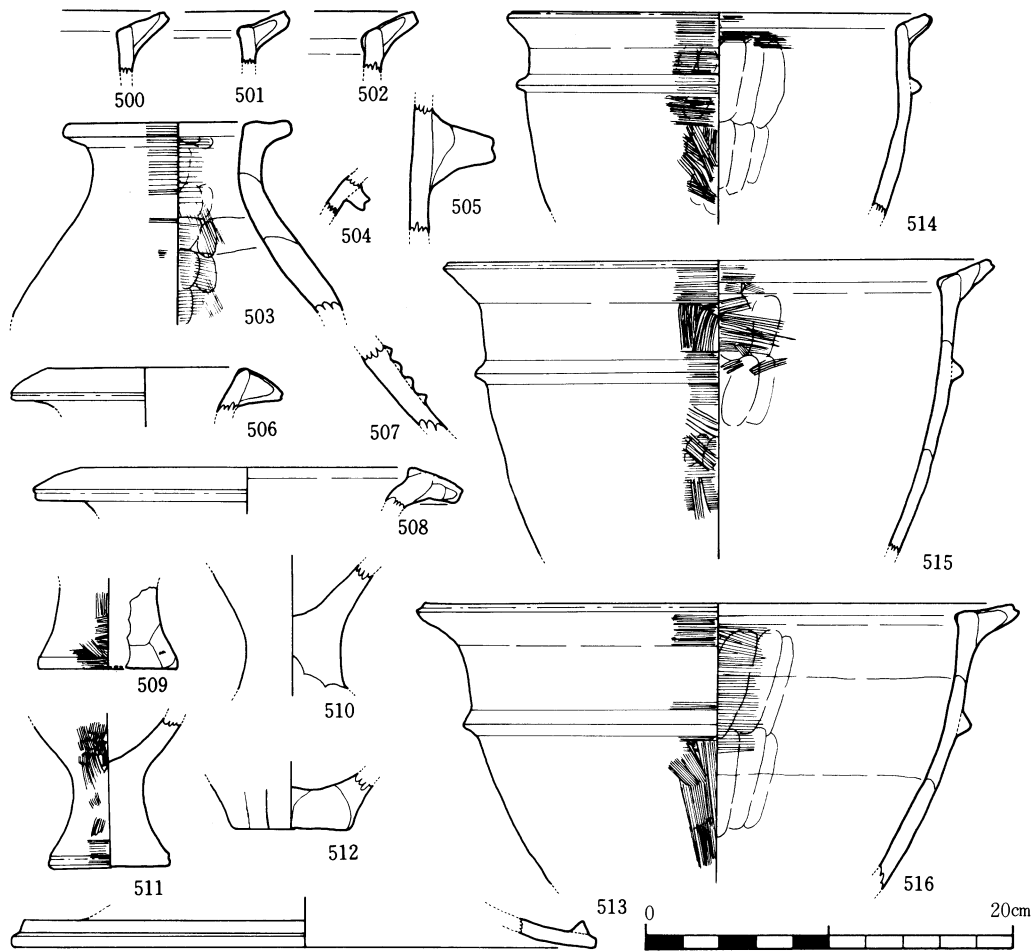


Fig. 80 22号住居跡内出土土器実測図

土器 (Fig. 80, PL. 33)

Tab. 20 22号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

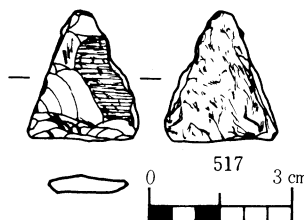
番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
500		甕 口縁部		暗褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内傾には後を作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
501		ク		暗茶褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。

図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
502	甕 口縁部		明茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
503	PL. 33 壺 口縁部 頸部	①(12.4)	茶褐色	Q P L	肩は張らず、内傾気味に立ち上がりながらわずかに外反する口縁部で、口縁部は逆し字状に外反する。口縁部端面は丸味を帯びる。口縁部上面は凹む。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。
504	壺 口縁部		暗茶褐色	Q P L M	口縁部端面は欠損している。口縁部外側直下には断面台形状貼付突帯を廻らす。突帯端は凹む。口縁部は二叉状を呈する器形である。	内・外面ともに刷毛などで調整である。
505	大甕 口縁部 下位		茶褐色	Q P L M	口縁部は欠損している。口縁部外側直下の突帯で、断面台形状貼付突帯を廻らし、突帯端面は凹む。	外面は指頭圧調整後横位、内面は横位の刷毛などで調整である。
506	PL. 33 壺 口縁部	①14.8	明茶褐色	Q P L M H	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部上面は丸味を帯びる。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
507	壺 肩部		赤茶褐色	Q P L M	壺の肩部付近と思われ、四条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は篋削り、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
508	壺 口縁部	①(23.6)	明茶褐色	Q P L H	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は横位の刷毛などで及び篋削り、内面は横位の刷毛などで調整である。
509	甕 底部		明褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は短かく、あまり広がりがなく、裾の端面は丸味を帯びている。一部欠損する。	横位、斜位、縦位の刷毛などで調整である。
510	〃		茶褐色	Q P L H	充実した脚台がつく底部付近と思われる。裾の端面及び底面部分は欠損する。内面は煤の付着を認める。	外面は剝落し、内面は磨滅して調整痕は不明である。
511	PL. 33 〃	④6.7	褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がりが、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	横位、斜位、縦位の刷毛などで調整である。
512	〃	④6.7	暗茶褐色	Q P L H	平底の底部である。ぶ厚い底部より外方へ開きながら立ち上がると思われる器形である。	指頭圧調整痕を認める。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
513		蓋		明茶褐色	Q P L H	蓋の蓋と思われ、口縁部が強く外反し、口縁部の端面は平坦面を作る。口縁部の端面付近上面には断面三角形貼付突帯を廻らす。口縁部の端面内側と端面には煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整が認められる。
514	PL. 33	甕 口縁部 胴部	①(23.2) ③(21.0)	暗褐色	Q P L H	外傾気味に立ち上がり胴部付近からは直口気味に立ち上がり口縁部端面は凹む。口縁部上面は短い。胴部上位には一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	内・外面とも指頭圧調整後、外面は横位、斜位、縦位、内面は横位の刷毛などで調整が認められる。内面口縁部付近のみで以下は磨減しており不明である。
515		々	①(30.2) ③(25.2)	暗茶褐色	Q P L H	外傾しながら立ち上がり、胴部付近で立ち上がりながら若干内湾気味の口縁部で、口縁部はくの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出している。胴部よりやや上位に一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。突帯に粗粒の痕跡が認められる。煤の付着が認められる。	外面は横位、斜位、縦位、内面は指頭圧調整後横位、斜位の刷毛などで調整が認められる。外面は一部指頭圧調整痕もわずかに残る。
516		々	①(33.0) ③(26.0)	暗茶褐色	Q P L H	大きく外傾しながら立ち上り外傾する口縁部である。口縁部は逆し字状に近く外反し、口縁部端面は凹む。口縁部内傾には張り出しを作る。胴部付近には一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着が認められる。	外面は横位、斜位、縦位、内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整が認められる。

### 石器 (Fig. 81, PL. 35)

本遺跡出土の石器には、フォルンフェルスを石器の素材として用いた石鏃である。517は磨製石鏃の製作途中のものと思われる。最大長2.7cm、最大幅2.3cm、最大厚の0.4cm、重さ2.5gを計る。形状は二等辺三角形を呈する。外面は剝離面を残し、一部研磨を認め、内面は平坦面を呈する。



②③ 23号住居跡 (Fig. 82, 83, PL. 18) Fig. 81 22号住居跡内出土石器実測図

本遺構は、他住居跡と比べ特異な形態をとり、特殊遺構とし扱うべきであったが、現在、他に類例の知見がないため、いちおう住居跡に分類しておいた。今後の課題である。

11号掘立構建物跡との最短距離は、1.7mで、19号住居跡まで、3.5m、22号住居跡まで、6.5m、16号住居跡まで、6.75m、24号住居跡まで、10.85mを測り、E-18・19区のⅡ層中で検出された。

長軸495cm、短軸471mを測る。遺構検出面までの深さは27cmである。

本遺構の平面の形状は、基本的には方形の形状であるが、北壁中央部付近から南壁中央付近にかけては、略円形の形状を呈する。床面はⅢ層上面で、一部貼り付け調整を認めた。床面には、径415~424cmの円形周溝状の遺構が掘り込まれ、その規模は、上面幅33~40cm、下面幅27~30cm、深7cmである。北東側の溝状遺構と床面にかけて、径31~40cm、深さ26cmの柱穴を認めた。

本遺構内からの出土遺物は、床面から甕形土器の口縁部の破片が少量出土した。埋土中より甕形土器や壺形土器の破片で小破片が多い。円形周溝状遺構の底面より壺形土器の口縁部及び甕形土器胴部破片が出土した。

土器 (Fig. 83, PL. 33)

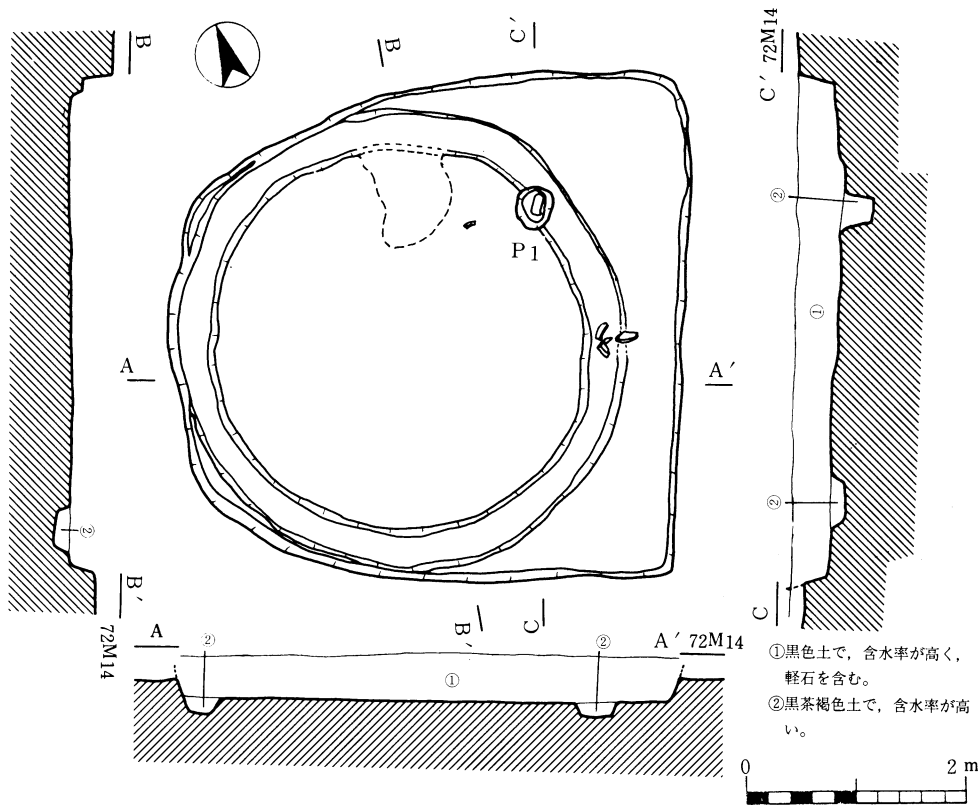


Fig. 82 23号住居跡実測図

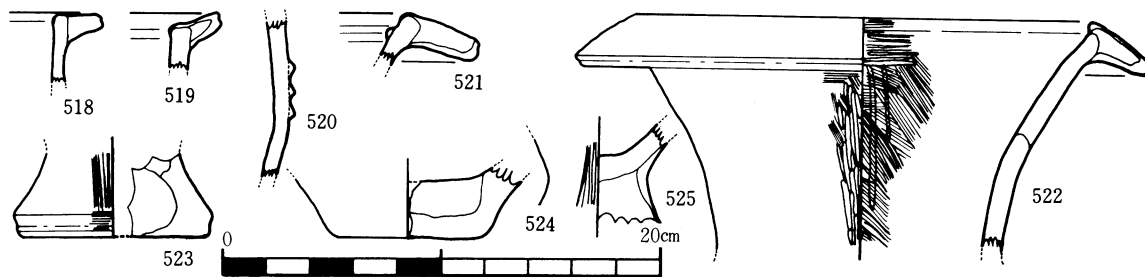


Fig. 83 23号住居跡内出土土器実測図

土器 (Fig. 83, PL. 33)

Tab. 21 23号住居跡内出土土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
518		甕 口縁部		褐色	Q P L H	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面は、わずかに凹むものの、大半は欠損している。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
519		〃		褐色	Q P L	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。口縁部上面も凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
520		甕 胴部		明茶褐色	Q P L M H	胴部は若干張ると思われる、三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位及び斜位、内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。
521		壺 口縁部		明茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には断面三角形貼付突帯を廻らす。	器形全体に磨減を認め、内・外面ともにわずかに横位の刷毛などで調整である。
522		甕 口縁部 頸部		褐色	Q P L M	頸部でしまり外方へ外反し口縁部を作る。垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面は横位、斜位の刷毛などで調整で、外面は縦位の篋削り、内面は一部に篋削りを認める。
523		甕 底部	④(7.0)	茶褐色	Q P L	充実した脚台である。破片のため詳細は不明で、裾は短かいと思われ、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。
524		壺 底部		褐色	Q P L	平底の底部で、お厚く外方へ大きく開きながら立ち上がる器形と思われる。	磨減しているため不明である。
525	PL. 33	甕 底部 付近	①26.4	暗褐色	Q P L H	甕形土器の底部と思われる。おそらく充実した脚台との接合部付近である。	縦位の刷毛などで調整である。

㊦ 24号住居跡 (Fig. 84, PL. 18)

本住居跡内は、住居跡群の南東端部に位置する。18号住居跡との最短距離まで、1.85mで、14号掘立構建物跡まで、5.5m、27号住居跡まで、10.4mを測り、E・F-20区のⅡ層中で検出された。

長軸474cm、短軸396cm (ともに張り出し部を含む) を測り、支柱穴は2本で、西側：径42～50cm、深さ45cm、東側：径47～56cm、深さ63cmで、心心距離は164cmである。主軸の方位はN-77°-Eをとる。遺構検出面からの深さは76cm、ベッド状遺構まで49～55cmである。西側張り出し部から南側隅にかけて、幅120～175cmにわたり、17・18号住居跡からのびる新しい溝の掘込の影響を受けている。

本住居跡の平面の形状は、基本的には隅丸方形を呈するが、西側及び北側壁には、張り出し遺構を確認した。張り出し部は、西側で75×226cm、北側で47～67×235cmを測る。南側壁の一部を除いて、それぞれの壁際には、貼り付けによる調整によるベッド状遺構を認めた。ベッド状遺構と床面との比高差は、西側で23cm、北側で21cm、東側で28.5cmを測る。床面はVa層で、貼り付けによる調整である。南側床面の一部や西側及び東側ベッド状遺構の一部は新しい溝により影響を受ける。土壌は新しい溝の影響で検出できなかった。

なお、本住居跡内の出土遺物は、床面からの出土はほとんどなく、埋土中より甕形土器、壺形土器、鉢形土器の破片が出土した。甕形土器は、口縁部の形状が逆L字状に外反する土器破片が大半である。床面やベッド状遺構上には棒状の炭化物が検出された。

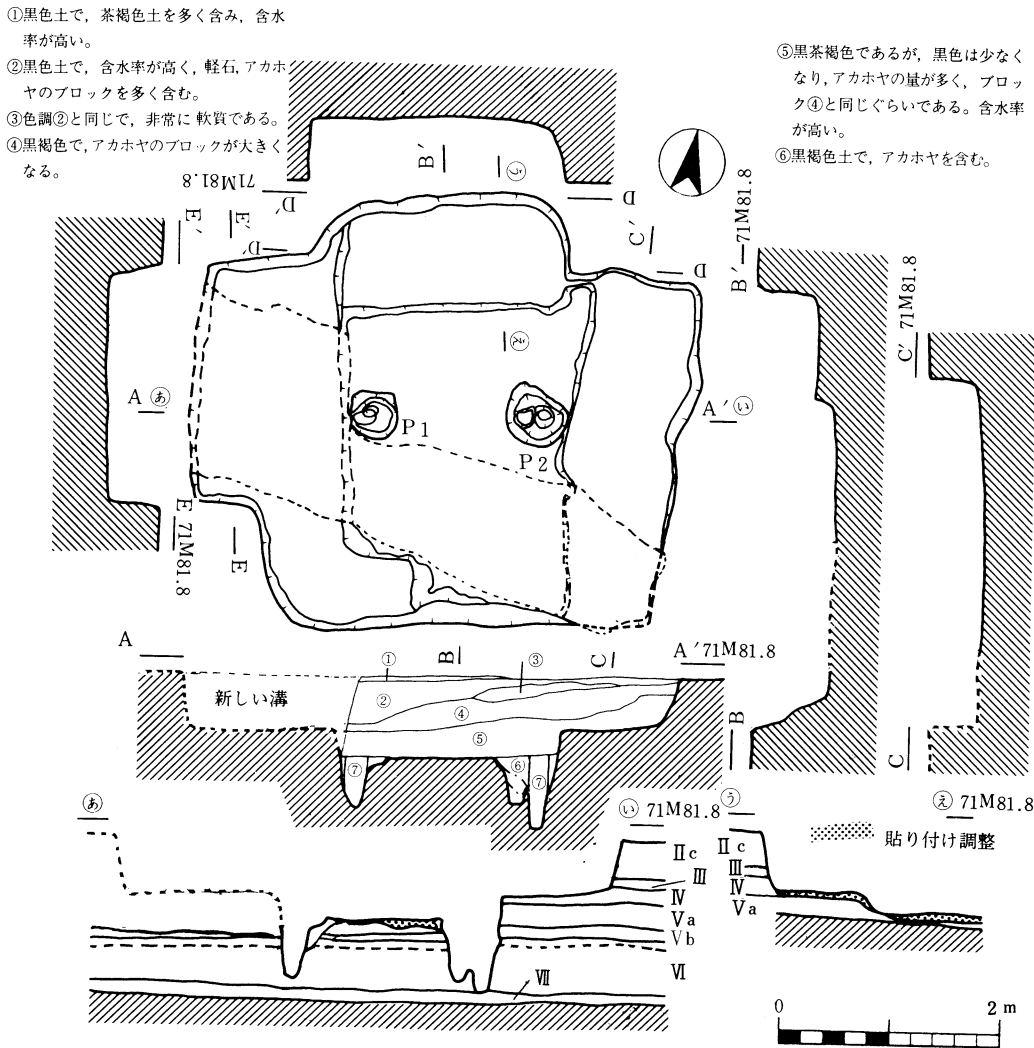


Fig. 84 24号住居跡実測図



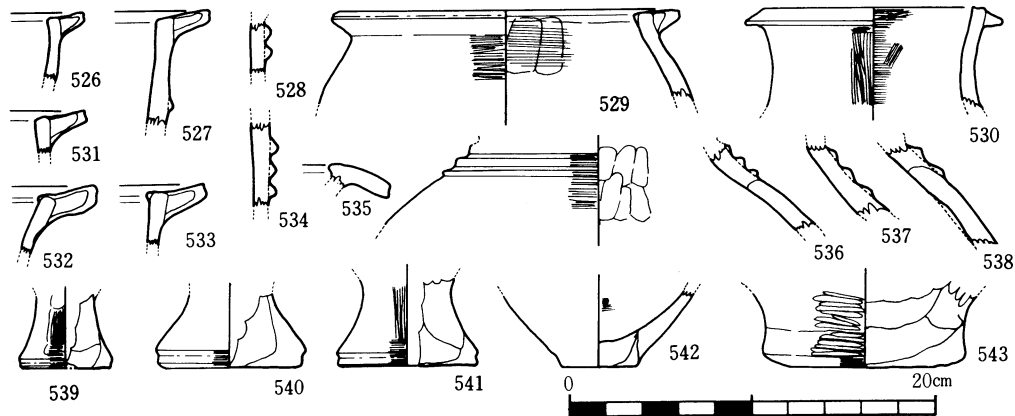


Fig. 85 24号住居跡内出土土器実測図

土器 (Fig. 85, PL. 33)

Tab. 22 24号住居跡内出土土器一覧

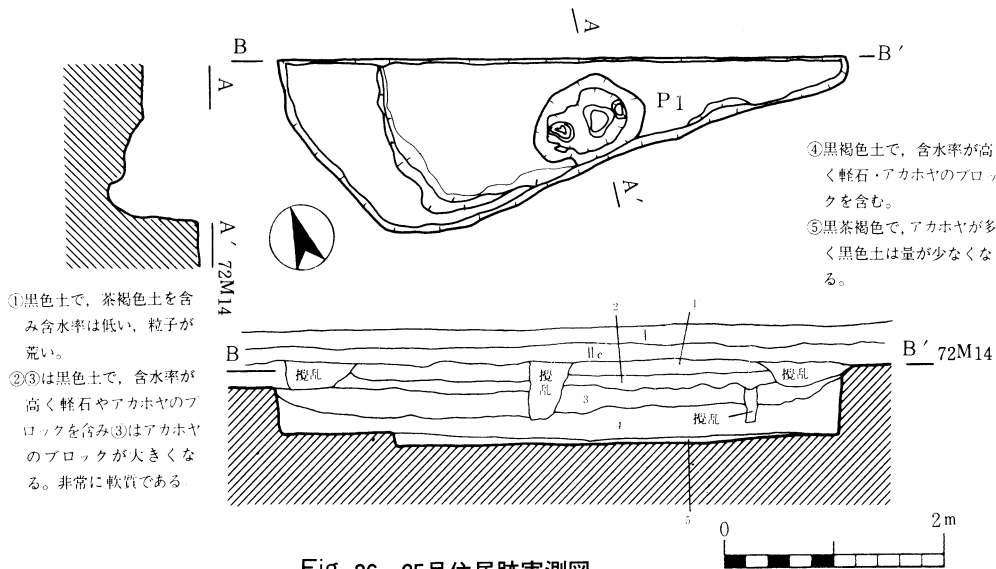
注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
526		甕 口縁部		茶褐色	Q P L	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。口縁部上面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
527	PL. 33	〃		明褐色	Q P L M	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
528	〃	甕 胴部		茶褐色	Q P L M	胴部付近と思われる破片で、一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位、内面は斜位の刷毛などで調整である。
529	〃	鉢 口縁部	①(19.2)	明褐色	Q P L	内傾気味の口縁部で、逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面は薄い横位の刷毛などで調整を認め、内面は指頭圧調整後のなどで調整である。
530	〃	壺 口縁部	①(10.0)	暗茶褐色	Q M	肩部より立ち上がりながら頸部で若干しまり、外傾気味の口縁部である。口唇部は凹む。口縁部外側に断面三角形貼付突帯を廻らし口縁部を作り出す。口唇部端面は凹む。	外面は横位及び斜位の刷毛などで調整で、内面は横位が主体で、一部斜位のなどで調整である。
531		甕 口縁部		暗褐色	Q P L H	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。口縁部上面は凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
532	PL. 33	甕 口縁部		明茶褐色	Q P L H	逆L字に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。	器面全体に磨滅を認め、鮮明さに欠けるが、内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
533	〃	〃		暗茶褐色	Q P L M	逆L字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
534	〃	〃		暗褐色	Q P L H	三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
535		〃		暗褐色	Q P L	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
536	PL. 33	壺 肩部		暗茶褐色	Q P L M	肩部に現存で三条の貼付断面三角形突帯を廻らす。肩部の張りは認められない。壺の破片である。	外面は横位の刷毛などで調整で、内面は指頭圧調整痕を認める。輪積み手法を残す。
537	〃	〃		暗茶褐色	Q P L M	現存で三条の貼付断面三角突帯を廻らす。壺の肩部付近と思われる器形である。	外面は横位、内面は斜位の刷毛などで調整である。
538	〃	〃		茶褐色	Q P L M H	肩は張らず、現存で二条の貼付断面三角突帯を廻らす。壺の破片である。	外面は横位及び縦位の篋削りで、鮮明さに欠ける。内面の大半は剥落し、斜位の刷毛などで調整で、輪積みの手法を残す。
539		甕 底部		褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は長く、あまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する、小型の底部である。	横位及び斜位の刷毛などで調整である。
540	PL. 33	〃	④8.0	灰褐色	Q P L H M	破片のため不詳であるが、現存部位では、裾は鋭角的に広がり、凹んで凹線状を呈する。充実した脚台である。	磨滅しているため調整痕は不明である。
541	〃	〃	④7.8	明灰褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。
542		壺 底部	④4.4	暗茶褐色	Q P L M	平底の底部である。外方へ開きながら立ち上がると思われる器形である。底部は小さい。	剥落しているため調整痕は不明である。
543	PL. 33	大甕 底部	④12.2	暗茶褐色	Q P L M	平底の底部で、底厚約2.8cmで、外方へ大きく外反しながら立ち上がると思われる器形である。	横位の刷毛などで調整や横位の篋削りを認める。

㊦ 25号住居跡 (Fig. 88~86, PL. 19)

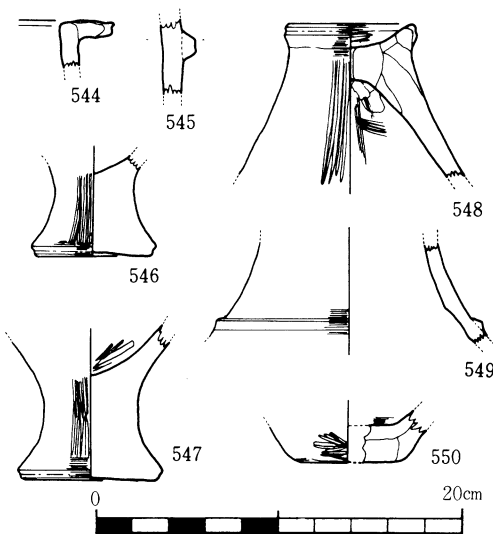
本住居跡は、住居跡群の北東端部に位置する。12号掘立柱建物跡との最短距離は、3.5mで、6号掘立柱建物跡まで、25m、26号住居跡まで、28.8mを測り、F-24区のⅡ層中で検出された。



住居跡の大半は、バイパス建設予定地外へ遺構がのびるため、その規模は不詳である。遺存する住居跡は、長軸443cm、短軸22~200cmを測る。

主軸(長軸)の方位はN-88°-Eをとる。遺構検面からの深さは、51cmで、ベッド状遺構までは40cmである。

本住居跡の平面の形状は、遺存する遺構では不明であり、基本的には隅丸方形の住居跡が想定される。床面はⅣ層~Ⅴ<sub>a</sub>層で、貼り付けにより調整され、比較的軟質である。西側には貼り付けによるベッド状遺構を検出した。床面との比高差は約11cmである。南側中央壁際には109×72cm、深さ24cmの楕円状の土壇を検出し、土壇内には二か所の柱穴状の掘込を認めた。



本住居跡の出土遺物は、床面より出土の土器は小破片が少量である。埋土中より、甕形土器・壺形土器・蓋形土器などの土器破片や石器が出土した。

土器 (Fig. 87, PL. 33)

Tab. 23 25号住居跡内出土土器一覧

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
544	PL. 33	甕 口縁部		暗褐色	Q P L	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む口縁部内側には稜を作り出す。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
545	ク	甕 胴部		明茶褐色	Q P L M	甕の胴部付近と思われる破片で断面台形状貼付突帯を廻らす。突帯の端面は凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
546	ク	甕 底部	④6.8	茶褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は長く鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。床面中央部が若干凹む。	横位及び縦位の刷毛などで調整で、指頭圧調整が残る。
547	ク	ク	④8.0	褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。中央部は若干凹む。靱粒の庄痕が残る。	横位及び縦位の刷毛などで調整を認める。
548	ク	蓋	頂部径 (7.2)	明茶褐色	Q P L H	甕の蓋と思われ、裾部の一部は欠損している。つまみ部は大きく凹む。頂部外側端面は凹んで、凹線状を呈する。	外面は横位及び縦位の篋削り、内面は指頭圧調整後斜位の刷毛などで調整である。
549	ク	壺 肩部		明赤茶褐色	Q P L H M	肩部付近と思われ、現存で一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面ともに剥落が著しく調整痕は不明である。しかし突帯付近に横位の刷毛などで調整がわずかに残る。
550		壺 底部		明茶褐色	Q P L	平底の底部である。ぶ厚い底部より外方へ大きく開きながら立ち上がりと思われる器器である。	横位及び斜位の篋削りで、内面にわずかな横位の刷毛などで調整を認める。

石器 (Fig. 88, PL. 36)

本住居跡内出土の石器は、柱状両刃石斧がある。551は硅質凝灰岩を石器の素材として用い、抉りは認められず、両刃である。最大長11.5cm, 最大幅3.75cm, 最大厚さ2.3cm, 重さ185gを測り、器面全体に研磨を認める。刃部は両刃で刃こぼれを認め、使用による痕跡である。

㊦ 26号住居跡 (Fig. 89~95, PL. 20)

6号掘立柱建物跡との最短距離は、1.7mで、27号住居跡まで、8.1m、11号掘立柱建物跡まで、8.8m、23号住居跡まで、10.85m、22号住居跡まで、11.65mを測り、E・F-20区のⅡ層中で検出された。

長軸493cm、短軸493cm (張り出し部を含む)である。主軸の方位はN-77.5°-Eをとる。主柱穴は2本で、西側：径54~60cm、深さ84cm、東側：径44~72cm、深さ76cmを測る。心心距離は155cmである。遺構検出面からの深さ59cm、ベッド状遺構まで44~51cmを測る。

本住居跡の平面の形状は、基本的には隅丸方形を呈するが、北側に張り出し部を作り出し、西側壁は丸味を帯びている。南壁の一部を残して各壁際には、幅115~180cmの切り出しによるベッド状遺構が連続した状態で検出され

ベッド状遺構の床面はⅡ層最下部からⅢ層上面で、床面との比高差は9~15cmを測る。床面はⅣ層で部分的な貼り付けによる調整を認めた。主柱穴2本は、ベッド状遺構と相接し、主柱穴内には、西側：径16~19cm、東側：径17~20cmの柱痕跡を検出した。南側壁際には120×90cm、深さ34cmの土壇を認め、土壇西側はベッド状遺構と隣接し、土壇内には二か所に柱穴状の掘込を認めた。

なお、本住居跡内の出土遺物は、東側ベッド状遺構床面に、甕形土器や壺形土器破片が出土した。特に、北東隅際のベッド状遺構から床面にかけて、頸部でしまり外方へ大きく外反する口縁部で鋤形口縁を呈し、口縁部上面に篋描きの沈線を施した壺形土器が出土した。床面には、土壇付近に頸部から口縁部までの完形品の壺形土器 (鋤型口縁) がベッド状遺構へもたれるような格好で出土した。埋土中には、逆L字状に外反する口縁部で、胴部の若干張る完形の甕形土器が棒状の炭化物といっしょに西側ベッド状遺構約10cmほど上位より出土した。そのほか磨製石鎌・砥石などの石器や土製品として勾玉が出土した。

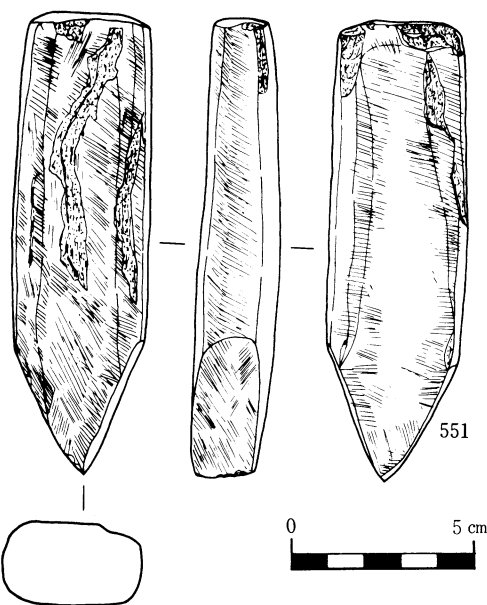
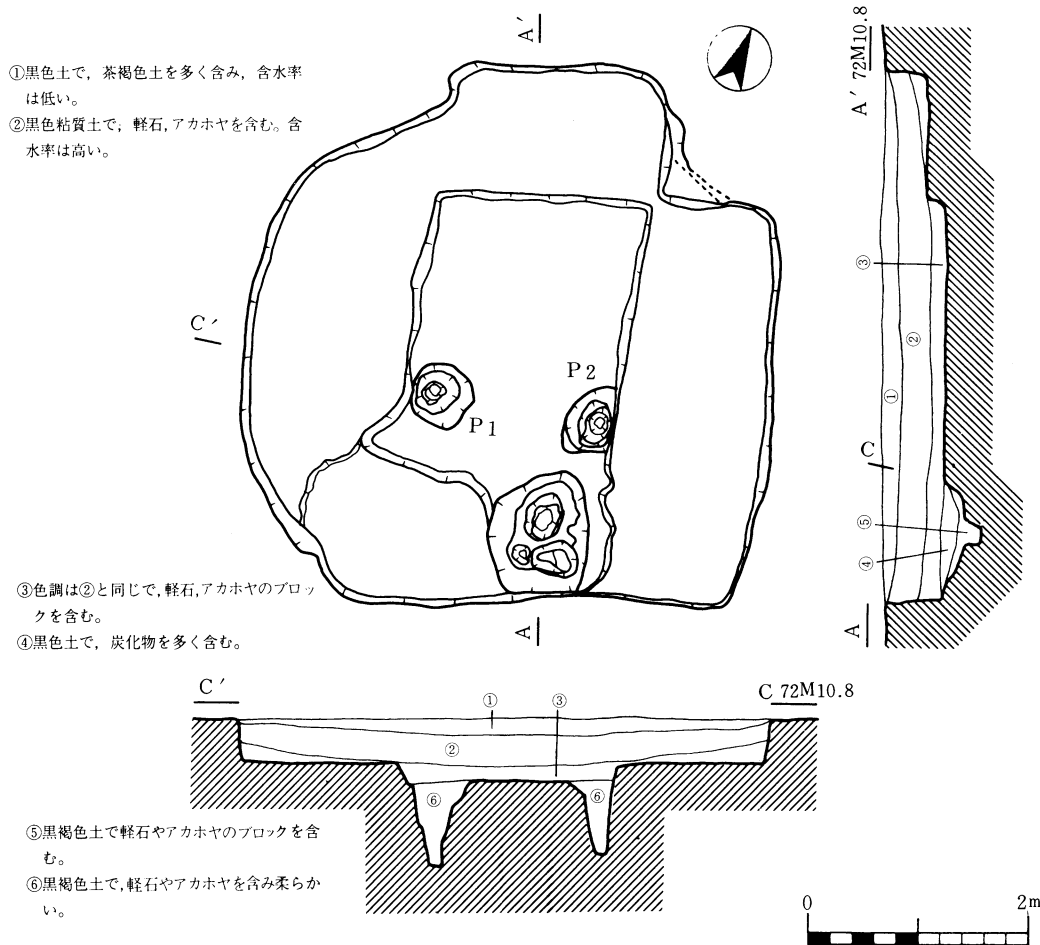


Fig. 88 25号住居跡内出土石器実測図



Tab. 24 26号住居跡内出土土器一覧

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
552	PL. 33	甕 完形	①23.7 ②24.2 ③21.4 ④6.8	茶褐色	Q P L H	底部は平底で裾はわずかに認め、裾の端部は丸味を帯び、底面中央部は若干凹む。底部より外方へ開きながら立ち上がり、胴部やや上位で張る。口縁部は内湾し、逆L字状に外反する。口縁部端面はわずかに凹む。胴部やや上位には、一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	内・外面とも磨減が著しいが、外面は横位、縦位の刷毛などで、底部付近には篋削り及び指頭圧調整痕が残る。内面は指頭圧調整後、横位の刷毛などで及び斜位の篋削りを認める。
553	〃	甕 口縁部		褐色	Q P L M	直口気味の口縁部である。逆L字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内には稜を作り出す。二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
554	〃	〃	明褐色	明褐色	Q P L M	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。一条の断面三角形突帯を廻らす。	外面は横位で、内面は横位、斜位の刷毛などで調整である。

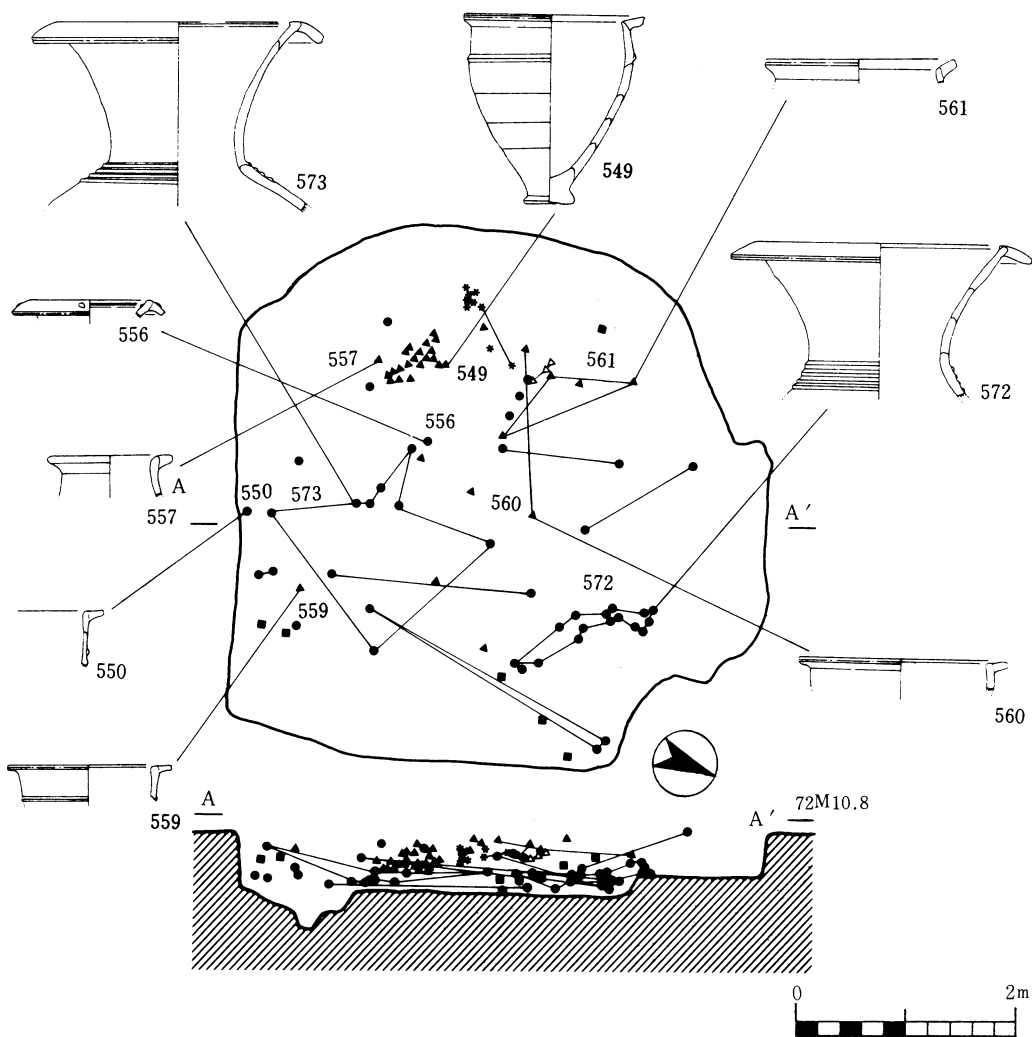


Fig. 90 26号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
555	PL. 34	甕 口縁部		明褐色	Q P L M	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。	外面は横位で、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
556	〃	〃		暗褐色	Q P L	逆L字状近く外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側にわずかに張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
557	〃	〃		灰黒褐色	Q P L M	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	外面の大半は剥落しているが、内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。

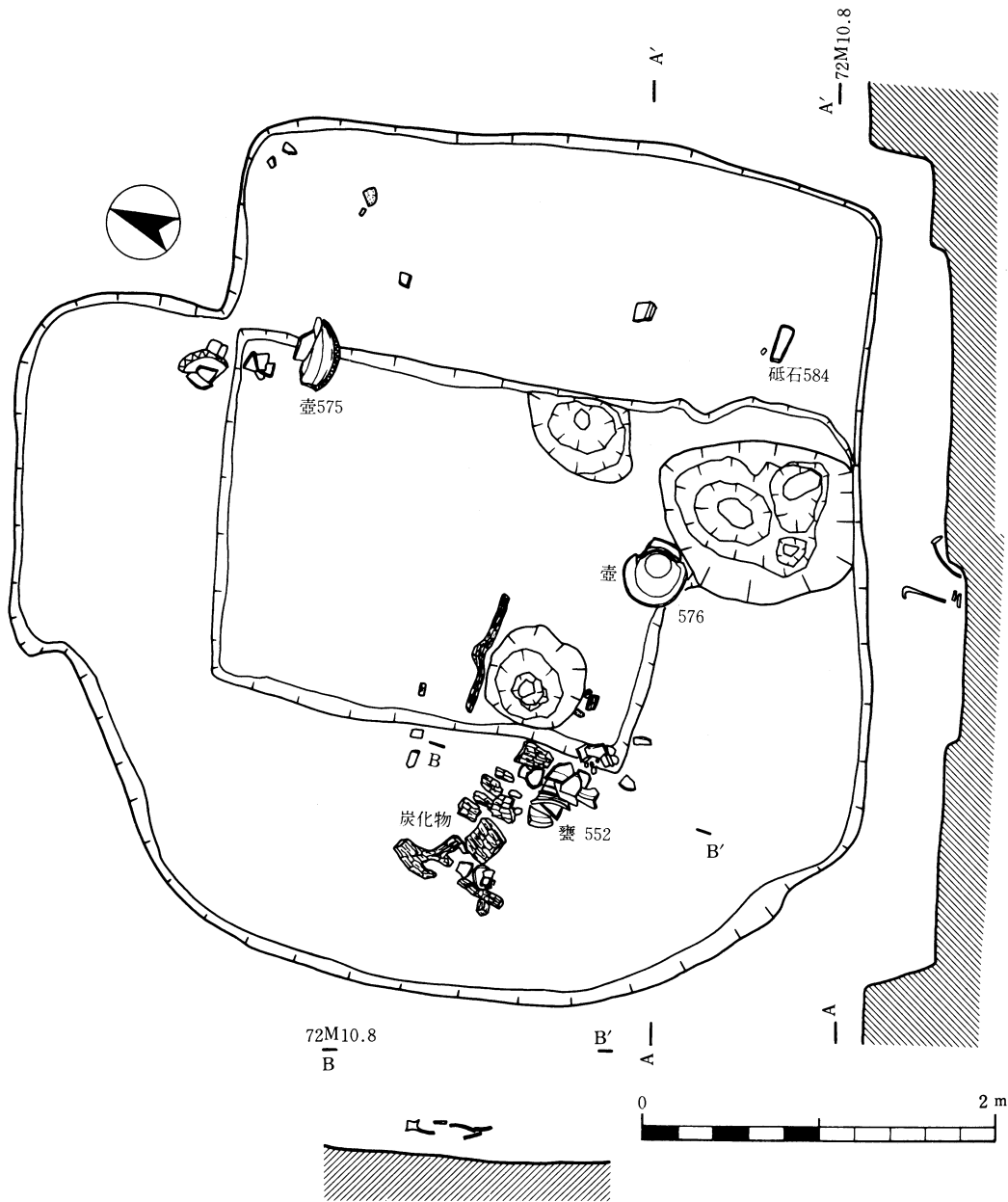


Fig. 91 26号住居跡内遺物出土状態

番号	図版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
558	PL. 33	甕 口縁部		明黄褐色	Q P <sub>L</sub>	くの字状に外反する口縁部である。口縁部 端面はほぼ平坦面を作る。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。
559		壺 口縁部	①(20.2)	明茶褐色	Q P <sub>L</sub> H	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口 縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には、 張り出しを作り出す。口縁部内側には、断面 三角形貼付突帯を廻らす。口縁部上面には、 現存で一個の円形浮文を認める。	内・外面ともに横位の刷毛 などで調整である。



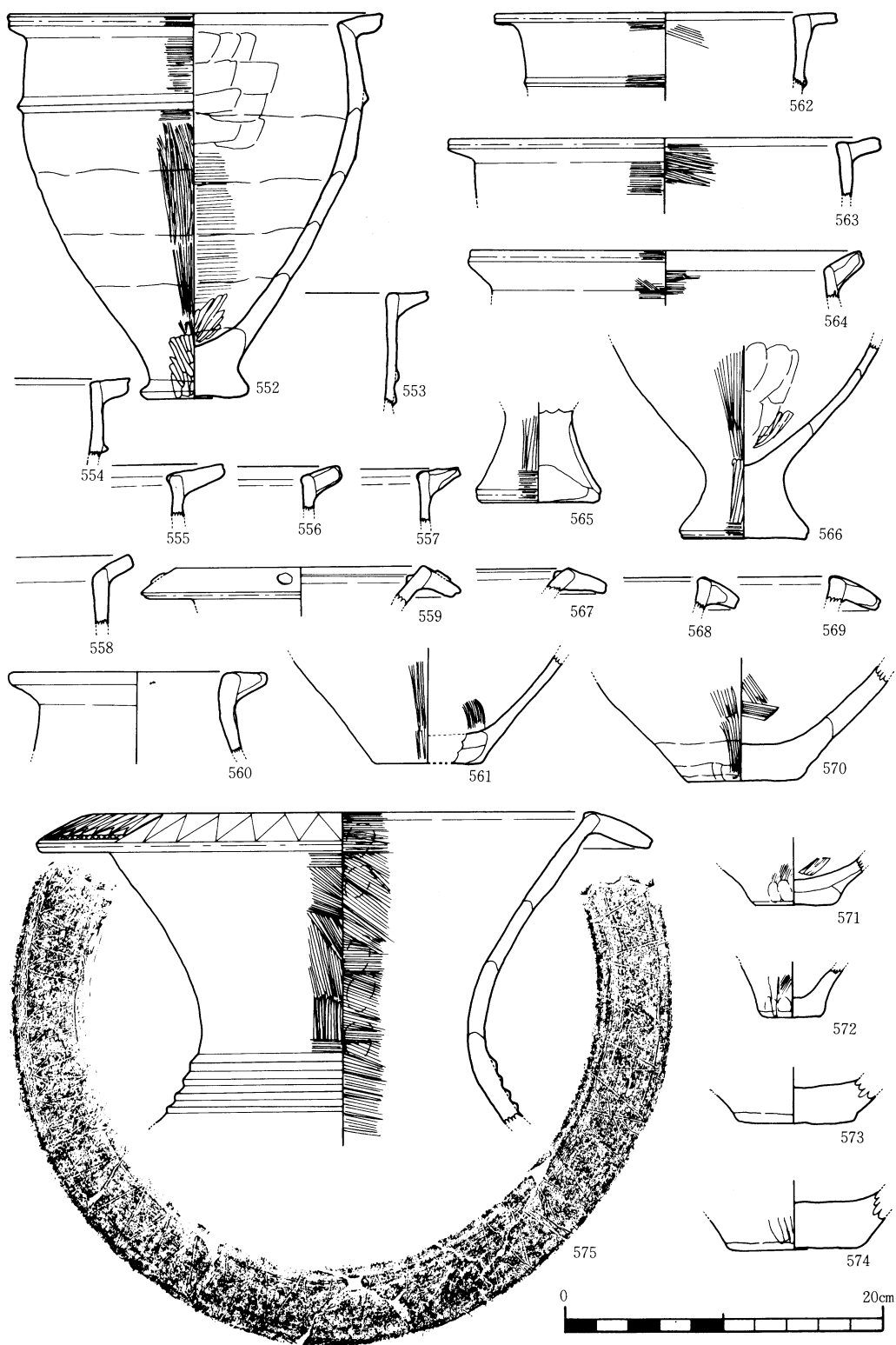


Fig. 92 26号住居跡内出土土器実測図(1)

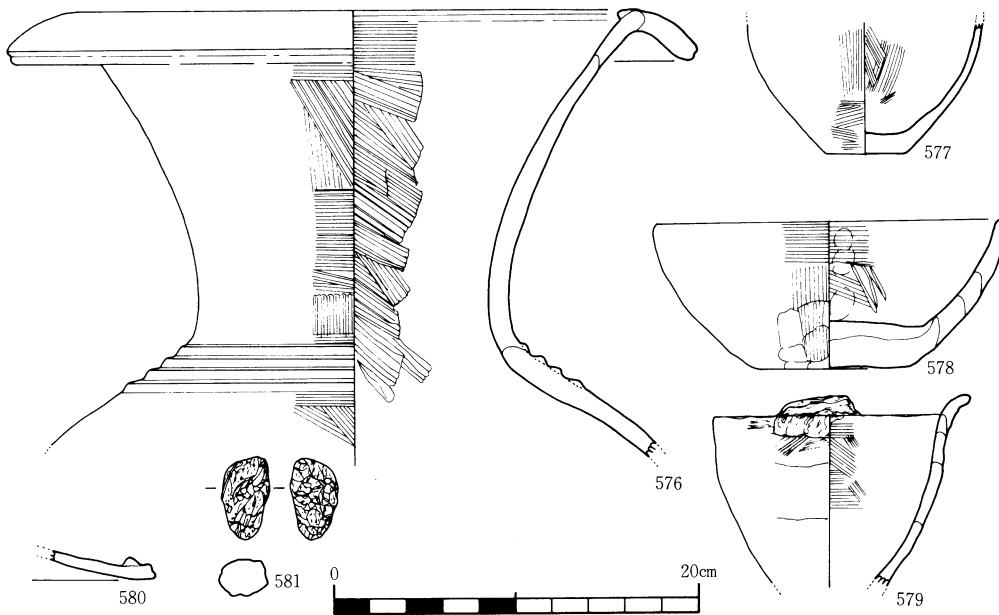


Fig. 93 26号住居跡内出土土器実測図(2)

番号	図版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
560		壺 口縁部	①(16.4)	明茶褐色	Q P L M	内傾気味に立ち上がりながらわずかに外反する口縁部である。逆L字状に外反し、口縁部端面は大部分が剥落しているが、丸くなると思われる。	内・外面ともに剥落しているため調整痕は不明である。
561		壺 底部		暗褐色	Q P L H M	平底の底部の破片である。外方へ開きながら立ち上がると思われる器形である。煤の付着を認めるが、二次的に付着したものと思われる。	外面は縦位の篋削り、内面は斜位の刷毛などで調整である。
562		甕 口縁部	①(21.4)	黄褐色	Q P L M	内湾気味の口縁部で、逆L字状に外反する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側には稜を作り出す。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は磨滅と煤の付着のため大部分は不明で、わずかに横位で、内面は斜位の刷毛などで調整を一部に認める。
563	PL. 34	〃	①(27.2)	明褐色	Q P L M	内湾する口縁部で、逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。口縁部上面は凹む。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
564	〃	〃	①(25.0)	暗褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には、稜を作り出す部分もある。	外面は横位及び斜位、内面は横位の刷毛などで調整である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
565		甕 底部	④(8.0)	褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。
566	P.L. 33	〃	④8.2	明茶褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は短かく、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。輪積みの手法を残す。稷粒の圧痕の痕跡を認める。	外面は横位の刷毛などで及び縦位の篋削り、内面は指頭圧調整後篋削りを認める。
567		壺 口縁部		褐色	Q P L H	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側に断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位の刷毛などで、内面は篋磨きを認める。
568		〃		暗褐色	Q P L H M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。	内・外面とも横位の刷毛などで調整である。
569		〃		明褐色	Q P L H M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
570	P.L. 34	大壺 底部	④7.0	茶褐色	Q P L M	平底の厚い底部である。外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる器形で、大型甕形土器の底部と壺形土器の底部の可能性も考えられる。	外面は斜位及び縦位の刷毛などで、内面は斜位の刷毛などで調整である。
571		壺 底部	④5.0	明茶褐色	Q P L M H	平底の底部で、小型の器形である。外方へ大きく開きながら立ち上がると思われる器形である。	外面は指頭圧調整後斜位などで、内面は斜位の刷毛などで調整である。
572		〃	④4.0	明茶褐色	Q P L H	平底で小型の底部と思われる。器形は薄く、外方へ開きながら立ち上がる器形と思われる。	外面は指頭圧調整後斜位の刷毛などで、内面は剥落しているため不明である。
573	P.L. 34	底部	④7.2	赤茶褐色	Q P L M	平底のふ厚い底部で、大きく外方へ開きながら立ち上がると思われる器形で、壺形土器の底部の可能性も考えられる。	磨滅及び剥落を認め、調整痕は不明である。
574	〃	〃	④8.4	暗褐色	Q P L M	平底の底部で厚く、大甕の底部と思われ、底面には4か所に稷粒の圧痕を認め、また植物繊維と思われる痕跡もみられる。	斜位の篋削りを認める。
575	P.L. 33	大壺 口縁部 ┆ 肩部	①39.0	茶褐色	Q P L M	肩部でしまり、ゆるやかに大きく外反して口縁部で、垂れ下り気味に外反する。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側に張り出しを作る。口縁部上面には、二重の鋸歯文と二本の沈線間に格子目状の沈線文を篋描きにより施文している。肩部上位に現存で四条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は縦位及び斜位の刷毛などでや一部縦位の篋削りで、内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。

番号	図版 番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
576	PL. 34	大・壺 口縁部 肩部	①36.0	茶褐色	Q P L M	肩部は張り、肩部の上位付近でしまり、外方へ大きく外反する口縁部で、垂れ下り気味に外反し、口縁部内側には張り出しを作り出す。肩部上位には、三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。鋤形口縁をなす。	外面は横位、斜位及び縦位のなで、内面は横位、斜位の刷毛などで調整である。輪積の手法を残す。
577	〃	壺 底部	④	明茶褐色	Q P L M	底部は小さい平底で、外方へ開きながら立ち上がると思われる器形である。小型の壺形土器である。	外面は縦位で、内面は指頭圧調整後斜位の刷毛などで調整である。
578	〃	鉢 完形	①(19.4) ②(8.0) ④(8.6)	明茶褐色	Q P L M	平底の厚い底部より外方へ大きく開きながら外傾気味の口縁部である。口縁部端面は丸味を帯びる。	外面は指頭圧調整痕が底部付近に残る。横位、縦位の刷毛などで調整で、内面は指頭圧調整後横位、斜位の刷毛などで調整で、一部鈍削りを認める。
579	〃	鉢 口縁部 胴部		暗茶褐色	Q P L H	底部より外方へ開きながら立ち上がり外傾気味の口縁部である。口唇部端面には耳状突起を二か所に貼り付ける。器形は薄く、煤の付着を認める。	外面は剥落が著しく、その残存部は、横位及び斜位で、内面は横位、斜位の刷毛などで調整である。
580		蓋 裾部		暗褐色	Q P L H	口縁部が大きく広がる器形で、口縁部端面は凹む。口縁部外側に、断面三角形貼付突帯を廻らす。内面口縁部端面付近には煤の付着を著しく認める。	内面は斜位及び縦位で、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
581		土製品		明褐色	Q P L M	粘土をこねた状態のものと思われる。	

### 石器 (Fig. 94, PL. 35)

本住居跡内出土の石器には、磨製石鏃・砥石がある。

582は、フォルンフェルス(燧石)を石器の素材とした磨製石鏃である。扁平無茎で、二等辺三角形形状を呈し、基部には抉りを認める。先端部及び両脚部は欠損するが、鏃がはっきりとし、先端部付近から基部両端へつづく。研磨痕を認める。最大長1.7cm、最大幅1.7cm、最大

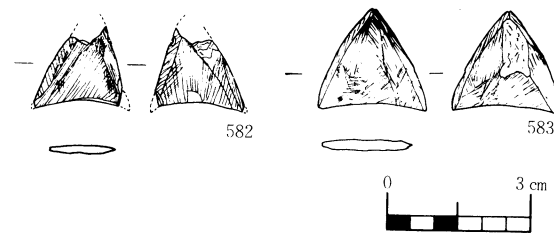
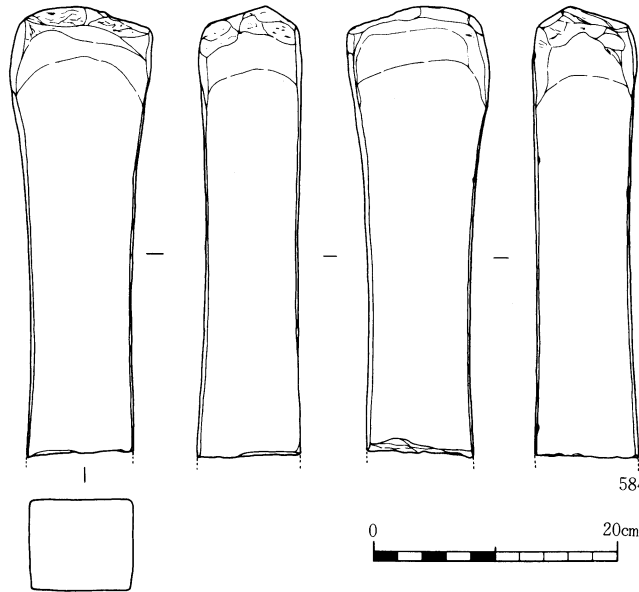


Fig. 94 26号住居跡内出土石器実測図(1)

厚0.2cm、重さ0.8gを測る。583は、582と同様の石材を用いている磨製石鏃である。扁平無茎で、ほぼ三角形形状を呈し、基部には抉りを認める。鏃がはっきりとし、先端部から両側縁寄りに認め基部へつづく。研磨痕を認めるが、片面中央部付近に一部自然面が残る。最大長2.3cm、最大幅2.1cm、最大厚0.2cm、重さ2gを測る。584は、砂岩を石器の素材とした砥石である。

最大長 18.1cm, 最大幅 5.8cm, 最大厚 3.7cm, 重さ 740g を測る。方柱状を呈し, 下端部を欠損する。砥面は四面ともに認め全体的に使い込んでいる。砥面には研磨を認めるが, 素材のためか研磨痕は観察できない。

土製品 (Fig. 162, PL. 37)



土製勾玉が埋土中より出土した。第 6 章 第 4 節で図化し, また, 特徴について説明を加える。

Fig. 95 26号住居跡内出土石器実測図(2)

㉗ 27号住居跡 (Fig. 96~100, PL. 21)

26号住居跡との最短距離は, 8.0m, 11号掘立柱建物跡まで, 8.9m, 14号掘立柱建物跡まで, 10.0m, 24号住居跡まで, 10.3m, 22号住居跡まで, 13mを測り, D-21区のⅡ層中で検出された。

長軸537cm, 短軸438cm (ともに張り出し部を含む) を測る。主軸の方位は N-89.5°-E をとる。主柱穴は 2 本で, 西側: 径42~43cm, 深さ66cm, 東側: 34~39cm, 深さ72cmで, 心心距離は73cmである。遺構検出面からの深さは, 73cmを測り, ベッド状遺構まで53~62cmである。

本住居跡の平面の形状は, 基本的にはほぼ長方形を呈するが, 南西隅際及び北側は張り出し, 南壁中央際には略台形状の障壁を認める。南西隅際の張り出しは, 127×66cm, 北側は227×64~82cmを測る。西壁から北壁, 東壁際には, 貼り付け調整によるベッド状遺構を検出した。ベッド状遺構は, 西側では, 59×111cm, 北側は, 88~105cm×194cm, 東側は, 135~168cm×348~158cmで, 床面との比高差は11~20cmである。なお, 南東隅には切り出しによる調整で, 略三角形を呈する施設で, ベッド状遺構の床面との比高差は約20cmを測る。床面はV<sub>a</sub>層で, 貼り付けにより調整され, 南側障壁際には, 78×98cm, 深さ29cmの略方形の土壇を検出した。土壇内には大小の柱穴状の掘込を認めた。南西隅床面には平坦面をもつ台石と思われる4個の石が傾斜した状態で検出された。

本住居跡内床面からの出土遺物は, 口縁部の形状が逆L字に外反する甕形土器の破片, 磨石, 棒状炭化物などである。埋土中より大型甕形土器・甕形土器・壺形土器・鉢形土器などの土器

- ①黒色土で、黒色が強い。軽石やアカホヤ粒を含む量は多くない。含水率が高い。
- ②黒褐色土で、①と③の中間的な色調をなす。

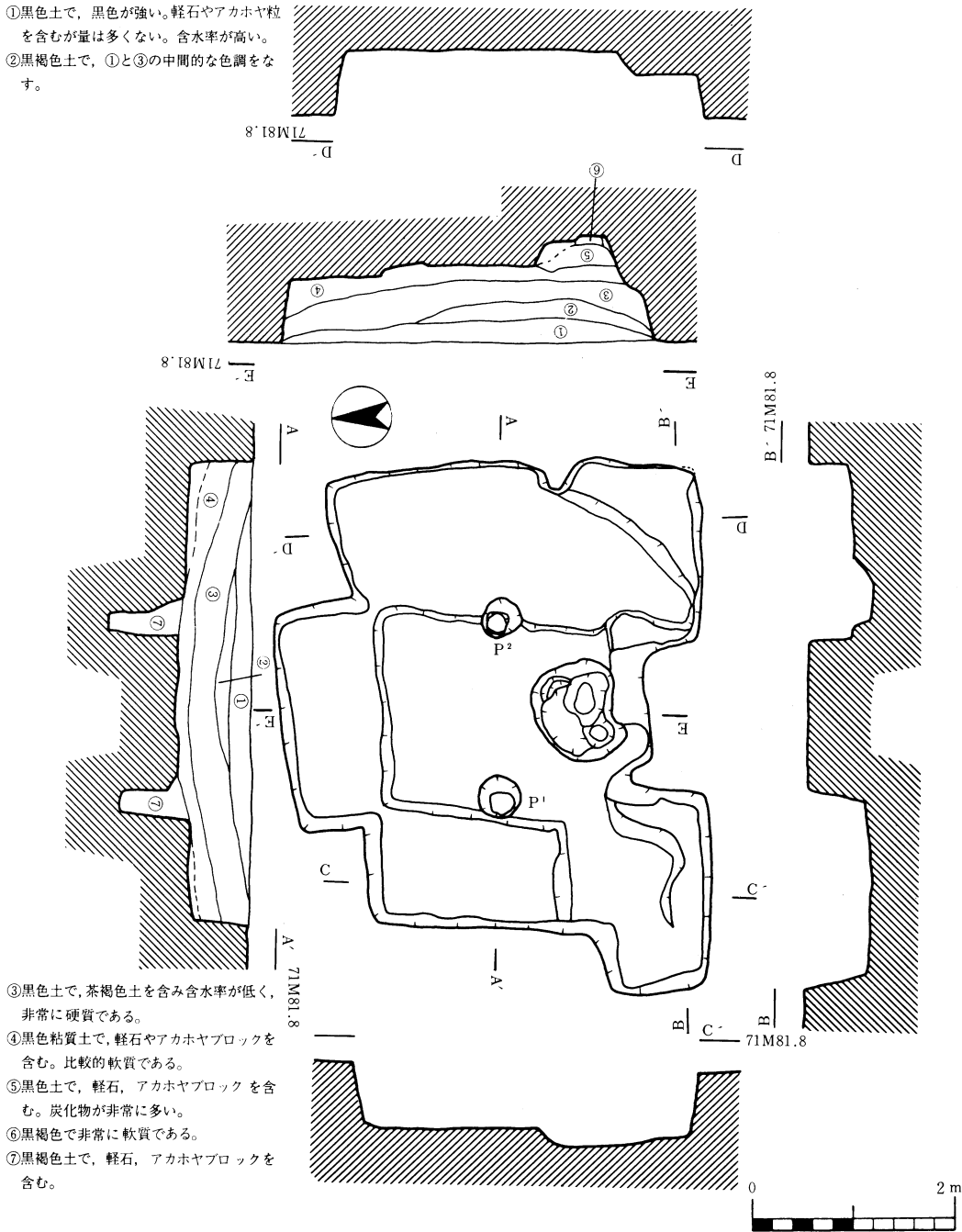


Fig. 96 27号住居跡実測図

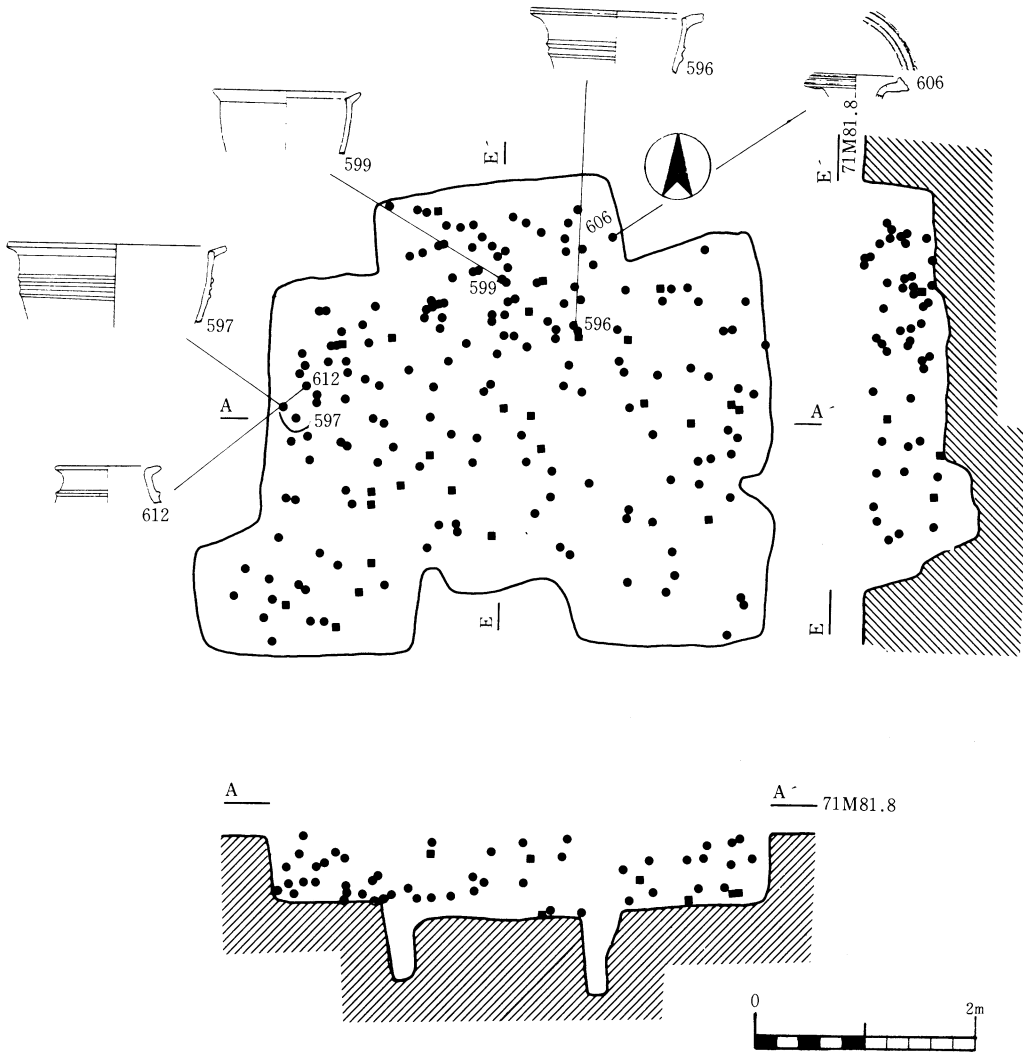


Fig. 97 27号住居跡内出土遺物平面・垂直分布状態

破片や磨製石鏃などの遺物が出土した。甕形土器は、口縁部の形状がくの字状に外反する破片が多く、壺形土器は、大型の壺形土器の口縁部破片や瀬戸内系の凹線文をもつ口縁部破片がある。鉢形土器は大きく内傾し、逆L字状に外反する口縁部破片などが出土した。

土器 (Fig. 98, PL. 34)

Tab. 25 27号住居跡内出土遺物一覧

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
585		甕 口縁部		褐色	Q P L H M	逆L字状に外反する口縁部で、口縁端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁上面は凹む。	磨滅しているが、内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。

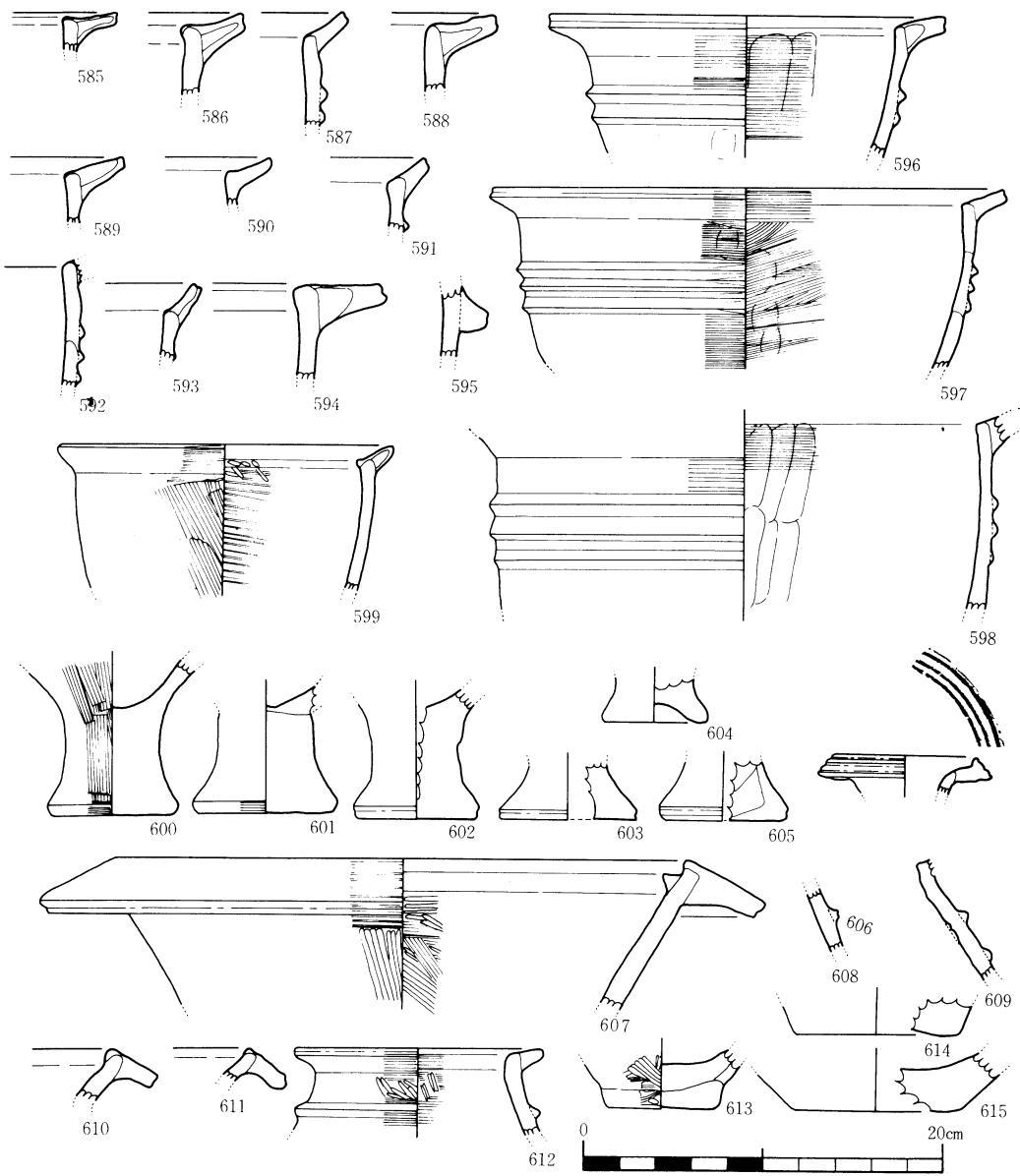


Fig. 98 27号住居跡内出土土器実測図

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
586	PL. 34	甕 口縁部		茶褐色	Q P L H	逆し字状に近く外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。	内・外面ともに、指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。



番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
587	PL. 34	甕 口縁部		明褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。口縁部上面は凹む。二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
588	〃	〃		茶褐色	Q P L M	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹む。口縁部上面も凹む。口縁部内側には稜を作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
589	〃	〃		暗茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
590		〃		赤茶褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部上面は凹む。	内・外面ともに剥落しているため調整痕は不明である。
591	PL. 34	〃		暗褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。口縁部上面はわずかに凹む。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
592	〃	〃		暗茶褐色	Q P L H	内湾気味の口縁部である。口縁部端面は貼付部分より剥離している。現存で三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
593		〃		黒色	Q P L	大きくくの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。	外面は指頭圧調整後横位で、内面は横位の刷毛などで調整である。
594	PL. 34	大甕 口縁部		茶褐色	Q P L M	内湾気味の口縁部である。逆L字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整で、外面の一部に鋭削りを認める。
595	〃	大甕 口縁部 下位		明茶褐色	Q P L M	口縁部外側の下位につく断面台形状貼付突帯の部位で、突帯端面は凹む。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整している。
596	〃	甕 口縁部 胴部	①(22.2) ③(16.8)	明茶褐色	Q P L H	外傾気味に立ち上がりながらわずかに立ち上がる口縁部で、逆L字状に近く外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	内・外面ともに指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
597		〃	①(28.8) ③(24.6)	灰褐色	Q P L H	外傾気味に立ち上がりながら直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面ともに指頭圧調整後外面では横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整で、輪積みの手法を残す。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
598		甕 口縁部 胴部	③(27.6)	暗茶褐色	Q P L M	内湾気味の口縁部である。口縁部端面付近は欠損している。口縁部内側には稜を作り出す。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位で、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整である。
599	P.L. 34	鉢 口縁部	①(18.6) ③(16.4)	明褐色	Q P L	外方へ開きながら立ち上がり、内湾気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は丸くなる。口縁部上面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	外面は横位、斜位などで、内面は斜位の刷毛などで調整後、篋削りを認める。
600	ク	甕 底部	④(7.2)	褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的で若干広がり、裾の端部は丸味を帯びる。	縦位及び斜位の刷毛などで調整である。
601	ク	ク	④(8.0)	赤茶褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的で広がり、裾の端部は丸味を帯びる。	磨滅のため調整痕は不明であるが、一部に横位の刷毛などで調整を認める。
602	ク	ク	④(7.0)	赤茶褐色	Q P L	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的に広がり、裾の部は凹んで、凹線状を呈する。	剝落のため調整痕は不明である。
603		ク		褐色	Q P L H	充実した脚台で、大半を欠損する。残存部の形状から裾は短かく、鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	縦位の刷毛などで調整である。
604		ク		赤茶褐色	Q P L	充実した脚台である。大半を欠損する。その残存の器形から裾は短かく、裾は鋭角的に広がり、裾端面は丸味を帯びる。底面は若干のあげ底である。	剝落のため調整痕は不明である。
605		ク		赤茶褐色	Q P L H	充実した脚台である。大半を欠損する。裾は鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	剝落しており調整痕は不明である。
606		壺 口縁部	①(9.6)	明茶褐色	Q P L M	短かい口縁部が大きく外反し、口縁部端面が肥厚拡張され、その拡張部に3条の凹線文を施し、瀬戸内系の土器破片である。	内外面ともに、横位の刷毛などで調整である。
607		大壺 口縁部	①(40.6)	暗茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に大きく外反する口縁部で、頸部から直口気味に外傾する。口縁部内側には張り出しを作り出し、その張り出し直下には断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位の刷毛などで、斜位の篋削りで、内面は横位及び斜位の篋削りを認める。
608	P.L. 34	壺 胴部		暗茶褐色	Q P L M	一条の断面台形状貼付突帯を廻らす、突帯端面は凹む。煤の付着を認める。	外面は篋削りで、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
609	PL. 34	壺		黒茶褐色	Q P L M	二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は篋削りを認め、内面は剥落しており調整痕は不明である。
610	〃	壺 口縁部		茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
611	〃	〃		明茶褐色	Q P L H	垂れ下り気味に外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部端面はわずかに張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整が鮮明である。
612	PL. 34	鉢 口縁部 胴部	①(14.0)	明茶褐色	Q P L M H	大きく内傾する口縁部で、逆し字状に外反する。口縁部端面はわずかに凹む。一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位で、内面は指頭圧調整後横位の刷毛などで調整と篋削りを認める。
613		壺 底部	④(6.0)	黒褐色	Q P L	平底でふ厚い底部である。外方へ大きく開きながら立ち上がる器形と思われる。	篋削きを認め、内面及び底面は指頭圧調整痕を残す。
614	〃	〃		茶褐色	Q P L H	小破片である。平底の底部と思われ、若干底面中央部が凹む器形である。	斜位の刷毛などで調整である。
615		大甕 底部		赤茶褐色	Q P L H	大型甕形土器の底部としたが、大型の壺形土器底部の可能性が考えられる。平底の底部と思われ、厚い底部である。外方へ大きく開きながら立ち上がる器形と思われる。	篋削きを認める。

### 石器 (Fig. 99, PL. 35)

本住居跡内出土の石器は、磨製石鏃と叩石である。叩石は住居跡内床面より、磨製石鏃は埋土中からの出土である。616は千枚岩を石器の素材として用いた磨製石鏃で、最大長2.85cm、最大幅1.9cm、最大厚0.2cm、重さ0.9gを測る。扁平無茎で基部はわずかに凹む。基部片側の一部を欠損するが、二等辺三角形状を呈する。両面ともに先端部より基部にかけて自然面を多く残し、両面ともに側縁側に鏃が先端部からわかれて基部までつく。また、両側面には研磨を認め、研磨痕が観察できる。617は砂岩を石器の素材として用いた叩石兼凹石である。最大長10.7cm最大幅9.6cm、最大厚4.2cm、重さ590gを測り、ほぼ円形状の自然礫を使用し、両側面及び下端ともに敲打により凹凸面を作り出す。上端部には敲打痕をわずかに観察できる。また、両面ともに敲打のため凹凸を認め、わずかな凹みである。凹み部周辺部は磨面を認めるが、石材のためか研磨痕は観察できない。



Fig. 99 27号住居跡内出土石器実測図(1)

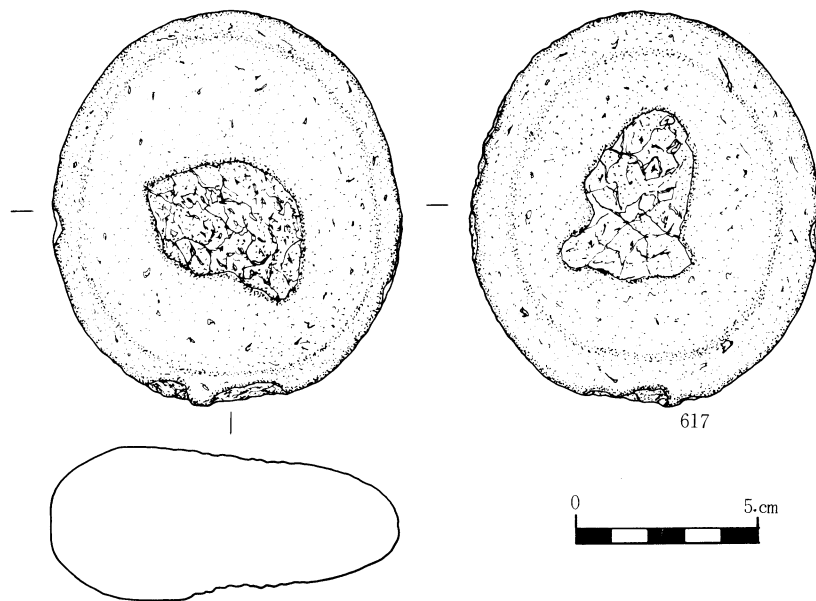


Fig. 100 27号住居跡内出土石器実測図(2)

## 第2節 住居跡内の出土土器について

王子遺跡で検出された住居跡は27基である。住居跡内の出土土器には、甕形土器、大型甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器、高環形土器、手捏ね形土器などがある。主体は甕形土器、壺形土器及び鉢形土器で、他の土器は少量である。これらの土器は完形品が少なく、口縁部破片や底部が多い。復元完形品は、甕形土器、大型甕形土器、手捏ね形土器など合せて10点余である。大半が胴部もしくは胴部下位付近から底部を欠損するものが多い。住居跡内での出土状態は、住居跡床面からの出土は少なく、その大半が埋土中からのもので、埋土上位には小破片が多く、中位から床面上位にかけては破片も大きく出土量も多い。床面より約10～15cm上位に土器破片がまとまって出土する住居跡もいくつかあった。以下、各土器について概略を述べる。

甕形土器は、口縁部の形状が傾きにより変化がある。その形状には内湾するもの、直口するもの及び外傾するものがある。逆L字状や逆L字状に近く外反するもの、くの字状に外反するもの、張り出しを作るもの、稜を作るものなどがある。口縁部端面は凹んで凹線状を呈するもの、丸味を帯びるものなどがある。口縁部内側や胴部付近もしくはその上位に断面三角形貼付突帯をもたないもの、一条・二条・三条・四条のものがある。底部は充実した脚台で、裾の長いもの、短いもの、裾が鋭角的に広がるもの、広がりのないものなどがある。裾の端面は凹んで凹線状を呈するものや丸味を帯びるものに分けらる。これらの底部には、充実した脚台とあげ底気味のものなどがあり、その大半は充実した脚台である。

各住居跡についてみれば、1・2号住居跡ともに、甕形土器及び壺形土器は小破片のみで、

その形状は知り得ない。3号住居跡の土器のうち、6は完形品で逆さの釣鐘型状を呈し、若干内湾気味の口縁部を呈する。7～8は口縁部の形状が外傾するもので、7～8は逆L字状に外反し、9はくの字状に外反する。9は突帯をもたない。他は充実した脚台である。4号住居跡の土器のうち、19～23は底部を欠損するが、その形状を知り得る。19・22は内傾し、20・21は直口気味で、23は内湾する。20は突帯をもたず、22は胴部が若干張る。15～18は口縁部破片である。5号住居跡の土器のうち、32～41は口縁部破片である。42は直口気味の口縁部で、逆L字状に外反する。51～55は充実した脚台である。6号住居跡の土器のうち、62～67は口縁部破片で、くの字に外反する口縁部が大半で、全体の器形は知り得ない。7号住居跡の土器のうち、充実した脚台である。8号住居跡の土器のうち、83・84は直口気味の口縁部で、85は大きく内湾し、胴部は張りはない。9号住居跡のうち、97～110は口縁部破片のみである。110は外傾気味で、111は内湾、112は直口気味の口縁部である。111は大きく内湾するために、胴部は若干張る。113～120は底部で、114・145・147の底面は若干凹む。119はあげ底気味である。10号住居跡の土器のうち、150～161、166、169は口縁部破片である。口縁部の形状のうち、162・163・167は内湾する口縁部で、168は直口する。170は内傾する口縁部である。184～192は充実する脚台で、184、185、187、188、190、192の底面は若干凹む。11号住居跡の土器のうち、195～200、203は口縁部破片である。口縁部の形状のうち、201・202は直口する口縁部である。208～211は充実した脚台で、209はあげ底気味の破片である。210の底面には木の葉の圧痕を認める。12号住居跡の土器のうち、222～227は口縁部破片である。口縁部の形状のうち、227は内湾する。231は充実した脚台である。13号住居跡のうち、239～244は口縁部の破片である。250～252は充実した脚台で、252は底面が若干凹む。14号住居跡の土器のうち、257・258・260～265・268は口縁部破片で、258・268はくの字状に外反する。259は直口気味の口縁部で、くの字状に外反し、輪積みの手法を残す。270～277は充実した脚台で、270・271・273・277の底面は若干凹む。15号住居跡の土器のうち、305～309は口縁部で、309・313・314は直口する口縁部で、胴部は張りがない。323・324は充実した脚台で、323は裾の中位に粗粒、底面に木の葉の圧痕を認める。16号住居跡の土器のうち、332～342、344、348、349は口縁部破片である。口縁部の形状のうち、348は大きく内湾し、胴部に張りをみる。344・346・347は内湾する口縁部である。361～363・365～371は充実した脚台で、371はあげ底気味である。370は鉢の底部の可能性も考えられる。17号住居跡の土器のうち、382～387は口縁部破片である。18号住居跡の土器のうち、397～401は直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。402～407は口縁部である。408～412・414は充実した脚台で、409・412の床面は凹む、414はあげ底気味の底部である。19号住居跡の土器のうち、419～436は口縁部破片である。439は外傾する口縁部で、くの字状に外反する。440・444は充実した脚台で、底面は若干凹む。20号住居跡の土器のうち、456～458・460は口縁部の破片である。467・469・470・472は充実した脚台で、469・470の底面は凹む。21号住居跡の土器のうち、482～485は口縁部破片である。486は完形品で、口縁部は逆L字に外反する。487は

直口する口縁部で、くの字状に外反する。494～496は充実した脚台で、495・496の底面は凹む。22号住居跡の土器のうち、500～502は口縁部破片である。口縁部の形状のうち、514は直口気味で、516は外傾気味の口縁部である。509・511は充実した脚台である。23号住居跡の土器のうち、518・519は口縁部の破片で、523は充実した底部である。24号住居跡の土器のうち、526・527・531・533は口縁部破片で、539～541は充実した底部である。25号住居跡の土器のうち、544は口縁部破片で、546・547は充実した脚台で底面は若干凹む。26号住居跡の土器のうち、552は完形品で、底部は脚台をもたず、底面は凹み、胴部は若干張り、内湾する口縁部で逆L字状に外反する。輪積みの手法を残す。553～558、562～564は口縁部の破片で、565・566は充実した脚台である。27号住居跡の土器のうち、585～593は口縁部破片である。口縁部の形状のうち、596は外傾する。597・598は直口気味の口縁部である。600～605は充実した脚台で、604はあげ底気味である。600～602の底厚はぶ厚い。

壺形土器は、口縁部の形状が直線的になりながらわずかに外反するもの、口縁部内側に張り出しをつくるもの、口縁部内側に断面三角形貼付突帯を廻らすもの、口縁部の外面直下に突帯を廻らし二叉状を呈するもの、大きく外反するもの、大きく外反し内側に突帯を廻らすものがある。また、二叉状口縁部をもつものには、口縁部内側に突帯を廻らすものがある。これらの形状のほか、口縁部端面が肥厚拡張され、その拡張部に凹線文を施したもの、頸部でしまり立ち上がりながら大きく外反し、口唇部の凹むもの、無頸や長頸を呈するなど多種にわたる。肩部及び胴部は張るもの、張りのないものがあり、底部は平底の底部である。これらの土器は、完形品が少なく全体の器形を知り得るものは少ない。

各住居跡についてみれば、1号住居跡の土器は口縁部破片で、2号住居跡からは出土しなかった。3号住居跡の土器のうち、11は直線的に立ち上がりながら外反する口縁部である。4号住居跡の土器のうち、27は瀬戸内系の土器と思われ、肩部付近に篋状施工具による列点文を施す。28は頸部より立ち上がりながらわずかに外反し、二叉状を呈する口縁部である。30・31は平底の底部で、31はぶ厚い。5号住居跡の土器のうち、43、44は頸部より立ち上がりながらわずかに外反する口縁部で、43は逆L字状に、44は逆L字状に近く外反する。45は口縁部破片で、49は大きく外反する口縁部である。50は二叉状を呈する口縁部で、口唇部と突帯間には篋状工具により短かい沈線を施す。56・59・60・61は平底の底部で、60・61は大型甕形土器の底部の可能性も考えられる。6号住居跡の土器のうち、69は口縁部破片で、70は瀬戸内系のものと思われ頸部下位に刻目突帯を廻らす。7号住居跡からは出土しなかった。8号住居跡の土器のうち、88・91は頸部より直線的に外反する口縁部で、91は口縁部内側に突帯を廻らす。90は肩の張はなく、直線的に立ち上がりながら外反し、逆L字状に外反する口縁部で、89は肩部である。9号住居跡の土器のうち、125～127は口縁部破片である。128～131は二叉状口縁で、129・130・175は口縁部破片である。181～183は平底の底部である。11号住居跡の土器のうち、212は肩の張はなく、頸部は短かく口唇部は凹む器形である。213・214は二叉状を呈する口縁部で、213

は口縁部内側に突帯を廻らす。12号住居跡の土器のうち、228・229は逆L字状に近く外反する口縁部で、内側に突帯を廻らす。230は瀬戸内系の凹線文をもつ口縁部で、232は平底の底部である。234は肩の張はなく、胴部は張るものである。13号住居跡の土器のうち、245は二又状口縁で、246は頸部より立ち上がりながらわずかに外反する器形である。248は長頸壺で、口縁部及び頸部上位に7条、口縁部内側に2条の凹線文を施す。249は平底の底部である。14号住居跡の土器のうち、壺形土器は多く出土した。口縁部が二又状を呈する土器が多く、中には復元完形品もある。248～289は口縁部の破片で、290～294・297は二又状を呈する口縁部で篋磨きが見られる。290の口縁部外側突帯は断面三角形を呈する。294・297は大きく外反する口縁部で、輪積みの手法を残す。297は完形品で、歪である。296は肩部から胴部上位までの部位で、輪積みの手法を残し、篋削りや篋磨きを認める。302は肩の張はなく、頸部でしまり大きく外反する口縁部で、口縁部上面には円形浮文を施す。15号住居跡の土器のうち、315は口縁部で薄手の器形である。316は頸部より立ち上がりながらわずかに外反する器形で、317は大型の壺の頸部である。319～321は胴部付近で、319は断面台形状貼付突帯を廻らし、端面は凹む。16号住居跡の土器のうち、350～355は口縁部破片で、355は二又状を呈する。253は、わずかに外反し、くの字状に外反する。258は大きく外反する口縁部で口唇部は凹む。357は肩部付近で、359・360は断面台形状貼付突帯で、端面は凹む。372～376は平底の底部で、373は若干凹む。17号住居跡の土器は小破片が多い。18号住居跡の土器のうち、415は直線的に立ち上がりわずかに外反し、口縁部外側に断面三角形貼付突帯を廻らし、口唇部外側と突帯にそれぞれ斜行する刻目を施す。口縁部の二か所に円孔穿つ。丹を一部に認める。423は口縁部を欠損する。414・416・425は口縁部破片である。417・419・421は平底の底部である。19号住居跡の土器のうち、443～446は口縁部破片で、450は立ち上がりながらわずかに外反する器形である。451は肩部から胴部にかけての部位で、断面三角形貼付突帯と断面台形状貼付突帯を廻らす。第20号住居跡の土器のうち、473～477は口縁部の破片で、475・476は口縁部内側に突帯を廻らす。477は二又状口縁で、大きく外反する器形であり、口縁部内側に断面三角形貼付突帯を廻らす。479・480は平底の底部で、底面は若干凹む。489～492は肩部及び肩部から胴部付近の部位で、490は二か所に断面台形状貼付突帯を廻らし端面は凹む。491は肩部上位に円形浮文を認める。497は平底の底部で端面は若干丸味を帯びる。22号住居跡の土器のうち、503は肩の張はなく、頸部は短かく逆L字状に外反する口縁部である。504は二又状を呈すると思われる。506・507は口縁部破片で、507は肩部付近と思われ、512は平底の底部である。23号住居跡の土器のうち、521は口縁部内側に断面三角形貼付突帯を廻らす。522は大型の器形で、大きく外反する。524は底部である。24号住居跡の土器のうち、530は立ち上がりながらわずかに外反する器形で、535は口縁部破片である。536～538は肩部付近で、542は平底の底部である。25号住居跡の土器のうち、549は断面三角形貼付突帯を廻らし、550は平底の底部である。26号住居跡の土器のうち、559～561・567～569は口縁部で、559・567は口縁部内側に断面三角形貼付突帯を廻らす。559は口

縁部上面に円形浮文を施す。560は逆L字状を呈し、561～574は平底の底部である。575・576は鋤形を呈し、頸部でしまり大きく外反する口縁部で、大型である。575は口縁部上面に篋による鋸歯文を施す。561・570～574は平底の底部である。27号住居跡の土器のうち、606は瀬戸内系の凹線文土器である。607は大型で直線的に大きく外反し、口縁部内側に断面三角形貼付突帯を廻らす。610・611は口縁部破片で、613～615は平底の底部である。614・615は小破片である。

鉢形土器には、完形品もみられ、充実した脚台つきもある。口縁部の形状のうち、直口するもの、内湾するもの、外傾するもの、内傾するものがあり、くの字状に外反するもの、垂れ下り気味のもの、丸味を帯びるものがある。なお、二か所に耳状突起をもつものもある。口縁部上面は凹むもの、坦面を作るものがある。胴部は丸味を帯びるもの、張りのないものがあり、底部には、平底のものや充実した脚台をもつものがある。これらの土器はほとんどの住居跡に認められたが、量は多くない。

3号住居跡の土器のうち、13は平底の底部で、直口する器形で口唇部は丸味を帯び、完形品で、輪積みや指頭圧調整痕を内、外面に残す。6号住居跡の土器のうち、68は口縁部破片である。7号住居跡の土器のうち、72は底部を欠損するが、内傾する口縁部で、逆L字に近く外反し、断面台形状突帯を廻らす。8号住居跡の土器のうち、92・93は底部を欠損する。92は直口する口縁部で、くの字状に外反する。93は内湾気味で、逆L字状に外反する口縁部である。9号住居跡の土器のうち、124は外傾する口縁部で、二か所に耳状突起を施し、煤の付着が著しい。10号住居跡の土器のうち、176は外傾し、わずかに立ち上がる口縁部で、口唇部は丸味を帯びる。178・179は逆L字状に外反する口縁部である。11号住居跡の土器のうち、205～207は逆L字状に外反し、205・206は直口気味に、207は内湾する口縁部で、205は断面三角形貼付突帯を廻らす。204は大形の鉢で、口縁部は内湾し、口唇部は丸味を帯び、煤の付着が著しい。13号住居跡の土器のうち、247は器形は厚く、口唇部は丸味を帯びる。14号住居跡の土器のうち、267は内湾し、逆L字状に外反する口縁部で、269は小破片でくの字状に外反する。14号住居跡の土器のうち、298・299は大きく内湾する口縁部で、くの字状に外反し、299は大きく内湾する口縁部で、くの字状に外反し、299は胴部上位に断面台形状貼付突帯を廻らす。15号住居跡の土器のうち、311は口縁部破片である。16号住居跡の土器のうち、364は完形品である。18号住居跡の土器のうち、427は直口気味の口縁部で、端面は丸味を帯び、輪積みや指頭圧調整痕を残す。20号住居跡の土器のうち、459は直口する口縁部で逆L字状を呈し、478は底部である。24号住居跡の土器のうち、529は大きく内傾する口縁部で逆L字状を呈する。26号住居跡の土器のうち、578は外傾気味の口縁部で口唇部は丸味を帯び、ぶ厚い平底の底部で、輪積みの手法を残す。579は器壁は薄く、口唇部に耳状突起を貼り付け、輪積みの手法を残し、煤の付着や剥落が著しい。27号住居跡の土器のうち、612は内傾する口縁部で、逆L字状に外反し、断面三角形貼付突帯を廻らす。

その他の土器には、大型甕形土器、高坏形土器、手捏ね土器、蓋形土器などがある。



3号住居跡の土器のうち、14は大型甕形土器で底部を欠損する。胴部に張はなく、内傾気味の口縁部で逆し字状に外反し口縁部外側に断面台形状貼付突帯を廻らす。輪積みの手法を残す。4号住居跡の土器のうち、24と26は大型甕形土器の破片である。5号住居跡の土器のうち、46は蓋形土器で、47は手捏ね土器の破片で、57・58は高環形土器の破片である。9号住居跡の土器のうち、122は大型甕形土器の破片である。10号住居跡の土器のうち、180は蓋形土器のつまみ部である。11号住居跡の土器のうち、215は手捏ね土器の復元完形品で、13号住居跡の土器のうち、253は底部である。14号住居跡の土器のうち、300は高環形土器の坏部と脚部付近の部位で、301は脚部破片である。17号住居跡の土器のうち、395は大型甕形土器の破片である。18号住居跡の土器のうち、418・420・422は手捏ね土器の底部である。19号住居跡の土器のうち、438・441・442は大型甕形土器で、449は手捏ね土器の底部である。21号住居跡の土器のうち、493は大型甕形土器である。22号住居跡の土器のうち、505は大型甕形土器である。25号住居跡の土器のうち、548は蓋形土器で、26号住居跡のうち、580は蓋形土器である。27号住居跡のうち、595は大型甕形土器破片である。

各住居跡内の土器は、大半が在地の山ノ口式土器であり、中には在地にみられない土器が埋土中より出土した。4号住居跡の27は瀬戸内系の壺の肩部付近と思われる。6号住居跡の70は壺の頸部及び頸部付近は、移入土器と考えられる。7号住居跡の72は北九州の影響をもつ鉢形土器である。9号住居跡の119はあげ底気味の底部であり、113は壺の肩部付近の部位で、北九州系の影響を受けている。11号住居跡の209はあげ底気味の底部である。12号住居跡の230は瀬戸内系の凹線文をもつ壺の口縁部である。13号住居跡の248は口縁部から頸部の内外面に凹線文のみられる長頸壺である。14号住居跡の283は在地の土器に類似品がみられるが、北九州の影響を受けている壺で、299は7号住居跡の72に類似した鉢形土器である。15号住居跡の319は北九州系の影響を受けている壺の肩部付近である。16号住居跡の359・360は北九州系の影響を認める壺の肩部付近で、371はあげ底気味の底部である。18号住居跡の414はあげ底気味の底部で、415は在地の土器と思われない壺の口縁部である。19号住居跡の451は壺の肩部から胴部にかけての部位で、北九州系の影響を受けている。20号住居跡の468・471は甕の胴部付近の部位で、北九州系の影響を受けていると思われる。21号住居跡の487は在地の土器には認められない土器で、490は北九州系の影響を受け、491は瀬戸内系の影響を受けていると思われる壺の肩部付近の部位である。22号住居跡の503は在地に認められない壺である。26号住居跡の559の壺の口縁部や575の口縁部上面には瀬戸内系の影響を受けていると思われる。27号住居跡の604はあげ底気味の底部で、606は瀬戸内系の凹線文をもつ壺の口縁部である。これらの土器のほか、9、20、110、259、266、439、487、515・516、552の甕形土器については、これまでの山ノ口式土器の中でも特異的なタイプである。大型甕形土器は、居住環境から水甕用に用いられたものと考えられる。また、宮崎県の学園都市11号遺跡2号住居跡や新田原6号住居跡出土の大甕と類似したものも認められる。

### 第3節 掘立柱建書跡

掘立柱建物跡は調査区西側6区から東側23区までの約180mの範囲に14棟が検出された。うち2棟についてはバイパス建設予定地外へのびている。

王子遺跡の掘立柱建物跡は、妻側に独立して棟木を支える棟持柱をもつ掘立柱建物跡（棟持柱付）、1間×1間と2間×1間の掘立柱建物跡。四本の掘立柱の中央に土壇を伴う掘立柱建物跡とがある。

#### ① 1号掘立柱建物跡（棟持柱付）(Fig. 101, PL. 22)

発掘調査の最西部より以東60mの南西端部に位置する。1号住居跡との最短距離は北東約7mで、13号掘立柱建物跡まで、北東約9.1cmを測り、B-6・7区のⅢ層上面で検出された。

本建物跡は、Ⅲ層上面の検出であったが、実際の柱穴の掘込は、Ⅱ層中から掘り込まれる。柱穴でみれば、 $P_1-P_3$ :335.5cm、 $P_5-P_7$ :327.5cm、 $P_1-P_7$ :298.5cm、 $P_3-P_5$ :313.0cmを測り、さらに妻側にそれぞれ棟持柱が認められ、 $P_9-P_{10}$ :535cmである。梁行2間×桁行2間の棟持柱をもつ建物である。内角はおよそ $\angle P_1P_7P_5$ は $92.5^\circ$ 、 $\angle P_7P_5P_3$ は $89.5^\circ$ 、 $\angle P_3$

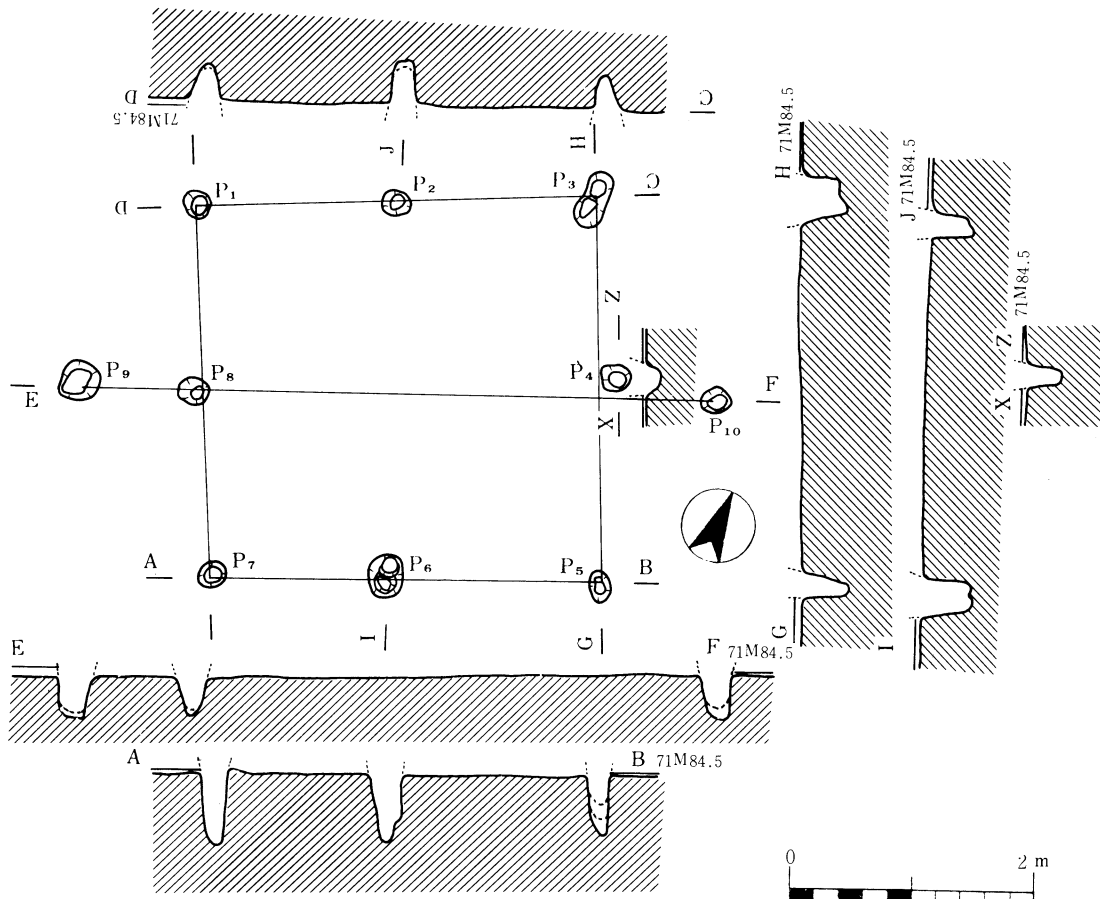


Fig. 101 1号掘立柱建物跡（棟持柱付）実測図

$P_1P_7$ は $89.5^\circ$ 、 $\angle P_1P_7P_3$ は $95.5^\circ$ である。 $P_5-P_3$ 線上から $P_4$ は略西に16cm、東西の棟持間を結ぶ線上から略南西に約22cmずれている。 $P_7-P_5$ の方位は $N-67^\circ-E$ をとる。柱穴の大きさは長径28.7cm、短径は21.5cm、深さは37.7cmで、梁間柱間は152.8cm、桁行柱間は165.7cmの平均を測る。 $P_6$ と $P_3$ の柱穴は二か所の掘込を認め、立替えの可能性が考えられる。 $P_5$ の埋土中には土器破片を認めた。

Tab. 26 1号掘立柱建物跡の一覧表

※SB：掘立柱建物跡 P：柱穴 単位：cm

SB	主軸方位	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	P	長径×短径×深さ
1	$N-67^\circ-E$	W-2間-298.5	N-2間-355.5	$P_9-P_{10}$	1	23×21×27	8	24×22×31
出土区	$B-6\cdot7$	E-2間-313	S-2間-327.5	535	2	24×20×34	9	34×31×35
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間		3	47×18×39	10	26×18×35
$P_1-P_8:147$	} $P_1-P_7:298.5$	$P_1-P_2:169$	} $P_1-P_3:335.5$	4	25×20×12	備考 ・3層上面での検出で各柱穴とともに実際の掘込は大きいものと考えられる。		
$P_8-P_7:151.5$				$P_2-P_3:166.5$	5			25×18×50
$P_3-P_4:149$	} $P_3-P_5:313.0$	$P_7-P_6:147.5$	} $P_5-P_7:327.5$	6	36×27×54			
$P_4-P_5:164$		$P_6-P_5:180.0$		7	23×20×60			

② 2号掘立柱建物跡（棟持柱付）（Fig. 102, PL. 22）

発掘調査区のはほぼ中央部に位置する。10号掘立柱建物跡との最短距離は、4.3cmで、14号住居跡まで、7.6cmを測り、E-16区のⅢ層上面で検出された。

本建物跡は、Ⅲ層上面の検出のため柱穴の実際の掘込は大きいものとする。遺存している柱穴の掘込でみれば、 $P_1-P_5:449$ cm、 $P_{13}-P_2:500$ cm、 $P_1-P_{13}:371$ cm、 $P_5-P_8:387.5$ cmを測り、さらに妻側にそれぞれ棟持柱を検出した。 $P_{16}-P_{17}:681.5$ mである。梁行3間×桁

Tab. 27 2号掘立柱建物跡の一覧表

※SB：掘立柱建物跡 P：柱穴 単位：cm

出土区	主軸方位	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	P	長径×短径×深さ
SB	$N-82.5^\circ-E$	W-3間 387.5	N-4間 449	$P_{16}-P_{17}$	1	43×35×26	13	39×33×38
2	$E-6$	E-3間 371	S-5間 500	681.5	2	34×29×27	14	40×32×38
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間		3	43×28×9	15	30×27×27
$P_1-P_{15}:123$	} $P_1-P_{13} 371$	$P_1-P_2:110$	} $P_1-P_5:449$	4	39×28×25	16	50×48×33	
$P_{15}P_{14}:130$				$P_2-P_3:109.5$	5	33×30×20	17	48×30×32
$P_{14}P_{13}:118$	} $P_5-P_8 387.5$	$P_3-P_4:110.5$	} $P_{13}-P_8:500$	6	32×27×28	備考 ※Ⅲ層上面での検出である。 ※主軸の方位は棟持柱を結ぶ線とでとる。		
$P_5-P_6:124$		$P_4-P_5:119$		7	29×27×19			
$P_6-P_7:131$		$P_{13}-P_{12}:120$		8	26×23×22			
$P_7-P_8:132.5$		$P_{12}-P_{11}:106.5$		9	50×24×37			
		$P_{11}-P_{10}:111$		10	61×28×40			
		$P_{10}-P_9:99.5$		11	31×27×33			
	$P_9-P_8:63$	12	42×27×31					

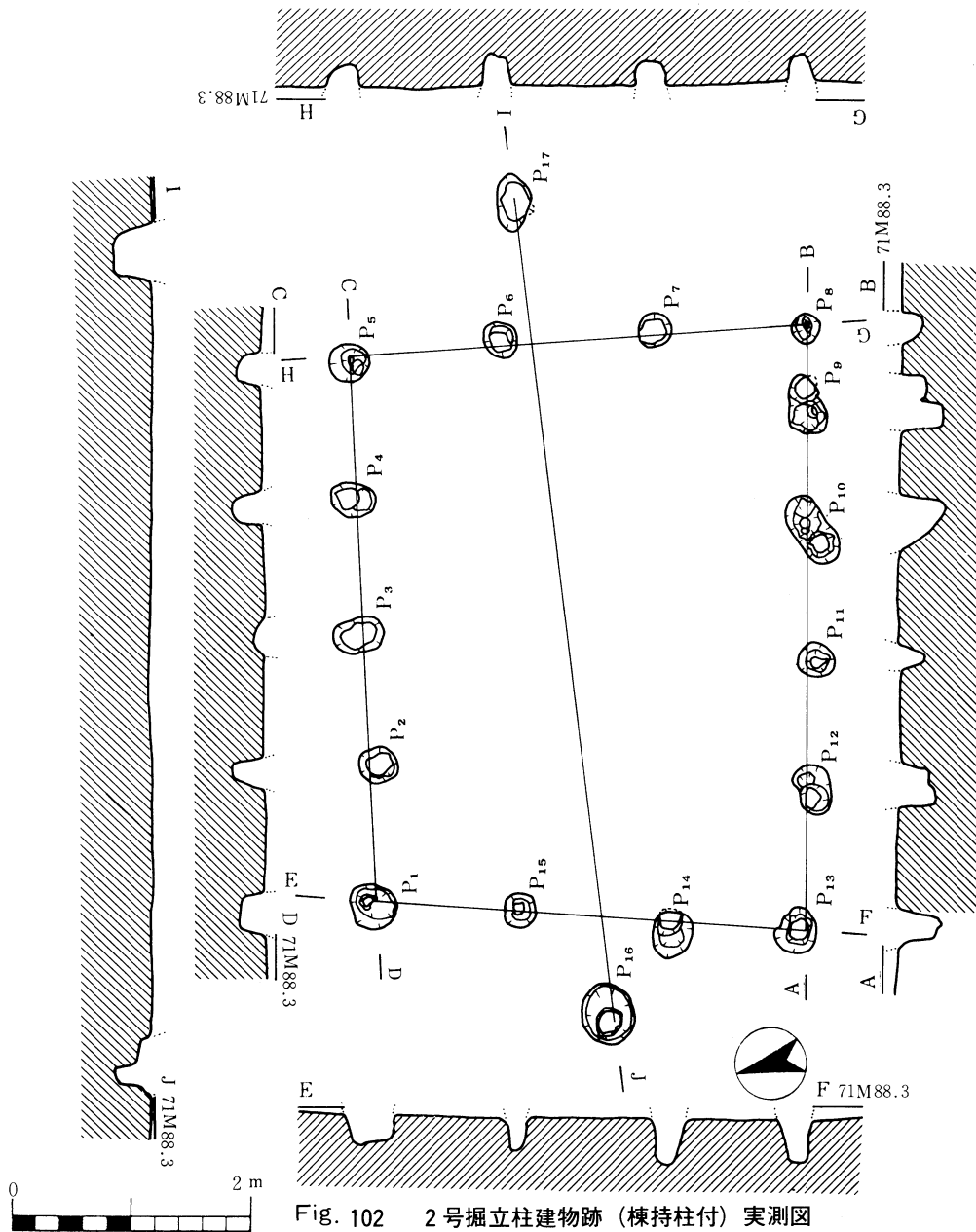


Fig. 102 2号掘立柱建物跡 (棟持柱付) 実測図

行4間(南側5間)で、棟持柱をもつ建物である。内角はおよそ $\angle P_{13}P_8P_5$ は $86.5^\circ$ 、 $\angle P_8P_5P_1$ は $91^\circ$ 、 $\angle P_3P_1P_3$ は $96.5^\circ$ 、 $\angle P_1P_{13}P_8$ は $86.5^\circ$ である。棟持柱 $P_{16}-P_{17}$ を結んだ線より $P_1:184\text{cm}$ 、 $P_5:155\text{cm}$ で、 $P_{16}-P_{17}$ の方位は $N-82.5^\circ-E$ 、 $P_1-P_5$ は $N-79.5^\circ-E$ 、 $P_{13}-P_8$ は $N-76.5^\circ-E$ をとる。南側桁行が1間多いために全体が北側に歪な長方形を呈する。柱穴の大きさは、長径 $39.4\text{cm}$ 、短径 $29.5\text{cm}$ 、深さ $27.9\text{cm}$ で、梁間柱間 $126.4\text{cm}$ 、桁行間 $112.2\text{cm}$ (北側)、 $100\text{cm}$ (南側)の平均を測る。 $P_3$ の柱穴は浅いが、実際の掘込は大きいものと考えられる。 $P_4 \cdot P_9 \cdot P_{10} \cdot P_{12} \cdot P_{14}$ の柱穴には二か所の掘込を認め、立替えの可能性が考えられる。 $P_2 \cdot P_1 \cdot P_{12} \cdot P_{10}$ の埋土中より土器破片が出土したが、小破片で図化は困難である。

③ 3号掘立柱建物跡（棟持柱付）(Fig. 103, PL. 23)

13号住居跡との最短距離は、南西約8.0cm, 14号住居跡まで、南東約11.8cm, 2号掘立柱建物跡まで、略南東約24.9mを測り、E-13区のⅡ層中で検出された。

本建物跡は、バイパス建設予定地路線外へ大半がのび、詳細は不明である。4号掘立柱建物跡とは一部が重複するが建物相互間の掘込の切り合いはない。梁間2間以上、桁行3間以上が想定され、4号掘立柱建物跡との関係で棟持柱をもつ掘立柱建物の可能性が考えられる。建物の規模は、梁間144cm, 桁行 $P_3-P_2$  :

125cm,  $P_2-P_1$  : 124cmを測り、内角はおよそ $\angle P_4 P_3 P_1$ は $89^\circ$ である。 $P_3-P_1$ の方位は $N-78.5^\circ-W$ をとる。柱穴の大きさは長径41cm, 短径35cm, 深さ46.5cmの平均を測る。 $P_2 \cdot P_4$ の埋土から土器小破片が出土した。

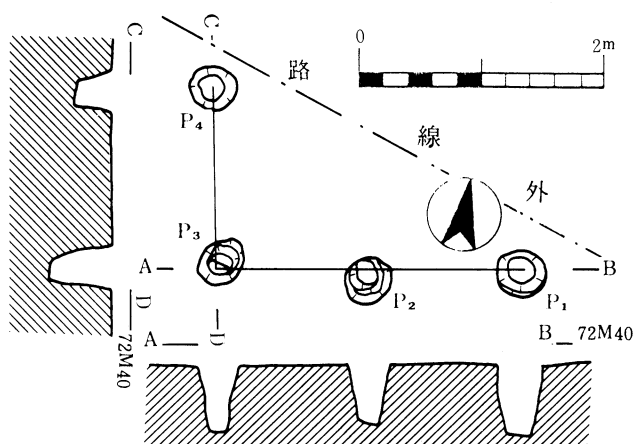


Fig. 103 3号掘立柱建物跡（棟持柱付）実測図

Tab. 28 3号掘立柱建物跡の一覧表

※ S B : 掘立柱建物跡 (単位 : cm)

S B	主軸方位	梁 間 間	桁 行 間	棟 持 柱 間	P	長径×短径×深さ
3	N-79.0-W	W-(144)	N-不明	不明	1	42×38×54
山土区	F-13	E-不明	S-(249)		2	40×35×48
		梁 間 柱 間	桁 行 柱 間	桁 行 間	3	42×33×52
			$P_3-P_2$ : 125	} (249)	4	40×34×32
			$P_2-P_1$ : 124		備考	
		$P_4-P_3$ : 144	(144)			・遺構の大半が路線外へのびる。

④ 4号掘立柱建物跡（棟持柱付）(Fig. 104, PL. 23)

13号住居跡の最短距離は、略南8.6mで、9号住居跡まで、略南西8.75m, 中央の溝状遺構まで、約0.75cmを測り、F-12・13区のⅡ層中で検出された。

本建物跡は、バイパス建設予定地路線外へのびるため、詳細は不明である。3号掘立柱建物跡とは重複するが建物相互間の柱穴の掘込の切り合いはない。梁間2間以上、桁行4間で、梁間 $P_8$ の西側に棟持柱と想定される柱穴が検出される。梁間4間×桁行4間の建物で、妻側にそれぞれ棟持柱をもつ建物跡の可能性が有る。建物の規模は、西側梁間 $P_6-P_8$  : 283cm, 東側梁間 $P_2-P_1$  : 126cm, 桁行 $P_6-P_2$  : 490cmを測り、内角はおよそ $\angle P_8 P_6 P_2$ は $90.5^\circ$ ,  $\angle P_6$

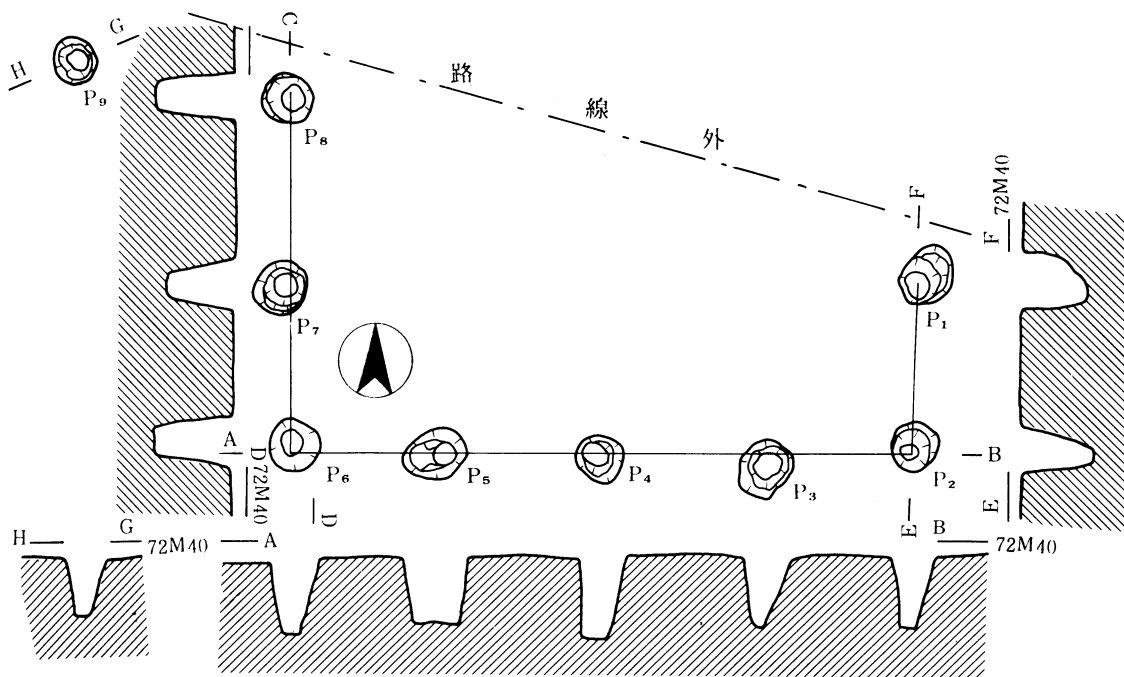


Fig. 104 4号掘立柱建物跡（棟持柱付）実測図

$P_2P_1$ は $92^\circ$ である。 $P_6-P_2$ の方位は $N-91^\circ-E$ をとる。柱穴の大きさは長径 $44.4\text{cm}$ 、短径 $38.5\text{cm}$ 、深さ $57.8\text{cm}$ の平均を測る。 $P_7 \cdot P_4 \cdot P_3$ の埋土中より土器小破片が出土した。

Tab. 29 4号掘立柱建物跡の一覧表

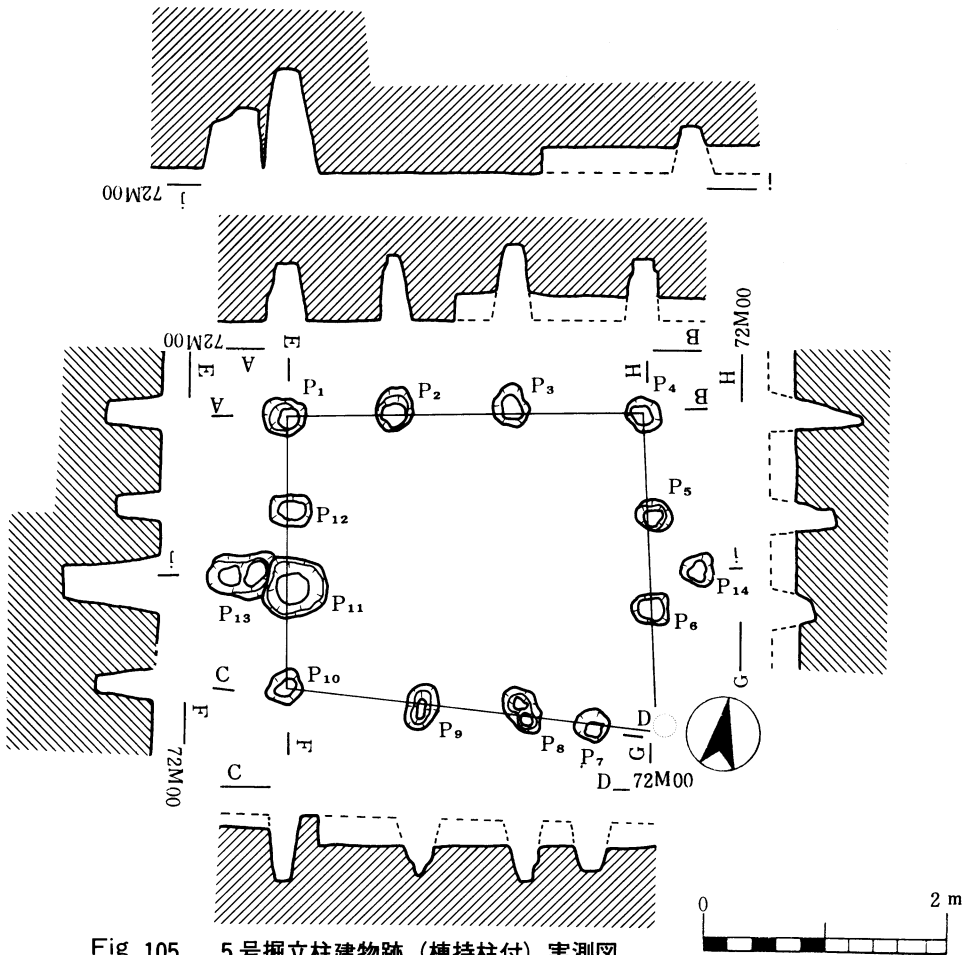
※SB 掘立柱建物跡 P柱穴 単位：cm

SB	主軸方位	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	備考
4	$N-91^\circ-E$	W-(283)	N-不明		1	$52 \times 40 \times 54$	・遺構の約半分は路線外へのびる。
出土区	F-12, 13	E-(126)	S-490	$P_6$ -不明	2	$40 \times 36 \times 58$	
		梁間柱間	桁行柱間	桁行間	3	$48 \times 38 \times 58$	・推定では4間×4間の建物跡が考えられる。 ・3号掘立柱建物跡（棟持柱付）と重複する。
		$P_6-?:(283)$	$P_6-P_5:115$	$P_6-P_2:490$	4	$40 \times 38 \times 66$	
			$P_5-P_4:136$		5	$52 \times 40 \times 54$	
			$P_4-P_3:122$		6	$42 \times 40 \times 64$	
			$P_3-P_2:117$		7	$46 \times 42 \times 55$	
		$P_2-?:(126)$		8	$42 \times 39 \times 66$		
				9	$38 \times 34 \times 46$		

⑤ 5号掘立柱建物跡（棟持柱付）(Fig. 105, PL. 24)

7号掘立柱建物跡との最短距離は、略北東1.9m、21号住居跡まで、略南西3.05m、20号住居跡まで、略南東5.3m、9号掘立柱建物跡まで、7.7mを測り、B-14区のⅢ層上面（一部Ⅱ層中）で検出された。

本建物跡は、8号掘立柱建物跡と重複し、建物相互間の掘込の切り合いは、柱穴2か所があり、梁間3間、桁行3間（南側4間）で、棟持柱をもつ建物跡である。P<sub>2</sub>-P<sub>1</sub>~P<sub>10</sub>やP<sub>13</sub>についてはⅡ層中で検出された。遺物跡の柱穴の掘込は、P<sub>1</sub>-P<sub>10</sub>:226cm, P<sub>4</sub>-○:266cm, P<sub>1</sub>-P<sub>10</sub>:291cm, P<sub>4</sub>-○:300cmを測る。内角はおよそ∠P<sub>1</sub>P<sub>10</sub>○は90.5°, ∠P<sub>10</sub>○P<sub>4</sub>は89.5°, ∠○P<sub>4</sub>P<sub>1</sub>は89.5°, ∠P<sub>4</sub>P<sub>1</sub>P<sub>10</sub>は90.5°である。棟持柱P<sub>13</sub>-P<sub>14</sub>を結んだ線よりP<sub>1</sub>:131cm, P<sub>4</sub>:128.5cmで、P<sub>13</sub>-P<sub>14</sub>は371cmを測る。P<sub>13</sub>-P<sub>14</sub>の方はN-79°-Eをとる。わりと小型の建物である。Ⅱ層中検出の柱穴の大きさは長径41.4cm, 短径28.3cm, 深さ51.8cm, Ⅲ層上面検出の柱穴の大きさは長径31.8cm, 短径24.3cm, 深さ30.4cmの平均を測る。棟持柱P<sub>13</sub>とP<sub>11</sub>は、一部の切り合い関係である。また、P<sub>11</sub>は重複関係が考えられる。



Tab. 30 5号掘立柱建物跡の一覧表

※SB：掘立柱建物 P：柱穴 単位：cm

SB	主軸方位	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長径×短径×深さ	P	長径×短径×深さ
6	N-79°-E	W-3間 266	N-3間 291	P <sub>13</sub> -P <sub>14</sub> 373	1	35×27×47	11	54×46×82
	出土区 B-4	E-3間?226	S-4間?300		2	36×26×52	12	36×24×34
	梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	33×26×37	13	56×33×49
	P <sub>1</sub> -P <sub>12</sub> :80	P <sub>1</sub> -P <sub>10</sub> :226 P <sub>2</sub> -P <sub>9</sub> :243 P <sub>3</sub> -P <sub>8</sub> :254	P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :86	P <sub>1</sub> -P <sub>10</sub> :291	4	28×26×54	14	28×24×17
	P <sub>12</sub> -P <sub>11</sub> :66		P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :95		5	30×23×34	備 行	
	P <sub>11</sub> -P <sub>10</sub> :80		P <sub>3</sub> -P <sub>4</sub> :110		6	32×24×14	・8号掘立柱建物跡と重複する。	
	P <sub>4</sub> -P <sub>5</sub> :86	P <sub>10</sub> -P <sub>9</sub> :111	7	27×24×18				
	P <sub>5</sub> -P <sub>6</sub> :76	P <sub>9</sub> -P <sub>8</sub> :85	8	41×24×29				
	P <sub>6</sub> -○:04	P <sub>8</sub> -P <sub>7</sub> :50	9	36×22×24				
		P <sub>4</sub> -○:266 (推定)	P <sub>7</sub> -○:54	P <sub>4</sub> -○:300	10	30×24×47		

⑥ 6号掘立柱建物跡（棟持柱付）（Fig. 106, PL. 24）

26号住居跡との最短距離は、略西約1.7mで、27号住居跡まで、略南西約9.0cmを測り、E・F-21区のⅡ層中で検出された。

本建物跡は、一部市道小原線敷地内に東側梁間及び東側棟持柱を認め、当時の工事施行により一部が影響を受け、現検出面より若干下位で検出された。柱穴の掘込をみれば、P<sub>1</sub>-P<sub>12</sub>:360cm, P<sub>5</sub>-P<sub>8</sub>:392cm, P<sub>1</sub>-P<sub>5</sub>:440cm, P<sub>2</sub>-P<sub>8</sub>:450cmを測り、さらに妻側にそれぞれ棟持柱を検出し、P<sub>15</sub>-P<sub>16</sub>:615cmである。梁間3間×桁行4間で、棟持柱をもつ建物跡である。

Tab. 31 6号掘立柱建物跡の一覧表

※SB：掘立柱建物 P：柱穴 単位：cm

SB	主軸方位	梁間間	桁行間	棟持柱間	P	長軸×短軸×深さ	P	長軸×短軸×深さ
6	N-89.5°-E	W-4間 360	N-3間 440	P <sub>15</sub> -P <sub>16</sub> 615	1	39×35×50	13	34×32×56
	出土区 F-21	E-4間 392	S-3間 450		2	41×37×31	14	36×30×45
	梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	46×38×40	15	66×28×82
	P <sub>1</sub> -P <sub>14</sub> :114	P <sub>1</sub> -P <sub>12</sub> 360	P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :131	P <sub>1</sub> -P <sub>5</sub> :440	4	78×31×24	16	63×40×74
	P <sub>14</sub> -P <sub>13</sub> :127		P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :110		5	41×32×39	17	68×58×30
	P <sub>13</sub> -P <sub>12</sub> :119		P <sub>3</sub> -P <sub>4</sub> :65		6	62×30×40	備 考	
	P <sub>5</sub> -P <sub>6</sub> :143	P <sub>5</sub> -P <sub>8</sub> 392	P <sub>4</sub> -P <sub>5</sub> :134	P <sub>12</sub> -P <sub>8</sub> :450	7	30×28×24		
	P <sub>6</sub> -P <sub>7</sub> :119		P <sub>12</sub> -P <sub>11</sub> :100		8	51×36×46		
	P <sub>8</sub> -P <sub>8</sub> :130		P <sub>11</sub> -P <sub>10</sub> :94		9	51×38×62		
			P <sub>10</sub> -P <sub>9</sub> :110		10	44×37×52		
			P <sub>9</sub> -P <sub>8</sub> :146		11	45×39×55		
					12	42×20×61		



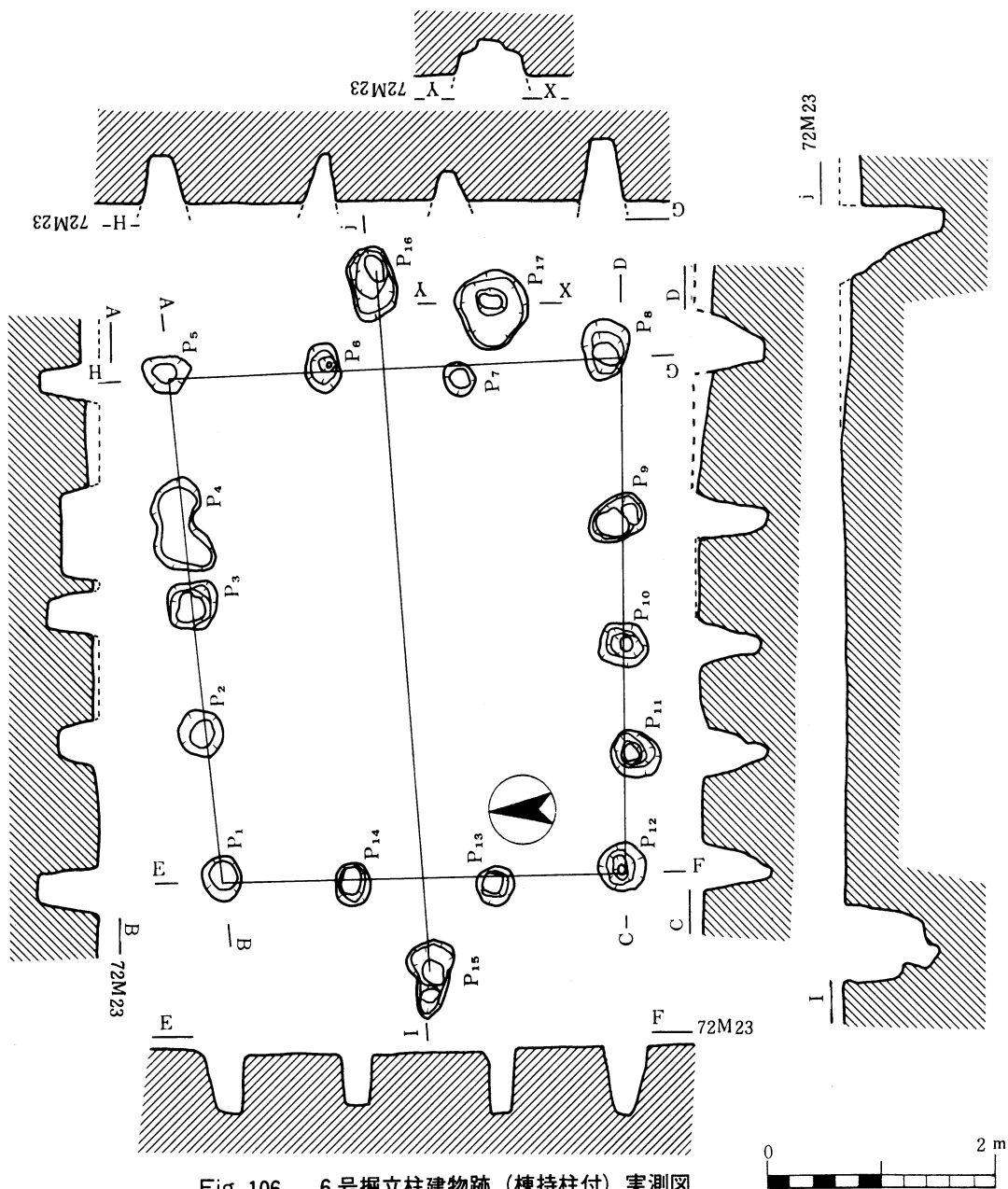


Fig. 106 6号掘立柱建物跡（棟持柱付）実測図

内角はおおよそ $\angle P_1 P_{12} P_8$ は $91^\circ$ 、 $\angle P_{12} P_8 P_5$ は $87.5^\circ$ 、 $\angle P_8 P_5 P_1$ は $87^\circ$ 、 $\angle P_5 P_1 P_{12}$ は $85^\circ$ である。 $P_1 - P_{12}$ 線上から $P_{13}$ は西側に約10cm、 $P_5 - P_8$ 線上から $P_7$ は西側に約15cmずれている。 $P_{15} - P_{16}$ の方位は $N - 88^\circ - E$ をとる。梁間柱間は西側：120cm、東側：130cm、桁間柱間は西側：110cm、東側：112.5cmの平均を測り、全体的に西側に歪な長方形を呈する。柱穴の大きさは長径48.6cm、短径34.6cm、深さ47.7cmの平均を測る。 $P_4 \cdot P_9 \cdot P_{15}$ の柱穴は2か所の掘込を認める。 $P_{17}$ は、本建物跡に付属する柱穴との関連は薄いものと思われる。

⑦ 7号掘立柱建物 (Fig. 107, PL. 25)

5・6号掘立柱建物との最短距離は、略南西1.7mで、9号掘立柱建物跡まで、略南東3.4cm, 20号住居跡まで、略南7.7mを測り、C-14区のⅢ層上面で検出された。

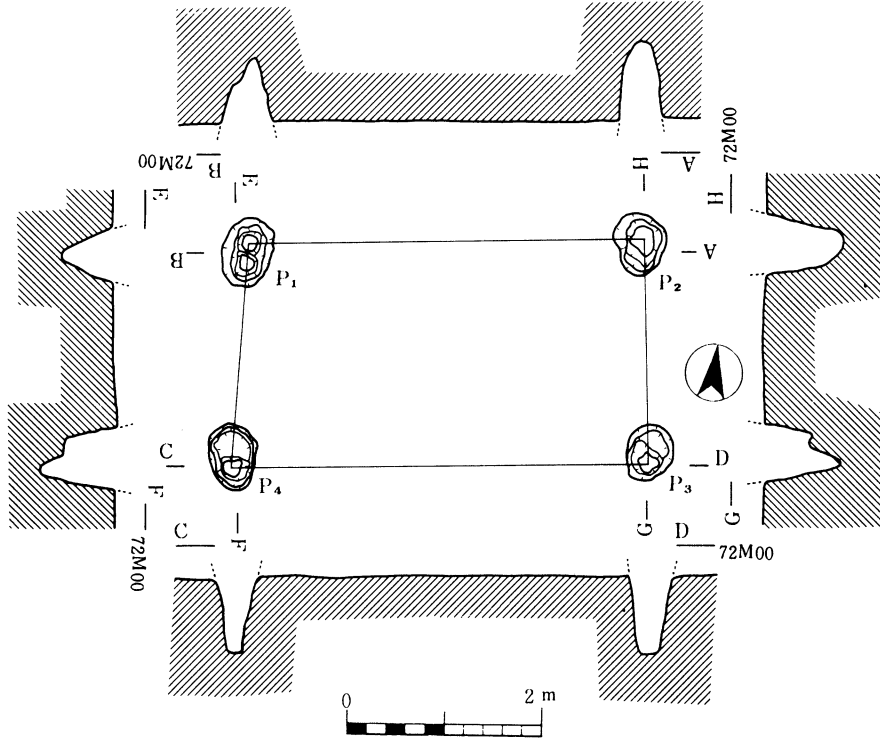


Fig. 107 7号掘立柱建物跡実測図

本建物跡は、Ⅲ層上面での検出のため、実際の掘込はⅡ層中で、梁行1間×桁行1間の建物である。柱穴の実際の掘込は大きく、建物跡の規模は、梁行227.2cm, 桁行422cmで、柱穴大きさは長径64.2cm, 短径42cm, 深さ82.7cmの平均を測る。主軸の方位はN-81°-Eをとる。内角はおよそ $\angle P_1 P_3 P_4$ は90.5°,  $\angle P_1 P_3 P_2$ は85.5°,  $\angle P_3 P_2 P_1$ は94.5°,  $\angle P_2 P_1 P_4$ は90°である。P<sub>2</sub>以外の柱穴は二か所に掘込を検出し、おそらく立替えの可能性が考えられる。P<sub>3</sub>の埋土中より土器小破片が出土した。

Tab. 32 7号掘立柱建物跡の一覧表

※SB: 掘立柱建物跡 P: 柱穴 単位: cm

SB	主軸の方位	梁間間	桁行間	出土区	P	長径×短径×深さ	備考
7	N-81°-E	W-1間 226	N-1間 433	C-14	1	69×30×90	・Ⅲ層上面で 検出する。
		E-1間 229	S-1間 412		2	64×45×81	
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	60×48×81		
	P <sub>1</sub> -P <sub>4</sub> : 226		P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> : 433	4	64×46×79		
	P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> : 229		P <sub>4</sub> -P <sub>3</sub> : 412				

⑧ 8号掘立柱建物跡 (Fig. 108, PL. 24)

7号掘立柱建物跡との最短距離は、略北東1.6m、20号住居跡まで、略南東4.5m、9号掘立柱建物まで、略西6.0mを測り、B-14区のⅢ層上面（一部Ⅱ層中）で検出された。

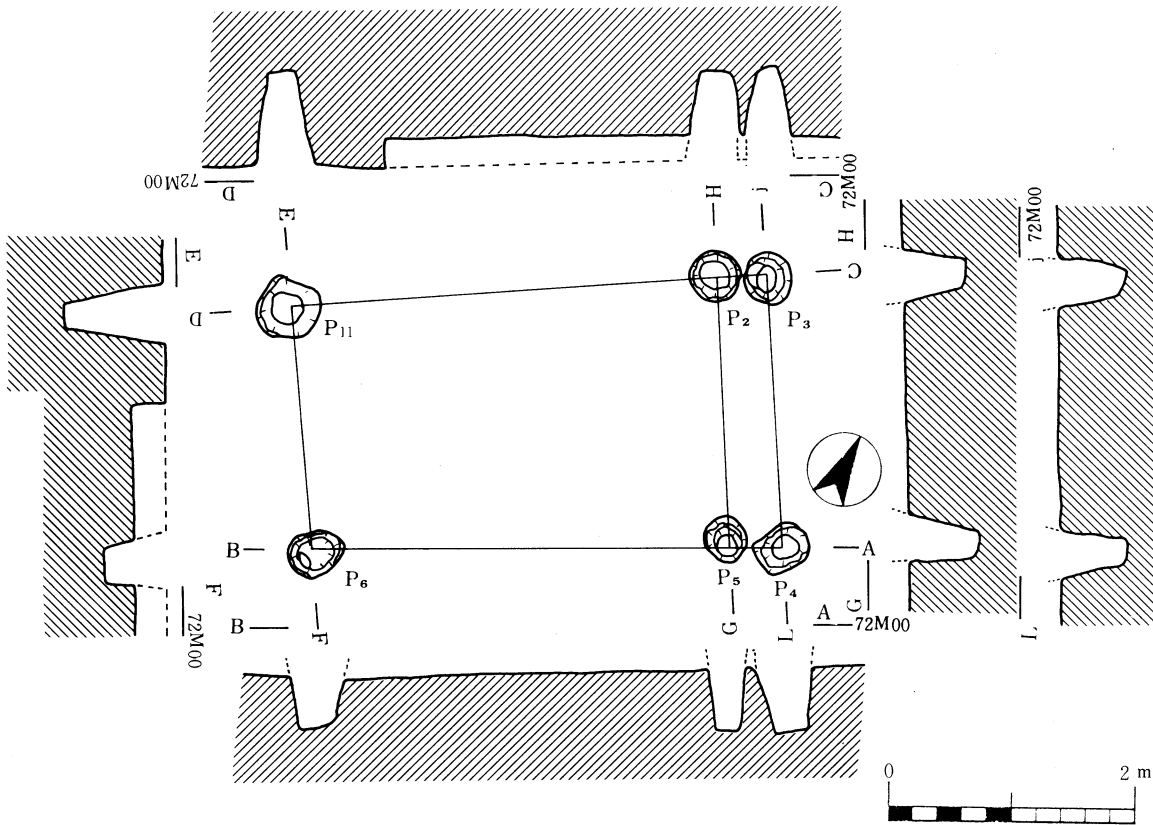


Fig. 108 8号掘立柱建物跡実測図

本建物跡は、6号掘立柱建物跡（棟持柱付）と重複し、建物相互間は柱穴の2か所に重複がみられ、梁間1間×桁行1間の建物である。6号掘立柱建物跡 $P_{11}$ は、本建物跡の $P_1$ と重複し、棟持柱 $P_{13}$ を一部切っている。遺存する柱穴は、梁間間は212cm、桁行間は、391cmと348.5cmで、大きさは長径44.8cm、短径37.5cm、深さ57.3cmの平均をとる。内角はおよそ $\angle P_{11} P_6 P_5$   $94.5^\circ$ 、 $\angle P_6 P_5 P_2$  は $87.5^\circ$ 、 $\angle P_6 P_3 P_2 P_{11}$  は $89.5^\circ$ 、 $\angle P_5 P_2 P_{11}$  は $89.0^\circ$ 、 $\angle P_2 P_{11} P_6$  は $89.0^\circ$ を測り、若干西側へ歪な建物である。また6号掘立柱建物跡（棟持柱付）が消滅したのち造られたものと考えられる。

Tab. 33 8号掘立柱建物跡一覧表

※S B：掘立柱建物跡 P：柱穴 単位：cm

S B	主軸方位	梁 間 間	桁 行 間	出 土 区	P	備 考	
8	N-75.5°-E	W-1間 220	N-1間 <sup>(353)</sup> <sub>395</sub>	B-14	1	54×46×82	・3層上面検出で、各柱穴ともに実際の掘込は上位であり径も大きいものと考えられる。 ・6号掘立柱建物跡と重複する。
		E-1間 196	S-1間 <sup>(344)</sup> <sub>388</sub>		2	41×38×52	
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	42×39×56		
	P <sub>11</sub> -P <sub>6</sub> :196	P <sub>11</sub> -P <sub>2</sub> :353	P <sub>11</sub> -P <sub>3</sub> :395	4	48×34×54		
	P <sub>2</sub> -P <sub>5</sub> :220	P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :42		P <sub>11</sub> -P <sub>2</sub> :353	5	37×34×58	
	P <sub>3</sub> -P <sub>4</sub> :220	P <sub>6</sub> -P <sub>5</sub> :344	P <sub>6</sub> -P <sub>4</sub> :388	6	47×34×42		
		P <sub>5</sub> -P <sub>4</sub> :44		P <sub>6</sub> -P <sub>5</sub> :344			

⑨ 9号掘立柱建物跡 (Fig. 109, PL. 25)

7号掘立柱建物跡との最短距離は、略北西3.4mで、20号住居跡まで、略南西5.0m、8号掘立柱建物跡まで、略南西6.0mを測り、C-15区のⅢ層上面で検出された。

本建物跡は、Ⅲ層上面の検出で、実際の掘込はⅡ層中で、梁間1間（西側2間）×桁行1間の建物である。柱穴の実際の掘込は大きく、建物跡の規模は、梁間207.5cm、（西側107.5cm）、桁行355cmで、柱穴の大きさは、長径36cm、短径30.8cm、深さ22.6の平均をとる。内角はおよそ $\angle P_1 P_4 P_3$ は94.5°、 $\angle P_1 P_2 P_3$ は94.5°、 $\angle P_2 P_1 P_4$ は83°である。梁間P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>線よりP<sub>5</sub>は略南に20cmずれている。

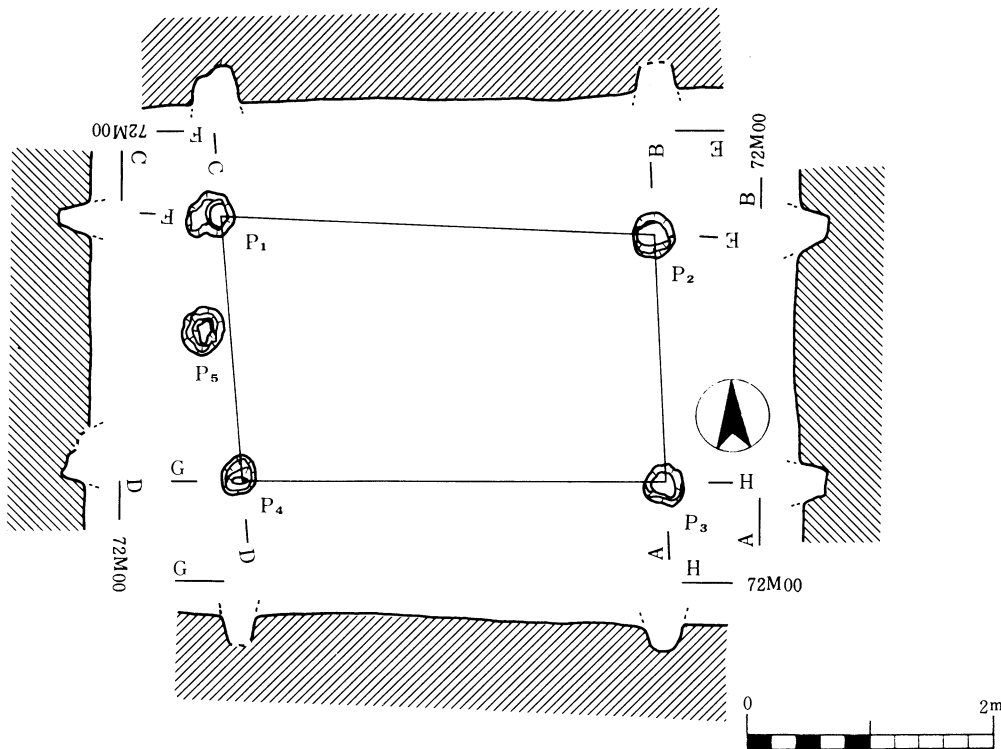


Fig. 109 9号掘立柱建物跡実測図

Tab. 34 9号掘立柱建物跡の一覧表

※SB:掘立柱建物 P:柱穴 単位:cm

S B	主軸方位	梁間間	桁行間	出土区	P	長軸×短軸×深さ	備考
9	N-93.2°-E	W-2間 200	N-1間 361	C-15	1	39×32×26	・3層上面での検出である。 (西側梁間)
		E-1間 215	S-1間 350		2	36×33×24	
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	34×28×21		
P <sub>1</sub> -P <sub>5</sub> :92	P <sub>1</sub> -P <sub>4</sub> :215		P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :361	4	34×28×22		
P <sub>5</sub> -P <sub>4</sub> :123				5	37×33×20		
		P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :200	P <sub>4</sub> -P <sub>3</sub> :350				

⑩ 10号掘立柱建物跡 (Fig. 110)

2号掘立柱建物跡との最短距離は略北西4.5cmで、15号住居跡まで略南7.9mを測り、D-16・17区のⅡ層中(一部Ⅲ層上面)で検出された。

本建物跡は、西側梁間の柱穴はⅢ層上面の検出で、梁間1間(東側2間)×桁行1間の建物である。建物跡の規模は、梁間221cm(東側110cm)、桁行398.5cmで、柱穴の大きさは長径36.4cm、短径30.2cm、深さ51.4cmの平均をとる。内角はおよそ $\angle P_1P_5P_4$ は87.5°、 $\angle P_5P_4P_2$ は89°、

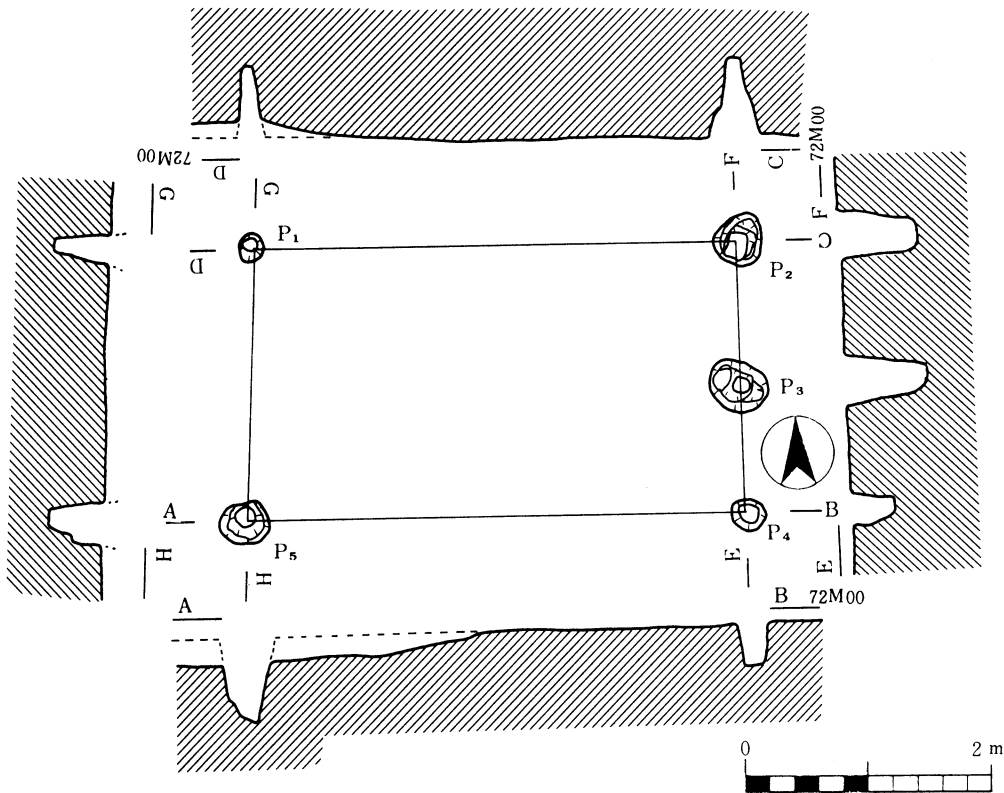


Fig. 110 10号掘立柱建物跡実測図

$\angle P_1 P_2 P_1$ は $91^\circ$ ， $\angle P_2 P_1 P_3$ は $88^\circ$ である。 $P_{13}$ の柱穴は二か所に掘込を検出した。主軸の方位は $N-90.5^\circ-E$ をとる。 $P_1 \cdot P_3$ はⅢ層上面での検出である。

Tab. 35 10号掘立柱建物跡の一覧表

※SB：掘立柱建物 P：柱穴 単位：cm

SB	主軸方位	梁間間	桁行間	出土区	P	長軸×短軸×深さ	備考
9	N-90.5°-E	W-1間 220	N-1間 392	E	1	22×19×45	・遺構の一部は3層上面での検出で $P_1, P_5$ については実際の掘込は大きいものと考えられる。
		E-2間 405	E-1間 405	D・D-16・17	2	43×37×64	
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	50×39×66		
$P_2-P_3:120$ $P_3-P_4:100$	$P_1-P_5:222$ $P_2-P_4:220$		$P_1-P_2:392$ $P_5-P_4:405$	4	28×22×32		
				5	39×34×50		

⑪ 11号掘立柱建物跡 (Fig. 111, PL. 26)

23号住居跡との最短距離は，略南西1.7m，19号住居跡まで，略西4.2m，26号住居跡まで，略南東8.8mを測り，E・F19区のⅡ層中で検出された。

本建物跡は，梁間1間×桁行1間の建物である。建物跡の規模は，梁間206cm，桁行362.5cmで，柱穴の大きさは，長径45.7cm，短径39.5cm，深さ59.5cmの平均を測る。内角はおよそ $\angle P_1 P_4 P_3$ は $93^\circ$ ， $\angle P_1 P_3 P_2$ は $90^\circ$ ， $\angle P_3 P_2 P_1$ は $93.5^\circ$ ， $P_2 P_1 P_4$ は $83^\circ$ である。主軸の方位は $N-92^\circ-E$ をとる。この建物は東側へ歪な長方形を呈する。

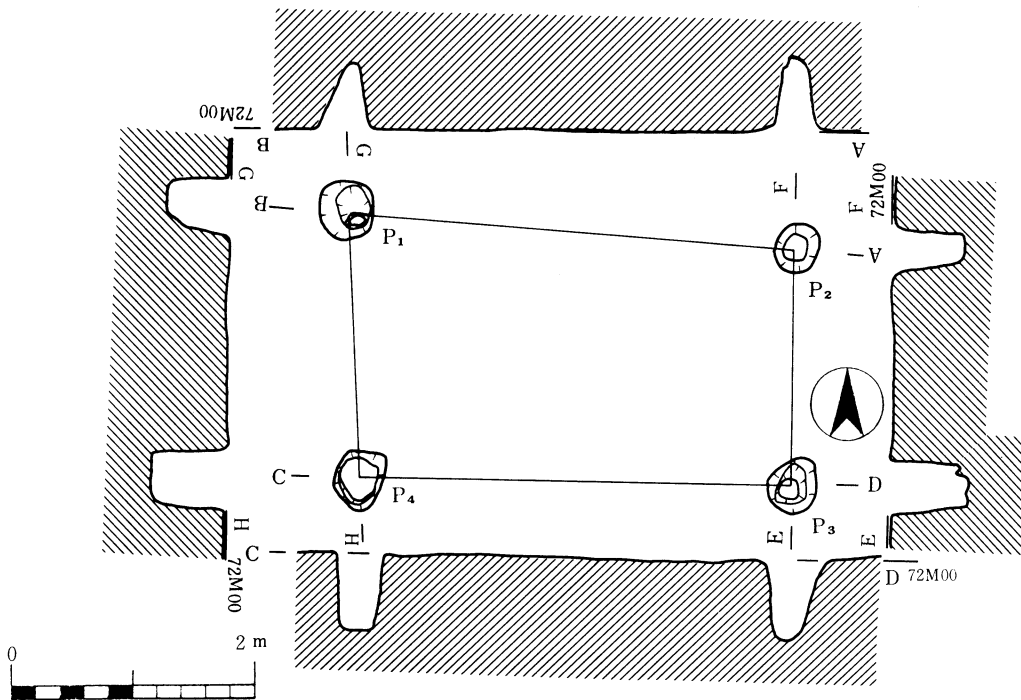


Fig. 111 11号掘立柱建物跡実測図

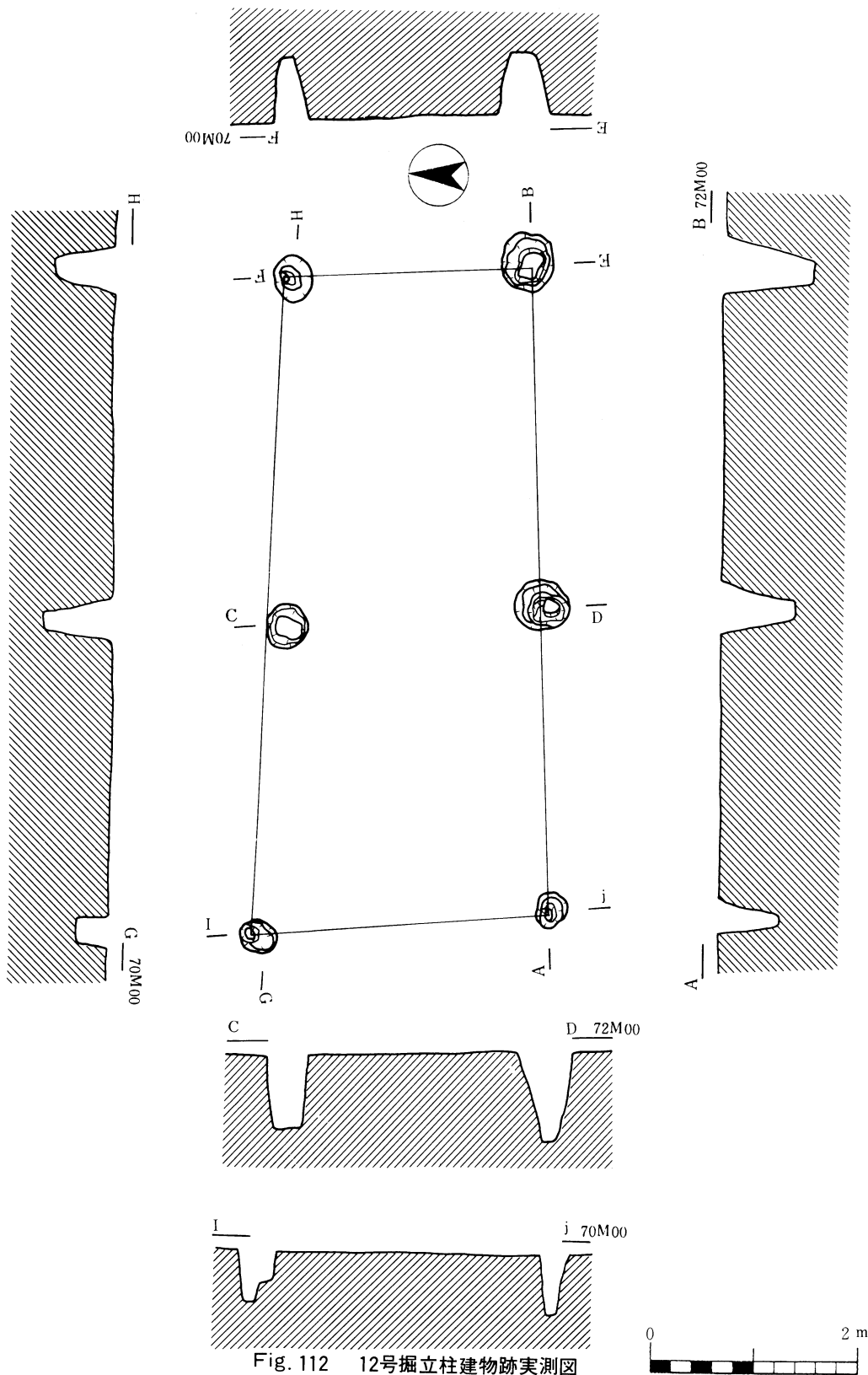


Fig. 112 12号掘立柱建物跡実測図

Tab. 36 11号掘立柱建物跡の一覧表

※SB：掘立柱建物跡 P：柱穴 単位：cm

SB	主軸方位	梁間間	桁行間	出土区	P	長軸×短軸×深さ	備考
11	N-92°-E	W-1間 192	N-1間 370	F-19	1	50×46×50	・2層面の検出である。
		E-1間 220	S-1間 355		2	40×34×60	
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	45×40×66		
	P <sub>1</sub> -P <sub>4</sub> :220 P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :192		P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :370 P <sub>4</sub> -P <sub>3</sub> :355	4	48×38×62		

## ⑫ 12号掘立柱建物跡 (Fig. 112, PL. 26)

本遺跡の発掘調査区の東側端部に位置する。2号土壇との最短距離は、略西0.8mで、25号住居跡まで、略北東約6.5mを測り、E-23・24区のⅡ層中で検出された。

本建物跡は、梁間1間×桁行2間の建物である。建物跡の規模は、梁間265cm、桁行625cmで、柱穴の大きさは、長径44.3cm、短径38.1cm、深さ72cmの平均を測る。主軸の方位はN-89.5°-Eをとる。P<sub>2</sub>は略南へ22cmずれている。内角はおよそ∠P<sub>1</sub>P<sub>6</sub>P<sub>5</sub>P<sub>4</sub>は、92°、∠P<sub>6</sub>P<sub>5</sub>P<sub>4</sub>P<sub>3</sub>は89.5°、∠P<sub>1</sub>P<sub>3</sub>P<sub>2</sub>P<sub>1</sub>は95°、∠P<sub>3</sub>P<sub>2</sub>P<sub>1</sub>P<sub>6</sub>は、84°を測り、全体に東側に歪な長方形を呈する。

Tab. 37 12号掘立柱建物跡の一覧表

※SB：掘立柱建物跡 P：柱穴 単位：cm

SB	主軸方位	梁間間	桁行間	出土区	P	長軸×短軸×深さ	備考
12	N-89.5°-E	W-1間 295	N-2間 630	E-23・24	1	38×30×70	・Ⅱ層中で一部Ⅲ層上面で検出する。
		E-1間 235	S-2間 620		2	42×38×68	
梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	44×35×60		
	P <sub>1</sub> -P <sub>6</sub> :295	P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :295 P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :335	P <sub>1</sub> -P <sub>3</sub> :630	4	56×50×90		
	P <sub>3</sub> -P <sub>4</sub> :235	P <sub>6</sub> -P <sub>5</sub> :298 P <sub>5</sub> -P <sub>4</sub> :322		5	52×48×84		
			P <sub>6</sub> -P <sub>4</sub> :620	6	34×28×60		

## ⑬ 13号掘立柱建物跡 (Fig. 113, PL. 27)

本遺跡の住居跡群西側端部に位置する。1号住居跡との最短距離は、西約1.15m、4号住居跡まで、略北東約3.15m、5号住居跡まで、略南西約6.6mを測り、C・D-7区のⅢ層上面（遺構の約半分はⅡ層中）で検出された。

本建物跡は、四本の掘立柱の中央に「土壇」を伴う建物である。梁間1間×桁行1間の建物に、178×126cm、深さ65cmの略円形状の土壇をもつ。建物跡の規模は、梁間234cm、桁行412cmで、柱穴の大きさは、長径57.7cm、短径52.5cm、深さ98.2cmの平均を測る。内角はおよそ∠P<sub>3</sub>P<sub>2</sub>P<sub>1</sub>は88.5°、∠P<sub>2</sub>P<sub>1</sub>P<sub>4</sub>は88°、∠P<sub>1</sub>P<sub>4</sub>P<sub>3</sub>は91.5°、∠P<sub>4</sub>P<sub>3</sub>P<sub>1</sub>は93.5°である。遺構内のほぼ中央部に略円形状の土壇が検出され、底面は貼り付けによる調整である。4本の柱穴には、



工具による掘込の痕跡の稜線が遺存していた。土壇や柱穴の埋土中には、多量の炭化物の微片や土器破片が出土した。土器小破片につき図化は困難である。

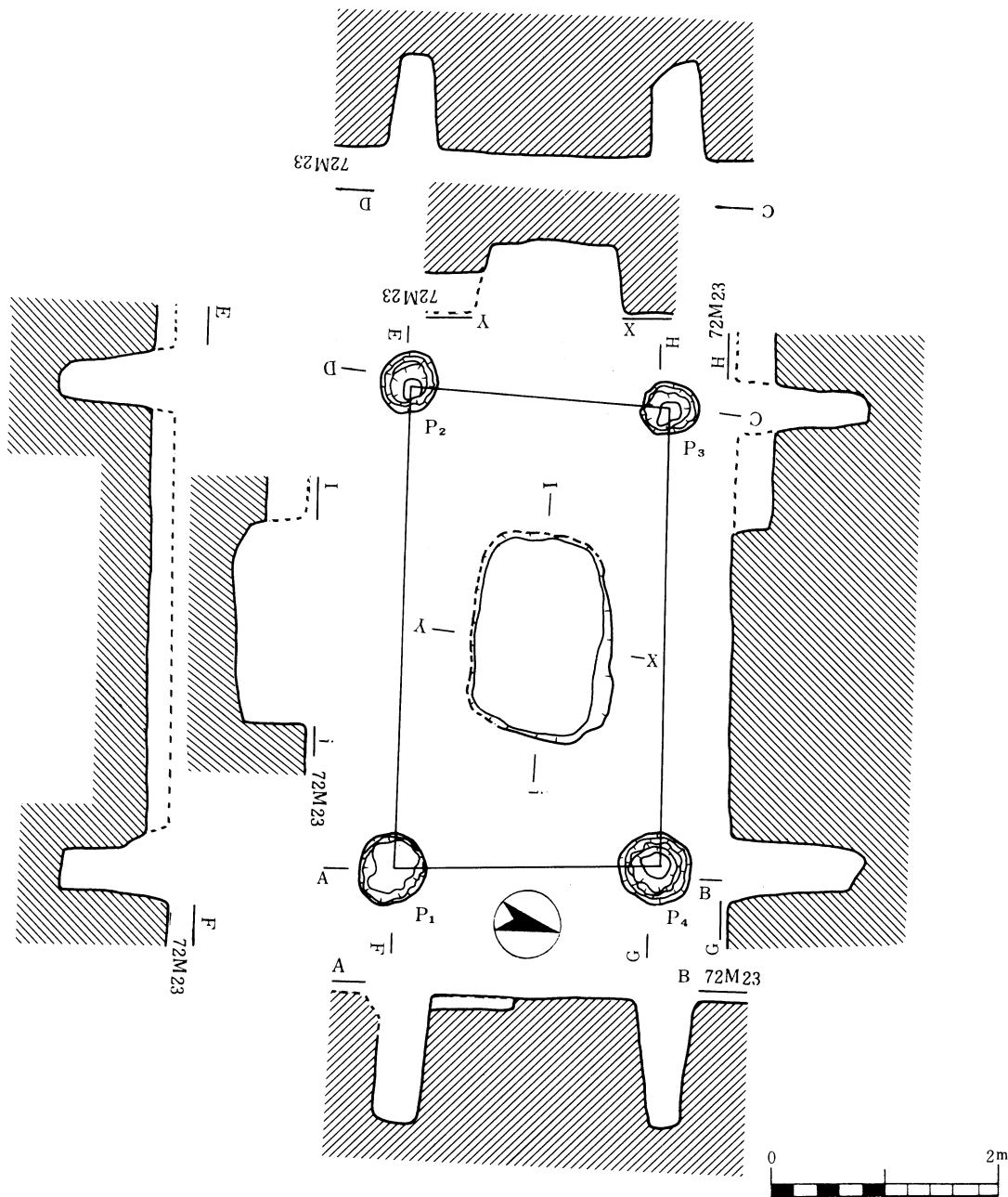


Fig. 113 13号掘立柱建物跡実測図

Tab. 38 13号掘立柱建物跡の一覧表

※SB:掘立柱建物 P:柱穴 単位:cm

SB	主軸方位	梁間間	桁行間	出土区	P	長軸×短軸×深さ	備考
13	N-80°-E	W-1間 232	N-1間 400	C・D-17	1	64×58×113	・土壇をもつ ・Ⅲ層上面 (一部Ⅱ層 中)で検出 する。
		E-1間 236	S-1間 424		2	52×48×82	
	梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	52×43×85	
	P <sub>1</sub> -P <sub>4</sub> :236		P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :424	4	63×61×113		
		P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :232		P <sub>4</sub> -P <sub>3</sub> :400		土壇(長軸×短軸×深さ) 178×126×65	

## ⑭ 14号掘立柱建物跡 (Fig. 39)

18号住居跡との最短距離は、略南1.7cmで、17号住居跡まで、略南東4.1cm、17号住居跡まで、略西5.5mを測り、B・C-20区・C-21区のⅡ層中(一部Ⅲ層上面)で検出された。

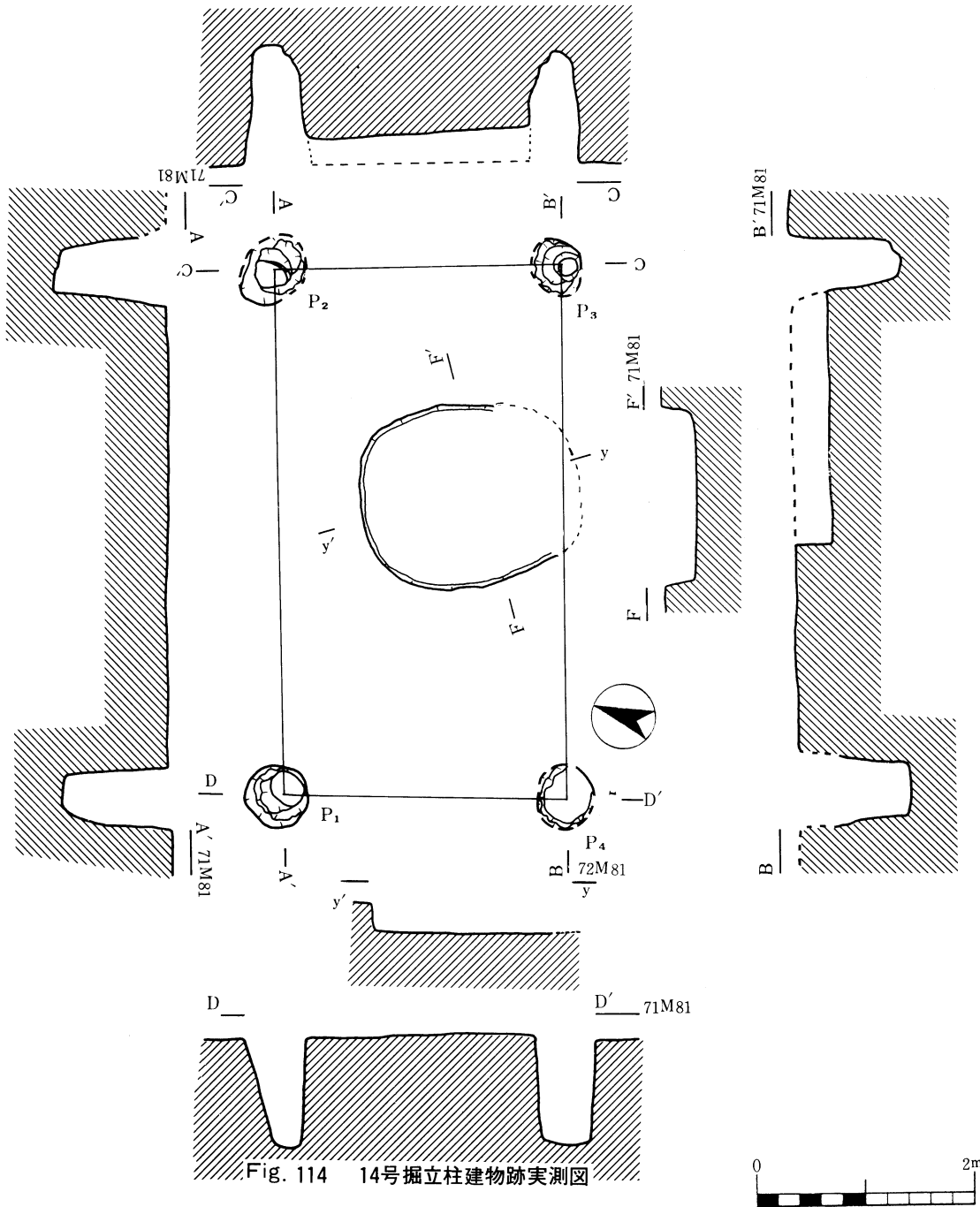
本建物跡は、四本の掘立柱の中央に「土壇」を伴う建物である。梁間1間×桁行1間の建物に、205×165cm、深さ32cmの略円形状の土壇をもつ。建物の規模は、梁間265cm、桁行625cmで、柱穴の大きさは、長径59.5cm、短径51.0cm、深さ102の平均を測る。内角はおおよそ $\angle P_1 P_4 P_3$ は88.5°、 $\angle P_1 P_3 P_2$ は89.5°、 $\angle P_3 P_2 P_{11}$ は89.5°、 $\angle P_3 P_2 P_1$ は89.5°、 $\angle P_2 P_1 P_4$ は92°である。遺構内のほぼ中央部からP<sub>3</sub>-P<sub>1</sub>線にかけて略円形状の土壇が検出され、床面はⅣ層上面となる。柱穴はP<sub>1</sub>がⅡ層中(P<sub>2</sub>は一部)の検出で、P<sub>4</sub>は17号住居跡から続く新しい溝により上部は削平され、溝底面は残存する。各柱穴には、それぞれ工具による掘込の痕跡の稜線を認めた。土壇内には、大型甕形土器破片、棒状炭化物、打製石鏃が出土した。土器破片は器内面を上位にした破片が多く、棒状炭化物が若干上位に見られ、炭化物は径約5~8cm程度大きい棒状炭化物が西側寄りに、北西から南西にかけて多く検出した。柱穴P<sub>4</sub>・P<sub>3</sub>の埋土中から土器破片や軽石などが出土したが、図化は困難である。

本建物跡の土壇内の棒状炭化物や土器の出土状況からみれば、火災による可能性が考えられる。

Tab. 39 14号掘立柱建物跡の一覧表

※SB:掘立柱建物跡 P:柱穴 単位:cm

SB	主軸方位	梁間間	桁行間	出土区	P	長軸×短軸×深さ	備考
14	N-67°-E	W-1間 265	N-1間 484	C-20・21	1	60×54×100	・Ⅱ層中(一部 Ⅲ層上面)の 検出である。 ・土壇をもつ。 ・大型甕形土器 及び棒状炭化 物の出土。
		E-1間 273	S-1間 484		2	70×56×105	
	梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	3	50×44×102	
	P <sub>1</sub> -P <sub>4</sub> :273		P <sub>1</sub> -P <sub>2</sub> :484	4	58×50×102		
		P <sub>2</sub> -P <sub>3</sub> :265		P <sub>4</sub> -P <sub>3</sub> :484		土壇(長軸×短軸×深さ) 205×165×32	



土器 (Fig. 115)

Tab. 40 14号掘立柱建物跡 (土坑内) 出土土器一覧表

①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
619		大甕 口縁部 胴部	①(46.7) ③(44.7)	明茶褐色	Q P <sub>L</sub> H	内湾する口縁部で、逆し字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁部上面は凹み短かい。口縁部外側直下には、断面台形状貼付突帯を廻らす。突面はわずかに凹む。煤の付着を認める。	外面は横位及び斜位刷毛などで及び荒削りを認める。内面は指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。

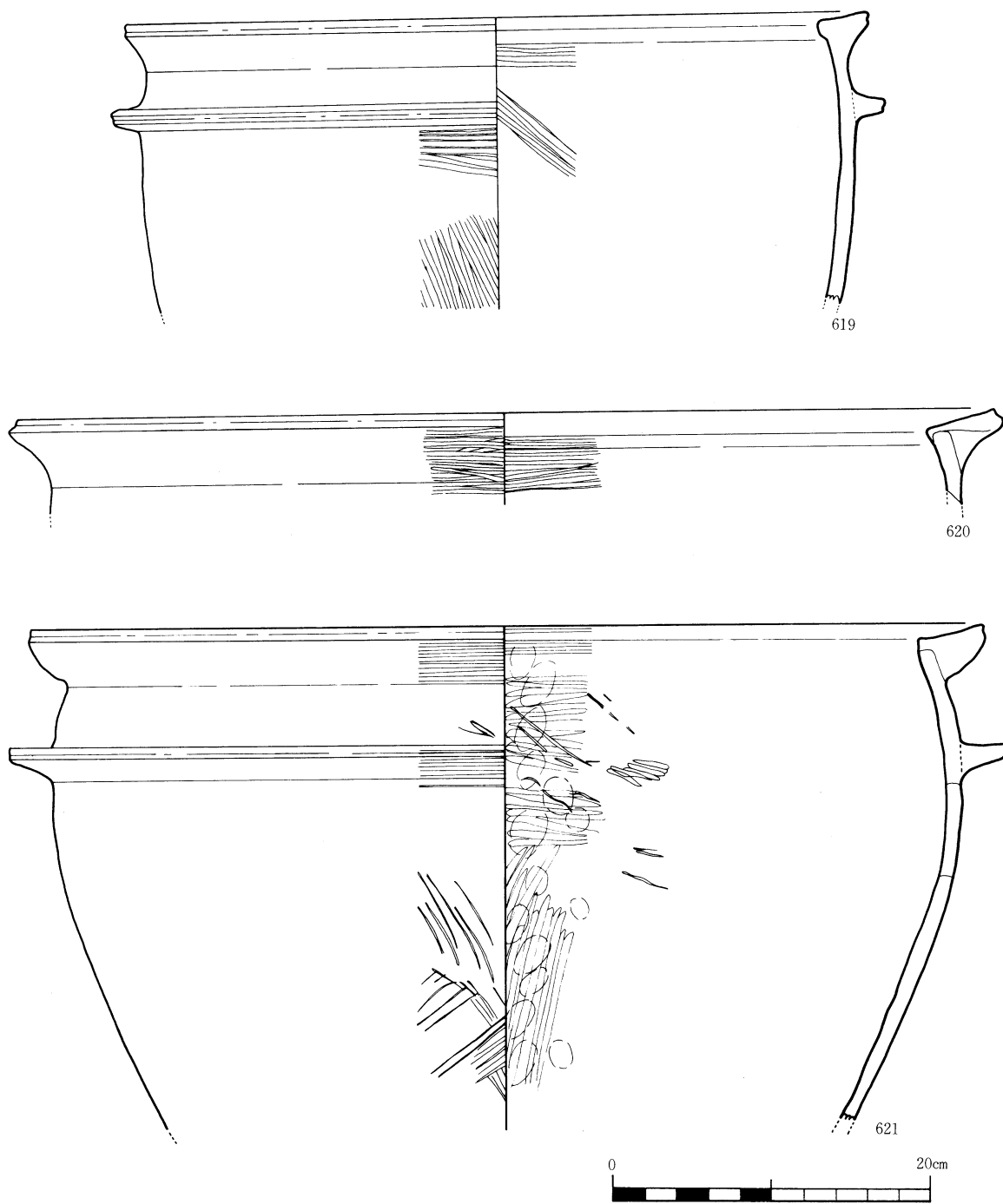


Fig. 115 14号掘立柱建物跡(土坑内)出土土器実測図

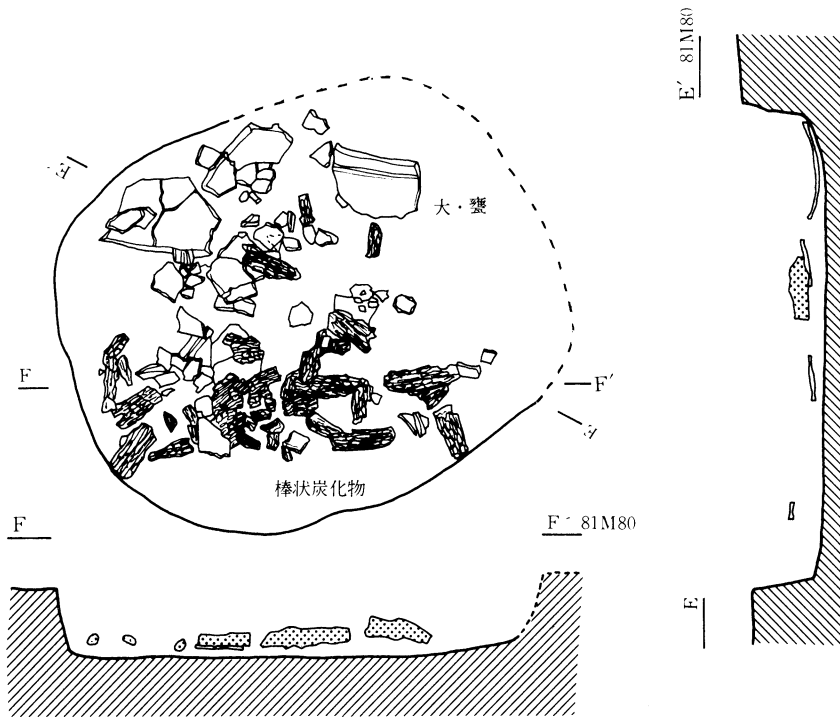


Fig.116 14号掘立柱建物跡(土坑内)遺物出土状態

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
620		大甕 口縁部	①(62.4)	茶褐色	Q P L M	内湾する口縁部で、逆し字状に近く外反し、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は横位、内面は横位、斜位の刷毛などで調整である。
621		大・甕 口縁部 胴部	①(60.2) ③(56.4)	明褐色	Q P L H	外方へ直線的に立ち上がり、胴部が張り、大きく内湾する口縁部で、逆し字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には稜を作り出す。口縁部外側直下には、細長い台形状貼付突帯を廻らす。突帯端面は平坦面を作る。煤の付着を認める。	外面は横位、斜位の篋削りで、内面は指頭圧調整後、横位及び斜位の篋削りを認める。

石器 (Fig. 117, PL. 35)

本建物跡の土坑には、埋土中より打製石鏃が出土した。618は、硬質破岩を石器の素材として用いた打製石鏃で、最大長1.9cm、最大幅1.5cm、最大厚0.3cm、重さ0.8gを測る。基部は凹み二等辺三角形状を呈する。表面は交互剥離により調整され、裏面は剥片をそのまま利用し、周縁にわずかな剥離が加えてあることから剥片鏃である。

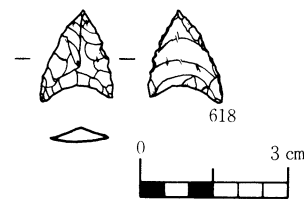


Fig. 117 14号掘立柱建物跡(土坑内)出土石器実測図

第4節 土坑 (Fig. 118~126, PL. 27)

土坑は、調査区西側C-5区と住居跡群(約180m)の東側寄りD-6区, D-19区, D-21区・D・E-23区に略円形状の土坑4基が検出された。

① 1号土坑 (Fig. 118~120, PL. 27)

22号住居跡との最短距離は、略北2.0mで、23号住居跡まで、略北西3.5m、26号住居跡まで、略北東10.04mを測り、D-19区の北側ほぼ中央のII層中から検出された。

本土坑は、主軸N-104°-Eをとる。長軸長165cm、短軸長130cm、深さ62cmを測る略円形状で、序々に深くなっている。埋土中より甕形土器、壺形土器、鉢形土器などの破片や樹皮布叩石 (Bark cloth beater) が出土した。

注1. 国分直一 現地指導の中で文化財調査報告による。

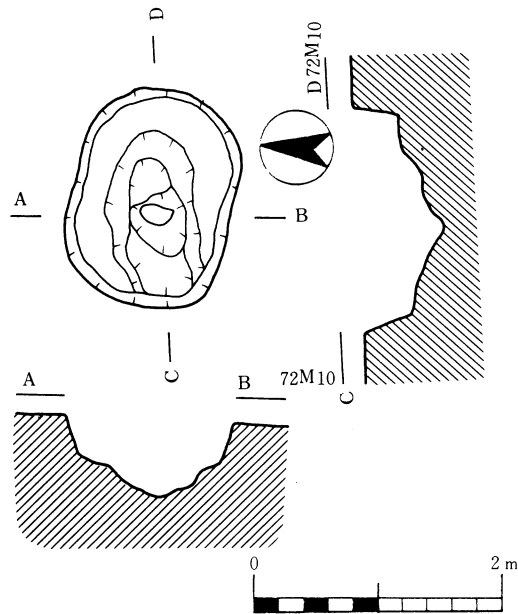


Fig.118 1号土坑実測図

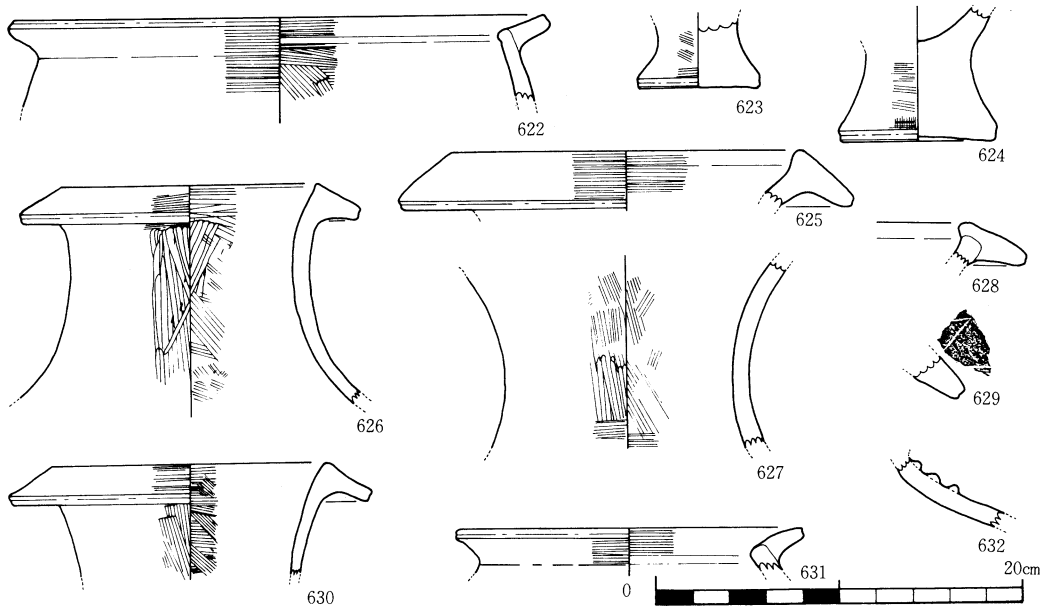


Fig. 119 1号土坑内出土土器実測図

土器 (Fig. 119)

Tab. 41 1号土坑内出土土器一覧表

①口径②器高③胴部最大径④底部径 ( ) 復元径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
622		甕 口縁部	①(29.8)	明褐色	Q P L M	内湾すると思われる口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作る。煤の付着を認める。	外面は横位、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
623		〃	④(6.8)	茶褐色	Q P L H M	充実した脚台である。欠損しているが、裾は短かく、鋭角的で、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	指頭圧調整後横位及び斜位の刷毛などで調整である。
624		〃	④8.8	明褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は長く鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	横位及び縦位の刷毛などで調整である。
625		壺 口縁部	①(24.8)	明茶褐色	Q P L M	肩部より立ち上がりながらわずかに外反し、口縁部は垂れ下り気味に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
626		壺 口縁部 肩部	①(18.6)	暗茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は横位、斜位、内面は横位、斜位の刷毛などで調整で、外面ともに一部艶削りを認める。
627		壺 口縁部 付近 頸部		明茶褐色	Q P L M	肩部上位より口縁部下位付近の部位である。壺の頸部である。肩部より立ち上がりながら外反する口縁部を作り出すと思われる。	内・外面ともに横位及び斜位の刷毛などで調整で、艶削りを認める。
628		壺 口縁部		暗茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	外面は横位の刷毛などで、内面は艶削りを認める。
629		〃		黒褐色	Q P L M	口縁部の大半を欠損する。垂れ下り気味の口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部上面には鋸歯文を施す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
630		〃	①(19.8)	明褐色	Q P L M H	外方へ開きながら、垂れ下りながら外反し、口縁部端面より凹んで、凹線状を呈している。	内・外面ともに横位及び斜位の刷毛などで調整である。
631		鉢 口縁部	①(19.0)	明褐色	Q P L M	破片であるが、大きく内傾する口縁部と思われる。口縁部はくの字状に外反し、口縁部端面は凹んでいる。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
632		壺 肩部		明茶褐色	Q P L M	壺の肩部付近で、現存で三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位及び斜位の刷毛などで調整で、内面は磨滅しているため不明である。

石器 (Fig. 120, PL. 36)

本土坑内出土の石器は、細粒の砂岩を用いた樹皮布叩石である。633は最大長12.3cm, 最大幅5.5cm, 最大厚3.8cm, 重さ220gを測る。先端部は欠損し、両面は平坦面を作り出す。両側面は敲打により凹凸状の敲打痕を認める。基部付近には握手部分を認め、研磨を認める。部分的に研磨痕が観察される。

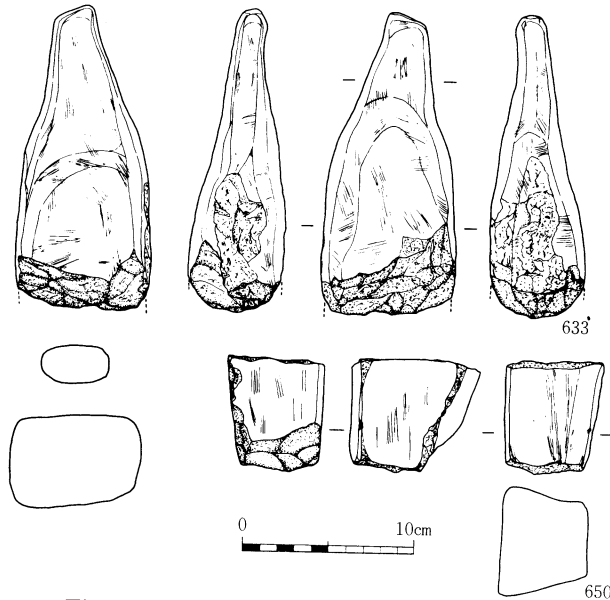


Fig. 120 1・2号土坑内石器実測図

②2号土坑 (Fig. 121, PL. 27)

12号掘立柱建物跡との最短距離は略東0.7mで、27号住居跡まで略西16.3m, 11号掘立柱建物跡まで略北東17.5mを測り、D・E-23区のはほぼ中央部付近のⅡ層中で検出された。

本土坑は、主軸N-103°-Eをとる。長軸長205cm, 短軸長130cm, 深さ27cmを測る略円形状で床面はほぼ平坦面を呈する。埋土中より大型甕形土器, 甕形土器, 壺形土器, 鉢形土器の破片が出土した。

土器 (Fig. 22.23)

Tab. 42 2号土坑内出土遺物一覧表

①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
634		甕 口縁部	①(27.4)	黄褐色	Q P L H	直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着をめる。	外面は横位, 縦位, 内面は斜位の刷毛などで調整である。



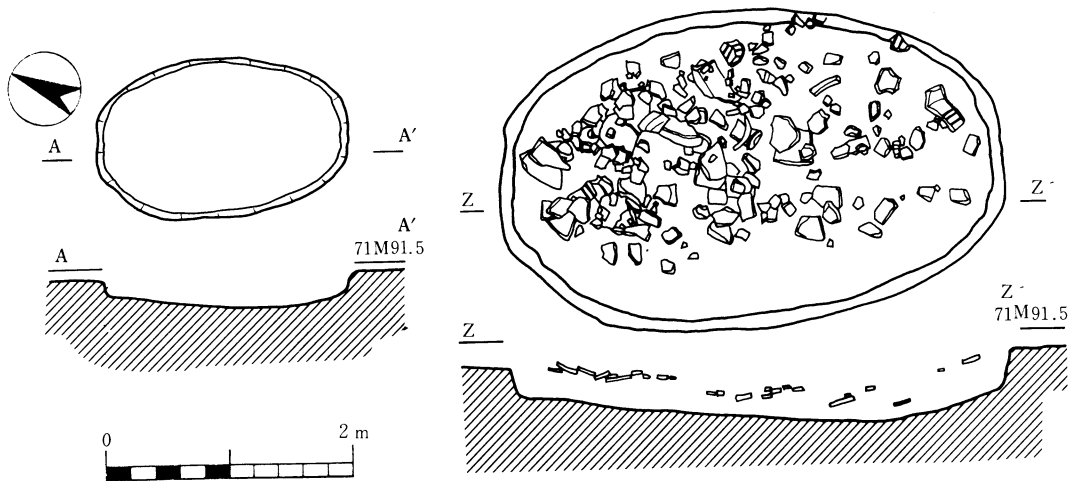


Fig. 121 2号土坑実測図及び土坑内遺物出土状態

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
635		甕 口縁部	①(35.4)	黄茶褐色	Q P L	直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出している。口縁部上面中央部は若干凹む。	磨滅しているため、鮮明さを欠くが、外面は横位、斜位で、内面は横位の刷毛などで調整である。
636		甕 口縁部 胴部	①(37.2)	暗茶褐色	Q P L M	外方へ開きながら立ち上がり、内湾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	外面は横位、斜位、内面は鮮明な横位及び斜位の刷毛などで調整である。
637		甕 口縁部		灰褐色	Q P L H	逆L字状に外反する口縁部である。口縁部の上面及び端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。煤の付着を認める。	外面は横位の刷毛などで調整で、内面は磨滅しているため調整痕は不明である。
638		〃		茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
639		甕 底部	④7.8	褐色	Q P L H M	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的であるが、広がらず、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	横位及び斜位の刷毛などで調整を認めるものの剥落が著しい。
640		〃	④(7.0)	明茶褐色	Q P L H	充実した脚台である。裾は短かく、鋭角的であるが、広がらず、裾の端面は凹んで凹線状を呈する。底面中央部は若干凹む。一部は欠損する。	指頭圧調整後横位及び縦位の刷毛などで調整である。
641		〃	④(9.0)	褐色	Q P L M	充実した脚台である。裾は長く、鋭角的であるが、広がらず、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。一部は欠損する。床面は若干の凹みを認める。	横位、斜位、縦位の刷毛などで調整がなされ、一部に指頭圧調整痕を認める。
642		壺 口縁部	①(27.0)	茶褐色	Q P L O b M	頭部でしまり大きく外反する口縁部である。垂れ下り気味の口縁部で、口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作る。現存で二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面は横位及び斜位の刷毛などで調整で、外面は一部磨きだが、内面は一部指頭圧調整痕を認める。

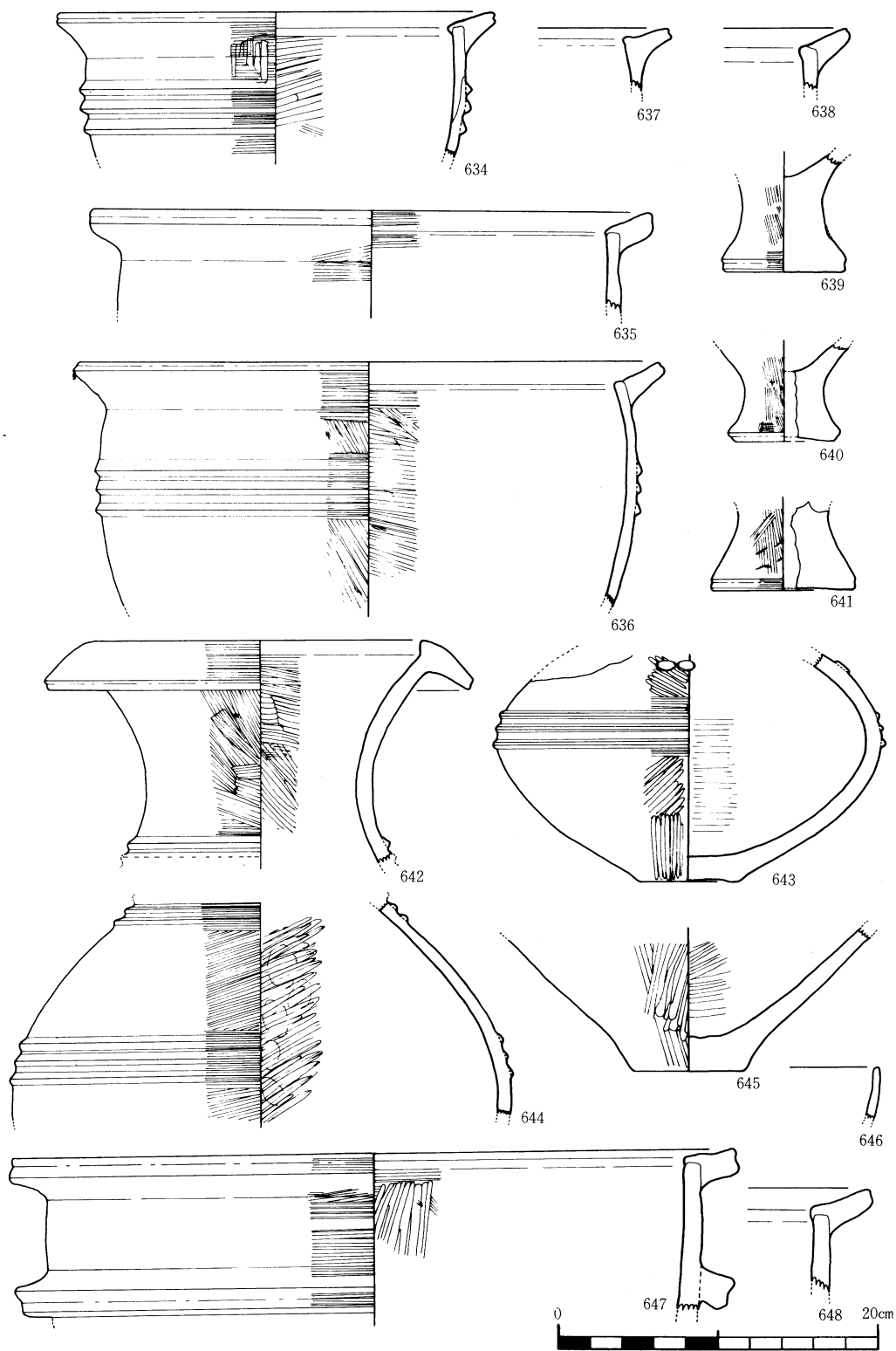


Fig. 122 2号土坑内出土土器实测图(1)

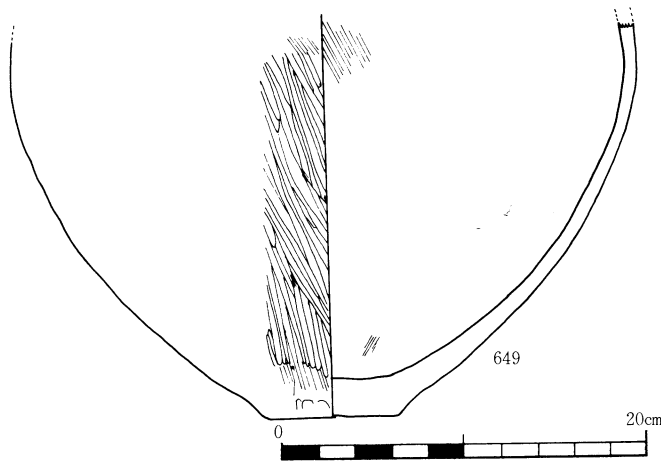


Fig. 123 2号土坑内出土土器実測図(2)

石器 (Fig. 120, PL. 36)  
 本土坑内出土の石器には、砂岩を石器の素材として用いた砥石である。650は最大長4.7cm, 最大幅5.3cm, 最大厚4.5cm, 重さ129gを測り、欠損しているが、四角錐状を呈し、3面は砥石として使用し、一部は大きく凹んでいる。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
643		壺 肩部 ┆ 底部	③(24.1) ④(6.4)	暗茶褐色	Q P L M H	算盤球形に近い胴部で、底部は平底である。胴部には、三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。胴部上位には、現存で2か所に2個ずつの円形浮文を施す。この円形浮文は、おそらく4か所に施したものと考えられる。	外面は横位の刷毛などで、斜位及び縦位の磨きを認めるが、磨減が著しい。内面は横位の刷毛などで、底部底面には指頭圧調整痕が残る。
644		壺 肩部 ┆ 胴部	③(36.4)	暗茶褐色	Q P L M	おそらく球形に近い器体になると思われる胴部に、三条の断面三角屈形貼付突帯を廻らす。肩部上位には、現存で二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位及び斜位の刷毛などで調整で、内面は指頭圧調整を残し斜位の刷毛などで調整である。
645		壺 底部	④7.0	暗茶褐色	Q P L M	平底の底部である。底部より外方へ立ち上がる器形と考えられる。	外面は斜位の刷毛などで調整で、内面は横位及び斜位などで調整である。
646		鉢 口縁部		褐色	Q P L	直口気味の口縁部で、口唇部は丸味を帯びる。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
647		大甕 口縁部	①(45.8)	茶褐色	Q P L M	直線的に立ち上がる口縁部で、逆し字状に外反する。口縁端面は凹む。口縁内側には、わずかに張り出しを作り出す。口縁部は短く、口縁部外面には、やや下方気味の短い突帯を廻らす。突帯端面は凹む。	内・外面ともに磨減が著しいが、外面は横位などで調整で、一部磨削りを認める。内面は横位などで、一部磨削きが見られるが、鮮明さに欠ける。
648		〃		茶褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部で、口縁部端面はわずかに凹む。口縁部内側にはわずかな張り出しを作り出す。	内・外面とも横位刷毛などで調整で、一部内側には指頭圧調整痕を残す。
649		壺 胴部 ┆ 底部	③(34.2) ④7.2	暗茶褐色	Q P L M	おそらく球形に近い器体になると思われる平底である。	外面は磨削りを認め、内面は磨減しているが、部分的に斜位の刷毛などで調整である。

### 3号土坑 (Fig. 124)

27号住居跡との最短距離まで、略南2.3mで、24号住居跡まで、略南西7.3m、14号掘立柱建物跡まで、略9.7mを測り、D-21区のⅡ層中から検出された。

本土坑は、主軸N-103°-Eをとる。長軸長124cm、短軸長115cm、深さ43cmを測る。その形状は略円形状を呈し、略南西部の柱穴状の掘込が土坑を切った状態で検出された。

本土坑内の出土遺物は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器などの破片が埋土中より出土した。壺形土器は口縁部上面に鋸歯文を施したものと瀬戸内系の影響を受けたものと思われる口縁部が出土した。

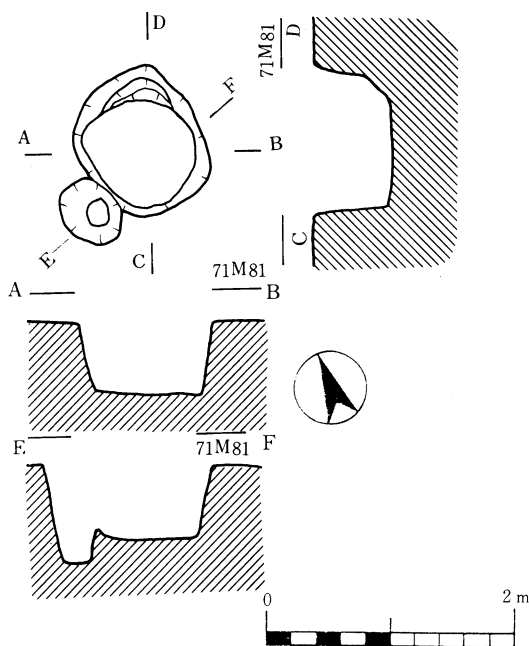


Fig.124 3号土坑実測図

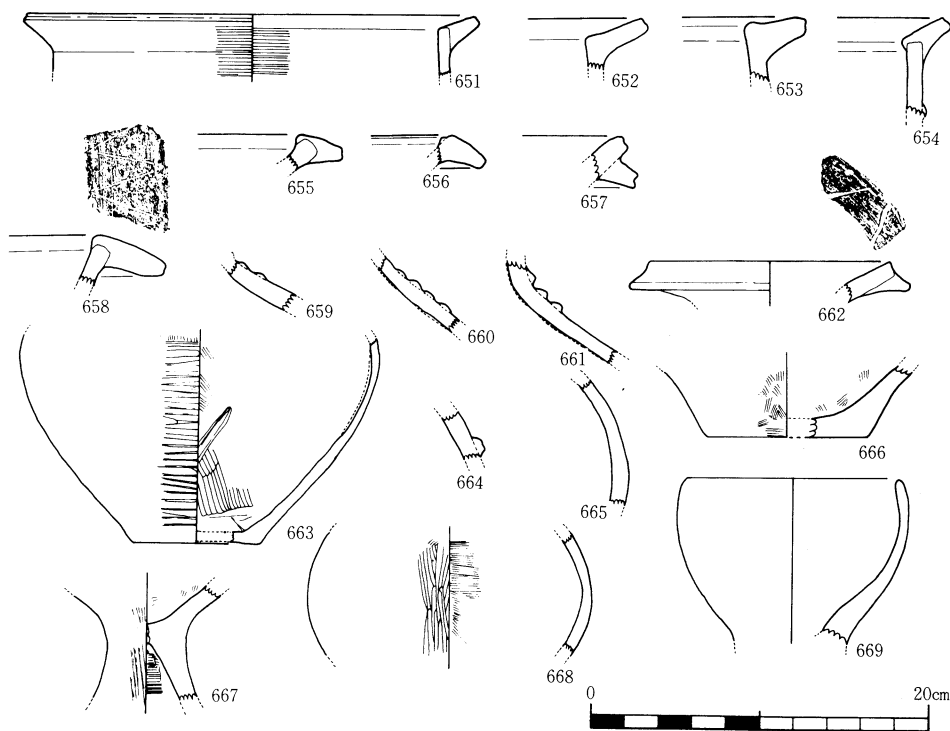


Fig.125 3号土坑内出土土器実測図

土器 (Fig. 125)

Tab. 43 3号土坑内出土遺物一覧表

注) 法量の単位cm ①高径②器高③胴部最大径④底部 ( ) 復原径

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
651		甕 口縁部	①(27.0)	黄茶褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部はわずかに凹む。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整が認められる。
652		甕 口縁部		暗褐色	Q P L H	くの字状に外反する口縁部である。口縁部端面はわずかに凹み、口縁上面は幅広い。煤の付着を認める。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整が認められる。
653		甕 口縁部		暗茶褐色	Q P L M H	逆し字状に外反する口縁部である。口縁端面は凹む。口縁内側にはわずかな張り出しを作る。口縁上面は幅広く、内側寄りが凹む。煤の付着を認める。	内・外面とも横位の刷毛などで調整が認められる。
654		甕 口縁部		暗褐色	Q P L M	くの字状に外反する口縁部である。口縁端面は凹む、口縁内側には張り出しを作る。現存で一条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着を認める。	内・外面は横位の刷毛などで調整が認められる。内面は指頭圧調整痕を残す。
655		壺 口縁部		暗褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁端面は凹む。口縁内側には張り出しを作る。煤の付着を認める。	内・外面とも横位などで調整である。
656		壺 口縁部		茶褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反する口縁部である。口縁端面はほとんど欠損するが、わずかに凹む。口縁内側には断面三角形貼付突帯を廻らす。	内・外面とも横位刷毛などで調整である。
657		壺 口縁部		明褐色	Q P L M	口縁部端面は凹む。口縁端面外側直下に突帯を廻らし二又状の口縁部で突帯端面は凹む。	内・外面とも横位の刷毛などで調整である。
658		壺 口縁部		明褐色	Q P L M	垂れ下り気味に外反(への字状)する。口縁部である。口縁端面は凹む。口縁内側には張り出しを作る。口縁上面は幅広く、鋸歯文を施している。	内・外面とも横位の刷毛などで調整である。
659		壺 肩部		暗茶褐色	Q P L M	肩部に現存で二条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は横位の刷毛などで調整で、内面は剥落しており不明である。
660		壺 肩部		暗茶褐色	Q P L M	肩部に現存で四条の断面三角形貼付突帯を廻らす。657と同一個体か?	外面は横位の刷毛などで、内面は剥落しており不明である。

番号	図版番号	器種・器部	法量	色調	胎土	形態の特徴、その他	手法の特徴
661		壺 肩部		暗褐色	Q P L H	肩部に現存で三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	外面は磨減しているが、うすい横位の刷毛などで調整で、内面は剥落して不明である。
662		壺 口縁部	①(16.6)	明灰褐色	Q P L	口縁部は大きく外反し、垂れ下り気味で口縁上端は大きく凹み、現存で二か所に沈線を施す。	内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。指紋の付着を認める。
663		壺 底部 ↓ 胴部	③(21.2)	赤茶褐色	Q P L	平底で、薄手の器体である。	外面は横位は篋削りで、内面は一部剥落や磨減を認めるが、指頭圧調整痕が斜位のナデ調整痕を認める。
664		壺 胴部		暗茶褐色	Q P L M	台形状の貼付突帯を廻らし、突帯端面は凹む。	外面は横位の刷毛などで内面、磨減しており不明
665		壺 胴部		暗茶褐色	Q P L M	胴部付近と思われる。	内・外面ともに斜位の刷毛などで調整である。
666		壺 底部		暗茶褐色	Q P L H M	平底の底部である。	外面は横位及び斜位の刷毛などで、内面は剥落や磨減を認めるが、一部に斜位などで調整を認める。
667		高環 脚部		茶褐色	Q P L H	脚部と環部との接合部位である。	外面は、縦位の刷毛などで、内面は、横位及び斜位などで調整である。
668		壺 胴部	③(16.8)	明褐色	Q P L H	球形状を呈すると思われる壺の胴部付近で、薄手な器壁である。	外面は篋削りを認め、内面は指頭圧調整を残す。横位及び斜位の刷毛などで調整である。
669		鉢 口縁部 ↓ 胴部	①(12.6) ③(13.6)	明褐色	Q P L H	脚台付の鉢と思われ半球形状を呈する器形で、口縁部端面は丸味を帯びる。	外面は剥落や磨減が著しくその一部に縦位及び斜位などで、内面は磨減が著しいが、指頭圧調整痕を認める。

④ 4号土坑 (Fig. 126)

1号掘立柱建物跡との最短距離は、略南東約10.0mで、1号住居跡まで、略西14.6mを測り、C-5区の南西隅のⅢ層上面で検出された。

本土坑は、主軸N-84.5°-Eをとる。長軸長89.0cm、短軸長54.0cm、検出面での深さ12.0cmを測り略円形状を呈する。

なお、本土坑内には、大きさが約10~27cm大の軽石18個が埋土中より出土した。

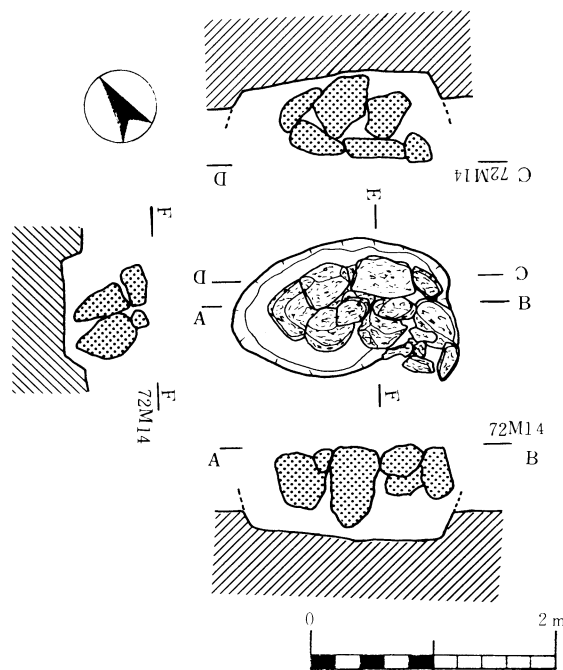


Fig. 126 4号実測図

以上、1号土坑から4号土坑まで概略を述べたが、土坑内出土の遺物は、住居跡内出土と同様なもので、2号土坑より多く出土した。4号土坑よりは、軽石の集石のみで、他遺物はみられない。3号土坑出土の土器のうち、27号住居跡出土の土器との接合がみられた。

甕形土器は、口縁部破片が多く、充実した脚台をもつ底部である。1号土坑の中で、623・624は充実した脚台である。2号土坑の中で、634・635は、直口する口縁部で、くの字状に外反する。639~641は、充実した脚台である。3号土坑の中で、639~641は、口縁部破片である。大型甕形土器は、2号土坑にみられ、647は直口気味の口縁部で逆L字状に外反し、断面台形状突帯をもつ。壺形土器は、1号土坑の中で、625~630は、口縁部破片や口縁部から頸部までの破片で、629は鋸歯文をもつ。632は肩部付近である。2号土坑の中で、624~645は、口縁部から頸部、頸部から胴部、胴部から底部までのもので、643は円形浮文をもつものである。3号土坑の中で、655~658、622は口縁部破片で、656は口縁部内面に突帯をもち、657は二又状口縁である。658は鋸歯文をもつ口縁部破片で、622は口縁部破片で、移入土器である。659~666は、肩部、胴部破片、底部である。664は、断面台形状貼付突帯をもつ。鉢形土器は、1号土坑の中で、631はくの字状に外反する口縁部である。2号土坑の中で、646は口縁部破片で、口縁部は丸味をもつ。3号土坑の中で、669は脚台をもつものと思われる。高環形土器は、3号土坑の中で、667は環部と脚部との接合部である。

石器の中で、663は、1号土坑内埋土上位より出土した樹皮布叩石で、650は2号土坑内より出土した砥石である。

## 第5節 溝状遺構 (Fig. 127, PL. 28)

溝状遺構は、西区と中央区に検出した。西区溝状遺構はU字形を呈し、上面は削平され、上幅はのびるものと思われる。中央区溝状遺構は、本遺跡の遺構検出面のほぼ中央部付近で、検出遺構を相分する格好を呈する。溝は不定形で、包含層及び埋土が黒色のため土層観察の畦を残して掘り下げを実施した。その結果、溝Ⅰと溝Ⅱが認められ重複していた。溝Ⅰは底面が硬く踏みしめられたような痕跡を確認した。その遺存する形状は不定形で浅い溝である。

### 1. 西区溝状遺構 (Fig. 127, PL. 28)

本溝状遺構は、発掘調査の西区で、台地縁辺部の北西端部北側に位置する。E-1区からE-2区、E・F-3区、F-5区を略東西に走る溝で、略N-20.5°-Eをとる。Ⅲ層上面の検出で路線外へのび、E-2区北東部付近で西と東へ流下する。東側の上面は90~140cm、下幅は27~55cm、深さ40~47cmで、底面は東へ約35cmの比高差で緩傾斜し、E-3区からは西側端部へ急傾斜する。西側は上幅130~260cm、下幅30~70cmを測り、深さは雑木、古木の樹根、竹やぶ化しているため攪乱を受け、傾斜がかなりあるためにⅨ層付近に底面をもち、場所により若干の相違をみたが約100~160cmを測り、E-2区北東部付近との比高差は約170cmを数え、急傾斜しながら崖端部へと続き、現在はシラス採取地のため懸崖となっている。全長24mを測る。E-2・3区は台地縁辺部を通る基盤整備以前の農道敷により切られ、農道面は硬く締まり、溝埋土中にもその痕跡を認めた。埋土は土層断面図に示す如く、底面はV<sub>b</sub>層赤褐色パミス層（アカホヤ）付近まで掘り込まれ、黒褐色土にアカホヤの混入を多く認め、上位つれアカホヤのブロックの大小の変化で識別した(③④⑤)。その上に黒色土があり、その硬さの度合で識別し、若干、黄白色の軽石を若干包んでいる(①②)。埋土中には弥生式土器小破片が数点出土したが、図化は困難であった。

### 2. 中央区溝状遺構 (Fig. 127, PL. 28)

本溝状遺構は、発掘調査区の検出遺構のほぼ中央部付近に検出され、遺構を相分するような格好を呈する。E-13区、C-12・13区、D・E-12区を略南北に南へ流下し、N-112°-Eをとる。中央区溝状遺構の上幅は約170~260cm、下幅は若干狭くなり不定形で、深さ約20~30cmを測り、南北の土層断面より見れば約50cm前後で、二つの溝が重複する。溝Ⅰの底面は、非常に硬く踏みしめられたような状況である。埋土はⅡa層と同じ黒色土で、平面での識別は困難であった。土層断面に示す如く、溝Ⅰのあとに溝Ⅱが造られている。溝Ⅰの埋土は黒色土で、硬さで①・②に識別し、①は若干硬質で、溝Ⅱも黒色土で、色の濃淡や硬さで識別した。①は若干硬質で、②は普通、③はさらさらし、④は少量のアカホヤを含む。溝Ⅰは幅135~145cm、深さ30~43cm、溝Ⅱは幅183~280cm、深さ30~38cmを測る。溝Ⅰはアカホヤ層に掘込を認め、底面の硬い部分は、黒褐色を呈し、厚さは約4~8cmで、北側付近では二条、中央部は一条、南側付近では段違いで数条に分かれ、剥落している所もあり、南側壁付近はわずかに残存する。埋土中には土器破片を少量認めたが、図化は困難である。



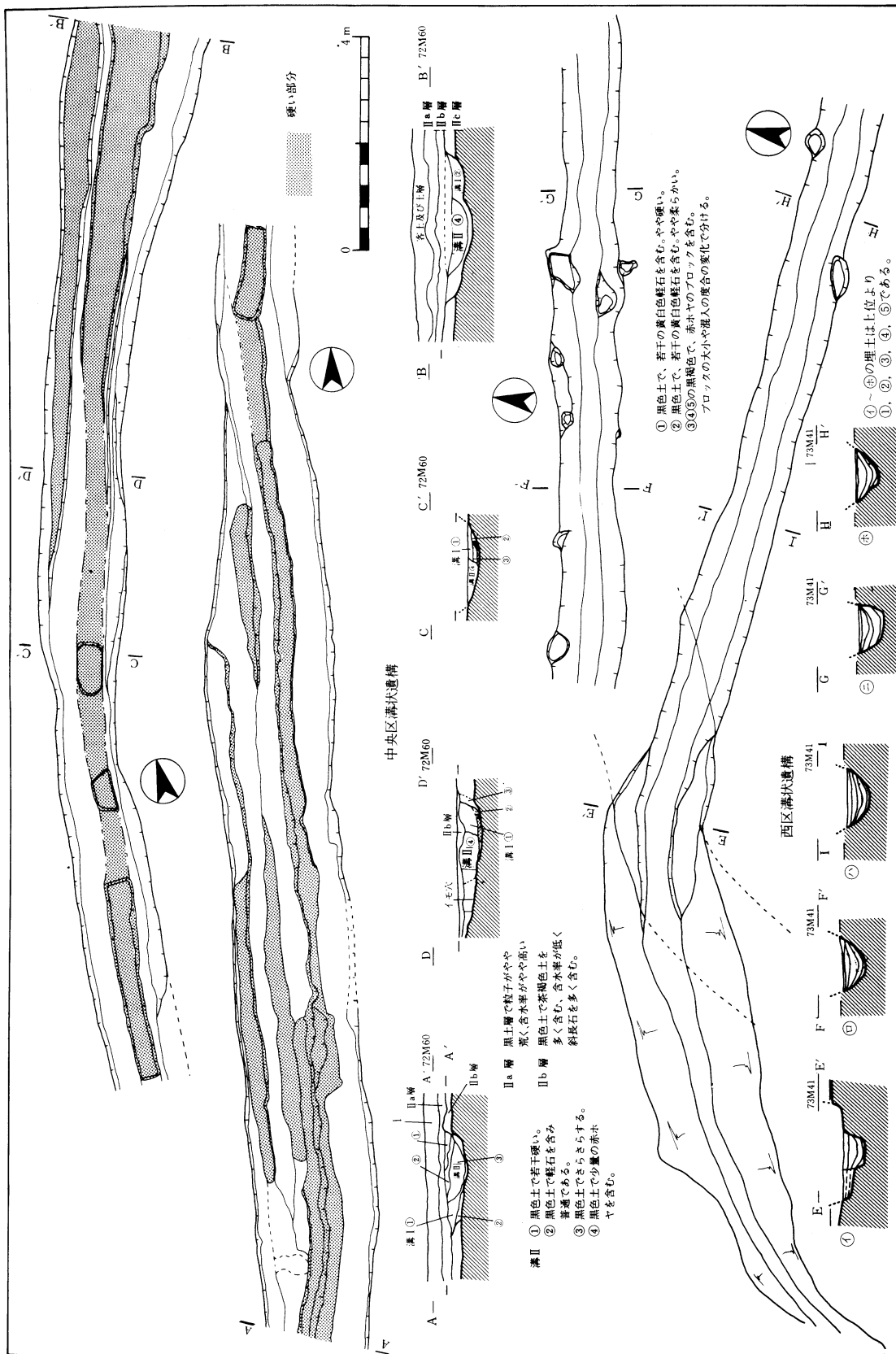


Fig. 127 中央区及び西区溝状遺構実測図

## 第6章 弥生時代の遺物

### 第1節 土器 (Fig. 131~158, PL. 34~37)

本遺跡の弥生時代の土器には、甕形土器、大型甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器、瀬戸内系の土器などがⅡ a・b層より出土し、Ⅱ a層よりは小破片が多く広範囲に出土した。特に、A・B-7区、D・E-8区、B・C-9・10区、B・C-15~18区、C・D-23~25区を中心にⅡ b層より集中的に出土した。

#### 1. 甕形土器 (Fig. 128~137, PL. 34)

甕形土器には、口縁部の形状が直口するもの、内湾するもの、外傾するものなどがある。口縁部は逆L字状やくの字状に外反するもの、口縁部端面は凹んで凹線状を呈するもの、丸味を帯びるもの、口縁部内側には張り出しを作るもの、稜を作り出すものがある。胴部は丸味を帯びて張るもの、張りのないものとがあり、胴部もしくは上位に断面三角形貼付突帯をもたないもの、一条のものから四条のものまでである。底部は充実した脚台で、裾は長いもの、短いもの、裾が鋭角的に広がるもの、広がりのないものなどがあり、裾端面は凹んで凹線状を呈するもの、丸味を帯びるものがある。これらの土器は完形品が少なく、全体の器形を知り得るものは少ない、以下、土器の一覧表で説明を加える。

Tab. 44 甕形土器一覧表

注) 法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

Fig. 番号	遺物番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
Fig. 128	670	口縁部 胴部	C-17	①(23.4) ③(21.7)	暗褐色	Q.P.L.M	670-内湾する口縁部で逆L字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側に張り出しを作る。口縁部上面はわずかに凹む。三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。煤の付着が認められる。以下、各遺物については、上記表現のないものについて、特徴を付記する。	670-内・外面には刷毛などで調整が主体的に認められ、横位・斜位・縦位などの方向に調整を認める。以下、上記表現のないものについて、特徴を付記する。
	671	口縁部	A-7	①(28.0)	黒褐色	Q.P.L		671-指頭圧調整痕が内面に残る
	672	〃	B-10	①(29.0)	明茶褐色	Q.P.L.H		672-外面は磨滅のため不明である。
	673	〃	C-25	①(25.4)	〃	Q.P.L.M		675-指頭調整痕が内面に残る。
	674	口縁部 胴部	E-8	①(28.6) ③(26.8)	暗茶褐色	Q.P.L.H	671-逆L字状に近く外反する。 672-くの字状に外反する。一条の突帯を廻らす。	676-鮮明さに欠けるが、なで調整である。
	675	〃	E-11	①(27.6) ③(25.6)	黒褐色	Q.P.L.H	673-口縁部上面は凹む。二条の突帯を廻らす。煤の付着は認めない。	677-内面は磨滅のため部分的に、指頭圧調整後などで調整である。
	676	〃	C-5	①(24.0)	明褐色	Q.P.L.H	674-くの字状に外反する。稜を作り出す。	678-外面は煤の付着のため鮮明さを欠くが、なで調整である。
	677	〃	E-8	①(28.6)	黄褐色	Q.P.L.H	675-口縁部上面に凹む。	679-指頭圧調整痕を残す。大半は不明。輪積み手法を残す。
	678	完形	B-11	①(26.6) ②25.6 ③(23.4) ④7.6	茶褐色	Q.P.L.H	676-煤の付着は認めない。 677-くの字状の外反する。二条の突帯を廻らす。	680-内面はなで調整である。 682,683-指頭圧調整痕を残す。 686-薄いなどで調整である。
679	〃	C-6	①26.2 ②27.8 ③24.4 ④7.8	暗褐色	Q.P.L.H	678,679-充実した脚台で裾端面は丸味を帯びる。大きく内湾する口縁部で、くの字状に外反する。二条の突帯を廻らす。 680-くの字状に外反する。上面は凹む。	690-内面は磨滅しているため不明で、指頭圧調整痕を残す。 691-内面は磨滅のため不明である。 692-内・外面ともに指頭圧調整痕を残す。	
Fig. 129	680	口縁部	E-6	①(26.7)	〃	Q.P.L.M	681,682-くの字状に外反する。一条の突帯を廻らす。	693-指頭圧調整痕を内面に残す。
681	〃	B-10	①(27.2)	〃	Q.P.L.M	683-逆L字状に近く外反する。上面は凹む。二条の突帯を廻らす。	695-指頭圧調整後などで調整である。 696-外面はなで調整後一部磨削りで、内面は磨滅のため不明、輪積みの手法を残す。	
682	口縁部 胴部	E-8	①(24.3) ③(22.0)	灰褐色	Q.P.L.H	684-逆L字状に近く外反する。		

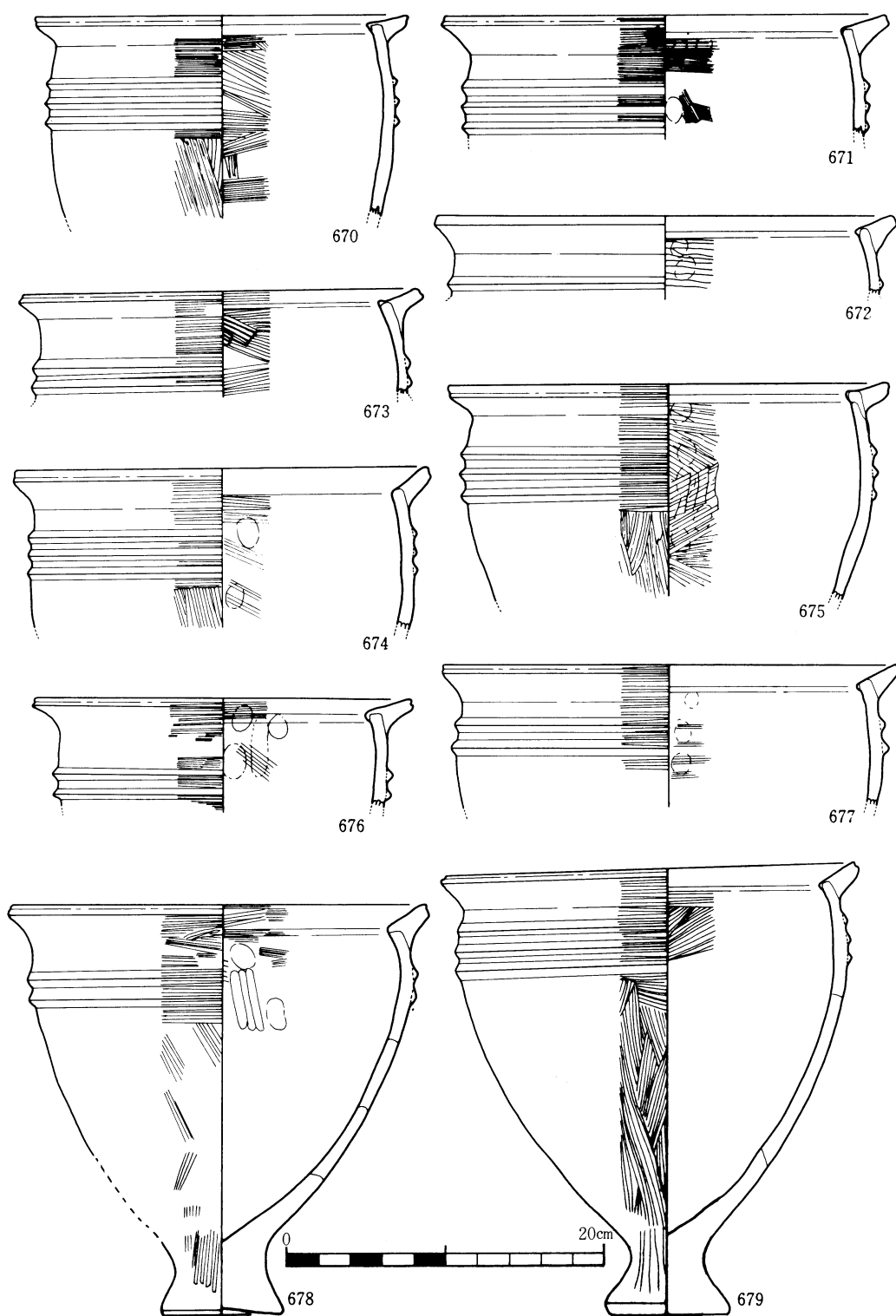


Fig.128 王子遺跡出土土器実測図(1)

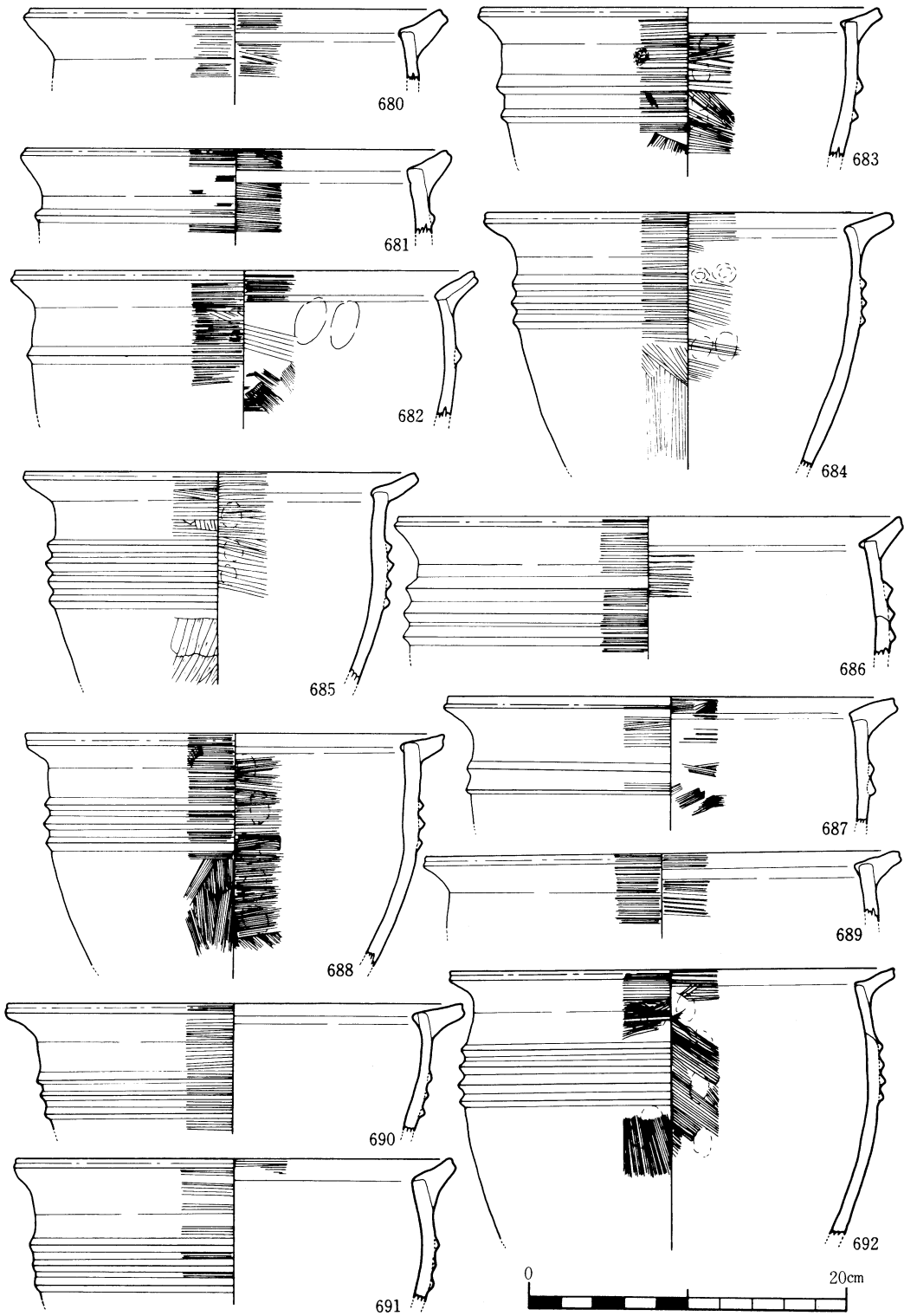


Fig. 129 王子遺跡出土土器実測図 (2)

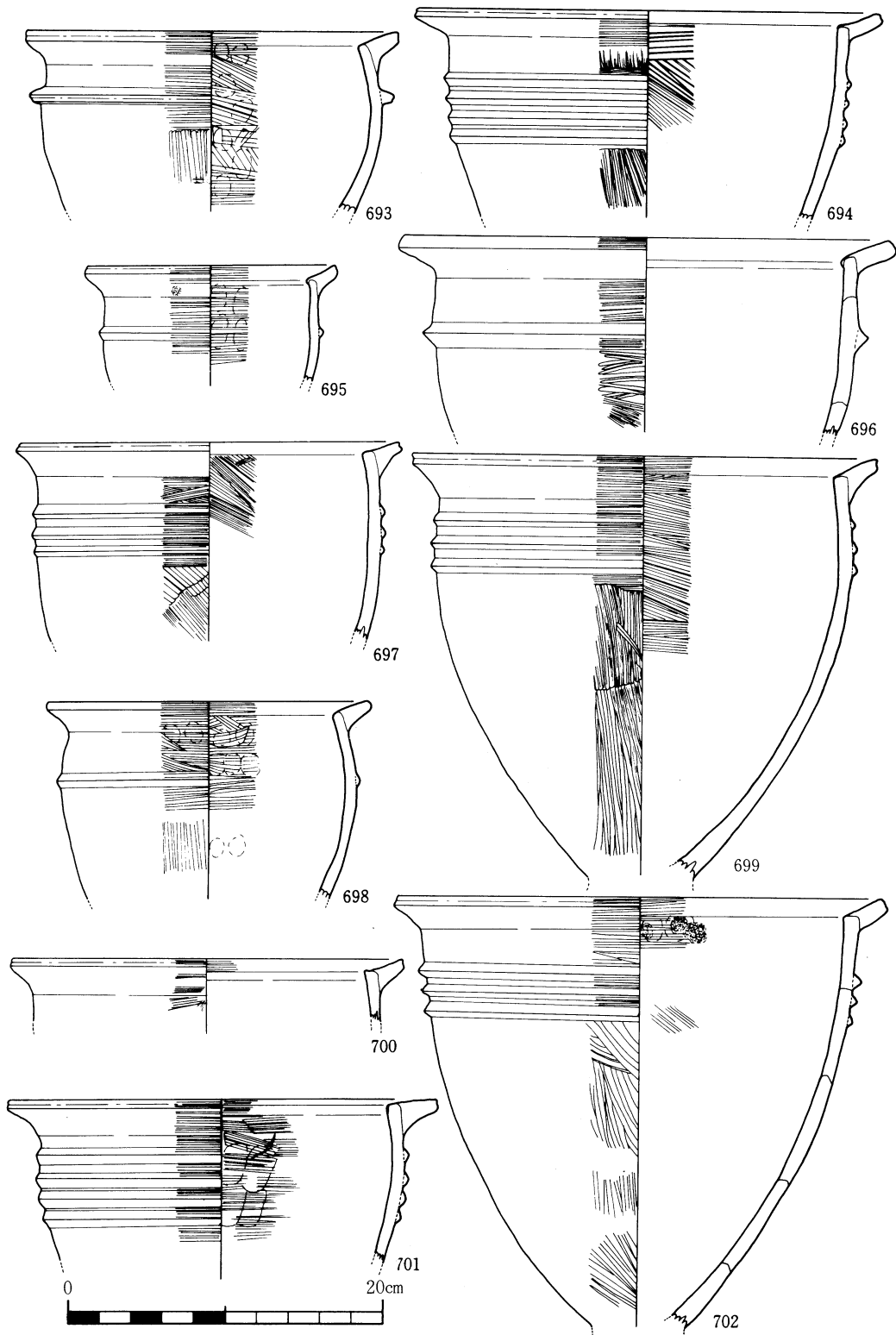


Fig. 130 王子遺跡出土土器実測図 (3)

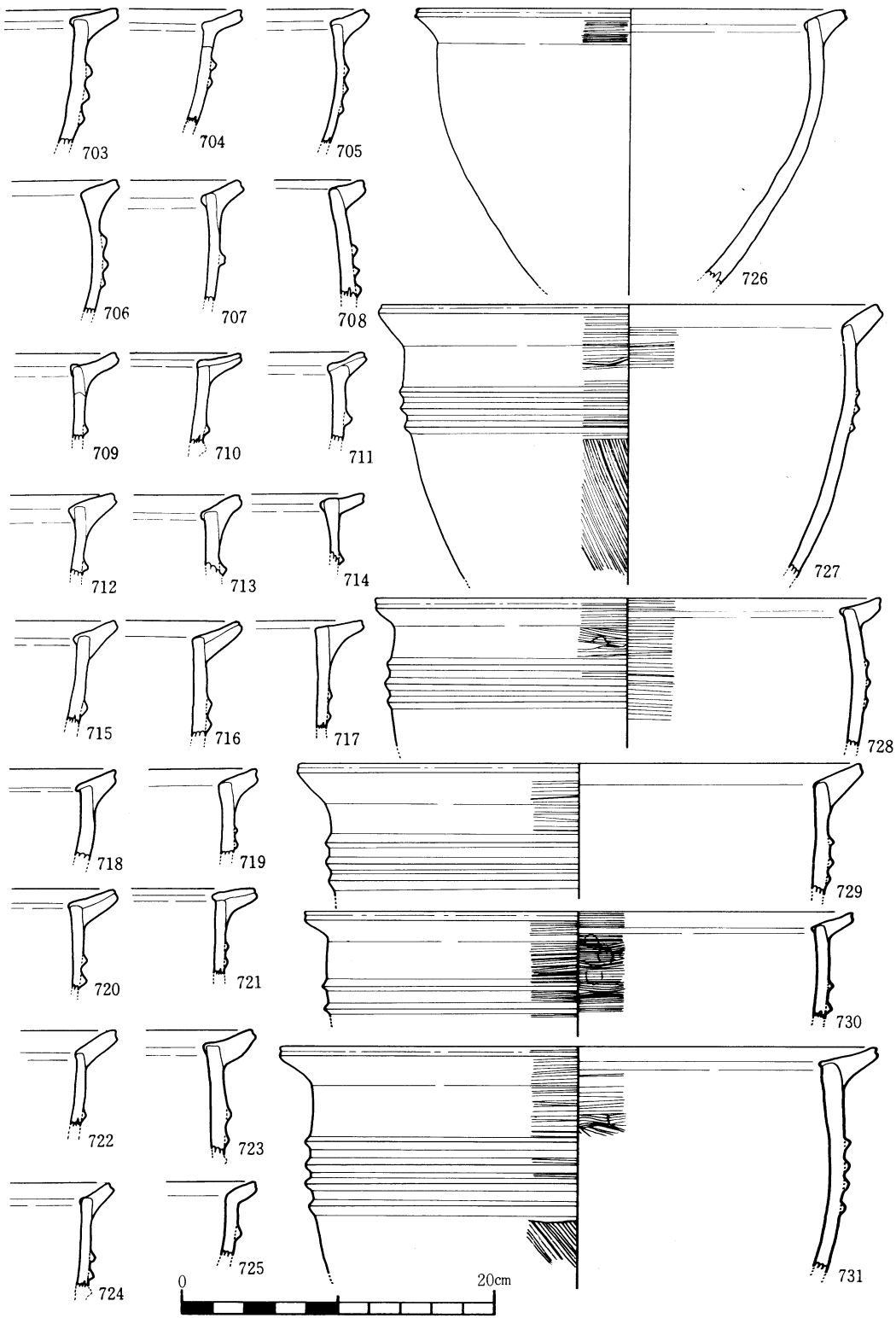


Fig. 131 王子遺跡出土土器実測図(4)

Fig 番号	遺物 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 129	683	口縁部 胴部	B-10	①(29.4) ②(26.5) ③(24.8)	褐色	Q.P.L.M.O <sub>b</sub>	685-直口気味の口縁部である。上面は凹む。四条の突帯を廻らす。	697-内面は磨減しているため不明である。
	684	〃	D-8	①(25.7) ②(24.8) ③(24.8)	黄褐色	Q.R.H	686-くの字状に外反する。	698-一部指頭圧調整痕が残る(内・外面とも)。
	685	〃	D-5	①(24.9) ②(25.0) ③(25.0)	暗茶褐色	Q.R.M	687-逆L字状に近く外反する。二条の突帯を廻らす。	699-内面の胴部下位付近は磨減のため不明である。
	686	〃	C-4	①(32.0) ②(30.2) ③(30.2)	明茶褐色	Q.P.L.M.H	688-直口気味の口縁部である。	700-内・外面ともに磨減のため、部分的なで調整である。
	687	〃	B-10	①(28.5) ②(25.0) ③(23.2)	茶褐色	Q.P.L.M	691-くの字状に外反する。内側に稜を作り出す。	701-指頭圧調整後などで調整である。
	688	〃	D-17	①(26.4) ②(23.2) ③(23.2)	暗茶褐色	〃	692-くの字状に外反する。上面は凹む。四条の突帯を廻らす。煤の付着は認めない。	702-内面は指頭圧調整痕を残す。指紋の付着。磨減や剥落が著しい。
	689	口縁部	B-10	①(30.0)	明茶褐色	〃	693-くの字状に外反する。内側に稜を作り出す。一条の台形状突帯を廻らす。	703,704,706-内面に指頭圧調整痕を残す。
	690	口縁部 胴部	B-6	①(29.0) ②(23.8) ③(23.8)	灰褐色	Q.P.L.H	694-くの字状に外反する。上面は凹む。内側に稜を作る。四条の突帯を廻らす。	705,707-内・外面ともに磨減を認め指頭圧調整痕を残す。
	691	〃	B-10	①(27.9) ②(25.0) ③(25.0)	暗茶褐色	Q.P.L.M	695-直口気味の口縁部で、小型である。くの字状に外反する。上面は凹む。一条の突帯を廻らす。	708-磨減を認める。
	692	〃	B-11	①28.0 ②26.0 ③26.0	〃	〃	696-外傾気味の口縁部で、くの字状に外反する。一条の突帯を廻らす。	709-磨減や剥落を内面に認める。
Fig 130	693	〃	D-9	①(23.6) ②(21.5) ③(21.5)	〃	〃	697-くの字状に外反する。一条の突帯を廻らす。	710-内・外面ともに磨減を認め、内面は指頭圧調整痕を残す。
	694	〃	C-13	①(29.6) ②(24.8) ③(24.8)	茶褐色	〃	698-くの字状に外反する。内側に稜を作り出す。端面は丸味を帯びる。	711,714-指頭圧調整痕を残す。
	695	〃	C-17	①(16.0) ②(13.6) ③(13.6)	明茶褐色	Q.P.L.H	699-内傾する口縁部で、くの字状に外反する。充実した脚台を欠損する。逆さの釣鐘型を呈する器形である。内側に稜を作り出す。	715-磨減のため不鮮明なで調整である。
	696	〃	B-18	①(31.6) ②(26.4) ③(22.0)	黄褐色	〃	700-くの字状に外反する。	717-内・外面ともに磨減を認め、内面は磨減が著しい。
	697	〃	D-5	①(24.6) ②(22.0) ③(22.0)	暗褐色	Q.P.L.M	701-四条の突帯を廻らす。	718-内・外面ともに磨減を認めるが、なで調整である。内面一指頭圧調整痕を残す。
	698	下位	D-16	①(20.6) ②(18.7) ③(18.7)	暗茶褐色	〃	702-直口気味の口縁部である。内側に稜を作り出す。	719-指頭圧調整痕を内面に残す。
	699	下位	D-8	①29.4 ②26.2 ③26.2	暗茶褐色	〃	703,704-外傾気味の口縁部である。	720-磨減を認めるが、指頭圧調整後などで調整である。
	700	口縁部	B-15	①(25.0)	明褐色	Q.P.L.H	705-逆L字状に近く外反する。704-くの字状に外反し、二条の突帯を廻らす。	721-内外面ともに指頭圧調整後、なで調整である。
	701	口縁部 胴部	C-10	①(27.4) ②(23.2) ③(23.2)	暗褐色	Q.P.L.M	706-内側に稜を作り出す。	722-指頭圧調整後などで調整を内面に認める。
	702	口縁部 底部付近	B-15	①31.2 ②26.4 ③26.4	〃	Q.P.L.H	707-一条の台形状突帯を廻らす。上面は凹む。	723-内面に剥落や磨減を認めるが、指頭調整痕を残す。
Fig 131	703	口縁部 胴部	C-4		明茶褐色	〃	708-くの字状に外反する。一条の突帯を廻らす。上面は凹む。	724-内面はなで調整で、不鮮明である。
	704	〃	B-17		黒褐色	〃	709-逆L字状に近く外反する。一条の突帯を廻らす。	725-指頭圧調整痕を残す。
	705	〃	A-7		〃	Q.P.L.M	710-逆L字状に近く外反する。一条の突帯を廻らす。	726-内・外面ともに磨減しているため不明である。口縁部外面はなで調整である。
	706	〃	B-10		褐色	Q.P.L.H	711,712-くの字状に外反する。一条の突帯を廻らす。	727-内面は剥落や磨減を認める。指頭圧調整痕を残す。
	707	〃	E-18		明茶褐色	〃	713,714-一条の突帯を廻らす。714-上面は凹む。煤の付着は認めない。	728-内面の一部に磨減を認める。
	708	〃	E-8		明褐色	〃	715,716-くの字状に外反する。715-上面は凹む。一条の突帯を廻らす。	729-内面は磨減のため調整痕は不明である。
	709	〃	D-25		黒褐色	〃	717-二条の突帯を廻らす。稜を作り出す。	730-内面に指頭圧調整痕を残す。
	710	〃	E-8		明褐色	Q.P.L.M	718-内面に稜を作り出す。二条の突帯を廻らす。煤の付着は認めない。	731-外面は部分的になで調整で、内面は磨減を認める。
	711	〃	D-15		明黄褐色	Q.P.L.H	719-直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。突帯をもたない。	733-内・外面ともに磨減を認めるが、なで調整で、内面は不鮮明である。
	712	〃	D-26		暗茶褐色	〃	720-くの字状に外反する。二条の突帯を廻らす。稜を作り出す。	734-磨減しているが、指頭圧調整後などで調整である。
	713	〃	B-9		灰褐色	〃	721-くの字状に外反する。二条の突帯を廻らす。上面は凹む。	735-内面は全体的に磨減しているが、指頭圧調整痕を一部に残す。
	714	〃	F-18		暗褐色	Q.P.L.M	722-直口する口縁部である。二条の突帯を廻らす。	736-内面は鮮明さに欠ける。
	715	〃	E-8		明黄褐色	Q.P.L.H	723-外傾気味の口縁部である。一条の突帯を廻らす。	737-煤の付着や剥落を認める。内面に指頭圧調整痕が残る。
	716	〃	〃		暗褐色	Q.P.L.M	724-内傾気味の口縁部で、逆L字状に近く外反する。二条の突帯を廻らす。	738-磨減や剥落を一部に認める。

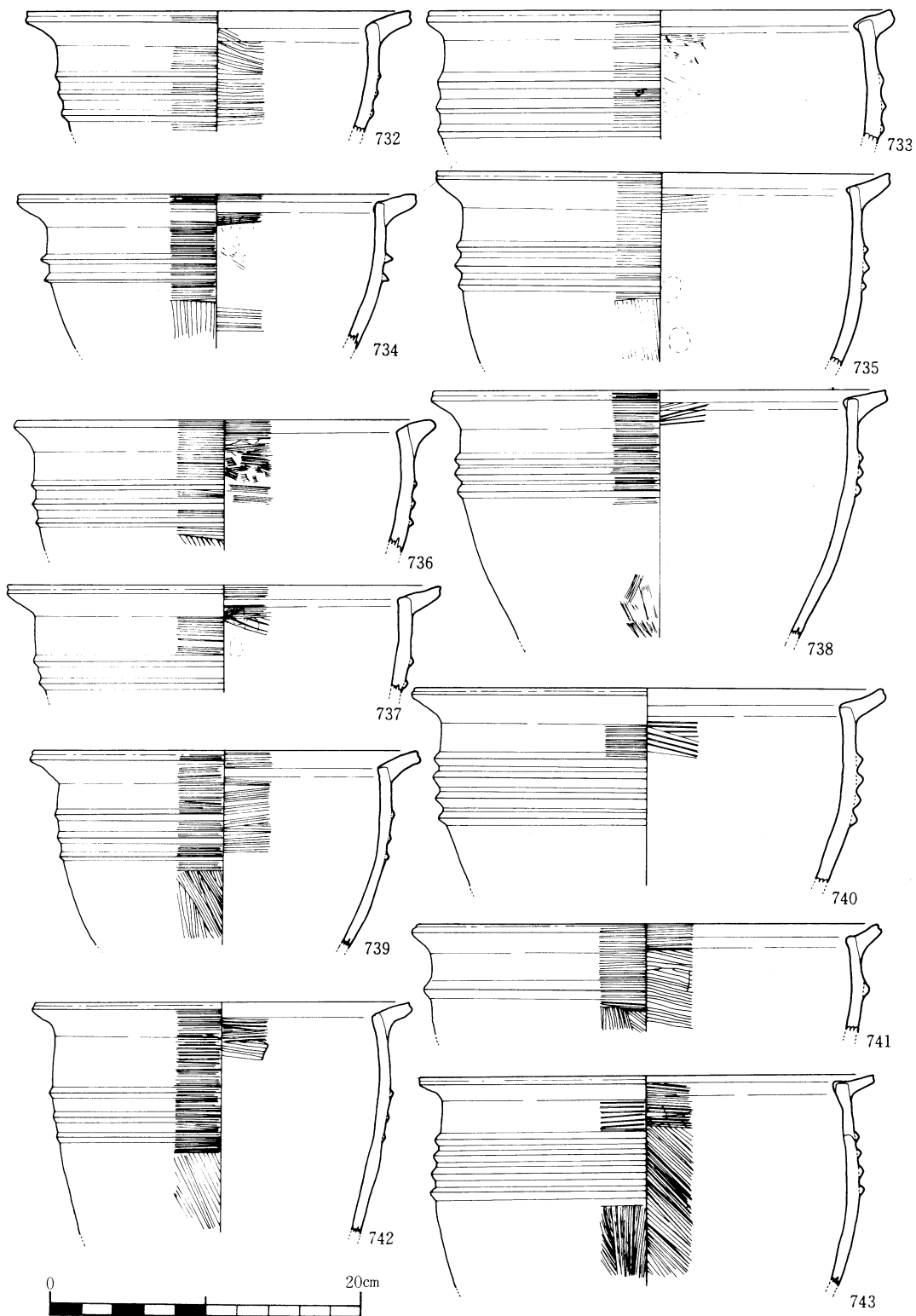


Fig. 132 王子遺跡出土土器実測図 (5)



Fig. 番号	遺物番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴	
Fig 131	717	口縁部	〃		茶褐色	〃	す。上面は凹む。 724-外傾気味の口縁部で、くの字に外反し、上面は凹む。二条の突帯を廻らす。	め、内面は指頭圧調整後のなで調整である。 746-内面に指頭圧調整痕を残す。 747-内面に指頭圧調整後のなで調整で、口縁部上面は塗消りである。	
	718	〃	D-8		明茶褐色	Q.P.L.H	725-外傾気味の口縁部で、くの字に外反する。一条の突帯を廻らす。	748,149-内面は指頭圧調整痕を残す。	
	719	〃	C-10		黒茶褐色	Q.	726-底部付近より外へ開きながら直線的に立ち上がり、直口気味の口縁部で、逆L字に近く外反する。突帯をもたない。	753,755-指頭圧調整痕を残す。 756,762-磨滅しているため調整痕は不明である。	
	720	〃	B-10		茶褐色	〃	727-くの字状に外反する。	752,762-内・外面ともに横位の刷毛なで調整である。	
	721	〃	E-8		明茶褐色	〃	728-逆L字上に近く外反する口縁部で、端面は凹む。胴部は丸味を帯びて脹らむ。	763-内面は磨滅しており鮮明さに欠ける。	
	722	〃	D-25		暗茶褐色	〃	729-直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。稜を作り出す。	765-内・外面ともに磨滅を認めるが、外面はなで調整で、内面は不明である。	
	723	〃	C-5		明褐色	〃	730-くの字状に外反する。二条の突帯を廻らす。	766-煤の付着が著しい。 767-煤の付着が著しいが、なで調整である。	
	724	〃	E-18		褐色	Q.P.L.H	731-内傾気味の口縁部で、逆L字状に近く外反し、上面は凹む。四条の突帯を廻らす。	768-鮮明さに欠ける。 769-内・外面ともに磨滅しているが、内面は指頭圧調整痕が残す。外面の調整痕は不明である。	
	725	〃	D-19		暗褐色	〃	732-くの字状に外反する。	770-内面は指頭圧調整痕が残る。	
	726	口縁部 底部付近	A-7	①(27.2) ③(23.6)	明茶褐色	〃	733-逆L字状に近く外反する。	771-外面は鮮明さに欠けるが、なで調整で、内面は指頭圧調整が残る。	
	727	〃	C-21	①(32.3) ③(27.8)	明褐色	Q.P.L.M	734-直口気味の口縁部である。二条の突帯を廻らす。	772-内面は指頭圧調整後なで調整である。	
	728	口縁部 胴部	B-9	①(32.5) ③(30.1)	暗茶褐色	〃	735-直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。上面は凹む。	773-内・外面ともに磨滅が著しく、外面は指頭圧調整が残る、内面は不明である。	
	729	〃	E-8	①(36.5) ③(31.4)	黄茶褐色	〃	736-端面は丸味を帯び、稜を作り出す。	774-内・外面とも磨滅や剥落が著しい。	
	730	〃	B-15	①(35.1) ③(31.7)	茶褐色	Q.P.L.H	737-直口気味の口縁部で、逆L字に近く外反する。二条の突帯を廻らす。	775-内面は指頭圧調整後なで調整である。	
731	〃	E-12	①(38.3) ③(33.8)	暗褐色	Q.P.L.M	738-直口する口縁部である。	776-内面は磨滅が著しい。		
Fig 132	732	〃	F-28	①(24.9) ③(20.0)	〃	〃	739-直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。	777-外面は煤の付着が著しい。内面は、鮮明さに欠け、口縁部付近にみに残存する。	
	733	〃	E-11	①(29.2) ③(25.4)	〃	Q.P.L.H	740-内湾気味の口縁部で、くの字状に外反する。四条の突帯を廻らす。上面は凹む。	778-内面に指頭圧調整後なで調整である。	
	734	〃	〃	①(25.8) ③(21.5)	明茶褐色	〃	741-くの字状に外反する。上面は凹む。一条の突帯を廻らす。	779-内・外面ともに磨滅を一部に認める。	
	735	〃	E-14	①(29.2) ③(25.4)	暗褐色	Q.P.L.M	742-くの字状に外反する。稜を作り出す。	780-内・外面ともに剥落や磨滅が著しい。内面は調整痕は不明である。	
	736	〃	F-6	①(27.2) ③(23.6)	明茶褐色	〃	743-上面は凹む。四条の突帯を廻らす。	781-外面は煤の付着が著しいが、なで調整で、内面は鮮明さに欠ける。	
	737	〃	D-25	①(28.0) ③(22.9)	暗茶褐色	Q.P.L.H	744-くの字状に外反する。突帯をもたない。	782-内面は指頭圧調整後なで調整である。	
	738	口縁部 胴部下位	A-7	①(29.3) ③(25.1)	茶褐色	Q.P.L.M	745-外傾気味の口縁部で、くの字状に外反する。	783-内面は指頭圧調整痕を残す。	
	739	〃	F-28	①(25.1) ③(20.0)	〃	〃	746-外傾する口縁部で、二条の突帯を廻らす。	787-内面は鮮明さに欠ける。	
	740	口縁部 胴部	C-15	①(30.5) ③(25.8)	赤茶褐色	Q.P.L.M	747~751-小破片のため突帯をもたない。	788-外面は煤の付着が著しいが、内面は指頭圧調整痕を残す。	
	741	〃	D-15	①(30.3) ③(27.2)	茶褐色	〃	748-749,751-口縁部上面は凹む。	789-外面は煤の付着と磨滅を認めるが、なで調整である。	
	742	口縁部 胴部下位	B-10	①(24.4) ③(21.1)	〃	Q.P.L	750,752,756,758~761,566,571-口縁部が逆L字状に外反する。	790-外面は磨滅を認める。内面は指頭圧調整痕を残す。	
	743	口縁部 胴部	D-8	①(29.2) ③(27.2)	明褐色	Q.P.L.H	755,759,760,765~767,770,776-口縁部内側に稜を作り出す。	791-指頭圧調整後なで調整を内面に認める。	
	Fig 133	744	口縁部	F-13		茶褐色	Q.P.L	761は外傾気味の口縁部を作り出すと思われる。	793-内面の大半は磨滅を認める。一部指頭圧調整痕を残す。
		745	〃	B-15		褐色	〃		
746		〃	E-8		赤墳褐色	Q.P.L.H			
747		〃	B-15		明褐色	〃			
748		〃	C-5		〃	〃			
749		〃	D-6		明茶褐色	〃			
750		〃	E-18		茶褐色	Q.P.L.H.M			

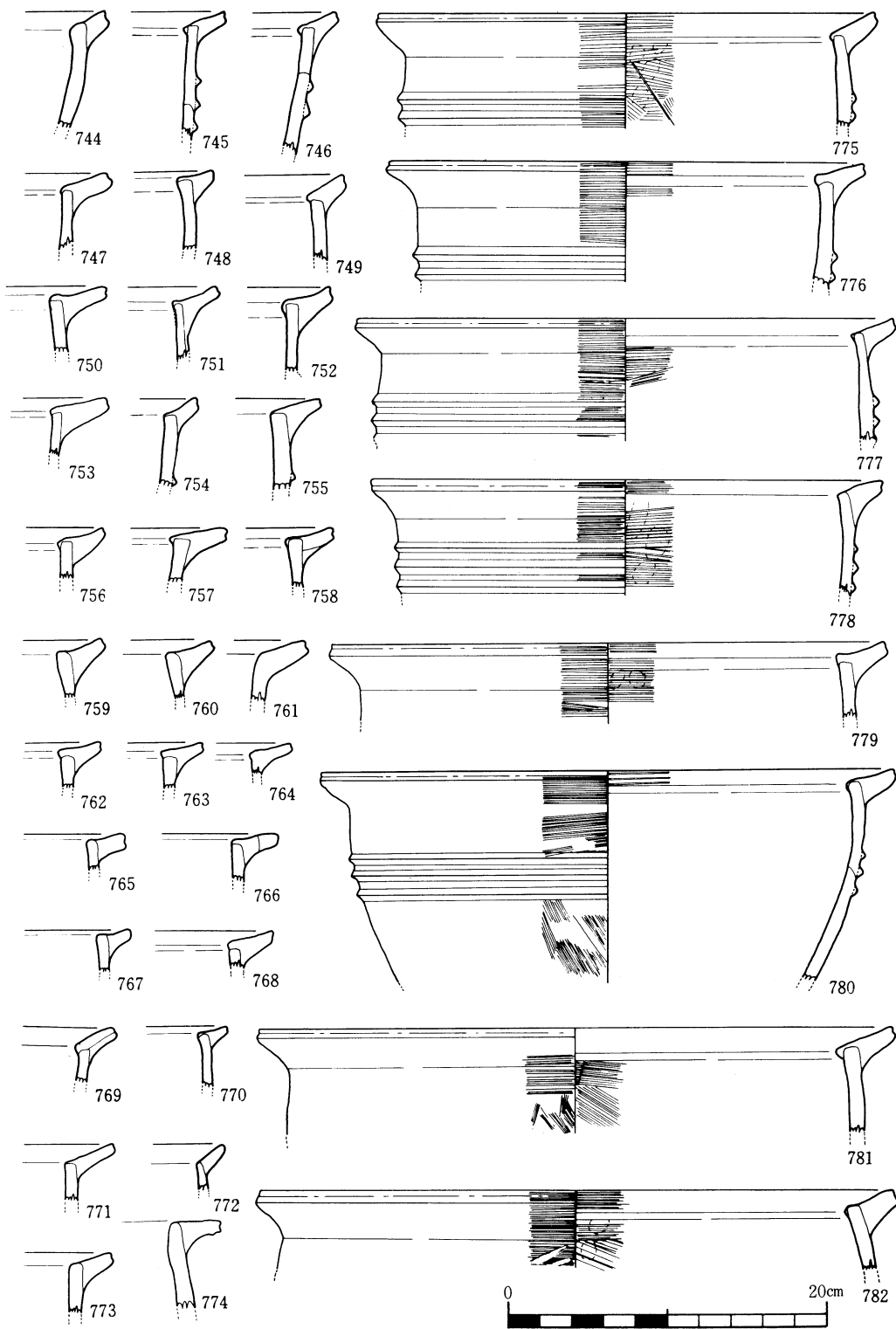


Fig. 133 王子遺跡出土土器実測図 (6)

Fig 番号	遺物 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
133	751	口縁部	D-25		〃	Q.P.L.H	774は内傾する乏縁部である。	795-内面は指頭圧調整後などで調整で、指紋の付着を認める。
	752	〃	C-17		明茶褐色	Q.P.L.H.M	775-くの字状に外反する口縁部である。二条の突帯を廻らす。	795-指頭圧調整後などで調整を内面に認める。
	753	〃	B-15		茶褐色	Q.P.L.M	776-直口気味の口縁部である。二条の突帯を廻らす。上面内側は凹む。	797-内面は大半は磨滅のため調整痕は不明で、わずかに口縁部付近にて調整を認める。
	754	〃	B-17		〃	Q.P.L.H	777-くの字状に外反する口縁部である。	798-内面は磨滅が著しい。799～801-外面に指紋の付着を認め、内面は指頭圧調整後などで調整である。
	755	〃	B-8		暗褐色	Q.P.L.M	778-逆L字状に近く外反し、内側に稜を作り出す。	803-内面に指頭圧調整後などで調整である。
	756	〃	B-10		明褐色	〃	779-上面は凹む。破片のため突帯は認めない。	804-内面は磨滅するが、部分的に指頭調整痕やなで調整である。
	757	〃	B-15		茶褐色	〃	780-外方へ開きながら立ち上がり内湾する口縁部で、逆L字状に近く外反する。口縁部上面は凹む。胴部は脹りはない。	805-内面は磨滅ため調整痕は不明であるが、指頭圧調整痕を残す。
	758	〃	D-6		〃	Q.P.L.H	781-くの字状に外反する口縁部で、口径は大きい。	806-内面は鮮明さに欠ける。
	759	〃	C-10		〃	Q.P.L.M	782-大きく内湾すると思われる口縁部で、くの字状に近く外反する。口縁部上面は凹む。口径は大きい。	807-内面は指頭圧調整後などで調整である。
	760	〃	〃		〃	〃	783-直口気味の口縁部と思われ、くの字状に外反する口縁部で、口縁部上面は凹む。口径は大きい。	808-内面は磨滅が著しいが、口縁部付近にて調整を認める。圧調整痕を残す。
	761	〃	B-14		〃	〃	784-直口気味の口縁部で、くの字状に外反する口縁部である。内面には篋状の施工具により連点状の痕跡を残す。二条の突帯を廻らす。	811-外面は部分的に磨滅や剥落を認めるが、なで調整である。内面には指頭圧調整痕を残す。
	762	〃	C-4		明褐色	Q.P.L.M.H	785-逆L字状に近く外反し、一条の突帯を廻らす。	813-内・外面ともに鮮明ななで調整である。
	763	〃	D-26		茶褐色	Q.P.L.H	786-逆L字状に近く外反し、一条の突帯を廻らす。	814-部分的に剥落を認める。
	764	〃	〃		暗褐色	〃	787-外傾気味の口縁部で、逆L字状に近く外反する。一条の突帯を廻らす。	815-内面に指頭圧調整痕を残す。
	765	〃	D-11		暗茶褐色	Q.P.L.M	788-外傾気味の口縁部で、くの字状に外反する。一条の突帯を廻らす。	816-内面には磨滅を認める。指頭圧調整痕を残す。
	766	〃	C-17		茶褐色	Q.P.L.H	789-くの字状に外反し、上面は凹む。一条の突帯を廻らす。	819-内・外面ともに磨滅や剥落を認めるが、外面はなで調整で、内面は指頭圧調整痕を残す。
	767	〃	D-23		黒褐色	〃	790-くの字状に外反する。二条の突帯を廻らす。	821-内面は磨滅を認める。
	768	〃	D-26		暗褐色	Q.P.L.M	791-直口気味の口縁部で、上面は凹む。四条の突帯を廻らす。	822-内面に指頭圧調整痕を残す。
	769	〃	D-16		明灰褐色	Q.P.L.H	792-外傾気味の口縁部である。	825-内面は指頭圧調整痕で、篋削りを認める。
	770	〃	C-10		暗茶褐色	〃	793-くの字に外反する口縁部で、突帯をもたない。	826-内・外面ともに鮮明ななで調整で、内面は指頭圧調整痕を残す。
	771	〃	C-5		茶褐色	Q.P.L.M	794-外傾気味の口縁部で、くの字状に外反する。口縁部上面は凹む。	827,828-内面は磨滅を認める。
	772	〃	E-20		暗褐色	Q.P.L	795-内傾気味で、逆L字状に近く外反する。	829-内・外面ともに磨滅しているため、調整痕は不明である。
	773	〃	F-27		黄茶褐色	Q.P.L.M	796-直口する口縁部である。	830-内面の一部は磨滅や剥落のため不明。
	774	〃	C-4		明茶褐色	〃	797-上面は凹む。稜を作り出す。	831-内・外面ともに磨滅や剥落を認める。内面には一部篋削りを認める。
	775	〃	C-21	①(31.6)	暗茶褐色	〃	798-直口気味の口縁部で、突帯をもたない。	832-内面には磨滅を認め、調整痕は不明である。
	776	〃	B-7	①(30.0)	暗褐色	〃	799-くの字状に近く外反し、上面は凹む。	833-内面には指頭圧調整痕を残す。外面は一部に篋削りを認める。
777	〃	E-14	①(34.0)	茶褐色	〃	800-直口気味の口縁部で、くの字状に外反する。一条の突帯を廻らす。	835～855-外面は横位の刷毛などで主体で、内面は横位及び斜位などで調整である。	
778	口縁部 胴部	D-9	①(33.9)	明灰褐色	Q.P.L.H	801-直口気味の口縁部で、逆L字状に近く外反し、口縁部上面は凹む。一条の突帯を廻らす。	838,839-内面は不明である。	
779	口縁部	C-19	①(35.2)	明茶褐色	Q.P.L.M	802-くの字状に外反する。突帯をもたない。	840-内・外面とも剥落や磨滅を認めるが、なで調整である。	
780	口縁部 胴部	B-11	①(36.2)	〃	〃	803-外傾気味の口縁部で、逆L字状に近く外反する。二条の突帯を廻らす。	841-内面は指頭圧調整痕を残す。	
781	口縁部	B-15	①(40.1)	暗茶褐色	〃	804-口縁部上面は狭い。内側に稜を作り出す。二条の突帯を廻らす。	842-内面は指頭圧調整痕を残す。調整は不明である。	
782	〃	C-17	①(40.4)	〃	Q.P.L	805-くの字状に外反し、口縁部上面	843-指頭圧調整痕を内面に残す。	
134	783	〃	E-8	①(24.6)	明茶褐色	Q.P.L.H	806-内面は指頭圧調整後などで調整で、指紋の付着を認める。	844-内面は指頭圧調整痕を一部に認める。
	784	口縁部 胴部	D-15	①(23.4) ③(20.5)	黒褐色	Q.P.L.M	807-内面は指頭圧調整後などで調整で、指紋の付着を認める。	845-指頭圧調整痕を残す。鮮明さを欠く。
	785	口縁部	B-19	①(23.8)	明褐色	Q.P.L.H	808-内面は指頭圧調整後などで調整で、指紋の付着を認める。	847-外面に指紋の付着を認める。

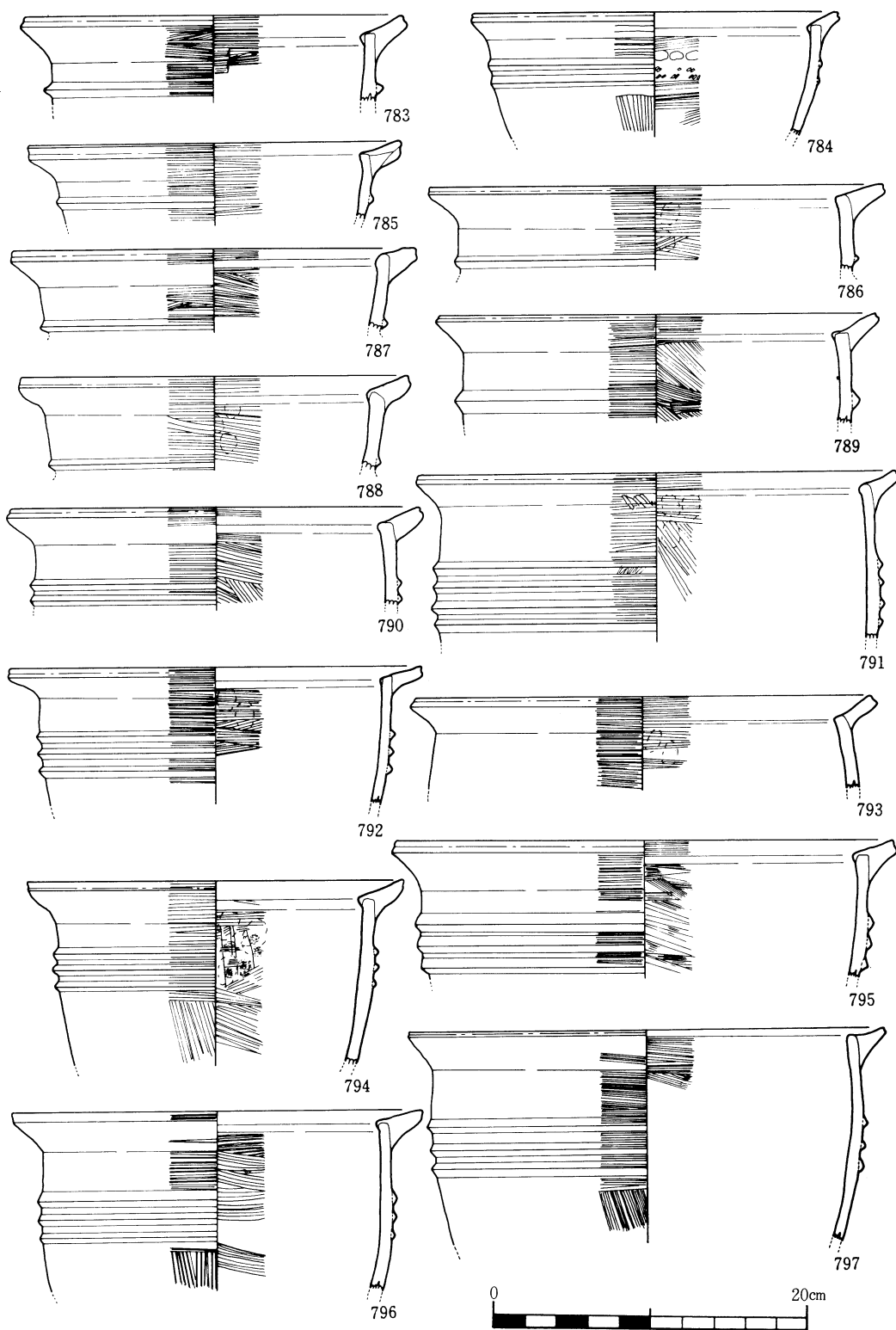


Fig. 134 王子遺跡出土土器実測図 (7)

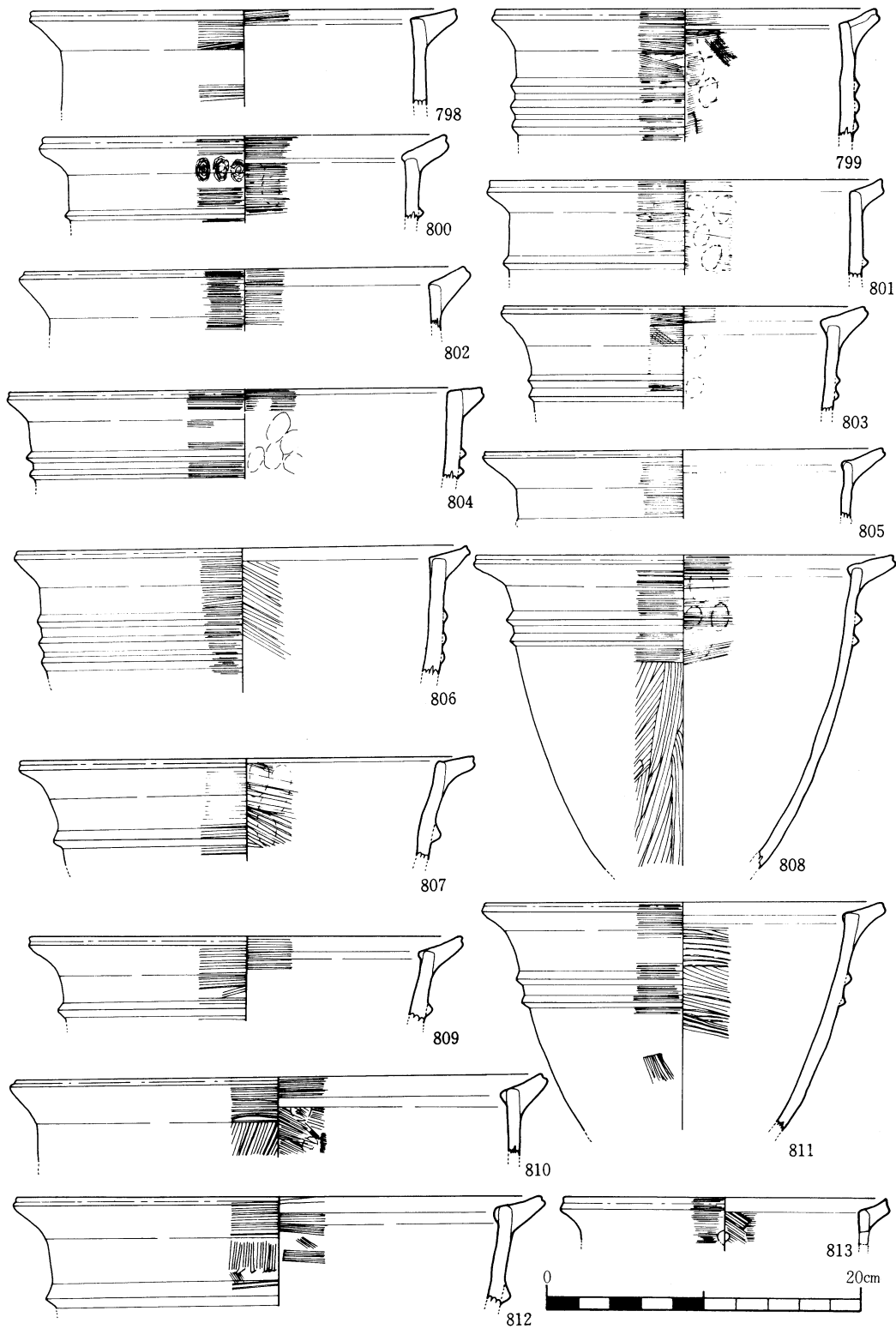


Fig. 135 王子遺跡出土土器実測図 (8)

Fig 番号	遺物 番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
Fig 134	786	口縁部	B-10	①(29.1)	茶褐色	Q.P.L.M	は凹む。突帯をもたない。	なで調整は鮮明さを欠く。
	787	〃	E-13	①(25.8)	暗褐色	Q.P.L	806-外傾する口縁部で、逆L字状に近く外反する。内側に稜を作り出す。	851-外面は剥落しているが、部分的になで調整である。内面は不明である。
	788	〃	B-17	①(25.0)	〃	Q.P.L.H	807-外傾する口縁部で、一条の突帯を廻らす。	852-内面は鮮明さを欠く。
	789	〃	C-21	①(28.2)	暗茶褐色	〃	808-胴は張らず、外傾する口縁部で、逆L字状に外反する。二条の突帯を廻らす。充実した脚台を欠損する。	853-指頭圧調整痕を残す。
	790	〃	D-20	①(26.6)	暗褐色	Q.P.L.M	809-外傾する口縁部で、くの字状に外反し、口縁部上面は凹む。一条の突帯を廻らす。	855~864-外面では、横位刷毛などで調整で、内面は横位及び斜位のなで調整である。
	791	口縁部 胴部	E-8	①(30.7) ③(28.2)	暗灰褐色	Q.P.L.M.H	810-くの字状に外反する。口縁部破片のため突帯をもたない。	855~860,863,864-内面に指頭圧調整痕を残す。
	792	〃	B-15	①(26.4) ③(22.3)	暗褐色	Q.P.L.H	811-外傾する口縁部で、くの字状に外反する。二条の突帯を廻らす。	861-鮮明ななで調整である。
	793	口縁部	C-10	①(29.6)	暗茶褐色	Q.P.L.M	812-外傾する口縁部で、上面は凹む。一条の凹帯を廻らす。	863-薄いなで調整である。
	794	口細部 胴部	B-15	①(24.0) ③(20.0)	暗褐色	Q.P.L.H	813-くの字状に外反する。口縁部外側に凹孔を穿つ。	
	795	〃	E-8	①(32.2) ③(28.1)	明褐色	〃	814-大きく外反する口縁部で、口縁部上面は凹む。	
	796	〃	E-26	①(26.0) ③(22.2)	茶褐色	Q.P.L.M	815-外傾する口縁部である。二条の突帯を廻らす。	
Fig 135	798	口縁部	D-8	①(27.2)	暗茶褐色	Q.P.L.O <sub>b</sub>	816-外傾する口縁部で、内側に大きく張出しを作り出す。	
	799	〃	D-5 D-6	①(24.6) ③(21.6)	灰黒褐色	Q.P.L.H	817,818,819-外傾する口縁部で、口唇部は凹面を作る。口縁部外側下位に断面三角形貼付突帯を廻らし、突帯端面には刻目を施している。817-口縁部上位を欠損する。	
	800	〃	B-10	①(26.0)	暗褐色	〃	819-直口気味の口縁部で、逆L字状に外反する。口縁部上面は狭い。	
	801	〃	E-17	①(25.2)	褐色	Q.P.L.M	820-口縁部外側は直線的で、内面はくの字状に屈接する。口縁部上面は凹んで、口縁部内側には稜を作る。口縁部外側直下には稜を廻らす。	
	802	〃	D-19	①(28.8)	明茶褐色	〃	821-外傾する口縁部で、口唇部は凹面を作る。口縁部外側外面には断面三角形貼付突帯を廻らし、突帯端面には籠状の施文具により刻目を施す。	
	803	〃	C-5	①(23.3) ③(19.0)	明赤茶褐色	Q.P.L.H	822-二条の突帯を廻らす。	
	804	〃	D-5	①(30.3)	明茶褐色	〃	823-口縁部外側は直線的で、内面はくの字状に屈接する。上面は凹む。一条の突帯を廻らす。	
	805	〃	C-5	①(25.5)	褐色	Q.P.L.M	825-垂れ下り気味に外反する口縁部である。	
	806	口縁部 胴部	〃	①(28.9) ③(25.3)	暗褐色	Q.P.L.H	826-外傾する口縁部である。	
	807	〃	F-27	①(29.0) ③(25.4)	〃	Q.P.L.M	827-逆L字状に近く外反する口縁部である。	
	808	口縁部 底部付近	B-5	①(26.8) ③(21.2)	〃	Q.P.L.H	828-稜を作り出す。一条の突帯を廻らす。	
	809	口縁部	E-8	①(27.6)	褐色	Q.P.L.M	829-直口する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部上面は凹む。一条の突帯を廻らす。	
	810	〃	E-20	①(34.2)	茶褐色	〃	830-外傾気味の口縁部で、口縁部上面は凹む。二条の突帯を廻らす。	
	811	口縁部 胴部下位	E-8	①(25.6) ③(19.4)	赤茶褐色	Q.P.L.H	831-小さい平底の底部で、直口気味の口縁部である。内側に稜を作り出す。	
Fig 136	812	口縁部	D-19	①(33.6)	暗褐色	Q.P.L.M	小型である。突帯をもたない。	
	813	〃	B-14	①(20.9)	明茶褐色	〃	832-内傾気味の口縁部で、くの字状に外反し、口縁部上面は凹む。一条の突帯を廻らす。	
	814	〃	〃	〃	赤茶褐色	Q.P.L.H	833-充実した脚台で、裾の張りはない。底部より外方へ開きながら立ち	
	815	〃	B-8	〃	黒褐色	Q.P.L		
	816	〃	C-10	〃	明茶褐色	〃		
	817	〃	C-9	〃	明褐色	Q.P.L.H		
	818	〃	B-9	〃	〃	〃		

Fig 番号	遺物 番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
Fig 136	820	口縁部	C-10		明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M	上がり、内湾気味の口縁部で、くの字に外反する。突帯をもたない。小型である。	
	821	〃	B-10	①(18.3)	〃	Q.P <sub>L</sub> .H	834-胴部には張りは認めない。煤の付着を認める。	
	822	〃	B-8	①(35.4)	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M	835~853-逆L字もしくは逆L字に近く外反する口縁部である。	
	823	〃	A-7	①(30.5)	明茶褐色	〃	836.839.842.846~850-口縁部上面が凹む。	
	824	〃	C-11	①(26.8)	明褐色	Q.P <sub>L</sub> .H	837.844.850-外湾気味の口縁部である。他は小破片のため不明である。	
	825	〃	B-8	①(33.6)	〃	〃	840.841.845.847.851.852-口縁部内側には稜を作り出す。	
	826	〃	〃	①(23.2)	黒茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M	841.843.844.847-二条の突帯を廻らす。	
	827	〃	C-11	①(30.6)	黒褐色	〃	842.849-一条の突帯を廻らす。	
	828	〃	E-7	①(28.0)	茶褐色	〃	835~838.848.850.851~853-口縁部だけの破片のため突帯の有無は不明である。	
	829	〃	〃	①29.8	明褐色		837-口縁部外側は直線的に、内側は逆L字に屈折する口縁部である。	
	830	〃	B-5	①(25.6) ③(21.0)	暗茶褐色		854~860-口縁部が逆L字状もしくは逆L字状に近くに外反する口縁部である。	
	831	〃	A-7	①16.2 ②14.1 ③(13.0) ④4.9	明褐色		854~856.858.862-口縁部上面が凹む。	
	832	〃	C-10	①(34.4) ③(30.6)	茶褐色		854~856.858~864-大きく内傾する口縁部である。	
	833	〃	C-6	①13.0 ②16.6 ③14.6 ④6.2	明茶褐色		859~862-口縁部内側に稜を作り出す。	
834	〃	C-6	③(29.0)	褐色		862-一条の突帯を廻らし、653~659.863.864は口縁部の破片のため突帯は認めない。		
Fig 137	835	〃	E-7		灰褐色	Q.P <sub>L</sub>	857-口縁部上面には鹿状の施文具により鋸歯文を施す。	
	836	〃	B-8		黒褐色	Q.P <sub>L</sub> .M		
	837	〃	C-25		明茶褐色			
	838	〃	B-16		茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .H		
	839	〃	C-26		明茶褐色	〃		
	840	〃	D-8		明褐色	〃		
	841	〃	B-10		明茶褐色	〃		
	842	〃	C-23		灰黒褐色	〃		
	843	〃	E-8		茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M		
	844	〃	D-8		黒茶褐色	〃		
	845	〃	〃		茶褐色	〃		
	846	〃	C-5		明茶褐色	〃		
	847	〃	F-6		暗茶褐色	〃		
	848	〃	E-13		灰褐色	Q.P <sub>L</sub>		
	849	〃	F-16		明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .H		
	850	〃	D-9		黒茶褐色	〃		
	851	〃	F-3		明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .E.M		

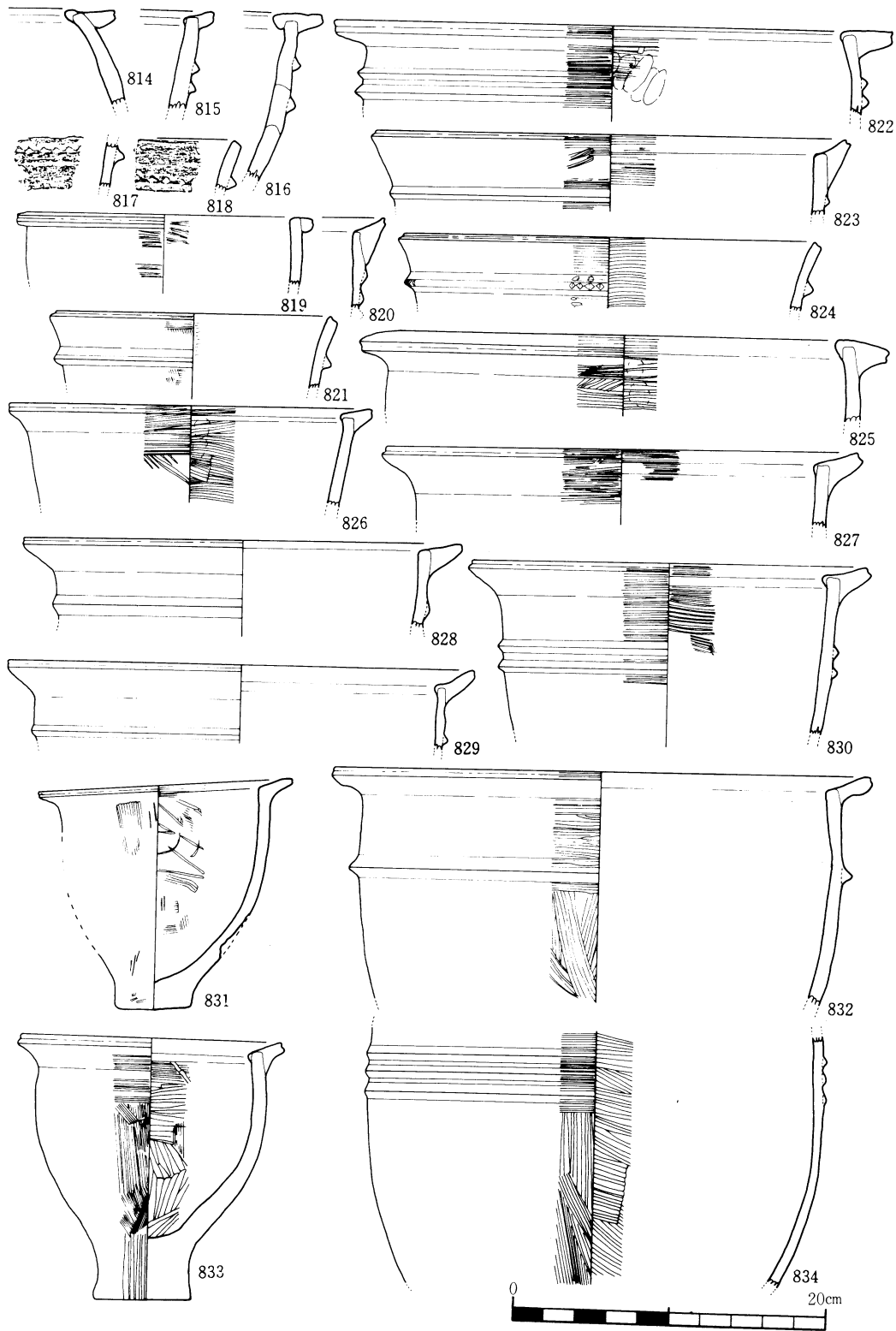


Fig. 136 王子遺跡出土土器実測図 (9)



Fig 番号	遺物 番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
Fig 137	852	口縁部	B-8		灰黒褐色	Q.P <sub>L</sub> .M		
	853	〃	D-14		茶褐色	〃		
	854	〃	D-13		暗褐色	Q.P <sub>L</sub> .M		
	855	〃	D-25		暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M		
	856	〃	D-19		〃	〃		
	857	〃	F-21		灰黒色	Q.P <sub>L</sub> .H		
	858	〃	B-11		明茶褐色	〃		
	859	〃	D-25		赤茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M		
	860	〃	E-13		明褐色	Q.P <sub>L</sub>		
	861	〃	D-6	①(25.7)	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> .M		
	862	〃	B-11	①(30.1)	暗茶褐色	〃		
	863	〃	E-8	①(31.4)	〃	〃		
	864	〃	C-18	①(33.2)	〃	〃		

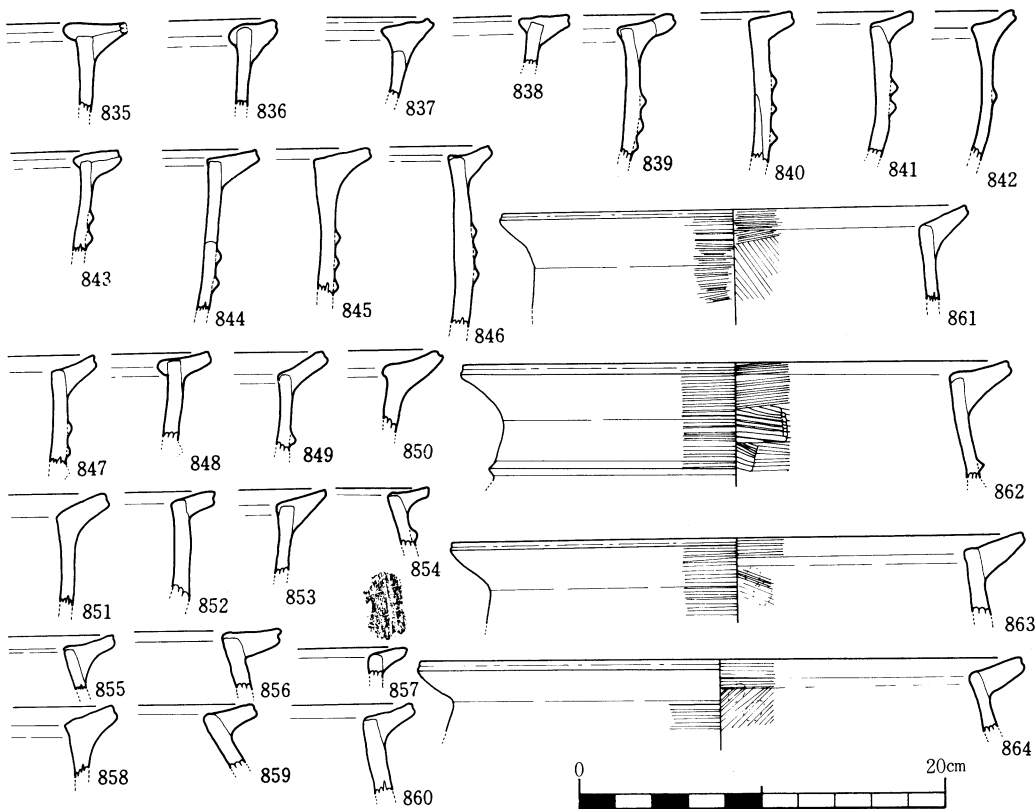


Fig. 137 王子遺跡出土土器実測図 (10)

2. 大型甕形土器 (Fig. 138~140, PL. 34)

大型甕形土器は、B・C-4・5区、E-8区、D・B-15・16区、C-18・20・21区、C・D-20・21区、C・D-23・24区のⅡb層より出土を多く認めた。口縁部の形状が直口するものや内湾するものがあり、逆L字状もしくは逆L字状に近く外反するもの、くの字状に外反するものがある。口縁部端面は凹むもので、口縁部内側には張り出しを作り出すものと稜を作り出すものがある。口縁部上面は、凹むものものと坦面を作るものがある。内・外面の調整は、横位、斜位及び縦位の刷毛などで調整であるが、一部篋削りや指頭圧調整痕が観察されるものもある。これらの土器には輪積みの手法の痕跡を残すものもある。

以下、土器の一覧表で説明を加える。

Tab. 45 大型甕形土器一覧表

法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

Fig. 番号	遺物番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
Fig 138	865	口縁部	D-15		明茶褐色	Q.P.L.M	内湾する口縁部で、くの字状に外反する。口縁部端面は凹む。口縁部内側には張り出しを作り出す。口縁部上面は凹む。口縁部外側下位には断面台形状貼付突を廻らす。突端面は凹む。上記表現のないものについて特徴を付記する。	内・外面ともに横位、斜位及び縦位の刷毛などで調整痕や指頭圧調整痕を残すものもある。一部篋削りも認められる。以下、上記の表現のないものについて特徴を付記する。 865-内・外面ともに磨減や剥落を認め、調整は不明である。 867-内面に指頭圧調整痕を残す。 870-外面には磨減がほとんどである。内面は指頭圧調整痕が篋磨きを認める。 872-外面に篋削りを認める。 873-内・外面は磨減を認め、輪積みの手法を残す。 874-内面は全体に磨減を認める。 875-内面は部分的に磨減を認める。 876-内面に磨減を認める。 878-指頭圧調整痕を残す。 880-内・外面ともに刷毛などで調整痕を認め、部分的に篋削りである。輪積みの手法を残す。
	866	〃	C-24		暗茶褐色	Q.P.L.M.H		
	867	〃	D-16		茶褐色	Q.P.L.H		
	868	〃	C-23		暗茶褐色	Q.P.L.M.H		
	869	〃	C-4		明褐色	Q.P.L.H		
	870	〃	C-20		〃	Q.P.L		
	871	〃	C-21		赤茶褐色	Q.P.L.H		
	872	口縁部 胴部	B-15	①(44.9)	茶褐色	〃		
	873	〃	E-8	①(35.0)	褐色	〃		
	874	〃	C-5	①(44.0) ③(40.6)	暗褐色	〃		
Fig 139	875	〃	D-24	①(42.0) ③(41.6)	褐色	〃		
	876	口縁部 胴部	C-24	①(49.5) ③(50.3)	茶褐色	Q.P.L.M		
	877	〃	〃	①(40.9) ③(48.9)	〃	〃		
Fig 140	878	胴部	〃	③(41.0)	暗茶褐色	〃		
	879	口縁部	B-5	①(54.3)	暗褐色	Q.P.L.H		
	880	胴部	C-18	③(48.2)	茶褐色	Q.P.L		
	881	口縁部	B-15	①(61.8) ③(57.8)	明褐色	〃		
	882	口縁部 胴部	C-23	①(55.4) ③(54.4)	明茶褐色	Q.P.L.M		
	883	〃	C-24	①(60.0) ③(59.8)	暗茶褐色	Q.P.L.M.H		
	884	底部	D-21	④(9.0)	茶褐色	〃		

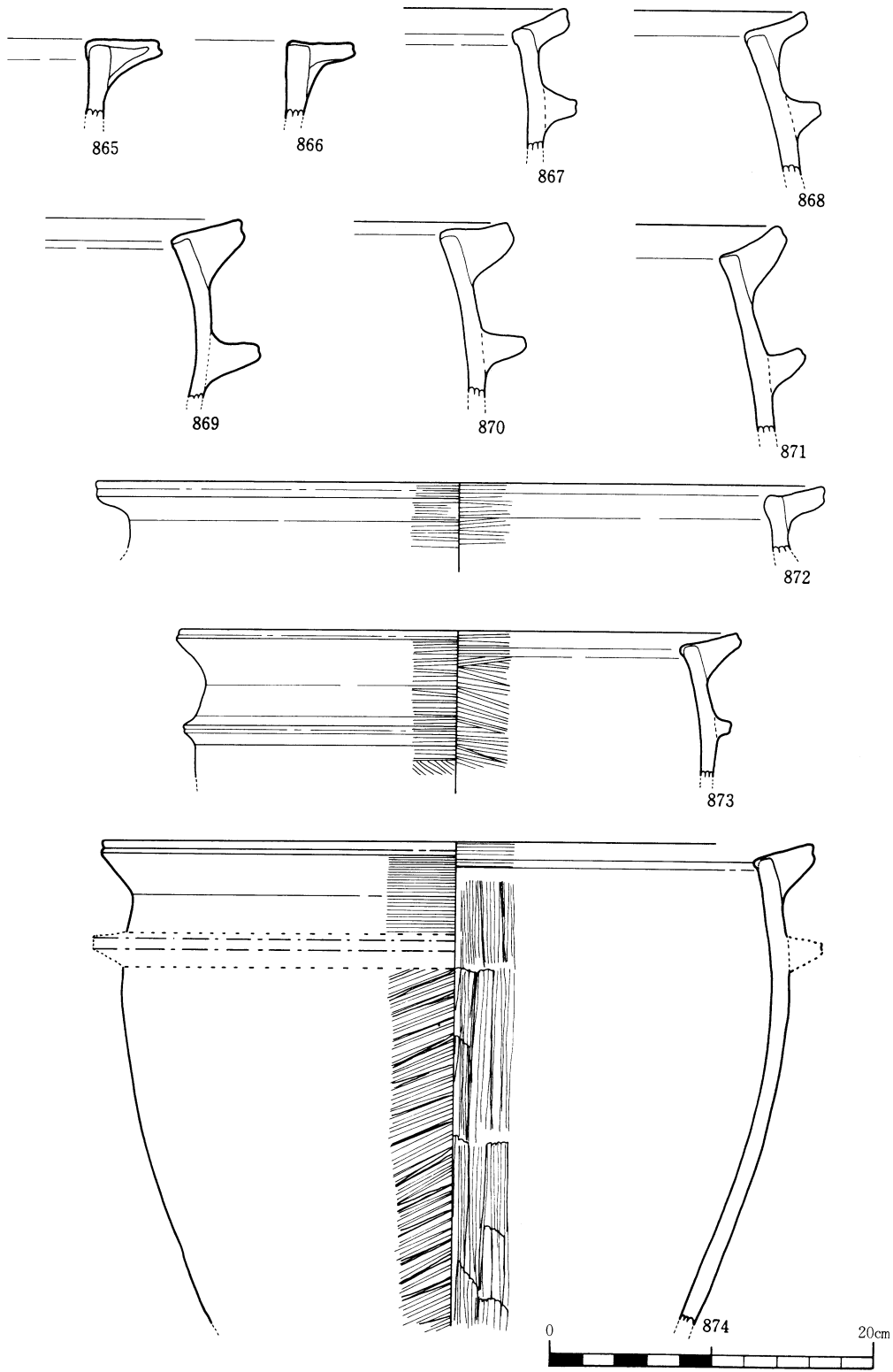


Fig. 138 王子遺跡出土土器実測図(11)

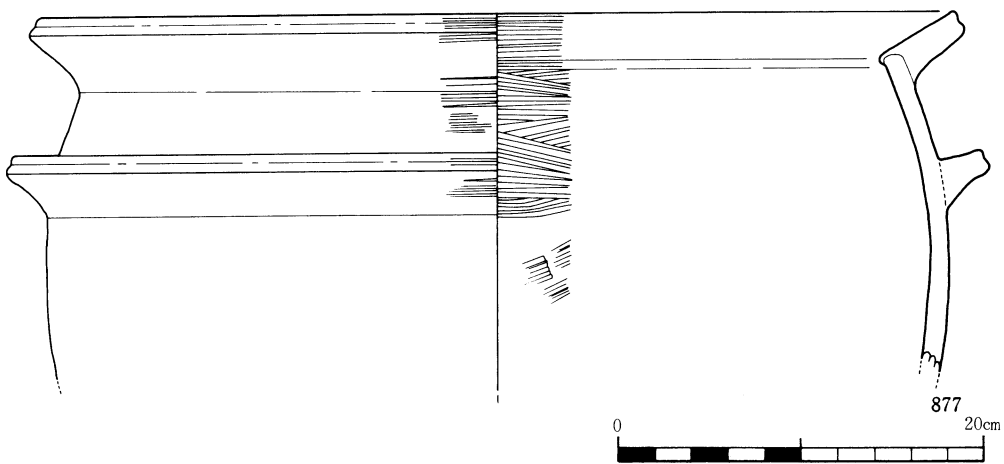
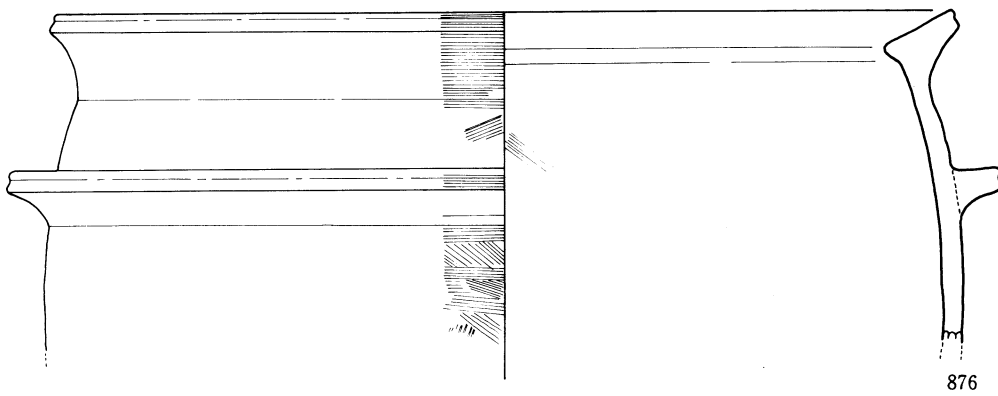
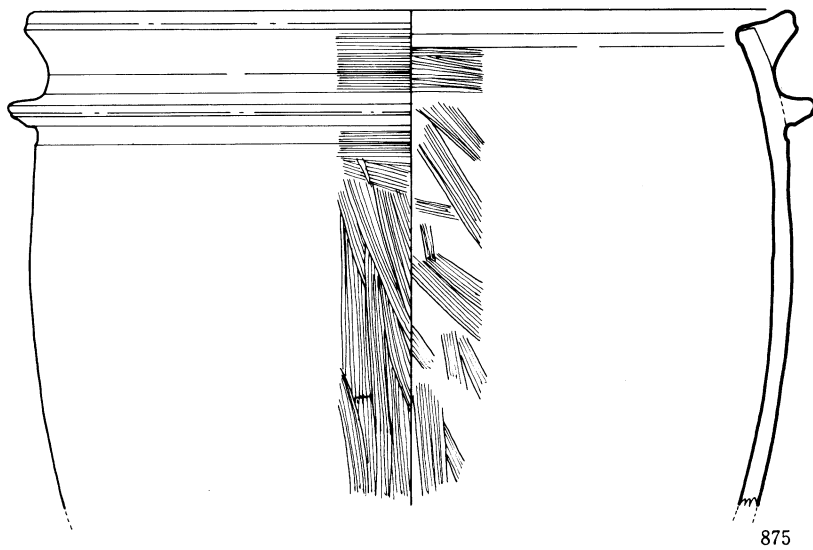


Fig. 139 王子遺跡出土土器実測図(12)

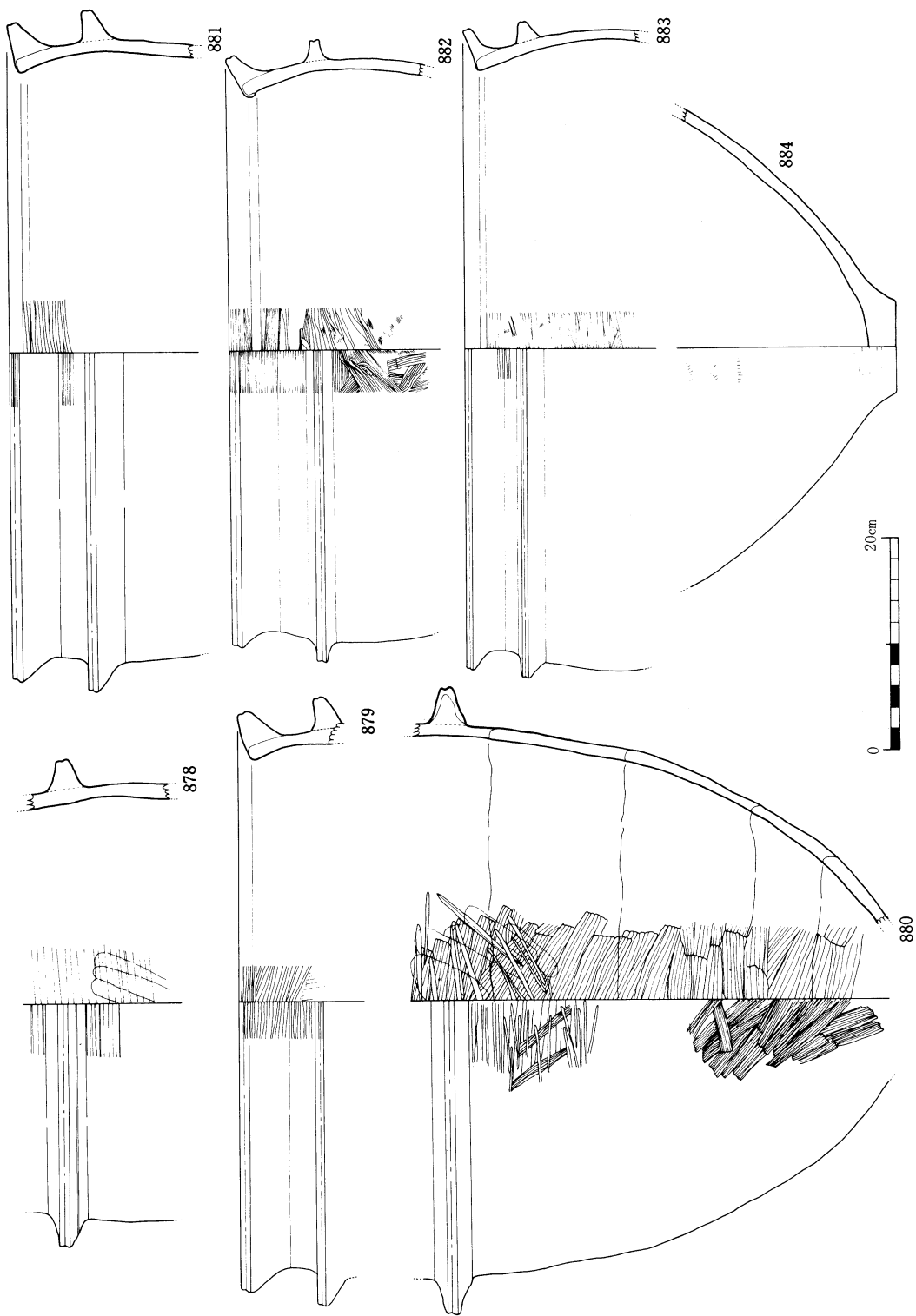


Fig. 140 王子遺跡出土土器実測図(13)

3. 壺形土器 (Fig. 141~144, PL. 34)

壺形土器には、口縁部の形状が直線的に立ち上がるもの、直線的に立ち上がりながらわずかに外反するもの、大きく外反するもの、口縁部内側に張り出しを作るもの、口縁部内面に貼付突帯を廻らすもの、口縁部の外面直下に突帯を廻らし、口縁部が二又状を呈するものがある。これら形状のほか、口縁部端面が肥厚拡張され、その拡張部に凹線文が施されたもの、立ち上がりながら大きく外反し口唇部の凹むもの、無頸を呈するもの等、多種にわたる。肩部は張るもの、張りのないもの、胴部は丸味を帯びながら張るもの、張りのないものがある。これらの土器は、完形品が少なく、全体の器形を知り得るものは少ない。以下、土器の一覧表で説明を加える。

Tab. 46 壺形土器一覧表

法量の単位cm, ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

Fig 番号	遺物 番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴		
Fig 141	885	口縁部	D-19	①(13.1)	明茶褐色	Q.P.L.H	口縁部が直線的に立ち上がり、逆L字状に外反するものや、直線的に立ち上がりながらわずかに外反し、垂水下り気味に外反するもの、大きく外反し、垂水下り気味に外反するもの。口縁部内側に稜線や張り出しを作るもの。口縁部内側に貼付突帯を廻らすものである。肩部は張るもの、張りのないものがあり、胴部は張るものや、丸味を帯びるものを認める。上記表現のないものについて、特徴を付記する。	内・外面には刷毛などで調整が主体的に認め、横位・斜位・縦位などの方向の調整である。上記表現のないものについて、特徴を付記する。		
	886	〃	E-6	①(13.6)	赤茶褐色	Q.P.L.M				
	887	〃	D-26	①(15.4)	暗褐色	Q.P.L.M			886-内・外面ともに鈍削りを認める。	
	888	〃	C-5	①(12.6)	明茶褐色	Q.P.L.M			887-外面に鈍削りを認める。	
	889	〃	C-4	①(16.9)	明褐色	Q.P.L.H			889-内・外面ともなで及び鈍削り認める。	
	890	〃	C-4	①(15.6)	〃	Q.P.L			890-鈍削りを外面に認める。	
	891	〃	E-7	①(17.8)	明茶褐色	Q.P.L.M			891-内・外面ともに磨滅のため不明である。	
	892	〃	E-17	①(21.2)	黒褐色	Q.P.L.M			893-一部外面に磨滅を認める。	
	893	〃	B-11	①(23.8)	明茶褐色	Q.P.L.H.O <sub>6</sub>			895-外面はなで及び鈍磨きを認め、内面に指頭圧調整痕を残す、一部鈍削りである。	
	894	〃	D-24	①(23.2)	茶褐色	Q.P.L.M			896-指頭圧調整痕を外面に残し刷毛などで調整である。内面一部に鈍削りを認める。	
	895	〃	C-7	①(18.2)	明茶褐色	Q.P.L.M			888, 891, 893-稜線を作り出す。他は内側に張り出しを作り出す。	897-内面は一部鈍削りを認める。 900-外面は鈍磨きが見られる。
	896	〃	A-7	①(23.6)	明黄褐色	Q.P.L.M			888, 893-口縁部端面は丸味を帯びる。	902-剥落が著しい。
	897	〃	B-15		黒褐色	Q.P.L.M			897~900-口縁部で、垂れ下り気味に外反する。	906-外面の一部に鈍削りを認める。
	898	〃	D-26		明茶褐色	Q.P.L.M			900-口縁部外側直下に貼付突帯を廻らす。	907-外面は剥落しており不明である。
	899	〃	〃		暗褐色	Q.P.L.M			901~910, 912~917-肩部より立ち上がりながら大きく外反する。	908-内・外面ともに磨滅及び剥落を認める。
	900	〃	D-19		〃	Q.P.L.H			口縁部と思われる。903, 908, 910-口縁部内側に稜を作り出す。	909-口縁部上面はなで調整後一部鈍削りを認める。
	901	〃	C-10	①(20.2)	〃	Q.P.L.M			904~907, 909, 912~917-口縁部内側に張り出しを作り出す。	912-内面に一部鈍削りを認める。 914-内面になで調整後鈍削りを認める。
	902	〃	C-19		明褐色	Q.P.L.H			911, 918, 919, 923 ~ 926, 928, 930 ~ 932-肩部より直線的に立ち上がりながら大きく外反する口縁部で、口縁部内側に断面三角形貼付突帯を廻らす器形である。	915-外面に鈍磨きを一部に認める。 917-外面に鈍削りを認める。
	903	〃	D-9	①(20.3)	明茶褐色	Q.P.L.H			918, 919, 924, 927, 930, 932-口縁部内側に張り出しを作り出す。	918-内・外面ともに薄いなで調整である。 919-外面は薄いなで調整である。
	904	〃	B-11	①(21.8)	暗茶褐色	Q.P.L.H			901~932-口縁部端面凹んで、凹線状を呈する。	920-内面は欠損しているため調整は不明である。
905	〃	A-7	①(23.6)	明褐色	Q.P.L.H	892, 894, 896, 897, 911, 919, 920, 921, 928, 929-口縁部上面が長く丸味を帯びている。	921, 923-内・外面ともに磨滅のため不明である。 924-鈍削りを外面に認める。 925-内・外面ともに一部磨滅を認める。			
906	〃	C-20	①(24.2)	茶褐色	Q.P.L.H					
907	〃	C-10	①(24.2)	褐色	Q.P.L.M					

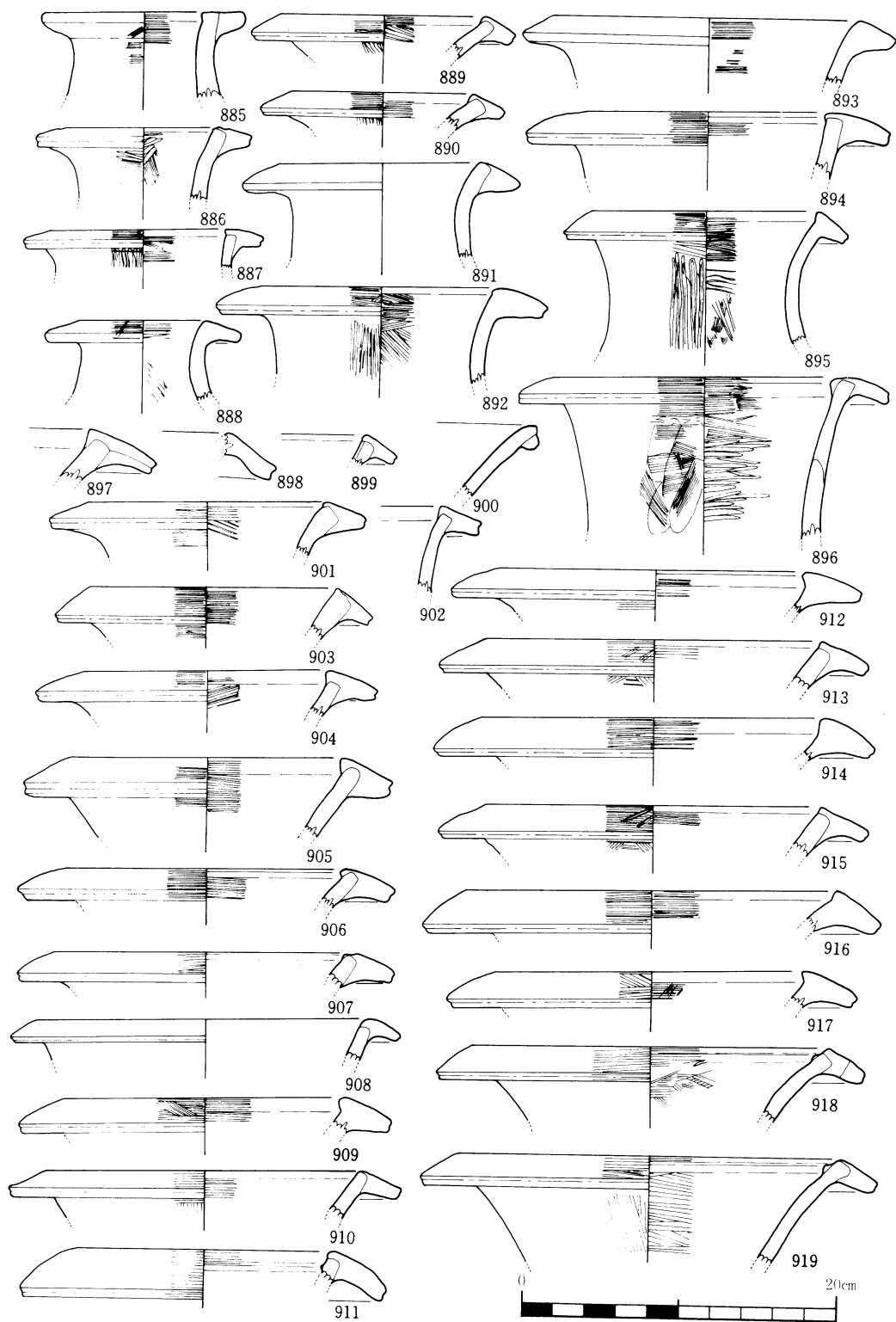


Fig. 141 王子遺跡出土土器実測図(14)

Fig 番号	遺物 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 141	908	口縁部	D-17	①(20.5)	明褐色	Q.P.L.H	920-口縁部上面には篋状施工具により口縁部端面寄りから内側にかけて、平行沈線内に鋸歯文を交差させ、さらに、二重の大小の鋸歯文を連続した状態で施す。	927-内・外面とも磨滅のため調整痕は不明である。口縁部上面は横位のため、929~932-内・外面ともなで調整を認める。
	909	〃	C-6	①(23.8)	暗褐色	Q.P.L.H	921-口縁部上面に篋状の施工具により、鋸歯文を施している破片である。一部丸味を帯びている箇所も認める。	936-外面はなで、内面は大半が剥落のため不明であるが、口縁部付近になで調整を認める。
	910	〃	D-20	①(25.2)	明褐色	Q.P.L.H	922-口縁部上面には、鋸歯文を施している破片で、内側にはわずかな張り出しを作り出す。	937-内・外面ともになで調整で、外面の一部に篋削りを認める。
	911	〃	C-4	①(23.4)	暗茶褐色	Q.P.L.M	923.925-口縁部上面には、円形浮文を施し、内側には断面三角形貼付突帯を廻らす。	938-内・外面ともなで、外面に一部篋磨きを認める。
	912	〃	C-4	①(26.2)	明茶褐色	Q.P.L.H	929-口縁部上面には、円形浮文を施しているが、一か所は貼付部分より剥落している。	939-内・外面ともになで調整である。
	913	〃	B-1	①(27.6)	暗茶褐色	Q.P.L.M	933-口縁部上面には、篋状施工具により鋸歯文を施し、口縁部内面には稜を作り出す。	940-内・外面はなで調整で、内面は剥落を認め、一部指頭圧調整痕を残す。
	914	〃	C-5	①(28.2)	暗褐色	Q.P.L.H	935.947.946.964-口縁部の外側直下に突帯を廻らし、口縁部が二又状を呈する。これらの突帯については、口縁部が外反する状態で下方気味なもの、斜位状のものがある。口縁部より外方へ突出したような部位を認める器形も見られる。これらの突帯及び口唇部は凹んで、凹線状を呈する。	941~943-内・外面ともなで調整である。
	915	〃	F-11	①(27.5)	〃	Q.P.L.M.O <sub>b</sub>	951.952-口唇部は凹んで、凹線状を呈する。突帯は断面三角形貼付突帯を廻らし、突帯端面は凹みを認める。	945-内・外面ともに磨滅しているため不明である。
	916	〃	E-21	①(29.2)	明褐色	Q.P.L.M	957~961.964-口縁部内側に断面三角形貼付突帯を廻らす。	946-内・外面ともになで調整である。
	917	〃	A-7	①(26.2)	〃	Q.P.L	967~970.975-立ち上がりながら大きく外反する口縁部で、口縁部端面は凹む。	947-外面はなで調整及び縦位の篋磨きで、内面は磨滅が著しく、わずかに調整を認める。
	Fig 142	918	〃	C-4	①(27.4)	暗茶褐色	Q.P.L.M.H	978-肩部上位に現存で断面三角形貼付突帯を廻らす。
919		〃	〃	①(29.2)	〃	Q.P.L.M	979-肩部上位に現存で断面三角形貼付突帯を廻らす。	949-外面に磨滅を認めるが、薄いなで調整で、内面は剥落を認めるが、指頭圧調整後、うすいなで調整を認める。
920		〃	C-6		明褐色	Q.P.L.M	970-完形品で小型である。肩は張らず、胴部は丸味を帯びた張りである。胴部は厚い底部をなす。	950-内・外面ともになで調整である。
921		〃	D-E-18		〃	Q.P.L.M	971~974-肩部付近から胴部にかけての部位や胴部付近である。972は胴部に四条、973は肩部付近に現存で十条、胴部付近には三条の突帯を廻らす。	951-内・外面ともなで調整で、外面は篋削り、内面には指頭圧調整痕を残す。
922		〃	B-10		黒褐色	Q.P.L.M	975-外面及び内面上位には、丹塗りを認める。	952-内・外面ともになで調整である。
923		〃	D-20		黄茶褐色	Q.P.L	976-小型で、口縁部及び底部は欠損する。胴部は丸味を帯びた張りであり、肩は張らず、肩部に四条、胴部に三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	953-内・外面ともになで調整である。953-磨滅しているが薄いなで調整である。
924		〃	B-5	①(22.8)	明褐色	Q.P.L.M	977-肩部付近に現存で十条、胴部付近には三条の突帯を廻らす。	955~957-内・外面とも薄いなで調整である。
925		〃	E-20	①(21.1)	黄褐色	Q.P.L.H	978-肩部上位に現存で断面三角形貼付突帯を廻らす。	958-内・外面ともなで調整で、外面の一部に篋磨きを認める。
926		〃	D-9	①(34.2)	暗褐色	Q.P.L.M	979-肩部上位に現存で断面三角形貼付突帯を廻らす。	959~961-内・外面ともになで調整である。
927		〃	E-11	①(35.2)	暗茶褐色	Q.P.L.M	980-内面は薄いなで調整である。	960-内面は薄いなで調整である。
928		〃	B-15	①(36.2)	暗褐色	Q.P.L.M	981-なで調整で、外面は一部篋削りを認める。	962-なで調整で、外面は一部篋削りを認める。
929		〃	D-17	①(38.0)	〃	Q.P.L.M	982-内・外面ともになで調整である。	963~965-内・外面ともになで調整である。
930		〃	C-11	①(25.4)	〃	Q.P.L.M	983-内・外面ともになで調整である。外面は篋削り、内面は指頭圧調整痕を残す。	966-内・外面ともになで調整である。
931		〃	D-9	①(26.9)	茶褐色	Q.P.L.M	984-内・外面ともになで調整である。外面は篋削り、内面は指頭圧調整痕を残す。	967-内・外面ともになで調整で、外面に篋磨きを認める。
932		〃	D-17	①(26.4)	〃	Q.P.L.M	985-内・外面ともになで調整である。	968-内・外面ともに磨滅しているため調整痕は不明である。
933		〃	D-18	①(28.6)	黒褐色	Q.P.L.M	986-内・外面ともになで調整で、内面は磨滅が大部分であるが、なで調整を認める。	969-外面は薄いなで調整で、内面は磨滅が大部分であるが、なで調整を認める。
934		〃	D-25	①(14.6)	暗茶褐色	Q.P.L.M	987-内・外面ともになで調整である。	970.971-内・外面ともに刷毛なで調整である。769-内面は指頭圧調整痕を残す。
935		〃	C-5	①(14.4)	〃	Q.P.L.H	988~1000-肩部及び胴部に突帯を廻らす。997は肩部に、現存で七条の小さい断面三角形貼付突帯を廻らす。	972-内・外面ともになで調整であ
936		〃	D-8	①(12.9)	茶褐色	Q.P.L.M	999は八条の突帯を廻らす。	
937		〃	E-7	①(12.6)	暗茶褐色	Q.P.L.M	1000は肩部に四条の断面三角形貼付突帯を胴部から上面にかけて三条の	
938	〃	D-16	①(16.9)	〃	Q.P.L.H			
939	〃	C-16	①(16.2)	明褐色	Q.P.L.H			
940	〃	D-5	①(21.0)	明茶褐色	Q.P.L.M.O <sub>b</sub>			
941	〃	C-20	①(20.8)	明灰褐色	Q.P.L.M			



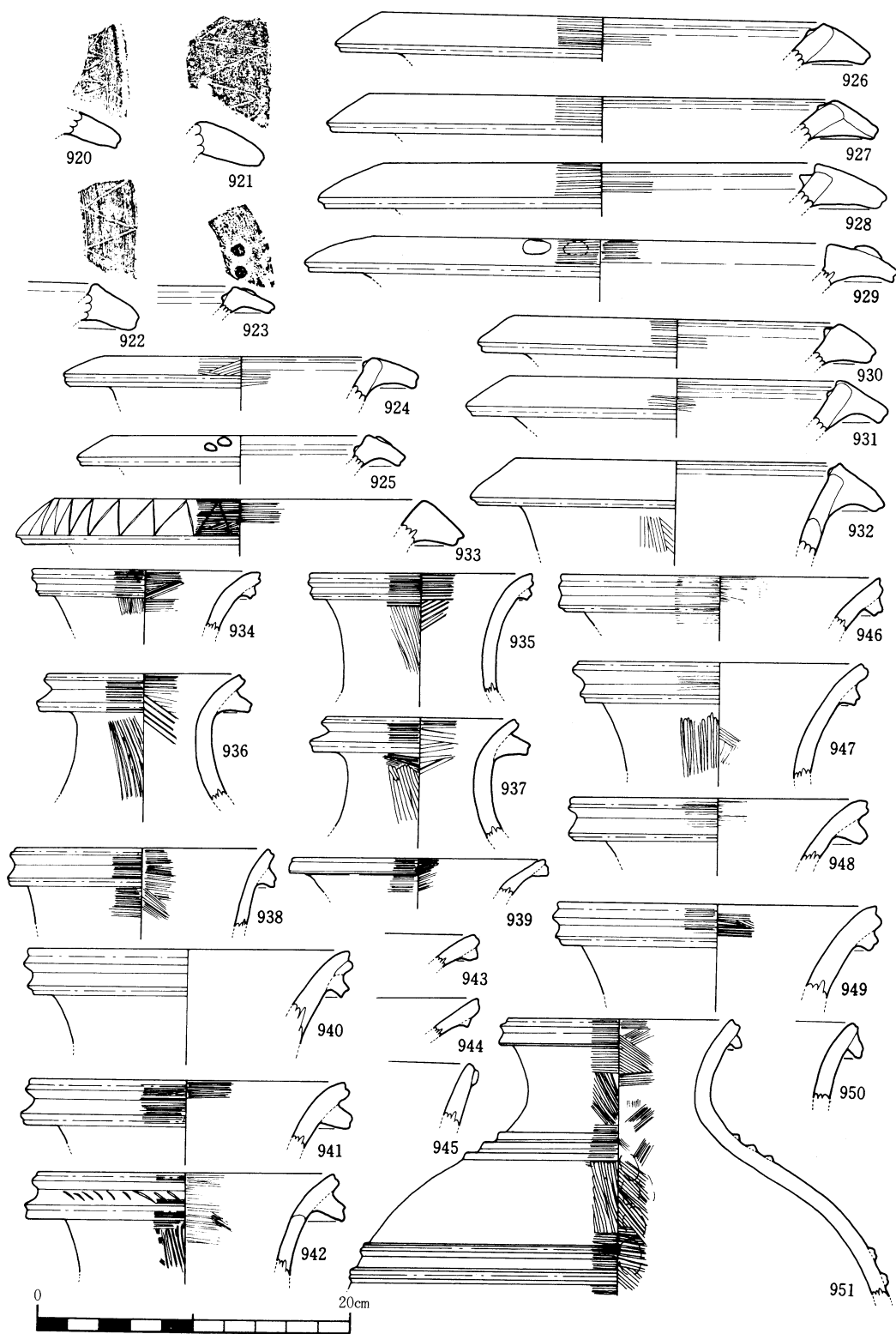


Fig. 142 王子遺跡出土土器実測図(15)

Fig 番号	遺物 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 142	942	口縁部	B-15	①(19.8)	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M.H	断面台形状突帯を廻らし、端面は凹む。	る。外面は磨きを認める。
	943	〃	D-17		褐色	Q.P <sub>L</sub> H	993-胴部付近と思われ、三条の断面三角形貼付突帯を廻らす。	973-内・外面ともに磨減を認め、外面とともに磨減を認め、外面の一部にて調整を認める。
	944	〃	〃		明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H	996-胴部付近と思われ、断面台形状突帯を廻らし、突帯端面は凹む、突帯上位には篋状施文による鋸歯文の一部と思われる施文を認める。	994-外面はなで調整を認め、内面は剥落が著しいが、一部にて調整である。
	945	〃	C-18		明褐色	Q.P <sub>L</sub> M.H	997-現存の器体で、上位に約5～6mm程度の大きさの暗文が2条と下位にわずかに認め、器壁は非常に薄い。	977-内・外面とも調整痕不明である。
	946	〃	E-23	①(20.7)	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> H	998-胴部付近から胴部の部位で、胴部は丸味を帯びて張る。	978-内・外面ともにて調整で、外面は、一部に横位及び斜位のなで、内面には指頭圧調整痕を認める。
	947	〃	E-11	①(18.8)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	978-断面三角形貼付突帯をもつ。	979-外面はなで磨き、内面剥落して不明である。
	948	〃	B-20	①(19.1)	明褐色	Q.P <sub>L</sub> M	979-台形状突帯で端面は凹む。778-肩部及び胴部にそれぞれ断面三角形突帯を廻らす。	980-内・外面ともにて、内面に指頭圧調整痕を残す。
	949	〃	C-5	①(21.0)	〃	Q.P <sub>L</sub> M.H	981-大きく外反する口縁部で、口縁部端面は丸味を帯び、内側に断面三角形貼付突帯をもち突帯端面は凹む。	981-内・外面はなで調整である。
	950	〃	E-18		暗褐色	Q.P <sub>L</sub> H	982-断面三角形貼付突帯をもち突帯端面は凹む。	982-外面はなで調整で、内面は剥落が著しい。
	951	口縁部 胴部	F-7	①(15.3)	暗灰褐色	Q.P <sub>L</sub>	983-外面はなで調整で、内面は薄く斜位のなで調整である。	983-外面の調整痕は不明である。内面は薄く斜位のなで調整である。
Fig 143	952	口縁部	〃		褐色	Q.P <sub>L</sub> H	984-内・外面ともに磨減を認める。	984-内・外面ともに磨減を認める。
	953	〃	E-16		明褐色	Q.P <sub>L</sub> H	985-内・外面とも横位のなで調整で、磨きを認める。	985-内・外面とも横位のなで調整で、磨きを認める。
	954	〃	A-7		暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	982-胴部は付近で、断面台形状貼付突帯で、端面は凹む。	986-内・外面とも横位のなで調整で、指頭圧調整痕を残す。
	955	〃	E-18		〃	Q.P <sub>L</sub>	983-胴部と思われ、器壁を丹と思わせるような赤色で、採色したかのように精選されたきめ細かい化粧土である。	987-内面は磨減しているため不明である。
	956	〃	C-20		褐色	Q.P <sub>L</sub> M	984-肩は張り、逆し字状に外反する口縁部である。端面は丸味を帯び、器壁が厚い。	988-内・外面ともに指頭圧調整痕を残す。外面は斜位にて調整で、磨きを認める。
	957	〃	B-10		暗褐色		985,986-無蓋壺である。987-肩部付近と思われ、器壁を丹と思わせるような赤色で採色したかのように精選されたきめ細かい化粧土である。	989-外面はなで調整で、横位、斜位及び縦位の一部磨きを認め、内面は剥落して不明である。
	958	〃	B-8		茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M.O <sub>b</sub>	988-平底の底部から胴部上位の器体で、胴は張らず、胴長である。	996-外面は横位のなで調整で、内面は指頭圧調整痕が残る。
	959	〃	F-22		〃	Q.P <sub>L</sub> M	989-肩は張らず、偏球形を呈し、胴部に断面三角形貼付突帯を廻らす。	992-外面はなで薄く横位や斜位のなで調整で、内面は磨減を認める。
	960	〃	E-7	①(19.9)	黄茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	991-小破片であるが、一条の断面三角形貼付突帯をもち、突帯上位に篋状の工具により施文し、鋸歯状になると思われる、線刻を施す。	993-外面はなで調整で、内面は剥落して不明である。
	961	〃	B-15	①(24.2)	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> M.H	992-肩部に二条断面三角形貼付突帯を廻らす。	994-外面は縦位のなで調整で、内面は指頭圧調整痕を残す。
	962	〃	E-19	①(22.8)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	995-外面は薄く斜位のなで調整で、内面は剥落して不明である。	995-外面は薄く斜位のなで調整で、内面は剥落して不明である。
	963	〃	B-11	①(24.6)	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	996-外面は縦位のなで調整で、内面は指頭圧調整痕を残す。	996-外面は薄く横位・斜位のなで調整で、内面は剥落して不明である。
	964	〃	D-21	①(28.0)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M	997-内・外面ともに磨減や剥落して調整痕は不明である。	997-内・外面ともに磨減や剥落して調整痕は不明である。
	965	頸部,胴部	F-12		〃	Q.P <sub>L</sub> H.M	998-外面は縦位・横位のなで調整で、内面は指頭圧調整痕を残し、薄い横位や斜位のなで調整で、一部に篋削りを認める。	998-外面は縦位・横位のなで調整で、内面は指頭圧調整痕を残し、薄い横位や斜位のなで調整で、一部に篋削りを認める。
	966	口縁部	B-8		暗褐色	Q.P <sub>L</sub> H.M	999-外面は、横位や斜位のなで調整で、内面は剥落や磨減が著しいが斜位のなで調整を認める。	999-外面は、横位や斜位のなで調整で、内面は剥落や磨減が著しいが斜位のなで調整を認める。
	967	〃	〃		茶褐色	H.M	1000-外面は横位・斜位・縦位のなで調整で、一部に篋削りや磨きを認める。	1000-外面は横位・斜位・縦位のなで調整で、一部に篋削りや磨きを認める。
	968	〃	B-9		〃	Q.P <sub>L</sub> M		
	969	〃	B-11		暗褐色	Q.P <sub>L</sub> H		
	970	完形	E-20	①(15.4) ②(25.0) ③(20.4) ④(6.0)	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> M		
	971	胴部	B-11	③(24.3)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub>		
972	〃	B-10	③(29.0)	〃	Q.P <sub>L</sub> H.M			
973	肩部,胴部	E-8	③(29.9)	赤茶褐色	Q.P <sub>L</sub> H			
974	〃	F-23	③(34.8)	明褐色	Q.P <sub>L</sub> O <sub>b</sub>			

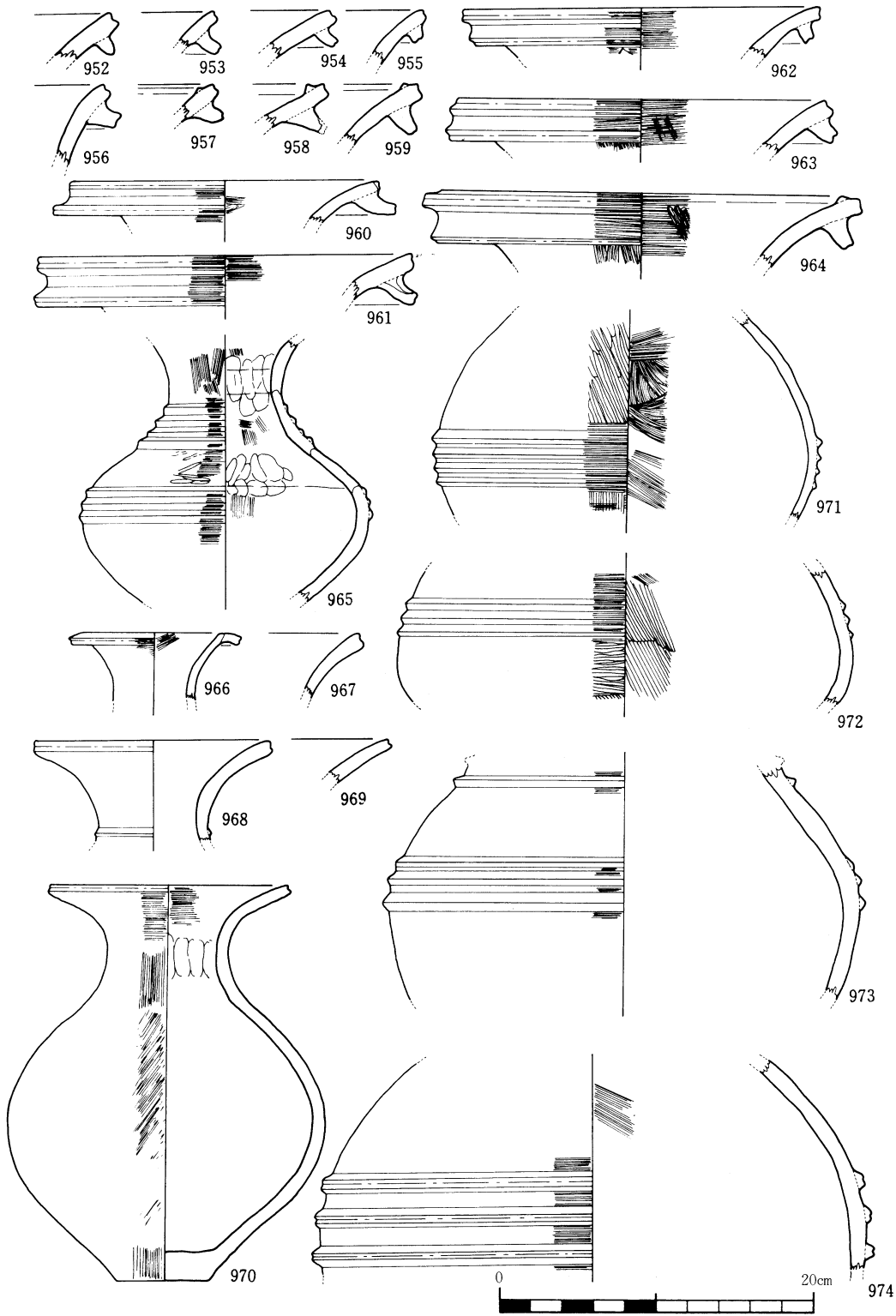


Fig. 143 王子遺跡出土土器実測図(16)

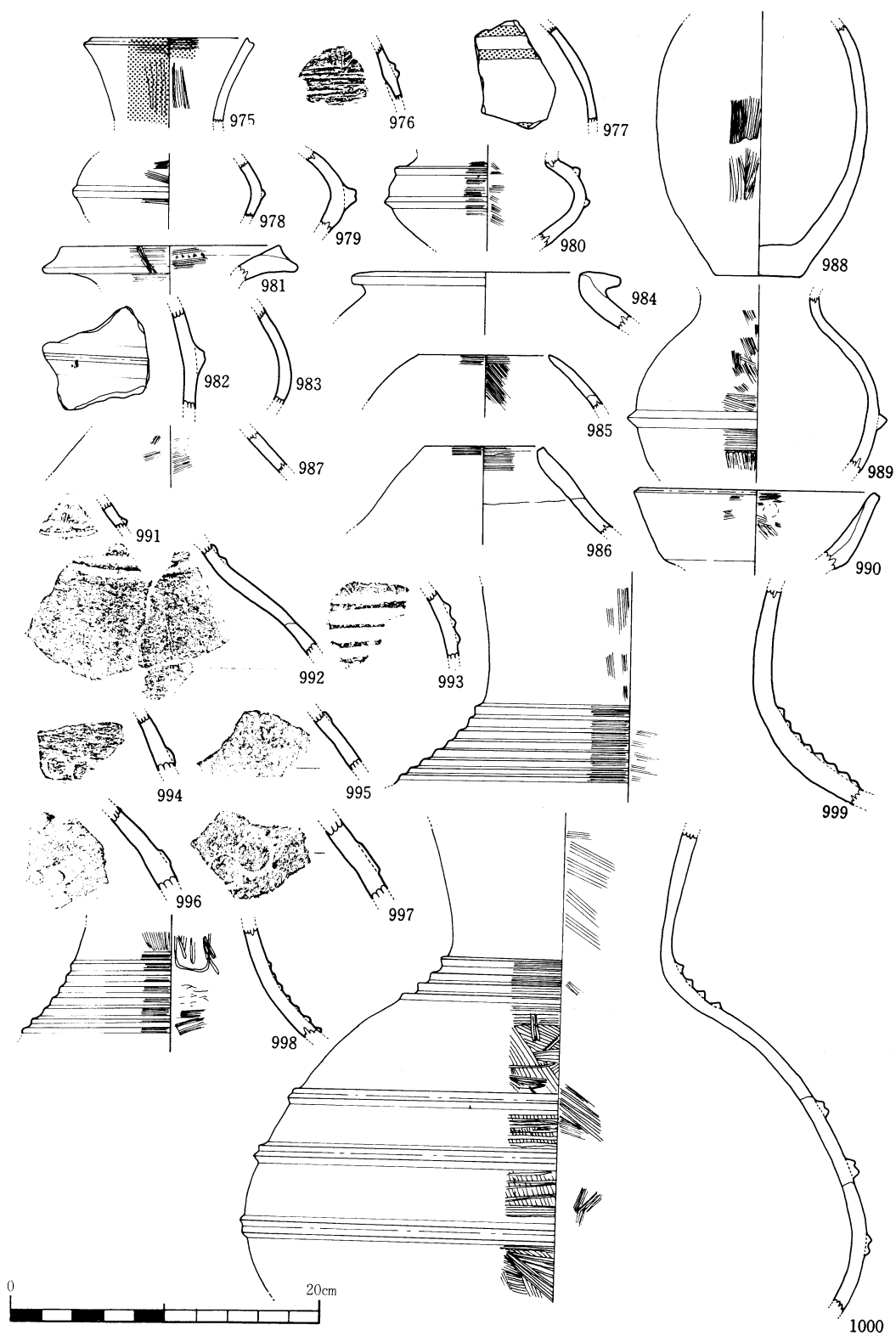


Fig. 144 王子遺跡出土土器実測図(17)

Fig 番号	遺物 番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
144	975	口縁部	F-23		赤褐色	Q.P.L	口縁部が直口し、逆L字状か逆L字に近くくの字状に外反するものや、丸味を帯びるもの、これらの形状のほか内湾するもの、外傾するもの内径するもの等もある。口縁部端面は凹んで、凹線状を呈するもの、丸味を帯びるもの等があり、口縁部内側には張り出しを作り出すものや、稜を作り出すものがある。口縁部上面は、凹むもの、丸味を帯びるもの坦面を作るものがある。胴部は張り丸味を帯びるものや張りのないものがある。	1001-内・外面ともに横線で調整である。
	976	胴部	D-22		赤茶褐色	Q.P.L.M		1002-内・外は横線で調整で、内面は指頭圧調整痕を残す。
	977	〃	F-11		明褐色	Q.P.L.H		1003-内・外面ともに横線のなで調整で、外面には指紋の付着を認める。内面は指頭圧調整は横線のなで調整である。
	978	〃	D-19		明褐色	Q.P.L.M		1004-外面は煤の付着のため鮮明さを欠くが、横位、斜位のなで調整である。内面は指頭圧調整痕を残す。
	979	〃	B-11		黒褐色	Q.P.L.M		1005-内・外面は横位、斜位のなで調整で、内面は指頭圧調整痕を残す。
	980	肩部, 胴部	B-8 ③(12.7)		〃	Q.P.L.M		1006-外面は横位のなで調整で、内面は指頭圧調整は横位のなで調整である。
	981	口縁部	C-21 ①(16.6)		灰褐色	Q.P.L		1007-内・外面ともに磨滅のため調整痕は不明である。内面に指頭圧調整痕を残す。
	982	胴部	B-16		茶褐色	Q.P.L.M		1008-外面、鮮明さは欠けるが、横位のなで、内面は指頭圧調整後横位なで調整である。
	983	〃	G-21		赤褐色	Q.P.L		1009-内・外面とも横位のなで調整である。
	984	口縁部	D-18 ①(17.4)		茶褐色	Q.P.L.H		1010-内・外面ともに横位、斜位のなで、内面は指頭圧調整痕を残す。一部に斜位のなで調整を認める。
	985	〃	H-22 ①(8.5)		暗茶褐色	Q.P.L.M		1011-内・外面は横位のなで、内面に指頭圧調整痕を残す。一部に斜位のなで調整を認める。
	986	〃	D-15 ①(7.7)		茶褐色	Q.P.L.H		1012-内・外面ともに、横位、斜位のなで、外面は縦位のなで調整で、内面は指頭圧調整痕を認める。
	987	肩部	G-21		赤褐色	Q.P.L		1013-外面は横位、縦位のなで、内面は鮮明さに欠けるが、横位のなで調整である。
	988	肩部, 底部	E-8		明茶褐色	Q.P.L.H		1014-内・外面ともに横位、縦位のなで、内面の一部は斜位のなで調整である。
	989	肩部, 胴部	C-8		暗茶褐色	Q.P.L.H		1015-内・外面は横位、斜位のなで、内面は鮮明さに欠ける調整である。
	991	胴部	B-9		褐色	Q.P.L.M		1016-内・外面ともに横位及び斜位のなで、外面は剥落や磨滅を認め、内面は横位及び斜位のなで調整である。
	992	肩部	E-20		暗茶褐色	Q.P.L.H		1017-内・外面ともに横位、縦位のなで調整である。
	993	胴部	F-23		茶褐色	Q.P.L.H		
	994	肩部	F-20		暗褐色	Q.P.L		
	995	〃	D-19		茶褐色	Q.P.L.M		
996	〃	E-14		暗褐色	Q.P.L.M			
997	肩部	E-17		明茶褐色	Q.P.L.M.H			
998	〃	B-15		明褐色	Q.P.L.H			
999	頸部, 肩部	B-14		黄褐色	Q.P.L.M.O <sub>b</sub>			
1000	頸部, 肩部	E-10 ③(40.4)		暗茶褐色	Q.P.L.M.H			

#### 4. 鉢形土器 (Fig. 145~147, PL. 34)

鉢形土器には、口縁部の形状が、直口するもの、内湾するもの、外傾するもの、内径するものがあり、逆L字状に外反するもの、くの字状に外反するもの、垂れ下りのもの、丸味を帯びるものがある。なお、口唇部の二か所に耳状突起をもつものも認める。口縁部端面は凹んで、凹線状を呈するもの、丸味を帯びるもの、口縁部内側には張り出しを作り出すもの、稜を作り出すものがある。口縁部上面は凹むもの、坦面を作るものなどがある。胴部は張り丸味を帯びるもの、張りのないものがあり、中には充実した脚台をもつ鉢もある。これらの土器は、完形品が少なく、全体の器形を知り得るものは少ない。以下の一覧表で説明を加える。

Tab. 47 鉢形土器実測図一覧表

法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

Fig 番号	遺物 番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
145	1001	口縁部	D-5	①(15.4)	明褐色	Q.P.L	1003-小さい口縁部である。 1004-頸部から屈局して、口縁部を作り出す。	なで調整である。 1018-内・外面ともに磨減しており不明である。
	1002	〃	E-17	①(16.8)	黒褐色	〃	1005-上面が短い破片である。 1012-ぶ厚い器壁である。	1019-内・外面ともに横位、斜位のもので、外面の一部に縦位のもので調整である。
	1003	〃	E-20	①(15.2)	明褐色	Q.P.L.H	1013,1016-小さい破片である。	1020-内・外面ともに横位及び斜位のもので、内面は鮮明さを欠く調整である。
	1004	〃	C-6		明茶褐色	Q.P.L.M	1018-垂れ下り気味に外反する、口縁部である。	1021-内・外面ともに磨減しているため不明である。外面の一部に横位のもので調整を認める。
	1005	〃	B-10		黒褐色	〃	1017-裏の可能性もある。 1019~1022-直線的に大きく外反する口縁部である。	1022-外面は横位、斜位、縦位のもので、内面は横位のもので調整である。
	1006	〃	D-9		〃	Q.P.L	1023~1026,1028~1037-小破片する。	1023-内・外面ともに横位のもので調整である。
	1007	〃	B-8		明褐色	〃	832-直線的に大きく外傾し、口唇部付近で若干立ち上がる口縁部である。	1022-外面は横位、斜位、縦位のもので、内面は横位のもので調整である。
	1008	〃	A-7		〃	〃	1035~1037-上面が短い口縁部である。	1023-内・外面ともに横位のもので調整である。
	1009	〃	B-16		黒褐色	〃	1038,1043-器壁が厚い。	1024-外面は煤の付着や剥落しているため不明である。内面は指頭圧調整を残し、横位のもので調整である。
	1010	〃	D-21		明暗褐色	Q.P.L.H	1044,1047,1049~1053-短い口縁部である。	1025-外面は横位、内面は鮮明さを欠くが斜位のもので調整である。
	1011	〃	D-17		明茶褐色	P.L	1064-内側に大きく内湾する。口縁部である。	1026-外面は鮮明さを欠くが横位のもので、内面は横位、斜位のもので調整である。
	1012	〃	E-27		明灰褐色	Q.P.L.H	1068-底部付近を欠損する。丸味を帯びて大きく張る胴部である。	1027-内・外面ともに磨減や剥落のため鮮明さを欠くが横位及び斜位のもので、内面に指頭圧調整痕を残す。
	1013	〃	B-10	①(18.7)	明褐色	〃	1069-充実した脚台の底部より、外方へ開きながら、気口気味に立ち上がる口縁部である。底部の裾端面は丸味を帯びている。	1028-内・外面は横位、外面の一部に斜位のもので調整である。
	1014	口縁部 胴部	〃	①(21.8) ③(17.0)	茶褐色	Q.P.L.M	1070-口縁部外側直下に断面三角形貼付突帯を廻らす。	1029-内・外面ともに指頭圧の調整である。
	1015	口縁部	F-21	①(18.6)	明褐色	Q.P.L.H	1071-上面が短い口縁部である。	1030-内・外面は横位のもので、外面の一部斜位のもので調整である。
	1016	〃	B-10	①(21.7)	黒褐色	Q.P.L	1072-口唇部から口縁部外側にかけて、小さい耳状突起の貼付を認める。	1031-内・外面ともに指頭圧調整が残る。輪積みの手法や指紋の付着を認める。内面は部分的に斜位のもので調整である。
	1017	口縁部 胴部		①(20.6) ③(18.5)	明褐色	Q.P.L.M	1073-外方へ開きながら外傾気味の口縁部であると思われる。口唇部より口縁部にかけて、わりと大きい耳状突起の貼付を認める。	1032-外面磨減しているため調整は不明である。内面は鮮明さを欠くが、斜位のもので調整である。
	1018	口縁部	C-21	①(23.0)	明褐色	Q.P.L	1074-口唇部から口縁部外側にかけて二か所に耳状突起の貼付を認める。	1033-内・外面ともに指頭圧調整があり、外傾気味の口縁部である。口縁部から口縁部にかけて、二か所に耳状突起の貼付を認める。
	1019	口縁部 胴部	B-14	①(28.6) ③(22.4)	明茶褐色	Q.P.L	1075-充実した脚台をもつ完形の鉢である。	1034-外面は鮮明さに欠けるが、横位のもので、内面は横位、斜位のもので調整で、指紋の付着を認める。
	1020	〃	B-15	①(29.4) ③(21.0)	明褐色	Q.P.L.H		1035-内・外面ともに指頭圧による調整を認め、内面は斜位のもので調整である。
	1021	口縁部	〃	①(27.2)	〃	〃		1036-外面は磨減しているが、横位のもので、内面は指頭圧調整痕を残し、横位、斜位のもので調整である。
	1022	口縁部 胴部	A-7	①(28.7) ③(22.2)	茶褐色	Q.P.L.M		1037-外面は部分的に剥落しているが横位のもので、内面は斜位のもので調整である。
	1023	〃	E-23		明茶褐色	Q.P.L.H		1038-外面は鮮明な横位のもので、内面は指頭圧調整痕を残す。横位、斜位のもので調整である。
	1024	〃	C-6		茶褐色	P.P.L.M		1039-外面は部分的に剥落が認めら
	1025	〃	D-17		暗褐色	Q.P.L.H		
	1026	〃	D-5		褐色	Q.P.L.M		
	1027	〃	E-5		黒褐色	〃		
	1028	〃	E-23		黒茶褐色	Q.P.L.H		
	1029	〃	D-14		黒褐色	〃		
	1030	〃	E-22		〃	Q.P.L		
	1031	〃	D-16		〃	〃		

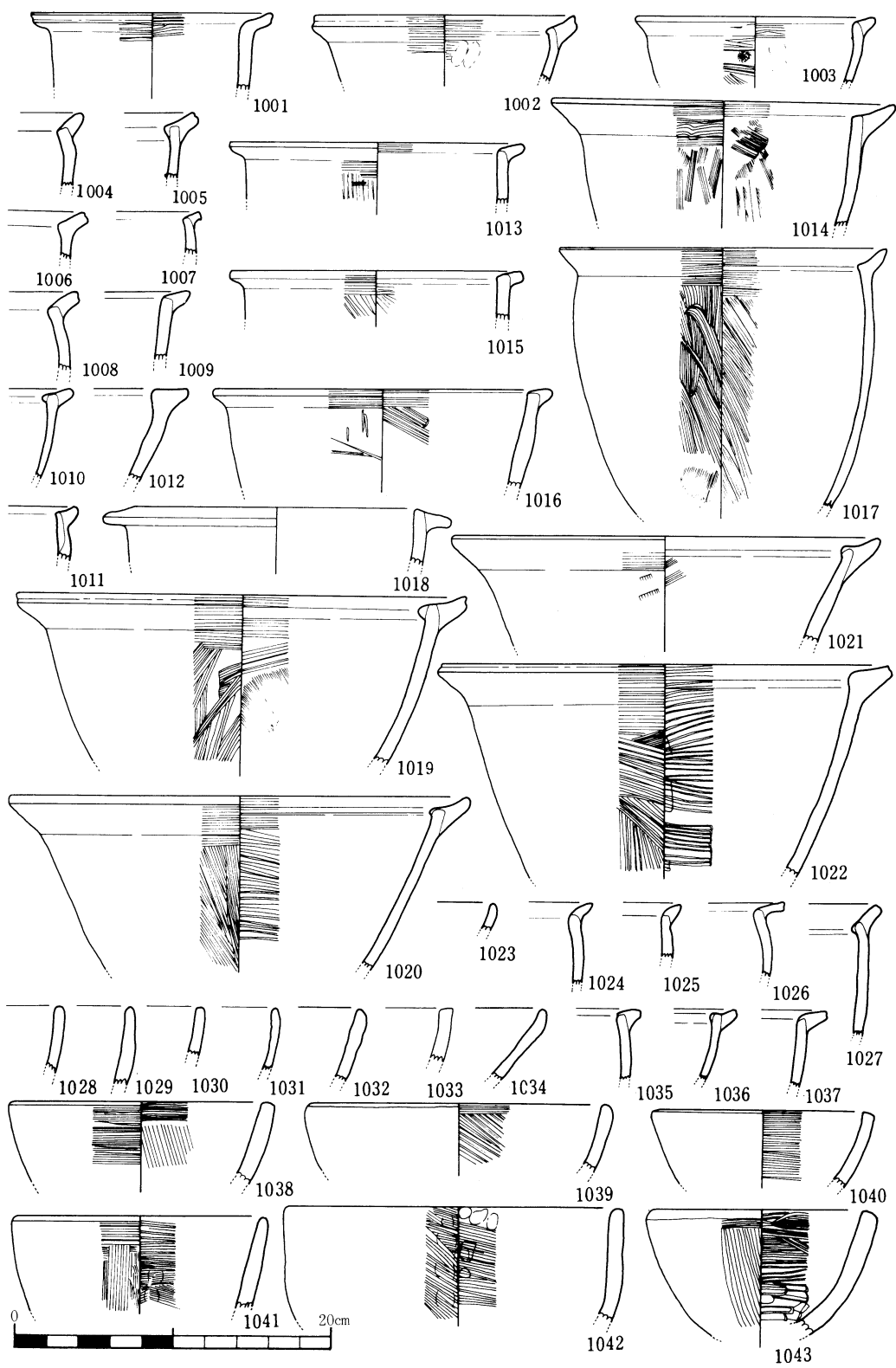


Fig. 145 王子遺跡出土土器実測図(18)

Fig 番号	遺物 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 145	1032	口縁部	B-5		褐色	Q.P <sub>L</sub> .H		れ不明である。内面は横位、斜位の なで調整である。
	1033	〃	E-20		灰褐色	〃		1040-外面は煤の付着と剥落のため に調整痕は不明である。
	1034	〃	C-5		黒茶褐色	Q.P <sub>L</sub>		1041-内・外面ともに鮮明な横位、 縦位のなで調整である。
	1035	〃	D-16		黒褐色	Q.P <sub>L</sub> .H		1042-内・外面ともに指頭圧調整痕 が残る。
	1036	〃	B-9		灰褐色	〃		1043-内・外面ともに磨減を認める が、内面の一部に斜位及び横位のな で調整である。
	1037	〃	C-10		明茶褐色	〃		1044~1075.1046-内・外面ともに剥 落している。
	1038	〃	B-10	①(16.9)	黄茶褐色	Q.P <sub>L</sub>		1047-内・外面ともに斜位のなで、 内面には横位のなで調整である。
	1039	〃	E-27	①(19.5)	黒褐色	Q.P <sub>L</sub> .H		1048-外面は煤の付着のため、鮮明 さに欠けるが、横位、斜位、縦位の なで、指紋の付着を認める。内面は 指頭圧調整痕を残す。横位及び斜位 のなで調整である。
	1040	〃	F-11		〃	〃		1049-内・外面ともに煤の付着や剥 落しているが、横位や斜位のなで調 整で、内面には指頭圧調整を残す。
	1041	〃	C-21	①(16.2)	〃	Q.P <sub>L</sub>		1050-外面は、横位、斜位、縦位の なで、内面は指頭圧調整を残し横位 のなで調整である。
	1042	〃	D-11	①(21.6)	明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .H		1051-外面は煤の付着を顕著に認め、 一部に横位のなで、内面は指頭圧 調整痕を残し、横位のなで調整であ る。
1043	〃	B-8	①(14.5)	明褐色	Q.P <sub>L</sub> .M		1052-外面は磨減や煤の付着のため 大半は不明である。一部横位のなで 調整を認める。	
Fig 146	1044	口縁部 胴部	F-28	①(16.2)	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> .H		1053-内・外面とともに横位及び斜 位のなで、外面は剥落が内面は指 頭圧調整痕を認める。
	1045	〃	E-8	①(19.0) ③(16.2)	茶褐色	〃		1054-内・外面ともに横位、斜位の なで調整で、外面は剥落し、内面は 指頭圧調整痕を認める。
	1046	〃	C-7	①(17.2) ③(15.2)	〃	〃		1055-内・外面ともに鮮明な横位、 斜位のなで調整である。
	1047	〃	A-7	①(14.0) ③(12.6)	〃	Q.P <sub>L</sub> .M		1056-内・外面は横位及び斜位のな で調整で、内面は指頭圧調整痕を残 す。
	1048	〃	D-11	①(19.0) ③(15.1)	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> .H		1057-内・外面ともに鮮明な横位の なで調整で、両面ともに、一部に匏 削りを認める。
	1049	〃	E-9	①(21.4) ③(18.0)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M		1058-外面は横位及び縦位のなで、 内面は横なで調整である。
	1050	〃	C-6	①(23.0) ③(19.4)	明褐色	Q.P <sub>L</sub> .H		1057-外面は横位のなで、内面は 指頭圧調整後横位、斜位のなで調 整である。
	1051	〃	E-26	①(25.2)	暗褐色	〃		1058-外面は横位のなで、内面の 指頭圧調整後、横位のなで調整であ る。
	1052	〃	C-20	①(20.2) ③(17.9)	〃	〃		1059-外面は鮮明な横位のなで、 内面は指頭圧調整後横位なで調整で ある。
	1053	〃	D-11	①(28.6) ③(24.9)	暗茶褐色	〃		1060-外面は横なで、内面は指頭圧 調整後、横位のなで調整である。
	1054	〃	D-25	①(22.0) ③(18.8)	暗褐色	〃		1061-外面は横位のなで、内面は一 部磨減しているため、鮮明さに欠け るが、横位のなで調整である。
	1055	口縁部	C-25	①(25.8)	明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M		1062-外面は鮮明な横位のなで、 内面は指頭圧調整後横位のなで調整 である。
	1056	口縁部 胴部	E-18	①(19.9) ③(18.6)	黒褐色	Q.P <sub>L</sub> .H		1060-外面は横なで、内面は指頭圧 調整後、横位のなで調整である。
	1057	口縁部	B-5	①(30.2)	明褐色	〃		1061-外面は横位のなで、内面は一 部磨減しているため、鮮明さに欠け るが、横位のなで調整である。
	1058	〃	C-4	①(14.0)	〃	〃		1062-外面は鮮明な横位のなで、 内面は指頭圧調整後横位のなで調整 である。
	1059	〃	E-8	①(13.0)	〃	Q.P <sub>L</sub>		
	1060	〃	〃	①(13.6)	〃	Q.P <sub>L</sub> .H		
1061	〃	C-2	①(15.0)	明黄褐色	〃			
1062	〃	B-5	①(17.0)	褐色	Q.P <sub>L</sub> .M			
1063	〃	C-3	①(13.21)	〃	Q.P <sub>L</sub> .H			
1064	〃	B-10	①(15.1)	黒茶褐色	Q.P <sub>L</sub>			
1065	〃	C-3	①(14.0)	明赤茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M			



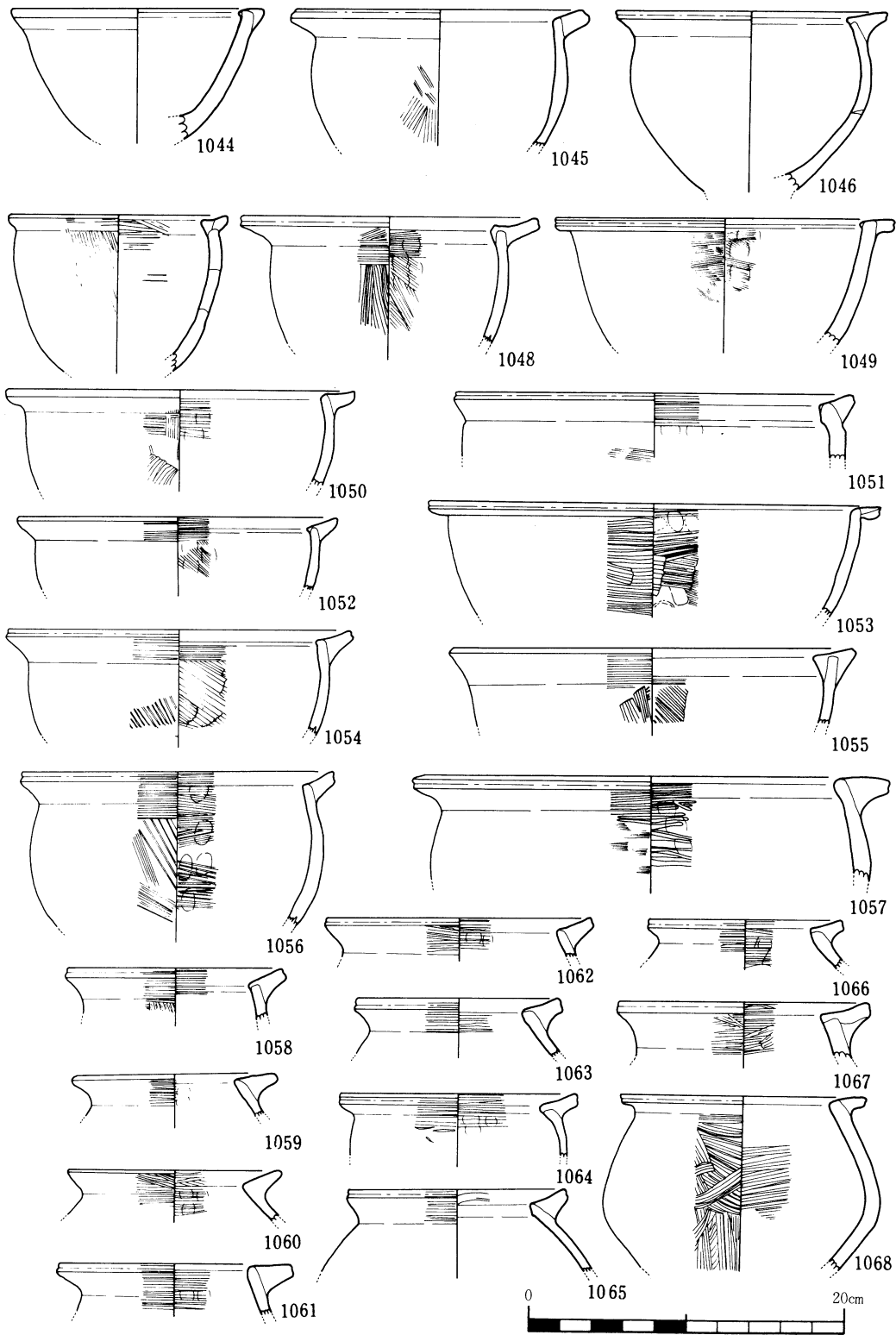


Fig. 146 王子遺跡出土土器実測図(19)

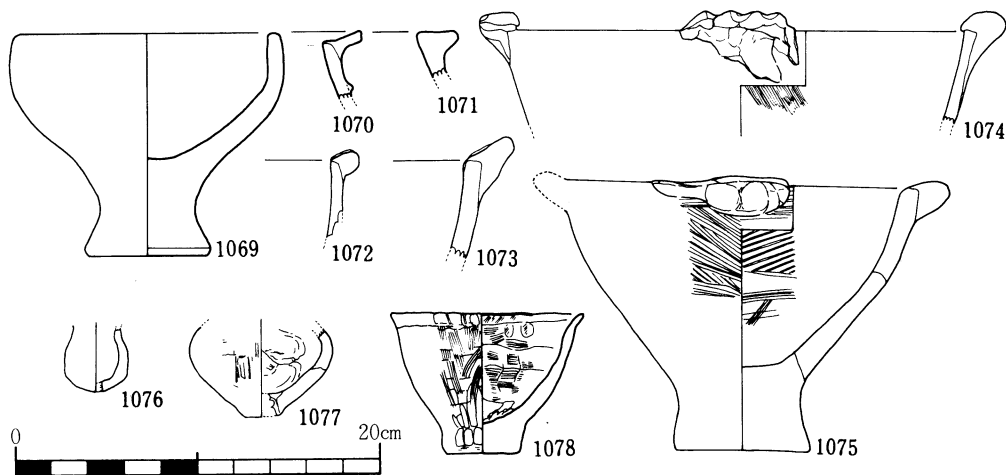


Fig. 147 王子遺跡出土土器実測図(20)

Fig 番号	遺物 番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
146	1066	口縁部	E-10	①(12.4)	暗茶褐色	〃		1063-外面は一部に横位のなで、内面は剥落が著しく調整痕は不明である。
	1067	〃	C-13	①(16.0)	暗茶褐色	Q.P.L.M		1064-内、外面ともに横位のなで調整で、内面は一部指頭圧痕を示す。
	1068	口縁部 胴部	D-9	①(15.4) ③(17.5)	〃	Q.P.L.H		1065~1068-内、外面ともに横位及び一部斜位のなで調整である。
147	1069	完形	E-14	①(14.6) ②(13.0) ③(14.4) ④(6.9)	茶褐色	Q.P.L.H.M	1069-内・外面ともに磨滅しており調整痕は不明。	1069-内・外面ともに磨滅しているため調整痕は不明。
	1070	口縁部	D-23		明茶褐色	Q.P.L.H	1070-内・外面ともに磨滅しているため調整痕は不明。	1071-外面、鮮明さに欠けるが横位のなで、内面は指頭圧調整後斜位のなで調整である。
	1071	〃	D-25		〃	〃	1072-外面は横位及び縦位のなで調整である。	1072-外面は横位及び縦位のなで調整である。
	1072	〃	F-14		〃	〃	1073-外面は磨滅や剥落さらに煤の付着のため大半は不明であるが、一部に横位なで調整を認める。内面は指頭圧調整後横位のなで調整で、耳状突起は指頭圧調整がなされている。	1073-外面は磨滅や剥落さらに煤の付着のため大半は不明であるが、一部に横位なで調整を認める。内面は指頭圧調整後横位のなで調整で、耳状突起は指頭圧調整がなされている。
	1073	〃	B-8		暗褐色	〃	1074-外面は剥落や煤の付着により調整痕は不明である。内面は斜位のなで調整である。	1074-外面は剥落や煤の付着により調整痕は不明である。内面は斜位のなで調整である。
	1074	〃	E-13	①28.7	〃	〃	1075-剥落している。	1075-剥落している。
	1075	完形	C-6	①(22.7) ②(14.9) ③(16.4) ④(7.4)	明茶褐色	Q.P.L.M		

#### 4. 底部 (Fig. 148~153)

底部には、甕形土器、大型甕形土器、甕形土器、壺形土器、鉢形土器などがある。

##### ①甕形土器 (Fig. 148~150)

甕形土器は充実した脚台で、裾が長いもの、短いもの、鋭角的に広がるもの、広がりが少ないもの、裾の端面は凹んで、凹線状を呈するもの、丸味を帯びるものがみられる。脚台は高いものや低いものが認められ、底面は平底のもの、若干凹むものがある。なお、底面や裾の一部に木の葉や靱粒の圧痕が観察されるものがある。以下、一覧表で説明を加える。

Tab. 48 甕形土器（底部）一覧表

法量の単位cm ①底径②底厚

Fig 番号	遺物 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
148	1079	底部	B-15	①(8.2) ②(6.7)	褐色	Q.P.L.M	充実した脈台である。裾は長いもの、短かいもの鋭角的に広がるもの、広がりのないもの、裾の端面は凹んで、凹線状を呈するもの、丸味を帯びるものがみられる。面は平底のもの若干凹むものもある。	外面は縦位、横位の刷毛などで調整が主に見られ、斜位などで調整もなされている。中には磨滅や剥落したものも認められる。内面は欠損しているものが多く、また剥落や磨滅しているものも多い。
	1080	〃	D-8	①(9.4) ②(6.3)	〃	〃		
	1081	〃	B-15	①(8.2) ②(5.9)	明褐色	Q.P.L		
	1082	〃	D-8	①(8.8) ②(6.2)	〃	Q.P.L.H	1079,1084,1086,1087,1089,1090,1094,1096,1100,1102,1104,1111,1112,1120,1121,1136,1139,1146,1150,1152,1154,1157,1158,1162,1164,1184,1185,1191-裾が長く、鋭角的に広がり、裾の端面はわずかに凹んで、凹線状を呈する。	1079,1082~1084,1086,1087,1090~1095,1098,1100~1102,1104,1111,1116,1145,1146,1155,1157,1177,1185-内側は剥落及び磨滅しているため、調整痕は不明である。
	1083	〃	〃	①(8.7) ②(6.2)	〃	Q.P.L.M		
	1084	〃	D-18	①(8.2) ②(5.6)	〃	〃		
	1085	〃	D-8	①(8.5) ②(6.3)	〃	〃		
	1086	〃	E-19	①(7.2) ②5.3	〃	Q.P.L.H	1075,1082,1091,1095,1109,1111,1137,1138,1140,1145,1149,1187-裾は長く、あまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈する。	1080,1096,1097,1107,1108,1112,1113,1147,1156,1153,1183-内面に剥落や磨滅を認めるが、刷毛などで調整をみる。
	1087	〃	C-14	①(8.5) ②(6.1)	褐色	Q.P.L.M		
	1088	〃	E-8	①(7.8) ②(5.7)	〃	〃	1098,1101,1106,1108,1114,1119,1124,1125,1129,1131,1134,1135,1142,1144,1145,1147,1148,1151,1155,1161,1165,1166,1168,1169,1177,1179,1183-裾は短かく、やや鋭角的に広がり、裾の端面は凹んで、凹線状を呈するものや丸味を帯びるものである。	1106,1109,1115,1117~1128,1109,1133~1137,1141,1142,1148,1149,1160,1161,1163,1178-内面が欠損し、不明である。
	1089	〃	〃	①(8.0) ②(5.5)	〃	〃		
	1090	〃	B-15	①(7.8) ②(5.8)	茶褐色	〃		
	1091	〃	B-10	①(9.0) ②(7.0)	褐色	〃		
	1092	〃	E-17	①(9.0)	〃	〃	1088,1099,1103,1104,1110,1122,1023,1026,1024,1028,1032,1056,1059,1063,1067,1080~1082,1086-裾は短かく、あまり広がりがなく、裾の端面は凹んで、凹線状を呈するものや丸味を帯びるものである。	1081,1085,1089,1114-内・外面ともに磨滅や剥落を認め、調整痕は不明である。内面は刷毛などで指頭圧調整痕を残す。
	1093	〃	B-10	②(5.6)	茶褐色	〃		
	1094	〃	E-18	①(8.0) ②(6.3)	暗褐色	〃		
	1095	〃	E-24	①(7.7) ②(5.7)	褐色	Q.P.L		
	1096	〃	B-15	②(6.0)	暗褐色	Q.P.L.H		
	1097	〃	F-28	①(7.2) ②(6.5)	褐色	Q.P.L.M	1107-胎台の底部より外方へ開きながらのびる器形である。煤の付着を認める。	1079-鮮明な縦位の篋などで調整である。
	1098	〃	B-10	①(7.6) ②(6.6)	明褐色	〃	1108-裾の端面がわずかに凹む。	1080-一部磨滅しているが、縦位及び斜位の篋などで調整を認める。
1099	〃	F-20	①(8.4) ②(4.8)	茶褐色	〃	1109-約半分を欠損する。 1113-底面が若干凹む。	1089-斜位及び縦位の篋などで調整である。	
1100	〃	E-24	①(7.0) ②(5.4)	明褐色	〃	1114,1115,1118,1127-一部を欠損する。	1086-ほとんど磨滅しており、一部横位の篋削りを認める。	
1101	〃	B-20	①(8.2)	褐色	Q.P.L.H	1123-欠損しているため、器形ははっきりしないと思われる。裾の端面は剥落を認めるが、一部凹み凹線状を呈するものである。	1087-横位及び斜位のもので、一部指紋の付着を認める。	
1102	〃	B-14	①(8.6) ②(5.6)	茶褐色	Q.P.L.M		1091-磨滅や剥落を認めるが縦位、斜位のもので調整を認める。	
1103	〃	B-10	①(8.0) ②(5.6)	〃	〃		1092-剥落が著しいが斜位のもので調整を認める。	
1104	〃	A-7	①(6.4) ②(5.4)	〃	Q.P.L.H	1126-裾の端面は磨滅が著しく、欠損部位を多く認め、一部が凹み凹線状を呈している。	1094-磨滅及び剥落しており部分的に斜位のもので調整である。	
1105	〃	D-18	①(8.1) ③(5.6)	明褐色	Q.P.L.H.M	1127-端面は浅く凹む。	1095-横位及び斜位のもので調整である。	
1106	〃	E-8	①(7.3) ②(5.2)	明茶褐色	Q.P.L.M	1120~1140-一部欠損している。 1134-裾端面は剥落や磨滅のため不明である。	1096-横位、斜位及び縦位のもので調整である。	
1107	〃	B-10	①(7.1)	褐色	〃	1137-底面が若干凹んでいる。	1097-横位及び縦位のもので調整である。	
1108	〃	B-11	①(7.2) ②(4.8)	茶褐色	Q.P.L.H	1138~1146,1148,1149,1151,1153~1157,1160,1162,1177,1178,1185-底面が若干凹んでいる。	1098-磨滅及び剥落が認められるが、斜位のもので調整である。	
1109	〃	F-10	①(7.4)	明褐色	Q.P.L.M	1142-裾の端面は浅く凹んでいる。	1099-磨滅剥落が認められるが、横位及び斜位のもので調整である。	
1110	〃	B-20	①(8.3)	〃	Q.P.L.H	1142,1147,1150,1152,1158,1159,1184-床面があげ底気味に凹んでいる。	1100-縦位及び斜位のもので調整である。	

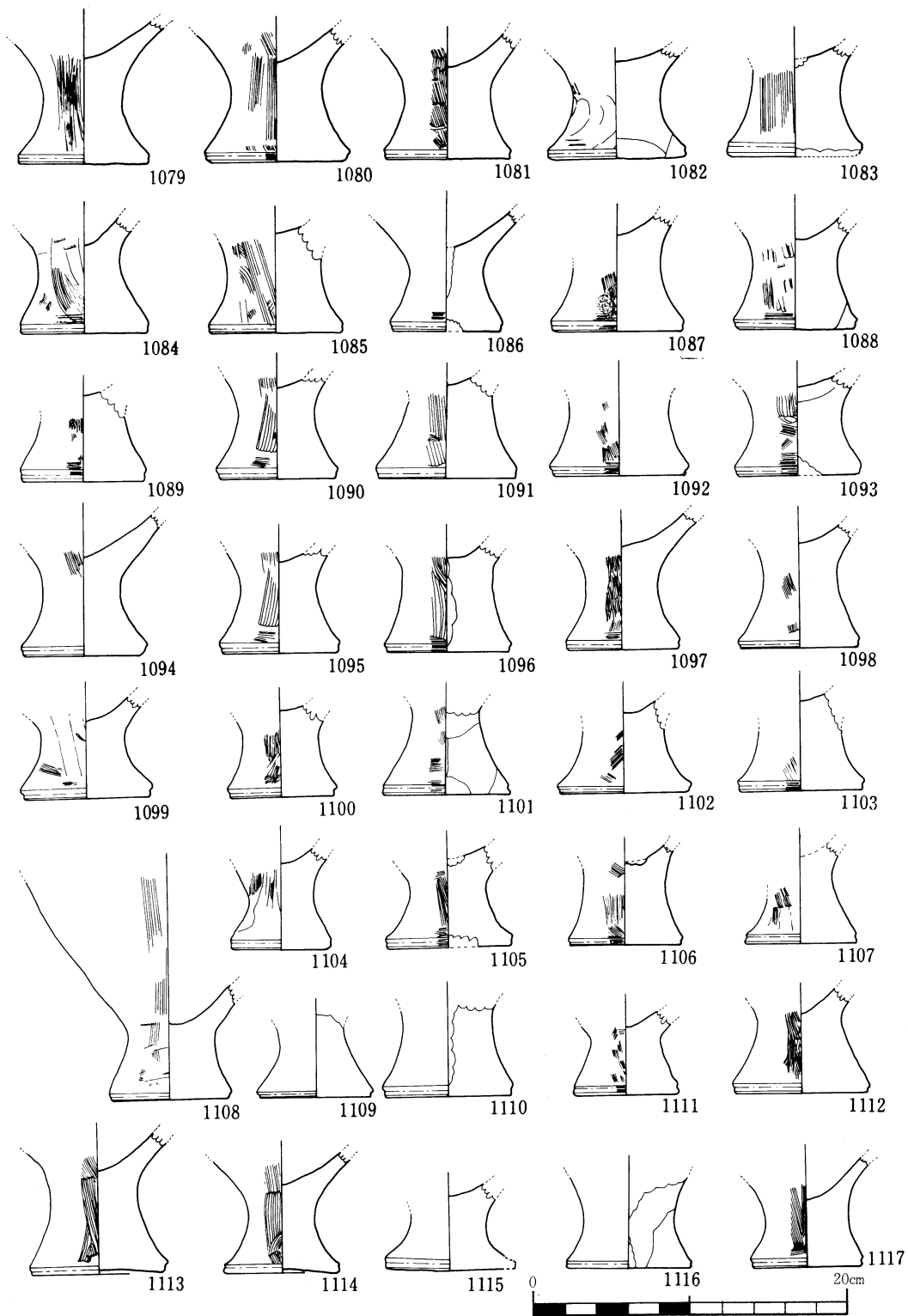


Fig. 148 王子遺跡出土土器実測図(21)

Fig 番号	遺物 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 148	1111	底部	B-17	①(6.8) ②(4.2)	茶褐色	Q.P.L.M	中空にはならない。 1145,1149-磨減や剥落が著しいが、 裾端面は一部に凹みが認められ、凹 線状を呈するものと思われる。	1102-斜位なので調整である。 1103-剥落が著しいが、一部に斜位 なので調整である。
	1112	〃	B-10	①(8.8) ②(5.0)	褐色	Q.P.L.H	1157-端面が浅く凹んでいる。	1104-鮮明さを欠くが、縦位なので 調整である。
	1113	〃	F-18	①(8.8) ②(6.5)	明茶褐色	Q.P.L.M	1160,1161,1169,1171,1176~1187-裾 端面が丸味を帯びている。	1105-磨減を認めるが、横位及び縦 位なので調整である。
	1114	〃	B-10	①(7.4) ②(6.5)	暗褐色	〃	1131, 1134, 1135, 1142, 1144, 1151, 1160, 1161, 1163, 1165, 1167~1169, 1171, 1179~1181-小さい底部である。	1107-磨減及び剥落を認めるが、縦 位及び斜位なので調整である。 1108-磨減及び剥落を認めるが、縦 位の刷毛などで調整である。
	1115	〃	E-8	②(4.6)	明茶褐色	〃	1176, 1181-裾は短かく、あまり広が りがなく、くびれが小さい。端面は 丸味を帯びる。	1109-磨減及び剥落を認めるが、調 整痕は不明である。
	1116	〃	D-17	①(8.0)	〃	〃	1176, 1181-裾は短かく、あまり広が りがなく、くびれが小さい。端面は 丸味を帯びる。	1110-磨減及び剥落しており、調整 痕は不明である。
	1117	〃	E-29	①(7.2) ②(4.2)	〃	Q.P.L.H	1187-底部厚のお厚いもので6cmを数 える。	1111-剥落を部分的に認めるが、横 位及び斜位なので調整である。 1112-縦位及び斜位なので調整であ る。
Fig 149	1118	〃	B-10	①(9.1)	褐色	〃		1113,1114-縦位及び斜位なので調整 である。
	1119	〃	B-15	①(7.4)	暗褐色	Q.P.L.M		1116-磨減しており調整痕は不明で ある。
	1120	〃	C-4	①(8.0)	明茶褐色	Q.P.L.H		1117~1120-鮮明な縦位及び斜位 なので調整である。
	1121	〃	B-8	①(9.0)	暗茶褐色	Q.P.L.M		1121-ほとんどが剥落し、調整痕は 不明である。
	1122	〃	E-8	①(8.0)	褐色	〃		1122-一部は剥落しているが、斜位 の刷毛などで調整である。
	1123	〃	E-20	①(7.8)	暗茶褐色	Q.P.L.H		1123-横位、斜位及び縦位の刷毛な で調整である。
	1124	〃	D-21	①(8.2)	暗褐色	Q.P.L.M		1124-剥落しており調整痕は不明で ある。
	1125	〃	C-12	①(9.2)	褐色	〃		1125-横位、斜位及び縦位なので調 整である。
	1126	〃	E-20	①(7.8)	〃	Q.P.L.H		1126-一部は剥落を認めるが、横位 及び斜位なので調整である。
	1127	〃	B-10	①(7.4)	明褐色	〃		1127-磨減や剥落が著しく調整痕は 不明である。
	1128	〃	B-5	①(7.2)	〃	〃		1128-横位、斜位及び縦位なので調 整である。
	1129	〃	A-7	①(6.4)	褐色	〃		1129-指頭圧調整後縦位及び横位の 刷毛などで調整である。
	1130	〃	A-6	①(6.2) ②(4.6)	明茶褐色	〃		1130-横位及び縦位の刷毛などで調 整を鮮明に認める。
	1131	〃	E-8	①(8.0)	褐色	Q.P.L.M		1131-縦位の刷毛などで調整で、底面 には植物の繊維状の圧痕を認める。
	1132	〃	B-10	①(6.3)	明褐色	〃		1132-鮮明な縦位の刷毛などで調整 である。
	1133	〃	B-5	①(6.8) ②(4.8)	茶褐色	Q.P.L.H		1133-剥落や磨減を認めるが、横位 の刷毛などで調整を部分的に認める。
	1134	〃	E-16	①(7.8)	明褐色	Q.P.L		1134-縦位の刷毛などで調整である。
	1135	〃	E-20	①(6.0)	茶褐色	Q.P.L.H		1135-剥落及び磨減しているため調 整痕は不明である。
	1136	〃	D-5	①(7.0)	明褐色	〃		1136-磨減しているため調整痕は不 明である。
	1137	〃	B-10	①(10.0)	黒褐色	〃		1137-横位及び斜位の刷毛などで調 整である。
1138	〃	E-21	①(7.2) ②(4.8)	明茶褐色	〃		1138-磨減しているため調整痕は不 明である。	
1139	〃	D-23	①(7.4) ②(6.6)	褐色	Q.R.M		1139-横位及び縦位の刷毛などで調 整である。	
1140	〃	A-7	①(7.8) ②(5.6)	明黄褐色	Q.P.L.H		1140-磨減しているが、横位の刷毛 などで調整である。	
1141	〃	D-24	①(7.8) ②(5.8)	褐色	〃		1141-鮮明さに欠けるが、横位、斜 位及び縦位の刷毛などで調整である。	
1142	〃	B-10	①(7.0)	茶褐色	〃			
1143	〃	C-25	①(7.6)	暗褐色	Q.P.L.M			
1144	〃	A-7	①(6.0)	茶褐色	〃			

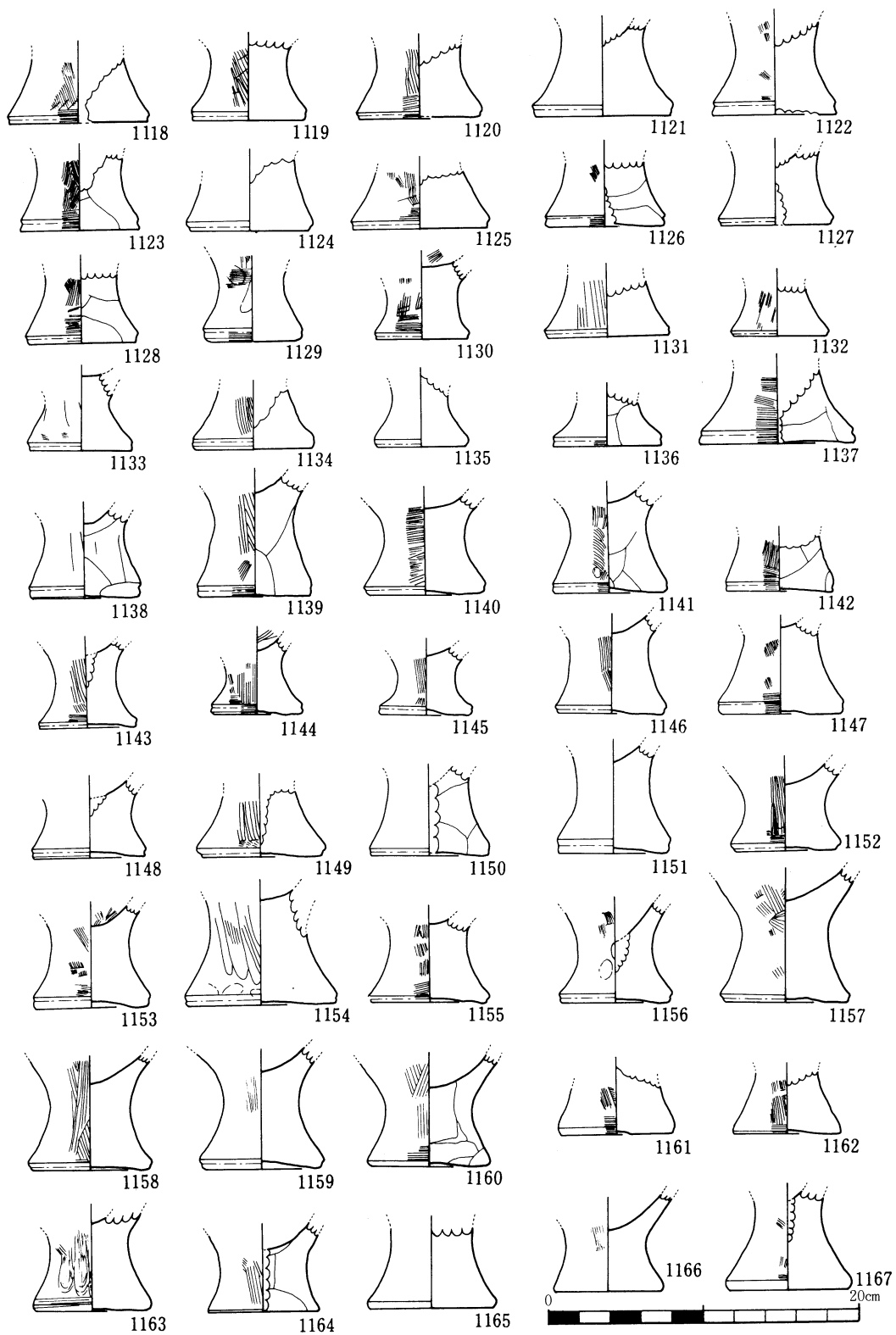


Fig. 149 王子遺跡出土土器実測図(22)

Fig 番号	遺物 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
Fig 149	1145	底部	D-17	①(6.0)	褐色	Q.P.L.M.H		1142~1144-縦位及び横位の刷毛などで調整である。
	1146	〃	D-15	①(7.1) ②(5.2)	暗褐色	Q.P.L.M		1145-剥落及び磨減しているが、斜位の刷毛などで調整である。
	1147	〃	B-7	①(8.0) ②(5.6)	褐色	Q.P.L.H		1146-磨減及び剥落しているが、縦位及び斜位のなどで調整である。
	1148	〃	B-17	①(7.4)	〃	〃		1147-横位及び横位の刷毛などで調整である。
	1149	〃	B-7	①(8.4)	〃	Q.P.L.M		1148-磨減しており不明である。 1149-縦位及び斜位の刷毛などで調整である。
	1150	〃	D-24	①(7.8)	明黄褐色	Q.P.L.H		1150-磨減しており不明である。
	1151	〃	D-20	①(7.4) ②(5.8)	茶褐色	Q.P.L.M		1151-磨減や剥落しており、不明である。
	1152	〃	D-23	①(7.0) ②(4.2)	〃	Q.P.L.H		1152.1153-横位及び縦位の刷毛などで調整である。
	1153	〃	B-10	①(7.6) ②(5.6)	褐色	〃		1154-指頭圧調整及び斜位の刷毛などで調整である。
	1154	〃	E-18	①(9.8) ②(6.7)	〃	Q.P.L.M		1155-剥落を認めるが、横位及び斜位の刷毛などで調整である。
	1155	〃	B-15	①(7.8) ②(5.0)	茶褐色	〃		1156-磨減しているが、指頭圧調整痕を残し、斜位の磨削りである。
	1156	〃	C-17	①(7.2)	褐色	Q.P.L.H		1157-斜位及び縦位の刷毛などで調整である。
	1157	〃	B-11	①(8.4) ②(6.6)	〃	Q.P.L.M		1158-縦位及び、斜位の刷毛などで調整である。
	1158	〃	D-25	①(8.0) ②(5.5)	〃	〃		1159-磨減及び剥落しており、縦位の磨削りである。
	1159	〃	E-24	①(8.0) ②(6.3)	〃	〃		1160-鮮明さに欠けるが、縦位、斜位及び横位の刷毛などで調整である。
	1160	〃	B-11	①(8.0) ②(5.0)	明黄褐色	Q.P.L		1161-鮮明さに欠けるが、横位及び斜位の刷毛などで調整である。
	1161	〃	B-15	①(7.5)	褐色	〃		1162-斜位、横位の刷毛などで調整である。
1162	〃	D-16	①(7.0)	明茶褐色	Q.P.L.H		1163-指頭圧調整後横位、縦位の刷毛などで調整である。	
1163	〃	E-8	①(7.6) ②(5.6)	褐色	Q.P.L.M		1164-磨減しているが、斜位の刷毛などで調整である。	
1164	〃	E-15	①(7.2)	明黄茶褐色	Q.P.L.H		1165-磨減や剥落しており、調整痕は不明である。	
1165	〃	B-11	①(8.2)	赤茶褐色	Q.P.L.M		1166-剥落しており、一部に斜位の刷毛などで調整である。	
1166	〃	B-15	①(7.0) ②(4.0)	暗褐色	Q.P.L.H		1167-磨減や剥落しており、一部に横位、斜位、縦位の刷毛などで調整である。	
1167	〃	C-5	①(8.2)	明茶褐色	〃		1168-横位の磨削り、指紋の付着を認める。	
Fig 150	1168	〃	D-12	①(3.2) ②(2.2)	褐色	〃		1169-磨減や剥落しており、調整痕は不明である。
	1169	〃	B-16	①(3.6) ②(3.4)	明茶褐色	Q.P.L.M		1170-斜位及び横位の刷毛などで調整である。
	1170	〃	D-18	①(4.4) ②(2.2)	褐色	〃		1172-鮮明さに欠けているが、斜位、縦位、横位の磨削りである。
	1172	〃	C-2	①6.0 ②2.2	明茶褐色	Q.P.L.H		1177-縦位、斜位の刷毛などで調整である。
	1177	〃	C-4	①6.5 ②3.4	茶褐色	〃		1178-横位、斜位、縦位の刷毛などで調整である。
	1178	〃	D-5	①7.8 ②5.4	褐色	〃		1179-鮮明さは欠けているが、斜位、縦位の刷毛などで調整である。底面、磨削りを認める。
	1179	〃	E-8	①6.6 ②4.8	明褐色	〃		1180-鮮明さに欠けるが、斜位の刷毛などで調整である。
	1180	〃	B-14	①(5.0) ②2.5	暗褐色	〃		1181.1182.1184-磨減のため調整痕は不明で、1182は指頭圧調整痕が残る。
	1181	〃	B-15	①(5.8) ②2.6	明茶褐色	〃		1183-剥落や磨減しているが、縦位
	1182	〃	〃	①6.0 ②4.0	明茶褐色	Q.P.L.H.M		
	1183	〃	E-18	①(6.0) ②3.0	明茶褐色	Q.P.L.H		

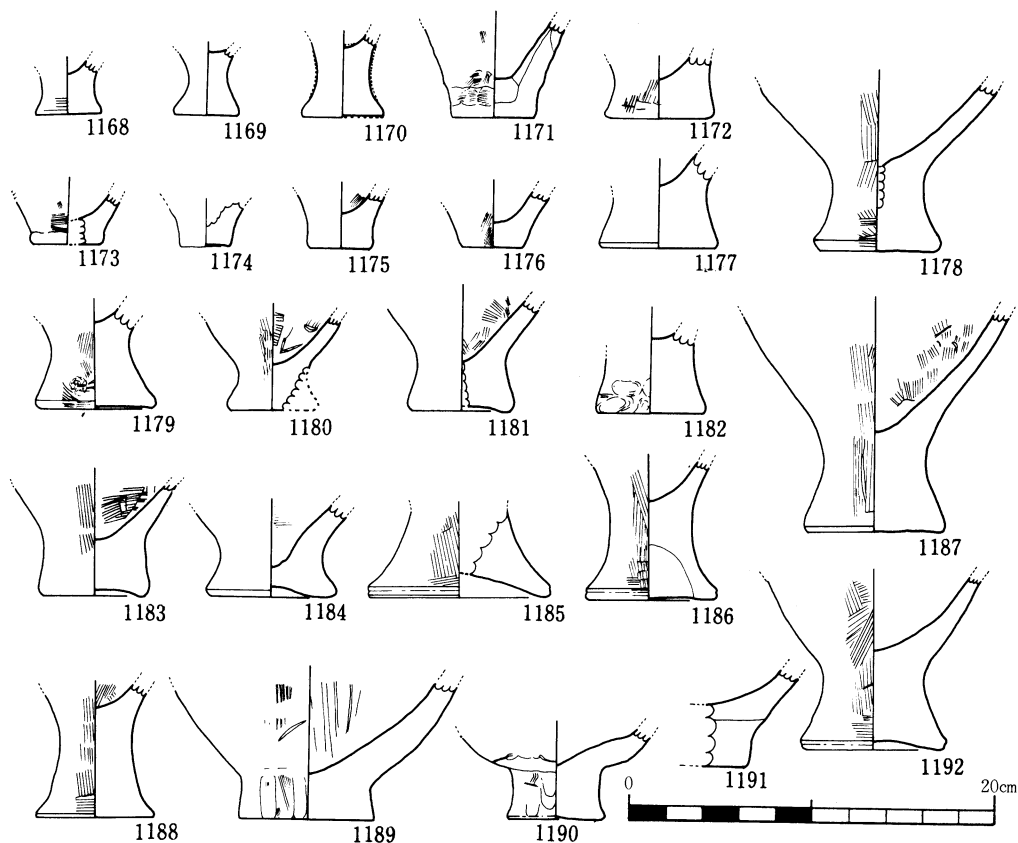


Fig. 150 王子遺跡出土土器実測図(23)

Fig 番号	遺物 番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
Fig 150	1184	底部	D-18	①(7.2) ②1.6	明茶褐色	Q.P.L.H		の刷毛などで調整である。 1185-縦位及び斜位の刷毛などで調整 である。
	1185	〃	D-9	①(10.0)	黒褐色	Q.P.L.M		1186, 1192-横位, 斜位及び縦位の刷 毛などで調整である。1192は煤の附着 を認める。
	1186	〃	C-19	①(7.2) ②5.4	褐色	Q.P.L.H		1187-鮮明さに欠けるが, 縦位の刷 毛などで調整である。
	1187	〃	C-5	①(7.8) ②5.4	明褐色	〃		1188-横位及び縦位の刷毛などで調整 である。
	1188	〃	E-16	①(6.4) ②6.0	褐色	Q.P.L.M		
	1192	〃	C-12	①(8.0) ②(5.4)	黒褐色	〃		

㊦鉢形土器 (Fig. 150)

鉢形土器は、充実した脚台や小さい平底がある。これらの底部より外へ若干開きながら立ち上がる器形と外方へ大きく開きながら立ち上がる器形とがある。以下土器一覧表で説明を加える。



Tab. 49 鉢形土器（底部）一覧表

注) 法量の単位cm ①底径②底厚

Fig番号	遺物番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
Fig 150	1171	底部	C-21	①(4.4) ②3.8	明茶褐色	Q.P.L.M	1171-小さい平底で、底部厚は若干厚く、外方へ若干ひらいて立ちあがる器形と思われる。	1171-内・外面に指頭圧調整痕が残り、それぞれ指紋の付着を認める。
	1173	〃	C-2	①6.0 ②2.2	〃	Q.P.L.H	1173-小破片であるが、平底の底部である。外方へ開きながら立ち上がる器形である。	1173-横位や斜位の刷毛などで調整である。内面も刷毛などで調整である。
	1174	〃	D-18		暗褐色	〃	1174-小さい平底の底部で、底面が若干凹む。底部厚は厚いものである。	1174-内・外面ともに剥落や磨滅のため不明である。1175.1189.1190-剥刺落や磨滅かを認めるが、一部に指頭圧調整痕を残す。1189の内面は不明である。1190の内面は鮮明さを欠くが、刷毛などで調整である。
	1175	〃	D-9	①3.8	〃	〃	1175.1176-平底の底部である。	1171.1175.1176-鮮明さを欠くが、斜位の刷毛などで調整である。
	1176	〃	E-20	①(3.6) ②2.0	明茶褐色	〃	1189-平底の底部で1189-大きいぐが、底厚は短かく外方へ立ち上がりながら開く器形である。1190-充実した底部で、底部の厚は厚く、外方へ大きく開きながら立ち上がる器形である。	1189.1190-磨滅や剥落を認めるが、指頭に調整後部分的に縦位の刷毛などで調整である。
	1189	〃	E-16	①16.4 ②6.0	褐色	Q.P.L.M		
	1190	〃	E-3	①7.4 ②2.5	明茶褐色	Q.P.L.H		

㊦ 大型甕形土器 (Fig. 151)

大形甕形土器の底部は、平底で厚さの差異は認められるが、底部より外方へ大きく開きながら立ち上がる器形を呈するもの、外方へ開きながら立ち上がるものとがみられる。壺形土器の底部との共通性をもったために区別が困難なものもある。以下、一覧表で説明を加える。

Tab. 50 大型甕型土器（底部）一覧表

注) 法量の単位cm ①底径②底厚

Fig番号	遺物番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
Fig 150 151	1191	底部	E-10		明茶褐色	Q.P.L.M	外方へ大きく開きながら上がると思われる器形で、平底の底部である。	1193~1195.1197.1200.1201.1204.1205.1208.1209-内面は落や磨滅のため調整痕は不明である。
	1193	〃	D-26	②(1.8)	暗茶褐色	Q.P.L.M.H	中には若干あげ底気味の底部がある。	1196.1199.1206.1208-内面は剥刺や磨滅のため調整痕は不明である。
	1194	〃	D-18	①(6.4)	〃	〃	1195.1197.1198-若干あげ底気味である。	1193-底面は磨滅しているが、一部鈍磨きを認める。
	1195	〃	B-10	①(7.4)	暗茶褐色	Q.P.L.M	1196.1199.1200.1202~1204.1206~1211-若干厚めの底部である。	1194-器面全体が磨滅し、調整痕は不明である。1195-鮮明さに欠けるが、縦位のなどで調整である。
	1196	〃	D-8	①5.8 ②2.8	赤茶褐色	Q.P.L.M	1200-煤の付着を認める。	1197-磨滅しているため調整痕は不明である。
	1197	〃	D-18	①7.0	明茶褐色	Q.P.L.M		1198-外面は縦位のなどで後鈍磨きを認める。内面の大半が剥落しているが部分的に刷毛調整である。1200-縦位の鈍削りを認める。1201-磨滅しているため、調整痕不明である。
	1198	〃	D-24	①7.4 ②2.0	暗茶褐色	Q.P.L.M		1202-外面は鈍磨きを認める。部分的に剥落を認め、一部に刷毛などで調整を認める。1204-一部磨滅を認めるが、鮮明な縦位などで調整である。1205-縦位の鈍削りを認める。1207-磨滅が顕著で、部分的に縦位のなどで調整である。内面は磨滅のため部分的に、横位の刷毛などで調整を認める。
	1199	〃	E-18	①7.7 ②2.6	茶褐色	Q.P.L.M.H		1209-磨滅して調整痕は不明である。
	1200	〃	F-19	①6.4 ②2.5	明褐色	Q.P.L.M		1210-磨滅している部分も認めるが、縦位や斜位のなどで調整である。
	1201	〃	D-25		褐色	Q.P.L.M		1211-鈍磨きで、内面は剥落や磨滅が著しく、部分的に刷毛などで調整である。
	1202	〃	B-22	②3.0	茶褐色	Q.P.L.M.H		
	1203	〃	B-17	①6.5 ②2.6	灰褐色	Q.P.L.M		
	1204	〃	F-19	①7.2 ②(2.2)	暗茶褐色	Q.P.L.M		
	1205	〃	B-15	①7.0 ②1.7	茶褐色	Q.P.L.M		
	1206	〃	B-7		〃	Q.P.L.M		
	1207	〃	C-6	①(8.8) ②2.5	黄茶褐色	Q.P.L		

Fig番号	遺物番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
Fig 151	1208	底部	D-8	①5.8 ②3.2	明茶褐色	Q.P.L.H		
	1209	〃	E-17	①7.3 ②1.5	茶褐色	Q.P.L.M		
	1210	〃	A-7	①9.0 ②2.2	茶褐色	〃		
	1211	〃	B-11	②(3.0)	〃	Q.P.L.H		

㊦ 壺形土器 (Fig. 151~153)

壺形土器の底部は、平底で厚さの差異を認め、中には丸味を帯びた平底もある。底部よりの立ち上がりは、大型甕形土器の底部との共通も一部あり、壺の底部とした中には、大型甕の底部の可能性の強いものもある。なお、底面は若干凹むものや木の葉の圧痕を認めるものもある。以下、一覧表で説明を加える。

Tab. 51 壺形土器 (底部) 一覧表

注) 法量の単位cm ①底径②底厚

Fig番号	遺物番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
Fig 151	1212	底部	D-8	①8.0 ②3.6	褐色	Q.P.L.H	外方へ大きく開きながら立ち上がるものと外方へ開きながら立方上がる器形がある。厚さの差異を認めるが、平底や丸味を帯びる平底が認められる。	1212-外面は剥落や磨減し、縦位及び斜位、内面は斜位のなで調整である。 1213-内、外面ともに磨減して不明である。
Fig 152	1213	〃	D-18	①5.4 ②1.3	〃	Q.P.L.M		
	1214	〃	E-8	①(6.2) ②2.2	明茶褐色	Q.P.L.M	1215-内、外面ともに磨減して調整痕は不明である。	
	1215	〃	E-8	①4.7 ②0.9	黄茶褐色	Q.P.L.H	1216-外面は縦位、斜位、底面には指紋の付着を認め、また植物の繊維状の痕跡もみられる。	
	1216	〃	C-25	①7.3 ②2.3	茶褐色	Q.P.L.H	1217-外面は縦位のなで、内面は磨減し調整痕は不明である。	
	1217	〃	E-19	①(6.0)	〃	Q.P.L.H	1218-外面は斜位のなで、指頭圧調整痕を残す。内面は指頭圧調整後刷毛などで調整である。	
	1218	〃	E-8	①(5.6) ②1.8	明茶褐色	Q.P.L	1219-外面は斜位のなで、一部指紋の付着がみられる。	
	1219	〃	D-18	①(5.7) ②(3.8)	明褐色	Q.P.L.M	1220-外面は一部に斜位のなで、一部指頭圧調整痕がみられる。内面は調整痕は不明である。	
	1220	〃	A-7	①(6.0) ②2.0	暗褐色	Q.P.L.H	1221-外面は磨減を認め、斜位、縦位なので、内面は磨減のため調整痕は不明である。	
	1221	〃	B-18	①(5.3) ②(3.8)	明茶褐色	Q.P.L.H	1222、1223-内、外面ともに磨減のため調整痕は不明である。	
	1222	〃	E-18	①(7.4) ②1.7	黄褐色	Q.P.L.H	1224-外面、斜位のなで調整で、内面は指頭圧調整を残し、なで調整である。	
	1223	〃	B-16	②(1.3)	暗褐色	Q.P.L.H	1225、1254、1258-厚手の底部で、1212、1217、1221、1224-かなりの厚さをもつ底部で、鉢形土器の底部の可能性も考えられるタイプである。	
	1224	〃	B-12	①(5.8) ②(3.4)	明褐色	Q.P.L.H	1212、1214、1216~1218、1229、1230、1234~1238、1245、1252~1054-は若干差異はあるが、若干凹む平底である。1214-煤は付着を認める、1216、1217-大型甕形土器の底部の可能性を考えられるタイプである。	
	1225	〃	E-4	①6.4 ②1.5	〃	〃	1220-内側の底面中央部が盛り上がり	
	1226	〃	C-25 D-25	②(2.0)	赤茶褐色	Q.P.L.H	1222-底面の木の葉の圧痕の痕跡を認	
	1227	〃	C-8	①6.1 ②1.4	茶褐色	Q.P.L.H		
	1228	〃	B-10	②(2.3)	明褐色	Q.P.L.H		
	1229	〃	B-14	①(7.2) ②1.9	茶褐色	Q.P.L.H		
	1230	〃	C-15	①(8.2) ②(1.6)	明茶褐色	Q.P.L.H		
	1231	〃	E-8	①3.0 ②2.0	褐色	Q.P.L.H		

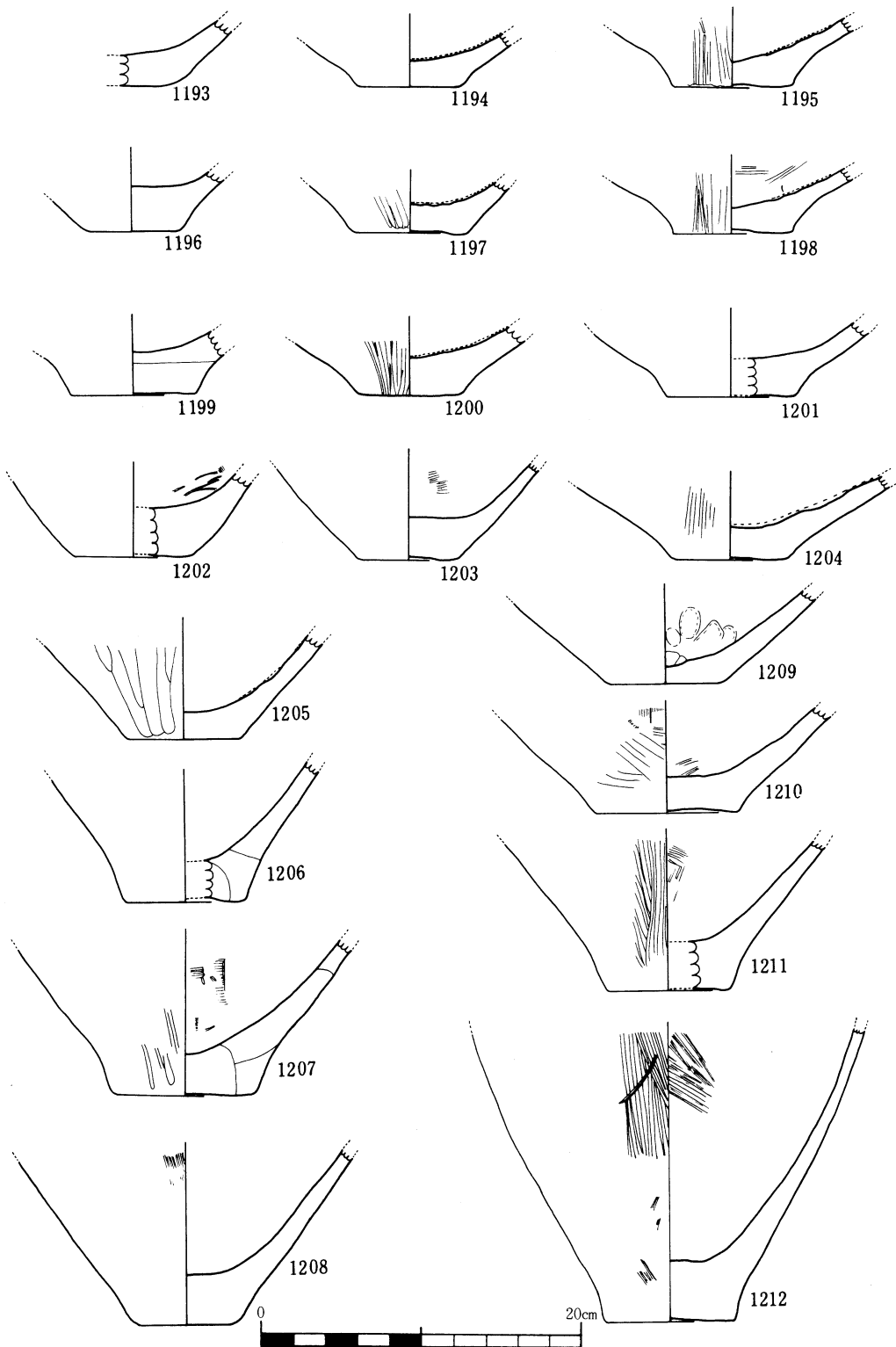


Fig. 151 王子遺跡出土土器実測図(24)

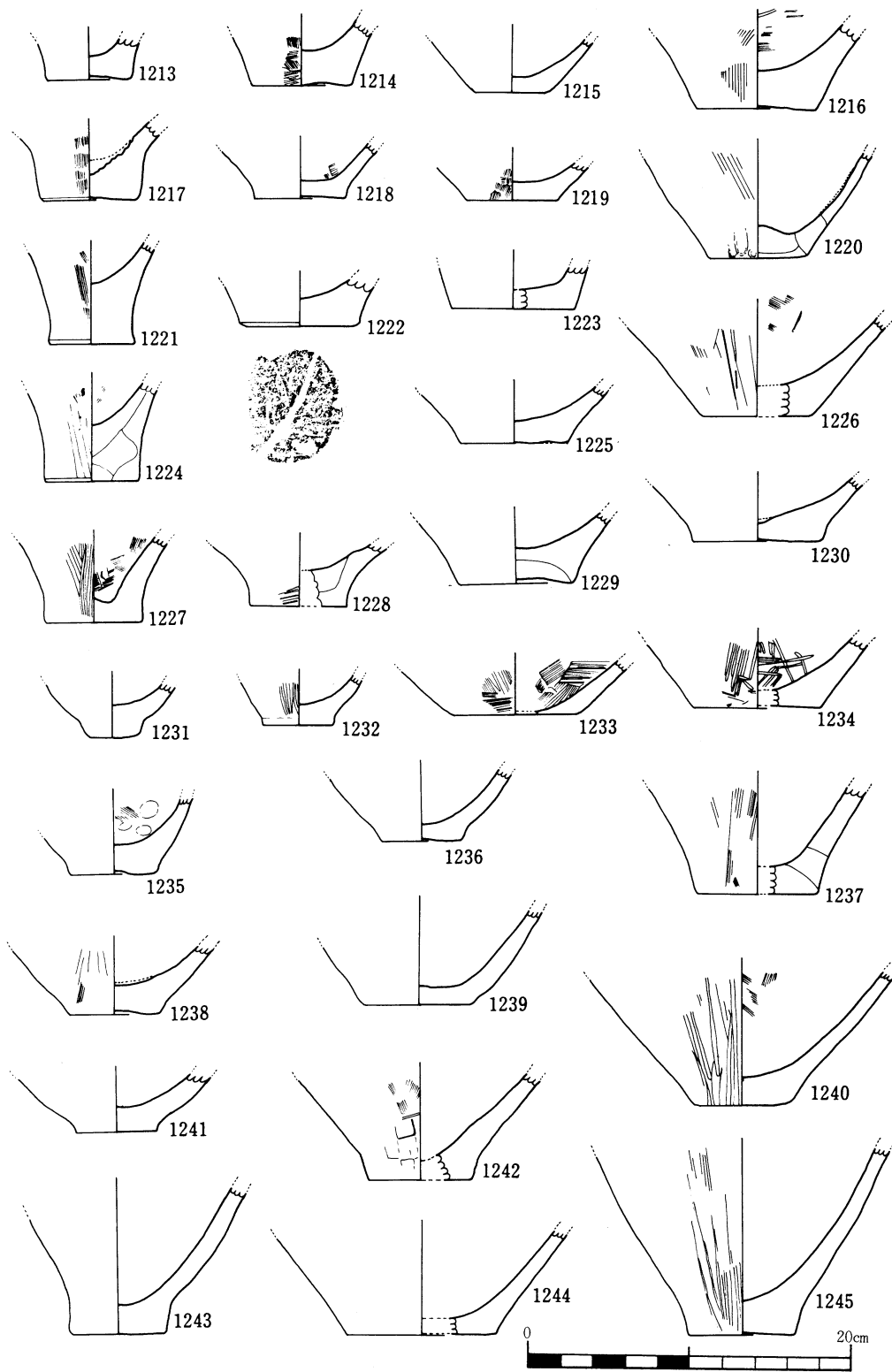


Fig.152 王子遺跡出土土器実測図(25)

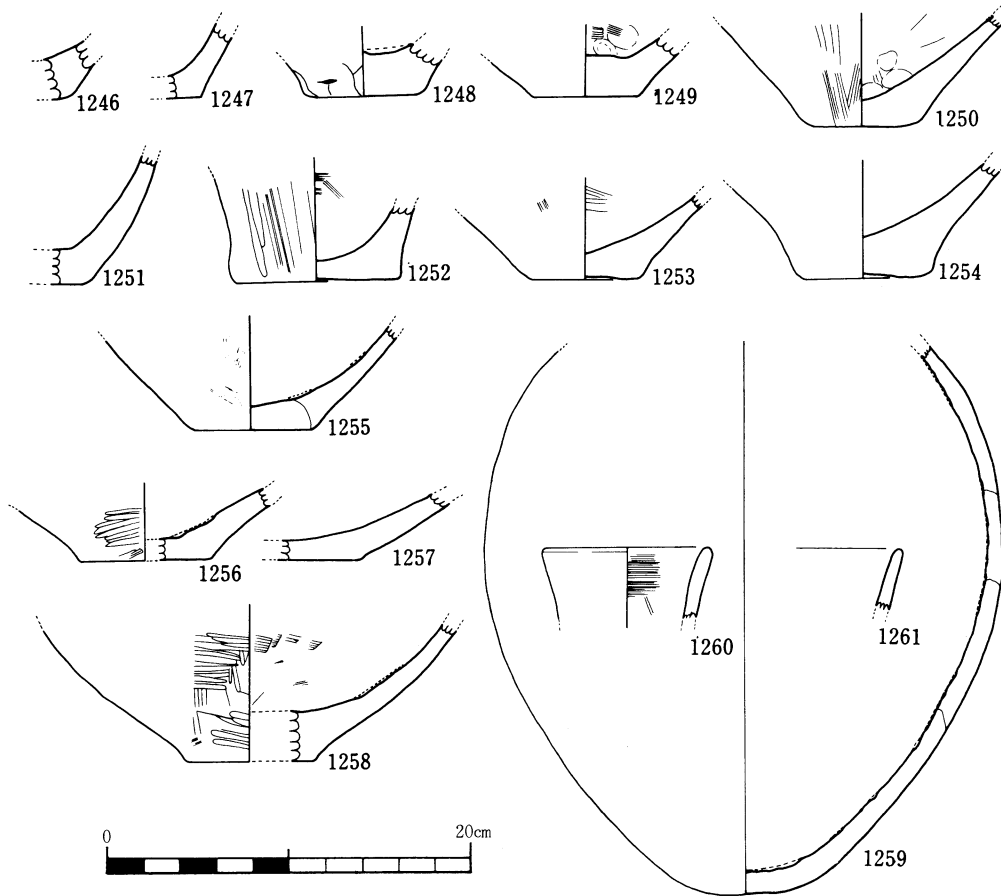


Fig. 153 王子遺跡出土土器実測図(26)

Fig 番号	遺物 番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
152	1232	底部	B-15	①4.8 ②1.3	黒褐色	Q.	める。 1224, 1227-寛形土器の充実した脚台を思わせるようなタイプである。 1224-煤の付着を認める。	1229~1231-内・外面とも不明である。 1231-底面付近には、指頭圧調整痕を残す。
	1233	〃	D-8	②(0.3)	褐色	Q.P <sub>L</sub> .M	1227は1224と同じようなタイプで、底部厚が薄い。	1232-外面は縦位の刷毛などで、縦位の艶削りも認める。
	1234	〃	B-5	②(1.0)	暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .H	1231-丸部を帯びる平底である。 1237, 1252も127-と同じタイプと考えられる。	1233-外面は斜位のなどで、内面は横位が斜位のなどで調整である。
	1235	〃	D-8	①5.4 ②1.9	明褐色	Q.P <sub>L</sub> .H	1255-煤の付着を認める。	1234-内・外面ともに刷毛などで調整で、一部に艶磨きが見られる。
	1236	〃	F-15	①(5.2) ②1.1	〃	Q.P <sub>L</sub> .H		1235~1237-内・外面ともに磨減し、調整痕は不明である。1235-指頭圧調整痕が残存し、斜位のなどで調整である。
	1237	〃	D-5	②(1.7)	明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .H		1237-外面は縦位のなどで調整で、内
	1238	〃	C-25	①5.6	茶褐色	Q.P <sub>L</sub> .M.H		
	1239	〃	D-16	①6.6 ②1.1	暗褐色	Q.P <sub>L</sub> .M		

Fig 番号	遺物 番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
Fig 152	1240	底部	F-28	①(6.0) ②(1.7)	暗茶褐色	Q.P.L.H	形態の特徴	手法の特徴 面は指頭圧調整痕を残す。 1238-外面は縦位のなで調整で、内面は剥落して不明である。 1239-内・外面は磨滅及び剥落のため不明である。 1240-外面は縦位の刷毛なで、内面は部分的に斜位の刷毛なで調整である。 1241～1244-内・外面ともに磨滅が著しく、調整痕は不明である。 1245-外面は斜位なで後一部に鈍磨き認め、内面は不明である。 1246-外面は磨滅し不明である。内面は指頭圧調整後刷毛なで調整である。 1247-外面は横位及び斜位なで、内面は指頭圧調整後横位のなで調整で、指紋の付着を認める。 1248-内・外面は磨滅し、不明である。 1249-外面は磨滅や剥落のため不明であり、内面は指頭圧調整を残す。指紋の付着や刷毛なで調整を認める。 1250-外面は剥落や磨滅しているが、斜位の刷毛なで、内面は指頭圧調整後刷毛なで調整である。 1251-外面は磨滅し不明である。内面は指頭圧調整痕を残す。1252-内・外面は磨滅や剥落しているが、斜位の刷毛なで、内面は不明である。 1253-外面は磨滅し、縦位、斜位のなで調整で、内面は磨滅し不明である。 1254-内・外面ともに磨滅及び剥落し不明である。 1255-外面は磨滅と煤の付着を認め、内面は剥落して不明である。
	1241	〃	B-15	①5.0 ②1.5	褐色	Q.P.L.M		
	1242	〃	B-12		明褐色	Q.P.L.M		
	1243	〃	B-15	①6.1 ②1.8	黄褐色	Q.P.L.H		
	1244	〃	A-7		黄茶褐色	Q.P.L.H		
	1245	〃	D-20		暗茶褐色	Q.P.L.M		
Fig 153	1246	〃	D-19		茶褐色	Q.P.L.M		
	1247	〃	B-8		明褐色	Q.P.L		
	1248	〃	B-8	①6.6	黒褐色	Q.P.L.M.H		
	1249	〃	F-10	①5.9 ②2.3	茶褐色	Q.P.L.M		
	1250	〃	B-15	①6.0 ②1.4	暗褐色	Q.P.L.M		
	1251	〃	D-7	②(1.9)	褐色	Q.P.L.H		
	1252	〃	D-8	①9.2 ②1.0	茶褐色	Q.P.L.H		
	1253	〃	D-9	①6.0 ②1.3	明茶褐色	Q.P.L.M		
	1254	〃	D-21	①7.2 ②2.1	〃	Q.P.L.M		
	1255	〃	D-16	①6.4 ②1.3	暗褐色	Q.P.L.M		
	1256	〃	B-15	②(1.2)	黒茶褐色	Q.P.L.M		
	1257	〃	E-13	②(1.1)	赤茶褐色	Q.P.L.M		
1258	〃	E-18	②(2.7)	灰褐色	Q.P.L.M			

### 5. 蓋形土器及びその他の土器 (Fig. 154)

蓋形土器には、つまみ部の裾端面が凹んで、凹線状を呈するもの、丸味の帯びるもの、平底状のもの、あげ底ふうにつくられたものがある。つまみ部付近はくびれ、そりを認めるものやくびれず直線的に広がり、口縁部を作るものもある。口縁部端面上位には、貼付突帯を廻らし、周辺部は煤の付着を認める。その他の土器には、高坏形土器や手捏ね土器などがある。なお、この項で成川式土器3点についても説明を加えた。以下、土器一覧表で説明を加える。

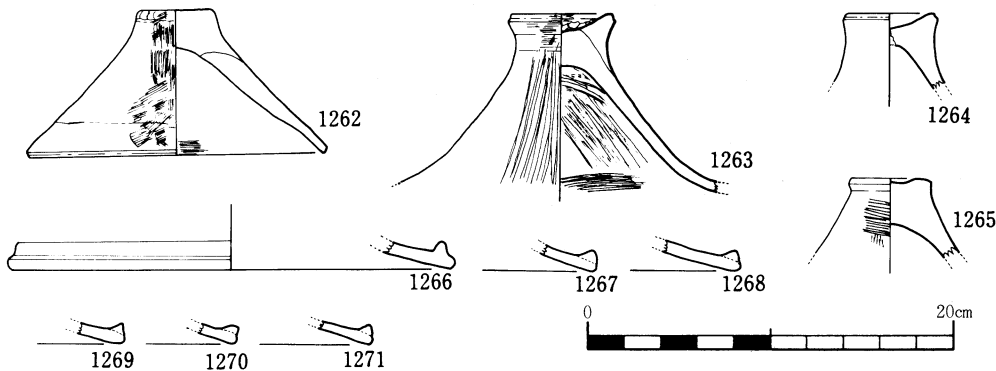


Fig. 154 王子遺跡出土土器実測図(27)

Tab. 52 蓋形土器及びその他の土器一覧表

法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径⑤つまみ部

Fig 番号	遺物 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
154	1262	つまみ部	B-19	①16.5 ⑥4.2	明茶褐色	Q.P.L.H	1262~1271-蓋形土器である。1262-完形で、つまみ部は平底状のもので、直線的で口縁部の広がりは見られない。口唇部は凹む。1263~1265-つまみ部が上げ底ふうにつくられ、端面は凹んで凹線状を呈している。1265-丸味を帯び凹みは浅い。1264,1265-破片のため形状は不明である。1264-つまみ部付近はくびれが、1265より若干大きいものである。1263-つまみ部付近はくびれが大きく、また口縁部が大きくひらき、そりが若干認められる。口縁部端面付近は欠損している。1266~1271-口縁部大きく広がり、若干そりを認める器形と思われる。口縁部端面上位には断面三角形貼付突帯を廻らし、周辺部には煤の付着を認める。990-高環形の坏部と考える。 1076~1079-手捏ね土器である。874-丸底で小さい壺である。875-平底で胴の張る壺である。平底の鉢で完形品である。 1259~1261-成川式土器の口縁部破片及び壺の底部から胴部にかけての部分である。	1262-刷毛などで調整を認める。内・外面ともに薄い。1263-内・外面ともに磨減を認め、調整痕は不明である。1264-磨減しているため調整痕は不明である。焼成はよくないため磨減が著しい。 1265-斜位の刷毛などで調整である。一部に指紋の付着を認め、つまみ部上面の一部に、布目らしい圧痕を認める。 1266-薄い横位の刷毛などで調整が部分的に認められる。 1267-外面は横位の刷毛などで、内面は鮮明なで調整である。1268-横位の刷毛などで調整である。 1269~1271-鮮明さに欠けるが、横位、斜位の刷毛などで調整である。 990-外面に剥落な磨減しているが、一部に薄い横位をなどで、内面は指頭圧調整後、横位及び斜位の刷毛などで調整である。 1259-外面は磨減し、内面は剥落しており不明である。 1260,1261-外面は磨減して不明であり、内面は横位の刷毛などで調整である。 1076-内・外面ともに磨減しているため不明である。 1077-外面に磨減や煤の付着のため、鮮明さに欠けるが、縦位のなどで、内面は指頭圧調整痕を認める。 1078-外面に指頭圧調整痕が残り、一部縦位のなどで、内面にも指頭圧調整痕を残し、横位及び斜位の刷毛などで調整である。
	1263	完形	B-8	⑥(5.8)	暗褐色	Q.P.L		
	1264	つまみ部	D-18	⑥(5.2)	茶褐色	Q.P.L.M		
	1265	〃	C-23	⑥(4.4)	黒茶褐色	Q.P.L		
	1266	口縁部	D-20	①(24.5)	明褐色	Q.P.L		
	1267	〃	B-19		明茶褐色	Q.P.L.H.M		
	1268	〃	E-19		黄褐色	〃		
	1269	〃	B-8		明褐色	Q.P.L.M		
	1270	〃	D-19		黄褐色	〃		
	1271	〃	E-19		茶褐色	〃		
	990	高環 坏部	C-17		灰褐色	Q.P.L.H		
	1259	底部	C-4		茶褐色	Q.P.L.M		
	1260	口縁部	E-7		黄褐色	Q.P.L		
	1261	〃	B-5		明茶褐色	Q.P.L		
1076	手捏ね 胴部~底部	B-7		褐色	Q.P.L.H			
1077	〃	A-7		暗褐色	Q.P.L.M			
1078	〃 完形	D-17		明褐色	〃			

b 移入土器 (Fig. 137, 144, 155, PL. 35)

移入土器には、北部九州系、東九州系、瀬戸内系のを認める。これの土器には、甕形土器、壺形土器、高環形土器かどがあり、甕形土器は、東九州系のもので下条式系の口縁部が検出された。壺形土器には、凹線文をもつもの(凹線文をもつものは、壺形土器として復元したが、細片のため甕形土器になる可能性も考えられる。)や矢羽根透しをもつ高環形土器などが検出された。凹線文をもつ壺形土器は、住居跡内土中より2点を認め、この項に再掲載します。また、一部については、Fig. 140, 147に掲載し、説明を加えた。以下、土器一覧表で説明を加える。

Tab. 53 移入土器一覧表

法量の単位cm ①口径②器高③胴部最大径④底径 ( ) 復原径

Fig 番号	遺物 番号	器 部	出土区	法 量	色 調	胎 土	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴
155	1272	口縁部	C-2		暗茶褐色	Q.P.L	1272,1273,230,1274,606,1275-凹線文をもつ壺の口縁部である。短かい口縁部が大きく外反し、口縁部端面が肥厚拡張され、その拡張部に三条及び二条の凹線文を施している。	1272-内・外面ともに横位のなどで調整である。 1273-内・外面ともに横位のなどで調整である。 1274-内外・外面ともに横位のなどで調整である。
	1273	〃	C-9		明褐色	Q.P.L		
	1274	〃	B-11		明茶褐色	Q.P.L		

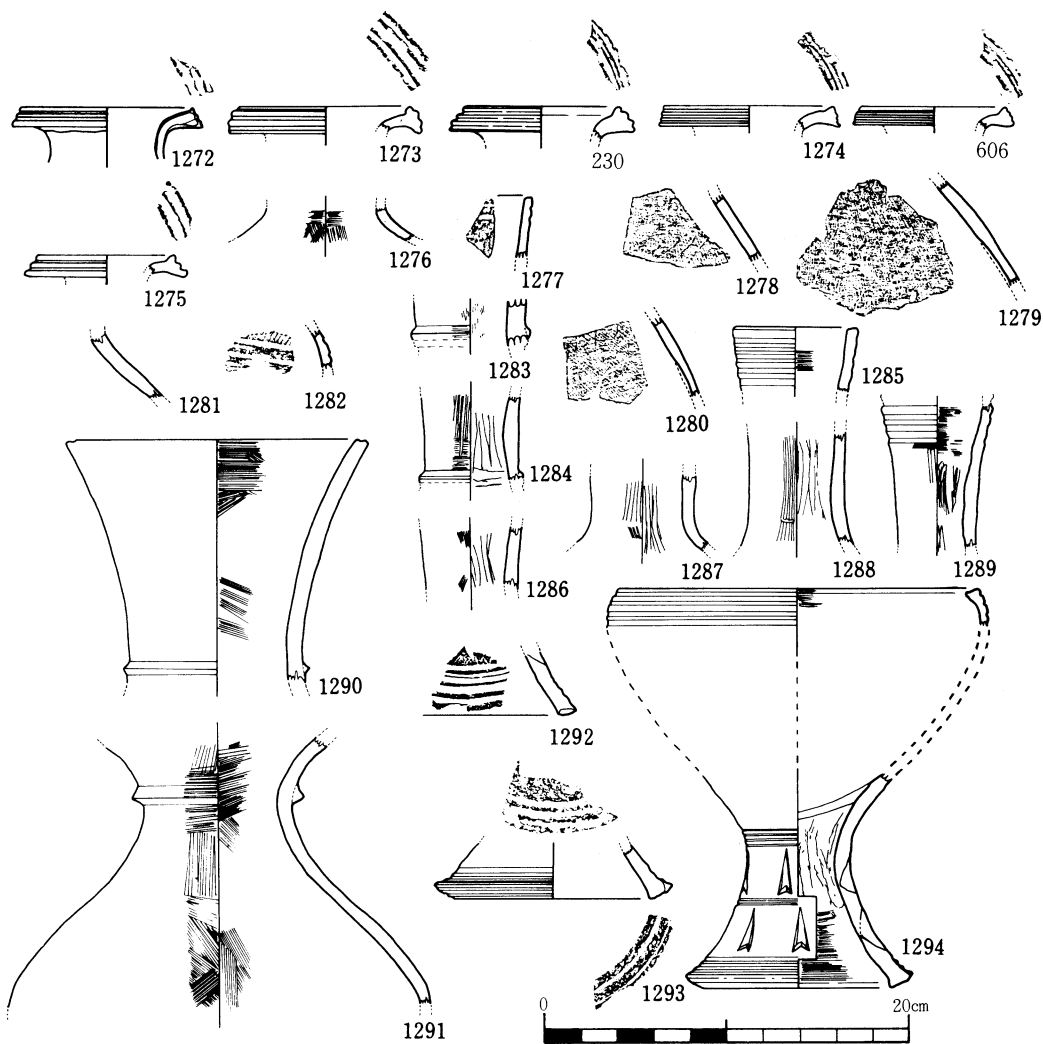


Fig. 155 王子遺跡出土土器実測図(28)

Fig. 番号	遺物番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
155	1275	◇	B-9		◇	Q.Pl	1278~1280-壺の肩部付近と思われ、小破片のため全容は不明であるが、一列ないし二列の列点文が見られる。	調整である。 1275-外面は横位及び縦位のなで、内面は横位のなで調整である。
	1276	肩部	B-10		◇	Q.R.M	1277, 1285, 1283~1289-長頸壺の口縁部、頸部、肩部付近の器部と思われる。	1276-外面は横位及び縦位のなで調整で、内面は不明である。
	1277	口縁部	D-23		褐色	Q.Pl	1277, 1285, 1289-口縁部から頸部にかけての器部で、口縁部外側直下に二条及び五条の凹線文を廻らしている。	1277-外面は横位及び縦位のなで後鈍磨き、内面は縦位及び斜位のなで調整である。
	1278	肩部	A-7		明褐色	Q.Pl	1283, 1286~1288-頸部及び肩部付近の器部と思われる。1283, 1284-頸部	1278-外面は斜位のなで、内面は剝落しており不明である。
	1279	◇	E-8		◇	Q.Pl	下半付近に一条の断面三角形貼付突	1279-外面は斜位のなで、内面は剝
	1280	◇	B-10		明茶褐色	Q.Pl		



Fig 番号	遺物 番号	器部	出土区	法量	色調	胎土	形態の特徴	手法の特徴
155	1281	〃	E-20		明茶褐色	Q.P <sub>L</sub>	帯を廻らしている。1282-小破片のため形状は不明であるが、胴部付近と思われ、現存で三条の凹線文を廻らし、凹線直上上位には、篋状工具による刻目が施される。1290-頸部下半でしまり、直線的に外反し口縁部を作り、口唇部は凹む。頸部下半に断面三角形貼付突帯を廻らす。	落しており不明である。 1280-外面は横位及び縦位のなで、内面は剥落しており不明である。
	1282	胴部	D-25		褐色	Q.P <sub>L</sub>		1281-外面、横位・縦位の鮮明な刷毛などで調整である。
	1283	頸部	C-17		明褐色	Q.P <sub>L</sub>		1282-内・外面ともに横位の薄いなで調整である。
	1284	〃	B-9		褐色	Q.P <sub>L</sub>		1283-磨滅しているが部分的に横位、縦位の刷毛などで調整を認める。
	1285	口縁部	D-20		明茶褐色	Q.P <sub>L</sub> ,M		1284-外面、横位及び縦位の刷毛などで、内面はしほりを認める。
	1286	頸部	D-19		茶褐色	Q.P <sub>L</sub>		1288-内・外面ともに横位の刷毛などで調整である。
	1287	〃	C-19		明茶褐色	Q.P <sub>L</sub>		1286-外面は磨滅し、部分的に斜位のなで、内面はしほりを認める。
	1288	〃	C-27		明茶褐色	.P <sub>L</sub> ,M		1287-外面は薄い縦位の刷毛などで鮮明に欠ける。内面はしほりを認める。
	1289	頸部	E-21		黒茶褐色	Q.P <sub>L</sub> ,M		1288-外面・鮮明な縦位のなで、内面はしほりを認める。
	1290	口縁部～頸部	E-18		暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub>		1289-外面・剥落や磨滅を認めるが、横位、縦位のなで調整がわずかに認められる。内面はしほりを認め、高環形土器の可能性も考えられる。
	1291	頸部～肩部	D-25		明茶褐色	Q.P <sub>L</sub>		1290-外面は不明で、内面は横位及び斜位の刷毛などで調整である。
	1292	脚部	B-16		暗茶褐色	Q.P <sub>L</sub>		1291-内・外面ともに磨滅や剥落を認めるが、外面は横位、斜位、縦位のなで、内面は縦位及び斜位のなで調整である。1292-刷毛などで調整を認める。
	1293	〃	E-8		明褐色	Q.P <sub>L</sub>		1293-剥落や磨滅のため調整痕は不明である。
	1294	〃	E-28 D-26		明褐色	Q.P <sub>L</sub>		1294-剥落して不明で、内面にしほりを認める。口縁部内面は横位のなで調整である。

## 第2節 遺物出土状況及び出土遺物について

本遺跡の遺物包含層は、Ⅱ層である。Ⅱ層はⅡa・Ⅱb・Ⅱc層とに3分層され、Ⅱb層は部分的にみられる。Ⅱa層は黒色土で軟質気味、Ⅱb層は黒色土に、多くの黄褐色土を含み砂壤状を呈し、Ⅱc層は暗黒色で硬質である。このⅡ層は分析の結果、開聞岳降下火山灰層と呼称され、黒ニガ、黒ボクとも呼ばれ、微粒である。Ⅱc層よりは遺物の出土は認められず、Ⅱc層上面が当時の生活面と類堆される。

遺物の出土状態は、Ⅱa・Ⅱb層にみられ、ともに細片が多く、一面に土器破片が散布されたような状態で出土し、集中した箇所もみられた。

出土遺物は、Ⅱa・Ⅱb層中のものは、平板実測及び平面実測で取り上げた。細片及び攪乱層中からの出土遺物は、各区ごとに一括して取り上げた。平板実測では、口縁部・胴部・底部・石器、土製品などの部位の判明するものについて取り扱った。

遺物包含層中の遺物は、住居跡内出土遺物と同様に、破片が多く、集中的にみられる以外の接合は困難である。特に、集中の度合いが大きい調査区は、D・E-8区、A-B-7・8区、B・C-9・10区、B・C-15~18区、C・D-24・25区である。これらの出土区の中でD・E-8区、B・C-15区は密度が高く集中していた。大型甕形土器は、B・C-4・5区、E-8区、D-15・16区、C-18・20・21区、C-18区、C・D-20・21・23・24区に大きい破片が散らばった状態で出土し、個体数は多くはない。西区台地縁辺部付近などについては、工作物（建物・道路敷など）、花木の植樹、遺物包含層が薄い所を含めて、攪乱や土地造成による削平のために、遺物の出土量は少ない。

出土遺物には、甕形土器、大型甕形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器、手捏ね形土器などや磨製石鏃、打製石鏃、砥石、石錐、石斧、凹石、樹皮布叩石、石錘、研磨のみられる礫、土製勾玉、刀子、鉄滓などが出土した。

甕形土器は、住居跡内埋土中から出土の土器と同様で、完形品は678、679、831、833の4点で、充実した脚台のみ欠損しているものは699、702、726、808がみられた。他の遺物は口縁部破片や底部が多くみられるが、中には口縁部から胴部下位までのものや、移入土器と思われる口縁部破片がみられた。670~684、686、687~693、697、698、701、722、727、728、730、731、741~743は口縁部の形状が内湾気味のものから大きく内湾するものである。685、687、694~696、699、726、729、732~735、737~740は直口もしくは直口気味の口縁部である。702、806~809、811、812、813、826は口縁部が外傾するものである。814~821、824は移入土器と思われ、817、818、821、824は下条式系の土器口縁部である。これら以外の土器は口縁部破片である。Fig. 149~150の中で、1079~1117、1172、1177~1188、1192は充実した脚台である。1185はあげ底気味で、1180、1184はこれまでの山ノ口式土器にはみられないタイプである。これらの中には鉢形土器及び手捏ね形の底部を思わせるようなものもみられた。

壺形土器は、甕形土器同様、住居内埋土中から出土の土器と同様で、完形品は970の1点で、大半が口縁部と底部破片である。Fig. 141～144の885～895については、頸部より直線的に立ち上がりながらわずかに外反する口縁部で、口径が小さく892, 896は口径が大きい。897～932は口縁部破片で、901～904は口径が小さい。911, 918, 919, 923～928は口縁部内側に、断面三角形貼付突帯を廻らし、926～929, 933は口径が大きい。920～923, 925, 929, 933は瀬戸内系か東九州系の影響を受けている。934～964は口縁部が二叉状を呈する。934～937, 947, 951は頸部上位より直線的に立ち上がりながら、わずかに外反する口縁部である。938～946, 948～950, 952～963は口縁部破片である。942は口唇部と突帯間に篋状による列点文がみられる。951は北九州系の影響がみられ、958, 959, 964は内側に断面三角形貼付突帯を廻らす。960～964は口径が大きい。966～970は大きく外反する口縁部で、967～970, 975は口唇部は凹む。971～974, 978～1000は頸部から胴部にかけての部位で、974, 1000は北九州の影響を受けている。975～982, 984～989は在地にみられないタイプが考えられる。975, 976は丹塗り土器で、977は暗文が施される。991～993は篋状工具による鋸歯文が施され、992は魚形線刻、994～997は円形浮文がみられ、東九州系の影響を受けている。Fig. 151～153の1212～1258は平底の底部で、中には大型甕形土器の可能性をも考える。Fig. 155の1272～1273, 1274～1276, 1278～1281は瀬戸内系の凹線文をもつ口縁部及び肩部の部位である。しかし、1272, 1273, 230, 1274, 606, 1275は、甕の可能性も考えられる。1282も瀬戸内系の可能性が考えられる。1277, 1283～1289, 1290は長頸壺の口縁部から肩部にかけての部位で瀬戸内系の影響が認められる。1289は高坏の可能性も考えられる。1277, 1285は凹線文を廻らしている。

大型甕形土器は、住居跡内埋土中からの出土は小破片のみで、その形状は知り得ない。Tab. 45のとおりで、口縁部の形状が内湾するものと大きく内湾するものがある。底部は、Tab. 50のとおりである。これらの土器は居住環境から水甕の用途が考えられる。

鉢形土器は住居跡内埋土中から出土のものと同様で、完形は1069, 1075である。口縁部の形状は、Tab. 47のとおりで、底部はTab. 49に示した。1013～1015, 1017, 1019～1022は鉢形土器の範疇に入れたが、甕形土器の可能性も強いものと考えられる。1072～1075はこれまでの山ノ口式土器にはみられなかったタイプで二か所に耳状突起が施されている。Fig. 149の1171, 1173～1176, 1189, 1190は、平底及び充実した脚台で、Fig. 152の1221, 1224, 1227は鉢の可能性が考えられ、充実した脚台である。

これらの土器のほか、高坏形土器、蓋形土器などがみられる。高坏形土器は、Fig. 144の990とFig. 155の1292～1294であり、990は坏部で、1292～1294は矢羽根透しをもつ瀬戸内系のもので、1289は高坏の脚部の可能性が強い。蓋形土器は、Fig. 154の1262～1271で、1262は完形である。1263は口縁部が欠損し、1264, 1265はつまみ部である。1266～1271は、口縁部で外側に突帯を廻らし、煤の付着もみられるものもある。その他の土器に手捏ね土器がある。手捏ね土器は、Tab. 52で説明を加えた。

石器及び土製品、鉄製品及び鍛冶滓については、第3・4・5節で説明を加える。

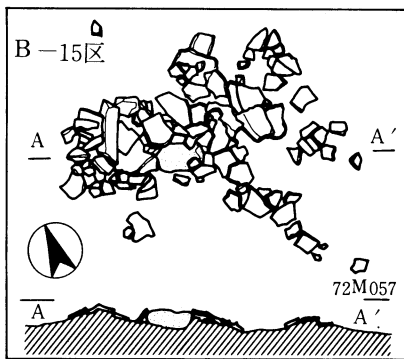
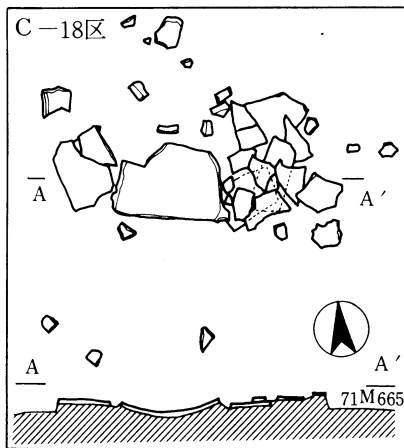
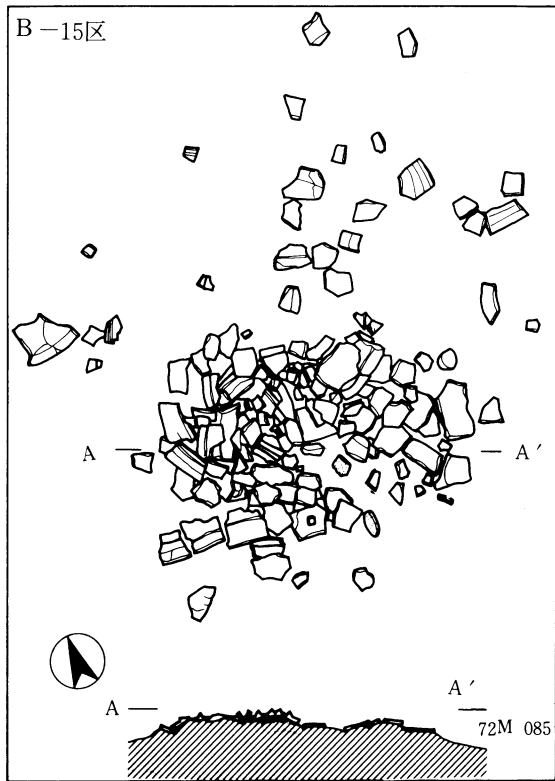
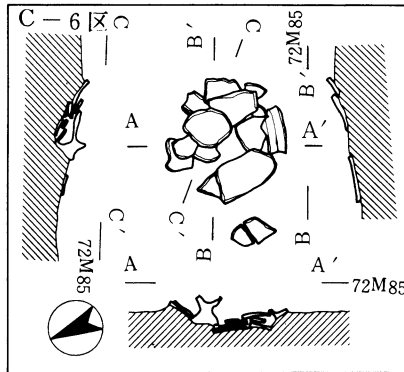
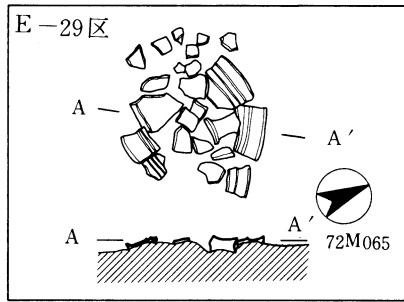
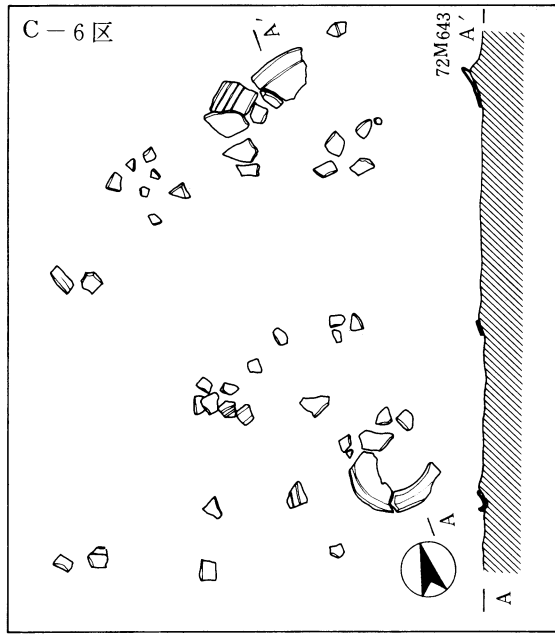


Fig. 156 王子遺跡遺物出土狀態 (1)

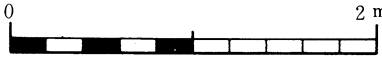
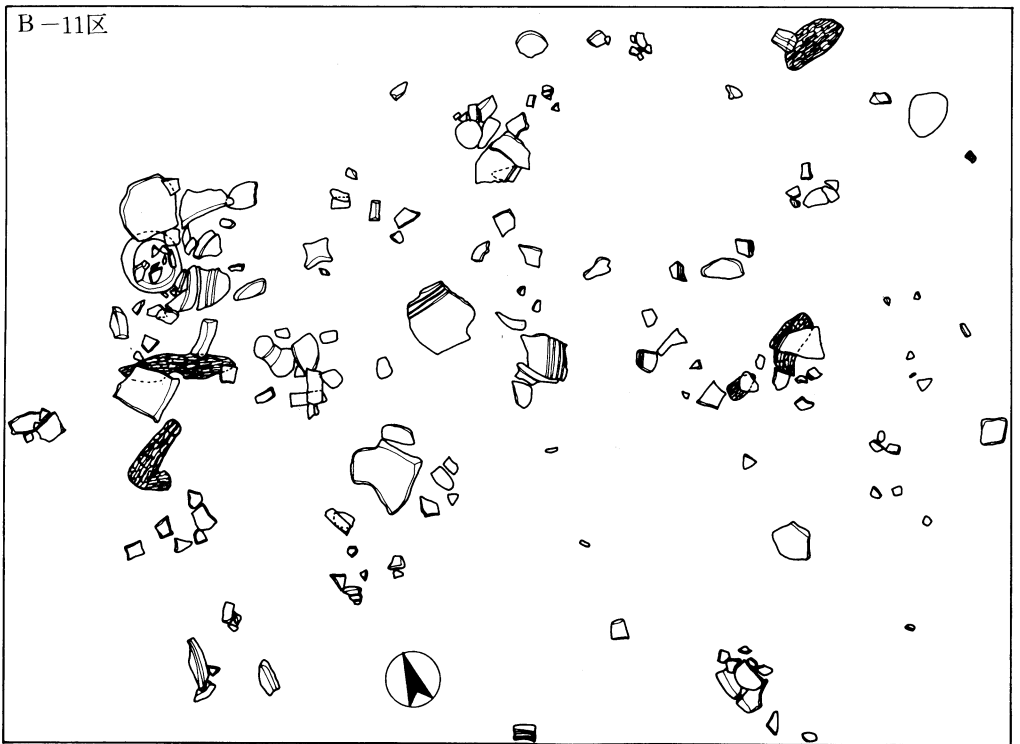
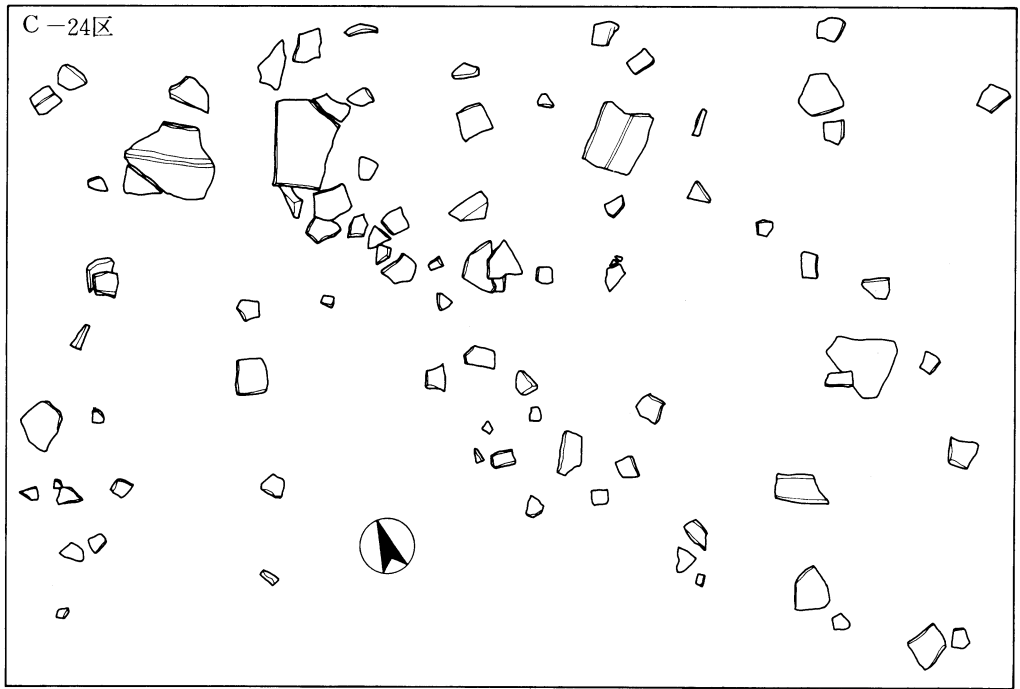


Fig. 157 王子遺跡遺物出土状態 (2)

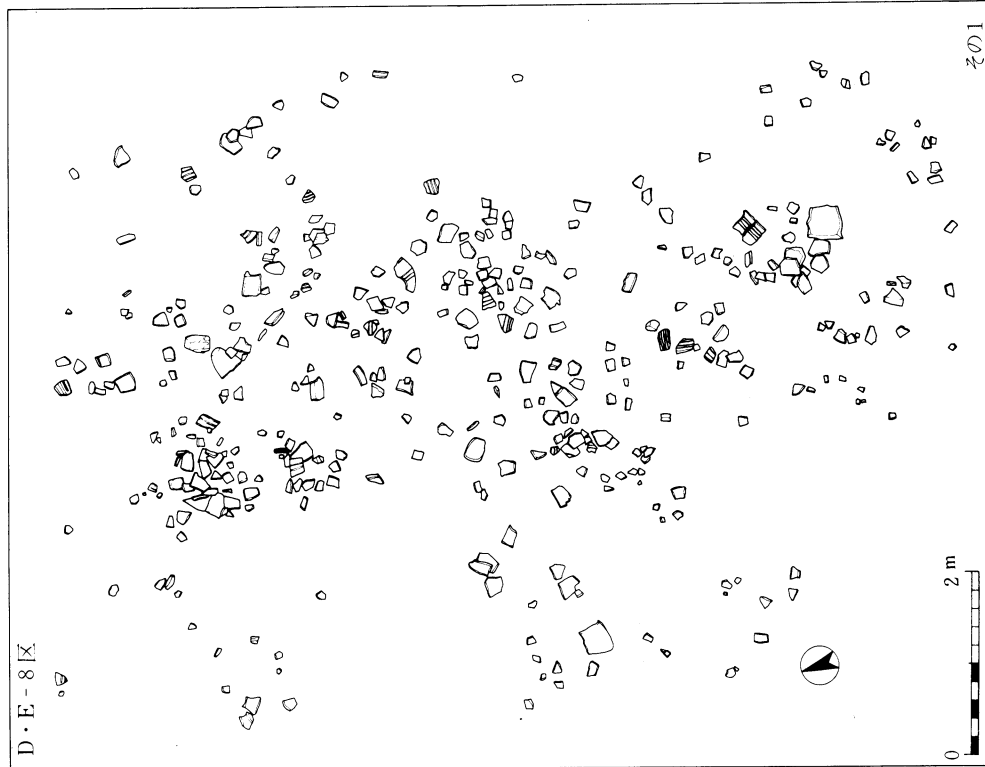
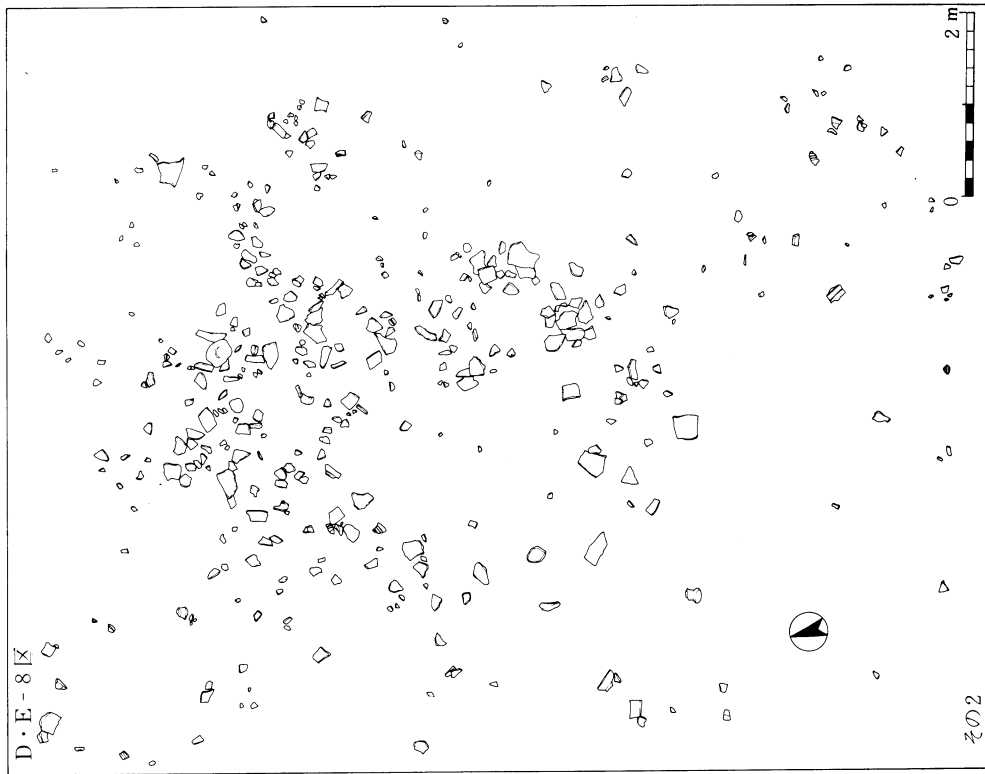


Fig. 158 王子遺跡遺物出土状態 (3)

### 第3節 石器 (Fig. 159~161, PL. 35~37)

王子遺跡の出土の石器は、住居跡・掘立柱建物跡（土壇をもつもの）、土壇などの床面や埋土中にもみられた。これらの遺構以外のⅡ層遺物包層中より磨製石鏃（未製品を含む）、打製石鏃、砥石、石錐、石錘、凹石、樹皮布叩石などが出土した。

#### 1. 磨製石鏃 (Fig. 159, PL. 35, 37)

本遺跡での磨製石鏃の出土総数は、44点で、Ⅱ層遺物包層中よりは10点である。頁岩・千枚岩・フォルフェルス石器の素材とし用いた磨製石鏃で、未製品を含んでいる。1295~1300は扁平無茎で、1298以外はすべて茎部に抉りを認める。石鏃は製作途中のものや破損品の一部を除いて、鏃が両面ともにはっきりと認められ、先端部付近から両側辺部寄りから基部まで続いている。1295は長身鏃である。1298、1300は先端部及び基部に欠損を認める。1299は正三角形形状に近い形状で、他の石鏃については、1295~1297は先端部がわずかに欠損し、1298は両側辺部が多く欠け、1298、1300は先端部及び両端器部に欠損を認め、使用による欠損の可能性が強い。1295~1300については研磨を認め、研磨痕が観察される。1301~1304は製作途中のものと思われ、自然面や剝離痕を残している。

#### 2. 打製石鏃 (Fig. 117, 159, PL. 35)

打製石鏃は総数4点出土した。掘立柱建物跡の土壇内埋土上位付近より1点出土している。Ⅱ層遺物包層より、1305、1306の2点が出土した。1307は14号掘立柱建物跡の土壇内の埋土中上位に認めた。1305は黒曜石を、1306はチャートを、1307はフォルフェルスを石器の素材として用いた石鏃である。1305は五角形状、1306、1307は二等辺三角形形状を呈し、ともに基部に抉りを認め、両面ともに交互剝離により調整されている。

#### 3. 砥石 (Fig. 160, PL. 36)

砥石は総数13点が出土した。Ⅱ層遺物包層中よりは8点である。主に砂岩を石器の素材として用い、1312は頁岩で、1313はフォルフェルスである。1311は細粒砂岩で、他は粗粒気味の砂岩である。1310、1313、1315は手持ち用砥石か、1312は研磨器と思われる。他は置き砥石と思われる。1312と1314は仕上げ用砥石であろう。1303、1309は中央面がよく使用されたもので、1311は石材がもろく三分割していた。1310は板状の石材を用い、凹状に摺り切り、分割し砥石を作り出している。砥石の製作過程を知る痕跡を残す。1312~1314は研磨痕を顕著に認める。

#### 4. 石錐 (Fig. 160, PL. 36)

1316は石錐で、シルト岩を石器の素材として用い、頂部と片側縁中央部から先端にかけて、欠損しているが、先端部には使用によるドリル痕らしい痕跡を顕著に認める。器面全体には磨面を認め、一部に研磨痕が観察できる。

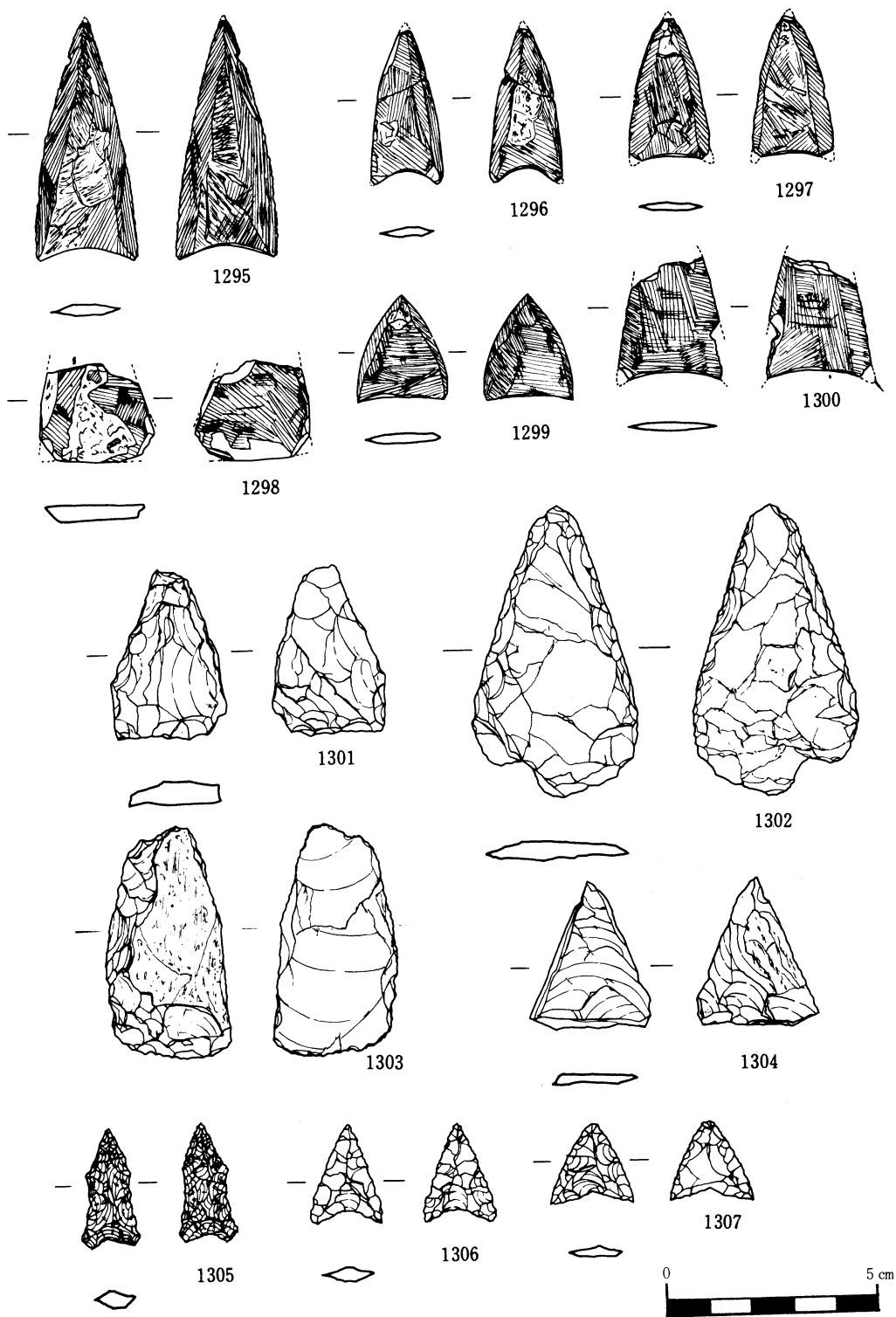


Fig. 159 王子遺跡出土土器実測図(1)



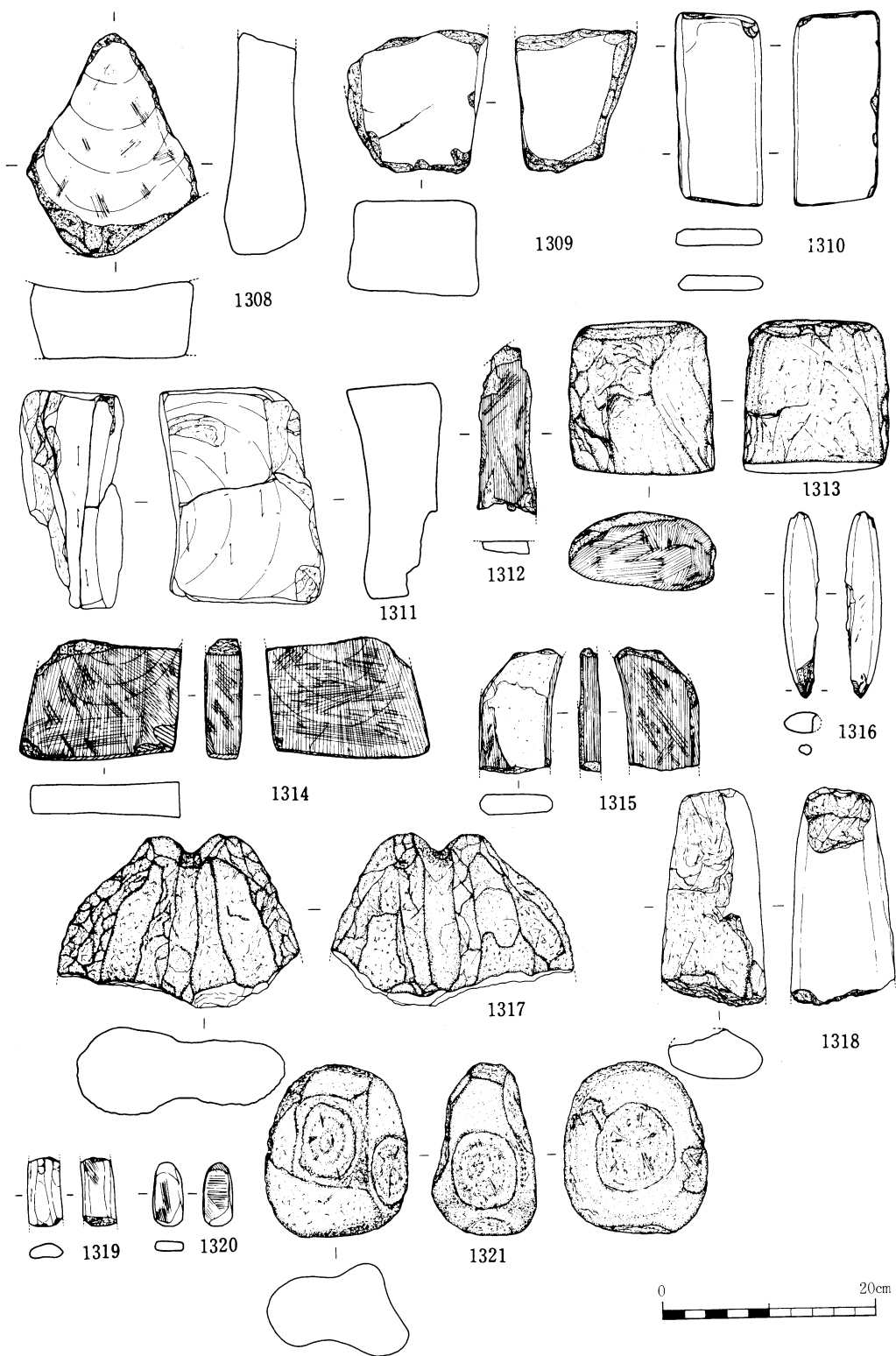


Fig. 160 王子遺跡出土石器実測図(2)

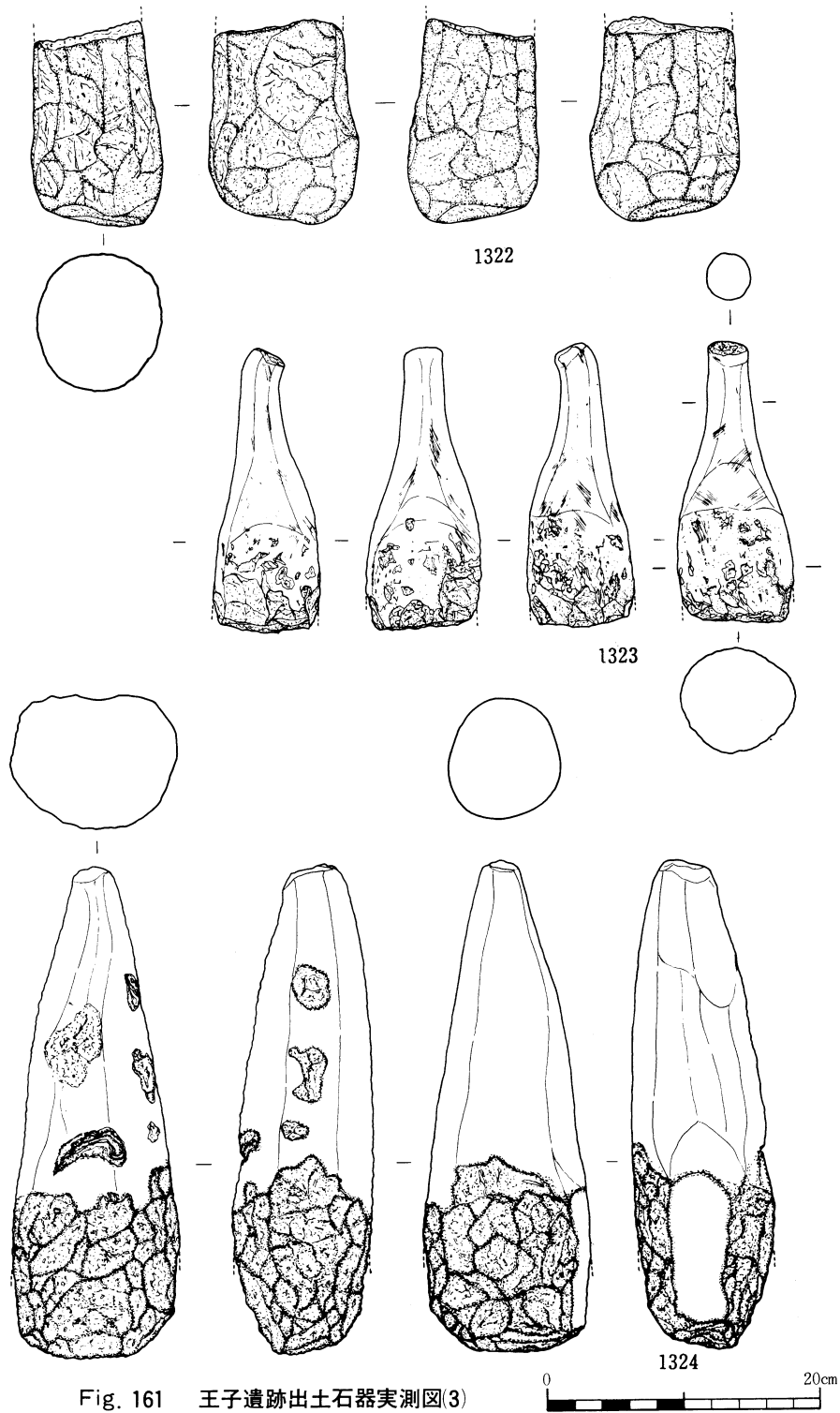


Fig. 161 王子遺跡出土石器実測図(3)

Tab. 54 王子遺跡出土石器一覧表

○わずかな欠損, 法量cm

遺物番号	器種	出土区	完欠	最大長	最大幅	厚さ	重さ	石 材	備 考
1295	磨製石鏃	D-17	○	5.6	2.45	0.3	3.2	頁岩	
1296	〃	D-17	○	3.1	1.75	0.25	1.8	〃	
1297	〃	D-14	○	3.35	1.9	0.2	2.1	フォルフェルス	
1298	〃	C-12	○	2.3	2.6	0.4	3.3	〃	
1299	〃	B-15	○	2.5	2.2	0.5	1.5	頁岩	
1300	〃	E-23	○	2.9	2.5	0.2	2.3	千枚岩	
1301	〃	B-8	○	4.0	2.7	0.6	7.2	フォルフェルス	未完成品
1302	〃	F-24	○	6.9	3.9	0.5	14.1	頁岩	〃
1303	〃	C-21	○	5.5	3.9		12.1	フォルフェルス	〃
1304	〃	B-9	○	3.55	2.8	0.25	2.7	千枚岩	〃
1305	打製石鏃	D-10	○	2.8	1.3	0.45	2.3	黒曜石	
1306	〃	D-17	○	2.3	1.7	0.25	2.1	チャート	
1307	〃	C-20	○	1.95	2.0	0.25	2.0	フォルフェルス	
1308	砥石	E-8	○	10.4	8.1	3.5	330	砂岩	
1309	〃	C-20	○	6.7	6.5	3.95	308	〃	
1310	〃	F-21	○	9.1	4.0	0.8	54	〃	
1311	〃	B-11	○	10.1	12.6	4.45		〃	細粒である。
1312	〃	E-23	○	8.0	2.8	0.6	16	頁岩	
1313	〃	B-14	○	7.1	6.7	3.5	3.25	フォルフェルス	
1314	〃	A-8	○	5.7	7.7	1.6	114	砂岩	
1315	〃	D-16	○	5.8	3.4	0.9	33	〃	
1316	石錐	C-18	○	8.6	1.6	1.0	20	シルト岩	
1317	石錐	B-15	○	8.1	11.3	4.1	450	砂岩	
1318	磨製石斧	C-12	○	10.2	4.9	2.3	132	フォルフェルス	
1319		C-7	○	3.2	1.6	0.7	6	〃	研磨のある礫
1320		C-7	○	2.9	1.4	0.45	4	砂岩	研磨のある礫
1321	凹石	D-20	○	8.0	4.9	4.3	330	シルト岩	
1322	樹皮布叩石	E-8	○	7.35	5.4	4.6	270	頁岩	
1323	〃	E-10	○	10.3	3.7	3.8	150	〃	
1324	〃	E-17	○	17.9	6.0	4.5	580	〃	

#### 5. 石錘 (Fig. 160, PL. 36)

1317は、砂岩を石器の素材として用いている石錘である。上端面は交互剝離により大きい抉り部を作り、両面ともに有溝をもち、一部欠損している。両面ともに一部に自然面を残すが、ほとんど剝離がなされている。

#### 6. 石斧 (Fig. 160, PL. 36)

1318は、フォルフェルスを石器の素材として用いている石斧である。刃部付近は欠損している。片面は一部を残し、もう片面は基部付近に欠損を認める。石材のためか研磨痕は観察されない。

#### 7. 凹石 (Fig. 160, PL. 36)

1321は、砂岩を石器の素材として用いている石斧である。自然礫を用い三か所に大きい凹をもっている。

#### 8. 樹皮布叩石 (Fig. 161, PL. 36)

樹皮布叩石は総数4点が出土した。土壇内の埋土中からは1点である。Ⅱb層含層中より3点がみられ、それぞれに形状を異にしている。1322は砧状を呈する叩石と思われ、先端部のみの検出である。敲打によるためか、器面全体に、凹凸を顕著に認め、棒状を呈している。1323は小型の砧状を呈する叩石である。基部付近には握手部分を認める。握手部分には研磨を認め、部分的に研磨痕の残存を観察する。1324は大型の樹皮布叩石である。敲打部の先端付近は欠損し、敲打により凹凸面を認める。a面の一部及びb面の側縁の一部には、平坦面を作り出している。握手部分は研磨され、素材のためか研磨痕は観察できない。C、D面は自然面を残す。1322～1324については使用による欠損であると思われる。

#### 9. その他の石器 (Fig. 160, PL. 36)

1319はフォルフェルスを石器の素材として用いた扁平な棒状を呈する部位で、両端面ともに欠損しているため、用途は不明である。器面は全面に研磨を認め、研磨痕を一部に観察する。1320は扁平で小型である。研磨痕のみられる礫で、両端面付近は研磨が強く細身になっている。

#### 第4節 土製品 (Fig. 162, PL. 37)

本遺跡の出土の土製品には、土製勾玉がある。総数13点である。1325は大型の勾玉で、丁字頭をもつ。頭部はやや丸味をおび6条の沈線を認める。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや良好である。色調は赤茶褐色で、丹と思われる赤色顔料で採色している。両側より穿孔され、尾部は少々欠損している。1326は小型の勾玉で、丁字頭をもつ。やや丸味をおび6条の沈線を

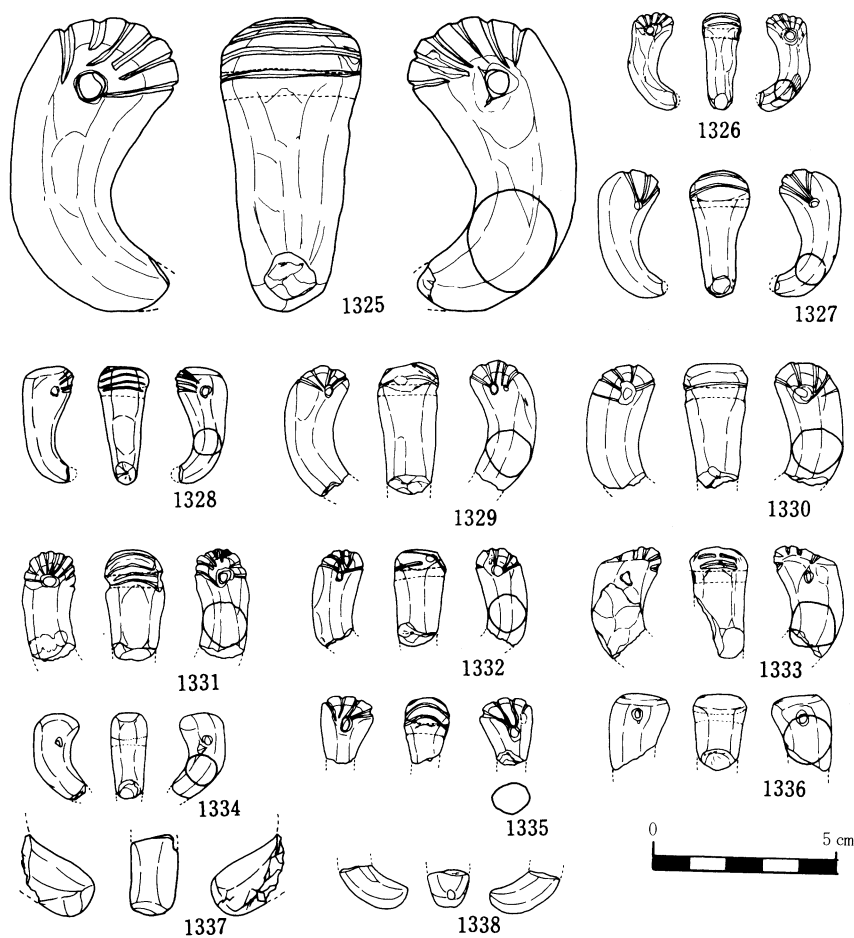


Fig. 162 王子遺跡出土土製品実測図

認める。胎土には砂粒を含み焼成は良くない。色調は灰色で、片側より穿孔され、尾部にはわずかな欠損を認める。1327は丁字頭をもつ。頭部はやや丸味を帯び3条の沈線をもっている。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。色調は明褐色で、両面から穿孔され、尾部は少々欠損している。1328は26号住居跡埋土中より出土した。丁字頭をもつ。頭部は水平であり、4条の沈線を認める。胎土には砂粒を含み、焼成は良好であり、指紋の付着を認める。色調は暗褐色と明茶褐色を呈し、両側より穿孔され、尾部はわずかに欠損している。1329は丁字頭をもつ。頭部は、やや丸味をおび5条の沈線を認めるが、鮮明さに欠ける。脚土には砂粒を含み、表面にまで金雲母が露呈し、焼成はあまり良くない。指紋を付着する。色調は茶褐色で、片面から穿孔され、尾部が大きく欠損している。1330は丁字頭をもつ。頭部は丸味を帯び5条の沈線をもつが、うち1本は鮮明さに欠ける。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は明茶褐色で両面から穿孔され、尾部は大きく欠損する。1331は丁字頭をもつ。頭部はやや丸味をおび、9条の沈線を認め、これらの勾玉でいちばん多く沈線をもつ。胎土には砂粒を含み、焼成は良好であるが、表面の一部に剝落を認める。色調は暗茶褐色を呈し、片側より穿孔され、尾部は

大きく欠損している。1332は丁字頭をもつ。頭部はやや丸味をおび5条の沈線を認める。胎土には砂粒を含み、表面には金雲母が多くみられ、焼成は良好である。色調は明茶褐色で、片側より穿孔され、尾部は大きく欠損している。1333は丁字頭をもつ。頭部は水平で、5条の沈線を認め、胎土には多量の砂粒を含み、焼成は良好である。色調は暗褐色で、片側より穿孔され、尾部は大きく欠損している。1334は頭部はやや丸味をおび、丁字頭は認めない。胎土には砂粒を含み、焼成はあまりよくない。表面は磨滅を認め、両面からの穿孔され、尾部を欠損するが、小型の勾玉である。1335は丁字頭をもつ。頭部はやや丸味を帯び4条の沈線をもつ。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。色調は明茶褐色で、両側から穿孔され、大半が欠損している。1336は頭部が水平で、丁字頭をもたない。胎土には砂粒を含み、焼成はあたりよくない。色調に明褐色で、両側から穿孔され、大半が欠損している。1337は他の勾玉と胎土及び焼成が異なり、勾玉のタイプに入れたが可能性は薄く、尾部のみで全体の形状が不明のため詳細については不明である。1338は土製勾玉の尾部で、上位は欠損している。胎土には砂粒を含み、焼成はやや良好である。色調は茶褐色を呈しているが、尾部のみの出土である。

Tab. 55 土製品（土製勾玉）一覧表

遺物番号	出土区	最大長	厚さ		重さ	完	欠
			丁字頭	体部			
1325	B-10	8.0	3.7	3.1	100	○	
1326	E-13	2.6	0.85	0.85	1.9	○	
1327	C-17	3.5	1.6	1.3	3.6	○	
1328	E-20 26号住・埋土	3.2	1.3	1.1	6.2	○	
1329	D-21	3.5	1.5	1.4	7.8		○
1330	B-14	3.4	1.5	1.6	8.2		○
1331	C-16	3.0	1.4	1.2	1.4		○

わずかな欠損、単位：cm、重さ g

### 第5節 鉄製品及び鍛冶滓

(Fig. 163, PL. 37)

1340は刀子の中茎付近と思われ、B-11区Ⅱb層で出土した。現存で、全長4.5cm、茎長3.3cm、茎幅は背部で、0.3~0.45cmを測る。1339はB-13区Ⅱb層で出土し、現存で、全長6.3cm、幅5.2cm、厚さ2.7cm、重さ123gを測り、表皮は茶褐色を呈する。表皮面は若干の凹凸が認められ、上端部は一部欠損している。表面は灰褐色で湾曲し、青灰色の炉材粘土の付着が観察され、気泡が多く見られる。

遺物番号	出土区	最大長	厚さ		重さ	完	欠
			丁字頭	体部			
1332	D-19	2.7	1.1	1.1	4.0		○
1333	E-21	3.0	1.7	1.4	5.3		○
1334	E-11	2.35	1.2	0.9	2.3		○
1335	C-15	1.8	1.35	0.8?	2.2		○
1336	C-17	2.1	1.5	?	3.6		○
1337	E-20	1.6	1.3	?	4.3		○
1338	E-20	3.2	1.3	?	6.2		○

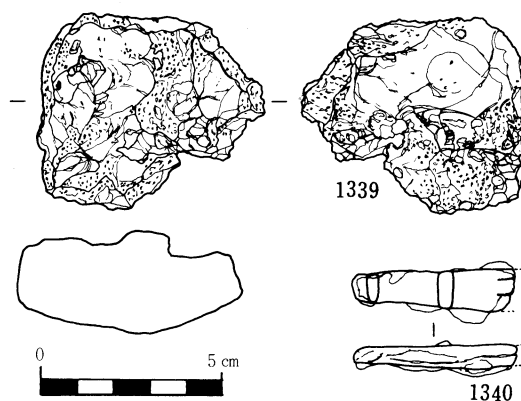


Fig. 163 王子遺跡鉄器及び鉄滓実測図

## 第7章 その他の遺構・遺物

### 第1節 縄文時代の遺構・遺物 (Fig. 164, PL. 37)

王子遺跡において、昭和56年度確認調査、昭和57年度の市道小原線以東の確認調査において、縄文時代早・前期及び細石器文化層は認められるものの、遺構及び遺物の検出はなかった。その後、弥生時代検出遺溝の下層部分の確認調査において、C・D-19-21区のVI b層の上面付近より、縄文時代早期相当の集石遺構及び土器小破片の出土が認められた。その範囲は200m<sup>2</sup>ほどである。以下遺構及び遺物について説明を加える。

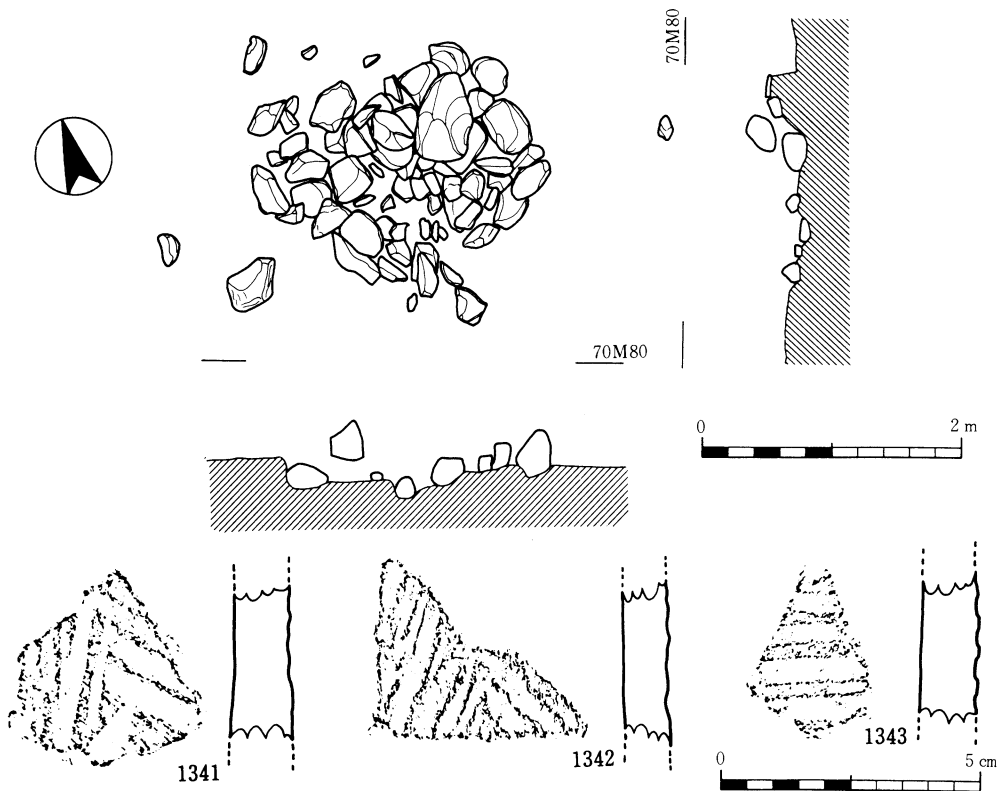


Fig. 164 王子遺跡集石遺構（縄文時代）及び土器実測図

集石遺構がD-20区より1基確認された。長径90cm、短径80cmのほぼ方形状に集石は認められるが、径5～15cm前後の円礫を主体とし、中には25cmほどの大きなものも含まれる。石材は安山岩で、石の表面には炭がタール状に付着し、周辺にも炭化物を多く認めた。

1240・1241は貝殻条痕を綾杉状に施し、色調は明褐色を呈し、胎土には長石を含んで、焼成は良好である。1242は横位に貝殻条痕を施し、色調は暗茶褐色を呈し、胎土には石英・長石を含んで、焼成は良好である。3点ともに小破片で形状は不明であるが、石坂系の土器破片と思われる。

## 第8章 ま と め

王子遺跡は、鹿屋市王子町王子の標高約72mの笠野原台地北西縁辺部に所在する。遺跡の西側は約40m以上の懸崖になっている。また、低地は高隈山地に源を発する肝属川の堆積によって形成された沖積地である。このシラス台地は水に乏しく、本遺跡は比較的水の得やすい台地末端を選定している。

本遺跡は、弥生時代中期末の集落を主体とする遺跡であったが、その後の調査により縄文時代早期の土器や集石を検出したが、主体部は認められなかった。しかし、周辺には縄文時代早期相当の遺跡が存在することが類推される。弥生時代中期相当の遺物包含層からは、堅穴住居跡、掘立柱建物跡（棟持柱付のもの、土壇をもつもの）、土壇、溝などの遺構や、甕形土器・大型甕形土器、壺形土器、鉢形土器などがある。土器は山ノ口式土器を中心に北九州や瀬戸内などからの影響を受けたものがある。また、磨製石鏃、砥石、樹皮布叩石などの石器や土製勾玉、鉈・刀子・鉄滓などの遺物が出土した。このように、大規模な遺跡で学術的見地から古代の南九州を知る上で貴重な遺跡ということで、保存が提起されるなど注目を集めた。特に、ベッド状張り出しをもつ住居跡や掘立柱建物跡（棟持柱付）のものや土壇をもつものは、南九州を含めた九州地方の弥生時代の集落構造を知る上で、考古学研究者のみならず建築学研究者にも学問上で多くの指針を与え、また、遺物については、在地の山ノ口式土器と瀬戸内系や北九州の土器などの共伴関係は、弥生時代の文化圏や交流状況を考えるための重要な資料である。

以下、各遺構や遺物について説明を加え、まとめとする。

### 〔堅穴式住居跡〕

今回の調査により27基（5基は調査区外へのびる）の堅穴住居跡が発見された。これまで南九州では、入来遺跡<sup>洋1</sup>、吉ヶ崎遺跡<sup>洋2</sup>、柳遺跡<sup>洋3</sup>、成川遺跡<sup>洋4</sup>、一の宮遺跡<sup>洋5</sup>、上原遺跡<sup>洋6</sup>、花牟礼遺跡<sup>洋7</sup>などで、弥生時代の住居跡が発見されているが、確認調査などのため集落構造を知り得る遺跡は、ほとんどみられない。吉ヶ崎遺跡<sup>洋2</sup>、成川遺跡<sup>洋4</sup>、一の宮遺跡<sup>洋5</sup>などでは、ベッド遺構がみられ、成川遺跡<sup>洋4</sup>はベッド状張り出しをもつ住居跡が検出された。

ベッド遺構をもつ県外の住居跡には、中期の例として、東京都の道灌山遺跡、長野県の北原遺跡、兵庫県の名古山遺跡、東溝遺跡、広岡遺跡、福岡県の宝台遺跡<sup>洋8</sup>などが知られる。後期の例として、東京都の宇津木遺跡、千葉の殿台遺跡、埼玉県の吉野原遺跡<sup>洋9</sup>、霞ヶ関遺跡、神奈川県の大宮台遺跡、長野県の酒屋前遺跡、腋平遺跡、座光寺原遺跡、的場遺跡、兵庫県の東溝遺跡、大分県の二本木遺跡<sup>洋10</sup>、山口県の北迫遺跡、福岡県の小郡遺跡、狐塚遺跡、西中ノ沢遺跡、坊野遺跡、野口道添遺跡、野里坂遺跡、宮の前遺跡、弥永原遺跡、久保原遺跡、門田遺跡、裏山遺跡<sup>洋11</sup>、大分県の二本木遺跡<sup>洋10</sup>、松木遺跡<sup>洋12</sup>、熊本県の宮山遺跡<sup>洋13</sup>、宮崎県の堂地遺跡<sup>洋14</sup>、祝吉遺跡<sup>洋15</sup>、熊野原遺跡<sup>洋16</sup>などがある。



本遺跡の堅穴住居跡は、平面の形状が方形平面と円形平面とがある。方形および隅丸方形を呈するもの（Aグループ）がある。3号・6号・7号・8号・17号・20号・22号住居跡などあり、基本的には、主柱穴2本で、南側壁際に土壇をもつ。主柱穴の柱間間は狭く、比較的土壇は浅いものである。3号住居跡は、略方形状で、主柱穴を取り囲むように北壁中央部付近から南側壁にかけて、略方形状の掘込を認め、この類の掘込には15号住居跡があるが、土壇はもたない。6号住居跡は、主柱穴2本で、土壇の掘込のあと柱穴の掘込を認め、柱痕跡をもつ。

Tab. 56 住居跡一覧表

単位 cm

住居跡名	規模 cm	主軸の方位	柱 穴	壁 帯 溝	土壇cm	備 考
1号住居跡	300×275		1 + 2			Ⅲ層の上面の検出で円形で小型。
2号住居跡	205×111		2			Ⅱ層中の検出で大半が調査外。ベッド状張り出し。
3号住居跡	350×258	N-83.5°-E	2 + 7	一部検出、西側壁側。		Ⅱ層中の検出。
4号住居跡	475×463	N-80°-E	4 + 1 <sup>α</sup>	南側壁以外検出する。	115×110	Ⅱ層中の検出。ベッド状張り出し。
5号住居跡	555×430	N-84.5°-E	4 + 1 <sup>α</sup>	北西隅に検出する。	185×133	Ⅱ層中の検出。一部は確認調査時に確認。ベッド状張り出し。
6号住居跡	290×228	N-79°-E	2 + 1		119×84	Ⅲ層上面で検出。
7号住居跡	379×297	N-84°-E	2 + 1		124×95	Ⅲ層上面で検出。
8号住居跡	313×310	N-90°-E	2 + 1	載切りにより検出する。	120×95	Ⅱ層中で検出。
9号住居跡	748×694		6 + 1 <sup>α</sup>	一部検出する。	118×102	Ⅱ層中で検出。円形でベッド状遺構。
10号住居跡	476×529	N-89°-E	2 + 2	南西部張り出し以外に検出する。	118×84	Ⅱ層中で検出。ベッド状張り出し。西側ベッド状、壁床面に溝検出。
11号住居跡	508×497	N-73.5°-E	2 + 1	西壁から東壁へかけて検出する。	122×109	Ⅱ層中で検出。ベッド状張り出し。
12号住居跡	793×718		5 + 3	遺存が悪く一部に検出する。	163×141	Ⅱ層中で検出。円形でベッド状張り出し。
13号住居跡	440×420	N-65°-E	2 + 6	壁全体に検出する。	81×51	Ⅱ層中で検出。ベッド状張り出し。
14号住居跡	670×390		6		(100×100)	Ⅱ層中で検出。円形でベッド状遺構。
15号住居跡	380×367	N-88°-E	2			Ⅱ層中で検出。張り出す。
16号住居跡	597×520	N-90°-E	2 + 4		110×135	Ⅱ層中で検出。ベッド状張り出し。
17号住居跡	310×263	N-88°-E	2	関東部以外壁側に検出する。	73×46	Ⅱ層中で検出。
18号住居跡	676×295~550		6		(160×90)	Ⅱ層中で検出。円形。
19号住居跡	554×405	N-78°-E	2	南西隅に検出する。	98×80	Ⅱ層中で検出。ベッド状張り出し。
20号住居跡	306×250	N-107°-E	1 + 3		74×52	Ⅱ層最下面で検出。
21号住居跡	500×200					Ⅱ層中で検出。ベッド状張り出し。
22号住居跡	308×271	N-110°-E	3			Ⅱ層中で検出。
23号住居跡	475×471		1			Ⅱ層中で検出。住居跡に分類したが特殊遺構。
24号住居跡	474×396	N-77°-E	2			Ⅱ層中で検出。ベッド状張り出し。
25号住居跡	443×22~200	N-88°-E				Ⅱ層中で検出。
26号住居跡	490×493	N-77.5°-E	2		120×90	Ⅱ層中で検出。ベッド状張り出し。
27号住居跡	537×438	N-89.5°-E	2		98×78	Ⅱ層中で検出。ベッド状張り出し。

7号住居跡は、土壇は深く、柱穴状の掘込を認める。南西隅に柱穴をもつ。主柱穴には柱痕跡を認めた。8号住居跡は、ほぼ方形状を呈し、土壇内には柱穴状の掘込を認め、7号住居跡と類似する柱穴である。主柱穴には、柱痕跡を認めた。17号住居跡は、特異で主柱穴を南側壁際に認め、床面中央付近に焼土らしい痕跡を残す。壁際には壁帯溝をもつ。22号住居跡は、ほぼ方形状で、柱穴3を認めた。これらの住居跡は遺構検出面からは浅く、20・21号住居跡は、Ⅲ層上面、他住居跡は、Ⅳ層及びⅤa層アカホヤ層を床面とし、部分的に貼り付け調整を認め、17号住居跡は、若干深い。ベッド状張り出しをもつもの（Bグループ）があり、主柱穴2本で、南側に土壇をもつものである。4号・5号・11号・13号・15号・16号・19号・24号・26号・27号住居跡などがある。このほか、2号・21・25号住居跡は、大半が調査区外へのびているため、遺存している遺構より想定できる。これらの住居跡は、ベッド状張り出しの形状や位置、柱穴、土壇、壁帯溝などに相異をみる。ベッド状張り出しを北側にもつものは、4号・10号・13号・15号・16号・19号・26号・27号住居跡で、その位置及び規模に変化があり、4号・13号・16号住居跡は、大半がベッド状遺構で、13号住居跡はわずかに張り出す。西側にもつものは、4号・5号・10号・16号・19号・24号住居跡がある。南西部にもつものは、4号・10号・16号・27号住居跡があり、4号・5号・10号・16号・19号住居跡は、内側に突出状の障壁をもち、19号住居跡は、わずかな突出部をもち、障壁といえるか疑問が残る。南側にもつものは、10号・13号・27号住居跡があり、南側に内側に、突出状の障壁をもち、10号・27号住居跡は、張り出しをもつために、台形状の障壁を作り出す格好である。これらの住居跡のうち、三方のベッド状張り出しをもつものは、4号・10号・16号住居跡で、二方にもつものは、19号・27号住居跡で、5号・13号・15号・24号・26号住居跡は、一方だけのものである。15号住居跡は、張り出しのみであり、3号住居跡と同様に主柱穴を取り囲むように、略長方形の掘込を認め、26号住居跡は、西側壁は円形状、南側及び東側は方形状である。ベッド状遺構には、規模や高さに変化があり、独立して存在するものや連続するものがあり、切り出し及び貼り付け調整による。5号住居跡は、切り出しによるものである。住居跡のベッド状張り出し部のうち南西部及び南側のものは、出入口が想定される。主柱穴は、2本で、柱間間は広くなり、Aグループの柱穴とは、その点で相異をみる。5号住居跡は、主柱穴は3本で、截切りにより床面貼り付け調整部下位より、主柱穴1が検出され、4本が列状に並び、柱穴や土壇の状況より立替えの可能性が考えられる。主柱穴に柱痕跡を認めるものは13号・24号・26号住居跡などがある。土壇については、大半の住居跡に検出され、形状の変化はある。土壇内には、柱穴状の掘込があり、2か所あるものは、10号・16号・25号・27号住居跡で、5か所あるものは5号住居跡、3か所あるものは、26号住居跡、24号住居跡は、攪乱のため消失している。特に、13号住居跡のものは、小規模である。壁帯溝については、住居跡の床面やベッド状遺構上にみられ、4号・10号・11号・13号・19号住居跡に認め、10号・19号住居は、貼り付け調整などにより辛うじて遺存し、貼り付け調整土と溝の埋土との色調が同質である。特に、13号住居跡の壁帯溝は遺存が良好である。これらのベッド状張り出し住居跡は、4号住居跡と10号住居跡、11号住居跡と13号住居跡、19号住居跡と27号住居跡は、類似点をもつ住居跡である。

1号・9号・12号・14号・18号住居跡は円形平面を呈するもの（Cグループ）で、1号住居跡は小型で特異なものであり、他は大型である。14号・18号住居跡は、調査区外へのびるが、その形状は知り得る。9号住居跡は、6本の柱穴で、12号住居跡は、5本の柱穴をもつ。14・18号住居跡は、調査地区外へのび不明である。これらの住居跡は、中央付近に土壇をもち、9号住居跡は、二か所に掘込を検出し、12号住居跡は、複数の掘込を認めた。9号住居跡は、周縁にベッド状を廻らし、主柱穴をとり囲むよう状況で、宝台遺跡1号住居跡に類似した形状である。12号住居跡は、南西の周縁にベッド状張り出しをもち、南西部には方形の突出状の障壁をもつ。張り出し部以外の周縁には、ベッド状遺構を廻らしていたものと思われ、遺存状況が悪く、わずかに残存する程度である。一部の壁際に壁帯溝を認めた。14号住居跡は、調査区へのびる住居跡で、周縁から4か所の内側に、突出状の障壁が壁中などから認められ、障壁間は、ベッド状遺構で、北西隅には、土壇状の掘込を認めるが、全容は不明である。この住居跡は、宮崎県の熊野原遺跡<sup>注12</sup>、祝吉遺跡<sup>注13</sup>に類似する住居跡である。18号住居跡は、南側調査区外へのび、北側は新しい溝により影響を受け、周縁部にベッド状遺構を廻らす。これらの住居跡は、本遺跡で大型の住居跡である。

23号住居跡は、特異な形状で、特殊遺構として扱うべきであるが、現在他に類別がないため、いちおう住居跡（Dグループ）に分類しておいた。この遺構については、分後の課題である。

以上、竪穴住居跡について概略を述べたが、本遺跡の竪穴居跡は、弥生時代中・後期の西日本における一般的な形態をもつものとされるが、主柱穴2本をもつ小型住居跡を主として、中・大型住居跡の存在するものは少なく、掘立柱建物と共存し、また棟持柱付の建物跡などが存在することが、本遺跡の集落構成上の特徴の一つである。中・大型住居跡の少ないことは、掘立柱建物が存在していることが要因のひとつであることが考えられる。

本遺跡のAグループの住居跡は、主柱穴2本で、南側壁際に土壇をもつものがほとんどで、南九州においては、初めての知見である。北九州においては、弥生中期以後に円形竪穴住居跡に替って、弥生時代後期末近くまで続き、隣県の宮崎県では、若干遅れるが、熊野原遺跡B地区12号住居跡<sup>注12</sup>などがあり、弥生時代終末期である。Bグループの住居跡は、基本的にはAグループの住居跡に、ベッド状張り出し遺構をもつものである。ベッド状遺構の設置形態には、三方または四方に、ベッド状張り出しをもつものや壁面に沿って二辺にまたがるもの、三辺にまたがるものがあり、これらの組合せるものもある。ベッド状遺構の設置方法には、切り出しだけによるもの、切り出しと貼り付けによるものがあり、本遺跡では、一住居で併用しているものがほとんどである。北九州では、八女地方などの遺跡<sup>注8</sup>、大分県では二本遺跡<sup>注9</sup>、松木遺跡<sup>注10</sup>、熊本県では宮山遺跡<sup>注11</sup>などがベッド状遺構をもっている。Cグループの住居跡は、円形平面で、ベッド状遺構を全周するもの、障壁間にベッド状遺構を全周するもの、一部を除き全周させ、張り出しベッド状遺構をもち、一か所に障壁をもつものがある。ベッド状遺構を全周させるものには、宝台遺跡<sup>注5</sup>（中期中葉）岡山県大中遺跡<sup>注6</sup>のものは、円形に対して六角形平面である。障壁間にベッドをもつものには、弥生時代後期末の都城市祝吉遺跡<sup>注12</sup>や熊野原遺跡1号・8号<sup>注13</sup>、堂地東

遺跡16号住居跡などが知られる。円形で、張り出しベッド遺構をもち、一部を除き全周させ、障壁をもつものは、初見である。

住居跡内の屋内施設には、炉、貯蔵穴様土壇（中央ピットを含む）、柱穴、壁帯溝・障壁などがある。炉については、屋内・屋外とも検出していない。甕形土器や鉢形土器の多くは、煤を付着しているものが多く、13号・14号掘立柱建物跡の土壇の掘込は、共同釜屋とする考え方もあり、貯蔵穴様土壇（中央ピット）との関係も含めて検討を要するものである。貯蔵穴様土壇については、方形平面がベッド状張り出しをもつ住居跡の大半は、南側中央壁際に、円形平面の場合は、中央ピットと呼ぶものである。本遺跡の貯蔵穴様土壇の掘込は、貼り付け調整され、その上位に、10cm前後の黒色土を認め、床面として生きている。黒色土中及び上位には、甕形土器破片や棒状を含む炭化物を多く検出したが、焼土及び灰は認めない。建築儀礼はどのような用途の可能性を考えるとの見方もある。貯蔵穴については、甘木市所在の下原遺跡の報告例で、「屋内土壇の付設方法及び出土遺物から考慮される用途として作業穴（作業土壇）—主に生産用具・工具の研き場—の可能性が高いことが指摘できる」という考え方もあり、本遺跡においても、8号・19号・27号住居跡では、土壇及びその周辺に作業台？と考えられる石も存在している。炉を含めて、今後の課題であり、資料の増加を待ちたい。柱穴については、方形及び張り出しベッド遺構をもつ住居跡の大半は、主柱穴2本で、柱痕跡を認めるものもあり、径15～19cmを測る。円形平面は、路線外へのびるため定かではないが、主柱穴は、5～6本である。壁帯溝については、貼り付け調整土と埋土が同質のため判別しがたく、検出できても遺存が悪い住居跡もあった。機能は、床面の湿気抜とか排水用などの考え方が一般的で、近年では周壁の土留材の検出された住居跡の報告例もある。障壁については、張り出しベッド状遺構をもつ住居跡や円形平面の住居跡において検出され、ベッド状遺構をもつ住居跡は、床面までが深いため、70～80cm前後の高さに残る壁面の一部が、その壁面と同じ高さ及び若干下位より内側へ突出したような障壁が削り出されており、円形平面では、四か所（現存で）検出する住居跡もある。機能については、この原始共同体社会でありながらプライベートな空間造をしようとしたようにみえるとの見方もある。祝吉遺跡や熊野遺跡などの遺跡では、花卉型住居跡と呼称されている。立替えについては、5号住居跡が考えられ、住居跡の截切りで、床面の貼り付け調整された下部より主柱穴を検出した。主柱穴や土壇の状態より増築の可能性が考えられる。

#### 〔掘立柱建物跡〕

今回の調査により、14基（2棟は調査区外へのびる）の掘立柱建物跡を検出した。本遺跡の掘立柱建物跡には、桁行・梁行共に掘立柱でさらに、妻側に独立して棟木を支える、棟持柱の掘り方があるもの（Aグループ）がある。1号掘立柱建物跡（棟持柱付）は、2間×2間で、Ⅲ層上面の検出である。柱穴の埋土中より、弥生式土器小破片が出土した。2号掘立柱建物跡（棟持柱付）は、北側桁行4間、南側桁行5間、梁間は共に3間で、桁行で南側の方が1間だけ多く、出入口の可能性が考えられる。柱穴5か所は、立替えのためか二か所の掘込を認めた。

三層上面での検出である。4か所の柱穴埋土中より、弥生式土器小破片が出土した。3号・4号掘立柱建物（棟持柱付）は、共に調査区外へのび、一部が重複する。3号掘立柱建物跡（棟持柱付）は、4間×4間が想定され、4号掘立柱建物跡（棟持柱付）は、南側桁行の状況から推定される。ともにⅡ層中で検出され、二か所の柱穴の埋土中より弥生式土器小破片が出土した。5号掘立柱建物跡（棟持柱付）は、8号掘立柱建物跡と重複し、P<sub>11</sub>とP<sub>13</sub>との柱穴の状況により、5号掘立柱建物跡（棟持柱付）が先行する。北側・南側桁行ともに3間で、不規則であり、西側梁間は3間で、東側は2間である。西側棟持柱は、立替が考えられる。6号掘立柱建物跡（棟持柱）は、南北桁行とも4間で、P<sub>4</sub>は立替えが考えられ、梁間は東西ともに3間である。西側棟持柱は、立替えが考えられる。5・6号掘立柱建物跡（棟持柱付）ともに歪である。1間×1間と2間×1間の掘立柱建物跡を呈するもの（Bグループ）がある。7号掘立柱建物跡は、1間×1間で、Ⅲ層上面での検出で、柱穴の掘込は、大きく立替えの可能性が有る。8号掘立柱建物跡は、5号掘立柱建物跡（棟持柱付）と重複する。8号・9号・10号・

Tab. 57 掘立柱建物一覧表

単位 cm

遺構名	桁行 梁間				柱間寸法		棟持柱間	主軸の方位	備考		
	N	W	E	S	桁行	梁間					
1号掘立柱建物跡(棟持柱付)	N	355.5	W	298.5	N	166.5~169.0	W	147.0~151.5	535.0	N-67°-E	2間×2間
	S	327.5	E	313.0	S	147.5~180.0	E	149~164.0			
2号掘立柱建物跡(棟持柱付)	N	449.0	W	371.0	N	109.5~119.0	W	118.0~130.0	681.5	N-82.5°-E	基本的には3間×4間
	S	500.0	E	387.5	S	66.0~120.0	E	124.0~132.5			
3号掘立柱建物跡(棟持柱付)	N		W	(144)	N		W	(144)		N-79°-E	柱間間より埋定路線外
	S	(249.0)	E		S	(124.0~125.0)	E				
4号掘立柱建物跡(棟持柱付)	N		W	(283.0)	N		W	(130.0~153.0)		N-91°-E	柱間間より4間×4間路線外
	S	490.0	E	(126.0)	S	(115.0~136.0)	E	(126.0)			
5号掘立柱建物跡(棟持柱付)	N	291.0	W	266.0	N	186.0~95.0	W	(66.0~80.0)	373.0	N-79°-E	基本的には3間×3間で重複
	S	(300.0)	E	(226.0)	S	(500~111.0)	E	(76.0~104.0)			
6号掘立柱建物跡(棟持柱付)	N	440.0	W	392.0	N	65.0~134.0	W	114.0~127.0	615.0	N-89.5°-E	基本的には3間×4間
	S	450.0	E	360.0	S	94.0~146.0	E	119.0~143.0			
7号掘立柱建物跡	N	433.0	W	226.0	N	433.0	W	226.0		N-81°-E	1間×1間
	S	412.0	E	229.0	S	412.0	E	229.0			
8号掘立柱建物跡	N	395.0(353.0)	W	220.0	N	395.0(353.0)	W	196.0		N-79.5°-E	1間×1間立替えの可能性
	S	388.0(344.0)	E	196.0	S	388.0(344.0)	E	220.0,220.0			
9号掘立柱建物跡	N	361.0	W	200.0	N	361.0	W	200.0		N-93.2°-E	1間×1間
	S	350.0	E	215.0	S	350.0	E	215.0			
10号掘立柱建物跡	N	392.0	W	220.0	N	392.0	W	220.0		N-90.5°-E	1間×1間
	S	405.0	E	222.0	S	405.0	E	220.0			
11号掘立柱建物跡	N	370.0	W	192.0	N	370.0	W	192.0		N-92°-E	1間×1間
	S	335.0	E	220.0	S	335.0	E	220.0			
12号掘立柱建物跡	N	630.0	W	295.0	N	295.0~335.0	W	295.0		N-89.5°-E	1間×2間
	S	620.0	E	235.0	S	298.0~322.0	E	235.0			
13号掘立柱建物跡	N	400.0	W	232.0	N	400.0	W	232.0		N-80°-E	土坂をもつ1間×1間
	S	424.0	E	236.0	S	424.0	E	236.0			
14号掘立柱建物跡	N	484.0	W	265.0	N	484.0	W	265.0		N-67°-E	土坂をもつ1間×1間
	S	484.0	E	273.0	S	484.0	E	273.0			

11号掘立柱建物跡は、1間×1間で、その規模は、梁間約200cm、桁行約400cmである。8号・10号掘立柱建物跡は、Ⅲ層及びⅡ層、9号掘立柱建物跡は、Ⅲ層上面、11号掘立柱建物跡は、2間×1間の建物跡で、Ⅱ層中で検出した。その規模は、平均して352×207cmである。四本の掘立柱の中央に「土坂」を伴うもの（Cグループ）がある。13号・14号掘立柱建物跡があり、ともにⅡ層中及びⅢ層上面の検出で、13号掘立柱建物跡は、柱穴及び土坂内より弥生式土器小

破片や炭化物（小片）が出土した。14号掘立柱建物跡は、柱穴より土器破片、土坑内より大型甕形土器、打製石鏃、棒状炭化物が出土した。13号掘立柱建物の土坑は、深く、床面はⅤa層で貼り付け調整され、14号掘立柱建物跡の土坑は、浅くⅢ層上面で、切り出しによるものである。

以上、掘立柱建物跡について概略を述べたが、住居や倉庫などの考え方がある。Aグループには、梁間が3m以上で、桁行の柱間間が対応しなものがあり、総柱建物でないために高床構造は考えにくいとの意見や高床倉庫とする相違なる二つの見解が提示されていた。この棟持柱付の建物は、和歌山県出土の土器破片や香川県出土の銅鐸、奈良県出土の家屋文鏡等に描かれたものでしかみることのできなかつたものであり、権威性の高いものと同様と想定されるとの見方もある。また、古代建築でもある伊勢神宮にみられる神明造りの祖形や棟持柱の遺構例としては、当遺跡は最も古く、他に全く類例のないもので地理的にみて、南方系住居伝来の経緯をさぐる上でも極めて貴重であるとの指導もあった。これらの遺構例は、神戸市松尾遺跡（3×2間で総柱、六C前半）和歌山県鳴滝遺跡（4×3間で総柱、五C前半）などが知られ、総柱である点が異なっている。Bグループには、掘立柱の中央に「土坑」を伴うものが2基発見されている。この土坑の掘込より、貯蔵穴、墓坑、共同の釜屋、祭祀に係るものとする考え方があり、初めての知見で、今後の課題としたい。Cグループには、1間×1間と1間×2間の建物跡が検出され、桁行側が約4mで、中には柱穴の掘込の大きいものも検出された。これらの掘立柱建物は、中央区から東区にかけ、4基が孤状に配置したような状態で検出された。掘立柱建物跡の検出例として、福岡県の竹並遺跡、下原遺跡、辻田遺跡、久保園遺跡、湯納遺跡、岡山県の百間川遺跡、鳥取県の青木遺跡などが知られる。

#### 〔土坑〕

土坑は、隅丸長方形や楕円形を平面形状とし、掘込が深いものと浅いものを検出した。隅丸長方形の掘込で深いもの（Aグループ）がある。1号・2号・4号があり、掘込が深いものと浅いものがある。1号土坑は、隅丸長方形の掘込で深く、段状の掘込を検出し、底面はⅥ層である。埋土中より甕形土器、壺形土器、鉢形土器、樹皮布叩石が出土した。壺形土器には、口縁部上面に櫛描状の鋸齒文を施したのがある。2号土坑は、隅丸長方形の掘込で浅く、底面は、Ⅲ層上面で平坦面を呈する。埋土中より大型甕形土器、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、砥石が出土した。壺形土器には、瀬戸内系の影響を受けたものがある。4号土坑は、隅丸長方形の掘込で、Ⅲ層上面での検出で、実際の掘込は、深いものと思われる。埋土中より軽石の集石を検出した。楕円形で深いもの（Bグループ）がある。3号土坑で、略南西部の柱穴状の掘込が土坑を切った状態で検出した。埋土中より、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高杯形土器が出土した。壺形土器には、北九州系や瀬戸内系の影響を受けたものがある。これらの土坑は貯蔵穴とする考え方が支配的である。

#### 〔溝状遺構〕

溝状遺構は西区と中央区に検出土した。西区溝状遺構は、Ⅲ層上面で検出された。幅90～140cm、深さ、40～47cmである。実際の掘込は深く、U字形を呈する。中央区溝状遺構は、Ⅱ

層中で検出した。遺物包含層と埋土は同質であり、幅は、約200cm前後で、深さは、20～30cmの溝である。規模については、南北の土層断面より実際の掘込は、大きいものと考えられる。また2つの溝が重複し、溝Ⅰの底面は、硬く踏みしめられ痕跡を残している。これら溝の埋土中より遺物は少なく、弥生式土器小破片のみで、いずれも弥生時代のものである。

以上、各遺構について概略を述べたが、本遺跡は、標高72cmの笠野原台地西縁に立地し、鹿屋バイパス予定地内、東西約290m、南北平均約40mの範囲内に位置する集落跡で、47の遺構で構成され、さらに道路予定地外への拡がりが類推される。

本遺跡の集落跡を概観すれば、竪穴式住居跡は、4グループで構成され、そのうちDグループは特異な形態である。26基のうち、Aグループは26.9%、Bグループは53.8%、Cグループは19.2%で、大半がBグループの占める割合が大きい。Aグループのうち、支柱穴2本で、南側壁際に土壇をもつもの42.8%、支柱穴1で、南側壁際に土壇をもつもの0.14%、その他のもの42.8%である。これらの住居群のうち、3号住居跡は、大型甕形土器、甕形土器、鉢形土器など多くの土器をもち、Bグループの15号住居跡と類似性をもつ。他住居跡は、遺物の出土量が少ない。Bグループのうち、4号住居跡と10号住居跡、11号住居跡と13号住居跡、19号住居跡と27号住居跡などは類似性をもち、15号住居跡は前記のとおり、大型甕形土器などをもつ住居跡である。これらのBグループの住居跡は、類似性をもつものの、それぞれに特徴をもち機能が考えられるが、ベッド状遺構の特殊性を考慮し、集落内における身分制度や家族の構成による年齢階級社会が山ノ口式土器文化社会の中に芽ばえていたものであろうか。それぞれの住居跡より言及には及ばなかった。このベッド状遺構のうち、南側や南西部のものは出入口、他は就寝の場とする考え方が<sup>注33</sup>ある。Cグループのうち、1号住居跡以外は、規模が大きく、ベッド状遺構を廻らし、貯蔵穴様土壇(中央ピット)をもつ点では、類似性をもつが、屋内施設の様相が異なり、12号住居跡のように張り出しベッド状遺構と障壁をもつもの、14号住居跡のように障壁をもつもの、9号住居跡のように石鏝などを多くもつことから、石器などの道具を製作した工房跡とする説と集会場とする考え方が<sup>注34</sup>示されている。掘立柱建物跡は、3グループで構成され、14基のうち、Aグループは42.8%、Bグループは42.8%、Cグループは0.14%である。Aグループは、棟持柱付のもので、同時代においては、初めての知見である。これらの建物跡は、梁間が2間と、3間、4間(推定を含む)のものがあり、弥生時代の高床式倉庫は、梁間が1間が一般的で、高床倉庫が普及するのは古墳時代以降で、梁間が2間、3間の総柱が一般的となり、本遺跡のように梁間が2間以上の場合、「総柱であるかが高床式と掘立柱住居の相違判断とする基準となる」との基準をとれば、全て平地式の住居跡である。しかし、小型で、3m以下のものは高床倉庫で、他のものは平地住居で、権威性の高いものと推定されるとの意見もある。Cグループは、「土壇」をもつもので、初めての知見であり、土壇の掘込より貯蔵穴、墓壇、共同釜屋、祭祀に係るものとの意見が<sup>注35</sup>あり、今後の資料の増加を待ちたい。規模はBグループの1間×1間のもと同じであるが、柱穴の掘込が大きい。Bグループは、Cグループと規模では同じであるが、柱穴の掘込が小さく、7号掘立柱建物は、立替えの可能性がある。また、12号掘立柱建物は、1間×2間の規模である。これらのBグループの建物を

高床倉庫と推定した場合、Aグループを平地住居ととらえる考え方もあるが、Cグループの桁行は約3m以上である。

〔遺物について〕

本遺跡の出土遺物は、第5章の第1節、第2節、第6章の第1節、第2節で概略を述べた。これらのうち土器については、大半が在地の土器で、南九州の編年基準によれば中期後葉の山ノ口式土器である。山ノ口式土器のほか、北部九州のものや影響を受けたもの、東九州の影響を受けたもの、畿内の土器を祖形とした瀬戸内系のものや影響を受けたものがあり、これらの土器が相伴して出土した。本遺跡の山ノ口式土器は、完形品が少なく全容を知り得るものはわずかな個体であり、口縁部だけのもの、口縁部から胴部だけのもの、底部だけのものなど絶対量が多く、甕形土器・大型甕形土器、壺形土器、鉢形土器などに区分し、それぞれの口縁部の変化による分類を試みたが、細片のために口径や傾きに等復元形に若干の差異も考えられる。これらの土器は、本県の成川遺跡<sup>注4)</sup>にも酷似したものが多量出土している。住居跡内の土器は、床着が少なく、全容を知り得ないためセット関係にまで言及は出来ない。中には、これまでの山ノ口式土器にはみられなかったタイプもあり、認められたとしても、山ノ口式土器は瀬戸内系の土器や北部九州の土器との関係で、再考する余地があるのではなからうか。北部九州系のものには、小破片であるが須玖式土器<sup>注5)</sup>などがあり、北部九州の影響を受けたものは、壺形土器に多くみられ、東九州のものには、下条式とみられる口縁部などがある。瀬戸内系の土器には、凹線文をもつ土器、篋状工具による列点文を施している土器破片、矢羽根透しをもつ高杯形土器などがある。本遺跡出土の瀬戸内系土器は、宮崎県の新田原6号出土の瀬戸内系高杯及び壺形土器と類似する点が多い。また、愛媛県出土の土器の胎土に含まれる鉱物や焼成が酷似し、形態においても調整や沈線及び凹線の技術も、愛媛県の弥生時代中期末の文京Ⅲ様式や紫雲出Ⅲ様式に類似し、山陽地方においては、高橋護氏の分類<sup>注6)</sup>では仁伍式に比定できよう。また、石川悦雄氏は、宮崎県平野における弥生式土器編年試案—素描—(Mk.Ⅱ)の中で、「新田原のものと同型式と思われる王子遺跡出土の瀬戸内系土器は山ノ口式と相伴するとされており、このことは、従来中期後半に比定されている山ノ口式土器の位置づけの再考をうながす要素で、少なくとも山ノ口式の細分の手がかりであり、その一部は、森貞次郎氏が主張されるように、後期初頭におよぶ可能性を示唆している。」と述べている。また、凹線文土器は、成川遺跡<sup>注4)</sup>の山ノ口土器の壺形土器や、時期は不明であるが、菱刈町の前畑遺跡<sup>注7)</sup>の壺形土器にもみられる。山ノ口式土器の甕形土器や壺形土器に櫛描文を施したものがあり、畿内系文化が流入定着したことが知られるとの見方もある。

石器のうち、磨製石鏃が多く出土した。特に、9号住居跡内からは多く出土し、未製品も多く工房跡とする考え方が示されている。樹皮布叩石<sup>注8)</sup>は、桑の実の真皮から採った繊維で、ヒマラヤ、華中、華南、南朝鮮、日本などの照葉樹林帯で用いられたとされている。この繊維をつくるための道具で、北九州の戸畑高校学校歴史研究室の採集品や高木恭氏が宇土史研究<sup>注9)</sup>の中で紹介されている。本遺跡よりは4本出土した。土製勾玉は、総数13個出土した。勾玉は一般に祭祀に関係があるとされている。本遺跡で発見されているものは総て土製品であり、その中に



際って大きく丁字頭をもつものがみられ、小形のものも丁字頭をもつものが多い。ただ、祭礼がみられる場所や遺構は未発見である。これらの土製勾玉は、佐賀県二塚山遺跡などの出土例が知られる。鉈・鉄滓の出土があり、鉈は鉈が出現する前の大工道具の一つであり、小田富士雄氏の同定の結果、吉ヶ浦型鉈とされている。鉄滓は、分析の結果、チタンの含有量が1%未満で、朝鮮半島産出の鉄鉱石を半島で製鉄し、インコットで輸入したものが国内で配分されここで鉄の利器が製作された可能性も考えられる。

本遺跡の竪穴住居跡は、AグループからBグループへの移行も考えられるが、それぞれの住居跡の機能から共存したものと考えられ、A・Bグループともに、それぞれ形状の違いを認める。北部九州においてAタイプ（東西に略長方形で、主柱穴2本で、南壁に土壇をもつもの）は中期後半から弥生時代後期末まで続き、また、東西の壁側にベッド遺構をもつものは、福岡県の八女地方や熊本県、大分県、宮崎県にもみられ、弥生時代終末にみられる。宮崎県のもものは、花卉型住居にベッド遺構をもっており、本遺跡との関係を考えなければならない。また、森貞次郎氏の指導の中で、「とくにベッド遺構をもつものは、東瀬戸内の地域から、楯描文土器文化とともに流入したことが推定される」との意見がある。掘立柱建物のA・Cグループは、初めての知見で、今後の課題としたい。Bグループは、桁行が約4mあるが、高床式倉庫となり得る可能性が考えられる。このように、竪穴住居跡と掘立柱建物とが共存することは集落構成上の特異性である。また、本遺跡の遺構は、まとまりがあり掘立柱建物跡と溝の一部に切り合いを認めるが、そのほとんどが近隣するものの切り合いがなく短時間であったことが考えられる。土器については、山ノ口式土器と北部九州系の土器、瀬戸内系の土器などの共伴して出土したことは、今後、畿内第Ⅳ様式と九州地域の中期の位置づけや文化の認識の相違により、時間的位置づけに大きな問題を投げかけていると思われ、今後、須玖式土器や瀬戸内系土器と山ノ口土器との組合せを再考する要因をもっていると考えられる。

本遺跡は、南九州において初めての知見であり、比較的短時間とみられる集落が、どのように成立したか、生産基盤（稲作か畑作）や墓制などを含めて諸問題を多くかかえるが、今後の資料の増加を待ち、検討を加えなければならない。

#### 〈参考文献〉

- ① 河口貞徳「入来遺跡」鹿児島考古11（1976）
- ② 鹿児島県教育委員会「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（25）（1983）
- ③ 志布志町教育委員会「柳遺跡」志布志町文化財報告書（1980・3）
- ④ 鹿児島県教育委員会「成川遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（24）（1983）
- ⑤ 河口貞徳「一の宮遺跡」考古学雑誌第37巻第4号（1951）
- ⑥ 鹿児島県教育委員会「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（25）.1982）
- ⑦ 高山町教育委員会「高山町郷土史」
- ⑧ 河野真知郎「初期農耕集落の解明」Ciucum-Pacific（1975）より所収
- ⑨⑩ 大野町教育委員会「大野原の遺跡」大分県大野郡大野町所在遺跡群発掘調査報告書（1980）

- ⑪緒方勉「宮山遺跡」阿蘇町埋蔵文化財調査報告第1集, 阿蘇町教育委員会(1972)
- ⑫宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報」Ⅱ～Ⅲ(1981～1982)
- ⑬面高哲郎「祝吉遺跡」都城市文化財発掘報告書第2集都城市教育委員会(1982)
- ⑭⑫に同じ
- ⑮宮本長二郎 現地指導による文化財調査報告の中で、可能性が考えられるが検討を要する。
- ⑯⑮に同じ
- ⑰福岡県教育委員会「下原遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財報告書2。(1983)
- ⑱石野博信「考古学から見た古代日本の住居」社会思想社「家」別刷(1975)
- ⑲河口貞徳 現地指導の中で文化財調査報告による。
- ⑳小田富士雄 現地指導による文化財調査報告の中で、「考え方があろうが、高床構造であれば、外側だけでなく内側も基盤日配置の柱穴がみられるのが普通であるから、平地の可能性が高いであろう」との考え方である。
- ㉑宮本長次郎, 沢村仁 現地指導の中で、文化財調査報告による。
- ㉒⑲に同じ
- ㉓宮本長二郎「住生活」日本考古学を学ぶ(2)有斐閣選書(1979)
- ㉔沢村仁 現地指導の中で文化財調査報告による。
- ㉕⑮に同じ
- ㉖友石孝文「竹並遺跡」竹並遺跡調査会(1978)
- ㉗北九州市教育委員会「辻田遺跡」北九州市文化財調査報告(35)(1980)
- ㉘福岡市教育委員会「久保園遺跡」福岡市文化財調査報告(91)(1983)
- ㉙福岡県教育委員会「湯納遺跡」今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書4～5(1976・1977)
- ⑳㉓に同じ
- ㉑㉓に同じ
- ㉒⑲に同じ
- ㉓森貞次郎 現地指導の中で文化財調査報告による。
- ㉔国分直一・河口貞徳・現地指導の中で文化財調査報告による。
- ㉕㉓に同じ
- ㉖宮崎県教育委員会「宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報」Ⅳ(1983)
- ㉗岡本健児「弥生土器Ⅰ・四国」ニュー・サイエンス社
- ㉘高橋護「弥生土器Ⅰ・山陽」ニュー・サイエンス社
- ㉙菱刈町教育委員会「前畑遺跡」菱刈町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)(1983)
- ㉚国分直一 現地指導の中で文化財調査報告による。
- ㉛高木恭二「宇土市史研究」No.4(1983)
- ㉜大澤正己氏の分析による。分析結果、本書所収
- ㉝㉚に同じ
- ㉞㉝に同じ

## 第9章 王子遺跡の遺構保存事業

王子遺跡は、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡（棟持柱付を含む）、土壇、溝状遺構など総計47の遺構が検出された。また、遺物は在地の山ノ口式土器などの土器、北九州系の影響を受けた土器、瀬戸内系の凹線文や矢羽根透しをもつ土器や樹皮布叩石、鉈、鍛冶滓などが出土した。このように大規模な遺跡で、学術的見地から古代の南九州の弥生時代を知る上で、貴重な資料を提供した。このため遺跡の保存が提起され、その取扱いが県文化財保護審議会において協議を重ねられ意見集約がなされた。その結果、県教育委員会は貝申意見の内容について、関係機関と協議し、検出遺構の移設、遺構の型取り及び転写、遺構全体の模型や映像記録、遺構の実測などの事業を実施した。

文化庁及び国立奈良文化財研究所の指導・助言のもと、1. 移設、2. 型取り、3. 転写、4. 映像記録、5. 模型などについて実施した。

### 1. 移設



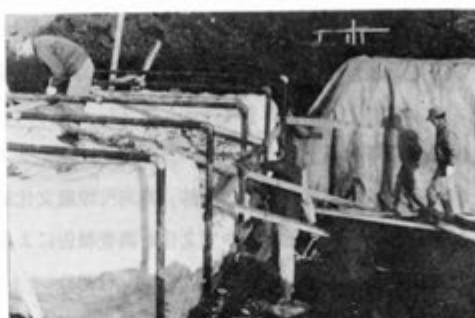
① 遺構の表面及び周辺を清掃し、周辺部の掘り下げ作業を実施する。



② 周辺部の掘り下げ後薬剤と遺構面を分離するため、腐食布及びビニールによる補護やさらに、硬質発泡ウレタン樹脂による補護作業を実施する。



③ 分離するために、床面下位にH鋼貫入のため、水平ボーリングを実施する。



④ H鋼の貫入後、H鋼及鋼管により骨組みを作る（木材も使用する）。その後、硬質発泡ウレタン樹脂の吹付により、さらに補護作業を実施する。



⑤ 硬質ウレタン樹脂の吹付け後、床面の切断のため鉄板挿入のために、堆進用ジャッキにより鉄板（12mm）を挿入し、切り離す作業を実施する。



⑥ 遺構の切り離す作業後、運搬はクレーン車により釣り上げ運搬車に積載し、移設先（王子遺跡資料館予定地）へ運搬する。



⑦ 据え付けにあたっては、運搬作業前に基礎工事を実施する。据え付にあたっては、実測図をもとに、レベル等を正確に合せて作業を進める。



⑧ 据え付け実施後生コンクリートを流し込み、基礎工事を終了する。その後、上屋構造物の基礎工事実施し、建物の建設作業を実施する。



⑨ 建物建設終了後、梱包を解き、ウレタン及び鋼管を除去し、遺構壁面は崩壊をしないように、化学処理で補強作業を実施する。  
薬剤：サンコール樹脂：サンコールシナー



⑩ 梱包を解き、化学処理後、清掃作業を実施する。遺構自体が含水率が高いため、数ヶ月後、さらに化学処理をくり返す作業を実施する。



⑪ 王子遺跡資料館で、出土遺物とともに展示し、10月1日より一般公開する。

## 2. 型取り



① 遺構の表面を清掃する。通常は遺構表面の土壌粒子を固定するためサンプルを散布する。硬質発泡性ウレタン樹脂を約20cm程度吹付け作業を実施する。



② 補強のため木材を入れて骨組みを作り、さらに、硬質発泡性ウレタン樹脂を吹付け作業を実施する。



③ ウレタン樹脂の吹付け作業後数分割に切断作業を実施する。



④ 数分割に切断作業後取りはずし作業を実施する。剥ぎ取り面の整形を行う。ウレタンフォームに、若干の遺構面の土壌が付着する（凸型）。取りはずし作業後運搬し、重富収蔵庫に保管する。

### 3. 転写



- ① 遺構の表面を清掃する。遺構及び土層の表面をサンプルンを散布して固定し、さらに、合成樹脂を吹付ける。薬剤：サンプルンW-Eトマック17NR-51, ハードナーHY-837



- ② 化学処理後補強するため布（カーゼ及び寒冷抄でもよい）を敷き骨組とし、さらに合成樹脂を吹付け作業を実施する。



- ③ 土層についても①と②の作業を実施する。薬剤は①と同じ。



- ④ 合成樹脂吹付け作業後、しばらくの間、乾燥させ、削ぎ取り作業を実施する。運搬作業後、重富収蔵庫に保管する。

### 4. 映像記録



- ① 発掘風景、検出全遺構、保存事業、出土遺物などについて映像記録を実施し、今後の文化財保護思想の普及などに努めるための資料とする。

### 5. 模型



- ① 発掘調査区及び周辺地域の一部の地形を含めて1/200の縮尺の模型を製作し、王子遺跡資料館に展示公開する。

版 函



1. 発掘調査前全景



2. 9号住居跡発掘風景



3. 花粉分析土壌サンプル採取風景



4. 発掘風景



5. 遺跡見学会風景

王子遺跡発掘調査(1)





1. 中央区・東区全景 (西区から)



2. 中央区風景



3. 遺構管理風景



王子遺跡発掘調査 (2)

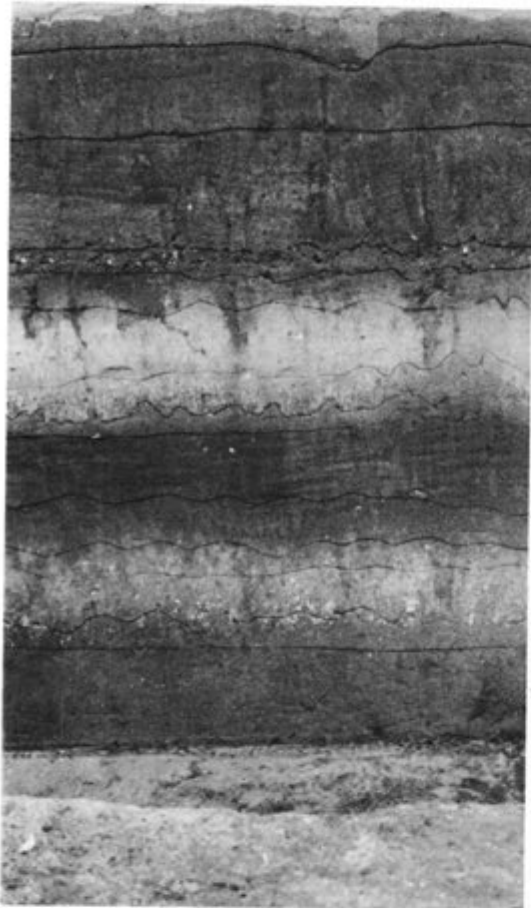
4. 西区全景 (中央区から)



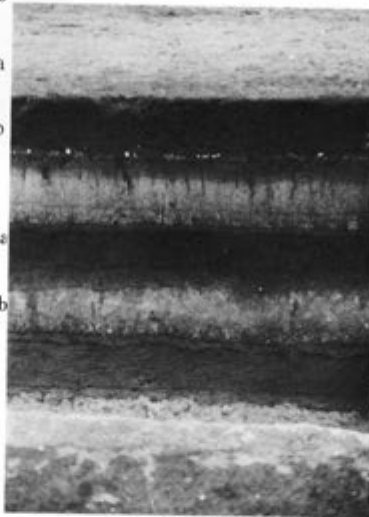
1. 土層断面 (E-25·26区)



2. 土層断面 (D-9区)



3. 土層断面 (C-29区)



4. 土層断面 (C-15区)

王子遺跡土層断面図



1. 遺物出土状態 (D・E-8区)



2. 遺物出土状態 (F-12区)



3. 瀬戸内系土器出土状態 (D-25区)



4. 瀬戸内系土器出土状態 (D-25区)



5. 遺物出土状態 (D-6区)



6. 遺物出土状態 (B-15区)

王子遺跡遺物出土状況



1. 3号住居跡発掘風景（南西から）



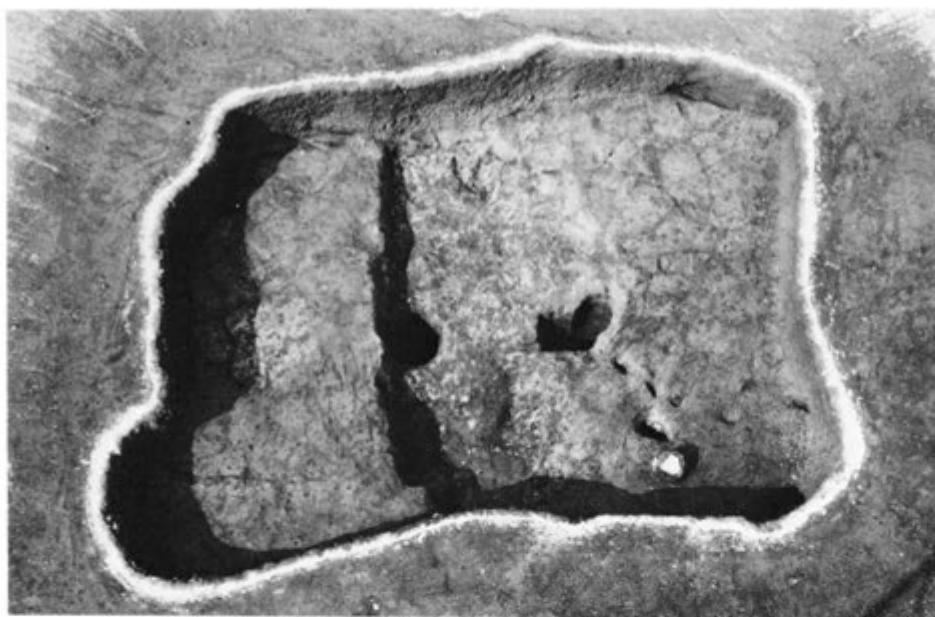
2. 3号住居跡遺物出土及び埋土状態（東から）



3. 3号住居跡遺物出土状態（南西から）



4. 3号住居跡遺物出土状態全景（南西から）



5. 3号住居跡全景（南から）

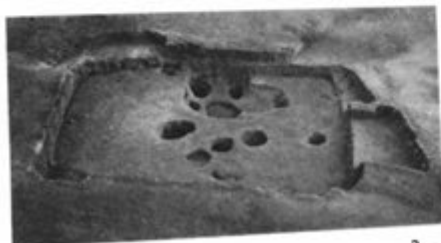
3号住居跡検出状況



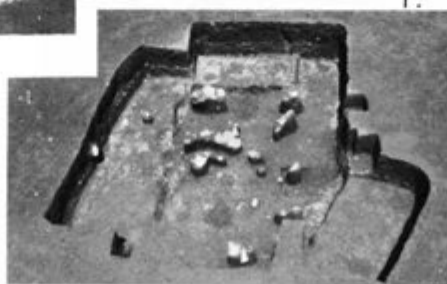
1. 4号住居  
跡全景  
(北から)

2. 4号住居  
跡遺物出土状  
態全景  
(西から)

3. 5号住居  
跡全景  
(北から)



3.



4. 5号住居  
跡全景  
(西から)

2.



4号・5号住居跡検出状況

4.



1. 7号住居跡全景 (東から)



2. 7号住居跡遺物及び床面検出状態  
(東から)



3. 7号住居跡柱穴及び土壇検出状態  
(北から)



4. 7号住居跡全景 (東から)

7号住居跡検出状況



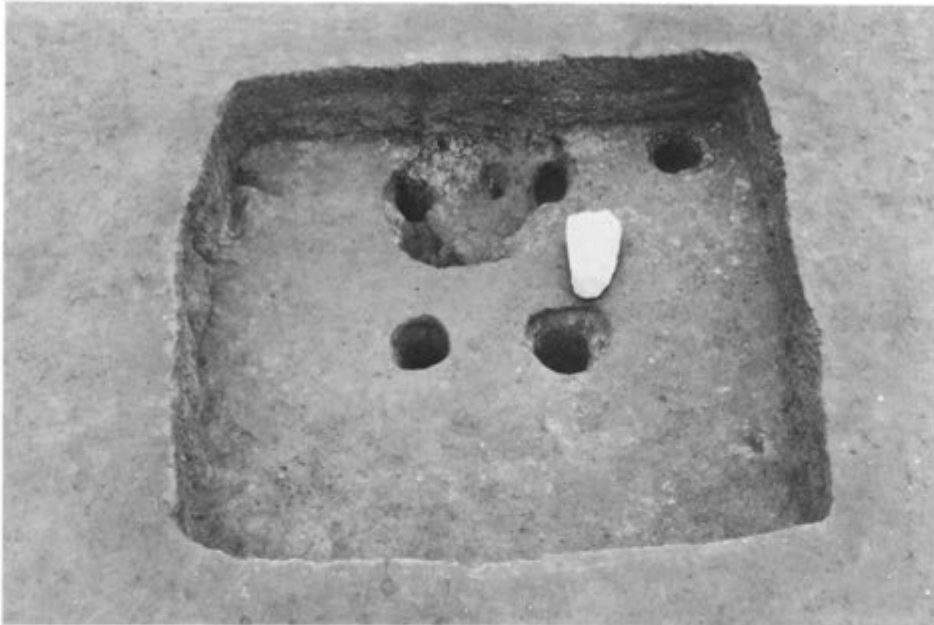
1. 6号住居跡全景（東から）



2. 8号住居跡遺物出土状態（東から）



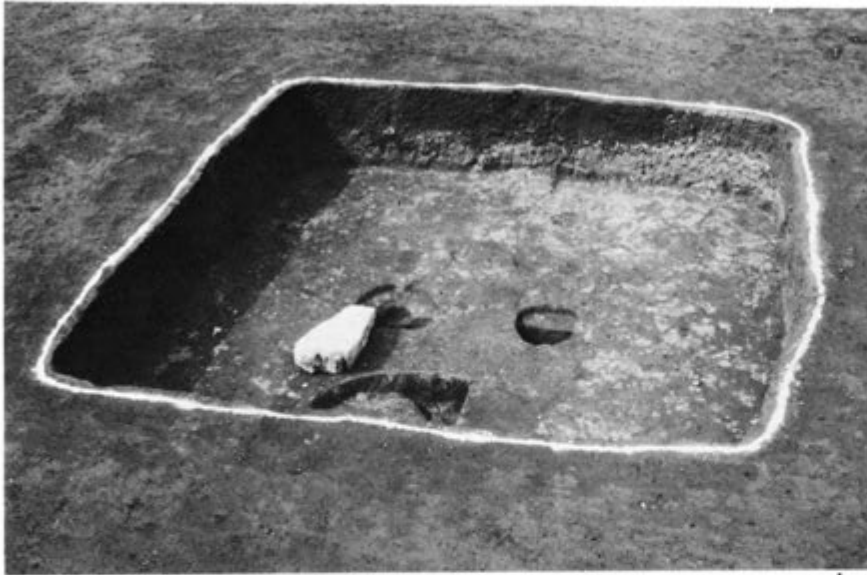
3. 6号住居跡載切り状態（北から）



6号・8号住居跡検出状況

4. 8号住居跡全景（北から）

PL. 9



1. 8号住居  
跡全景  
(南から)

2. 8号住居  
跡遺物出土状  
態  
(北から)



2.



3.

3. 8号住居  
跡全景  
(東から)

4. 9号住居  
跡遺物出土状  
態全景  
(北から)

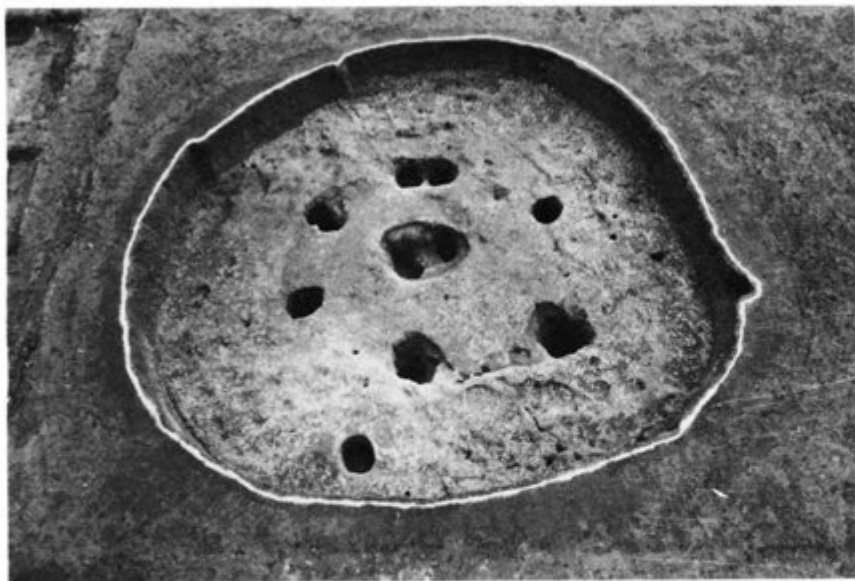


4.

8号・9号住居跡検出状況



PL. 10



1. 9号住居跡全景  
(北から)

2. 9号住居跡土壇及び柱穴検出状態  
(北から)



2.



3. 土壇埋土状態  
(南から)

3.



4. 10号住居跡全景  
(北から)

4.

9号・10号住居跡検出状況



1. 11号住居  
跡全景  
(北から)

2. 11号住居  
跡全景  
(東から)

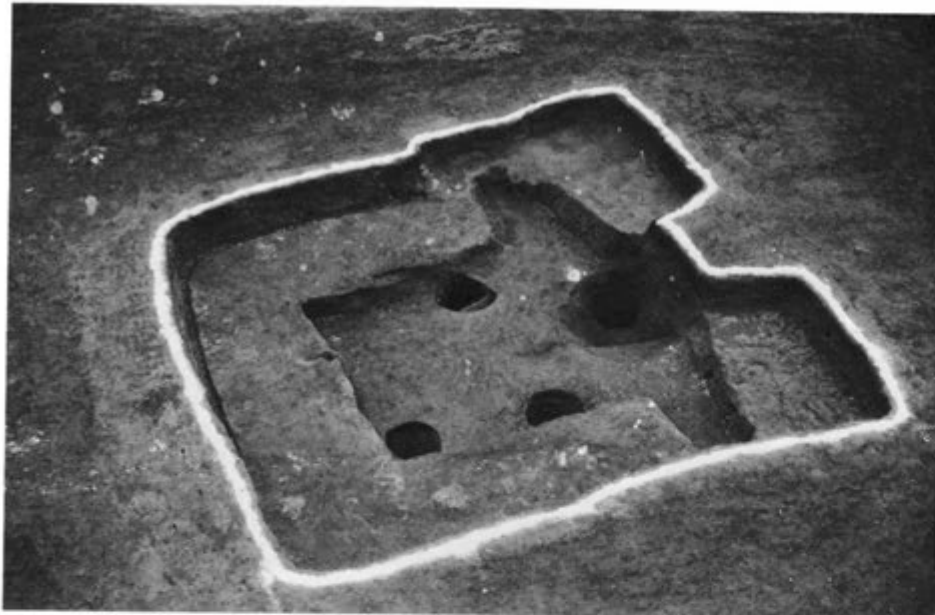


2.



3.

3. 11号住居  
跡截切り状態  
(西から)



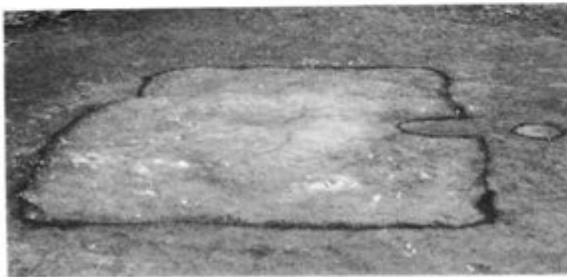
4. 11号住居  
跡全景  
(西から)

11号住居跡検出状況

4.



1. 13号住居跡全景（北から）



2. 13号住居跡検出状態（西から）



3. 13号住居跡発掘風景（南西から）



4. 13号住居跡全景（南から）

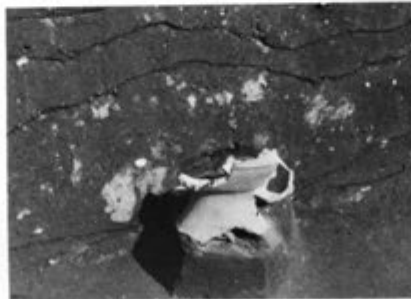
13号住居跡検出状況



1. 12号住居跡全景 (北東から)



2. 14号住居跡遺物出土状態 (208)



3. 14号住居跡遺物出土状況 (283)



4. 14号住居跡全景 (東から)

12号・14号住居跡検出状況



1. 15号住居跡遺物検出状態（東から）



2. 15号住居跡截切り状態（南から）



3. 15号住居跡全景（北から）



4. 15号住居跡全景（東から）

15号住居跡検出状況



1.

1. 16号住居跡全景（北から）

2. 16号住居跡全景（西から）

3. 17号住居跡全景（北から）



2.



3.

16号・17号住居跡検出状況



1. 18号住居跡全景 (北から)



2. 19号住居跡全景 (南東から)

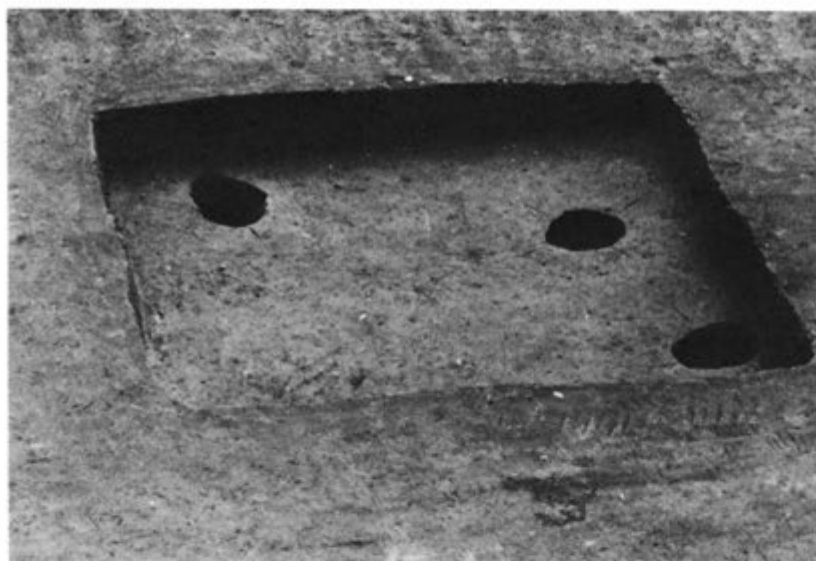


3. 19号住居跡全景 (南から)

18号・19号住居跡検出状況



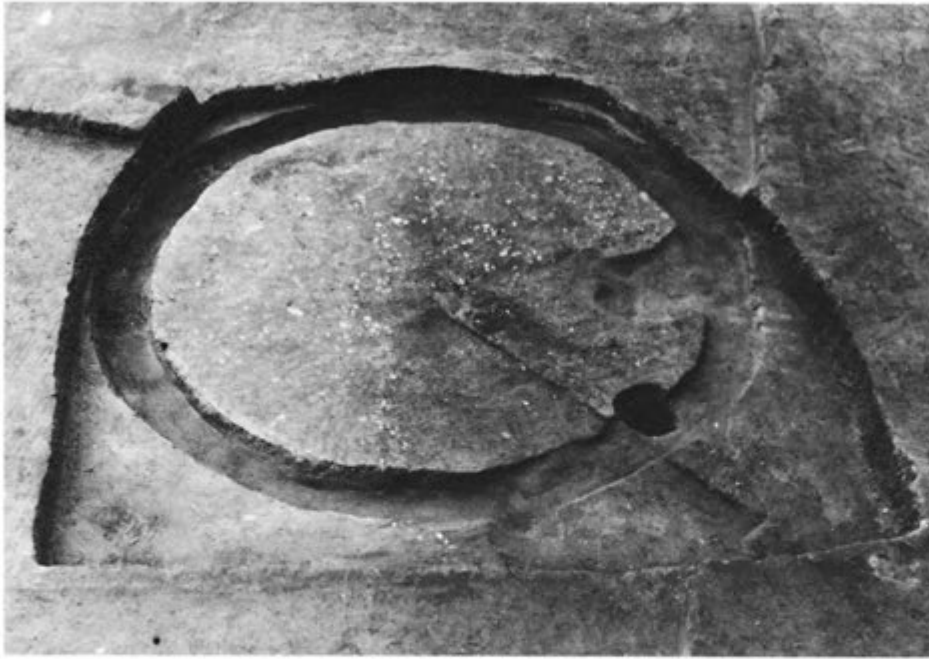
1. 20号住居跡全景（北東から）



2. 22号住居跡全景（東から）

20号・22号住居跡検出状況



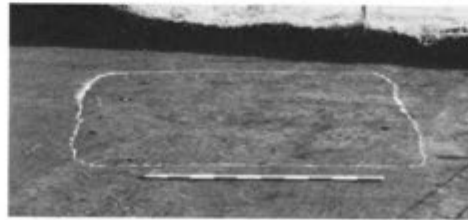


1.

1. 23号住居跡全景（東から）

2. 24号住居跡確認状態（西から）

3. 24号住居跡全景（北から）

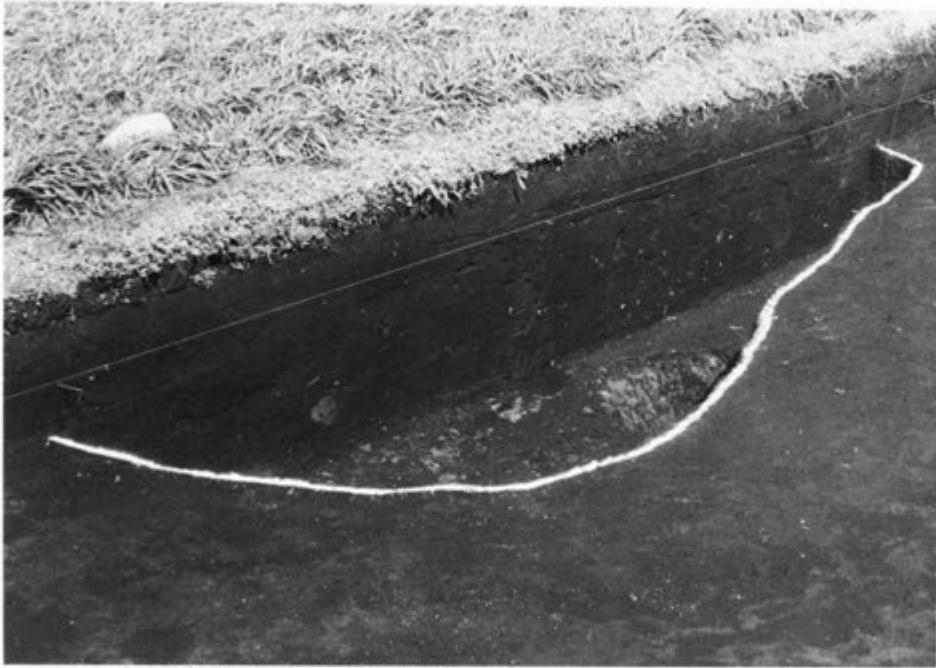


2.

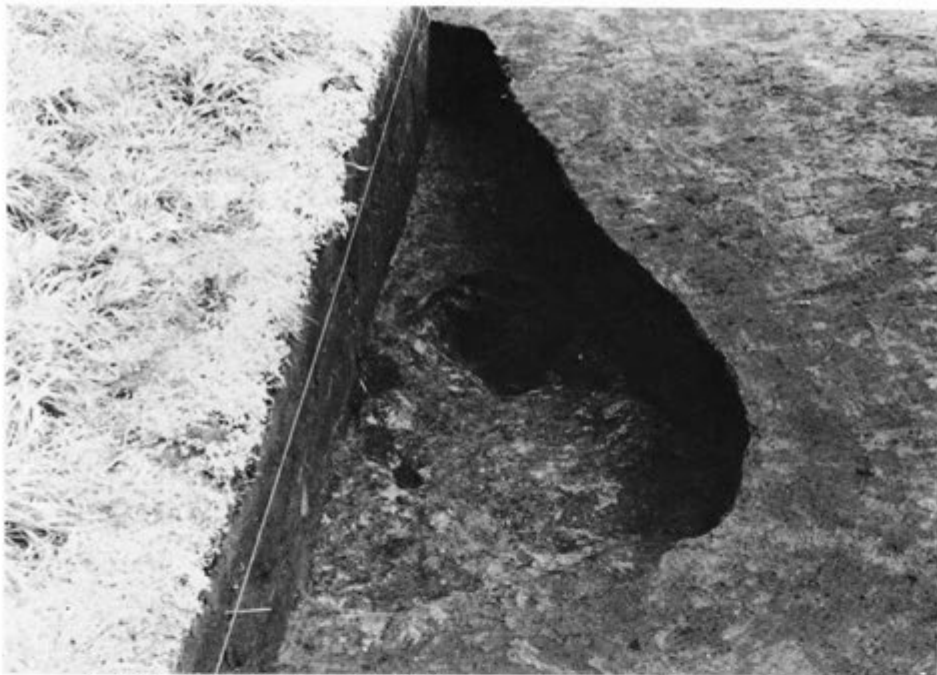


3.

23号・24号住居跡検出状況



1. 25号住居跡全景(南西から)



2. 25号住居跡全景(西から)

25号住居跡検出状況



1. 26号住居跡全景 (西から)



2. 26号住居跡遺物出土状態 (552, 575, 576)

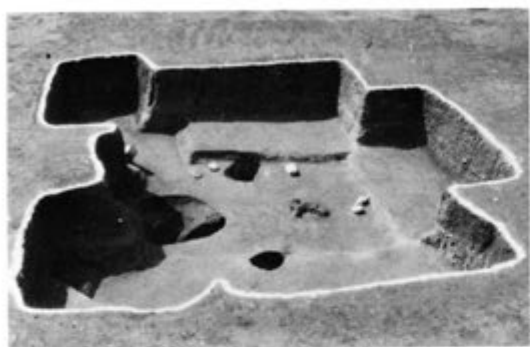


3. 26号住居跡遺物出土状態 (552)



4. 26号住居跡遺物出土状態 (北から)

26号住居跡検出状況



1. 27号住居跡全景 (東から)



2. 27号住居跡埋土状態 (西から)



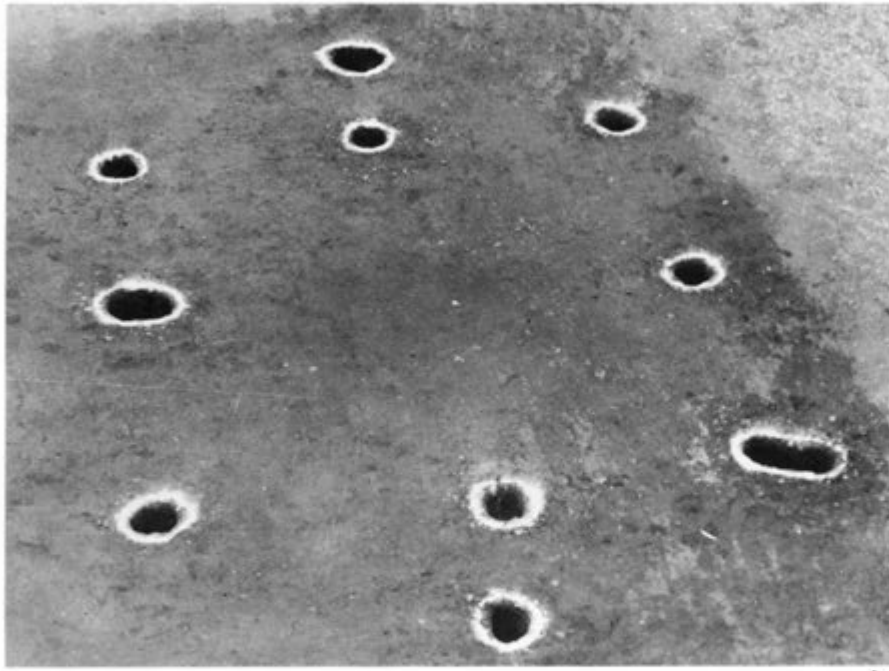
3. 27号住居跡全景 (北から)



4. 27号住居跡遺物出土状態 (南から)

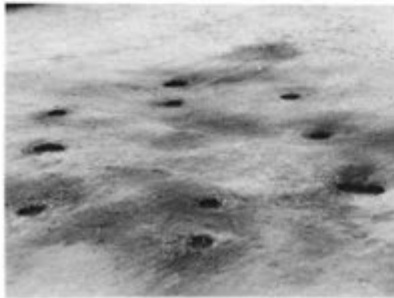
27号住居跡検出状況

1. 1号掘立柱建物跡（棟持柱付）全景（東から）



1.

2. 1号掘立柱建物跡（棟持柱付）全景（東から）

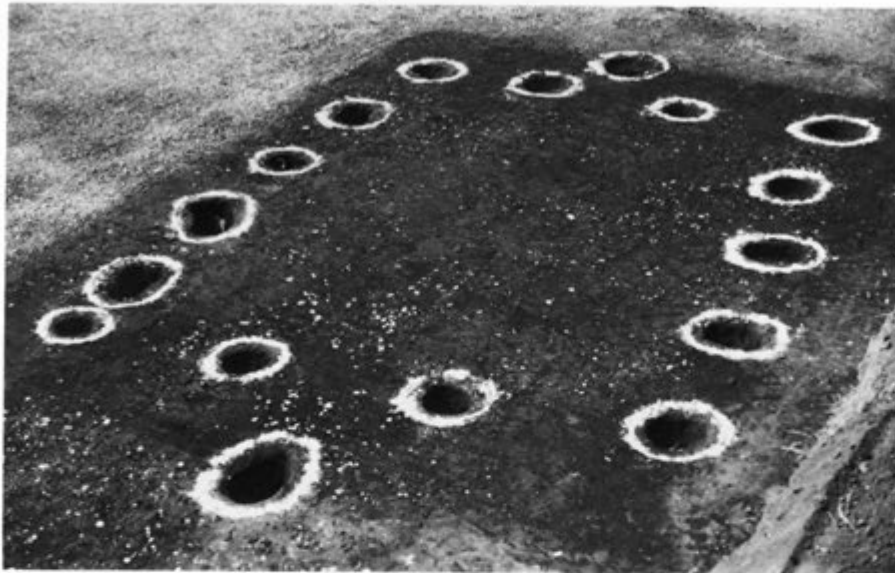


2.



3.

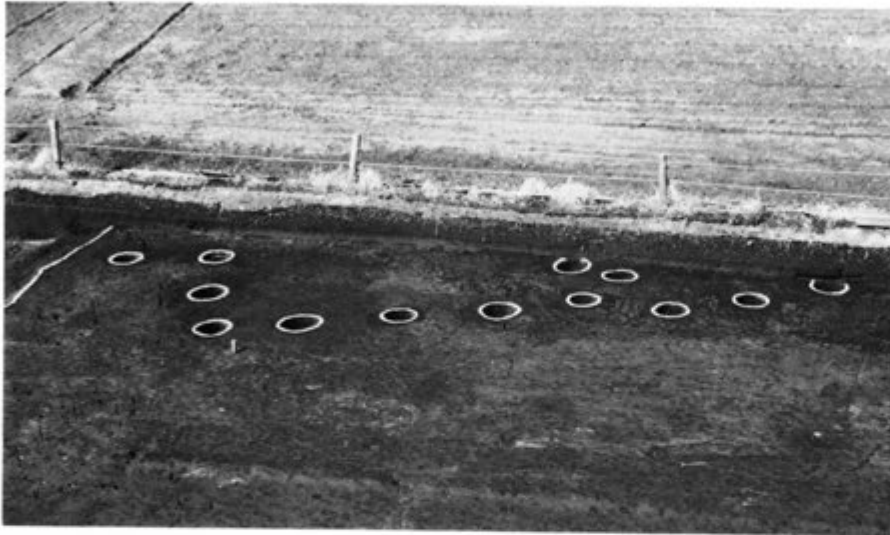
3. 2号掘立柱建物跡（棟持柱付）全景（南東から）



4.

4. 2号掘立柱建物跡（棟持柱付）

掘立柱建物（棟持柱付）検出状況(1)



1. 3号・4号掘立柱建物跡（棟持柱付）

1.

全景（左3号・右4号）

2. 4号掘立柱建場跡全景

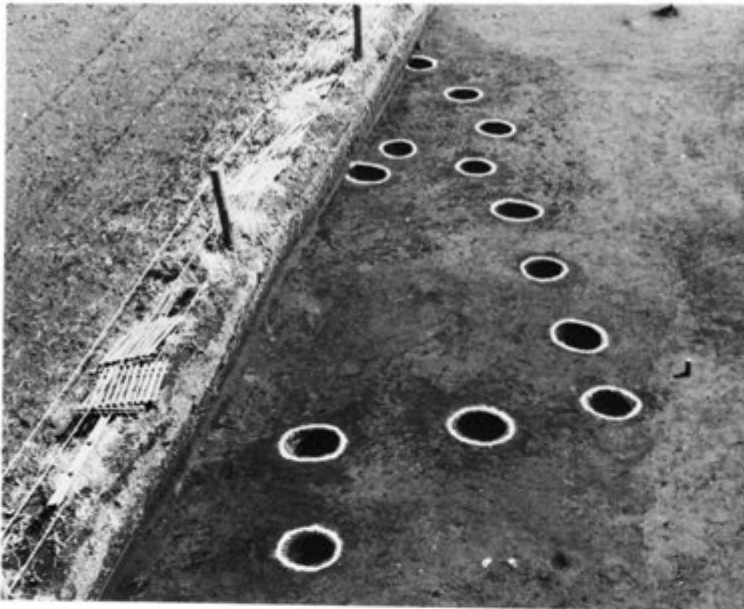
（南西から）



2.

3. 3号・4号掘立柱建物跡全景

（西から）



3.

掘立柱建物跡（棟持柱付）検出状況（2）



1. 6号掘立柱建物跡全景(東から)



2. 5号・8号掘立柱建物跡全景(5号棟持柱付)(東から)

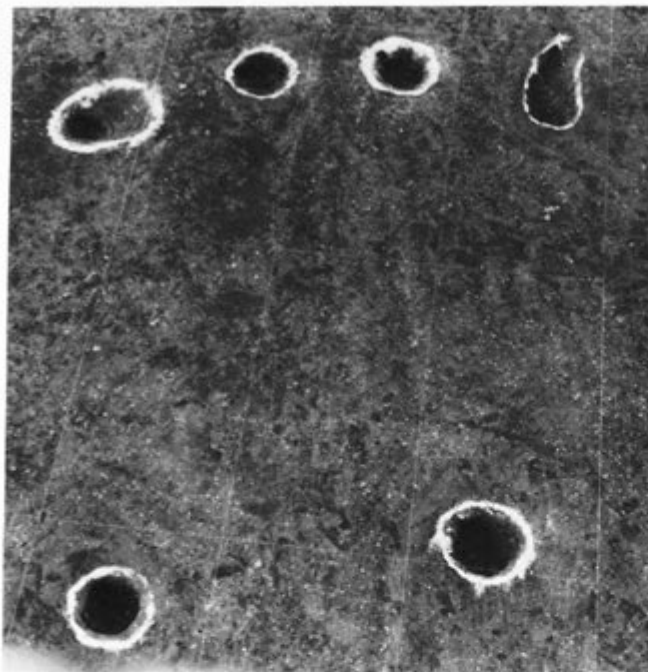
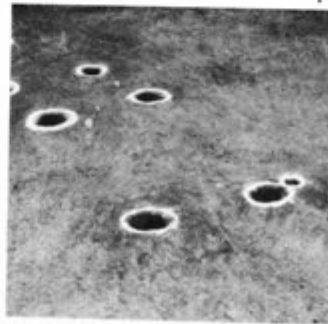
掘立柱建物跡(棟持柱付)検出状況(3)



1. 7号掘立柱建物跡 (北から)

2. 7号掘立柱建物跡 (南東から)

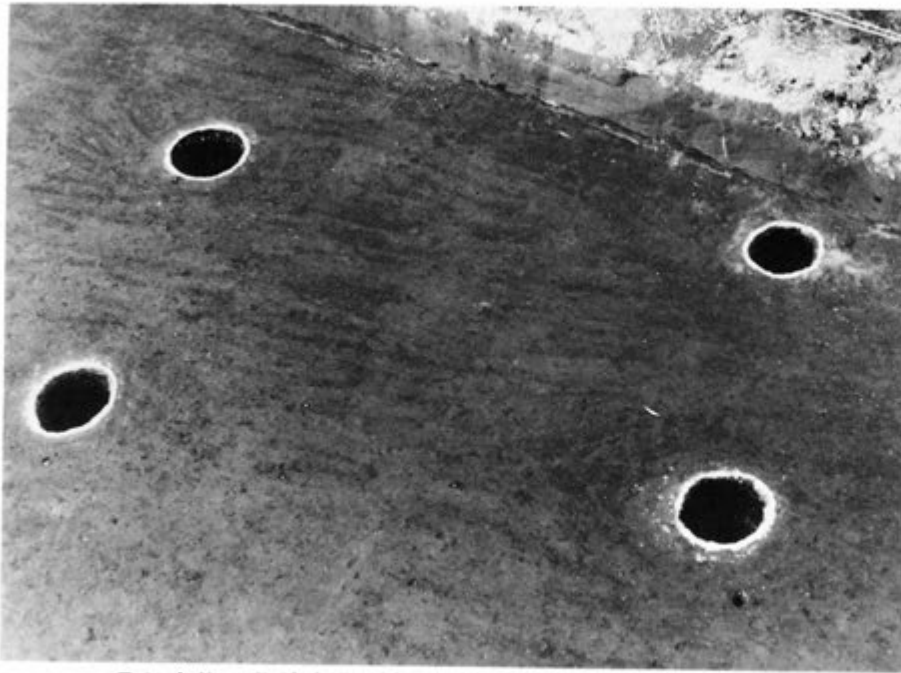
3. 9号掘立柱建物跡 (東から)



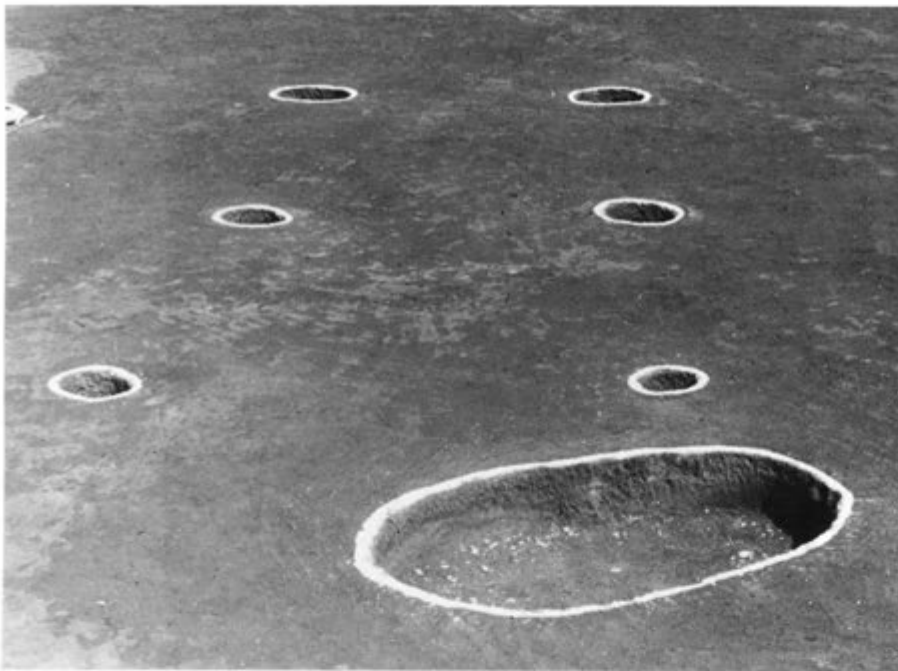
掘立柱建物跡 検出状況(4)

3.

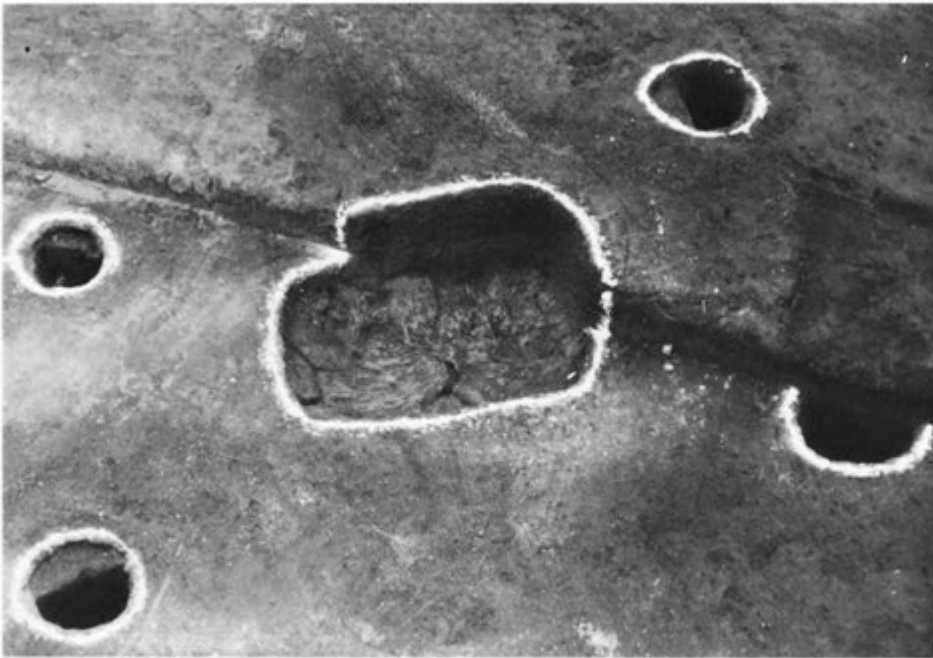




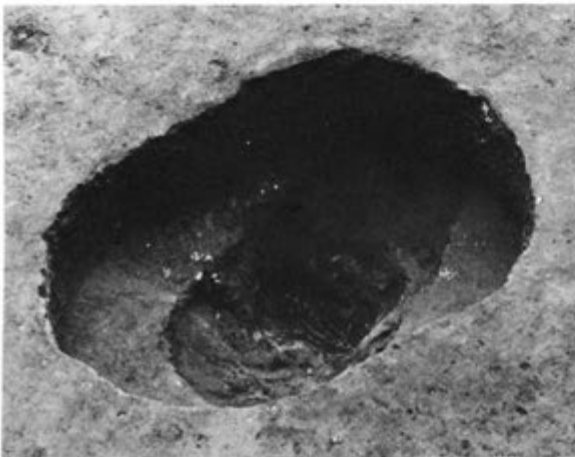
1. 11号掘立柱建物跡全景（南から）



2. 12号掘立柱建物跡全景（西から） 手前2号土坑  
掘立柱建物跡検出状況(5)



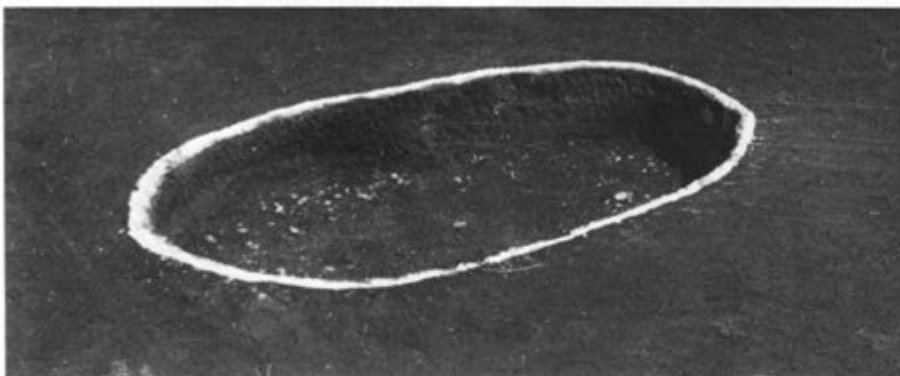
1. 13号掘立柱建物跡 (南東から)



2. 1号土坑全景 (南東から)



3. 1号坑建物出土状態 (東から)



4. 2号土坑全景 (西から)

掘立柱建物跡(6)及び土坑検出状況



1.

1. 西区溝状遺構全景（東から）



2.

2. 3. 中央区溝状遺構全景（2. 南から  
3. 北から）

4. 中央溝状遺構全景（西から）



3.

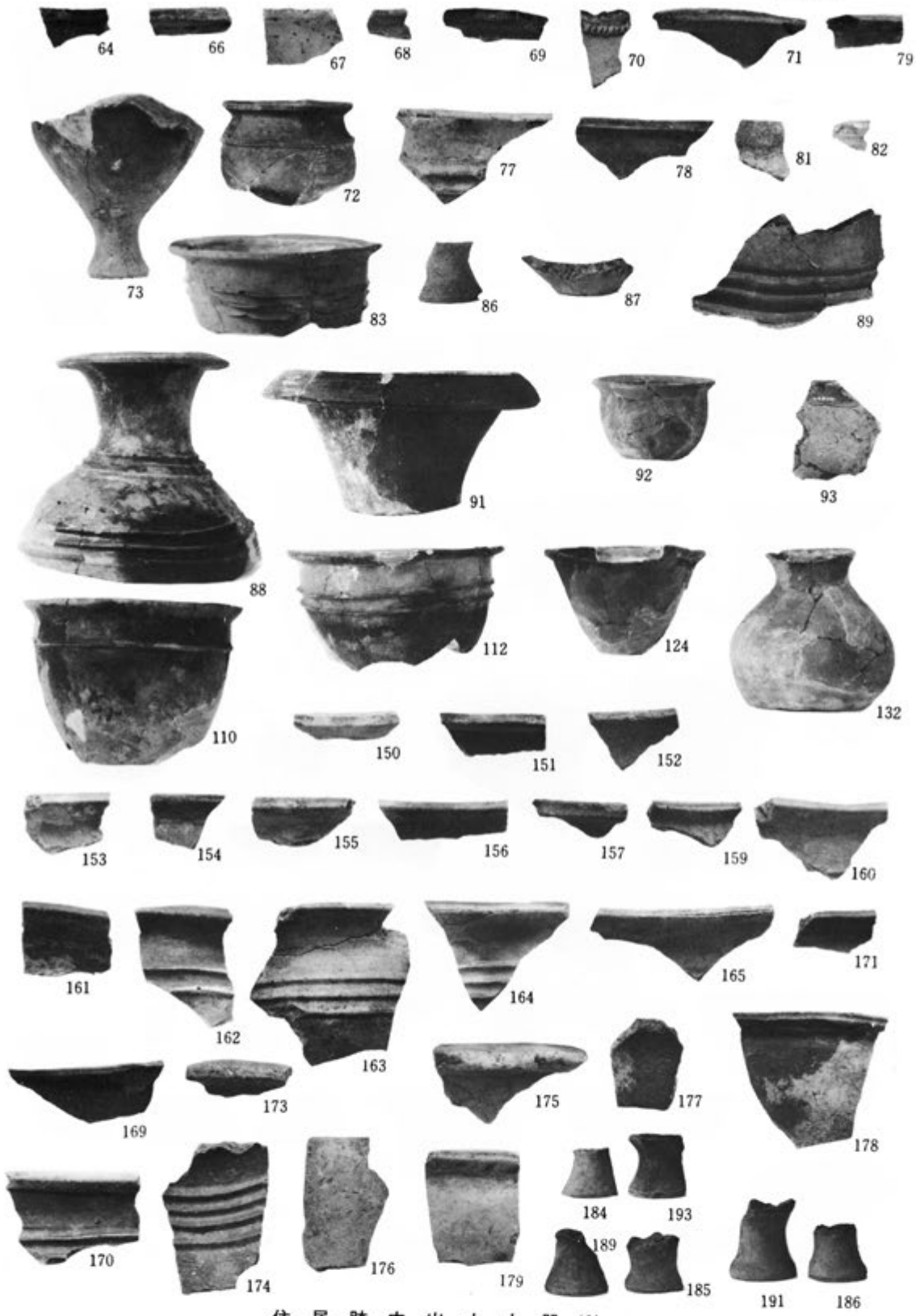


4.

溝状遺構検出状況



住居跡内出土土器 (1)



住居跡内出土土器(2)



住居跡内出土土器(3)

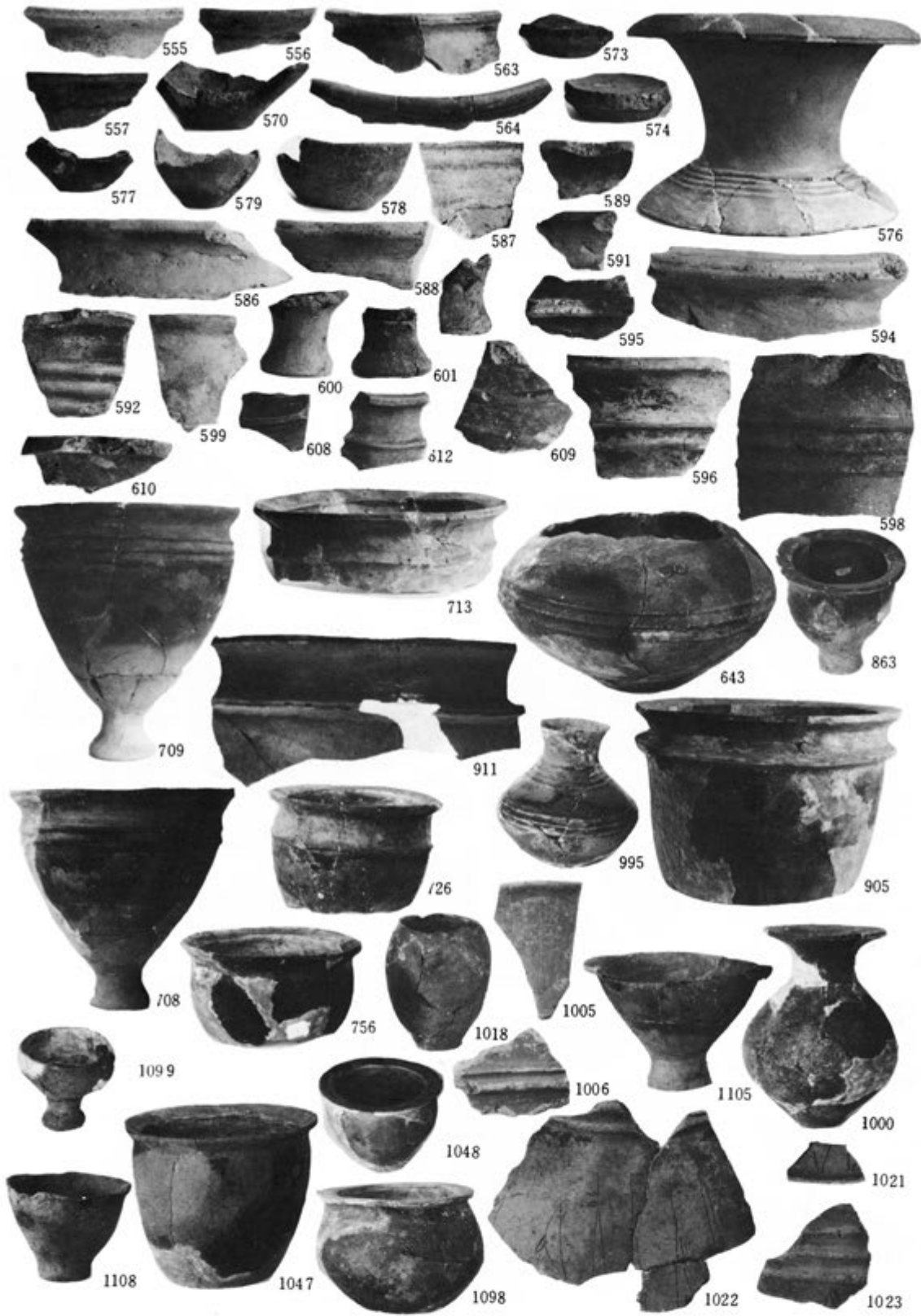


住居跡内出土土器(4)

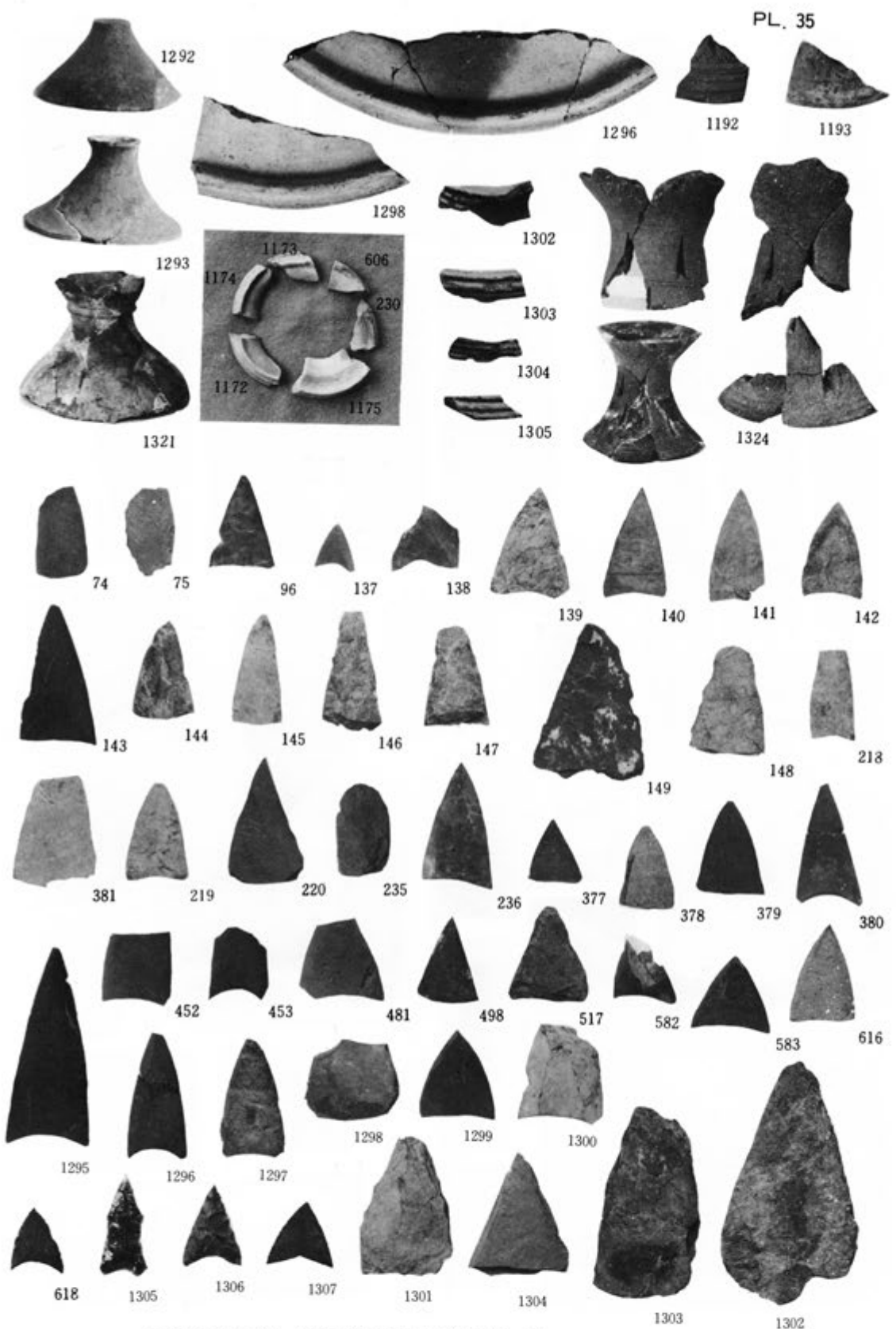


住居跡内出土土器(5)

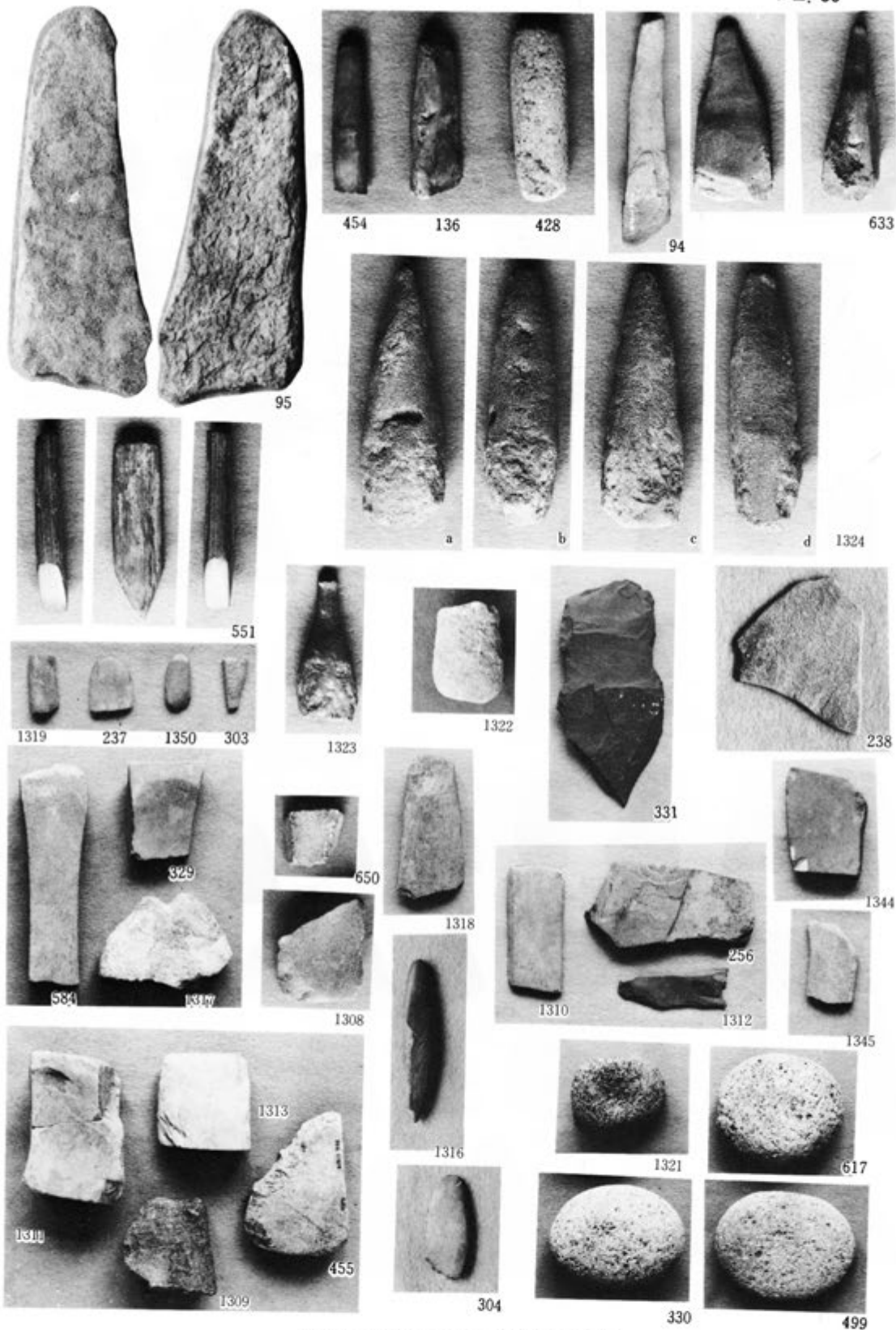




住居跡内出土土器(6)及び王子遺跡出土土器



王子遺跡内出土土器(7)及び住居跡内出土と包含層出土の石器(1)



住居跡内出土と包含層出土の石器 (2)



1295



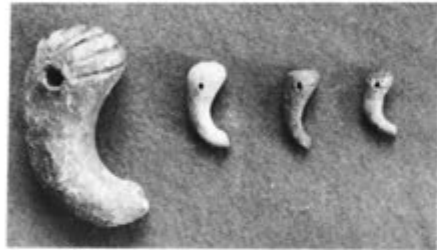
1324



1326



1326

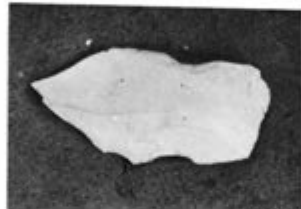


1325

1327

1328

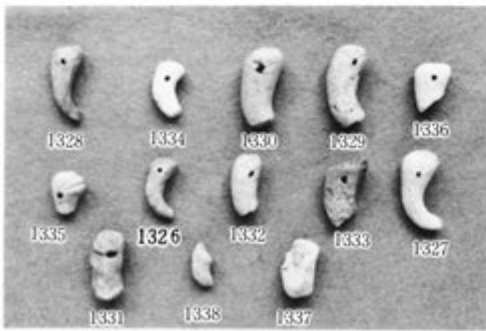
1326



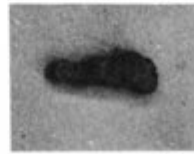
331



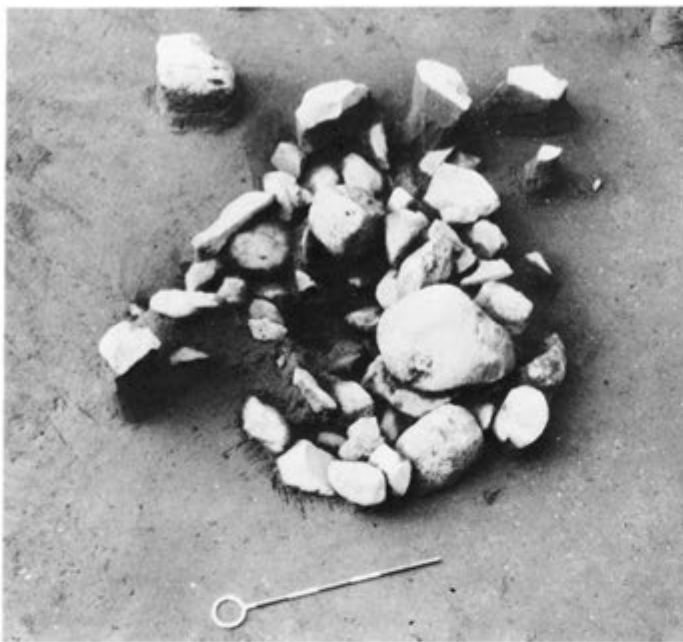
194



1339



1340



集石遺構 (縄文時代早期)

石器及び土製品出土状況と土製勾玉・簪・刀子・鉄滓・集石遺構検出状況

# 王子遺跡出土弥生中期後半の鉄滓と鉋の調査

大 澤 正 己

## 1. 概要

王子遺跡は、鹿児島県鹿屋市王子町王子に所在する弥生時代の遺跡である。この遺跡の弥生時代中期後半（山ノ口式土器）に比定される層位より出土した鉄滓及び鉋の調査依頼を鹿児島県教育委員会より受けたので鉋物組成や化学組成の調査を行ない、若干の考察を加えたので報告する。

調査結果は次の通りである。

- (1) 鉄滓の外観は、鍛冶炉の大窪である炉底部に集積した椀形状の滓で、一部を欠失している。鉋物組成はウスタイト（Wüstite： $\text{FeO}$ ）＋フェアライト（Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）で構成されている。化学組成は、全鉄分（Total Fe）が48.2%と高く、二酸化チタン（ $\text{TiO}_2$ ）0.32%、バナジウム（V）0.009%と、一の二成分が低目であるところから、鉄器鍛造加工に際して鉄素材を再加熱した時点で排出された鍛冶滓で、鍛錬鍛冶滓（加工鍛冶滓→小鍛冶滓）に分類される。現在のところ列島内でも一、二を争う古い時期に層する鉄滓に挙げられよう<sup>①</sup>。
- (2) 鉋は鍛造品で、長さ108mm・幅20mm・厚み2.5mmを計測し、小田富士雄氏が提唱するところの吉ヶ浦型長鋒式<sup>②</sup>に分類される。柄部末端の一部よりサンプリングし、非金属介在物の顕微鏡観察及びエネルギー分散型X線分析を行なった結果、極く微量のシリケート系（珪酸）介在物が存在するのみでチタン系非金属介在物は検出されなかった。この結果から製鉄原料は砂鉄ではなく、鉋石の可能性が強いことが指摘できる。また、フェアライト（Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）系介在物の未検出から、低温還元の直接製鉄法は否定的となり、間接製鉄法にもとづく製造履歴の素材の充当が考えられる。
- (3) 椀形鍛錬鍛冶滓の出土とあいまって、鉄器素材は大陸側からの搬入で、鍛冶加工は列島内という製造工程を考慮してもよさそうである。また、鉄器素材は鑄造鉄器の損傷品（廃品）を鍛冶炉で下げ（脱炭）法でおろして鍛造加工した可能性も考えられる。これは、鉋の鉄中の非金属介在物の量が少なく、かつ小型であることから類推される。

## 2. 調査方法及び方法

### 2-1. 供試材

Table. 1 に調査試料の履歴及び調査項目について示す。

鉄滓は、二分割して片割れの中央部から検鏡試料をとり、残りを化学組成に当てた。また、鉋は柄末端部より小片を採取し供試料とした。Fig. 1 参照。

Tab. 1 工供試材の履歴及び調査項目

符 号	試 料	出 土 位 置	調 査 項 目		
			顕微鏡組織	化学組織	SEMEDAX
2 F-821	椀形状鉄滓	C-15区II層S 57.1.14	○	○	
2 F-822	鉋	住居跡10号地点No.298 D-11区II層 S 57.1.14	○		

## 2-2. 調査方法

### (1) 肉眼観察

### (2) 光学顕微鏡組織

鉄滓は水道水で十分に洗滌して乾燥後、中核部を検鏡試料とした。検鏡試料は、ベークライト樹脂に埋込んだ後、エメリー研磨紙（コランダム、 $Al_2O_3$  に磁鉄鉱を含んだ黒灰色の結晶の粉末砥石を膠質の接着剤で塗布している）の#150, #320, #600, #1,000を使用して荒研磨し、次にアルミナ（ $Al_2O_3$ ）粉末溶液（アルミニウム塩の沈澱物を焼成して作られた六方晶形細粒粉末の水懸濁液）をバフ布に注ぎながら被研面を仕上げで構成鉱物の同定を行なった。アルミナの粒子は、5Uと10Uを2回に分けて使用している。

鉋は鍛伸方向と、直角方向の二種類を樹脂に埋込み、ペーパー仕上げは鉄滓研磨と同様であるが、後のバフ仕上げはダイヤモンド仕上げで行なっている。

### (3) 化学組成

Table. 2 に示した化学組成は次の分析方法をとっている。

重量法…二酸化硅素（ $SiO_2$ ）

赤外吸収法…炭素（C）、硫黄（S）

原子吸光法…全鉄分（Total Fe）、酸化アルミニウム（ $Al_2O_3$ ）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、二酸化チタン（ $TiO_2$ ）、酸化クロム（ $Cr_2O_3$ ）、バナジウム（V）、銅（Cu）。

酸化第2鉄（ $Fe_2O_3$ ）は計算値による。

### (4) 走査型電子顕微鏡によるEDAX分析（SEM: scanning Electron Microscope）

この装置の原理は、電子線を絞って試料面に照射し、ここより発生する電子線によって情報を得るものである。特性X線像とエネルギー分散型半導体検出器を使って非金属介在物の分析を行なっている。

## 3. 調査結果

### 3-1. 椀形鉄滓の調査

#### (1) 肉眼観察

表皮は茶褐色で若干の凹凸を有するが肌は比較的なめらかであり、上端部の一部を欠失するが復元すると椀形状を呈する鉄滓である。（Fig. 1 参照）裏面は灰褐色の滑らかな湾曲面を持ち、これに高温で青灰色に変色した炉材粘土を付着し、多くの気泡痕が認められる。破面は黒褐色で気泡少なく緻密質であった。大きさは63×52×27mmで、重量は123gであった。

#### (2) 顕微鏡組織

Photo. 1 の最上段及び2段目に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイト（Wustite: FeO）が初晶としてスラグ融液中より晶出し、この後にフェアライト（Fayalite:  $2FeO \cdot SiO_2$ ）が灰色結晶として木ずり状もしくは盤状に発達しながら形成され、最後に暗黒色部のガラス質スラグの低融点相が既晶出相の間隙を埋めている。最上段の組織は椀形滓の厚み方向中央、2段目

は底部側の組織を示している。なお、2段目組織のうち、灰色多角形小結晶は残留融液中から晶出したヘーシナイト (Hercynite:  $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ ) であろう。

以上述べた鉄滓の鉱物組成は、鍛冶滓特有の晶癖を示すものである。

### (3) 化学組織

Table. 2 に分析結果を示す。この鉄滓の特質は、全鉄分 (Total Fe) が高目で、二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ )、バナジウム (V) が低目であることである。すなわち、全鉄分 (Total Fe) が48.2%あって、このうち酸化第1鉄 ( $\text{FeO}$ ) が50.0%、酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{D}_3$ ) が13.27%の割合となっている。造滓成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$ ) は、やや高目で34.68%であるが、二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) 0.32%、バナジウム (V) 0.009%と低目であるところから該材は、鍛造鍛冶等で鉄素材からの再加熱により排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。

なお、造滓成分中の酸化カルシウムの ( $\text{CaO}$ ) が4.21%と高目であるのは、鍛冶滓としては希な例である。鉄素材単独ではなく、炉材粘土の影響からも強く働いているのであろう。又検鏡で鉄滓炉底部からヘーシナイト (Hercynite:  $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$ ) が検出されたので、 $\text{Al}_2\text{O}_3/\text{CaO}$  の比をみると、約2となっている。過去に調査した鍛冶滓で類例をみると  $\text{Al}_2\text{O}_3/\text{CaO} = 4$  以上<sup>③</sup>でヘーシナイト (Hercynite:  $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{D}_3$ ) が現われている。今回のヘーシナイトは局部的に晶出したものであろう。

## 3-2. 鉋の調査

### (1) 肉眼観察

長さ108mm・幅20mm・厚さ2.5mmで断面が三日月形を呈し、柄部に革紐巻を施した痕跡をとどめている。また、柄部末端部は刃部とは逆方向に反りをもつ。鍛造品である。Fig. 1を参照。

### (2) 顕微鏡組織

柄部末端部より極く微量のサンプルを採取して顕微鏡観察を行なった。鍛伸方向とこれの直角方向から試料どりを行っている。試料は錆化して金属組織をとどめていない。組織は Photo. 1の3段目及び最下段に示すように鉄中の非金属介在物を捕えることができた。非金属介在物とは、鋼の製造過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや耐火物の混じり物をさす。また、表現を変えれば、鉄鋼中に介在する固形体の非金属性不純物、すなわち、鉄、マンガン、珪素および燐などの酸化物、硫化物、珪酸塩などを総称して非金属介在物という。非金属介在物は製錬、精錬過程で除去しきれなかった非金属粒子や脱酸生成物でありこれらの組成を追求することにより鋼の製造履歴を或る程度推定できる。

鉋中の非金属介在物は、量的に少なく小型であり、清浄な鋼であったことがうかがわれる。また、鍛伸方向の非金属介在物は、砕かれて伸びた痕跡をもち、明らかに鍛造加工を受けたことを裏付けている。



Tab. 2 弥生時代鉄滓の化学成分

符号	遺跡名	鉄滓区分	推定年代	全鉄分		金属鉄 (Fe)	酸化鉄 第1鉄 (FeO)		酸化鉄 第2鉄 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )		酸化アルミ ニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化カルシ ウム (CaO)	酸化マグネ シウム (MgO)	二酸化チ タン (TiO <sub>2</sub> )	酸化クロム (Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	硫黄 (S)	五酸化 リン (P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> )	炭素 (C)	バナジ ウム (V)	銅		造滓成分 Total-Fe	TiO <sub>2</sub> Total-Fe	注
				(Total-Fe)	Mesitic (Fe)		(FeO)	(Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	(SiO <sub>2</sub> )	(SO <sub>2</sub> )										(TiO <sub>2</sub> )	(Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )			
2F 821	王子	鍛鉄治滓	弥生中期後半	48.2		50.0	13.27	21.22	8.24	4.21	1.01	0.08	0.32	0.006	0.052	0.20	0.13	0.009	0.002	34.68	0.720	0.007	1	
	諏訪原	"	弥生後期 ～古墳初頭	51.71	0.11	48.84	19.50	16.30	5.82	1.07	0.68	0.11	0.46	0.035	0.265	0.119	0.020	0.016	23.87	0.462	0.009	2		
	西弥護免	"	弥生終末期	45.8		52.1	7.30	21.4	10.01	2.85	1.41	0.10	0.43	0.031	0.68	0.09	0.011	0.003	35.67	0.779	0.009	3		
	下前原	"	弥生後期	58.63				12.13	9.86	1.03	1.99		Trace			25.01				25.01	0.467		4	
	辻	"	弥生終末期	55.88	0.13	48.94	25.32	13.76	5.22	2.38	0.88	0.16	1.08	0.03	0.096	0.265	0.26	0.007	22.24	0.398	0.021	5		
	押入西	砂鉄製鐵滓	"	?	42.3	41.4	14.48	20.76	5.16	0.18	1.66	4.00	9.81	0.018	0.059	0.023	0.33	0.13	Nil	27.76	0.656	0.232	6	
	小原下	"	"	?	11.85	5.33	11.02	37.76	21.68	6.17	4.23	1.39	11.50		0.034	0.197	0.05		69.84	5.894	0.996	7		
	豊町A	"	"	?	34.08	0.81	14.88	31.14	25.10	7.52	1.06	3.07	0.46	11.34	Trace	Trace			1.36	Trace	36.75	1.078	0.333	8
	扇谷	鍛鉄治滓	"	弥生前期末 ～中間初頭	51.72		57.48	10.06	20.05	4.02	0.97	0.15	0.10	0.61		0.021	0.54	0.20	0.017		25.19	0.487	0.012	9

註

- 大澤正巳「王子遺跡出土弥生時代中期後半の鉄滓と鈍の調査」『王子遺跡』(鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書34) 1980
- (イ)緒方勉「諏訪原遺跡発掘調査概報」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報』熊本県九州縦貫自動車道関係文化財調査団 1971  
(ロ)大澤正巳「曲野、寺尾遺跡の鉄滓調査」『曲野遺跡』I(熊本県文化財調査報告書第61集) 1983 分析データのみの記載、後日正式報告予定中
- 瀬丸敬二他『西弥護免遺跡調査概報』西弥護免遺跡調査団 1980  
分析データのみ2-(ロ)に記載
- 湊秀雄、佐々木稔「タタラ製鉄鉄滓の鉱物組成と製錬条件について」『たたら研究』14 1968
- 大澤正巳「製鉄関係遺物の分析」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第7巻下巻福岡県教育委員会 1978
- 大澤正巳「押入西遺跡出土鉄滓及び鉄塊の金属学的調査」『押入西遺跡』(津山市文化財調査報告第14集)津山市教育委員会 1984
- 古田正隆『小原下遺跡報告』(第1次発掘調査)長崎県立国見高等学校 1967 出土鉄滓は筆者が分析及び検鏡を手がけた。未発表
- 吉岡金市「北隆古代製鉄史に関する調査研究」『金沢経済大学開発研究所昭和47年研究報告』73-3 1973. 3
- 清水欣吾『扇谷遺跡出土品の調査』日立金属株式会社安来工場冶金研究所 1983. 11. 29

### (3) 走査型電子顕微鏡によるエネルギー分散分析

Photo. 2 及び 3 に走査型電子顕微鏡による非金属による非金属介在物の特性 X 線像と EDAX によるエネルギー分散分析の結果を示す。

非金属介在物は、鍛伸方向及び鍛伸直角方向共に硅素 (Si) にのみ白色輝点が集中し、非金属介在物組成は、シリケート ( $\text{SiO}_2$ ) 系であることが判る。また、チタン (Ti) 分の検出がほとんどなく、製鉄原料は鉱石系で砂鉄は否定される。

非金属介在物は量が少なく、ファイヤライト系 (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) の介在物が未検出であるところから、該材は高温還元の間接製鋼法にもとづく鉄素材と推定され、大陸での生産品と考えられる。

## 4. 考察と 2・3 の問題

### 4-1. 弥生時代の鉄滓

Table. 3 には縄文晩期 (報告者の比定に従えば) 及び弥生時代の鉄滓出土例を挙げている。その数は 21 例を数え、このうち約半数の 10 例について鉱物組成か化学組成の調査を行なっている。

弥生時代の鉄滓は、いずれも鍛冶滓である。鉱物組成はヴスタイト (Wüstite:  $\text{FeO}$ ) + フェアライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) であり、化学組成は全鉄分 (Total Fe) が 46% 以上と高目で、二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) は 1% 以下、バナジウム (V) が小数 2 桁目の数字であり、また造滓成分 ( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$ ) が低目傾向にある。王子遺跡出土鉄滓も、これらの範ちゅうに入っている。

弥生時代の鉄滓で外観的に鍛冶炉の炉底形状を示す椀形鍛冶滓は、王子遺跡出土鉄滓が初例であり、鍛冶炉の存在を間接的に裏付けている。なお年代的に最も遡る鉄滓は、高地性集落の周濠内から出土した弥生時代前期末から中期初頭に比定される京都府の扇谷遺跡<sup>④</sup>の鉄滓であろう。鍛冶滓である。

鍛冶遺構として古いものは福岡県春日市所在の赤井手遺跡<sup>⑤</sup>の 33 号住居と 5 号土壙であろうか。弥生時代中期未前後の所属時期で火窟 (70cm の隅丸方形。→33 号住居跡) と鉄素材及び半製品、製品が出土し、鍛造加工の存在が、ほぼおさえられる。

この様に、列島内の鉄の歴史は、縄文晩期に鉄器使用の痕跡がみられ<sup>⑥</sup>、弥生時代に鍛冶加工を裏付ける鉄滓や遺構が検出されている。そうすると、製鉄原料を木炭でもって還元する製錬の開始は何時であろうか。Table. 3 には縄文晩期の製錬滓として長崎県の小原下遺跡及び石川県の豊町 A 遺跡出土の鉄滓が挙げられている。また、弥生時代中期後半の構の覆土から製錬滓が出土している。この 3 か所の鉄滓は、いずれも製錬滓であるが時期的に疑問視され、筆者もこの問題は別稿<sup>⑦</sup>で触れていて、詳細は省略するが弥生時代の製錬は現時点の資料からは否定している。列島内の鉄製錬の開始は、木炭を還元剤の必須原料と考えた場合、木炭窯の登り窯と須恵器窯の窯業技術に関連させて考慮すれば 5 世紀代におくのが妥当と考えている。

鍛冶滓の組成は前述したので、ここで製錬滓について簡単に触れておく。Table. 2・3 に

Tab. 3 縄文晩期・弥生時代の鉄滓出土例

果別	遺跡名	所在地	推定年代	鉄滓鑑定年代(国産)	果別	遺跡名	化学		組成	鉄滓分類	注
							Total-Fe	造滓成分			
岡山	押入西	津山市押入	弥生中期後半	?	岡山	押入西	42.3	27.76	M+F	砂鉄製鐵滓	1
石川	豊町A	加賀市豊町	縄文晩期	?	石川	豊町A	34.08	36.75	U+I*	"	2
長崎	小原下	南高来郡有明町	"	?	長崎	小原下	11.85	69.84	ガラス質	"	3
	北岡金比羅祀	南有馬町	弥生中期			北岡金比羅祀		11.50	W+F	鍛鐵製鐵滓	4
鹿児島	王子	鹿屋市	弥生中期後半		鹿児島	王子	48.2	34.68	W+F	"	5
熊本	諏訪原	玉名郡菊水町江田	弥生後期～古墳初頭		熊本	諏訪原	51.71	23.87	W+F	"	6
	下前	" 岱明町	弥生後期			下前	58.63	25.01	W+F*	"	7
	西弥護免	菊池郡大津町	弥生終末期			西弥護免	45.8	35.67	W+F	"	8
	弓削山尻	熊本市弓削	"			弓削山尻					9
佐賀	柚比	鳥栖市田代	弥生		佐賀	柚比					10
大分	下城	佐伯市長谷	弥生前期～中期	?	大分	下城					11
	吹上台	日田市	弥生中期	?		吹上台					12
	ハンニヤ寺	大分市戸沢	弥生後期	?		ハンニヤ寺					〃
	長野	東国東郡国東町	"	?		長野					〃
	木寺	"	"	?		木寺					〃
	前田	"	"	?		前田					〃
	吉木	"	"	?		吉木					〃
	安国寺	"	弥生	?		安国寺					〃
福岡	辻田	春日市上白水	弥生末期		福岡	辻田	55.88	22.24	W+F	鍛鐵製鐵滓	13
	立岩	飯塚市	弥生			立岩		1.18	0.06		14
京都	扇谷	中郡峰山町字杉谷	弥生前期末～中期初頭		京都	扇谷	51.72	25.19	W+F*	鍛鐵製鐵滓	15

M: Magnetite, F: Fayalite, U: Unvospinal, I: Ilmenite, W: Wüstite, \*他者データー

縄文晩期、弥生時代の鉄滓出土例の文献(註)

1. 湊哲夫, 安川豊央, 行田裕美「押入西遺跡」(津山市埋蔵文化財調査報告第14集)津山市教育委員会 1983  
大澤正巳「押入西遺跡出土鉄滓及び鉄塊の金属学的調査」(津山市埋蔵文化財調査報告第14集)津山市教育委員会1983
2. 吉岡金市「北陸古代製鉄史に関する調査研究」(金沢経済大学開発研究所昭和47年研究報告)73-3 1973. 3
3. (イ)古田正隆「小原下遺跡報告(第1次発掘調査)長崎県立国見高等学校1967  
(ロ)長崎県立島原工業高等学校郷土部「小原下遺跡の問題点」昭和45年度部報2号  
(ハ)古田正隆「製鉄遺構を伴った小原下遺跡調査報告」(百人委員会埋蔵文化財報告第9集)1979

- 出土鉾葺は筆者外分析及び検鏡を手かけた。分析データは竹中岩夫氏経由で古田氏へ提示。筆者からのデータは未発表。
4. 古田正隆「北岡金比羅祀遺跡調査報告」(南有馬町文化財調査報告第1集) 南有馬町教育委員会 1981  
出土鉄滓について古田氏より提供を受ける。未発表
  5. 鹿兒島県教育委員会調査。出土鉄滓はC-15区Ⅱ層出土 鍛錬鍛冶碗形滓である。大澤正巳「吾幸城出土滓の調査」(鹿兒島県埋蔵文化財発掘調査報告書(27)) 鹿兒島県教育委員会 1983
  6. (イ)緒方勉「諏訪原遺跡発掘調査概報」「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査」 熊本県九州縦貫自動車道関係文化財調査団 1971  
(ロ)鉄滓の分析結果は次の報告書に提示。大澤正巳「曲野、寺尾遺跡の鉄滓調査」『曲野遺跡』I (熊本県文化財調査報告書第61集) 1983
  7. 湊秀雄, 佐々木稔「タラ製鉄鉾葺の鉾物組成と製錬条件について」『たたら研究』14, 1968
  8. 瀬丸敬二他『西弥護免遺跡調査概報』西弥護免遺跡調査団 1981  
鉄滓の分析結果は前掲葛6-(ロ)に提示。
  9. 熊本県教育委員会松本健郎氏ご教示
  10. 松尾禎作「佐賀県考古大観」大正初年に中山平次郎博士が鳥栖市田代柚北のカメ棺内から鉄滓を検出されたとの記述を引用。
  11. 賀川光夫「豊後国下城弥生式遺跡に於ける鉄器遺物の編年に関する一考案」『大分県史』I 1962
  12. 賀川光夫『大分県の考古学』吉川弘文館 1971 198~199頁
  13. 『大分県国東町安国寺弥生式遺跡の調査』に鉄滓出土の記載とあるが詳細は不明、例えば次の文献表1にも鉄滓出土とあるが出典は明らかでない。  
松井和幸「大陸系磨製石器類の消滅とその鉄器化をめぐって」『考古学雑誌』第68巻第2号日本考古学会, 昭和57年9月
  14. 大澤正巳「製鉄関係遺物の分析」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第7巻下巻福岡県教育委員会 1978
  15. 児嶋隆人「調査研究のあゆみ」『立岩遺跡』河出書房 1977
  16. 清永欣吾『扇谷遺跡出土品の調査』日立金属株式会社安来工場冶金研究所 1983. 11. 29

岡山県の押入西遺跡出土鉄滓及び長崎県の小原下、石川県の豊町A遺跡出土鉄滓の化学組成を示している。これらは、いずれも全鉄分 (Total Fe) が34～42%と低目で、二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) が9.81～11.5%、バナジウム (V) 0.13～1.36%と高目である。(小原下遺跡出土鉄滓はガラス質なので鉄分が11.85%と低い) 又、鉱物組成は提示していないが、押入西遺跡出土鉄滓はマグネタイト (Magnetite:  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ ) + フェアライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )、豊町A遺跡出土鉄滓はウルボスピネス (Ulvöspinel:  $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ) + イルミナイト (Ilmenite:  $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ ) であり、(小原下遺跡出土鉄滓はガラス質) 鍛冶滓がヴスタイト (Wüstite:  $\text{FeO}$ ) + フェアライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) で構成されているので、製錬滓と鍛冶滓の晶癖の差異からも分類ができる。

なお本稿で述べた製錬滓は砂鉄を原料とするもので、鉱石を原料とすれば、二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ ) は1%以下、バナジウム (V) 小数二桁目の数字となり、鉱物組成はフェアライト (Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ) が主体をなす。鉱石製錬滓は6～7世紀代に広島・岡山で、また奈良時代になると滋賀県で検出される。これらは別稿<sup>⑧</sup>で述べているので、それを参照してもらいたい。

#### 4-2 弥生時代の鉄器

##### (1) 王子遺跡出土鉈の産地について

王子遺跡出土の鉈は、鉄中に含有された非属介在物の量が微量で、チタン (Ti) 分がほとんど含有されなく、またフェアライト (Fayalite:  $2\text{FeO}, \text{SiO}_2$ ) 系非金属介在物が存在しないところから、鉱石系の原料を使って木炭で高温還元を行ない、間接製鋼法で製造された鉄素材であろうと推定される。

そうすると、列島内で弥生時代に属する製錬滓が現在のところ未検出であるので、鉄素材までは大陸産であると考えられるが、鉈の鍛造加工が何処でなされたか問題となってくる。

小田富士雄氏によると、鉈は吉ヶ浦型と立岩型の二型式に分類している。吉ヶ浦型は、幅1.2～2センチ、長さ5センチ程度の短鋒式と、10センチをこえる長鋒式に分けられる。立岩型は、幅1～1.2センチで吉ヶ浦型よりせまく、長さ15センチぐらいの長鋒式で先端部は凸面側の中央に鑄をつけて横断面がV字形をなし、先端にむかって次第に反り上がっていく側面形を呈するとされている。

王子遺跡出土鉈は、吉ヶ浦型長鋒式に分類されよう。また、吉ヶ浦型長鋒形式鉈は大陸側にも類品があるとされ、朝鮮平安北道渭原郡龍淵洞出土の「鉄製尖頭器」がそれにあたるとし、中国にも鉄鉈が出土すると述べている。<sup>⑨</sup>また、中国産の鉄鉈や銅鉈の関連問題についても小田氏以外に西谷正<sup>⑩</sup>・橋口達也<sup>⑪</sup>の両氏らも言及している。

王子遺跡出土鉈の製造履歴はどんな経緯をへているのであろうか。可能性として次のことが考えられる。

- ① 大陸側で一連の製品化がなされて搬入
- ② 大陸側で高温還元し、間接製鋼法を経た鋼を素材として列島内搬入、その後に鉈に鍛冶加工。

⑩ 大陸内で鑄造鉄器が製造され、列島内で破損して、その鉄器を下げ法（脱炭鍛冶：脱炭とは反応する雰囲気の中で鉄鋼を加熱するとき、表面から炭素が矢われる現象）により炭素含有量を低減させて鍛造可能な炭素含有量とし、鉈に鍛造加工した可能性。

王子遺跡からは椀形鍛冶滓が出土している。この鉄滓と鉈が有機的なつながりがあるとすれば⑩の考え方も成立しそうである。その理由の一つとして、前に挙げた福岡県春日市に所在する赤井手遺跡33号住居跡及び5号土壙から出土した鉄塊に鑄鉄品が存在することである。鑄鉄存在は未発表であるが<sup>⑫</sup>、この工房跡の鑄鉄品は、下げの原料以外に存在理由がなりたない。ただし赤手遺跡からは、1点の鉄滓も検出されてなく、今後の研究課題となるであろう。また弥生時代の遺跡からの出土鉄器において、鑄造品の数が少ないのは、下げ法の再生鉄器に転用された可能性も検討しなければならないであろう。一つの方法として鉄器の非金属介在物の質と量から追求することが考えられる。（「列島内の弥生時代の鉄器素材の履歴」参照）

王子遺跡出の椀形鍛冶滓が、下げ法の際に排出された滓か否かという問題がある。現在のところ、これを十分に裏付け出来データが不足する。ただし状況証拠的に可能性があることを述べておく。

まず、王子遺跡出土の椀形鍛冶滓の外観で断面破面が緻密質であることである。これに類するものとして、沖縄県のグスクから多量に出土する椀形鍛冶滓がある。例えば勝連城跡からは鍛造加工の素材とおぼしき鑄鉄品の鍋破片と共拌して椀形鍛冶滓が出土し、鉄製品として小型鉄器の刀子や鉄鏃及び釘が検出されている<sup>⑬</sup>。これらの鉄滓外観や、鉄滓の成分系が共通傾向にある。王子遺跡の場合、弥生時代中期後半で、沖縄は14～15世紀の現象である。ただし沖縄県では鉄滓出土土地が数多く報告されているが、筆者の調査した15か所は鍛冶滓である<sup>⑭</sup>。製錬が実施されていない特殊地帯である<sup>⑮</sup>。こういった事を考えあわせれば、列島内でまだ製錬の開始以前で鍛冶素材を外部に依存していた時期の王子遺跡であれば、破損鑄鉄品の再生鍛冶も全面否定はできないものと考えられる。

## (2) 列島内弥生時代の鉄器素材の履歴について

弥生時代の鉄器中に含有された非金属介在物から、その素材の製鉄原料を推定したのがTable. 4の調査結果である。王子遺跡の鉈をはじめとして、11遺跡の弥生時代の鉄器及び縄文晩期の小鉄片一点について調査している。

その結果は、製鉄原料は全て鉍石であり、チタンを含有した砂鉄系は未検出である。これらの調査鉄器は、まだ未報告のものが多く詳細は正式報告書に発表するとして、通観すると鉄素材は大部分が高温還元による間接製鋼法にもとづく製品が大部分であるが、なかには福岡県の樋渡遺跡の鉄剣でみられる様にファアライト（Fayalite:  $2\text{Feo}\cdot\text{SiO}_2$ ）系介在物の存在から低温還元の直接製鋼法による塊煉鉄<sup>⑯</sup>も認められる。

王子遺跡出土の鉈が高温還元の間接製鋼法による鋼と考えられるところから弥生時代中期以降の列島内では、鉄器素材が直接製鋼法と間接製鋼法にもとづくものが存在したことが推定さ

Table 4 弥生時代鉄器中の非金属介在物からみた製鉄原料

出 別	土 地		遺 跡 名	鉄 器	製 鉄 原 料	製 鋼 法	非鉄金属介在物	推 定 年 代	注
	所 在 地								
鹿 児 島	鹿屋市王子町王子	王 子	鈍	鉍	(※)	間接製鋼法か?	シリケート系	弥生時代中期後半	1
熊 本	阿蘇郡阿蘇町乙姫	下 山 西	不明鉄片	"	"	"	"	後期中葉	2
佐 賀	鳥栖市柚比町	安 永 田	鉄 斧	"	"	間接製鋼法か	介在物はほとんど存在せず	中期末	3
福 岡	福岡市西区	樋 渡	鉄 剣	"	"	塊 煉 鋼	フェアライト系	中期後半	4
"	北九州市小倉南区	長 行 行	鉄 斧	"	"	"	"	前期～中期(縄文晩期)	5
"	八幡西区鳴水	黒 ケ 畑	"	"	"	"	"	中期後半～末葉	6
"	小倉南区	高 島	"	"	"	"	"	終末期	7
"	小郡市大板井	大 板 井	鎌	"	"	"	"	中期中頃	8
"	春日市上白水門田辻田	門 田	鉄 戈	"	"	"	"	中期末	9
"	糸島郡二丈町石崎	曲 り 田	鉄 片	"	"	"	"	縄文晩期	10
岡 山	津山市下高倉西	ビシヤコ谷	鉄 斧	"	"	"	"	弥生時代中期	11
大 阪	東大阪市弥生町	鬼 虎 / 川	鉄 鏃	"	"	鑄鉄脱炭鋼	FeO, CaP, P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> , MnS	中期	12
"	"	"	ノミ状鉄器	"	"	"	"	中期	"

※非金属介在物にチタン(Ti)が検出されない。

Table. 4. 弥生時代鉄器中の非金属介在物からみた製鉄原料関連文献

1. (イ) 鹿児島県教育委員会『王子遺跡』(鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書第34集) 1985  
 (ロ) 大澤正己「王子遺跡出土弥生中期後半の鉄滓や鈍の調査」『王子遺跡』所収 1985
2. (イ) 高谷和生「下山遺跡概要」1983, 92 遺構 S I - 24出土層位55  
 (ロ) 不明鉄器の分析結果は報告書刊行時に発表予定
3. 安永田 Y Y S 2 次44号住居趾出土鉄斧, 報告書準備中, 鳥栖市教育委員会  
 当鉄斧の素材中には非金属介在物はほとんど存在せず清浄な鋼であったことが予測される。
4. 福岡市教育委員会飯盛3次, 樋渡古墳下カメ棺(5号)出土
5. (イ) 宇野慎敏, 山口信義『長行遺跡』(北九州市埋蔵文化財調査報告書第20集) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1983  
 (ロ) 大澤正己「鉄斧」『長行遺跡』所収

6. (イ) 宇野慎敏他『黒ヶ畑遺跡』(北九州市埋蔵文化財調査報告書第18集)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1982  
 (ロ) 鉄斧銚片の試料を受けて分析調査 未発表
7. (イ) 小田富士雄他『高島遺跡』『古文化談叢』第3集九州古文化研究会 1976 委員会 1981 佐々木稔氏分析調査資料
8. (イ) 片岡宏二『大板井遺跡』I (小郡立文化財調査報告書第11集)小郡市教育委員会 1981  
 (ロ) 佐々木稔氏分析調査試料
9. (イ) 井上裕弘, 小池史哲他『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第11集 福岡県教育委員会 1978  
 (ロ) 大澤正己「門田遺跡の鉄器について」『福岡考古懇話会々報』第9号 1978  
 (ハ) 佐々木稔氏分析調査資料
10. (イ) 橋口達也『石崎曲り田遺跡』II (今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集)福岡県教育委員会 1984  
 佐々木稔「III自然科学的調査」
11. (イ) 行田裕美他『ビシヤコ谷遺跡』(津山市埋蔵文化財調査報告書第 集)津山市教育委員会 1984  
 (ロ) 大澤正己「ビシヤコ谷遺跡出土の鉄滓と鉄斧の調査」『ビシヤコ各遺跡』所収
12. (イ) 芋本隆裕, 松田順一郎『鬼虎川の金属関係遺物〈第7次発掘調査報告2〉』東大阪市文化財協会 1982  
 (ロ) 大澤正己「鉄鏃と鑿状鉄器の冶金学的調査」『鬼虎川の金属関係遺物〈第7次発掘調査報告2〉』所収  
 (ハ) 大澤正己「鬼虎川遺跡出土の鑄鉄脱炭鋼鉄器, 鉄鏃と鑿状鉄器の調査」『福岡考古懇話会々報第11号』 1982



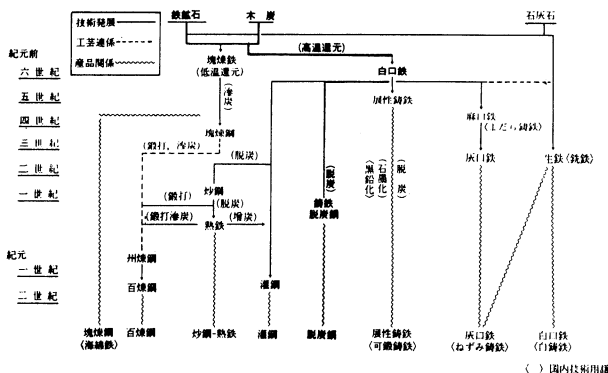


Fig. 1 中国封建社会前期鋼冶煉技術發展示意図

最後に中国大陆での鉄素材の製造履歴を示した「中国封建社会前期鋼冶煉技術發展示意図」<sup>⑦</sup>を Fig. 1 に示しておく。この図からみて、列島内の弥生時代中期には、各種製造履歴の鉄器が存在しても奇異な点はないものとする。なお、朝鮮半島における初期鉄器の研究として高麗大学の伊東錫教授<sup>⑧</sup>らのご活躍もあることであり、近い将来、中国、韓国（朝鮮民主主義人民共和国を含む）、日本の鉄器比較研究の気運も生まれてくるものと信ずる次第である。

註

- ① 京都府中郡峰山町字杉谷に所在する扇谷遺跡は、弥生時代前期末から中期初頭に比定される高地性集落である。これより鍛冶滓が1点出土している。王子遺跡鉄滓は、この扇谷遺跡に次ぐものであるが、椀形鍛冶滓としては現在のところ最古のものである。
- ② 小田富士雄「鉄器」『立岩遺蹟』河出書房新社1977
- ③ Hercymite (Feo, Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 検出鉄滓は9例程押えているが、それらは次の報告書に記載している。  
大澤正己「千葉県下遺跡出土の製鉄関係遺物の分析調査」『千葉県文化財センター研究紀要』7 千葉文化財センター1982, 199頁
- ④ 清永欣吾『扇谷遺跡出土品の調査』日立金属株式会社安来工場冶金研究所 1983
- ⑤ 春日市教育委員会『赤井手遺跡』(春日市文化財調査報告書 第6集) 1980
- ⑥ 縄文晩期の稲作関連遺跡群があいついで出現している。福岡市の板付遺跡をはじめとして曲り田（糸島二丈町）、茶畑（唐津市）これらの水路に用いられている木枕の先端部の切り口を観察すると鉄器使用の痕跡が認められる。
- ⑦(イ) 大澤正己「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』(たたら研究会創立二十五周年記念論文集) たたら研究会編 1983  
(ロ) 大澤正己「押入西遺跡出土鉄滓及び鉄塊の金属学的調査」『押入西遺跡』(津山市埋蔵文化財調査報告書 第14集) 1984
- ⑧(イ) 大澤正己「築瀬古墳出土鉄滓の分析調査」『築瀬古墳群』(津山市埋蔵文化財調査報告書 第13集) 津山市教育委員会 1983

- (ロ) 大澤正己「野路小野山遺跡出土の製鉄関係遺物の調査 一周辺遺跡との比較検討」『野路小野山遺跡調査報告概報』滋賀県教育委員会 1984
- ⑨ 小田富士雄前掲書②
- ⑩ 西谷正「朝鮮発見の銅鍔について」『古代学研究』46 1966
- ⑪ 橋口達也「ふたたび初期鉄製品をめぐる二、三の問題について」『日本製鉄史論集』（たたら研究会創立二十五周年記念論文集）たたら研究会編 1983
- ⑫ 33号住居跡出土品及び5号土壇出土品に鑄造品が存在する。機会をみて発表したと考えている。
- ⑬(イ) 名和田真淳他「勝連城跡第1次発掘調査報告書『琉球文化財報告書』琉球政府文化財保護委員会 1965
- (ロ) 安里嗣淳他『勝連城跡』（勝連町の文化財第5集）沖縄県勝連町教育委員会 1983  
 勝連城第1次発掘品の鉄滓、鉄塊、鉄鍋、釘らについて現在調査中、又、鑄鉄稚鍋破片と鉄滓の組合せで下げ法鍛冶加工を考えさせる遺跡として次のものがある。①我謝遺跡（西原町）13～14世紀②宮元元島（宮古）13～14世紀。③稲福遺跡（大里村）13～14世紀。④カンドウ原遺跡（石垣）15～17世紀、⑤フルスト原遺跡（石垣）16世紀。
- ⑭(イ) 大澤正己「渡名喜島遺跡発見の鉄滓について」（沖縄県下出土の鉄滓の調査）『渡名喜島の遺跡Ⅰ』沖縄県渡名喜村教育委員会 1979 当報告書で10例の鍛冶滓を確認。
- (ロ) 大澤正己「沖縄県出土の鉄滓その2について」『沖縄県立博物館研究紀要』 1984 予定原稿 この報告書で5例報告。
- ⑮ 沖縄県のグスク時代及び北海道の擦文時代の鉄事情は共通性があり、両者ともに製錬はやられず、もっぱら鍛冶加工のみが実施されている。出土鉄滓から裏付けられる。また、両者ともに文献的にも鑄鉄鍋の交易品として商品価値が高く、また鉄鍋破損品は鍛冶加工に際して素材原料として再生された可能性が強いことが指摘できる。
- ⑯ 塊煉鉄の鉄鉱石を比較的低い温度（1,000℃前後）の固体状態で、木炭を用いて還元した産物であり、ほとんどC, Si, Mn, S, Pらの元素を含まない。但し組織は粗くやわらかく、孔隙中に鉱石自身に存在した幾多の酸化物が夾雑しあい、その主なものは酸化第1鉄（FeO）と酸化第鉄-硅酸塩の共晶組成（Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）である。  
 塊煉鉄の性質は、柔軟で一定の温度下で鍛造して成型ができ、同時に又鍛打することによって酸化物の夾雑物をおし出すことができ、材質性能を改善することができる。  
 低温固体還元法、塊煉法と称され、銕鉄・熟鉄或いは海綿鉄とも呼ばれているが、一部では塊煉鉄は主鉄（銕鉄）沙成の熟鉄と区別する。  
 春秋末期と戦国初期の鍛造鉄器は、材質調査結果からみて塊煉鉄であるといわれている。「中国冶金簡史」による。
- ⑰ 北京鋼鉄学院『中国冶金簡史』科学出版社 1978 93頁
- ⑱(イ) 尹東錫・申環煥・李南珪『韓国初期鉄器遺物に対する金属学的研究』浦項綜合製鉄株式会社技術研究所 高麗大学校生産技術研究所 1982, 5
- (ロ) 尹東錫・申環煥・李南珪『三国初期の製鉄工程と技術発展』同上 1983, 3

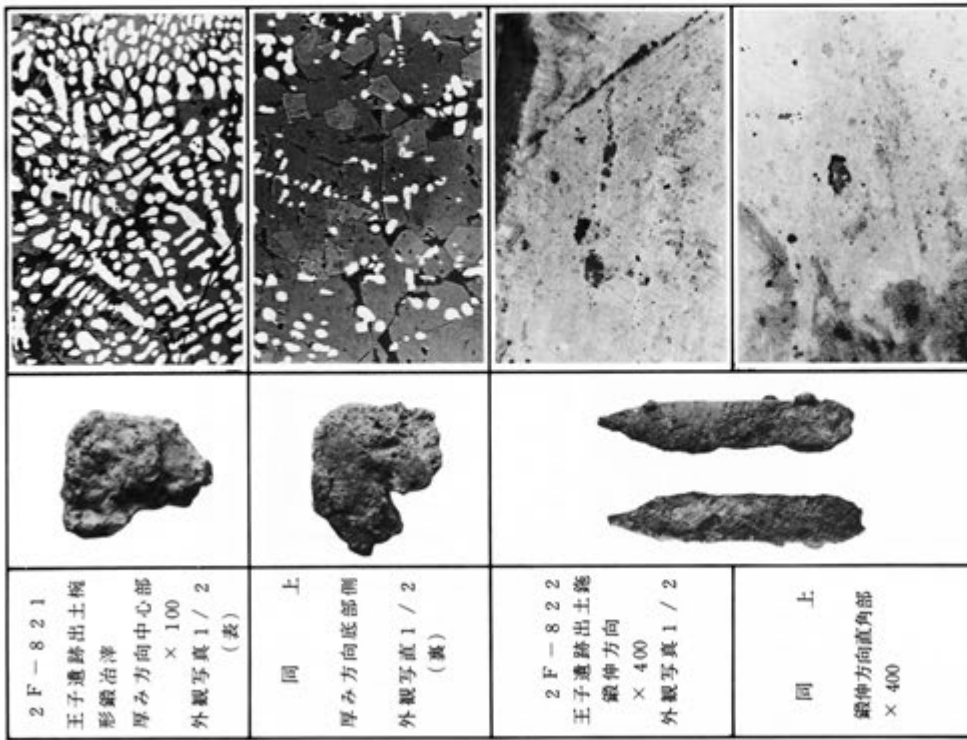


Photo. I 鉄滓及びび縮の顕微鏡組織

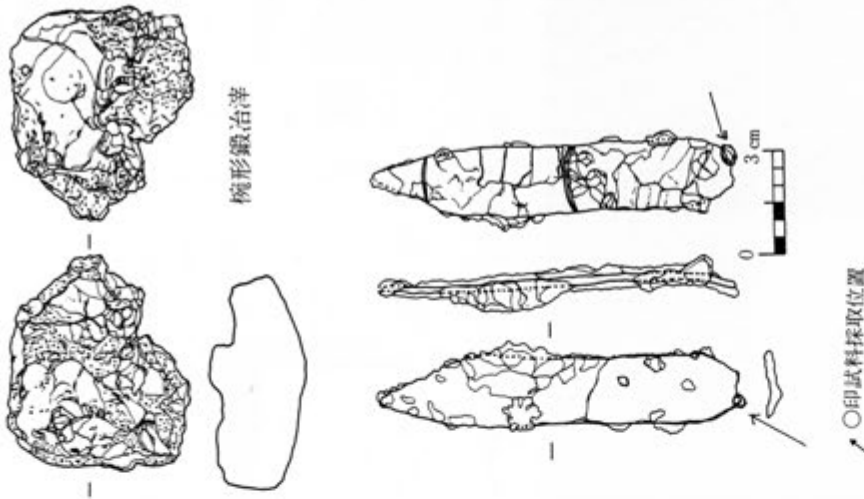
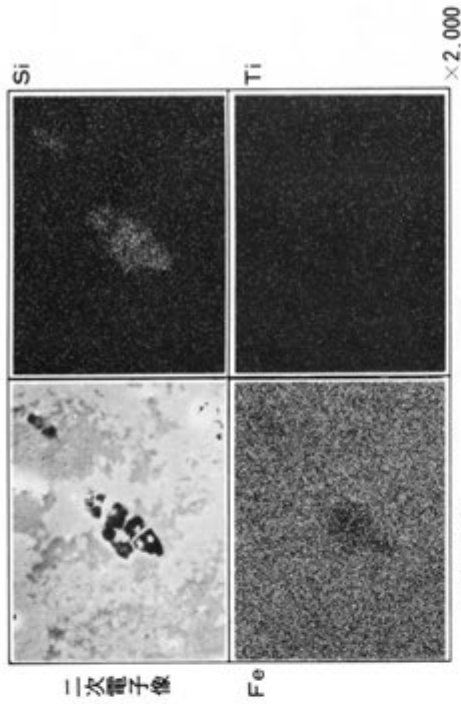


Fig. 1 供試材の実測図 (実測：小田富士雄氏)



2 F - 822 Photo. 2 鏡中の非金属材料の走査 X 線像 (鍛伸方向)

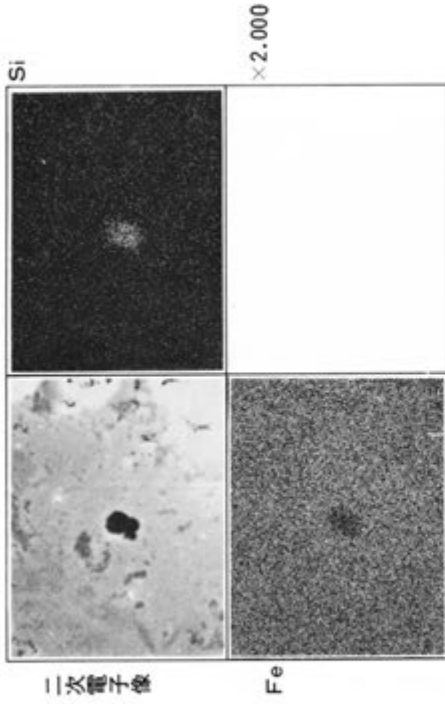
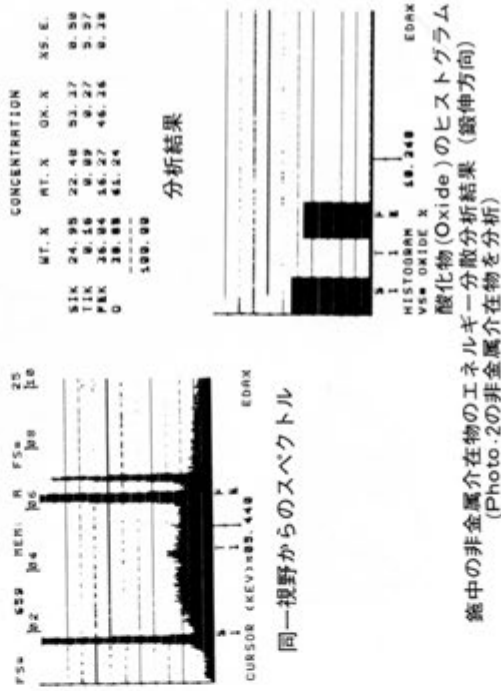
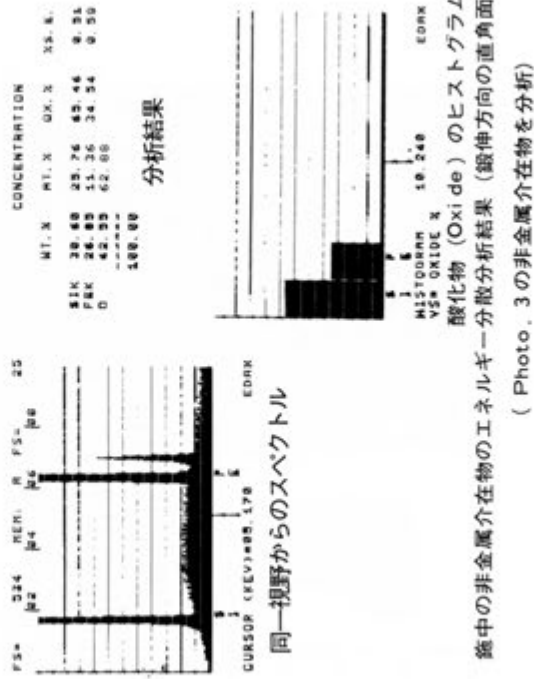


Photo. 3 鏡中の非金属材料の走査 X 線像 (鍛伸方向の直角面)



# 九州地方の弥生時代住居

I 竪穴住居の平面形式

II 竪穴住居の構造形式

III 竪穴住居の屋内施設

IV 掘立柱建物

宮 本 長 二 郎

弥生時代において九州地方は、他の地方に先駆けて大陸および半島の先進文化をとり入れた地方であり、それが九州地方の弥生文化の形成にどのように影響し、展開して行くか非常に興味深いところである。

住居においては、縄文時代以来の竪穴住居に加えて、米作り文化とともに移入された掘立柱建物と高床式建物が新たに登場した時代である。竪穴式住居は米作りによる農耕社会の発展にともなって、九州地方では弥生時代前期後葉以降に急激に増加して、弥生時代集落の主役の地位を保つが、掘立柱建物と高床式建物の出現は、集落構成に多様化をもたらし、発見遺構例は少ないとは云え、弥生時代社会の形成に大きな役割を果たしたものと思われる。

鹿児島県鹿屋市王子遺跡は、弥生時代のそのような集落構成を知ることのできる数少ない一例であり、また、個々の竪穴住居と掘立柱建物の性格を分析することも可能と思われる稀有な例である。

王子遺跡は中期末～後期初頭の比較的短期間の集落であるが、この時期にこのような集落がどのように成立したのかについては、九州地方の弥生時代文化全体の流れの中で位置付けていかなければ分からない。

本稿では王子遺跡を含めて、九州全域の弥生時代集落遺跡97件、650棟程の竪穴住居の分析を試み、次いで掘立柱建物をとりあげ、弥生文化の住居建築上の背景について資すことにしたい。

なお、本稿でとりあげた集落遺跡例は昭和53年度までの発掘調査報告書から得た。未集録の遺跡も多く、集録遺跡の地域的な偏りもあって、弥生時代の実態をカバーしきれていないが、大体の傾向は把握し得るものと思われる。

住居遺構例の報告書からの抽出にあたっては小時期区分の明らかなもの——例えば弥生時代中期前葉——についてのみ採用した。それらを小時期ごとに時代順に遺跡例をあげ、遺跡別に竪穴住居を分析し（付表2）、さらにそれらを集計して、項目ごとに小時期別の住居総数等をまとめた（付表1）。

## I 竪穴住居の平面形式

**方形・円形** 九州地方の弥生時代竪穴住居の平面形式は方形平面と円形平面の二種がある。

方形平面は弥生時代全期間を通して住居総数の73%を占める。方形平面が時期別に占める割合は、前期48棟中に26棟52.1%、中期228棟中に134棟58.8%、後期315棟中に299棟94.9%で弥生時代前～中期には約半数を占め、後期には方形平面が圧倒的に多い（表1）。

方形平面を規模別（面積別）にみると、弥生時代後期は方形平面が主流になるので除いて、前～中期での割合を付表1から求めると、10㎡以下：90.9%、10㎡～20㎡：87.0%、20㎡～30㎡：48.1%、30㎡以上：6.2%、全体で51.4%となる。

すなわち、方形平面の竪穴住居は弥生時代前期から中期にかけて全体の過半数を占めるが、20㎡以下の小規模住居に限れば88.0%、30㎡以下では76.0%となり、方形平面は小型住居に主として採用され、かつ、時代が降るにしたがって増加の傾向にあることが明らかである。

円形平面の場合は、前～中期の住居総数に占める割合は48.6%で、半数弱にすぎないが、30㎡以上の住居には圧倒的に多く、50㎡以上の大型住居では全て円形平面である（表2）。

棟数の上からは方形平面と円形平面はほぼ同じであるが、円形平面は中・大型住居に多いことから、前～中期には円形平面が主流であったと云える。

後期前～後葉期に円形平面は一時途絶えるが、後期末葉には中期とは異なった形のものが現われる。例えば、大分県野津町日当遺跡で長方形に近い楕円形平面を示し、宮崎市宮崎学園熊野原遺跡、宮崎県都城市祝吉遺跡・堂地東遺跡では花卉型の円形・長方形平面がみられる。

鹿児島県王子遺跡ではすでに中期末～後期初頭期に花卉型が現われており、花卉型平面は中期末葉以降の時期において、九州南部地方における地方的特色を示すものであるろう。

**住居棟数と規模** 付表1から小時期別の住居棟数の変化をみると、前期末～中期中頭期と中期末～後期前葉期には時期区分の表記の方法に問題があってバラツキがみられるが、前期末葉から後期中葉にかけての住居棟数は各時期50～60棟程の安定した推移を示し、後期後葉期に90棟を超えて増加の兆しが現われ、同末葉に156棟を数えて急増している。

住居規模別棟数の変化を付表1の面積別棟数からみると、前～中期には20㎡以下の小型住居が125棟45.3%で最も多く、20㎡～30㎡＝54棟19.6%、以下10㎡単位増えるごとに31棟、25棟、18棟、14棟、7棟、2棟（80～90㎡）と漸次減少している。前～中期において、時期が降るにつれてやや大型住居が増える傾向にあるが、全般的には規模別による住居棟数差は後期程には顕著ではない。

中期末葉以降になると、この傾向は大きく変わり、大型住居が少なく、中・小型住居が増え、住居平面形式が円形主流から方形主流に変化する傾向と一致する。また、後期後～末葉に住居数が急増するのと比例して大型住居が増加している。

弥生時代には、後記のように掘立柱建物の大型住居が前期末には成立しており、集落内の住居構成が竪穴住居のみの場合と、掘立柱建物と竪穴住居が共存する場合とで竪穴住居の規模構成も異なってくると思われ、中期末以後の大型竪穴住居の急減は、それに代わるものとして掘立柱建物の増加も要因の一つと考えられる。

**主柱本数** 1棟の竪穴住居に使用される主柱の本数は、弥生時代には3本例を除いて0本から17本までの例がある。

付表1の面積別棟数をさらに分解して、主柱本数別に分けて前～中期にまとめて表3に、後期にまとめて表4に表わした。付表1と同様に（ ）数字は円形平面、他は方形平面の棟数を示す。

前～中期では、主柱本数別に最大面積と最小面積で50㎡の差を保ちつつ、住居面積と主柱本数はほぼ比例関係にあることが表3の棟数分布にはっきり表われている。

主柱本数別の住居棟数をみると、前～中期では無主柱103棟31.8%が最も多く全体の約1/3を占め、次いで主柱2本70棟、6本35棟、4本32棟、8本23棟、7本12棟、9本9棟、1本8棟、11本8棟、12本5棟、その他の順に少なくなっている。とくに主柱5本例が少ないのは、主柱数が住居規模に比例するなかで例外的な存在である。また、主柱2・4・6・8本の偶数本数

が主流であることも、縄文時代とは異なったこの時期の建築構造の特徴を現わしているものと思われる。

前～中期の主柱7本以上の住居には、主柱以外に床面中央に補助支柱2本あるいは4本をもつ例がある。

補助支柱2本の例は、主柱7本2例、主柱8本5例、主柱9本1例、主柱10本2例、主柱11本1例、主柱14本2例である。

補助支柱4本の例は、主柱10本・12本各1例がある。

支柱の掘形は主柱よりも浅く狭いことや、50㎡以上の大型住居に多くみられることから、補助的な構造用材として使用されたものと考えられる。しかし、主柱7本以上72棟中に補助支柱をもつもの15例20.8%しかなく、構造用材としても常設ではなく、住居の構築時に臨時に使用したために痕跡が残らない例が多いとも考えられる。

平面形との関係は、前～中期では円形平面は主柱2本以下181棟中に13棟7.2%、主柱4本32棟中に19棟59.4%、主柱5本以上111棟中にわずか1棟のみである。すなわち、主柱2本以下は方形平面、主柱5本以上は円形平面に使いわけ、主柱4本には両平面形が認められる。

後期に入ると主柱数で最も多いのは2本121棟、次いで無主柱97棟、4本77棟、1本10棟、5本以上はわずか9棟で、12本1棟が最多主柱例である(表4)。すなわち、前～中期に比べると、主柱5本以上が極端に減少して無主柱、2本、4本に集中する。この傾向は、後期に入って平面形式が円形から方形平面に統一されるのにもなって、主柱配置も定形化したことを示している。

方形4主柱形式は弥生時代全期を通して存在するが、後期後葉にはその変形があらわれる。第1図は変形4主柱の平面模式図である。仮りに、4隅の柱を主柱として、他の柱を間柱と呼ぶことにして、間柱1～5本の平面形式をそれぞれ方形4<sub>1</sub>主柱～方形4<sub>5</sub>主柱形式とする。

方形4<sub>1</sub>～4<sub>3</sub>主柱は柱を長方形に、方形4<sub>4</sub>～4<sub>5</sub>主柱は柱を正方形に配置し、一般的には間柱の多いものほど規模が大きい。

遺構例は、間柱なしの4主柱79棟が最も多く、次いで4<sub>2</sub>主柱11棟、4<sub>1</sub>主柱7棟、4<sub>3</sub>主柱6棟、4<sub>5</sub>主柱3棟、4<sub>4</sub>主柱2棟がある。

いまのところ、この変形4主柱は大分県下にしか存在しない形式であり、九州地方のなかの一地域的特色を示すものと云える。

関東地方では縄文時代晩期には4主柱形式が成立して、これが弥生時代に引継がれ、住居規模にかかわらず楕円形4主柱又は隅円方形4主柱が主流となり、無主柱は小規模住居に少数例あるにすぎない。

九州地方の場合は、弥生時代全期を通してみると、無主柱189棟30.1%、2主柱191棟30.5%、4主柱129棟20.6%であり、後期中葉までは無主柱、2主柱が主体で、後期後葉以後に4主柱が増えて、3つの形式が拮抗している。

したがって、同じ4主柱形式であっても、関東地方と九州地方では平面形や成立の過程が異なり、必ずしも同列には扱えないが、古墳時代に入ると全国的に方形4主柱の形式に均一化す



**主柱負荷面積** 主柱1本あたりの屋根加重負担の面積を、屋根面積のかわりに床面積で求め、各主柱数別の平均住居面積を出して、これを各主柱数で割った値が表3、4の主柱負荷面積である。

前・中期は住居規模と主柱数とが比例することから、主柱負荷面積もほぼ一定の値を得ることが予想される。

1主柱と2主柱は大きな値を示すが、4主柱以上は4.0㎡から6.0㎡までの範囲にある。とくに、4主柱から12主柱までは5.5㎡前後の均一な値を示し、住居規模と主柱本数の比例関係が認められる。

但し、各主柱別に最大と最小で約50㎡の差が生じているから、最大負荷面積は10㎡前後、最小負荷面積は3㎡前後の値を示す。

関東地方の縄文時代堅穴住居の場合は、主柱数は4～7本でその単位負荷平均面積は勝坂期約3.5㎡、加曽利EⅠ期約4.0㎡、加曽利EⅡ期約4.5㎡である。

したがって、九州地方の弥生時代前・中期の平均負荷面積5.5㎡は、縄文時代と比較して主柱1本当たり1㎡増えて、住居構造の進歩が窺える。

後期では、無主柱、1主柱とも平均面積が前～中期より増え、4主柱の単位負荷面積も前・中期の5.4㎡から7.2㎡に増え、後期における主要3形式の構造は、前・中期よりはかなり発展したものとみなすことができる。

4主柱間柱付きの形式は表4には間柱を含めた単位負荷面積を示してある。間柱なしの4主柱形式より低い値を示すが、前・中期の平均値に近く、構造的には間柱とするよりもむしろ、掘立柱建物の側柱に近い役割をもつものと云える。

なお、後期の主柱5本以上の平均負荷面積は遺構例が少ないためにバラツキは大きいですが、前・中期の円形平面住居の単位負荷面積の範囲内に入る値を示している。

九州地方の堅穴住居の平面形式は、上記の分析から次の三形式に分類することができる。

A：前～中期の円形平面をもつ中・大型住居で、主柱は4・6・8本が多く、面積にはほぼ比例して7本、9本以上17本までの主柱を堅穴側壁面に並行して円形に配置する。また、床面中央には2本または4本の補助主柱をもつ場合もある。

B：弥生時代全期を通して最も多い方形無主柱または方形2主柱の小型住居で、小数ではあるが1主柱形式も含まれる。

C：弥生時代全期にわたって存在する方形4主柱形式の中央住居である。後期後葉には間柱を4つ変形4主柱が現われ、間柱1～5本の数によって方形4<sub>1</sub>～4<sub>5</sub>主柱形式として扱う。

## II 竪穴住居の構造形式

以上の記述から、弥生時代の九州地方竪穴住居の平面形式の特徴や変遷を、その規模や主柱本数と関連して、ほぼ明らかにし得たと思われる。この平面形式の特徴から上部構造の復原の手掛りを求めるほかに、焼失住居の炭化建築部材からも確実な資料が得られるが、残念ながら九州地方にはいまのところ良好な焼失住居例は得られず、同じ平面形式を山陽地方の焼失住居例が参考になる。また、時代はかけ離れるが、現代に生きる近世民家建築は、建築構造の復原に参考になる最も身近な具体例と云える。

前節では竪穴住居の平面形式をA・B・C型の3形式に分類できたので、それに基づいてそれぞれの形式の復原を試みることにする。

**A型** この型式の特徴としてあげられる偶数の主柱本数は、建築構造上の何らかの規制を受けた結果であると推定できる。

また、主柱以外に床面中央に2本または4本の補助支柱も小屋組架構の補助用材もしての役割を負うものと思われる。

竪穴の平面形は楕円形よりも正円形が多く、その場合に主柱配置も竪穴壁面に沿って並行に正円形に配置されていることから、屋根の形式は棟を上げた寄棟造りや入母屋造りではなく、円錐形であったと思われる。また、主柱が偶数本数であることは相対する2本1対の関係を意味するものとして、第1図のような梁組と又首組によって円錐形小屋組を形成していたものと推定される。

主柱6本の梁組はキ字状、主柱8本の梁組は井桁状になる。それぞれの端部で又首尻を受け、又首上端は中央頂部の短い円柱状キイポストの側面に柄差しにして集中させる。又首上に上下二段に架け渡した母屋桁上に垂木を円錐形に配置するのであるが、母屋桁は円環状につくるために蔓草を束ねたものを使用する。垂木は桁から地面上に降ろして、屋根は円錐形の地上葺降し形式になる。

9本以上17本までの主柱の多い形式の場合も、キ字状梁、井桁状梁を桁上に架け渡して上記のような円錐形小屋組をつくり、キ字状梁、井桁状梁の梁組の交点に支柱を立てて補強したものが補助支柱2本または4本の例である。

このような円錐形屋根形式は、四国地方の砂糖しほり小屋に伝わる形式を参考にしたものである。キイポストの方法は技術的にはかなり進歩した方法であるから、頂部では短かい棟木をあげて、円錐形に近い寄棟造り屋根であったとも考えられる。

**B型** 無主柱、1主柱、2主柱ともに小型長方形平面であり、同じ外観をもっていたと推定される。主柱は直接に棟木を支持するもので、棟木と地上面に垂木を架け渡して、寄棟造りの屋根をつくる。無主柱の場合は、2組の合掌を地上面に立てて棟木をあげ、2主柱形式と同様に垂木を配って寄棟造りの方錐形屋根をつくる。

**C型** 方形4主柱形式の中規模住居で、主柱間の柱間中央に間柱をもつものもある。B型とは同系統の構造形式と考えられるから、柱上に桁・梁を架け、梁上に合掌を組み棟上をあげて

寄棟造り屋根を地上葺降しとする。

長方形平面をもつ方形 $4_1 \sim 4_3$ 主柱形式の場合は、3組の合掌が棟木を支持する架構形式である。

主柱配置が正方形の平面配置をもち中・大型住居に多い方形 $4_4 \sim 4_5$ 主柱形式の構造は、梁間が大きいので、前記の他の例のように棟木から直接に垂木を地下に降ろす形式には構造的に無理があり、A型のように短かい棟を上げた四方葺降しの方錘形の寄棟造り屋根の構造が考えられる。

以上のA・B・Cの三つの構造形式は、いずれも寄棟造りに復原した。入母屋造りに復原することも可能であるが、当地方に現存する近世民家は全て寄棟形式であり、弥生時代以来の伝統様式を伝えるものとみるべきであろう。

### Ⅲ 竪穴住居の屋内施設

**周溝** 弥生時代全住居649棟に対して周溝を保有する住居は162棟、25.0%で全体の4/1で一般的に少ない。時期別には(表5、付表1)、中期前葉に60%を占めて突出し、前期から中期初頭にかけて少なく、中期中葉以降は平均的な低さを示す。周溝は一般的には床面の温気抜き又は排水用の機能をもつと考えられるから、周溝の多い割合をまず中期前葉は多雨な気候であったことを示すであろうか。

周溝と関連して、付表1・2にとりあげた床溝がある。これは中央ピットと周溝を連結して、さらに竪穴側壁に暗渠を設けて外部にのびる排水溝に進む例もある。

床溝をもつ住居はわずか25例のみで少ないが、周溝が突出して増える中期前葉以降に出現している。

**炉** 弥生時代全期を通した炉の平均保有率は41%で半数に満たない。時期別には前・中期に少なく、中期末葉以後に増加して過半数を占めるようになる。

炉の形式は地床炉か、あるいは床面が焼けた程度のもの(焼面)も含み、中期から後期にかけて屋内炉が増えるとは云え、炊事用の炉は屋外炉が主であったことを思わせる。

**中央ピット** 床面の中央にある平面円形又は方形の穴を中央ピットと呼び、同様のもので壁面寄りに位置するものを貯蔵穴として区別したが、実際の機能は明らかではない。深さは30cm程から70cm程の深いものまで、多くは穴の埋土中に炭化物が混じる。浅くて壁面が焼け、炉址と認められるものもあるが、多くは焼けていない。また、明らかに柱痕跡と思われる細く深い掘形をもつ例もある。

柱穴でも炉址でもない中央ピットに、排水溝が取りつくものは、床面の温気抜きの用途とともに貯蔵穴としての役割も考えられる。また、穴の周囲に凸提帯を巡らせたり、方形平面の浅い穴の中央に円形平面の深い穴を掘った二段掘りの例は、貯蔵穴や祭祀的用途の可能性も考えられる。

全期間の平均保有率は21.9%で低いが、時期別には周溝と同様に中期前葉に集中して78.3%

の高率を示し、他の時期は炉の傾向とは反対に前・中期に20～40%でやや高く、後期には急激に減少する。

**貯蔵穴** 多くは竪穴壁面に接して設けられ、方形平面の場合は長辺の一方の中央側壁に接して設けられることが多い。円形平面の住居で中央ピットと並ぶものや、長方形の短辺中央あるいは隅に設けるものも若干数存在する。

貯蔵穴の機能は文字通り貯蔵のための穴とすべきものもあると思われるが、鹿児島県鹿屋市王子遺跡では、埋土上面が床面として生きており、建築儀礼などのような用途の可能性も考えられる。

貯蔵穴の保有率は41.9%で炉とほぼ同率を示し、前・中期に低く、中期末葉以降に増加する傾向についても炉と同じである。この傾向は、方形平面に貯蔵穴が多いことを示すもので、中央ピットが円形平面に多く、しかも前・中期に保有率が高く、後期に急減する傾向と対照的であることから、中央ピットも貯蔵穴も互いに似たような機能をもち合わせていたとも考えられる。

**ベッド** ベッド状遺構とも云われ、竪穴側壁面に沿って中央床面よりも10cm前後、一段高くなっている。

中期末葉に1例あるが、中期末葉以降の方形平面住居の盛行とともに発達したもので、その形状は竪穴側壁に沿って幅1m以下、長さは長方形平面の短辺いっぱいにとるもの、一方に片寄せて長さ2m程とするもの、竪穴壁の二辺にまたがるL字型、三辺にまたがるコ字型に配置し、あるいはこれらのうちの二組を組合せる形式もある。

ベッドの用途としては寝台としてのみでなく、収納スペースや祭壇などが考えられるが、その大きさと形状からは寝台として最も多く使われたものであろう。

中期末～後期初頭の鹿児島県王子遺跡では、ベッドが方形平面の三方または四方に張出し、円形平面ではベッドが全周して隔壁を設け、住居平面が花卉型を呈するものがある。

この花卉形は後期前葉の宮崎県都城市堂地遺跡ではさらに多弁化した大型住居に発展し、張出し部がベッド状になっていないものもみられ、後期末葉の都城市祝吉遺跡や宮崎市熊野原遺跡に引継がれる。

他の地方では福岡県八女市地方に部分的な張出しベッドの例が若干存在するのみで、鹿児島県、宮崎県以外の地方には現在までのところ流布してはいない。

ベッドの保有率を中期末以降について求めると約30%である。ベッドが寝台としての役割をもっていたとすれば、この保有率はいかにも低率であり、100%でなければならぬはずである。

高さわずか10cm程のベッドを実際に寝台として利用する際には、上にそだやわらを敷き、むしろやアンペラ状の敷物を重ねたであろうから、必ずしも土壇は必要ではなかったと云うことをこの保有率の低さが証明しているのではなかろうか。

また、南九州地方の花卉形平面の住居において、張出し部がベッド状になっているものと、平坦なものが両立していることも上記の類推にかなうものであろう。

**建替え** 同じ竪穴をそのまま、あるいは拡張して建物の改築を行うことで、弥生時代におい

ては、東日本では殆んど場所を移して建替えるために、同位置の建替えは極めて少ない。山陽道の中期住居では盛んに行われて1棟で4～5回の例もみうけられる。

九州地方ではいちおう前期から後期にわたって存在するが、中期に主として分布する。建替えは1回のみで、遺構例も山陽地方に比べれば少なく、後期の方形平面住居が主流になると同一竪穴での建替えはあまり行われなくなる。

#### IV 掘立柱建物と高床式建物

平地上に掘立柱を用いて建てる建物のうち平屋建てを掘立柱建物、床を高く上げて上・下層または上層のみを利用する2階建てを高床式建物として区別する。

九州地方ではとくに北九州に多くみられ、前期末以降、竪穴住居の隆盛にともない、竪穴住居と共存して発見されることが多い。竪穴住居と異なり、掘立柱の場合は時期の比定が難しく、多くの遺構例が報告されているけれども、時期の確かな例は少なく、以下には少数例をあげるにとどめた。

九州地方の弥生時代の掘立柱建物の特徴をあげると桁行（5間～8間）梁間2～5間で規模が格別に大きいことである。福岡県行橋市竹並遺跡（前期末～中期初頭）、福岡市久保園遺跡（中期中葉）、福岡県北九州市辻田遺跡（中期）などは超大型の例であり、規模は小さくなるが、鹿児島県鹿屋市王子遺跡（中期末～後期初頭）の掘立柱建物は妻側中央部に壁面から離れて独立した棟持柱をもつ点で、規模の大きさにも劣らない格式を備えたものと考えられる。棟持柱をもつために高床式建物に結びつけられ易いが、平面形は不整形で桁行側柱の柱筋が揃わず、梁間2～3間であるなど明らかに掘立柱建物の特徴を示す。

棟持柱の類例は王子遺跡とほぼ同時期の岡山県津山市沼E遺跡と同県哲西町土井遺跡がある。これら二例は梁間1間であるが、梁間は広く、また桁行が長いために屋内の棟造りに側柱とは柱筋のずれる位置に柱を立て、棟木を直接に支持する形式をもつ。

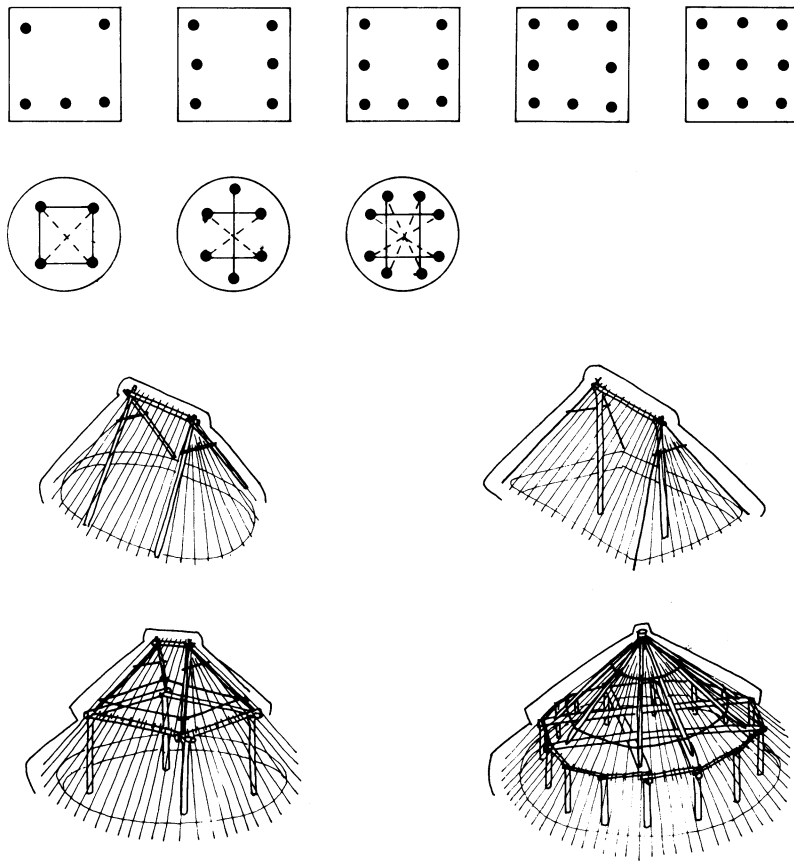
棟持柱をもつ高床式建物は、弥生時代中期の銅鐸・土器に描かれているが、遺跡例としては時代が降り、神戸市松野遺跡（6世紀前半）など、きわめて発見例が少ない。現存例で伊勢神宮社殿等の神殿建築に形式遺存することや、古代における遺跡例の少ないこと、東南アジアにおける民族例からみて、棟持柱は構造材として実用的に用いたのではなく、はじめから象徴的なものとして使用された可能性が強い。

九州地方の高床式建物の遺構例では、湯納遺跡（福岡市・中期）の建築部材がその具体的な構造を示してくれ、また、谷間の流路沿いに桁行2間、梁間1間の3棟の高床式建物跡がある。発見部材では上・下層とも草壁の外壁をもつとされるが、平面からのみでは下層を間仕切っていたかどうかは分らない。

九州地方の高床式建物の発掘遺構例としては、桁行1～2間、梁間1間の平面にほぼ限定できる。梁間寸法は2m～3.5m前後で、桁行2間の場合は1間の柱間寸法は梁間に等しいか狭い。つまり、梁間に対して、桁行2間の比率は1.5～2倍である。桁行1間・梁間1間の例にも同

じ比率を示す例が福岡県辻田西遺跡（中期），鹿児島県王子遺跡などにあり，中国地方にも例がある。これらは桁行2間の場合の中央柱を除いた形式をもつもので，桁行2間の場合と同様の高床式建物とすれば，桁行2間の中柱に代るもの，例えば，土壁や板壁を設け，四隅の柱と壁面で上層の加重を支えていたと考えられる。

このような例からみて，鹿児島県王子遺跡における集落の構成は，神殿あるいは集会所としての棟持柱のある掘立柱建物，首長とその家族のための大型住居，高床倉庫，一族郎党の小竪穴住居群とから成るものと推定される。



第1図 竪穴住居構造模式図

引用遺跡・文献

引用文献については次のように略記した。

- 九州縦貫 = 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告  
 山陽新幹線 = 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告  
 冷水バイパス = 冷水バイパス関係埋蔵文化財調査報告  
 福岡南バイパス = 福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告  
 今宿バイパス = 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告  
 九州横断 = 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告  
 八木山バイパス = 八木山バイパス関係埋蔵文化財調査報告  
 浮羽バイパス = 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告  
 県文報 = 一県文化財調査報告  
 県教 = 一県教育委員会  
 以下市・町・村についても同じ

(福岡県)

福岡市	野多目拈渡遺跡	山口譲治・市文報93・市教1983
	千里シビナ遺跡	塩屋勝利・市文報88・市教1982
	久保園遺跡	市文報91・市教1983
	比恵遺跡	横山邦継・市文報94・市教1983
	有田・小田部第3集	井沢洋一他・市文報84・市教1982
	宮の前遺跡	福岡県労働者住宅生活協同組合1972
	神松寺遺跡	山崎純男他・市文報45・市教1978
	野方勸進原遺跡	市文報64・市教1981
大野城市	中・寺尾遺跡	馬田弘稔他・市文報1・市教1977
	仲島遺跡	舟山良一他・市文報8・市教1981
北九州市	辻田西遺跡	栗山伸司他・市文報13・北九州市教育文化事業団1982
	辻田遺跡	栗山伸司他・市文報35・市教1980
	屏賀坂遺跡	上村佳典他・市文報23・市教1977
	香月遺跡	中村修身他・市文報30・市教1979
小郡市	北牟田遺跡	酒井仁夫, 森田勉・九州縦貫XXXI・県教1979
	津古内畑遺跡	柳田康雄・第5次調査報告・県教1974
	牟田々遺跡	佐々木隆彦・市教1977
	大坂井遺跡I~III	片岡宏二他・市文報11・13・14・市教1981-2
	大坂井II遺跡	
	三国小学校跡	片岡宏二・市文報10・市教1981
	八坂石塚遺跡I・III	速水信也他・市文報19・市教1983
春日市	門田遺跡	井上裕弘他・山陽新幹線7・県教1978
	辻田遺跡	小池史哲他・山陽新幹線12・県教1979
	惣利東遺跡	丸山康晴・平田定幸・「春日地区遺跡群II」・市文報14・市教1983
	赤井手遺跡	丸山康晴・市文報6・市教1980
	岡本遺跡	丸山康晴・平田定幸・市文報7・市教1980
行橋市	竹並遺跡	友石孝之他・竹並遺跡調査会1978
筑紫野市	剣塚遺跡	中間研志・九州縦貫XXIV・県教1978
	大島遺跡	浜田信也・中間研志・冷水バイパス・県教1982
	野黒坂遺跡	松岡史他・福岡南バイパス報1・県教1970
	八隈遺跡	松村一良他・九州縦貫VII・県教1976
	山ノ口遺跡	
八女市	野口遺跡	酒井仁夫・関晴彦・九州縦貫XIX・県教1977
	坊野遺跡	同上
	西中ノ沢遺跡	同上
	道添遺跡	同上
筑後市	狐塚遺跡	小田富士雄他・市教1970
甘木市	下原遺跡	佐々木隆彦他・九州横断2・県教1983
	上々浦遺跡	佐々木隆彦他・九州横断I・県教1982
大宰府町	陣ノ尾遺跡	佐々木隆彦・町教1977
粕屋町	古大間池遺跡	佐々木隆彦・町教1977
志摩町	御床松原遺跡	井上裕弘他・町文報3・町教1983
二丈町	石崎曲り田遺跡	橋口達也他・今宿バイパス8・県教1983
前原町	三雲加賀石I遺跡	柳田康雄他・三雲遺跡I・県文報58・県教1980

	三雲番上Ⅱ遺跡	同上
	三雲郡の後遺跡	同上
	三雲八反田Ⅱ遺跡	柳田康雄他・三雲遺跡Ⅱ・県文報60・県文報60・県教1981
	三雲仲田Ⅰ遺跡	柳田康雄・小池史哲他・三雲遺跡Ⅱ・県文報60・県教1981
	三雲サキノ遺跡	同上
	三雲中川屋敷	柳田康雄他・三雲遺跡Ⅳ・県文教65・県教1983
	湯納遺跡	栗原和彦他・今宿バイパス4～5・県教1976-7
	上籬子遺跡	
那珂川町	地余遺跡	田平徳栄他・東急不動産株式会社1980
	今光遺跡	
古賀町	久保長崎遺跡	松岡史・福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告・県教1973
	高木遺跡	池辺元明他・町文報2・町教1983
	浜山遺跡	酒井仁夫・児玉真一・町文報1・町教1982
津屋崎町	今川遺跡	酒井仁夫・伊崎俊秋・町文報4・町教1981
宗像町	東郷遺跡	
	登り立遺跡	
若宮町	柳ヶ谷遺跡	{ 酒井仁夫・池辺元明・九州縦貫Ⅷ・県教19 児玉真一他・若宮宮田工業団地埋文報3・県教1980
	都地原遺跡	
	茶臼山遺跡	松村一良・九州縦貫ⅩⅥ・県教1977
	小原遺跡	酒井仁夫・九州縦貫ⅩⅠ・県教1977
鞍手町	向山遺跡	中間研志・九州縦貫ⅩⅡ・県教1977
穂波町	ウラン山遺跡	浜田信也・八木山バイパス・県教1983
	スタレ遺跡	橋口達也他・町文報1・町教1976
夜須町	金山遺跡	井上裕弘他・町文報4・町教1981
吉井町	塚堂遺	浮羽バイパス埋文報1・町教1983
瀬高町	大道端遺跡	関晴彦・山本信夫他・九州縦貫ⅩⅣ・県教1977
(大分県)		
大分市	守岡遺跡	昭和50・51年発掘調査概報・町教1979
	多武尾遺跡	松田政基他・調査概報・市教1982
	多武尾遺跡	松田政基他・調査概報・市教1982
宇佐市	台ノ原遺跡	真野和夫他・県文報33・県教1975
竹田市	楠野遺跡	王永光洋他・県文報63・県教1983
	ネギノ遺跡	賀川光夫他・県文報35・県教1976
野津町	日当遺跡	牧尾義則他・県文報58・県教1982
大野町	辻中遺跡	
	松木遺跡	後藤宗俊・清水宗昭他・「大野原の遺跡」・町教1980
	二本木遺跡	同上
	夏足原遺跡	
(佐賀県)		
佐賀市	琵琶原遺跡	
中原町	姫方原遺跡	
神崎町	尾崎利田遺跡	
基山町	城ノ上遺跡	
(熊本県)		
西原村	谷頭遺跡	松村道博・谷頭遺跡調査団1978
西合志町	小合志原遺跡	
(宮崎県)		
宮崎市	前原西遺跡	北郷泰道・宮崎学園都市埋蔵文化財発掘概報Ⅱ～Ⅲ・県教1981-2
	前原南遺跡	同上
	熊野原遺跡	同上
	堂地東遺跡	同上
	宮崎学園14遺跡	同上
清武町	大萩遺跡(2)	田中茂他・県教1975
(鹿児島県)		
隼人町	小田遺跡	青崎和憲・日高孝治・鹿児島県住宅供給公社1981
溝辺町	東原遺跡	諏訪昭千代・弥栄久志・九州縦貫Ⅱ・県教1978



表1. 時期別方形平面住居の割合(%)

前 期	後 葉	31.3
	末 葉	56.2
中 期	初 頭	36.6
	前 葉	23.7
	中 葉	62.0
	後 葉	68.9
中 期 末 ~ 後 期 初		81.4
後 期		94.9

表2. 規模別円形平面住居の割合(%)

規模	前~中期	後 期	全 期
10	9.1	0	5.1
	13.0	0	5.7
20	51.9	1.1	20.0
30	87.1	13.6	39.8
40	92.0	15	59.6
50	100	25	88.0
60	100	50	93.8
70	100	100	100
80 m <sup>2</sup>	100	50	75.0

表3 弥生時代前中期主柱規模棟数表

( ) は円形平面の棟数

主 体 本 数	単 位 面 積 別 棟 数														(合計)	m <sup>2</sup> 平均面積	主 柱 負荷面積		
	10	20	30	40	50	60	70	80 m											
0	29	(2)	48	(3)	14	(3)	2		1	(1)							103	14.5	m <sup>2</sup>
1	4		4														8	11.2	11.2
2	7		39	(1)	15	(1)	4	(1)	1	(1)							70	18.7	9.3
4	1	(1)	6	(5)	5	(10)		(3)									32	21.6	5.
5				(2)				(1)	(1)	(1)							4	29.9	6.0
6				(2)	(12)	1	(11)		(4)								35	34.6	5.8
7					(1)		(6)	(3)	(3)	(2)							12	40.6	5.8
8					(1)		(8)	(7)	(1)	(1)							23	44.4	5.5
9					(1)		(1)	(2)	(5)	(2)							9	50.9	5.6
10								(2)	(3)	(1)	(1)						6	54.9	5.5
11								(1)	(2)		(2)						8	56.2	5.1
12								(1)	(6)	(1)							5	64.7	5.4
13								(1)	(1)	(1)	(1)	(1)					2	58.7	4.5
14								(1)		(1)							3	65.3	4.7
15										(1)			(1)				1	69.5	4.6
16								(1)		(1)							2	63.4	4.0
17										(1)	(1)						1	69.5	4.1
(合計)	41	(3)	97	(13)	34	(29)	7	(31)	2	(26)	(22)	(12)	(5)	(2)			324		

表4. 弥生時代後期主柱、規模、棟数表

( ) 円形平面棟数

主柱 本数	単 位 面 積 別 棟 数										棟 数	平 均 面 積	主柱負荷 面 積
	10	20	30	40	50	60	70	80					
0	12	43	20	7 (1)	(1) (2)						86	18.9 <sup>m<sup>2</sup></sup>	m <sup>2</sup>
1	2	6	1	(1)							10	16.9	16.9
2	4	55	43	15	4						121	21.5	10.7
4	1	16	29 (1)	19 (3)	4	1 (1)	1 (1)				77	28.1	7.2
4 + 1			1	1	2						4	38.6	7.7
4 + 2			3	1	1	1					6	35.1	5.8
4 + 3			2	3		1					6	35.5	5.1
4 + 4				2							2	35.4	4.4
4 + 5					2						2	44.2	4.9
5				(1)	(1)					1	3	57.8	11.5
6				(2)							2	32.9	5.5
7				(1)							1	34.2	4.9
8					1						1	49.0	6.1
9													
10										(1)	1	80.0	8.0
12									(1)		1	78.7	6.6
合 計	19	120	99 (1)	48 (9)	15 (3)	3 (1)	1 (1)		(1)	1 (1)	303		

表5. 竪穴住居内施設保有率

時 期	周 溝	炉	中央ピット	貯蔵穴	ベッド	
前 期	後 葉	0	37.5	43.7	12.5	—
	末 葉	12.5	25.0	37.5	6.2	—
中 期	初 頭	12.0	47.6	38.1	28.6	—
	前 葉	60.0	25.0	78.3	15.0	—
	中 葉	26.0	16.0	30.0	34.0	—
	後 葉	21.3	34.4	23.0	41.0	1.6
	末 葉	11.8	64.7	5.9	70.6	17.6
中 期 末 ~ 後 期 初	24.5	5.7	26.4	56.6	41.5	
	前 葉	7.7	46.1	—	30.8	7.7
	中 葉	33.3	57.4	7.4	75.9	55.5
	後 葉	22.8	68.5	5.4	46.7	21.7
	末 葉	22.6	46.5	4.3	47.2	25.2
平 均 保 有 率	25.0	41.0	21.9	41.9		

付表1. 弥生時代堅穴住居分析表 -九州地方-

		前期		中期				中末 後・初	後期				
		後葉	末葉	初頭	前葉	中葉	後葉		末葉	前葉	中葉	後葉	末葉
面積 別棟 数	1010	2	6	5(1)	3(1)	8(1)	3	3	10	2	2	8	(4)
	2020	2(1)	9(4)	9(4)	7(2)	16	27(1)	10	17(1)	7	17	37	56
	30	1(3)	1(3)	1(7)	4(10)	6(3)	9(2)	4	9(3)	2	20	28	43(1)
	40	(2)	1(2)	(6)	(13)	1	2(4)		4(4)	2	12	14(1)	23(7)
	50	(3)	1(3)	(6)	(4)	(5)	1(2)		(2)		3	3	11(3)
	60		(2)	(1)	(6)	(6)	(3)		(3)			1	2(1)
	70	(2)			(9)	(2)	(1)						1(1)
	80 m <sup>2</sup>			(1)		(2)	(4)						1(1)
遺跡数	5	7	18	17	13	21	4	4	9	15	21	34	
住居数	16	32	41	59	50	61	17	53	13	54	92	156	
面積 m <sup>2</sup>	最大	63.3	53.5	55.4	69.5	74.2	89.9	28.6	59.3	39.0	40.8	51.8	86.0
	最小	7.3	4.9	7.5	5.1	12.3	7.0	5.2	4.0	6.6	9.0	5.7	5.9
	平均	30.1	22.8	21.6	35.2	26.6	28.2	16.5	22.1	19.7	23.7	21.9	27.6
最大径 m	長径	9.6	9.2	10.3	9.9	10.5	10.9	6.2	9.0	6.6	7.5	7.4	10.0
	短径	8.5	7.6	9.6	9.0	9.0	10.1	4.7	8.5	6.1	6.0	7.0	9.7
主 柱 本 数 別 棟 数	1	5	16	11	13	20	15	6	10	4	10	19	52
	2	1		3	2	1	1		1			4	4
	3		3	1	1	7	20	10	27	6	42	29	36
	4	3	3	7	6	1	6	1	8	3	2	35	55
	5			2	1				1				3
	6	2	3	4	15	6	5		2			1	1
	7	1	1	2	3	2	1		1				1
	8	3		4	11	4	2		2				1
	9		1	2	3	1	5						
	10					3			1				1
	11		3		3	1							
	12				2		3						1
	13		1		1								
	14			1	2		1						
	15				1								
	16		1	1									
	17				1								
周溝	—	4	5	36	13	13	2	13	1	18	21	36	
炉	6	8	20	15	8	21	11	3	6	31	63	74	
中央ピット	7	12	16	47	15	14	1	14		4	5	7	
貯蔵穴	2	2	12	9	17	25	12	30	4	41	43	75	
建替	1	3	2	14	3	3		4			3		
床溝				4	4	3		3		3	2	6	
ベッド						1	3	22	1	30	20	40	





王子遺跡の液体シンチレーション  
C<sup>14</sup>年代測定

京都産業大学

山田 治  
小橋川 明

## 1. はじめに

放射性炭素 $^{14}\text{C}$ は、絶えず宇宙線によって作られており、炭酸ガスという形でふつうの放射能をもたない炭酸ガスに混じって空気中にあまねく存在しています。また $^{14}\text{C}$ は、半減期5568年で崩壊を続けていますので、空気中での $^{14}\text{C}$ 濃度は何万年もの間ほぼ一定の割合に保たれています。植物は、この炭酸ガスを取り入れて生長しますので、植物内における $^{14}\text{C}$ 濃度は、大気中の濃度とほぼ等しくなります。動物も植物を食べて生きているので、植物と同様です。生物が古死すると、大気中からの炭酸ガスの供給が断たれ、その生物内の $^{14}\text{C}$ は、時間とともに減少する一方となります。これを利用して過去の動植物遺体中の $^{14}\text{C}$ 濃度を調べれば、枯死してから現在までの経過時間が得られます。こうして得られた $^{14}\text{C}$ 年代は、ほぼ絶対年代に近いものですが、更に近年の研究で、年輪年代（即ち絶対年代）と $^{14}\text{C}$ 年代との比較対照によって、 $^{14}\text{C}$ 年代を絶対年代へ変換することができるようになりました。 $^{14}\text{C}$ 年代と絶対年代とのずれは、近世において最大200年位、縄文時代では最大700年位です。E.K.Ralphらによると、現代から7000年前までの範囲において、 $^{14}\text{C}$ 年代から絶対年代を知ることができます。

### 炭素年代測定法の公式

炭素年代測定によれば、生物遺体中に存在する放射性炭素 $^{14}\text{C}$ 量の計測から経過年数 $t$ は次式のように表わすことができます。

$$t = 8033 \times \log_e \left( \frac{N_0}{N} \right) \dots \dots \dots (1)$$

ここでは $N_0$ は、生物が昔生存していた時の炭素の単位質量、例えば1gに存在する $^{14}\text{C}$ 原子の数であり、同じく $N$ は生物遺体中に現在残存している炭素1g当りの $^{14}\text{C}$ 原子の数です。

$N_0$ は、現代の植物中の炭素1g当りに存在している $^{14}\text{C}$ 原子の数に等しいと考えられます。ただし核実験や石油・石炭の影響を除去した値を用いるために国際的標準が決められています。従って年代を決定するために知るべきものは、 $N$ だけということになります。或は $N_0/N$ の比が求められれば、それでも同じ意味になります。

例えば、 $N$ が生存していた時の半分、即ち $\frac{1}{2} N_0$ のときは、(1)式により5568年前に生存していたと計算され、同様にそのまた半分の $\frac{1}{4} N_0$ のときは、11136年前に生存していたと計算されます。

$^{14}\text{C}$ 原子の数は、炭素全体の1兆分の1しか存在しないため直接原子の数を数えるのは非常に困難です。しかし、都合のいいことに $^{14}\text{C}$ 原子は放射性原子であるため、一個崩壊する度に必ず1個のベータ線（電子）を出します。これを全て計測することによって $^{14}\text{C}$ 原子の数を知ることができます。

実際には、試料から出るベータ線を完全に計測装置が数えるとは限りません。例えば、試料から毎分100個のベータ線が出ているときに、装置は、70個とか80個とかを数えます。この数える割合（この場合70%、80%）を計数効率といいます。計数効率が一定ならば、標準試料の計数値と未知試料の計数値の比を知ることによって(1)式から確実な経過年数を求めることができます。この方法で年代測定をしているのが気体計数管法です。しかし、この方法では計数効率を測定できないため、標準試料と未知試料を測る時の諸条件を常に同一にしなければなりま

せん。同一測定条件が得られないときには結果も正確を期待できません。測定結果を支配する条件には、電圧とか試料の状態とか様々のものがありますが最も大きな影響は試料ガスの純度から与えられるように見えます。

### 3. 液体シンチレーション<sup>14</sup>C年代測定法

シンチレーションとは、帯電粒子による一種の発光現象です。液体シンチレーション<sup>14</sup>C年代測定法では、帯電粒子を計数すると同時に計数効率をも測定できます。計数値と計数効率がわかればベータ線はいつでも完全に捕捉されます。

この方法では、古代遺跡から出土した木材・炭、貝、PEATあるいは土壌などを必要に応じて適当な前処理を行なったのち試料炭素を炭酸ガスにし、更に有機液体のメタノールに合成します。このメタノールと液体シンチレーターとを一定の割合で混合し、ベータ線によるシンチレーション発光を光電子増倍管で長時間数えます。また計数効率も繰り返し何回か測定します。この両方の測定から得られた結果を平均して最終的に年代の平均値を出します。1回1回の測定値は統計的なバラツキを生じますが、回数を繰り返すほど真の値に近づいて行き、それと共に誤差も少さくなります。液体シンチレーション法では、最大15gから最小0.2gまでの炭素を測ることが可能です。15gの炭素を用いれば古いものでは、最高7万年前まで測ることができ、近世の試料では1日測ると誤差30年、2日で20年、1週間測ると誤差10年まで求めることができます。炭素量が少ないと誤差は大きくなり、かつ多大の時間が必要となります。

### 4. 王子遺跡の測定結果

試料      王子遺跡      住居跡      木炭

KSU-595	No.1 (20号住)	2130 ± 30 B.P.	KSU-596	No.2 (16号住)	2180 ± 40 B.P.
炭素5.54 g, 測定時間3000分			炭素4.38 g, 測定時間2000分		
年輪年代		170 BC ~ 380 BC	年輪年代		210 BC ~ 400 BC

KSU-597	No.3 (12号住)	2410 ± 60 B.P.	KSU-598	No.4 (12号住・土城)	2120 ± 30 B.P.
炭素2.00 g, 測定時間3000分			炭素4.12 g, 測定時間3500分		
年輪年代		440 BC ~ 730 BC	年輪年代		140 BC ~ 380 BC

KSU-599	No.5 (15号住)	2000 ± 20 B.P.	KSU-600	No.6 (14号掘・土城)	2150 ± 25 B.P.
炭素10.91 g, 測定時間3000分			炭素6.21 g, 測定時間3250分		
年輪年代		AD 20 ~ 100 BC	年輪年代		210 BC ~ 390 BC

KSU-601	No.7 (10号住)	2000 ± 50 B.P.
炭素3.45 g, 測定時間2000分		
年輪年代		AD 50 ~ 120 BC



註1. KSU 番号は京都産業大学における測定試料番号です。

註2. B.P. は Before Present の意味で国際的約束により AD 1950を0として、それ以前の年数を示しています。

註3.  $^{14}\text{C}$  の半減期は国際的約束に基づき5568年を用いています。公式記録ではこの値が採用されます。

註4. 測定誤差は国際的約束により1標準偏差(1シグマ)で表わすことになっています。この範囲に真の値が含まれる確率は、実験的諸誤差が無視できるとき68%です。2シグマを取ると95%、3シグマを取ると99.7%の信頼度です。

註5. 現在では、E.K.Ralph et al. によって与えられた年輪年代 (dendrodate) が最も真の年代(絶対年代)に近いと考えられますので参考として付記してあります。

#### 5. 結果の考察

測定試料No.1~No.7は、いずれも山ノ口式土器が伴出しているとのことです。測定結果からNo.3の住居跡がやや古く440 BC以前、No.1, No.2, No.4, No.6がそれに次いで400 BC~140 BC, No.5, No.7は120 BC~AD 50程度の年代になります。

この結果から見て自然科学者側からは二つの問題点が浮かんできます。一つは山ノ口式土器は果して弥生中期なのか、前期と考えた方がよいのではないかということ、もう一つは弥生時代というところは(特に九州においては)従来の常識よりもっと古くから始まっているのではないかということです。

#### [参考文献]

- 1) E.K.Ralph, et al., MASCA Newsletter(1973)
- 2) H.N.Michael, et al., Radiocarbon (1974)
- 3) 東村武信 考古学と物理化学(学生社)

王子遺跡および西祓川遺跡における  
プラントオパール分析

宮 崎 大 学  
藤 原 宏 志

昭和53年以降、群馬、日高遺跡、岡山、百聞川遺跡、福岡、板付（G7a）遺跡などで、古代水田址が検出され、その後各地で発掘された検出例を含めるとその数は20例に達しようとしている。これらの発掘調査をとうして、古代水田稲作の実態が明らかになりつつある。

古代水田に関する体来の知見は昭和20年代に発掘された静岡、登呂遺跡ほか数例によるものに限られ、その内容も最近得られている知見に齟齬するところが多い。

わが国における古代水田稲作に関する最近の知見を要約すると次のようになる。すなわち、その開始期は少なくとも縄文時代末期（夜白期）までは遡り、弥生時代中期には津軽平野にまで伝播している。また、古代水田の様式は自然地形などに対応した多様性を示すが、概して小型（一区画平均約30㎡）、不定型であり、登呂遺跡にみられるような大型（一区画1000～2000㎡）で方形に整備されたものは今のところ皆無である。こうした最近の発掘成果でみるかぎり、登呂水田で培われてきた古代水田のイメージは大巾に修正される必要があると思われる。

一方、古代畑作に関する知見はその性格上水田作ほど明らかにされていないが、大分・小園遺跡、熊本・谷頭遺跡における考古遺物・植物遺物の検出結果あるいは群馬・有馬遺跡、同・鳥羽遺跡などにおける畦状遺構の検出結果などから、大規模な台地性古代集落では何らの形で畑作が行なわれていたものと推定される。

南九州では、まだ水田・畑などの古代農耕遺構が検出された例はない。この報告で扱う二遺跡のうち、王子遺跡では畑作の可能性を、また西祇川遺跡では水田作の可能性をそれぞれの立地条件から想定することができる。

本報告ではプラント・オパール分析により、両遺跡土壌を分析し、古代農耕存在の可否を検討した結果について述べる。

### 1. 分析試料および分析法

#### ○分析試料

図1および図2に両遺跡における土壌試料採取地点柱状図を示した。試料は100cc採土管で採取した。

#### ○分析法

プラント・オパール分析は宮崎大学農学部農作業管理学研究室でガラス・ビーズ定量分析法により行なわれた。同定量分析法フローを図3に示した。

### 2. 分析結果

両遺跡におけるプラント・オパール分析の結果は図4および図5に示した。

### 3. 考察および結論

① 王子遺跡は笠ノ原台地の縁辺部に位置し、南九州特有の典型的な火山灰台地上の遺跡である。周辺一帯は畑作地帯であり、近年大規模灌漑施設が敷設され一部に水田が開かれている。したがって、少なくとも近世以前に水田が営なまれた可能性は考えられない。

分析結果をみると、Ⅰ層およびⅡa層からイネ機動細胞プラント・オパールが検出されている。両層とも検出量は多くないが、Ⅱa層の方がやや大きな値を示している。これはⅡa層のプラント・オパールがⅠ層からの流下によるものだけでなくⅡa層自体に含まれていることを

示すものである。イネ機動細胞プラント・オパールはイネ (*Oryza sativa*) の葉身に由来するものである。したがって、その地でイネが栽培されていた場合は当然葉身が残るので、とくに穂刈りの場合はそのプラント・オパール密度から籾生産量を推算することができる。しかし、例えば、推きゅう肥のような形で、イナクラだけが施用された場合はイネを栽培していなくてもイネを栽培していなくてもイネ機動細胞プラント・オパールが検出されることがある。Ⅱ a 層は弥生時代の遺物包含層であり、同時代以前に推積したものと考えられている。弥生時代におけるイネの収穫法は穂刈りであったと推定されており、かりに、この時期、推きゅう肥の施用技術があったとしても、その中にイナワラが含まれる可能性は考えにくい。したがって、Ⅱ a 層で認められたイネのピーク (図4) は弥生時代にこの地で畑稲作が行われていたことを示すものと考えられる。

② 西祓川遺跡は河岸段丘上に位置し、試料採取地点の現況は水田である。1層から7層まではイネ機動細胞プラント・オパールが大量に検出され、継続的に稲作が行なわれたことを示している。8層のプラント・オパールは7層からの落い込みであろう。7層には土師器が包含されているが堆積時代は不詳である。

③ タケ亜科 (主としてササ) は比較的乾燥した条件下に生育し、ヨシは温潤な条件下に繁殖する。二遺跡における両植物の生産量をプラント・オパール密度から求めた結果を図に示した。王子遺跡ではヨシが検出されず、Ⅱ a 層以上では多量のタケが検出された。Ⅴ a Ⅴ b 層はアカホヤ層であり、少量のタケが検出されているが、これはⅣ層からの落い込みであろう。Ⅵ層より下層ではタケ亜科も少なくなっている。おそらく照葉樹林が形成され、その下草としてササ類が生育していたものと思われる。西祓川遺跡は5層より上層と14層にヨシが認められるが、タケ亜科は全層から検出され、河岸段丘で一般的に認められる植生状況だったことを示している。

④ 王子遺跡は台地上にあり、遺跡周辺で古代に水田が営まれた可能性は極めて少ない。これに対して、西祓川周辺はその立地上、古代に水田が開かれた可能性を残している。今回の調査は発掘面積も小さく水田址の存在を認めるに至らなかったが、今後メッシュ法によるボーリング調査を行ない水田址とその分布域を分析的に深査すれば水田遺構を検出することも期待できるであろう。

⑤ 本報で示したイネ科植物生産量は前述のとおり、土壌中に含まれるプラント・オパール密度から推算したものであり、その計算法などの詳細は拙報を参照されたい。なお、イネの生産量はすべて穂刈りで収穫され、推きゅう肥などの形でイナクラが圃場に還元されることはなかったものと仮定して計算した結果である。

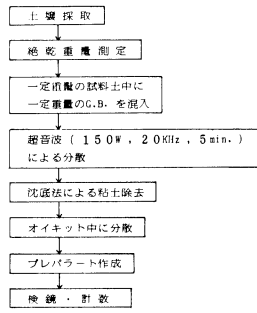


図1. ガラスビーズ法による  
プラント・オパール定量分析ダイアグラム

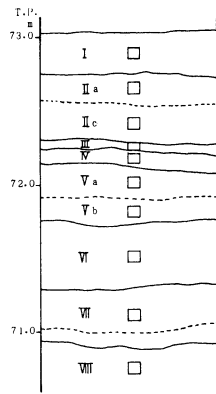


図2. 鹿兒島：王子瀬跡における  
プラント・オパール分析試料採取柱状図

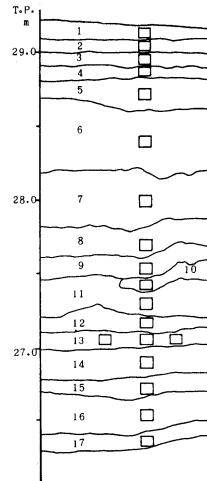


図3. 鹿兒島：西坂川瀬跡における  
プラント・オパール分析試料採取柱状図

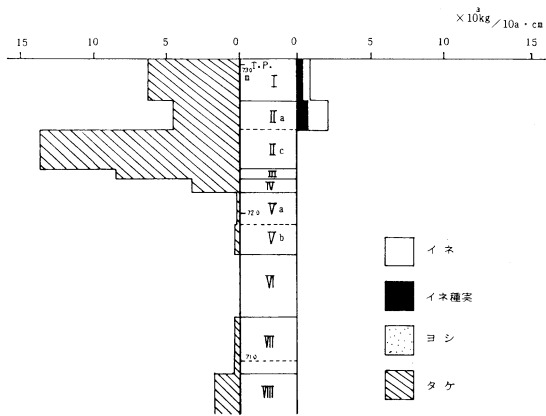


図4. 鹿兒島：王子瀬跡におけるイネ科植物生産量の推定

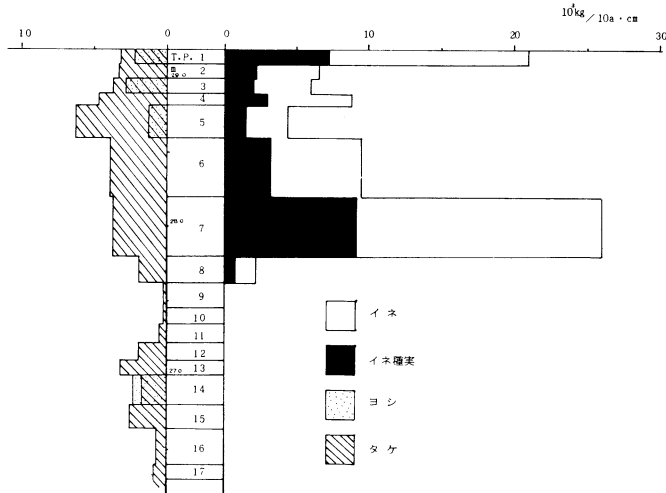


図5. 鹿兒島：西坂川瀬跡におけるイネ科植物生産量の推定

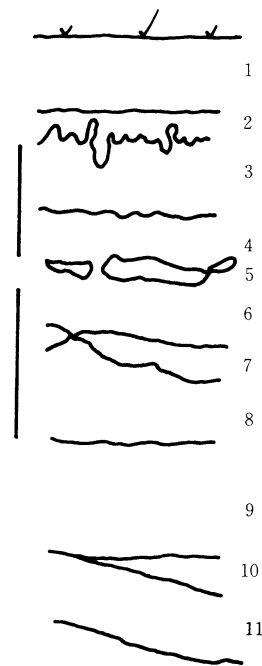
## 西祓川遺跡の調査概要

所在地 鹿児島県鹿屋市西祓川町中原  
調査目的 国道20号鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財確認  
調査期間 第1次確認調査 昭和57年8月4日～同年9月2日  
第2次確認調査 昭和58年8月29日～同年9月22日

第1次の確認調査は、A地点（橋脚9号・4×6m）・B地点（橋脚8号・10×10m）・C地点（橋脚10号・2×2×2mの三角形・2×4m）を実施している。主に遺物の出土したのはB地点で、他の地点では文化層は確認できなかった。

本遺跡は、肝付川によって形成された狭隘な水田地帯に所在し、水田の中につき出した段丘の中央部から先端部にかけて営まれている。この丘陵の裾部では、“地下式横穴（墓）”が昭和25年の道路改修工事で発見され、鉄製の短甲と冑が出土し、これらは、本県の文化財に指定され保護されている。

右図は、B地点の土層図で、第2層がマンガン分を多量に含んだ現水田の床土である。遺物は、3層と4層が鎌倉時代に相当し、糸切底の土師器（主に杯）を中心に、青磁・白磁の破片、滑石製加工品等が多数出土している。なかでも、特異な例として白磁の碗が3点完形品のまま重ねられた状態で出土している。調査の結果、これらは意図的に置かれたと思われる。碗は、1点が器高の低い端反り口縁の碗で、残りの2点は玉縁口縁のやや大形の碗である。遺構は26個のpit群と二か所の掘り込みが確認されている。遺構は第5層の砂層に掘り込まれ、床は平坦で、埋土は多量の炭化物と灰を多く含む床面近くには棒状の炭化物（直径5cmで長さ30cm程）が数本出土している。本遺構は、壁面に5個の柱穴があることより建物遺構であったと思われるが詳細は不明である。

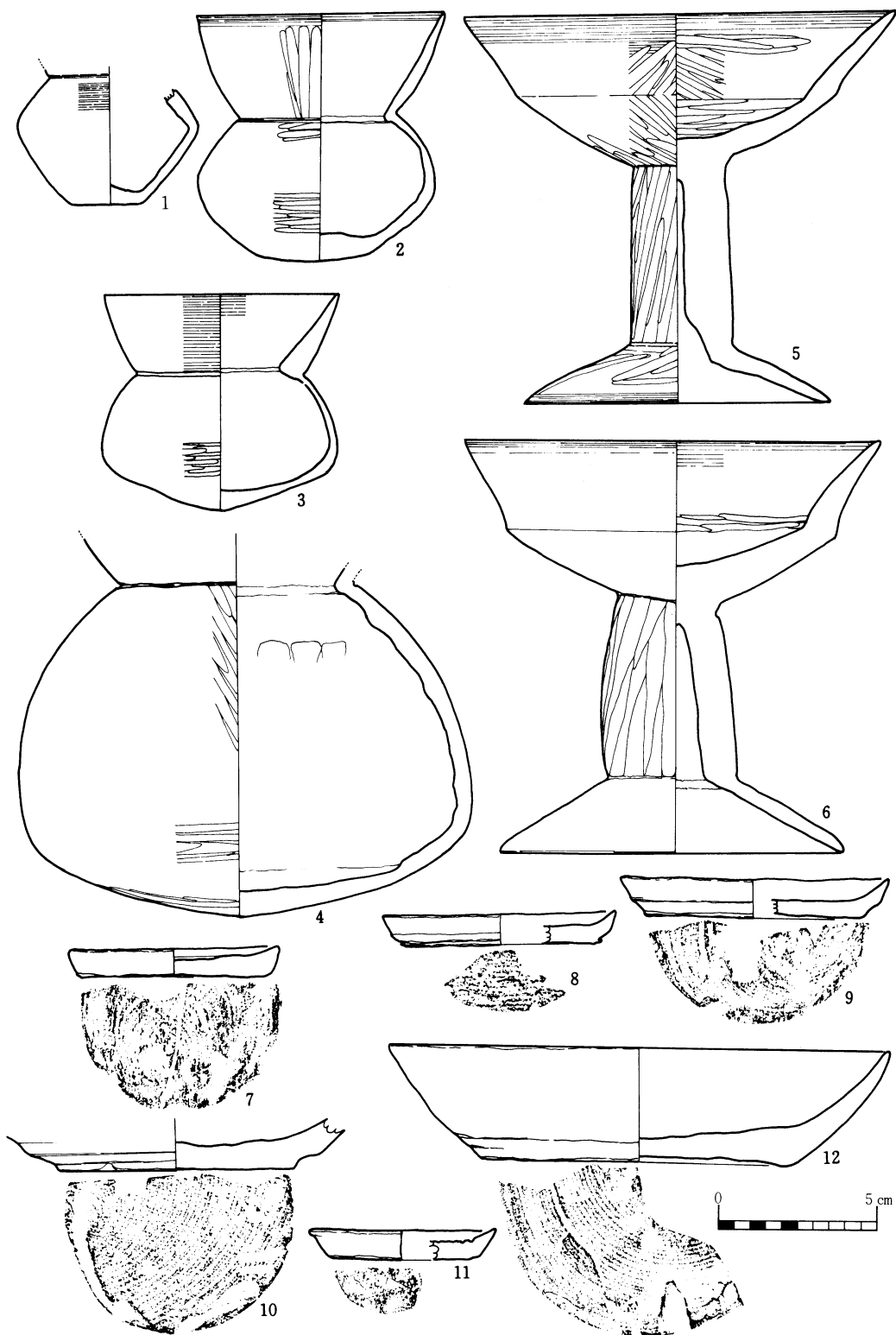


第1図 B地点土層図

第6層と8層の両層に古墳時代の遺物を検出している。第7層は、流水作用により運ばれた砂層でレンズ状に堆積し短期間に形成されたと判断できる。8層の下部では、約1m四方の範囲にはほぼ完形品の状態で置かれていた。遺物は埴6点、高坏6点であり、その他の遺物は含まれていない。したがって、この出土状態も特異なものと言える。完形品のほとんどがヘラによるナデ調整が施され、また、化粧土を用いたと思われる光沢のある赤褐色の良質な土器である。

第2次の確認調査は、D地点（橋脚12号、4×6m）やC地点とA地点とを結ぶ工事用道路の建設に伴って実施したもので、B地点より約2m程比高した標高約33mの台地の先端部に立地している。

本遺跡の立地する台地縁辺部は、市道開設に伴いオープンカットされ、旧地形がわずかに残存した雑木林である。

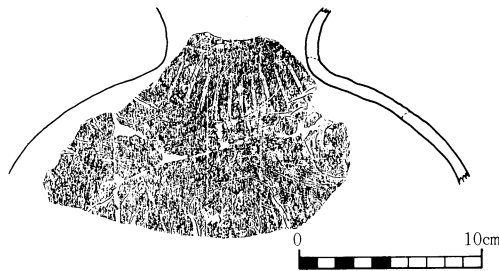


第2図古墳時代奈良時代の遺物

今回の調査のうち、D地点は、B地点より東側へ約115mの所に位置し、4×6mのトレンチによる確認調査の結果、民家の跡地のためか大幅な削平が認められ、表土層の攪乱層より土器小破片が認められたものの、下位よりは遺構・遺物ともに検出されなかった。周辺部には、奈良時代から古墳時代、縄文時代早期の文化層の存在が類堆できる環境にあるといえよう。

D地点とA地点との間で、西祇川公民館に隣接する台地縁辺部にあたり、確認調査の結果、溝状遺構が3条、土壇状の掘込が4か所に遺構を検出し、遺物も鎌倉時代から縄文時代早期相当の土器破片が出土した。

その概略についてみれば、土層は12層を数え、2層黒色土層より鎌倉時代から弥生時代の遺物を認めるが、攪乱部分も多く認めた。溝(I)は、用水路の掘込の残存部である。溝(II)は、C-1~3区より検出し、略南北方向に走り、現存で全長10.5m、幅

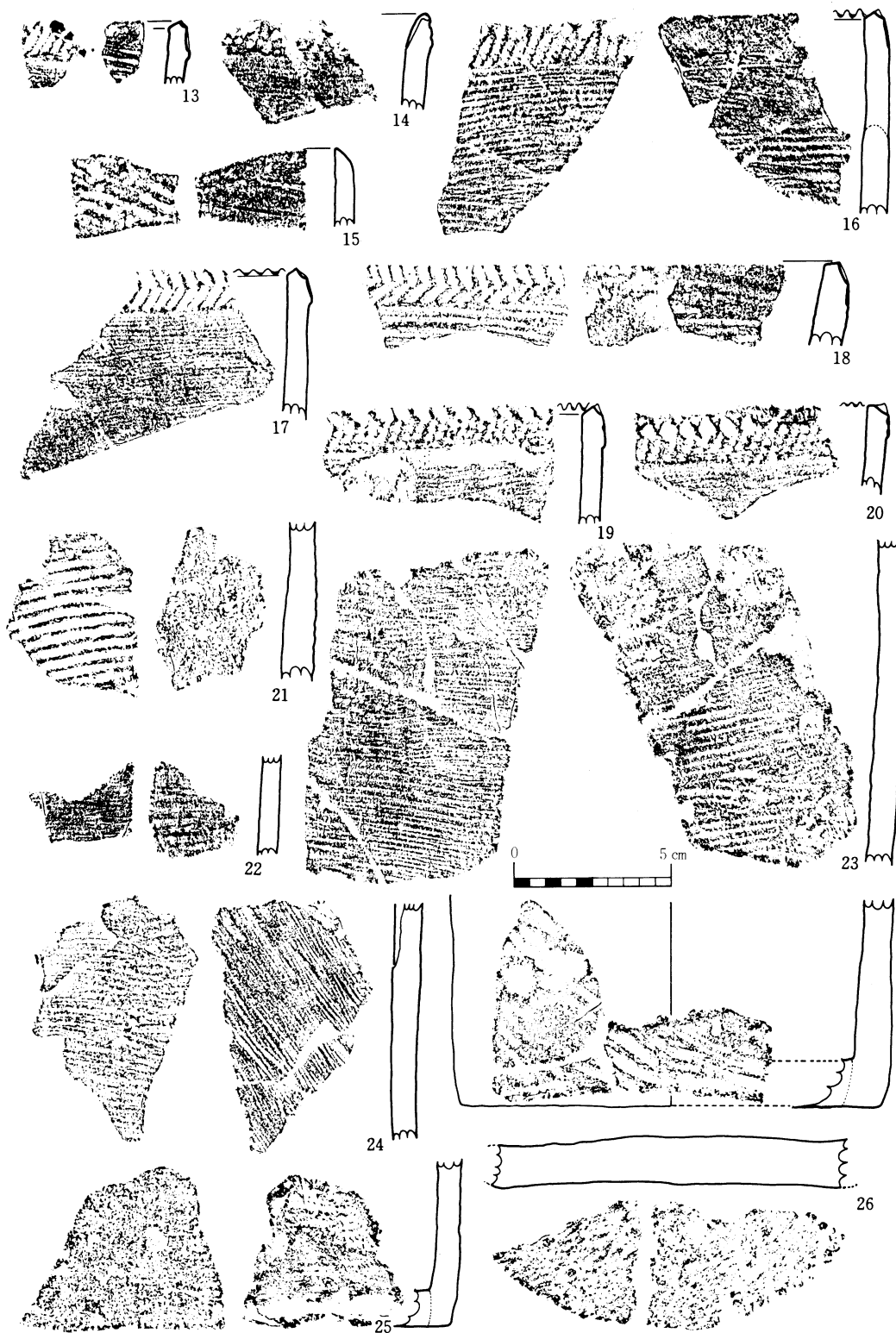


第3図 栞描文文土器（壺形土器）実測図

0.9~1.6m、深さ0.2~0.6mを測り、8層に底面があたる。C-3区で溝は終り、溝内には集石を認める。その規模は1.9×1.6mで、ほぼ円形状で、礫の大きさは約20~25cm大の礫を積み、棒状炭化物を多く認め、他に遺物を認めず、時期及び性格については不明である。溝(III)は、D-3・4区で検出し、現存全長7.6m、幅1.4~1.6m、深さ0.2~0.3mを測り、公民館敷地へのびるが、削平を受けている。掘込は表層からで、埋土中の上・下に硬く踏みしめられた痕跡を認め、下部は溝の底で、3層上部（アカホヤ火山灰）まで掘り込まれている。出土遺物は、成川式土器、現代陶器、青磁、須恵器などの小破片が出土した。土壇(I)は、C・D-3区で検出し、遺存度が悪く、表層よりの掘方で、約1.8×1.35mの楕円状の掘込である。遺物の出土は認めなかった。土壇(II)は、D-3・4区で検出し、不定形の掘込で、大半が戦後の開墾により削平を受けている。出土遺物は少量で、溝IIIと同様である。溝(III)は、B-2区で検出し、遺存度が悪く掘込は不明で、底面は7・8層であり、遺存の規模は、1.5×1.8m、深さ0.3~0.4を測り、隣接して柱穴状の掘込も認める。土壇(IV)は、C-1区で検出し、その規模は、約2.2×1.8m、深さ0.5mを測り、不整形の土壇で、表層よりの掘込で、北側は攪乱を受けている。出土遺物は、現代陶器、成川式土器破片、青磁の破片などである。これらの遺物は、12~13Cにかけての竜泉系の鍋連弁の小碗や竜泉系のくしがき文皿で12Cに比定されるもの、ロハゲの白磁碗の底部は12C~13Cに比定されるもの、魚住焼と思われるこね鉢で13Cに比定されるものなどのほか、成川式土器、栞描文をもつ壺形土器などが出土した。

本遺跡は、アカホヤ灰層の下位の文化層（4層）で、黒褐色粘質土層より、縄文時代早期土器や集石遺構を検出した。遺物は、円筒形の深鉢形土器で、貝殻条痕文を基調とする前平式土器である。





第4図 縄文時代の遺物 実測図

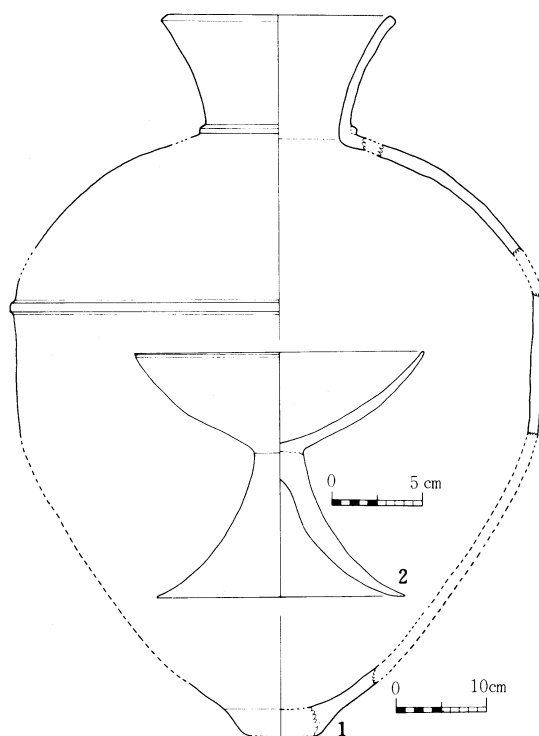
## 薬師堂遺跡の調査概要

所在地 鹿児島県鹿屋市西祓川町薬師堂  
調査目的 国道220号線鹿屋バイパス建設に伴う埋蔵文化財確認  
調査期間 昭和58年8月9日～同年8月26日

本遺跡は、鹿屋市街地より北側へ約1.6mの西原台地東端部で、標高約55mの台地縁辺部に位置し、東側眼下に西祓川遺跡があり、その比高差は約21mである。台地内には、大隅半島によくみられる土盛の塚3基を確認し、1号から3号と呼称した。その規模は、1号：4.×4.6m、高さ1.0m、2号：6.0×6.7m、高さ1.5m、3号：5.8×4.2m、高さ1.5mを測り、それぞれの塚間は、9.2～10.0mを数える。

確認調査は、3つの塚のうち、1号及び2号が道路建設により消失するため実施した。塚のほか遺物包含層が類堆されるため、2つの塚を中心に、10×10mのグリッドを設定し、1m幅のトレンチによる調査を実施した結果、2号塚の履土最上部より壺形土器、1号塚付近で、黒色と黄褐色土との接点部分より高環形土器を検出した。この二つの塚は、主体部は認められず、その性格は不明である。また、塚の履土は、黒色土系で堅さや含水率などにより3分層し、古木や杉の樹根を多く認める。履土中からは、土器小破片や小礫を検出したが、土盛りの塚造営時のものと考えられる。1号には塚の履土に1個の大きい自然礫が露呈し、また、路線外の3号にも自然礫を確認した。さらに、周濠の有無や下層文化層をトレンチにより確認した結果、Ⅱ層に成川式土器の遺物包含層を検出した。Ⅱ層は黒色火山灰土で、黄白色軽石を下部に含み、上部が遺物包含層である。拡張し掘り下げた結果、遺物は小破片が散在的で、主体部は認めず、路線外への類堆が考えられる。

本遺跡出土遺物のうち、遺物包含層からのものは、甕の口縁部で頸部に突帯に刻目をもつものや中空の底部破片で、1は、大型の壺で、頸部に三角突帯、胴部上位には台形状の突帯をそれぞれ1条もち、底部は端部に丸味をもつ平底である。2は、高環で、口縁部外側に沈線を1条もつ。1、2とも5C前半に比定されよう。



第1図 薬師堂遺跡出土遺物 実測図



西葭川遺跡遺物出土状態及び出土遺物



高坏



東側より



1号・2号覆土状態

薬師堂遺跡遠景及び近景

## あ と が き

王子遺跡の発掘調査報告書もようやく稿了にこぎつけた。遺跡発見以来、5年数ヶ月の歳月が流れ、予想もしなかった大集落の発掘調査は、地元の人々のあたたかい励ましと御協力により終了した。本遺跡は、連日が黒色火山灰との戦いであり、遺構検出にあたっては、“闇夜の鳥”の異名まで頂き、ベッド状張り出しをもつ住居跡、掘立柱建物、(棟持柱をもつものや土壇をもつもの)、移入土器、樹皮布叩石、鉋・鉄滓など数多くの知見があった。また、住居跡などの遺構の移設、保存問題などを含め、学術の見地からも古代の南九州における集落構造を知る手がかりを与えた。今回の発掘調査や整理作業において、提起された学術上の問題は上積し、解決の糸口さえも見いだしえなかった。報告書刊行後の学術的研究されることを切望するものである。

最後に、発掘調査や整理作業において、さまざまな便宜をはかり協力をいただいた鹿屋市長さんをはじめとする鹿屋市当局・同市教育委員会、肝属教育事務所、大隅工事事務所そして、作業員として働いてくださった地元の方々、整理作業を担当していただいた収蔵庫の方々、報告書作成にあたり御協力下さいました岡山県文化課正岡睦夫氏、徳之島高等学校成尾英仁氏、松山県および市教育委員会の方々に心から感謝の意を表わし、むすびとしたい。

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(34)

— 国道220号線鹿屋バイパス建設に伴う発掘報告書(1) —

# 王子遺跡

(付) 西祓川遺跡・薬師堂遺跡

発行日 昭和60年3月30日

発行 鹿児島県教育委員会 〒892 鹿児島市山下町14番50号

印刷 文進社印刷株式会社 〒890 鹿児島市南栄町3-1

正誤表

王子遺跡

頁	行	誤	正
1	4	大隅半島	大隅半島
13	2 2	鹿兒島知事	鹿兒島知事
	3 1	掘立住建物跡	掘立住建物跡
15	7	昭和56年12月12日より	昭和56年10月12日より
22	2 2	発掘調査	発掘調査
30		b黄褐色土 (パシス)	b黄褐色土 (パミス)
31	5	Fig 4, - (3)	Fig 4, - ③
	6	尾下スユリア	尾下スユリア
33		(スケール表示)	20cm
34	1	弥生時代の遺跡	弥生時代の遺構
	3	棟持住付	棟持住付
		伴うもの2棟}	伴うもの2棟
35	2 5	短軸258mで	短軸258cmで
36		③・パシス	③・パミス
		③朋部最大径	③朋部最大径
37		⑦(7.2)	⑦(7.2)
47	3	確認距離調査時	確認調査時
54	5	19~19cm	19×19cm
		16~16cm	16×16cm
59	2	ウォンフェルス	ホ・ルンフェルス
66	3	ウォンフェルス	ホ・ルンフェルス
78	表201	直行気味	直口気味
80	2 2	短軸718m	短軸718cm
85	2	ウォンフェルス	ホ・ルンフェルス
	3	ウォンフェルス	ホ・ルンフェルス
92	1	二文状口縁	二文状口縁
105	表320	水面は	外面は
130	7	掘立住建物跡	掘立住建物跡
145	3	掘立構建物跡	掘立住建物跡
153		549	522
213	1	乏縁部	口縁部
224	Tab 46	垂水下り	垂れ下り
231	2	内径	内傾
232	Tab 47	気口気味	直口気味
237	4	脈台である。	脚台である。
243	2~3	聞きながら	聞きながら
249	6	再掲載しま。	再掲載した。
252	3	黄褐色土	黄褐色土
258	Fig 159	石器実測図	石器実測図
264	9	あたり	あまり
	16	中茎	茎
265	4	細石器文化層	細石器該当層
266	8	堅穴住居跡	堅穴住居跡
269	16	分後	今後
273	9	26基のうち	26基のうち
274	6~7	ものや	ものの
	11	傾きに等	傾き等
	3 2	桑の実の	桑科の
277	7	貞申意見の	貞申意見の
		腐食布	木織布
		補護	保護
278		堆進用	推進用
280		寒冷抄	寒冷抄
330	Fig 1	中国封建社会	中国封建社会
	注 ④	茶畑	菜畑